

---

# マーシナリー・カプリッチオ ~第一部~

本倉 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マーシナリー・カプリッチオ 〈第一部〉

### 【Nコード】

N27550

### 【作者名】

本倉 悠

### 【あらすじ】

とある事情により賞金稼ぎたちに追われていた少年は、自分を捕らえた女傭兵ニルファナに思わぬ提案を持ちかけられる。「君さ。違う人生、歩んでみる気ない？」長い逃亡生活に終止符を打つべく、少年は顔を隠し、元の名を捨て、第二の人生を歩み始める。(4/6、十章まで手直し中)(100万PV達成しました、ありがとうございます)

プロローグ(改)(前書き)

10月22日、改稿

## プロローグ（改）

今でも鮮明に覚えている。悪夢がより大きな悪夢に上書きされる、その瞬間を。

あの夜、遠くで人の声が聞こえたような気がして目が覚めた。いやに外が明るい。そう思ってベッドから体を起こして窓を見た。

どうも様子がおかしい。まだ夜更けのはずなのに、空が黄昏に戻ってしまったかのような深紅に染まっているのだ。

と、どこからともなく発された甲高い悲鳴が、家の壁を突き抜けてきた。これで平然と構えていられるやつは相当のボンクラだろう。私は即刻、隣で寝ていた娘を揺すり起こした。

着の身着のままに家を飛び出した私たちを真つ先に襲ったのは熱気だった。むせるような、鍋を空焚きにしてしまった時のような臭いが鼻につき、咳き込んでしまう。

煙に涙ぐむ視界の中を何か横切った。村人だ。それも一人二人ではない。はっと北の方を見ると、通りの奥では橙色だいたいの火柱があちらこちらでゆらゆらと踊っていた。そちらの方からは、村人たちが煙を掻き分けながら必死の形相で走ってくる。間近で幼い男の子が盛大に転んだのを見て、私は反射的に手を差し伸べようとした。が、彼はすぐさま顔を起こして立ち上がり、私の指先をすり抜けていった。

『何やってる、んなところでばさつとすんな！ 邪魔だッ！』

『早く逃げろ！ もうそこまで来てるぞ！』

『おい逃げ、こつちだ！』

低い怒号が、幾度となく鼓膜を震わせた。逃亡を促す叫び声の間を縫うようにして、誰かの名を呼ぶ声が響き渡った。確かアーロン

だったような気がするが、もしかしたらマーロンだったかも知れない。

耳を敬そはだてている余裕など全くなかった。胸が、顎が、がくがくと震えている。自分の吐く荒い息だけがやたらと大きく聞こえている。私は、ズボンにしがみ付いていた娘の手をしっかりと握り締め、村人たちの流れに加わった。

襲ってきたのは野盗の一団だった。実際、近隣の大きい村が頻繁に、野盗の標的にされているという噂は私も小耳に挟んでいた。家を失った者が大勢出たようで、何人かはこの村の空き家に仮住まいを求めてきたのだ。それを聞いた時は災難なことだと同情し、悪逆を尽くした者たちを許せないと憤慨もしたものだ。そのくせどこか遠くの出来事のように感じていたのも確かだった。

この村、レテの規模はそこまで大きいものではない。大陸の東半分を占めるセーニア教国の南端に位置し、南の大国、フォルストロームとの国境に跨っている。取り立てて誇るものなど何もなく、薬効のある温泉が湧いていることで通に知られている、といったところか。

ただ、長閑のどかで自然が多く残っていて、遊歩道を少し外れただけで滝や峡谷など、四季折々の景色を楽しむことができる。どこにでもある村の一つに過ぎないが、その愛すべき平凡さを私は気に入っていた。

付近の村の襲撃を受けて、国軍の騎士団が近隣の村々を頻繁に警戒していることも知っていた。二日前にも国境警備兵が巡回にやってきたので、二言三言、いつものように言葉を交わしたが、案の定、何の異常もないとの報告を受けた。村の者たちが安心しきっていたのを誰も責めることはできないだろう。

けれどもそんな我々を嘲笑うかのように、野盗たちは村に押し寄せてきた。分厚い木の板で作られた北の門を、何かしらの方法で打ち破ったのだらう。いつだって不吉が届くのは突然の事だ。私は、買い物に出かけた妻が崖崩れに巻き込まれた日のことを思い出していた。

ふと、林檎をナイフで割いたような音が鳴った。次いで、私の直ぐ隣で走っていた、見知った飲み仲間が前のめりに倒れるのが目の端に映る。

どつという音が聞こえると同時に足が竦んだ。淡黄色の衣服には矢羽根が生えていた。滲み出した鮮血が目に入り、全身から一斉に汗が吹き出すのがわかる。外からとも内からともつかぬ熱で、軽い立ち眩みを併発する。これが少しでも横にずれていたら、倒れていたのは私か娘の方だった。

娘の手を握っているのは逆の手を差し伸べようとした。瞬間、そう遠くないところから野太い声が聞こえ、肩が自然と戦慄いた。助けを求めようと周りを見回したが、誰も倒れた彼に見向きもせず、一目散に南へと消えていく。

唾を飲み込み、わずかな逡巡を経るその前に、再び発された声に煽られた。

どうしようもなかった。足が自然と前へと進んでいたのだ。大人一人背負って逃げようものなら確実に追いつかれて殺されるだらう。大体、もう死んでいるかも知れない。この状況ですら起き上がるうとしないのだ。死んでいるに違いない。そう自分に言い聞かせるしかなかった。

次いで、娘に視線をやった。普段はお転婆を地でいく娘が、どこか不安げに、私の顔を見上げていた。誰よりこの子を守らねばならなかった。私に万が一のことがあれば幼い身空で天涯孤独になってしまう。助けようとして三人とも仲良く殺されました、では笑い話

にもならない。そんな至極まともな言い訳は、私の心をほんの少し楽にした。

再び走り出したものの、後ろ髪を引かれる思いは消えなかった。取り残された彼の、伏せているはずの視線が、いつまでも私の背中を、恨めしげに見ているような気がして。

村人の群れは村の南門に向かっていた。草食動物の大移動、というには優雅さに欠ける。どちらかといえば、突っ込んできた獅子から逃げ回るシマウマの群れ、と表現するのが的確だろうか。

はぐれた者から狙われ、そして二度と群れに戻ってくることはない。そんなたちの悪い現実が、間近にまで迫っていた。なおかつ重大な問題が残されている。我々を追ってきている獅子は一頭ではないのだ。いつ前に回り込まれるのではないか。そんな恐怖が拭えなかった。

肩越しに後ろを見ると、北側の大部分の家屋に火が纏わりついていた。赤くきらめく無数の火の粉と照らし出された黒い灰が桜吹雪のように風に舞っている。

火勢から察する限りでは、住み慣れた我が家も跡形もなく焼失していることだろう。その確信は心に暗い陰を落とした。今を生き延びなければならぬのに、これから先どうしようという思いが浮かんだ。我が家を焼かれるという理不尽に、堪えられる人間がそういるはずもない。

毎朝、目覚めてから気だるい身体を起こし、窓を目一杯開けて新鮮な風を招き入れる。傍らで寝息を立てている娘を揺り起こし、眠そうに目を擦る娘を尻目に敷布団を物干し竿に干していく。それが終わると、私は食事の用意を、娘は身支度を始める。食器を並べてから食糧庫の蓋を開け、二人分の食料を取り出す。楕円形のライ麦

パンに、家の近隣にある牧場で購入した新鮮なバターを、次いで南国特産の蜂蜜をたっぷりと塗る。貰い物のちよつと高価たかそうな茶器に注ぎ入れるのは、湯気立ち上るミルクティ。沸騰してから少し冷ましたところで茶葉を入れ、じっくりと蒸らす。そうして飲むミルクティは格別の一言だ。

早く起きれば早いなりの、遅く起きれば遅いなりの朝の過ごし方がある。今朝は早かったので、ゆつたりとした時の流れを味わった。新聞を流し読みしながら紅茶を啜すする和やかなひと時を。

朝食を食べ終えた後、慌しく荷物を鞆スクールに突っ込む娘を学び舎スクールに送り出し、自分は宿場に出かける準備をする。妻に先立たれてからは、寝る前に身支度をしておく習慣ができていた。なので、忙しくあれがない、これがないと探し回る必要もない。

そんなありふれた日常を、これから先も繰り返すのだと、ずっと信じて疑わなかった。このような理不尽から住家を失うなんて予想もしていなかった。きつと、ここに住む村人たち誰もがそうだろう。認めたくない現実と向き合わされていた。今の我々は、明日の朝日を拝めるかもわからぬ状況だった。

村の中またたが燃え盛る炎によって煌々と照らされている反面、闇たたずに佇む月と瞬またたく星々は空から姿を消していた。あるいは天に座す神々も、我々の姿を見失ったのだろうか。野盗たちの雄叫びが近づきつつあるのが、はつきりとわかった。

周りに目をやれば、逃げている村人たちの中には女子供もたくさんいた。皆疲れきった表情をしている。対する野盗たちは、ほぼ全員がいい年をした男共だろう。走る速度、歩幅、そして体力。その差は歴然としている。

追いつかれるのは時間の問題、誰もが逃げ切ることを諦めかけていた。

黒衣を身に纏う彼が我々の前に現れたのは、そんな時だった。



前の方で、一丸となって逃げていた村人たちが左右に割れ始めたのに気づいた。真ん中にはこちら側へと進んでくる者が一人。通りの両端に寄った村人たちを見向きもせず、こちら側へ歩いてきた。一際強く印象に残る格好だった。全身を隈なく包む、ゆったりとした黒のローブを着ていて、首からはフードに覆われて顔を確認することもできない。その背には、何やら黒くて巨大な物を背負っていた。弧月型の薄刃が、彼の頭の後ろから、私たちの顔を覗いていた。

逃げる群衆の流れを押し留めるかのように、彼はゆっくりとこちらに向かつてきた。どうすればいいのかわからずにその場で身を竦め、恐れ慄く我々の方へ、悠然と。ろくに隙間がないはずの人混みの中を、不思議と一度もぶつかつた様子もなく、透り抜けるようにして私とすれ違った。

首から腑ふの下の方へ、痺れとも寒気ともつかぬ何か駆け下りていき、先ほどまで感じていた体中の熱気が、嘘のように奪われた。唇が小刻みに震えていた。先程まで野盗に抱いていた、混沌とした感情は、あっさりと掻き消されていた。その気配は亡霊のように希薄。地を踏む足音も、吐息の音も、衣擦れの音すらも聞こえなかつた。

村の一角に訪れた沈黙を、後方から放たれた咆哮が吹き飛ばした。我に返り、後ろを振り返った。距離を詰めてきた野盗たちを目にして、顔が自然と突っ張った。だが、それもわずかな間のことだった。我々と野盗とを隔てるように、黒衣の彼が道の中央に立っていた。

後方に見える野盗たちの姿が、顔を判別出来るほどに大きくなってくる。彼らは我々の姿を確認し、歓声を上げた。まるで宝物を見つけたような声に、再度怒りが湧き上がるのを感じた。

何がそんなに愉しいのか、何でそのような声が出せるのか。無数の

足音が地鳴りを起こし、獲物を追いたてるかのようにどンドン音量を増していき、心に侵食してくるかのようなその音を掻き出したい衝動に駆られた。

そんな忌むべき野盗たちを前にして、黒衣の彼はゆっくりと腕を下ろした。ゆとりのある袖から覗く日焼けした手には、鈍い光を放つ黒い大鎌の柄が握られていた。

それを意に介した様子もなく、野盗たちが奇声を上げた。もう茶色くなっている、血糊のこびりついた剣を掲げ、躊躇なく彼に斬りかかった。その刹那

一陣の風が吹き荒れ、私の顔を撫でた。次いで視界の中で、真っ赤な液体が照らされた地肌に迸るのが映った。

世界が息を止め、ゆっくりと逆さに回り始める。狩る者は、狩られる者になっていた。

瞬きする間に、右に構えられていた大鎌が左へと移動していた。続いて、黒衣の彼の直ぐ近くにいた三人の野盗の腰から上が、宙を泳いだ。野盗たちの上半身だけが、走ってきた勢いのまま彼の両側面を通り過ぎる。そのまま重力に吸い寄せられ、顔が地べたに叩きつけられた。後を追うようにして下半身が横たわる。

あれ、などとの間の抜けた声を出した野盗たちが足元を、もとい先ほどまで足のあった場所を見た。彼らの下半身は、黒衣の彼の前に置き去りにされていた。びゅっびゅっと血が噴き出す腰の断面を見て、ようやく斬られたことを認識したのだろう。凄まじいまでの絶叫が場に響き渡った。

襲いくる痛みによるものか。それとも文字通り、半身を失ったこ

とによる喪失感によるものか。斬られた野盗たちはがくがくと震えていた。炎で橙色に照らされた地肌にゆっくりと広がっていく、己の夥しい血液おびただ。その生温かさが、土に爪を立てる彼らに死の到来をそつと告げていく。

ほどなく、血と土にまみれた手から力が失われたのが、私の目にもはつきりとわかった。

後に続く野盗たちが、仲間が殺されたのを目の当たりにして激昂げっこうした。こう言ってはなんだが、彼らにも人間らしい感情があるのが不思議でならなかった。

次々に腰の剣が抜き放たれ、大小の煌めく白刃がいびつな軌道を描きながら黒衣の彼に襲いかかった。当たる。思わず目を瞑った私の耳に、けれども、聞こえてきたのは風を切る音ばかりだった。

どうなったのかを確かめようと、恐る恐る目蓋を開けた私の視界に映ったもの。それは、男の恐るべき身のこなしだった。首を傾いでは顔面に迫る突きをかわ躲し、半歩下がっては切り払いの射程外に逃れる。一つ一つの動作が速くて、正確で、躊躇ためらいがない。人間があるなふうに分かるものなのか。少なくとも目が二つだけでは不可能だ。私にはそう思えてならなかった。何よりも、剣風が目先鼻先を撫でているのに平然としていられる胆力は、常人のものとは言い難い。否、人間であることすら疑っていた。

波状攻撃の切れ目となる斬り下ろしが、鎌の柄えで高々と弾き返された。攻守交替。黒衣の彼が素早く溜めを作り、足元すれすれから大鎌を一気に斜め上へと振り抜いた。鎌刃の切っ先が、右端にいた野盗の腹に食い込んだように見えた。遅れて、ズブリと音が聞こえた。

気がつけば、鎌刃は元の位置に収まっていた。おそらくは一回転

したのだらう。横に並んでいる三人の腹に、一際大きな口ができていた。そこからべつと血が吐き出される。続いては大きな舌がぶりとはみ出した。切断された大腸だ。

一本釣りされた魚のように、地べたでのたうち回る野盗を避けるようにして、別の野盗たちが横から回り込んだ。一齐に斬りかかろうという算段か、目線を交わしてタイミングを窺っている。一方で囲まれた側の彼は、こきこきと首を鳴らすだけだった。

その仕草が癢に障ったのか、野盗の齒軋りの音が私のところまで聞こえた。そうと思つた時にはほぼ同時に斬りかかつていた。

お互いの振り下ろした剣と剣が交錯し、野盗たちが驚きに目を見開いた。一心同体の連携攻撃までもが、不発に終わっていた。

野盗たちの目に見えたのは、黒い大鎌だけだっただらう。黒衣の彼は、大鎌を支柱にして手の平でバランスを取り、棒の上で逆立ちするかのようになり、身体を宙に浮かしていた。

野盗たちがゆっくりと視線を上に向けた。それと同時に、黒衣の彼は柄から一瞬手を放した。わずかに身体が落下したところで、今度は柄を両手で握り締める。保たれていたバランスが崩れ、彼の身体が地に向かう。反して鎌刃が地面から浮き上がる。

得物を持つたまま、彼は宙で体を大きく捻った。それに連動して、鎌刃が螺旋を描きながら宙に昇る。地面すれすれで宙返りした彼が着地した時には、野盗たちは喉を、あるいは顔を、無残に切り裂かれていた。

凄絶なる血染めの輪舞曲を、彼は粛々と踊り続けていた。観客は逃げることを忘れ、固唾を呑んで見守る村人たち。伴奏は野盗の怒声。燃え尽きて倒壊する家屋がアドリブを刻んでいる。

炎で熱された空気は景観を揺らめかせ、怒声はやがて悲鳴へと展

開してゆく。そのメリハリが、たった一度だけ見たことのある、交響曲の情景の転換を思わせた。

悲鳴、 悲鳴、 また悲鳴。

黒衣の彼は手に持つ大鎌を、身体全体で弄もてあそんでいた。滑なめらかな動きで、そのくせ躍動感のある剣舞を惜しげもなく披露していた。その周りに、野盗の死体だけが折り重なっていく。

臆病風に吹かれたのか、剣を構える野盗の中で一人、後退りした者が出た。それをきっかけにして、ついに彼を取り巻いていた野盗の人垣がかいが瓦解した。思い思いの方向に逃げ始めたのだ。

助かった。私たちはそう確信し、歓声を上げかけた。だが、それで全てが終わったわけではなかった。

黒衣の彼は逃亡者たちを一瞥し、いかにもつまらなそうに頭を掻いた。

「おいおい、逃げんのかよ。まったく白けるぜえ、てめえの汚れた尻は手でも拭け、って教わらなかつたのかあ？」

思ったよりも高い声でそんなことを呟いた。そして、落とした小銭を拾うかのように身を低くすると、軽快に地面を蹴り放った。

地面を滑っている。そんな錯覚を呼び起こすくらいにその足運びは速い。背を向ける野盗たちを、さながら豹の如く追い立ててゆき、距離を詰めては次々と背後から斬り伏せていく。逃げる野盗と追う彼との速度差は、あまりに歴然としていた。馬に跨った者ですら逃げ切れぬほどに。

一切の容赦をしない彼に、ようやく観念したのだろう。ついに助けを求め始める野盗が出始めた。彼らは本当に先ほどまで、殺戮さつりくに

興じていた者たちだろうか。土下座し、赦しを請うその姿を見て、私は憐憫の情すら感じていた。

跪く者たちの嘆願を聞き入れた様子もなく、黒衣の男は雑草でも刈るように淡々と首を刎ねてゆく。切り離された頭が地面を転がり、回転を止めた独楽のように力なく揺れる。色褪せた瞳が至るところで宙を見つめていた。

物言わぬ肉塊が増えていき、ややあつて幕切れが訪れた。年若い、おそらくは私よりも若い男が一人残されていた。その目には薄らと涙が浮かんでいた。恐怖に震える手で、なんとか剣を握り締めている。

その男の、私には年老いた母がいるだとか、農作物が日照りで全滅して食べていけないだとか、そんな類の命乞いを一通り聞き終えてから、黒衣の彼は溜息を吐いた。次いで、鎌を持っていない方の手で男の剣を指差す。

「んで、そいつあ誰の血だあ？」

一言で希望を断ち切り、黒衣の男が無造作に歩み寄っていく。若い野盗の剣には誤魔化しようのない、真新しい血糊がついていた。

野盗がやけっぱち気味に、黒衣の彼に突きを繰り出した。一瞬にして身体的位置が入れ換わった。ただ擦れ違っただけに見えたが、男のか細い悲鳴が即座にそれを否定する。

『母さん』

最期の言葉が私の耳の底に、こびりついた。

圧倒的なまでの暴力。村人たちは声を発することも忘れ、ただ黙然と、その光景に見入っていた。ふと、握り締めていた小さな手が、逆に強く握り返してきた。先ほどまで娘と一緒に逃げていたことに思い当るのに数秒を要した。視線を落とすと、娘は昂然と顔を上げ、恐れと憧れを内包する目を黒衣の彼に向けていた。

羨望にも似た我々の視線を気にした様子もなく、黒衣の彼は自ら造った大きな血溜まりの中に歩を進めた。血の池の上で男は肩を震わせながら天を仰ぎ、声なく笑った。

不意に、何かを探すかのようにゆらりゆらりと、横に8の字を描くかのように頭を揺らした。視線がこちらを素早く横断し、唐突に戻ってきて停止する。

目が合った。きつと、私だけではなく、村の者全員と。

かけられていた魔法が解けたかのように、凍りついていた時が動き出した。村人たちは、顔を目一杯引きつらせていた。そして、黒衣の彼がこちらに一步を踏み出した途端、誰かが絶叫した。

その力強さと言ったら、オペラ歌手も真つ青な声量だ。叫び声が連鎖し、混濁した。ついでに底知れぬ恐怖も。周りにいた者たちが反転して走り出していた。

それに釣られて動き出そうとした私よりも先に、娘が私の手を凄力で引っ張っていた。意表を突かれ、バランスを崩して危うく転びかける。何やってんのっ、という強い叱咤を耳にして、娘に怒られたのはこれが初めてか、と場違いな苦笑が浮かんだ。

南門に到達する頃には、村人たちは息も絶え絶えだった。笑う膝を辛うじて支えながら後ろを振り向くと、彼の姿はどこにもなかった。

おそらく、ここにいる誰もがわかっていたはずだ。野盗をものともしなかった彼ならば、我々を全員その場で殺せただろうことを。

結局、逃げても逃げなくても結果は変わらなかった。必死に逃げたことすら徒労だった。私たちはへなへなとその場に座り込んだ。土の冷たさを尻に感じながら頭上に目を移すと、空が白み始めている。

それから間もなく、私はとある地方紙の一面を見て黒衣の男の名を知ることになる。シュイ・エルクンド。私の頭に色褪せることのない光景を刻みつけ、何人かの村人たちの寿命を数年ほど縮めたであろう、<sup>マインナリー</sup>傭兵<sup>の</sup>名を。



## 第一章 く新しい名前(1)く(改)

山間やまあいの小さな港町に淡い陽光が放射状に降り注いでいた。港へと向かう船のマストには真つ白い長方形の帆が縦に三枚広がっている。その上を飛び交うカモメの群れの鳴き声を、間延びした警戒音が上書きしていった。魔石を利用したその音はいびきを引き延ばしたようにも聞こえる。

「やっと到着かぁ。結構長かったね」

肩甲骨の下まで届く色鮮やかな赤髪が、さらさらと潮風に靡なびいている。間延びした重低音が静まると、甲板に立っていた女は組んだ両手を反らすようにして、空に向かって伸びをした。半袖のブラウスに強い日差しが照り付け、生地の白さを一層際立てている。穿いているのは海の色合い、膝丈くらいのプリーツスカートだ。

眩いばかりの後ろ姿に目を細めながら、少年はその隣に歩を進めた。

「退屈はしなかったよ。たまには船旅も悪くないね」

女の晴れやかな服装とは対照的に、少年が纏っているのは魔法使いが好んで身に付ける黒衣だ。夏真つ盛りにも関わらず季節外れのフードを深めに被っている。ややサイズが大きめなのか、その裾は足先までも覆い隠していて不格好な印象だ。

女は白塗りの手すりに身体をあずけるように両腕を乗せた。吹き上がりの、一際強い風が髪を乱したが、それを気に留めた様子もなしに目線だけをちらりと後ろに向ける。一挙一動がいちいちさまになるな、と少年は一人感心した。

「ゆつたり過ぎす分にはね。それよりイエルド、本当にそれでいいんだね」

念を押すように、たつぷりと間を取って訊ねた。少年は女の横にある、輝く水面の先にある町を見、わずかに顎あごを引いた。

「もちろん、折角ここまで連れてきてもらったんだ。どちらにしても」

不意に、強い潮風が甲板上を巨大な箒はきで攫ひうように吹き付け、少年はフードが外れぬよう、頭の上から抑えつけた。顔を隠す影がやや薄くなり、口元が日差しに晒された。被り物によって三角形に切り取られた視界の先には、海の色を写し取ったかのような深い青がある。

「このままのうのと生きていくなんて絶対に嫌だ。きつといつか、僕の手で」

意志の勁つよさが窺うかがえる、輪郭のはっきりとした言葉を耳にして、女は尚も考える素振りを見せた。

「そこは『僕』じゃなくて『俺』。それから、返事は『うん』じゃなくて、『ああ』の方がいいかな」

「お、俺？ 俺かあ」  
いきなり使うのは少し照れ臭い。そう言いたげにイエルドが首を傾げた。

「こーらー。そのくらい割り切らなきゃこの先やっていけないよ。どんだけ厳しいと思ってるんだよー」

「ええと……、ああ、わかった。気をつけるよ、ニルファナさん」  
言いつけ通り、早速導入を試みるとニルファナは満足そうにうなずいた。生徒が口にした模範解答を聞き、教師が自身の教育方法に

自信を深めるように。

「うむ、大変宜しい。くれぐれも言葉遣いには注意を払うこと」

「う、ああ」

しばしの間、気まずい沈黙が流れた。

「ちよつとお、本当にだいじょぶ？」

言うや否や、ニルファナの顔が無造作に、斜め下から覗き込むように接近してきた。あまりの顔の近さに、思わず仰け反ってしまう。薬草の香りがする吐息が鼻にかかり、心の鼓動が自然と早まっていた。自分が稀に見る美人だということを少しでいいから自覚して欲しい。

そのようなことを考えながらも、少年はこくこくと、額がぶつからぬよう注意してうなずいた。ニルファナは少年の黒い瞳を数秒見つめてから足を引き、形の良い胸の前で腕を組んだ。

「当然わかっていると思うけど、かなりしんどいよ。それこそ、君の知っているどんな職業よりもね」

掛けられた声に気遣いが滲み出ていることに気づく。ニルファナの不安を払拭するべく、少年は風音に負けまいと声を大にした。

「覚悟はできているよ。それに、消化できないわだかまりを抱えて生きていく方が、ずっとしんどいと思うし」

「それはわからないでもないけど。あーあ、こーなると予想出来ていたならあんなこと言わなきゃよかったかな。あろうことか『傭兵マーシナリーになりたい』なんて言い出すとはね」

一般的に、傭兵とは多種多様な依頼を果たして報酬を得る者たちのことを指す。何でも屋と言い換えても差し支えない。依頼の内容は多岐に亘り、手紙の配達や人探しと言った軽いものから、魔物退

治や犯罪者の掃討といった重いものまである。

暗に不賛成の意を示したニルファナに、少年は口を尖らせた。

「じゃあ、そういうニルファナさんはなんで傭兵なんてやってるのさ」

「それはまあ、なんとというか、私にも色々あるのだよ」

「なら、僕だっておんなじさ。大丈夫、ちゃんと下準備だつてしてきたし、今更失うものもないし」

その事実を、自分の境遇を再度確認するかのようになり、少年は何度となくうなずいた。

「まだ幼いから無理ないけど、君は自分のことをあんまりわかってないよねえ」

少年の視線が自分に向くのを待って、ニルファナは続ける。

「絶対に、またできちゃうと思うんだよ。大切なもの」

訝る少年にニルファナは軽く肩を窄めてみせた。

「何で、そんな事がわかるのさ」

「女の勘、つてやつかな。不思議と、一度も外れたことはないんだけどね」

一笑に付したくなるような言葉。しかし、少年がその信憑性を疑うことはなかった。半年もの間寝食を共にして、彼女がそういう嘘を吐くタイプではないことくらいはわかるようになっていた。彼女がそう言うならば、きっとそうなのだ。

何気なく後方に視線を送った。甲板の向かい側、肩越しに見える水平線にはくつきりとした横長の入道雲が乗っかっている。寄り集まった羊の群れのようにもこもこしているその光景は、微かな郷愁を招き入れた。丘の上にあった牧場。草花の香り。そして、懐かしき故郷の情景と人々の顔を。

それを振り切るように、未練を断ち切るように、少年はニルファナに向き直った。

「なんだって構わない。必要とあれば片っ端から捨てていくさ」

少年らしからぬ諦観した物言いに、ニルファナの口から自然と溜息が漏れた。

「やれやれ、残酷なことだね」

「あの、さ、心配してくれてありがとう。本当、感謝しているんだ」  
気遣いの心に対して謝意を述べた少年に、ニルファナは腰に手を当て、花を慈しむかように褐色の目を細めた。

鉤かぎのような岬の突端にある灯台の脇を通過すると、視界の範囲内に収まっていた港町が幕開くように、少しずつ横に広がっていった。付近の漁船に注意を促す警笛を短く鳴らしつつ、二人を乗せた大型客船は湾内へ静々と進んでいく。船首が青い海面に白い切れ目を入れていき、生じた波頭が釣り人たちの居並ぶ岸壁に当たっては水飛沫を撒き散らす。

『間もなく>セーニア<領南東部、>ホーヴィ<。ホーヴィに到着致します。どなた様もお忘れ物なさいませんようお願いいたします』

魔石で拡声された案内が船内に響き、船室からは乗客が荷物を持つてぞろぞろと甲板に出てくる。浮き棧橋に船が接棧してほどなく、錆びた錨いかりが海面へと吸い込まれてゆき、鎖が大きく軋む音が聞こえた。

港から少し離れた、山の手の雑居が建ち並んでいる区域を二人は目指していた。その間にも幾多の通行人と擦れ違い、その大半が振り向かされている。他のことに気を取られていた者も周りの者達が視線を一方向へ送っていれば、当たり前のように釣られてそちらを見る。

ニルファナの美貌は同性でも見惚れてしまっただったが、その他にも彼女が注目を浴びる理由はあった。同業者であれば、知らぬ者が存在しないほどに有名なのだ。そんな彼女が悪い意味で人目を引く黒衣の連れ合いと並んで歩けば、ありとあらゆる層の注目を集めてしまっとも言っても過言ではない。

羨望せんぼうよりは、戸惑い、好奇、蔑みの色が濃いようだった。ともすると王族と奴隷が、子供と流れ者が並んで歩くようなちぐはぐさを楽しんでいるのかも知れない。正と負の掛け算は負になるが、人の見る目もそれに順ずるようだ。

もつとも、当の二人はそんなことには慣れきったという体ていで、周囲の視線と囁ささやき声を全く意に介した様子もなく歩を進めている。

大通りから路地に入って数分後。人通りが疎らになってきたところで、白い縦長の看板が角に固定された、さほど背の高くない建物が突き当たりに見えてきた。看板には青い塗料で大きく「シルフィール」とだけ書かれている。

「ここが、そうなの？」

「うん、想像と違ったかな？」

「す、少しだけ」

戸惑い気味に建物を見上げる少年にニルファナが頬を緩めた。外観はどこにでもありそうな、三階建ての古びた木造家屋。壁面の塗料がところどころ剥げ落ちていた。現状、周りの風景に違和感なく溶け込んでいるそこが旅の終着点であり、そして出発点だった。

「んじゃあ、行こっか」

ニルファナが道案内でもするかのように、階段の上にある入口を手の平で示した。そこが、お気に入りの少年の指標になることを心

から望みながら。

「ああ、そうそう。新しい名前、もう決めたの？」

一段目を上り掛けたニルファナは後ろ手のままくりと振り返った。日差しを受けて煌めく、豊かな赤髪が潮気を含んだ風に舞う。

束の間それに見惚れてから、少年は俯き気味に瞳を閉じた。

己の名に一度の別れを告げることを。その名にまつわる一切を置き去りにすることを。そして、いずれは必ず元の名を取り戻すことを、誓う。

胸に決意を深く刻み込んでから、イエルドだった少年はゆっくりと目を開き、告げた。

「俺の名は、シユイ。 シユイ・エルクンドだ」

「シユイ、か。うん、悪くない」

ニルファナは納得したようにうなずき、姿勢を正すと

「ようこそ、我がギルド・シルフィールへ。シユイ・エルクンド殿、歓迎する」

そんな畏まった口上を述べて片目を瞑ってみせた。見ている者の野暮ったい感情を全て吹き飛ばすような、会心の笑顔で。

古めかしい木造の建物の中に入り、まずシユイの目に飛び込んできたのはホールの中にある巨大な長方形の掲示板だった。パツと見、縦幅は2m、横幅は10mといったところだろうか。板を支える八つ足にはそれぞれキャスターが付いている。

深緑色の掲示板にはたくさんの紙がびっしりと、隙間なく貼られていた。相当に几帳面な人が貼ったのだろう。ちよつとした傾きやズレすらも見当たらない。

紙に書かれている文字の方へ視線を向けると、どれも何かしらの

依頼書であることがわかった。>夜盗の殲滅<、>貿易船の護衛<、>王都への文書配達<。様々な件名が大きく記されている。

だが、貼られている依頼書の量に対して、それを見ている者は数人しかいなかった。天窓からの日差しだけが頼りの薄暗い屋内をぐるりと見回してみるが、やはり人の姿は疎まばらなようだ。

「相も変わらず、ここは暇そうだねえ。まっ、手続きに時間がかからなくて済むからいいんだけどさ」

ニルファナもシユイと同じように、辺りをゆっくりと見回している。彼女の口振りから察するに、どうやらこれが平常時の状態らしい。

ふと、天井を見上げると蛍火のような淡い光球がたくさん宙を行き交っていた。その殆どは青っぽい色だが、時折黄色のものも混じっており、天井や壁を透り抜けて出入りしているようだ。何だろうと見ていると、次第に目がチカチカしてきた。シユイは瞬きつつ顔を元の位置に戻す。

「凄いや、ここがギルドかあ」

「うら」

「あぐっ!」

目の前に幾つもの星が散乱しては消えていった。肘で後頭部を小突かれたのだ。自然と口から呻き声が漏れ、屈み気味になった全身が震えた。数秒を経てやっと顔を上げ、抗議の目を向ける。と、何故かニルファナの方がご機嫌斜めのようなだった。

>あのねー、そんな初心者丸出しの発言止めてくれる?<

唐突に、頭の中に高い声が響いた。への字に曲がった唇が少しも



動かなかったことから、その声が>念話<による物だと気付く。

念話は、高位の魔法使いが相手に己の意思を伝えるのに用いる詠唱破棄術の一つだ。詠唱破棄術とは、魔法を行使するための言葉を必要としない特殊技法である。効果範囲は術者からおよそ20mとあったところで体調により多少の増減がある。相手の頭の中に直接術者の意思、イメージを伝えられるため、周囲の者に悟られずに連絡を取り合える便利な術だ。イメージを伝える特性故に、人のみならず何種類かの知能の高い生物に対しても意思疎通を図ることが出来るらしい。極めれば相手の使っている念話を盗聴する、といった読心術に近い事も可能になるらしいが、そこまで出来る者は世界でも一握りと言われている。

かくいうシユイもそれを扱うことは可能だが、それを習得し終えたのはつい数日前のことだった。使用者が少なく、応用も利くということで、ニルファナに基礎魔法をすっ飛ばして叩き込まれたのだ。

>昨日打ち合わせしたでしょー。これから君を一足飛びにCランクに推薦するって。少ないっていったって周りに人はいるんだから、そんな初心者じみたこと言っていたら絶対怪しまれちゃうじゃない<

通常、大概のギルドでは傭兵の実力順にランクが取り決められており、ニルファナが所属しているシルフィールも例外ではない。本来このギルドでは傭兵未経験者は例外なく、最低のDランクから始まる。

二人はシユイを経験者と偽り、Cランクに推薦する旨を前もって取り決めていた。正攻法で傭兵になるには毎年二回行われる適正試験に受かる必要があるためだ。

別にそちらでも構わなかったのだが、ニルファナ曰く『絶対に受かるとわかっている試験を義務的にやらされるのって無意味だよね』ということなので、特に反論する理由も見当たらず、彼女の判断に身を委ねていた。

>す、すみません。つい……<

シユイは念話で詫びながらニルファナに向かって頭を下げ

気の抜けた「へあ」という掛け声と一緒に、差し出した額にチヨップを受け取った。反論の言葉は痛みが邪魔をして出てこなかった。

半年ほど前のこと。

>賞金稼ハンターぎくに追われながらも流浪の旅を続けていたシユイは、ある日とある辺境の地で彼女、ニルファナ・ハーベルと出会った。後で知らされたことだが、最寄りの田舎町で偶然シユイを見かけ、以前手配書で見た似顔絵にどことなく似ていたのでこっさり後を付けてきたらしい。

実際、傭兵であつても賞金稼ぎ紛いのことをする者は少なからずいる。とはいつても、受ける依頼は仇討ち関係が主だ。ごく稀にいかかわしい組織の裏切り者に対する肃清しゅくせいや、敵対国の要人暗殺といったキナ臭い依頼が舞い込むこともあるようだが、そういったものは各々ギルドによつて受け付けるか突つ撥ねるかの判断がくつきりと分かれている。善悪の基準がはっきりしているか。安全がちゃんと保障されているか。条件の兼ね合い等、複数の条件をクリアしていないとまともなギルドでは取り合つてくれない。というのも、後ろ暗い依頼に関しては報酬こそ莫大であることが多いが、一方で口封じされてしまつたり、場合によってはギルド毎標的にされるようなことも有り得るためだ。ゆえに、甘い条件で率先して受けるギルドはほとんどない。言い換えればわずかながら存在する。そして、倫理に反した依頼を好んで引き受けるようなギルドは総じて>裏ギルド<と呼ばれている。

それはさておき、確かニルファナと初めて出会ったのは、枯れ葉だらけの並木道を歩いていたときだった。木立の裏から音なく赤髪の女が飛び出してきたのを見て、慌てて身構えたのだ。

何で引つ掛からなかった？ それに、女の人？

逃亡生活を余儀なくされてからというものの、シユイは常日頃から尾行に気を付けていた。自分の周囲に張り巡らしている魔力の警戒網は、それなりに大きい対象であれば隈なく感知できるものだ。だからこそ、女の質量を感知出来なかったことに驚いた。次には得体の知れない相手に対してどう対処すべきか、考えを巡らせねばならなかったが。

「あの、何か用？」

「んんーと、……あれ、あつれー？ へえ、ほおほお、間近で見ると意外や意外」

投げかけた質問に答えることもなく、美人と呼んで差し支えない赤髪の女はこちらの顔をまじまじと見つめていた。その無遠慮な視線に、気恥ずかしさにも似た不快感に襲われた。

そのくせ、対峙した彼女からは殺気が一切感じられない。それどころか敵意があるのかすら怪しいものだったが、彼女の全く隙のない佇まいが本能に危険を訴えかけているのも事実だ。

「うーん、まいった、これはお姉さんも想定外だった。あんまり似てないね。単に絵師の腕が悪かっただけなのかなあ。いや、もしかしたら、意図的に？」

やっぱり賞金稼ぎか。それとも、傭兵か？

絵師という鍵<sup>キ</sup>言に反応し、頭が高速回転を始める。大方、どこかで手配書に付いている似顔絵を見たことがあるのだろう。

不吉なことに女の顔には見覚えがあった。何故に不吉かと言えば、自分が見知っている賞金稼ぎや傭兵なんて有名処に限られているからだ。それ即ち、裏世界屈指の実力者である。

賞金稼ぎとは主に人、怪物問わず賞金のかかった対象を捕獲、または始末して生計を立てている者のことを指す。その手の依頼が正規のギルドに舞い込むことは稀で、裏ギルドやフリーの者の受諾が大半を占める。彼らも広義では傭兵の一種だが、血と死の臭いが付き纏う依頼を率先してやるため一般の者にはより敬遠されがちだ。依頼をこなしているうちに恨みを買って過ぎて、自分自身が賞金首にされてしまったという笑い話もある。

一方の傭兵はジャンルを問わず、幅広く仕事を行っている者を指す。迷い猫の探索や農作業、はたまた魔物退治や用心棒、ときとして国家間の戦争にも参加する。殺しと捕縛を追及し、戦闘に特化する賞金稼ぎよりも温いように思われがちだが、様々な種類の任務を行っているが故に応用力と柔軟性に優れている。依頼の供給が潤沢且つ多岐に渡ることからギルドに所属する者が大半であるが、フリーの傭兵もそれなりにいる。ただし、フリーでやっていくためにはそれなりの名声、人脈と情報網が必須となる。そうでなければ依頼を受けることすらままならない。

そして、狩られる側である賞金首にどちらのたちが悪いか、と問えば、大抵傭兵だという答えが返ってくるだろう。その理由の一つに、正規のギルドが賞金絡みの依頼書を受諾する場合、難易度が高めに設定されていることが挙げられる。受けられる傭兵が熟練者に限られているので、そもそも生半可な奴がないのだ。

また、傭兵がそういった類の依頼を受ける場合、怨恨絡みか正義感に囚<sup>よ</sup>ることが多く、退いてくれることが少ない。金目当ての敵であれば諦めるのも早いですが、そうでなければ相当厳しく追撃される。

シユイは煩雑な記憶の糸を遡ってゆき、該当者と思しき似顔絵に行き当たった。

やっぱり、間違いない、よな。

無意識的に唾を呑み込んでいた。世界的に有名な傭兵ギルドの略称四大ギルドの一角、シルフィール。その構成員の中でも選りすぐりの19名。個々の数字を与えられている彼らは札付き、ランカーと呼ばれている。犯罪者にとって最も忌避すべき存在であることに疑いを挟む余地はない。

その中の一人、ニルファナ・ハーベル。暴力とは無縁そうな整った顔立ち。とは裏腹に、凶悪犯罪者ですら半径一キロ圏内にはお近づきになりたくないという曰くつきの女傭兵だ。稀代の魔法使いとしても名を馳せており、賞金首が出会ってはいけない人ランキングというものがもしあったとすれば、トップ10入りは間違いない人物である。

口蓋が細かく震えているのに気付き、動揺を悟られぬよう歯を噛み締める。

「そうと仮定すると、力量の差異が気になるけど。なんだか、依頼主も叩けば埃が出てきそうな感じだね」

何やらぶつぶつと独り言を呟き、しきりに首を捻っているニルファナを視界の中央に捉えつつも、シユイは俯瞰するように周りの地形を把握する。歩いてきた方向と進行方向の記憶を地形図と照合、逃走経路を割り出すために。

北への街道を塞がれている以上は南に逃げるのが無難のように思われるが、行く手を阻んで挟み撃ちにするのは敵を捕らえる常道。彼女の仲間が逆方向に待ち構えている可能性は否定できない。

東側は大平原、身を隠せる遮蔽物が少ないから追手を撒くには向

かない。遠距離攻撃は魔法使いの専売特許だ。

消去法の末に、シユイは西の方角をちらりと見た。火山地帯に入ればあるいは。身を隠す場所も多いし、都合の良いことに今は西日。いけるはずだ。

賞金稼ぎに追われる生活もそろそろ一年。その間も幾多の危機を乗り越えてきた。自己防衛のための習慣だつて板についてきたし、実際今日に至るまで生き延びている。落ち着いて行動すれば大丈夫だ。絶対に逃げ切れる、はずだ。

長く細く息を吐いてゆつくりと興奮と恐怖を鎮め、逃げるタイミングを窺う。

「よし、決めたつと」

どうやら向こうも何やらお決めになったようだ。と、唐突に、不安の細波が身体中に広がっていく。ニルファナは伏せていた顔を上げ、間をおかず天に向かって手をかざした。

「> 鋼穿つ焰の戟<」

ランス・オブ・サラマンドゥル

呪言を一切省略した魔法詠唱。そして、それが始まりだった。ニルファナの掲げた手の平の上方に、硝子玉くらいの炎が生じ、みるみるうちに周囲の空気を取り込んで肥大化していく。

うわ、大きいな。……ちよつ、おつきいっ！

しばしの間思考停止。直径4メードほどにまで膨れ上がった巨大火球が、ニルファナの指先でゆつくりと回転し始めた。表面からは橙色の泡が湧き出で、小さな炎の蛇が飛び出しては身をくねらせて球体へと還っていく。

術者が手掌で示した領域を焼き尽くす準自律型召喚セミオート・サモン。制御を逃れようと好き勝手に暴れまくる召喚獣とは違い、あくまで契約した術

者の意に沿って発動する精霊の集合体。素晴らしく合理的で、しかし使われるとこの上なく厄介な代物。破壊欲を満たすためだけに編み出されたような魔法だ。そして、解説書の記憶と大きさが食い違うのは、術者の実力が段違いであることの証。

現実逃避しかけた思考を何とか引つ張り戻し、対応策を捻り出すと共に即実行。前方に障壁魔法を展開する。

「  
> ウインド・ウォール 烈風壁くー!」

高らかな詠唱とともに、二人を隔てるように風が渦を巻いて発生し、乾燥した地面から砂埃を巻き上げ始める。大量の砂塵で視界を遮ると同時に次の攻め手を警戒させる狙いだ。とはいうものの、こちらとしては攻めることなんて考えていないし、ニルファナの使った魔法が初級の障壁如きで防げるものではないこともわかつている。煙に巻いて全力で逃げる、その一点を貫くのみ。戦う選択肢は端から捨てていた。

シユイは身を低くして西へと駆け出した。砂埃の立ち込める中、その姿を視界の端に捉えたニルファナは、小さな口元に好奇の笑みを湛たえていた。

少なからず足には自信を持っていた。幼い頃から旅を続けていたこともあって、大の大人が二の足を踏むような険しい山野を駆け巡ることも苦にしなかった。

実際、その年頃の子供とは思えぬほどにシユイの走法は完成されていた。スムーズな足運びとしなやかな手の振り。呼吸法においても短距離走と持久走とはちゃんと意識して切り替えている。鍛え抜かれた足腰は多少の起伏などもともせず、地面に突き出ている埋もれた岩の天辺や木の根などに引つ掛かることもなかった。

道なき道を、シユイは山鹿の如く軽快に駆け抜けていく。視界からは目的地に至るまでの、最も負担が少ない経路を選び取り、自然とそちらに爪先を向けている。

とは言うものの、後方から攻撃される可能性は捨て切れない。完全に振り切るまでは警戒せねば、とシユイは後ろにちらりと視線を送る。

「お、わ！」

炎の壁が後ろから迫<sup>せま</sup>っていることに気付き、シユイは右足を全力で踏み切り、進路を90度変えて左側に転がり込むように跳躍する。遅れること一秒。馬車くらいはあるつかという巨大な炎弾が、シユイが先ほどまで走っていた経路を一直線に貫いていく。地面に伏せるのとほぼ同時に右手から熱風が撒き散らされ、次いで前方から轟音が生じた。

進行方向にあった岩柱の一つが頂上付近から爆破炎上し、一瞬にして融解した。新品の蝋燭に火を付けた途端、下まで溶け落ちたかのような気持ち悪さがあった。先ほどまで岩柱だった場所には毒々しいマグマの湖が出現し、沸騰したように泡を立てている。

じよ、じよじよ、冗談じゃないぞっ！

体中の皮膚を直截、静電気で擦られているような感覚があった。未知の脅威に対する恐怖が頭を芯から痺れさせる。

通常の炎魔法であれば温度はおおよそ1000度から1400度。せいぜい岩の表面を溶かすくらいが関の山だ。この近辺にある火山岩、かんらん石を沸騰までさせるには2000度を超える熱が必要になる。あんなのを食らった日には骨すら残らない。術者の実力が顕著に反映されている。され過ぎていると言って良いだろう。

再び後ろを振り向くと、ニルファナは火球を維持したままこちら



の方へと疾走していた。満面の笑みを崩さぬままに。

この場に似つかわしくない表情を見て更なる恐怖に襲われる。訪れた恐慌が愚かしい選択肢を提示。？逃げる。？逃げる。？逃げる。

三択の意味ない！

自分に突っ込みを入れつつ頭を切り替える。幸い先ほどの魔法には避け切れないほどの速射性はなかった。逃げるのに徹していれば避けるのは然程難しくないだろう。

左手の石柱に向かって疾走し、ニルファナの視界から逃れるべく裏側に回る。その際小細工を弄すことも忘れない。石柱と石柱の細い隙間に、ウインド・ウォール風障壁くを展開。発動する寸前に右にいったと見せ掛けで視界を完全に遮ったところで素早く左に転進した。

炎弾で狙う暇を与えぬよう、視線に晒されぬように石柱の裏から裏へとジグザグに移動。障害物を盾にして時間と距離とを稼ぎ、そろそろ視線に捉えられるだろう、というタイミングで勘を頼りに進路変更。なるべく太陽の方角へ向かうよう意識しつつ。目が眩んで追撃が途切れてくれればしめた物だ。その空白の時間を利用して逃げ切れる、くらい甘い相手であれば嬉しい。希望的観測に縋りたいほど切羽詰っているのは否めなかった。

再び、背後から炎の壁が迫ってくる。後ろから、道端の雑草を燃え散らす音が鳴る。ある程度距離を広げたのが功を奏し、今度は幾分余裕があった。落ち着いて傍らにある岩陰に身を隠す。石柱同士の隙間を炎が通過し、再び進行方向で爆発音が生じた。今度はそれにも動じることなく、先ほどまで取っていた進路を左に15度ほどずらした。肩越しにニルファナの姿が確認できたのを見計らって右手の岩の裏に移動し、それを盾にしつつ彼女の視界に入らない内に今度は左手へ。これを繰り返していればそのうちに振り切れるだろう。

そう確信した直後のことだった。

「>上昇ライズく！」

大分後ろの方から快活な声が響いたが、シユイは足を止めずに突っ走った。言葉の意味合いを理解するには及ばなかったし、どんな攻撃が来たところで避けるしかなさそうだからだ。

だが、一向に攻撃が迫ってくる様子はない。流石に怪訝に思い、足を止めずに後ろを向くと、先ほどまでニルファナの手元にあった巨大火球が高々と宙に上り詰めていく様子が見えた。

何のつもりだ。その疑問が瞬時に、先ほどの岩柱のように融解した。小型の太陽のようなそれは上空から地上へ、シユイの進行方向に向かって槍のような形状をした熱線を、広範囲にばら撒き始めたのだ。

危機を悟り、口が勝手に叫んだが、生存本能が働いたせいだ。視線だけは目まぐるしく動いていた。北西の方角、やや離れた場所に巨大な岩壁を見つけるや否や、そちらに向かって全力疾走する。

斜め上から飛来する炎の槍が地面に、周りの石柱に突き立っている。その周りが熱したフライパンに入れたバターのように溶け落ち、数秒後には橙色の溶岩池に変化する。必死に走るシユイの10メートルほど後方に次々と熱線が突き立てられ、マグマの領域をどんどん広げていく。

着弾音がほんの少しずつ、しかし確実に大きくなってきていた。応じるように、焦燥に駆られたシユイの腕の振りがますます大きくなっていく。このままでは燃やされるを通り越して溶かされるのも時間の問題だ。どっちでもあまり変わらないが、何で自分だけこんな目に遭あわなければならぬのかと思うと言いつつ怒りが込み上げてくる。大体、向こうからはこちらの姿が見えないはずなのに、この攻撃精度の高さは一体何なのだ。

つて、まさか！

それに思い当たったのは僥倖うまいちと言って良かった。シユイは走る速度を殺さぬままに張り巡らしていた魔力の警戒網を一旦解いてみる。すると、炎の槍が地面に刺さる音が嘘のように収まった。展開していた探知魔法を逆に探知して攻撃を仕掛けていたらしい。

膝に手を付き、汗だくになりながら一息付いた。一度足を止めると鎮痛薬の効力が切れたように下半身が痛みと疲労を訴えてきた。心臓の鼓動がやたらと大きく聞こえている。

己の迂闊うかつさに苦笑いが漏れた。相手の魔力を捉えるための魔法を、まさか逆に利用されていたとは。距離をこれだけ取っているからどこか高をくくっていたのだろつが、あれほどの攻撃魔法の使い手であればそれくらい造作もないことなのかも知れない。気付くのがもう少し遅れていればマグマと同化し、はては地面の一部となって空を見続ける羽目になっていただろう。

ちらりと後ろを振り返ると、壮絶な光景がそこにあった。後方に聳そびえていたはずの石柱はその大半が彼女の放った炎によってグズグズに溶かされ、先ほどまで逃げてきた経路はマグマの大河と化していた。真冬にもかかわらず、周囲の景色は炎から発せられる激しい熱によって砂漠の陽炎かげろうのように歪められている。

「はっ、あんなのに追われるなんて、はっ、本当についてないな。」

と、兎にも角にも、これで時間が――

「稼げるほど世の中甘くないんだなー、これが」

踏み出しかけた足がつのめる様に停止する。合いの声が発された方向を恐る恐る見上げ、口が半開きになる。

四階建ての高さくらいはありそうな石柱の天辺てんぺんに、ニルファナが足を投げ出すようにして腰掛けていた。

## 第一章 〓(2)〓(改)

「やつほ。きみ、なかなか頭の回転速いね。その年齢にしてはたいしたものだと思うよ。」

険しい道のりを走ってきた疲労を感じさせないはきはきとした声。自分にひらひらと手を振っているニルファナに、シュイは啞然とするばかりだった。

「そ、そんな、いつの間によじ登ったんだ。ってか、どうやってここまで……。」

まともな取っ掛かりがなさそうな石柱は、一目でよじ登れる類のものではないとわかる。それ以前に、追い付いてくるのが早過ぎる。最後に巨大火球の位置を確認した限りでは、少なくとも200メートル近く距離が開いていた。術者である彼女がその下にいたとすれば、溶岩の河が行く手を遮っている以上、迂回しないでここまで辿り着くことは出来ない、はずだ。

と、そこまで考えて、シュイは彼女が使役していた火球が消失していることによくやく気がついた。先ほどの広範囲攻撃で存在維持に必要な魔力を使い切ったのか。それとも何か他に理由があるのか。状況がよく呑み込めていないシュイに、ニルファナは思わせ振りの返答をする。

「それはまだ秘密。先に解答を言っちゃったら面白くないでしょ？」

「おもっ　って、人を殺しかけてその言い草は何なのさ！」

「大丈夫、大丈夫。まだまだ元気あるじゃない」

元気がもう少し足りなかったら危うく溶けているところだ。シュイは噛み合わない会話に苛立ちを募らせた。

背後では溶岩の表面が冬場の寒気で早くも固まり始めていた。自

分もその一部になっていたかも知れないと思うと心底ぞつとする。細かく震えている身体を諫めようと、シユイはニルファナから目を離さずに大きく深呼吸した。

「あんた、シルフィールのニルファナ・ハーベル、だよな」

ニルファナは自分のことを知られていたことに驚くでもなく、そうだね、と返した。

「世情に疎い僕でも耳にしたことのあるような大物が、こんなチンケな賞金首に絡んでくるのは光栄だけどさ。なんていうか、場違いじゃないかな」

そう、至極当然のことながら、賞金首に追われているシユイには賞金が懸けられている。生殺与奪などの細かい規定がどうなっているかまでは知らなかったが、13の子どもにしては場違いな金額が設定されているのは確かだ。

だが、それにしても、である。自分が知っているほどの上級傭兵が狙う獲物にしては 自分で認めるのも少し悲しいが 小物過ぎるのではないかとも思うのだ。クジラがイワシやアジを一匹食べるところで満腹にはならないだろう。

そして、シユイの指摘が多分に凶星だったのか、ニルファナはばつが悪そうに指先で頬を弄り始めた。

「いやー、こちらにもものつびきならない事情つてものがあつてだね。非常に言いづらいことではあるんだけど、実は依頼料の振り込まれる銀行口座の証書をどこかで落としちゃつて。平たくいうと手持ちのお金がないの。ま、使われる心配はない、っていうか、私の名前を見ればその勇氣も湧かないと思うけど、最近寒いから野宿はちょっとねえ。入っている額が額だから再発行も簡単にはいかないし」

聞いてもない事情をべらべらと話されているうちに、シユイのこめかみの辺りが引きつり始めた。

「だから、うん、用と言うほどの用はない！ ……んだけど、ほら。おあつらえ向きに、きみが通りかかったもんだからさ。自慢じゃな

いけれどお姉さん、記憶力は良いんだ。懸賞金、それなりに高かったよね」

どこか偉そうに胸を張るニルファナを前にして、シュイは頬をひくひくと痙攣けいれんさせていた。確かに、これまでも賞金目当てに近づいてきたやつは何人もいる。単なる金欲しさの、自分も賞金首としてやっていけそうな人相の者が大半で、依頼人の仇討ちだと息巻く暑苦しい男も少しはいた。

だが、彼女の場合は彼らと明らかに事情が違う。賞金が必要になった理由はそもそも彼女自身の不始末が発端。なのに、目に入った喫茶店にとりあえず入るう動的な緊張感のなさ。その場凌ぎのために命を脅かされている自分が、なんだか物凄く不憫ではないか。

沸々と、それこそマグマのように怒りが煮え滾たぎってくるのがわかった。そんな理不尽な理由で殺されてたまるものか。大体、寒さが気になるって言うなら今しがたアンタの出していた火の球で温まっていればいいのではないか。

先ほどの波状攻撃を思うと流石に心が折れそうになるが、自分の命をいい宿に泊まるための軍資金にされてはたまらない。絶対に逃げ切ってやる。そう自分を奮い立たせる。

「生憎だけど、僕にも色々事情があってね、そう簡単に捕まるわけにはいかないんだ。悪いけれど見逃してくれないかな。お互い、もっと有効な時間の使い道を考えようよ」

精一杯虚勢を張るシュイに、ニルファナはどこか愉しそうに目を細めた。

「ホント口が減らないねえ。でもそういう小賢しさって、お姉さん好きだよ」

好きとかいう台詞にいちいち反応する自分の心臓に嫌気が刺す。

今が命の危機ということを知っているのだろうか、こいつは。

「……宿代が欲しいんでしょ。ちょっと待ってて、それくらいのお金なら出すから」

おもむろにシユイがポケットに手を突っ込み、ごそごそと中を弄り始める。指先に触れたそれをしっかりと掴むと、手首を捻って角度をポケットの中で調整する。

「ん、何やら良からぬ事を考えてそうだね」

視線だけを忙しくあちこちに向けているシユイを見て、ニルファナが再び手を掲げる。それを見計らい、シユイはおもむろに掴んでいた物を取り出した。

「わっ、ちよっ、眩しっ！」

左手に取り出したのは尾行を確認するために携帯していた小さな手鏡だ。鏡面を日の光に翳し、ニルファナの顔に反射させる。掲げられていた彼女の手が無意識的に光を遮ろうと顔に向かうのを目に留め

「  
> 集束する雷ライトニング・ボルトく！」

間髪入れず、シユイは空いている右手をニルファナの方へと向け、魔法詠唱。速射性を考えれば雷魔法が最善の選択。狙いは大雑把だったがドンピシャだった。手の平から発生した青白い雷が指先で密集して束となり、彼女の顔辺りに直進する。

「うわっつと！」

予想外の反撃にニルファナが慌てて後ろに仰け反った。青い雷は先ほどまで彼女の顔があった場所を通過し、空へと消えてゆく。命中こそしなかったがそれも織り込み済みだ。狭い石柱の天辺でバランスを崩した彼女は、踏み止まれずに奥の方へと落下した。

今しかない！

ニルファナの姿が悲鳴と共に見えなくなるや否や、シユイはすぐさま反対方向に転進し、岩から岩へと飛び移っていく。50メートル足らず進んだ所で理想的な隠れ場所を発見。乾燥した地盤の裂け目に疾走する。

上から覗き込んでみると底は4メートル程度でそれほど深くはない。シユイは急いで地面の淵に手をかけ、飛び降りて身を隠した。

見つからなかっただろうか。逸る鼓動を抑えつつ、音をなるべく立てぬよう息を整える。不意打ち、しかも女性の顔を狙ったことに對しては後ろめたさもあつたが、あれくらいでどうにかなる相手ではないはずだ。

ほどなくして、予想通りに元気いっぱいの声が辺りに響き渡った。

「ちょっとこらー！ どこにいるのさー！ いきなり、それも顔狙うなんて酷くなーいー？ お姉さんだつてか弱い女の子なだけだなー！ もー、聞いてるんでしょー？ 大人しく出てきて謝れば、許してあげなくもー」

遠くから発されるニルファナの、少しいじけたような抗議の声を聞き、シユイはしめしめとほくそ笑んだ。岩も分厚いから先ほどの魔法が使われたとしても貫通は防げるだろう。発生した溶岩が垂れ落ちてくるくらいのことはあるかも知れないが。

さてと、今の内にここから離れよう。

どうやら岩の裂け目はかなり奥の方、都合のいいことに、ニルファナとは逆の方角に続いているようだ。地表にさえ出なければ見つける可能性は低いだろう。

少なくとも、その考え方は決して間違っていないかつたし最善も尽



くしていたはずだった。唯一誤算があったとすれば

「あくまで出て来るつもりなしか。……ふーん、あっそう。よし、よおし、そっちがその気ならお姉さんも本気出しちゃうからねー！後悔しても知らないよー！」

声を張り上げるニルファナの脅し文句も安全を確保出来た今ではどこか可愛らしく聞こえた。本気と言う言葉には正直ギクつとしたが、即座に自分の脳がそれを否定してくれた。いやいやあなた、よく考えてご覧なさいよ。有り得ないですから。さっきのですら本当に同じ人間かと疑ったくらいですし、と。

「この辺りにいるなら、あのおっきい岩壁が見えるよねー！」

どれどれ、とシユイは律義に足場になりそうな岩に乗り、顔を半分だけ出して辺りを見回した。その間、遠くに豆粒ほどのニルファナを発見。そして、ニルファナとほぼ真逆の方向には、なるほど、確かに巨大な岩壁があった。正に、これから逃げようと思っていた方角に。

「今から、私の足元からあそこまでを更地にしまーす！」

更地とは、手が加えられておらず、何の用途にもあてられていない土地。もしくは、建築物などがなく、宅地として使うことができる土地。

ばっ、出来るわけない、よな？

くだらない脅し文句を鼻で笑おうとするも、末尾に疑問符が付き纏うのは何故だろうか。やはりさっきの出来事が尾を引いているのだろう。今いる場所が、ニルファナの宣言した攻撃範囲内につき入り入っている。それを意識してしまい、身体の中から来る震えを止

めることが出来なくなる。

い、いや、でもまだ距離はあるし。

先ほどの>鋼穿つ焰の戟ランス・オウ・サラマンドラルに準じる系統であれば、しらみつぶしにせねばならぬ分時間がかかる。

と、対応に逡巡している最中、「じゃあ、いつくよー!」という力強い宣言が鼓膜を震わせた。

>星を司りし女神よ 内に秘めたる炎を解放せよ<

詠唱が耳に纏わり付き、体が小刻みに震え出した。続けて、震えているのは自分でないことに気づく。大地の方が震えていた。瞬間、体温が一段と低くなった気がした。ハツタリじゃない。発動の前兆を確信したシュイがすぐさま岩場をよじ登ろうとする。

>罪深き者たちを羨み 壊劫えいこうへと導く<

「ちよつ、待った!」

「お?」

即座に岩の裂け目から飛び出すとシュイが、脇目も振らずに目一杯声を張り上げた。遠くにいたニルファナの目にも姿が確認できたのだろう。直ぐに茫々とした声が返ってきた。

「おお、出てきた。良かったねー、命拾いしたねー」

「か、軽かろつ! 他人事たにじだと思って……。いくらなんでもそれは非道ひどうい! 封呪ほうじゆまで使われるほど恨みを買った覚えはないよ!」

シュイが真っ赤な顔で非難している間に、ニルファナがその場から高々と跳躍し シュイの10メートル程手前にふわりと着地した。距離に換算して100メートル以上を軽々と。それを間近で見つ初め

て、シユイは彼女が空を飛べるのだということを理解した。

「へえ、きみって存外博識だね。この魔法って存在すること自体、そんなに知られていないはずなんだけど」

興味深そうに眉を上げたニルファナが口ずさんだのは、封呪と呼ばれる魔法の一つ、> 妬き尽くす女神の情炎シエラス・イン・アルマティラの詠唱。300年ほど前に勃発した世界大戦、ジュアナ戦役で数度使われたという根も葉もない噂があるが、公式の記録には残されていない。天災的な破壊力故に存在自体を秘匿とされ、禁書 威力の凄まじさ、はたまた非人道的な効果をもたらず魔法が記載されており、各国が閲覧者を限定している書物 から削除されており、一部の高名な魔道士にのみ口伝で引き継がれていると言われている。

そんな限りなく伝説に近い魔法を自分一人に対してお披露目するのは如何なものか。恐れ多くて涙が出る。それでもって涙ごと蒸発するだろう。

何か言いたげに睨みつけてくるシユイを見て、ニルファナは何を勘違いしたのか、見当違いの提案を持ちかける。

「じゃあさじゃあさ、ちょっとランクを落とそうか。君が逃げ切れるか否かのぎりぎりの線を模索して」

前提からして間違っている。というより、いつの間にか趣旨までが変えられている。おい、賞金とか宿代の話はどこいった。って、思い出されたらそれはそれで困るのだけだ。

「アンタは鬼か！ ……じゃなくて、もっと平和的に解決しよう。その、自然に優しくない」

これは、あながち逃げ台詞というわけでもない。もし先ほどの魔法を使われればほぼ間違いない、この近辺一帯は数十年に渡って荒

野と化するだろう。だが、身を隠せる場所に住まう動物、水はけのよい火山地帯に生息する植物もたくさんいるはずだ。いわゆる余所者である自分たちとばっちりで生き物が死に絶えれば気分もすこぶる良くない。

「あらあら、人殺しとは思えない台詞が飛び出した」

人殺し。あつけらかなとした物言いに、しかしシユイは傷口を押されたように呻いた。

「……元々賞金だけが目当てなんだし、僕の罪状なんか関係ないでしょ。大体、アンタほどの傭兵なら名乗るだけで泊めて貰える場所だって、信用借りだって出来るはずだ。僕にそうまで拘る理由なんてない、違うか」

シユイの問いかけに、ニルファナは腕を組んで考え込む。

「ま、目的が変わりつつあるのは否定しない。お姉さんが後付けの動機っていうのも結構珍しいからね。きみに拘る理由は、そう、探究心ってやつかな？ 宿代は、欲しくなくもないけど、どっちかって言えばおまけだね」

「探究？」

訝るシユイを見て、ニルファナは薄く笑う。妖艶でいて、迫力を感じさせる笑みだ。

「きみが本当にやらかしたことに興味が出てきた。禁断の知識をどこで知ったのかも含めて、教えてくれないかな？」

全身の毛がざわめいた。過去の映像がモノトーンで脳裏に再生され、感情が熱されていく。

シユイは深く息をつき、逡巡の末に両手を胸元で交差させた。

「出来ない相談だ。仕方ない、これだけは、絶対にやりたくなかつ

「ただ」

「ん、なにに？ まだ何か奥の手があるの？」

ニルファナが興味津々と言った様子で顔を突き出した。その何気ない所作が妙に憎たらしく、今度は違う種の怒りが点火する。

僕の本当の力はこんなものじゃない。絶対にギャフンと言わせてやる。

大地を力強く踏みしめ、砂利と靴底が耳障りな音を奏でると同時に、シュイが伏せていた顔を昂然と上げる。何かを決意したような眼差しに、ニルファナの顔から笑みが消えた。

「こちとら、目的も果たさずにこんな所でやられる訳にはいかないんだよ。身に降りかかる火の粉は……払わせてもらう！」

ニルファナに気絶させられる五分ほど前に、今思うと五分ももっていたか自信がないのだが、自分が口にした恥ずかしい台詞をシュイは思い返していた。あの記憶は人生最大の汚点の一つ、俗に言う黒歴史というやつだ。あの日、新たに知った二つの真実。世界は本当に広くて、過ぎた背伸びは災いしか招かない。

『身に降りかかる火の粉は……あれあれ？ ねえねえシューイー、その後なんて言ってたっけ？』

このように、今でも何かしら気に食わないことがあると、彼女はさり気なく蒸し返す。そうなったら最後、熟れた林檎のようになりつつ、しなびたナスのように身を縮めつつ、彼女の気が済むまで羞うち

恥に堪え続けなければならない。そこまで出てきて忘れてはいるはずもないのに、本当に罪な人である。

> 全く会話もしてないのにいきなり頭を下げたらおかしいよ。自立つ真似は控えてね<

罪なニルファナがチツチと指を振り、シユイは殴られた額を抑えながら念話で詫びた。傍から見れば、いかにも怪しい黒ずくめの彼が無抵抗で美女にしばかれているという、なかなか物珍しい光景かえって周囲の注目を浴びてしまっていた。

そして、そのことが良くも悪くも尾を引くことになるのを、今のシユイは知る由もなかった。

大きな掲示板の脇を通り過ぎ、二人は入り口からほど近い場所にある受付カウンターに向かう。依頼窓口に座って書類整理をしていた若い男性が、二人に気づいてやや遠目から会釈をした。

「いらつしゃいませ、お客……様？」

ニルファナの姿を見て男は驚愕し、すぐさま椅子から立ち上がった。ピシッと真っ直ぐに伸びた背筋は、どちらかと言えば正規兵の格好を思わせる。

「おひさー、フランコ。今日は受付やつてるんだね、珍しい」

「ハ、ハーベル様！ ご、御無沙汰しております！」

いつも通りの軽さでひらひらと手を振るニルファナに、フランコと呼ばれた男は姿勢を崩そうとしない。どうやら旧知の間柄なのだろう。ハーベルはニルファナの名字であるが、シユイは名前で呼ぶことを赦ゆるされていた。

「きゅ、今日は何の御用でしょうか？」

いきなり噛んだところから察するにかなり動揺しているようだ。きっと彼も、彼女の暴力の餌食になったことがあるのだろう。シユイは初見の、自分と同じ黒髪の男に対してなんとなしに親近感を覚え、ついで一緒に居残りさせられているのにも似た連帯感を抱いた。

「まーまー、そう硬くならないでもいいよ。今日、用があるのはこっちの彼なんだ。」

ニルファナはシユイの方に手をかざした。フランコが釣られて視線を移す。

「えっと……」

フランコは紹介されたシユイを下から上まで観察し、予想通り怪訝そうな表情を浮かべた。どうやら、彼の記憶にはこんなに怪しい黒ずくめの知り合いはいないようだった。ちなみに自分にもいないのであるからして、彼を責めることはもちろんできない。

二人の間に流れる、初めてお見合いする男女のようなもじもじした空気を察知したのか、ニルファナは助け船を同時に出した。

「いやいや、君個人に用があるわけじゃなくてだね。彼は、えーつと、あ、そうそう、シユイ……で良かったよね？ うん、そーだよね。　　なんだけど、ここの傭兵になりたいんだって」

ニルファナは多少危なっかしい説明を披露し、シユイの心を不安で波立たせた。

「……ああ！　そういう事でしたか」

それでもフランコは納得できたのか、相槌を打った。些ち細こなことを気にしない辺り、意外と器が大きいのかも知れない。

「畏まりました。えー、エルクンド様……ですね。試験の方は七月の下旬にやる予定ですのでまずは申し込みをしていただく必要があります。その際には近場の　　」

「　　ちよっと待った。Dランクからじゃなくて、Cランクからにして欲しいんだけど」

説明を一時停止したフランコが再びニルファナに視線を戻した。「  
「ということは……、どなたかのご紹介ですか？」  
「そ、ここにちゃんと署名もあるよ。確認して」

ニルファナがスカートのサイドポケットに手を突っ込み、筒型の書簡箱を取り出した。差し出されたそれを丁寧に受け取り、フランコが書簡箱の蓋を開け、中身を覗き込む。

箱の後ろをトントンと叩いた末に出てきたのは、一枚の額付きの羊皮紙だった。右上にはシルフィールのシンボルマーク、旋風の印が捺おされていた。細い弧が三つ、螺旋を象る様に描かれている。

#### 推薦書

シルフィール・マスター  
ラミエル・エスチュード殿

この度、私ニルファナ・ハーベルは、以下の者を当ギルドのクラ  
ンク傭兵として推挙いたします。何卒、御選考の件、よろしくお願  
い申し上げます。

シユイ・エルクンド 二十歳 特性分類・チャンター

シルフィール・ランカー No.6 ニルファナ・ハーベル

1567年 6月29日(月)

「なんとっ、ハーベル様ご本人の推薦でっ？」



フランコがすつとんきょうな声を上げ、館内に響き渡った声に反応したのか、周囲にあった疎まはらな目が一斉にこちらへと向きを変えた。

何でこんなに驚いているのだろうか。シユイは周りをチラチラと見ながら不安げに成り行きを見守っている。

「そそ、お姉さんの一押し。能力だけならBでも充分いけそうな気がするけど、彼、小さいギルドでしか働いた事ないから、念のためね」

につこりと笑うニルファナには微塵の胡散臭さも感じられない。何て自然なのだろうか。自分も早くこんな嘘が咄嗟に付ける大人になりたい。ニルファナの流暢じゅうちやうな語り口にシユイは後ろ向きに傾倒するばかりだった。

「なるほど……ふむ、畏まりました、それでは人事担当者に引き継ぎますので、こちらへどうぞ」

フランコはそう言うと、二人を案内するべく先を歩きだした。

「ありがとう。シユイ、行くよー」

「わ、わかった」

なんだかトントン拍子に話が進んでいく。世間一般に言われているコネって、案外こういうものなのだろうか。

シユイは社会の裏街道に行く背徳感を噛み締めながら二人に付いていった。

フランコに誘われて、受付の脇にある細い通路を奥へと進んでいく。ほどなく右手にある段差の大きい階段を上がり、折り返しの階段をまた上がる。昇り終えると、そこは丁字路になっていて、真正面には部屋があった。銀色のノブが付いた木製ドアの上に付けられているプレートには「応接室」と書かれている。

「こちらでございます。直ぐに担当の者を呼んで参りますので、どうぞ座ってお待ちください」

そう言いながらもフランコはポケットに手をつ突っ込み、ゴソゴソと探っている。ややあつて、部屋の鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。遅れてカチャリと音が響き、ドアが開いた。

「シユイ、いくよ」

招き入れるべくドアノブを持ったままのフランコの横を、ニルフアナがすつと通り過ぎる。シユイはドアを開いてくれているフランコに軽く会釈してから、その後が続いた。

部屋に入って、まず目に飛び込んできたのは薄ピンク色の花柄のカーテン。その隙間からは日差しが差し込んでいる。中央部分だけガラス透しになっている四角いテーブルの周りには黒革の客椅子が4つ、規則正しく並んでいた。

後ろでパタンとドアが閉まる音が聞こえると、ニルフアナは椅子の方に向かった。

「さつ、座つていよう」

それを合図に、二人は椅子に腰を下ろした。クッションが柔らか過ぎて予想よりも尻が深く沈み、シユイが慌てて脚をバタつかせたふと顔を上げると、ニルフアナがニヤニヤ笑いを隠さずにそれを眺めている。また一つ弱みを握られてしまったらどうか。顔が熱を帯びるのを感じ、フードで顔が隠れていることに感謝する。

立ち直ったところで、先ほど気になったことを一つ訊ねてみる。

「ニルフアナさん。何でぼ……俺、二十歳なの？」

「ああ、そのことね。説明するまでもないと思っていたんだけど、酒場での情報収集は傭兵の基本なんだ。どの国でもお酒の飲める年齢じゃないと色々不都合なこともあるし。ああ、別に飲めって言うてるわけじゃないからね。若い時から飲んでばかりいると脳が成長し

ないし、飲むにしても程ほどに。それから、年齢が低いと何を  
にしても色々目立つちゃうから。そう、どこかのお姫様みたいだね」  
「……お姫様？　なんで、高貴な方が傭兵なんか」

「あつれ、もしかして本当に知らない？　知名度だけなら私にも劣  
らないと思うけど。ま、いつか。いずれは絶対耳にすると  
さておき、二十歳くらいなら君くらいの実力者もわんさかいるけど  
十三歳、ああ、この間十四になったんだっけ？　まあそれはともか  
く、万が一にも君の正体を勘繰られるわけにはいかないから、埋め  
られる穴は埋めておいた方がいいのだよ」

「う、確かに……」

シユイはニルファナの配慮に感謝しつつ、自分の頭がそこまで回  
らなかつたことを猛省した。

少ししてドアノブが回る音が聞こえた。二人が揃ってそちらに視  
線を送ると、黒扶持の眼鏡をかけた、きつい印象を与えそうなツリ  
目の女性が部屋に入ってくるのが見えた。

パリツとした赤紫のスーツをそつなく着こなし、きつく締められ  
たベルトで腰のくびれを強調している。蝶を模したピンで纏められ  
ている艶やかな黒髪は如何にも知性漂う大人の女性、といった印象  
を醸し出している。年の頃はニルファナとそう変わらないだろう。

「お待たせしました。ニルファナ・ハーベル」

身なりだけでなく、声までも落ち着いたその女性は視線を下げ、  
ニルファナに丁寧に会釈をした。

「あら。デイジーじゃない、久しぶりー」

ニルファナが会釈を返し、シユイも続いてぺこりと頭を下げる。  
「もしかして、デイジーが直接見てくれるの？」

ニルファナが少し意外そうに尋ねた。

「ええ、あいにく人事担当の者が不在でして。下で今日の空きつぷ  
りを見ましたでしょう？　あまりにも暇なので、最寄りのギルドに

三日ほどお手伝いにいつていまして」

デイジーは口に手を当てて苦笑した。

「そっか。じゃあ宜しくね。シユイ、こちらデイジー。デイジー・マクレガーだよ。私と同じランカーで同期。この支部の一切を取り仕切っているの。先々お世話になるから覚えておいてね」

ニルファナはシユイの方を向いて紹介した。

「初めまして、マクレガーさん。シユイ・エルクンドです。宜しくお願ひします」

シユイは立ち上がり、改めて頭を下げる。

「ほう、あなたがニルファナの……、ふむ、興味深いですね」

デイジーはそう言つと、おもむろに、シユイを舐め回すように観察し始めた。

「どう？ デイジー、いけそう？」

「ちよつと……待ってください、ね。……おお、これは、……猛々しい」

な、なんだなんだ。

ぐるぐると、上から下から、自分を舐め回すように見つめるデイジーに、シユイは体中を無数の昆虫が何かに這い回られているような気持ち悪さを感じた。

「デイジー……、君、まさか……」

ニルファナも、やっとデイジーの様子がおかしいことに気づいたようだ。だが、何の心当たりがあるかまでは読み取れなかった。

「……いえ……いえ、……そんなことは、……おっほう！」

唐突に奇声を発したデイジーに、シユイの身体がビクツと反応する。勝手に興奮し、顔を赤らめているデイジーに対し、ニルファナはやれやれと、諦めたように首を振った。

「あ、あの……？」

数分が経過したところで、いよいよ我慢しきれなくなったシュイが、躊躇ためらいがちに、デイジーに話しかける。

「問題ありません。磨けば光る。打てば響く。触れれば反応する。素晴らしい素材です」

やっとデイジーはそう言って、眼鏡のズレを指先で持ち上げながら立ち上がる。

「おおっ、やったね。これで晴れてシルフィールの一員だよ。シュイ、おめでとう」

ニルファナはそう言って手を差し出した。

「え、これで終わりなの？」と言いたげなシュイは、ややあつてニルファナのじと目に気づき、慌てて差し出された手を握り返す。

「……あ、ありがとう、ニルファナさん」

手から伝わる温かさがなんともこそばゆかった。傭兵になったという実感はついぞわかかなかったものの、とにかく試験に合格はしたのだ。とりあえず、推薦者の顔に泥を塗らずに済み、安堵感に襲われた。

「ただ……」

遠慮がちな声に反応し、二人は握手したままデイジーを見る。

「正式に受理されるのは、おそらく明後日以降になるかと」

「ん？ ……あー、そっか。一回本部に推薦書を送るんだっけ」

うつかりしていた、とばかりにニルファナは握手を解き、頭をポリポリ搔いた。シュイは不安げに首を傾げる。

「えっと、僕はどうすればいいのかな？」

「認定書が届くまでには数日かかります。幸い今日は月曜日ですし、週末までには何とか間に合うでしょう。それまで町内観光でもなさつたら如何でしょうか。ホーヴィは小さな港町ですが空気は良いですし、冬場の貴族のリゾート地としても有名ですから。それと、山

側にいけば景観の良いポイントもたくさんありますよ」

ニルファナは少しの間考えていたようだが、おもむろに立ち上がるとシユイに向き直る。

「じゃあ、シユイはそうして。私は明日、南の方に用があるんだ」

「南って？」

「フォルストローム」

「フォル　　明日!？」

思わずニルファナに訊き返した。フォルストロームはセーニアの南方に位置する大国だ。今いる港町のホーヴィイから見て南南西に位置するが、少なく見積もったところで国境まで1000kmほどの距離がある。

「相変わらずお忙しいですね。お気をつけて」

シユイの懸念を意に介す様子もなく、デイジーはニルファナに別れの挨拶をする。

「あいあい。デイジー、シユイのことよろしく頼むね。それじゃあシユイ、今の内に色々と準備しておくんだよ。修練も怠らないようにね」

シユイの肩をポンポンと叩いてから、ニルファナは部屋のカーテンを開け、ボタンと窓を開け放つ。カーテンがバタバタと海風になびき、潮の香りを部屋に招き入れるや否や、彼女は鳥の如く青空へと舞い上がり、啞然としているシユイを置き去りにして南の方角へと飛び去っていった。

固まっていたシユイが、遠くで翻ったスカートから目を背けた。

「……スカート穿いてるのに、何で平気でそういうことしちゃうかなあ」

きまり悪そうな呟きに、デイジーは「それは盲点でした。ところで、何色でしたか？」と返した。シユイはまず「見えませんでした」と言い、それから「見ようとしたわけでもないですけど」と顔を赤らめるのだった。

## 第一章 〓(3)〓(改)

「うーん、物はよさそうだけど、とりあえず保留かな」

そんなことを呟きながら、シユイは持っていた幅広の剣を鞘に納め、そつと柵に戻した。

おおよそ六十平方メートルのスペースには、多種多様な武器が所狭しとばかりに置いてあった。中には、どのように使うのかピンとこないような物もある。

なめし革の匂いが充満する薄暗い店内には、数人の客が見受けられた。値札を見るだけで手に取るうともせず、ポケットに手をつ込んでいるのは明らかで冷やかし。その隣には、まるで恋人の頬を撫でるかのように武器を触り、うっとりとした表情を浮かべている怪しげな女がいる。柵越しに、客と店員との値段交渉が聞こえてきた。「あちらの店では」と言うのは交渉の常套句だ。

傭兵審査から四日後。港町ホーヴィに滞在していたシユイは、宿泊しているホテルからほど近いところにある武器屋にいた。傭兵業をやっていく上で、これから長く世話になるだろう武器を探しにきていたのだ。

武器は古今東西、様々なものが生み出され、そして進化してきた。狩猟道具、農耕具、戦道具、魔法道具、調理道具、はては医療道具から派生した物まである。狩猟道具であれば獲物を仕留める弓矢や投げ槍。農耕具であれば木を切り倒す斧、草を刈る鎌といった具合に。それは他者を傷つけるための物であり、威嚇によって危険を遠ざけ、結果として本人の身を守るための物。

戦道具や魔法道具は言わずもがなであるが、調理道具や医療道具と効くと首を捻りたくなる者もいるかもしれない。けれども、大半の家に存在する果物ナイフや鋏。氷を砕くためのアイスピックは、持



ついてもさほど怪しまれない上に、手に入れやすいという長所がある。それゆえに、古の時代からたびたび暗殺に用いられてきた。医療道具に至っては薬や毒劇物。注射器やギブスなどの、拷問にも使えそうなものが一通り揃っている。これらも狭義の中に十分当て嵌まるだろう。

その中から一つないし二つを選ぶのは大変な作業だ。射程、長さ、大きさ、重量、威力、そして形状。様々な要素と使用状況。何より使いこなす自分の技量と相談し、慎重に選ばなくてはならない。傭兵にとって武器とは、自分の命を預ける相棒と言って良い物なのだ。ギルド入会の申請をする以前に、シユイはニルファナから三ヶ月間みっちり鍛えられた。ただし、その割り振りは基礎体力と魔力の底上げ。あとは念話の訓練と、物質に魔力を付与する速度の向上という地味な訓練に終始している。

元々、素手での戦い方は多少心得ていたが、武器の扱いに関しては経験がなかった。全くの素人と言って差し支えない状態だ。ともすればニルファナは、下手に適当な武器を扱わせることで、変な影響が出てしまうのを避けたかったのかも知れない。

自分にあつた武器を見つけるのは、傭兵の第一歩。そんな彼女の言葉を思い出しながら、シユイはきよるきよると商品を物色する。気に入った武器を選べば良いとのことだったが、その種類の多さには戸惑いを隠せなかった。細剣、長槍、手斧、片手弓、両手弓。腕防具を兼ねた爪のような物も。金属製の鞭などは、ディジーやニルファナにはいかにも似合いそうであるが、黒ずくめの男が使っているのは色々と怪しすぎる。こんな格好をしておいてなんだが、好き好んで世間様の注目を浴びようとは思わない。

武器屋に入るまでは、漠然とどんな武器が便利か考えていただけだった。だが、武器の種類を絞ったところで形や大きさ、使われている金属等、選択肢は幅広い。

あつちにいったりこっちにきたり。値札を見、0の数を見て溜息

をついたり。迷うのにも飽きてくると、オーソドックスに剣と盾にするか、と大衆的な価値観に流され始める。

ところが、剣の売り場に戻ろうとする時、一つ変わった武器が目にと留まった。

あれ？ 鎌かな。

先ほど通ったときは気づかなかったが、斧や槍が並んでいる棚の裏側に、大きな鎌が立てかけてあるのが見えた。かなり埃ほこを被っていることから察するに、随分長い間買手がついていないようだ。どれどれ、と値段を覗き込むと、何度か二重線を引いて書き直された跡があった。デザインも悪くはないし、周りの大物に比べれば4割ほど安い。ただ、相当重そうなのが玉に瑕だ。まだ体が出来ておらず、腕力にそれほど自信のない自分には、いかにも扱いにくそうだった。

さて、と視線を外し、他の物を見回ろうと歩き出そうとした時だった。

「いらっしやいませ、お客様！」

突然の声に驚き振り向くと、少し頭の薄い、愛想の良さそうな中年の男がニコニコ顔でこちらを見ていた。着ているスーツは如何にも高級そうで、しかしはち切れんばかりにピッチリとしている。留められているボタンがキィキィと悲鳴を上げ、今にも弾け飛ぶんじゃないかと心配になるくらいに。

店主と思しき男は、十年来の友人に出会ったように両手を広げる。ついでにいうと、それだけで第三ボタンが飛んだ。床に転がった白いボタンに一瞬店主の目が泳いだ。次にはすぐにこちらを見て手を揉み始めた。こいつは、プロだ。

「いや、流石ですな、お眼が高いですなあ！ そちらの大鎌は当店でも非常に人気の品で、仕入れてもすぐに売切れてしまうのですよ

！ いや、たまたま入荷した次の日にご来店なさるとは、真に運がよいお客様だ！」

早々と前言撤回。身振り手振りを交えて捲くし立てている店主に、馬鹿にするなど言わんばかりの侮蔑の視線を投げつけざるを得ない。回転率の速い売れ筋商品が埃塗れになる道理はない。いつそ小一時間説教してやろうという考えが浮かんだが、時間を無為に過ごすのも気がひける。肩を竦め、何も言わずに出口に向かおうとすると、店主が脇から慌てて食い下がった。妙だ。自分と棚の間に店主の巨体が入るスペースがあつたとも思えない。商人魂は空間をも超越するのだろうか。

くだらぬことをシユイが真剣に考え始める最中も、店主の説明がつつらと続く。

「せ、性能自体は本当に良いんですよ！ ホントにホント！ 見た目よりずっと軽いですし強度も折り紙つき！ 何よりコレ、お客様のコーディネートにぴったりマッチするんじゃないですか？」

「……コーディネート、ね」

たとえそれが真実であつても、店主の必死さがかえって嘘っぽく見せる。この店の経営状態が心配になつてくるほどだ。物が悪くないのに売れないのは、その店の店員の接客力不足に尽きる。今こうして話を聞いていても不良在庫を吐き出そうといった魂胆だけが透けて見え、どうにも気が乗らない。

そもそも、コーディネートのために黒い衣を纏っているわけではない。顔を隠すのは当然として、黒色の服は体型のラインを隠せる。ひいては年齢を悟られにくいし、夜の闇に紛れるのにも都合がいい。身元を隠す必要がなければこの暑い時節、あえて長袖のローブを着ようとは思わない。

と、ここまでぼる糞に言っておいてなんだが、自分を別人と印象付ける方法、としては悪くない気がするのも確かだ。鎌に黒衣とな

れば、まさに死神のようではないか。少なくとも、元の自分と連想出来る者はいないだろう。

「まあ、そこまで言うならちよつと持たせてもらおうかな」

考えた末に、そう言つて腕を伸ばす。埃を手で払おうとすると、店主が腰に差していた白い鳥の羽で作られた埃取りを差し出した。遠慮なくそれを借り、柄の埃をざつと払い落とす。

少し灰色に汚れた埃取りを店主に返し、鎌の柄に手を掛け、試しに持ち上げてみて、シユイはなるほどとうなずいた。

予想に反して悪くない。長さは5尺程と標準的な武器より長めだが、斧よりも金属部分が薄い分かなり軽い。しかも店主の言つていた通り、それなりに良い金属で出来ているようだ。おぼろげながら魔力を帯びているのが、指先からも感じられる。魔力を帯びた金属は得てして耐熱、耐電性が強く、加工が難しい。それだけに、見た目は粗悪でも高額で取引されることが多いのだ。

ふと、手触りに意識したことで何か彫つてある事に気づく。よくよく見ると、柄には銘らしきものが彫つてある。小指の爪ほどの小さな文字を辿る。どうやら武器の制作者はこの鎌を「砂時計（HOUR GLASS）」と名付けたようだ。なかなか洒落た名前ではある。

そこでシユイは考える。買い手がなかなか付かない、もつと言えば人気がない武器は使用者もそういないはず。対人戦を想定する際、この形状の武器に即対応できる者は少ないかも知れない。それに、一から武技を習得することを鑑みれば、幼い時分から修練する者が多い剣や槍などを扱うより適しているとも考えられる。純粹な技量のぶつかり合いとなれば、極めたものに比べて不利になる。

「どうです、なかなかの物でしょう」と店主は自慢げに胸を張っている。胸を張る暇があったら他の武器にない特性のひとつでも説明して欲しいのだが、というシユイの視線に気づいた様子はない。

ああ、特性で思い出した。一つだけ確認しなきゃな。

どや顔の店主を無視し、シユイは持つている鎌に意識を集中し、指先から柄に魔力を送りつつ祈歌チャントを口ずさむ。鎌刃がぼんやりと光を帯び、鎌刃をくまなく覆ったところで詠唱イントーン。突如として鎌が白み、キンと吃音を響かせた。

「うわっ！」

一瞬にして空気中の水分が鎌の先端に凝縮され、黒い刃が凍りついた。と同時に、店主が仰け反って尻もちをつく。

金属と魔力との親和性、問題なし、と。

金属によつては魔力を受け付けにくい物もあるため、付与チャンターする者ならば武器の素材の確認作業は必須である。無論ニルファナの受け売りだ。

ちゃんと魔力を付与出来ることを確認し、シユイは魔法を解除すると、「もう少しまけてくれないか？」と交渉を開始した。

鎌を丈夫な麻布で包んでもらい、それを背負って外に出る。持つて歩くとなると、やはり重量が気になってくるが、反して厄介な作業を終えたので足取りは軽い。

ラン・ラン・ルン。無意識にスキップを刻むシユイを見て、町の人たちは裸族を見てしまったような何とも言えぬ表情を浮かべ、次には慌てて顔を逸らす。

「ねえママー、あれって」

「み、見ちゃいけませんっ」

そんな会話が囁ささやかれているとも知らず、シユイは腰に両手を添え、弾むような足取りでホテルに向かった。

ホテルのロビーに戻ってくるなり、フロントの女性から声をかけられた。

「さ、304号室にお泊りのエルクンド様でいらっしゃいますね？  
お手紙を預かっております」

シユイのあからさまに怪しい姿を一目見て、少し及び腰になっている黒髪ショートカットの女は、ふるふるすると震える手で手紙を差し出した。

手紙を受け取り、裏返して送り先の欄を確認する。シルフィール本部。待ち望んでいた物が届いたことを確信し、シユイは女に礼を言ってその場を後にした。

「……ふう、怖かったあ」

シユイの姿が通路の奥に消えた後、何かされるんじゃないかといらぬ心配をしていた女は、その場でへなへなと座り込んだ。彼女の後ろ、柱の裏ではホテルマンたちが良くやった、とガッツポーズしている。人に押し付けておいて、と彼女は忌々しげに後ろを睥睨し、それから通路の奥へと視線を戻した。

ちゃんとお礼いつてくれたし、意外としっかりした人みたいね。

後ろから聞こえてくる再度の歓声にいらっとしつつも女は、人は見かけによらないものだ、と独りごちた。

部屋に戻り、布に包まれた新しい相棒を壁に立てかける。身体が軽くなったことを実感する。この重さに慣れるまでには少し時間がかかりそうだ。ベッドの端に腰を下ろし、早速手紙の封を開ける。中には一枚の厚紙が入っていた。

## 通知書

シュイ・エルクンド殿

貴方を当ギルドのCランク傭兵として登録しました。  
今後のご活躍に期待しております。

1567年 7月1日(水)

シルフィール・マスター

ラミエル・エスチュード

Cランク傭兵の登録が完了した旨を伝える通知書。少々味気ない文章ではあるが、何はともあれこれでやっと>シルフィールの傭兵くを名乗れる。ひとつ壁を越えた実感とともに、頭の中で様々な感情が色めき始める。新たな環境へ飛び込む不安と期待。そして、未だ色褪せぬ悲哀と憎悪が交錯する。

シュイは俯き、自分の手を強く握り締めた。いよいよ別人としての人生が、傭兵マインナーとしての人生が始まる。

浮かれてはならない。仲間たちの汚名を晴らすための、ここが出发点なのだから。

翌朝。認証書が届いたらギルドへくるようディジーに言われていたシュイは、ホーヴィのギルド支部に向かっていた。

建物内に入ると、ホールロビーは五日前に彼女と共に訪れたときよりもずっと人が多く、活気に溢れていた。その喧騒けんそうに立ち尽く

していると、人垣を割るようにして黒縁眼鏡をかけた黒髪の女性が彼の方に近づいていった。

「こんにちは、マクレガーさん」

先にシユイが会釈したのを見て、デイジーはたおやかに微笑む。

「いらつしやいませ、シユイ・エルクンド。どうやら認定書が届いたようです」

シユイはうなずきながらもローブの襟を正す。

「ええ、つい昨日に。祝日を跨いでしまっ前に来たのですが」

「何事にも早く対応する。感心な心掛けです。傭兵は能力だけでなく、依頼を達成する期日も重要視されますからね。お越しいただいたのは他でもありません。ギルドのこと、シルフィールのことについて、触りだけですがお教えしておこうと思ひまして」

「本当ですか？ 助かります。何しろ」

ニルファナのむつつり顔が通り、「何から何まで初めてなもので」という言葉を、シユイは辛うじて飲み込んだ。

「何しろ、何ですか？」

一瞬詰まったのが気になったのか、デイジーがその先を促した。

「何しろ、そう、四大ギルドと言われるシルフィールですから、ぼ……俺のいたギルドと色々違うのではないかと思ひまして」

頭に浮かんだ言葉を適当に切り繋いで、なんとかその場を切り抜けようとする。

ギルドとは古い言葉で職業集団のことを指す。傭兵ギルドの他にも商人ギルド、冒険者ギルド、はたまた芸人ギルドなど。いわゆる会社とは立場を異にし、一部思想を共有する者たちが情報や力、人脈を持ち合うことによって、そこに所属する仲間たちがより働きやすい環境を構築する、とえばわかりやすいだろうか。

自主性が尊重されていることもあって 試験に受かるかは別としてだが 束縛を好まぬ者でも入りやすい。気の合う者同士で仕



事をやる者もいれば、孤高を貫く者も、その日の気分次第な者もいる。自分で仕事を探し、新たな人脈を開拓し、更なる仕事を受けられるようにする。そういった背景から、ある程度の実力と自立心がなければ、ギルドに所属したところでやっていくことは難しい。

そして、俗に言う四大ギルドというものがある。世界に存在するフラムハート、シルフィール、アースレイ、ミステイミスト、四つの傭兵ギルドの総称である。雰囲気や規模はそれぞれ異なるが、いずれも大陸に名を馳せた傭兵が複数名所属している有力ギルドだ。

>シルフィールくの発足は約三十年前とニルファナより聞かされている。これは新興ギルドと言って差し支えない歴史の浅さと言っている。代々貿易業、人材派遣業を営んできた商家、エスチュード家の当主が派遣傭兵業にも手を伸ばし、現在のシルフィールの礎を作ったらしい。

それが四大ギルドとまで言われるほどに成長した理由については、エスチュード家の膨大な資産と、貿易業で培ったコネクション、それに代々の当主の辣腕らつわん振りによるものだ、と目されている。それについては、ニルファナもシユイがシルフィールに入る前に触れていた。

『今のうちのマスターは三代目で、エスチュード家のご当主としては二十六代目か。ラミエルって言うんだけど、まあ何というか、商魂逞しい娘なの。傍目には深窓の令嬢って感じなんだけど、この辺りはやっぱり血の成せる業なのかな。うちは他ギルドと比較しても自由な気風だけど、依頼報告や手続き等の取り決めに限って言えば、相当厳しいから注意してね。すっぱかすと最悪除名もありえるし、ランカー、つまりお姉さんクラスの傭兵が送られてくる、って都市伝説もあるから』

要約すると、依頼報告や手続きはちゃんとやれ、ということだろ

う。言われるまでもない。万が一、ニルファナが刺客として送られてきたらどうするのだ。目を閉じればニルファナが燕の如く空を華麗に飛び回りながら爽やかな笑顔振りまきつつ巨大な氷を雨霰あめあられの如く降らせる光景が浮かんでくる。

「そう……ですね」

鼓膜を震わせたデイジーの音が、精神世界で挽肉ミンチにされていたシユイを思考の海から救い上げる。

「基本的なことは、前に貴方がいたというギルドとあまり変わらないと思います。幾つか注意点だけ述べさせていただきます。まず、シルフィールの傭兵は階級がDからSまでのランクに分かれております。Dから始まり、Sが最高位。認定書を見てもご存じの通り、現在貴方はCランクに登録されています」

なるほど、とシユイは相槌を打った。

「そして、シルフィールではAランクの傭兵を総称して>準セミランカー<、Sランクを>ランカー<と呼んでいます。私もその一人ですが、Sランクに該当するのは19人。これはあなたもご存知だと思います」

「ええ、その辺は」

知っていて当然、ニルファナもランカーの一人だ。人当たりが良く、美人で飾らない彼女だが、その外見とかけ離れた強さは嫌と言うほど身に沁みている。

初めて遭遇したときには死ぬ思いをさせられた。彼女から戦闘の手解きを受けた際にも、明らかに手加減されているとわかっているのにコテンパンにのされた。それなりに腕には自信があつた分落胆も大きく、何日もの間へこんだのは記憶に新しい。ニルファナに出会ってからというもの、自負とか経験といった物が片っ端から粉々にされている気がする。

とはいえ、新たな出発をするに当たっては、そういったものは返

って邪魔になるかも知れないので、そこは彼女なりに自分のことを思っただけしく接してくれたのかも知れない。と、そう信じたいところではある。

デイジーは思い悩むシユイを見ながらも話を続ける。

「ちなみに>依頼<、>クエスト<とも言いますが、それは他ギルドと共通でFからSS級という区分けになります。ただし、シルフイルでは傭兵のランクによって受けられる依頼が異なります。F～B級までは誰でも受けられますが、A級はBランク以上、S級はAランク以上、SS級はSランクしか受けることができません。中小ギルドでは制約が設けられていないところもあるとのことですが、我々のギルドでは受諾者の安全面、有為な人材の損失を憂慮し、若干細かく区分されています。また、Bまでの依頼は同時に二つまで受けることが可能ですが、A以上の依頼は一回ずつしか受けられません。これを破ると厳しい罰則がありますし、最悪の場合は永久除名処分になります。ここまではよろしいでしょうか？」

その話と照らし合わせると、現状ではシユイはCランク傭兵なので、B級までの依頼を同時に二つまでしか受けられないという事になる。

「把握しました。えっと、少し気が早いような気もするんですが、A以上の依頼とB以下の依頼は掛け持ちできるのでしょうか？」

「基本的にA以上の重複依頼は避けていただきたいんですが、日程に無理がなければ実力を考慮して認められることもあります。ただ、>緊急クエスト<と>共通クエスト<については例外ですね。今からそちらも説明させていただきます」

「そうなんです、わかりました」

「ではまず、緊急クエストの方から。これはギルドからの依頼で、時に強制力を伴うこともあります。傭兵が依頼を受けていないか、

傭兵が既に受諾している依頼の期限、難易度に差しさわりが無いと判断された場合、こちらから各傭兵に打診します。具体的に言いますと、凶悪な盗賊団や猛獣が町を襲ってきたというパターン。後で説明しますが、救助隊を組んで援護に向かうパターン。それから、他の傭兵が受けていた依頼が何らかの事情で達成できなくなってしまうときに、手の空いている傭兵に引き継ぐパターン。基本的には、この三パターンになります」

「何らかの事情といますと？」

シユイは気になって訊ねた。

「一番多いのは、任務中に死亡。もしくはこっ酷くやられて再起不能になったという理由からですね。シルフィールには優秀な治療術師も何人かいますが、再生不可能な傷がないわけではありませんし」  
さらりと言われ、首筋から嫌な汗が一筋流れるのを感じた。デイジーの軽い口振りからすると、そう言ったことは意外と多いんだぞ、と仄めかしているようにも感じられる。

「続きましては共通クエストです。これは国や町などの公的機関から依頼されるものです。シルフィールに対してだけの依頼ではなく、他ギルドに対しての依頼でもありますので、その分締め切られるのが非常に早い。事によっては、他ギルドの傭兵たちと合同で任務をこなすこともあります。共通クエストは、主要都市の公的な施設、公会堂や公民館などで受けることができます。シルフィール固有の依頼と違ってランク制限はないですが、達成困難なものが多いです。大体の任務なら国軍や自警団で事足りるはず、共通クエストの半分くらいはその手に余るものになるわけですね。報酬は魅力的ですが、失敗すればギルドの信頼を失墜することになりますので罰則規定も設けられています」

つまり、共通クエストはギルドで受け付けている依頼ではなくて、公から直接頼まれる依頼、ということらしい。

「良くわかりました、わかりやすい説明ありがとうございます」

「呑み込みが早くて助かります。では、最後にこちらを渡しておきます」

そう言つて、デイジーは身分証と、赤、青、黄の小さな玉を差し出した。シユイが受け取つて指先で小突いて数えてみる。青い石は十個、黄色い石は三個、赤い石は一個。それぞれがくすんだ光を放っている。指の腹で撫でてみると、何らかの文字が彫られているような感触があつた。

「これは……もしかして、魔石ですか？」

「ええ、魔石の一種で、シルフィールの傭兵が使う通信手段です。これを標準装備にしていることが、うちの一番の特徴かもしれませぬね。ちよつと上を見て頂けますか？」

「え、ええ」

デイジーに促されて天井を見ると、前回見た時と同じように螢火みたいなものが宙を飛び交っていた。やはり淡い青色の物が大多数で、それに少しだけ黄色が混じっている。前は気づかなかつたが、受付の方へ飛んでいる物と、受付から放たれる物、双方向の流れが存在するようだ。

「ああ、もしかして」

「お察しの通りです。シルフィールではこれらの魔石を使うこととでより簡単に、迅速に最寄りのギルドに連絡できるのです。軍にはぼちぼち導入されているところもあるようですが。青い魔石は通常の報告、連絡。黄色い魔石は緊急性、若しくは匿名性の高い報告、連絡。赤い魔石は援護要請で滅多に使う機会がない、というよりも、そうあつて欲しいと望みます」

「基本的に、赤は使つちやいけないってことですか？」

首を傾げるシユイに、デイジーは困つたように笑つた。

「あなた本人か、他の傭兵仲間が命の危険に陥った時にはもちろん使っていただいて構いません。赤い魔石を使いますと最寄りの支部から救助隊が編成され、派遣されるような仕組みになっています。ただし、濫用らんようされては困るのも事実ですけれど。何せ魔石自体支給される数が少ないですし、隊を組むわけですから人手もかかります。そうなるとう当然、ギルド支部の運営にも支障が出てしまうでしょう？　ですから、緊急性が無い時に呼び出したと判断されますと法外な罰金が科せられます。明らかに悪質と見なされた場合には永久除名処分と申していただけいて差し支えありません。尚、石は使い終わりましたらギルド支部の方へ申請していただければ、再度有料で差し上げられます」

確かに、大した用も無く救助隊が呼び出された場合、本当に救助が必要な者たちを救えない場合も考えられる。あくまでも、窮地に陥った時のみの非常手段といったところだろう。

「承知しました、大事に使わせていただきます。お忙しい中、本当にありがとうございますございました」

シユイは丁寧ていねいに頭を下げる。

「いえいえ。では、今日はこの辺で失礼します。あなたの今後の活躍に、期待しています」

説明を終えたデイジーは目を細めて会釈し、再び人垣の中に溶けていった。シユイはもらった身分証と魔石を一瞥し、腰に下げている皮袋の中なかにしまう。指を折ってデイジーの話を再び思い返し、頭に刻み込む。数分かけてその作業を終え、やっと掲示板に向かって歩き始めた。

掲示板の前は、冒険者や戦士、魔法使いの出で立ちをした傭兵た

ちで賑わっていた。その中には「依頼を一緒にやらないか」と募集をかけている者もいる。人ゴミを避け、遠目から覗いて見ると様々な依頼書が貼つてある。依頼書の左上の方に大きく文字が書いてあるのが見て取れた。依頼の級の文字だ。

Ｃランクだと、Ｂ級の依頼まで受けられるんだよな。でもＢつて全然ないなあ。

四日前に依頼書でビッシリだった掲示板は、既に穴だらけだった。どうやら割りの良さそうな依頼書は、他の傭兵に剥がされてしまったらしい。仕方ないので、シュイはＣ級の依頼書の中で報酬の良さそうなのを探し始めた。

お、あれは良さそうだ。

シュイは、人垣の中に割って入り、掲示板に近づいて目を付けた依頼書の詳細をまじまじと見てみる。

Ｃ級任務、フォルストローム領キャノエの町までの馬車護衛、定員三名（残り一名）、報酬１０２万パーズ（達成後即払い）、任務時間六日前後、締め切りまで残り二日。

ひゃく……に!?

シュイの目が点になる。視線が上下左右の依頼書へと向き、元の位置に留まる。他のほとんどのＣ級依頼書に書いてある報酬が大体２０～４０万パーズであることを考えると、相当に割りのいい仕事だ。これを見逃す手はないだろう。シュイは直ぐさまそれを掲示板から剥がすと、軽い足取りで受付に向かった。

「お疲れ様です。依頼の受諾手続きですか？」

カウンターに赴くと、受付の女性が愛想良く話しかけてきた。どうやらギルドの建物内では、黒ずくめの格好もそんなには目立たないようだ。シユイはローブを来ている魔法使いや僧侶たちに人知れず感謝した。

「ああ、これをお願いしたいんですが」

ニルファナの言い付け通り、なるべく硬い言葉で話しながら依頼書を提出する。

「承りました。身分証の確認させていただいて宜しいですか？」

「ああ、わかった」

ついで、皮袋から先程受け取ったばかりの新しい、くすみ一つない身分証を取り出し、受付に見せた。

「シユイ・エルクンド様。はい、結構でございます。依頼の方はエルクンド様で定員一杯となりましたので、あちらの時計花で午後一時に着くよう依頼人をお呼びします。十五分前までにこちらへお越しください。こちらが控えになりますので後ほどお持ちください」

そう言い添えて、受付の女性は依頼書の控えをシユイに手渡した。



## 第一章 ～(4)～(改)

ギルド支部から出てくると、先程まで晴れていたはずの空にはどんよりとした灰色の雲が幅を利かせていた。雲の動きがやたらと早い。青空がどんどん東の方へと追いやられているのがわかる。風も強くなってきたのか、先ほどよりも黒衣の生地が靡いていた。

雨、振ってくるだろうか。などと不安げに空を仰ぐでもなく、シユイは依頼達成でもらえる報酬の多さに心を奪われていた。たった6日で102万パーズとはどんなお金持ちだろうか。三人で割ったって34万ずつ。一日5万以上の仕事なんてさらには落ちていない。C級の任務でこれならB級以上なら一体どれくらい稼げるのか。

頭の中で未来にいる金持ちの自分をでっち上げつつ、石畳で舗装された道を歩く。と、突然目の前に若い男が立ちはだかり、思考が煙となって消えた。

シユイは首を傾げながらもその男を観察する。身長はさほど高くもないが、燃えるような赤の短髪が特徴的だ。色黒で濃い眉毛に切れ長の鋭い眼。広い肩幅と厚い胸板。黒光する革鎧を身に付け、腰に剣を下げているところから察するに、同業者のようでもある。

立ち塞がられる覚えのないシユイは、その脇を通り抜けようとした。しかし男は組んでいた腕を横に広げ、行く手を遮った。

「てめえが、ハーベルさんの推薦を受けた傭兵か」

おもむろに男が言った。

「……なに？」

その物言いが初対面の相手に対する態度とは思えず、何とも言えぬ苛立ちを覚えた。丁寧な挨拶と朗らかな笑顔。人と人の出会いはそこから始まるはずだ。かくいう自分は顔を隠しているので笑顔もくそもないのだが、少なくとも気持ちだけはそういう心持ちだ。

「だったらどうだというんだ」

言葉に少々の怒気を含ませると、色黒の男は苦笑した。

「そうカリカリするなよ、単に興味があつたつてだけだ。推薦の例はないこともないが、人を寄せ付けないって言われている彼女が自ら傭兵を推薦するなんてこたあ前例がない。支部じゃあちよつとした話題になつてるんだよ。一体どんなやつなのかつてな」

男の言はシユイの寝耳に水だった。あまりにニルファナの手続きが手馴れた様子だったので、てつきり普段も傭兵を推薦しているのかと思つていた。とはいえ、思い当たる節がないことはない。ニルファナが受付のフランクに推薦状を渡した際、彼の驚き様を少々大袈裟に感じたのも事実だ。

「で、わざわざ実物を見に来たつてののか。暇なんだな。だが生憎と、見世物になる気は全くない。そもそもお前は誰なんだ」

シユイは少しだけ気を取り直した。

「なあに、名乗るほどのもんじゃねえ。まあシルフィルの傭兵つてことだけ教えておいてやる。名高いランカーに推薦される傭兵様が果たしてどれほどの実力なのか、ちよいと拝ませてもらおうと思つて、ね」

男が悪戯小僧の様にニヤつと笑う。詰まる所、喧嘩を売つているようだ。

くだらない、とシユイは嘲笑した。

「……あん？」

わずかに男の眉間にしわが寄つた。

「道端で蟻を見つけたからつていちいち踏み潰してたらきりがないだろ。それくらい察してくれると助かる」

男の威圧感が増したような気がしたが、シユイは軽く肩を竦めるだけだった。対人の戦いにおいて敵に正常な判断をさせなくするためには怒らせることが効果的だ、と言うニルファナの教えを思い出

しながら。

気付けば、周りにはちよつとした人垣が出来ていた。物見高い観衆からは文句とも野次とも付かぬ声が飛んでいる。こういった即席のイベントは彼らにとつてもささやかな娯楽になりうるようだ。怖いもの見たさか、興味津々といった様子で成り行きを見守っている。

「……ほほー、ほぎきやがったな」

男の押し殺したような声から怒気が漂ってきた。どうやら少しは怒ってくれたようだ。折角だからもう少しだけ怒らせてみることにする。失敗を恐れてはいけない。何事にもチャレンジだ。

「それにしてもお前、えーっと、そうだな。……うん、ファッションセンス、がいまいちなあ」

相手のアラを探し終えたところで、人差し指でビツと指摘する。

男の顔色が変わった。慌てて自分の服装をチェックしているところから察するに、少しは気にしているようだ。手応えあり、とシユイは畳みかける。

「何ていうかさ、上手く表現できないんだけど、見るに堪えないんだよね。全身の皮膚がむずむずする。凄く……ださい」

好き勝手に言葉を羅列した上で、田舎者はこれだからと言わんばかりに首を振る。怒らせるには間も非常に大事だ。

色黒の男は数秒ほど肩をふるふると震わせて俯いていたが、どうやら結論が出たのだろう。

「ぜ、全身黒づくめのためえに、ファッションがあーだこーだ言われる筋合いはねえ！」

至極もつともな台詞を吐くと同時に、男が地を蹴り出した。かなりの速度だが剣は抜いてない。流石に道端で刃傷沙汰をやらかすつもりはないようだ。

体術なら、負けない。

ならばとシユイも鎌を舗装路に放り投げ、素手で相對する。布に包まれた鎌が地面に接触し、こもったような金属音を放つと共に男の拳がシユイの顔目掛けて振り被られる。

「うおっ!？」

シユイとの距離を詰める寸前、男の身体がガクつとつんのめった。一瞬にして男の背後に回り込んできた人影に、首根っこを掴まれたのだ。

「なあにやってんのよ、ピエール！ 公でのギルド員同士の私闘はご法度でしょう！」

叱咤するような、それでいて高い声が鼓膜に響いた。筋骨逞しい男の傭兵は、頭半分は背の低い>獣族<の女に鎧の袖部分を掴まれて宙に浮いていた。その絵図が首輪を掴まれた犬や猫を髣髴とさせ、シユイは思わず吹き出した。

「……ぷはっ。……くく……いやあ、良かったな、命拾いして」

「……て、てめえふざけんな！ おいミルカ！ こいつしめっから手え放せ、放しやがれ！」

ピエールと呼ばれた男は日焼けした顔を真つ赤にしながらも、シユイに届かない拳を握りしめ、両の腕をぶんぶんと振り回した。それが殊更に滑稽さを助長する。

「おお、真夏の炎天下にもかかわらず何という涼しさ。何という凄まじい回転力だ。いやあ、実に惜しい。君が馬車の車輪に生まれなかったのは世界の大きいなる損失だった」

「こっつ　！　てめえ、絶対死なす！」

感心したように、だが、しっかりと皮肉ったシユイに、ピエールは今にも飛び掛ろうとしている。先ほどよりも身体の揺れ幅が少しずつ大きくなってきた。その振れ幅に合わせて、シユイも腰から上

を振り子のように動かす。

「ちょっと、暴れないでよ！ ……あなたも挑発するような言動は避けてくれる？」

ミルカと呼ばれた獣族の少女は大きな褐色の目でシユイをキツと睨みつけた。上は白黒横縞のチュニツク、下はカーキのホットパンツ。栗色の長い髪を白いリボンでポニーテールに纏めていて、何にも活発そうな印象だ。やや小柄だが、手足共にいい筋肉の付き方をしている。年は男の方とそんなに変わらなそうだ。

蔵密に言えば、最初に挑発してきたのはその男なのだが。と、そう言い返したいところではあるが、それも何だか子供っぽいと思ったのでやめておいた。

「ふん、興が削がれた。失礼する」

シユイは投げた鎌をひよいと拾い、二人を置いて人ごみの中へ消えた。それをきっかけに人垣が崩れ、観客たちは消化不良といった面持ちで思い思いに散っていく。

「……あんの野郎。今度会ったらただじゃおかねえ！」

ようやくミルカに開放されたピエールは、憤然とした様子で怒鳴った。その様子を見て彼女は溜息をつく。

「もう、あなたは喧嘩っばや過ぎるんだよ。ねね、それよりさ。依頼の方さつき三人目決まったらしいよ。さつき連絡きたんだ」

ミルカの言葉に、ピエールが「おっ」と顔を綻ばせた。

「昼過ぎに依頼人と待ち合わせだって。わかっていると思うけど、さつきみたいなトラブルは御免だからね？」

ジロツと睨むミルカを尻目に、機嫌よく歩き出したピエールは「はいはいっ」と軽く返事をした。

「ありがとうございます、またお越しく下さいませ」

元気のいい挨拶で店員に送り出されたシユイは、満足げに腹を軽く叩くと、再びギルド支部の方角へと歩き出した。

活気ある魚市場の傍にあった、こじんまりとした定食屋に入ると、予想に反して客は大入りだった。店は外装よりも内装に力が入れられており、床も窓も丹念に磨き上げられている。

四つあったテーブル席は全て埋まっていた。カウンター席も二つ空いているだけといった盛況ぶり。壁に掛けられているメニューの板を見てみると、なるほど、値段はかなり良心的だった。観光客用というよりは、地域に密着した昔ながらの店というところだろう。

店内の奥まで進むと、愛想の良い少年がカウンターの椅子を引いた。少年といっても、年の頃は自分とあまり変わらなそうだった。

背もたれのある席に着くと、直ぐにお冷やが、次いでメニューが運ばれてきた。二、三頁捲めくってからお奨めを聞くと「今日は焼き魚定食だね」と即答される。ならそれで、と待つ事十五分。熱々の料理が次々に運ばれてきた。>焼き魚定食くという字面から、細身の魚を勝手に予想していたのだが、良い意味で裏切られた。皿の上に乗っていたのは>オール鯛だいくだった。身が厚く、骨が少ないので食べ易く、味にも定評がある高級魚だ。

港町だけあって魚は新鮮で生臭さが全く感じられず、脂もたつぷりとのつっていた。箸を身に埋うずめると、骨からほっこりとした白身がほぐれる。軽く塩が振られているだけのそれを小皿の水蕪みずかぶ下ろしに付け、口に運び、米を頬張る。美味だ。

ツバ貝と海草の澄まし汁も中々のものだった。ツバ貝は砂を吐き出す時にプツと唾を吐くような音を出す。小さい貝だが、いいダシが出るので汁物の具としては悪くない。舌に複雑な旨味を残すそれ

を、食事の進行に合わせて啜る。

他にもサラダや漬物などが付いていた。こういった細かい部分にも手落ちがない。ホテルの味気ない料理に飽いていたシュイは、それらをペロリと平らげた。何てったって育ち盛りである。

ふと、先ほどの支払い時に見た、財布の中身を思い出す。残金は7万パーズほどだった。シルフィールに入る前、ニルファナに借りた金は50万パーズ近くあったのだが、鎌を購入し、宿に泊まったり食事したりで既に底を付きかけていた。

彼女に出会うまではほぼ文無しの状態で一年近くを過ごしてきたため、そんなに切羽詰った感じはしていなかった。人間、多少の身体能力と野にある食べ物の知識さえあればどこだって暮らしていけるものだ。それでも高い報酬の依頼を選んだのは、彼女から金を借りている後ろめたさから少しでも早く解放されたいという気持ちをも多分に含んでいる。何だかんだ言っても、彼女から受けた恩は言い尽くせない。そして、恩に利息はつかない。むしろ時と共に薄れてしまう。ならば、記憶が鮮明なうちに返しておくのが人の道というものだろう。

考え事をしているうちに、シュイはギルド支部の入り口を通り過ぎかけていた。慌てて五歩戻り、再び入口を目の前にする。鳴り響く遠雷が鼓膜を微かに震わせた。

ギルド支部の建物内に入り、再び先ほどの受付に戻ると、直ぐ傍にどうも見知った顔が二つ並んでいた。

「あ、てめえさっきの！」

喚き散らす褐色男。

「あれ、もしかして……」

そして、馬鹿力の獣族女。

二人がこちらを見て何か言っているのを無視し、シユイは受付の女性に話しかけた。

「先程、キャノエまでの護衛を受けた者だけど」

「はい、シユイ・エルクンド様ですね。一応控えの方をお見せ頂けますか？ …… はい、結構です。今回の任務はあちらの二人と合同になります」

シユイは二人の方を見て、これみよがしに首を傾げる。

「てっ、てんめえっ！ いいだろう、ここでどっちが上か決着をつけて」

「もういい加減にしてよ。ホント、大人げないわね！」

ピエールが再び騒ぎ始めるのをミルカが羽交い締めになっている。全くいい年して恥ずかしい連中だ。見て見ぬ振りをしてシユイは会話を続ける。

「依頼人は来ているのかな？」

シユイが受付に訊ねた。

「ええ、連絡しましたので間もなくお見えになると思います」

ほどなくして、受付の言った通り、四十前後とみられる背の高い男が入口の方からやってきた。黒いシルクハットを被り、赤いネクタイに白いワイシャツ、やはり黒いスラックス。鼻の下には緩やかなWを描くように剃られた淡い黄金色の髭。如何にも紳士といった佇まいだ。おそらくは帽子の中にも金髪が収められているだろう。もし髪の毛が後退していなければの話だ。

「おや……もしやお待たせしてしまいましたか？」

戸惑ったように紳士が訊ねると、受付は首を振った。

「きっかり5分前です。問題ありませんわ、お客様。今回の護衛任務はこちらの方々が承ります」

受付がそう言い、シユイたちの方に手を翳した。



紳士はうなずき、三人に視線を移した。意外にも、シュイの姿を見ても眉をひそめたりはしなかった。もしかしたら何度か利用しているのかも知れないし、こういう手合い、つまりは黒いローブを来た怪しげな男が依頼を遂行した事もあるのかも知れない。始めから敬遠されなかったことに、シュイは少し安堵した。

「初めまして、シルフィールの皆様。私はルイス・デルモント、宝石商を営んでおります。どうぞお見知りおきの程を」

物腰の柔らかい紳士は、慇懃に挨拶した。宝石商と聞き、シュイは報酬の高さに何となく納得する。

「こちらこそ。シュイ・エルクンドです」

シュイに続いて後ろの二人も頭を下げる。

「ピエール・レオーネだ。宜しく頼む」

「ミルカ・フランティアです。どうぞよろしく！」

簡単な自己紹介が終わると、デルモントは依頼の説明を始める。

「今回の依頼は私と馬車の護衛、それから馬車の積み荷を守って頂くことも依頼に入っております。何せ取り扱う商品が宝石でして、値段が値段ですからな。お三方には周囲を警戒して頂くために馬車を囲むように移動して貰おうと思っております。宜しいですか？」

「ああ」

「勿論だ」

「大丈夫」

三者三様の、肯定の返事が返ってくると、紳士は満足そうな笑みを浮かべた。

外に出てから路地を進んで人通りの多い大通りに出ると、道の脇に依頼人のものと思われる立派な四頭立ての馬車があった。馬はそれぞれに毛並みが良く、色も黒毛で統一されている。

馬車を操る従者がこちらへ向かってぺこりと頭を下げた。シユイも軽く会釈を返す。デルモントは馬車の踏み台に足をかけ、従者の隣に座ってから三人に呼び掛けた。

「それでは雲行きも怪しいようですし、早速出発いたしましたしょう」  
言葉に合わせて三人がそれぞれに所定の位置につく。従者が馬の背に鞭を入れると、車輪が軋む音と共に馬車が動き出した。それと調子を合わせるようにして、三人は走り始めた。

いよいよ初任務だ、しつかりやり遂げなきゃ。

馬車の後方に付いたシユイは、依頼達成を強く心に誓っていた。

番外 〱お嬢様と執事(1)〱

シルフィール本部・最上階

長い金髪をした美しい女性が身体の幅の三倍はありそうな豪華な椅子に座り、傍らに付き従っている執事ステュワードと思しき短い銀髪の若い男とやり取りをしている。

「お嬢様。 舞踏会への招待状が届いております」

「捨てなさい」

「帝国貴族の方々から縁談が……」

「燃やしなさい」

「我がギルドへの苦じよ……」

「埋めなさい」

「……最後までお聞きにならないで宜しいのですか？」

「私は、一度口にした事は覆さないの。私はラミエル。 26代目、  
エスチュード家当主」

ラミエル・エスチユードよ

ラミエルは腰に手をあて、ポーズを取る。

「ご立派でございます、お嬢様。お父上も、草葉の陰からお喜びでいらっしやいましょう」

「まだ死んでない」

「これは私とした事が。ああ、ちなみに私は執事のビリー、でございますよ」

「……知っているわ」

「光栄にございます。では、明日からと言つ事で」

「何がかしら？」

「お父上が草葉の陰で……」

「そもそも、何故草葉の陰なの？」

ラミエルは顎に人差し指を当て、考える。

「と、申しますと」

「死んだ人に使うでしょ」

「人が土葬されて草葉がほくほく、でございます」

「もう少し、具体的に話せないかしら」

「失礼いたしました」

「で、何なの？」

「人は、栄養豊富でございます」

「なるほど」

「草葉は、栄養を必要としております」

「確かに」

「これぞ、理想的な関係かと」

ビリーは顔を赤らめた。

「それで、死んだ人か」

「流石はお嬢様。ご明察でございます」

「で、何故、父が草葉の陰なの？」

「先程、埋めなさい、と」

「誰が」

「お嬢様でございます」

「言っていないわ」

「それは不可思議でございますね」

「気になるわ、確かめる方法はないかしら」

「一つだけございます」

「何かしら」

「先程やった事を、もう一回やるのでございます」

「名案ね」

「では参ります」

「いつでもいいわ」

「コホン。 アイウエオイウエオアウエオアイ……………」

「早くなさい」

「畏まりました。 お嬢様、舞踏会への招待状が届いております」

「捨てなさい」

「帝国貴族の方々から縁談が……………」

「燃やしなさい」

「我がギルドへの苦じよ……………」

「埋めな……くてもいいわ」

「……最後までお聞きにならないで宜しいのですか？」

「私は、一度口にした事は覆さないの。私はラミエル。26代目、  
エスチュード家当主

ラミエル・エスチュードよ」

ラミエルは腰に手をあて、ポーズを取る。

「ご立派でございます、お嬢様。お父上も、お喜びでいらっしやい  
ましょう」

「でも、報告はきちんと行っべきね」

## 第二章 く初仕事(1)

肌色煉瓦で舗装された道路を二時間ほども走っただろうか。ついに大粒の雨がぱらつき始めた。強い日差しで熱されていた石材が雨水を蒸散させ、夕立独特のえもいわれぬ匂いが立ち上る。

従者の男が一旦馬車を止め、水羊の毛で作られた雨避けのコートを取り出した。ミルカとピエールも同じようにフード付きのコートを革袋から取り出す。デルモンはその合間に濡れぬよう馬車の中に入っていく。

ピエールはコートを羽織りながらも後ろに視線を転じた。シユイが何も用意していないのを見て、にやにや笑いを浮かべる。

「おいおいエリートさん。初めての任務じゃあるまいし天候への対策は常識だぜ？」

初めての任務で悪かったな。いちいち絡んでくるとは暇なやつ。

シユイは、得意げにチツチと指を振る。ピエールから視線を逸らし、馬車の後輪が巻き上げる泥にかからぬよう後ろに引いた。

「あんたはもう……。エルクンドさん、でよかったよね。なんだったら予備の貸してあげるけど？」

ミルカが後ろを振り向いてそう言った。

「問題ない。この衣はそれなりに風雨に耐性があるから」

シユイはそう返した後で、一応の厚意に対して少々素っ気ない態度だったか、とちよっぴり後悔する。

今着ている黒い衣は、ニルファナのお古を貰ったものだが、魔力を練り込んだ特殊な布で出来ているため、魔法に対してかなりの耐性がある。目に見えぬ薄い魔法障壁を、それを着用している者の全身に張り巡らせる効果があるのだ。そのため、普通の雨風くらいで



はさほど気にならない。

「そ、ならいいわ」

ミル力は更に素っ気なく言うと、再び周囲を警戒しはじめた。

数分の間に、路傍の窪みにはいくつもの水溜りが出来ていた。雨は一層激しさを増し、視界を著しく悪化させていった。

日が姿を隠した頃には降っていた雨もすっかり鳴りを潜め、空には雲の谷間から星が覗き始めた。民家などの人工物は殆ど見受けられず、左右が広大なすすき野原に囲まれている。風が吹く度に、すすきの漣なみが西に向かって流れていく。まるで動物の群れがすすき野の中を移動しているかのように。耳を澄まさずとも鈴虫と蛙の鳴き声が絡み合った粗雑な音楽が聞こえてくる。おもむろに、大きな光が二つ、叢むらから舞い上がった。大人の手の平大はありそうな、巨大な蛍だった。

進めど進めど、たまに旅人や馬車にすれ違ってくるくらいで人気は無いに等しい。ボーヴィのギルド支部を出て六時間近く経つものの、未だに宿屋には着いていなかった。

「おい、従者さん。今日の宿屋はあとどれくらいで着くんだ？」

ピエールが首を鳴らしながら訊ねた。ずっと走り通して流石に飽きてきたのだろう。

「そうですね、このスピードなら二時間はかからないと思います」

「そっか。さんきゅ」

シユイは二人の会話を小耳に挟み、小さく溜息をついた。疲れはほとんどなかったが、目標もなく、無駄口もあまり叩けず、延々と馬車と同じペースで走るといっものは中々に辛いものがある。報酬が高いのにもかかわらずこの依頼書が未だに掲示板に貼ってあった理由が何となくわかった気がした。ふと前を見ると、ピエールとミル

力が何やら小声でボソボソと話し合っている。退屈を持って余しているのは前の二人も同じようだった。

それから一時間ほど経っただろうか。

「見えました、あの建物です」

従者の声に、三人は視線を前方へと向ける。ほぼ同時に、デルモントが馬車の中から出てきた。片手にブックカバーを付けた本を持っていることから、読書で暇を潰していたようだ。馬車の中には火の灯ったランプが覗いている。

舗装路の左手には 灯りが漏れている窓の数から察するに六階建てだろう 随分と大きな建物が見えた。辺りが暗いため外観はわからないが、他に建物が見当たらないのであそこが今夜泊まる場所の間違いないだろう。

「おお、予定より早いですな。これなら四日程で着いてしまいそうです」

やれやれ、やっとついたか、とシユイは手を組み、前に小さく伸びをした。前の方で走っている二人を見ると、どうやらこちらも同じようなことを思っているのか、ほっとした表情を浮かべている。宿屋の厩舎に馬車を預け、デルモントと従者、そして傭兵の三人はホテルの中に入っていった。

ドアを押した途端、取っ手に付けられていた鈴が鳴り響いた。左手にはガラス張りの大きな透過壁に面したラウンジがあった。室内から漏れ出た灯りが小さな草花の植わっている庭園を薄らと照らしている。

デルモントが一人右手にあった受付で手続きをし、戻ってくると

ホテルのキーを三人それぞれに渡した。宿代は依頼人持ちのようだ。シユイが袋から出しかけた財布をしまった。

「明朝の出発は八時になります。十五分前までにこちらへ集合してください」

ロビーの時計を確認すると、既に二十時を過ぎていた。

シユイはキーを受け取り、四角いホルダーに彫ってある部屋番号を確認すると、ロビーの脇にある階段を上がっていった。

401号室、あそこか。

四階の部屋番号の並びをチラッと見て、一番奥の部屋が泊まる部屋だと気づいた。

シユイが自室の鍵を差し込もうとした時、「ちょっと待って！」と声を掛けられた。そのまま横を向くと、廊下の奥から走って来るミルカが見えた。

「ん、どうかしたのか？」

「……あの、……ごめん」

ミルカは立ち止まるなり、すまなそうに俯いた。

「え？ 何かしたのか？」

「ピエールのことよ。さっき聞いたわ、あいつからあなたに絡んだんですってね。私てつきり……」

思案の外だったので思い出すのに数秒を要したが、シユイはようやく港町ホーヴィーのことを言われているのだとわかった。

「何だ、そんなことが」

「あいつ、二年近くかけてやっとCランクになったからさ。いつもは悪いやつじゃないんだけど、いきなり推薦でCランクになった傭兵がいるって聞いて、ちょっとやつかんでるだけなんだ。不快な気分にさせて、本当にごめん」

そう言い、ミルカが再び頭を下げた。

嫉妬か、なるほどなー。

確かにあの態度には一時腹も立った。けれど、自分が苦勞して下積みした二年間を、紙切れ一つですつ飛ばしたやつがいると聞けば、少々面白くない気持ちになるのも無理からぬことかも知れない。

「気にしてない。じゃあ、明日な」

シユイは鍵を回しながらそう言った。

「……ありがとう、また明日ね」

その言葉が偽りではないと察したのだろう。ミルカは少しはにかんだ表情を見せた。

部屋に入って錠を下ろし、鎌を壁に立てかけると、シユイは窓際にある背もたれ付きの椅子に座った。

意外となんとかなりそうだ。叢むさくで明滅しているたくさんの蛍ひかりの光を見ながらそんなことを思う。

護衛というくらいだから、夜盗か何かに襲われるのを覚悟、もつと言うと期待していたのだが、正直何もなかったことに拍子抜けしていた。少し考えてみれば、そうしょっちゅう襲われるほど治安が悪いのなら、道端が死体だらけになっているはずだった。

つい半年ほど前まで、シユイは頻ひん繁ぱんに賞金稼かぎたちの襲撃を受けていた。ひどいときには三日置きくらいの頻度で追われることになった。

必然的に、周囲の警戒のために眠りが浅い状態を保って寝るのが習慣となった。寢床の大半は木の上で、幹の太い木を探し、先端の方に足を伸ばし、寄りかかって寝る。木の上であれば暗い森の中では相手に気付かれにくいし、実際そうしてから気付かれることはほとんどなくなつた。おかげで悪夢うっなに魘うされる場合は別として、非常

に寝相が良くなつてしまった。夏場群がってくる蚊には参つたが、強い匂いを放つ香草を肌に塗ることで事なきを得た。

ニルファナに出会うまでそんな生活を続けていたためか、護衛の任務というものに対して襲われなければおかしいといった妙な先入観を抱いていた。無論、何事もなく依頼を達成できるならそれに越したことはない。御者だけの馬車に比べれば、三人で囲んでいるだけでも十分、襲撃者に対する威嚇になるはずだ。

未だに目は冴え切っていた。眠くなるまでニルファナに教わった訓練を行うことにした。黒衣を脱ぎ、籠に入っていた汗拭き用の白いタオルで体を満遍なく拭く。人心地付いてから、ベッドの上に身を投げ出した。

仰向けの状態で両の手の平を天井に伸ばし、ゆつくりと魔力を練り込んでいく。手の上に液体のように蠢く魔力球が生じたところで、様々な動物に変えていく。鳥から魚へ。犬から猿へ。獅子から鼠へ。形状変化を繰り返すことで、魔力の純度と具現化の速度を早める訓練になるのだ。

しばらくすると精神的疲労が蓄積されていき、若干眠気が出てきた。それでもまだやれる、と判断できるうちはひたすら繰り返した。たゆまぬ研鑽こそが、己が目的に通じる標となるはずだと信じて。

護衛五日目の夕方、シュイたち一行はフォルストロームの国境付近に差し掛かっていた。ここに至るまで大きなトラブルも特になく、予定よりもかなり早いペースで道中を進んでいた。

一度だけ、シュイは三日目に通った山岳地帯の登山道で、物陰に

潜む複数の気配を感じていた。幸いにもと言うべきだろうか、襲ってくるようなことはなかった。大剣を背負っていたピエールが、しかめっ面をしていたからだろう。朝方、野生の動物の糞を踏ん付けていたのだから無理もないが。

「いやあ、この調子でしたら今夜中にもついでにしまいそうですね。あまりにも順調な旅路にデルモントは上機嫌だった。シユイは、これくらいが順調の基準に入るのだな、と一人納得した。

「一応この辺りに今夜泊まる予定の宿もあつたのですが、必要無さそうですね」

従者も朗らかに請合つ。

「お三方はどうです？ 疲れの方は？」

デルモントが三人に尋ねる。

「問題ないよ」とシユイ。

「平気だぜ」とピエール。

「ええ、まだいけます」とミルカ。

予想通りの答えだったのか、デルモントは満足げにうなずいた。彼の目から見ても、三人に疲れは殆ど見受けられなかったようだ。

「では、一気に進んでしましましょう！」

デルモントの掛け声と共に御者が黒い乗馬鞭を軽く振るい、馬車の速度が若干増した。

一行はゆるやかな山道を進んでいく。ふと、山をそのまま縦に真っ二つにしたような、急傾斜の巨大な谷が見えてくる。谷の間にある関所の先が、フォルストロームの領内だ。

フォルストロームは大陸南部を領土とする獣族ビーストの王が支配する国である。国民性は豪放にして快活、他国とは一風異なる文化を持っている。獣族は他種族と比べて身体能力に優れているため、女性で

あつてもミルカのように傭兵として身を立てる者が多い。決して閉鎖的ではなく、各国との文化交流も多いため知能のレベルも標準的だ。

また、国土の八割が森林地帯であり、特異な動植物がわんさかいる。水を根から吸い上げてホースのように枝から噴射する樹木。夏の間だけ湖の上に木枝で巣を作り、卵を産む鳥。

何より有名なのが太古の時代からキプロ大森林の地中に住まい、森の土を食べて生きているという森龍だ。フォレスト・ドラゴン生き物である以上排泄物もするので、土を食べては糞にして再び土に還す、というなんとも自然に優しい竜である。糞は一見普通の土と見分けがつかないが非常に豊富な栄養分を蓄えているため、豊作を約束する土として高額で取引される。獣族には半ば神格化されているほどに偉大な存在だ。

関所に向かつて進んでいくと、閉じられた大きな門の左右に二人、見張りの兵がいた。一人は身体が相当に大きく、頭部の両側からL字の角が生え、威圧的な顔をしている。もう一人は、背の高さはシユイとさほど変わらないが、目立つほどに爪が長く、痩せていて如何にも俊敏そうな体つきだ。間違いなく、二人とも獣族だ。

門の前で一旦足止めされ、獣族の二人に身分証の提示を求められた。一行は皆それぞれの身分証を、あるいは傭兵の認定証を二人に見せる。淀みなく四人の検分が終わり、最後にシユイが見せると

「すまないが、顔を確認させてもらっていいか？」

大男がそう言った。予想通りの反応だったが、シユイは敢えて訊ね返した。

「認定証に何か問題が？」

「いや、そういうわけではない。ただ、万が一にも我が国に仇なす者を通すわけにはいかぬのでな。高額賞金首のリストに乗っていないければ直ぐにでも通ってもらおう」

賞金首の中には国の要人殺害や大盗賊等、凶悪な犯罪をやらかした者もいる。そういった危険人物を関所でシャットアウトするのは、国を守る兵たちの重要な仕事の一つである。他の四人と違って顔を隠しているシユイが怪しまれるのは、ごく当たり前のことだった。

「わかった。あなただけで良いのなら。多少不愉快な思いをするかも知れないが」

不愉快という言葉に反応し、ピエールとミル力は怪訝そうな顔を見合わせる。

「ああ、構わん。ならこちらの方でお願いする」

そう言つて大男は番所の方を指差した。シユイはうなずき、大男と共に建物へと入つていった。

番所に入ると、正面には丸められた地形図などが入っている本棚が見えた。傍らには二つの椅子と机、壁には武器をかけるための留め具が打ち付けられている。シユイは部屋の中央まで進むと大男の方に向き直つた。そして、被っているフードの端を掴み、ゆっくりと後ろに引いた。

大男の表情が一瞬険しくなつたが、直ぐ元の表情に戻る。これも予想通りの反応だった。

「……すまなかつた。戻つてもらつて構わない」

大男は侘びを入れた。

「いや、お互い仕事だからな。では失礼する」

特に気にする風でもなく、シユイは淡々とフードを戻し、番所を出ていった。

「デルモントさん、お待たせしました」

出発の準備を整えていた一行に、シユイが会釈した。

「いやいや、無事に終わつて何よりです。では行きますかな」

「道中お気をつけて」



走り出した馬車と三人に、痩せた男が敬礼した。

馬車が見えなくなり、痩せた男が部屋に入っていく。と、大男が  
神妙な顔をして突っ立っていた。

「ん、どうした。何かあったのか？」

大男は眉を潜めた男に、小さく首を振る。隠しきれぬ憐憫れんびんの表情  
を浮かべながら。

## 第二章 〱(2)〱

夜が深まり、街道沿いにある樹木の密度が増してきた。キプロ大森林に差ししかかったようだった。

漆黒の森に囲まれた道路は見通しが悪く、光源もない。三人は頻繁に辺りを警戒し、異常がないか視線を走らせている。

馬車内の照明が落ちていることから、デルモントは早めの仮眠を取っているようだった。車輪がカラカラと回る音と夏虫の声、稀に狼の遠吠えが聞こえるだけだった。

「なあ、おい」

唐突に、ピエールが後ろを振り向き、シュイに話しかけた。

「何だ？」

「昼間の関所でのことだけだよ、不愉快ってどういうことだ？」

「ピエール、あんたねえ。知り合ったばかりの人にそう根掘り葉掘り聞くのは失礼じゃないの？」

ミルカが眉を八の字にして諭さとした。ばつの悪そうな顔に変わったピエールを見て、シュイが相好を崩した。

「いや、別に構わないよ。大したことじゃないから」

「そ、そうだろ？ ほらミルカ、本人もそう言っていることだし」

「」

「顔に大きな火傷の跡がある、ただそれだけさ。まあ、薄々察しが付くと思うけれど、見たってあんまり気持ちのいいもんじゃないからな」

シュイは努めて明るく言ったが、前を走る二人の表情は、明らかに暗くなった。

「……す、すまねえ」

ピエールが素直に謝ったことに、シュイの方がうるたえた。

「……もう、だから言ったのに」

ミルカもしゅんと肩を窄めた。頭の上にある三角耳まで寝てしまっていた。

「構わないと言ったじゃないか」

「で、でもよ」

本当に申し訳無さそうな顔をしているピエールに、シユイは鼻の頭を掻いた。今まで抱いていた印象はとて素晴らしいと言えなかったが、ミルカの言うようにそこまで悪いやつでもないかも知れない、と。

「まだ任務中だろう、もう直ぐ着くとは言え、気を抜きすぎじゃないか？」

シユイは笑いながらそう言った。

「……ああ、そうだな」

言葉を切つて、ピエールとミルカは再び周囲に注意を払い始めた。これ以上、このことに触れるのは礼儀に反すると思ったのかも知れない。

小高い丘を登り切ると、眼下に町の明かりが見えた。外壁の奥、町の中央には巨大な樹が立っており、梢が淡青色や橙色に変化している。暗闇に佇む淡色の光を帯びた大樹。その幻想的な光景は夢の中の世界を思わせた。

「これは、凄いな」

「あそこがキャノエの町です。中央にあるのが町のシンボル、長老樹です。あともう一息ですね」

気を利かせたつもりなのか、従者がどうどうと馬車を止めた。遅れて三人も足を止め、その光景に見惚れた。

「やっぱ、ここからの眺めは最高ねー」

「だなあ」

「二人は、この町に来たことがあるのか？」  
シュイがミルカに訊ねた。

「というより、ここは地元みたいなものね。隣町に実家があるのよ」  
午後十時頃、一行は無事にキャノエの町に入った。町の通りには警備兵以外に人気もなく、辺りはひっそりと静まり返っている。どうやらこの国では、住民の殆どが午後九時頃までに就寝するらしい。あまりあくせく働くようなことはなく、のびのびとした風土のようだ。

それから三十分ほどして、馬車は町中にある円形の芝広場の前で停止した。デルモントが経営する宝石商店は、もう目と鼻の先ということだった。

「いやー、真に助かりました。こんなに早く着くとは、流石シルフィールの傭兵様ですな」

デルモントは笑ってそう言った。

「まあ、何事もなかったからな」

ピエールはそう言ったものの、少し誇らしげだった。

「いやいや、あなたたちが護衛してくださったからこそその安全な旅路です。では、これが約束の報酬になります。どうぞ受け取ってください」

デルモントは三人それぞれに金の入った布袋を渡していく。シュイが中身の金額を確かめると、依頼の報酬より少し多い事に気づいた。

「確か、34万パーズずつだったはずでは？」

袋の中にはぴったり40万パーズ入っていた。デルモントは軽くうなずいた。

「早期の依頼達成にこれ以上ないほど満足しておりますので、若干

色を付けさせていただきました。どうぞ、お受け取りください」

「どうやら、上乗せ分はデルモントからの特別報酬らしい。」

「そういうことなら、遠慮なく頂きます。ありがとうございます」

シユイが礼を言い、それに続いてピエールとミルカが「ありがとうございます」「ございます」と頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ。では、また機会がありましたらお頼み申し上げます。どうぞお体に気をつけて！」

デルモントは従者に命じて馬車を走らせる。閑静な町に、再び車輪の音がカラカラと鳴り始める。

「デルモントさんも、商売の方頑張ってくださいね」

ミルカが走り去る馬車に手を振ると、馬車の側面からデルモントの手の平がひよこつと出た。こうして、初めての依頼は滞りなく終わりを告げた。

デルモントの馬車が去り、40万パイズの報酬が入った袋の重みを感じ、シユイはようやく任務を終えたことを実感する。何より、初めて自分の力で得た報酬だ。それを目にするだけで、自然と顔が綻んでしまう。取り立てて何事もなかったように思うが特別報酬<sup>ボーナス</sup>まで上乗せしてくれたわけであるし、デルモントも口先だけでなく、満足してくれたのだろう。

小さく拳を握り締め、初任務を終えた余韻に浸るシユイは、後ろからの視線に気付く。慌ててシユイは後ろのピエールとミルカに向き直る。

「……あ、じゃ、じゃあ。またどこかで」

感傷に浸っているのを見られた気恥ずかしさを押し隠そうと、シユイが二人に先んじて別れの挨拶を告げた。

「あ、おいおい。ちょっと待ってくれ」

ピエールがその場を立ち去ろうとしたシユイを呼び止めた。

「ん？ 何だ？」

シユイは不思議そうに振り返った。

「いや、なんだ、その……」

ピエールが言い淀んでいるのを見て、ミルカが代わりに言葉を紡ぐ。

「うちら、いい宿知ってるんだけどさ。良かったら一緒に来ない？」

この時間だと空いてる宿、もう少ないと思うし」

ピエールもそれが言いたかったんだ、と言わんばかりに何度も頷いている。

「なら、お言葉に甘えさせてもらうかな」

シユイは一考してからそう言った。遅い時間から宿を探すのは少々面倒な作業だ。二十四時間ロビーが開いているような宿は非常に少ない。ましてや、この町の平均就寝時間は他国より早いものだから、下手をすれば野宿をする羽目になる。

「じゃあ決まりね。建物はちょっと古いけど料理は期待できるからな」

ミルカの先導に従い、三人は広場に面した大通りから少し外れ、運河沿いの、馬車ではちょっと入れそうにない細い道を進んでいく。密集していた建物の間隔が開き出した頃、三人は宿屋？ベチュア亭？に辿り着いた。軒下から玄関までは長い階段で結ばれている。何故か一階部分がなく、高い二階部分を何本かの太い柱が建物を支えている。見ると、下の階には何頭かの馬が繋がれていた。一階部分は厩舎代わりのようだ。

「ここだよ。私たち昔馴染みだから、結構安くしてくれるんだ」

「この女将さんは本当に料理が上手いんだ。特にシチューは絶品だぜ」

得意気にそう言う。ピエールに、シユイもそれは楽しみだ、と応じた。

三人は半分に割った丸太を繋げたような階段を慎重に上っていく。宿に入ると直ぐに、店の奥から少しふつくらとした女将が愛想良く出迎えてくれた。ひよこつと茶色の髪から覗いている三角の耳を見て、やはり獣人ビーストだとわかった。

「いらつしゃい。……あらあ、ミルカとピエールじゃないの。しばらく見なかつたけれど、ちゃんと生きていたのねー」

いきなりのご挨拶に二人が不満げに口を尖らせる。

「それはないよ、ベチュアさん」

「全くだぜ」

「あはは、冗談だよ。つと、後ろの方もお仲間かい？」

ベチュアはひよいと背伸びをしてシユイの方を見た。

「ええ、エルクンドさんっていつて、見た目はこんなんだけど意外と良い人よ」

ミルカの言い回しに、シユイは眉を顰める。

「褒めているのか？ 貶しているのか？」

「両方に決まつてるぜ、なあ？」

ピエールの言葉に釣られて皆はドツと笑う。シユイも微かに笑いを誘われる。

ベチュアが笑いながらも訊ねる。

「夕飯まだだろ。部屋に持っていくかい？」

「お、流石ベチュアさん、わかつてるう」

「俺、肉大盛りで！」

二人の調子の良さに、ベチュアは苦笑しながら「はいはい、じゃあ三階の大部屋に入っとくれ」と言った。

三人は階段を上がり、左に曲がって突き当たりの部屋の前に来た。シユイは一瞬あれ、と思ったが、玄関が二階なので、確かにここが三階だという事に気付く。襖ふすまを開けると、部屋の床には畳が敷いてあった。藁わらの香りがやたらと懐かしく感じられた。広すぎず、狭すぎず、年季が入っていて、手入れの行き届いた落ち着いた部屋だ。「さあ、座って待ちましょう」

「そうだな」

三人は部屋の入り口からフェルトで出来た靴カバーを嵌めるとそのまま部屋に入り、腰を下ろし、思い思いに寛くつろいだ。

暫くすると、木のテーブルの上にご馳走が並び始める。良く煮込まれた肉入りのシチュー、胡桃くるみ入りの焼きたてパン、淡水マグロのソテー、山菜入りの茶碗蒸し、爆弾南瓜バンブキンボムの冷製スープ、どれも手間隙にかけていると思われる一品料理だ。

そして最後に「ちゃんと冷やしてあるよ」とベチユアが大瓶に入った麦酒を運んできた。

「これだから女将さん大好き！」

ピエールは調子良く煽てる。

「あはは、相変わらずちゃっかりしてるよ」

ベチユアは三つのグラスに一杯目だけを注ぎ入れた。

「じゃ、三人ともごゆっくりね」

そう言い残して、ベチユアは部屋を後にした。

「それでは、任務が無事達成できた事を祝いまして、乾杯！」

ミルカがグラスを掲げた。

「乾杯！」

「か、乾杯！」

三人は掛け声と共にグラスを交わし、そのうち二人は一気に麦酒を飲み干していく。

「ぶはあー、たまんねえー」



「うんまーい、仕事の後のこれは最高ねー」

ピエールとミルカはさも美味しそうに飲んでいる。

その一方で、シユイは一口飲んでフードの奥で顔をしかめていた。

これ苦ーい、苦いよー。

よくよく考えてみたら、酒を飲むこと自体初めてだ。二人共、何でこんなものを美味しそうに飲めるんだろう。ちびちびと飲み、その都度顔をしかめながら、料理の方に目を移す。

テーブルにジヨッキを置き、気を取り直して湯気の立っているシチューを一口分掬う。

「これは旨い」

今度は素直な感想が口に出た。煮込まれた肉と野菜が口の中で溶けるようだ。麦酒の苦みはあっという間に口の中から消え去った。

「でしょでしょー。ここのシチューは一度食べたら病み付きになるよ。ただ、何の肉かは教えてくれないだけだね」

そう言いながら、ミルカ達も食べ始める。謎の肉と聞いて少し気になったシユイだったが、まあ人肉じゃなければ、とあっさり割り切った。

「そうだな、噂では>獣姫様くもたまにこちらに食べに来ているらしいぜ」

「>獣姫様く？」

その語句の意味を確認すると、口と皿とを往復していたミルカの spoon がピタツと止まる。

「え、エルクンドさん知らないの!？」

「ああ、知らない」

「ほ、本当かよ? フォルストロームのお姫様で十六歳にしてシルフィールの準ランカーだぜ? シルフィールどころか傭兵やって知らない奴はいないと思うけれど」

驚きから発された何気ない言葉だったのだから、その語尾はシユイの鼓膜に聊か皮肉めいた響きを与えた。

「へえ、そんな人まで食べに来るんだ。まあ、それも納得の味だね」

今度は南瓜のスープを啜る。どっしりとした濃厚な味だが、甘さは程良い。

「うーん、傭兵がそこまで世情に疎いのはまずい気がするなあ」  
言葉に嫌味が感じられぬことから、ピエールは本気で心配しているようだった。

「大丈夫、そのうち覚えていくさ。物覚えは悪くない方だし」  
シユイはさらりと受け流し、次いで魚の身を食べ始めた。

シユイが頑張って一杯目のジョッキを空にした頃には、ミルカとピエールは大瓶の酒を半分くらいまで減らしていた。段々と酔いが回ってきたのか、ミルカは少し突っ込んだ質問をしてきた。

「シユイってさあ、どうして傭兵になったの？」

あれ、呼び捨てにされているぞ。

シユイがいつからこうなった、と首を捻る。

「あのハーベルさんが推薦したってくらいだし。何か目的があってシルフィールに入ったわけでしょ？」

「ああ、目的……ね」

シユイは咄嗟の返事に窮し、言葉を濁した。

「私はねー、やっぱり獣姫様に憧れてかなー。幸い人並より身体能力高かったからさ」

ミルカが自分から話し出したことに安堵し、次いで確かに、と頷いた。ホーヴィでピエールの後ろに回りこんだ時の素早さもかなりのものだったが、それ以上にピエールを身に付けた鎧ごと片手で軽々と持ち上げたのには驚かされた。

しかし、そのミルカが憧れるほど獣姫様というのは凄いのだろうか。少し興味が湧いてきた。

「獣姫様って、そんなに有名なのか？」

「そりゃね！ 獣姫アミナと言えばフォルストローム中の憧れ。容姿端麗で、聡明で、しかも凄く強いんだよ。私より三歳も年下なの

にさ」

ミルカの興奮気味な口振りから見ると、アミナというお姫様はフォルストロームの国民にアイドル視されているようだ。弱冠十六歳にして準ランカーというのは確かに凄いことなのだろう。

「なるほどね。レオーネは何で傭兵に？」

ピエールは掲げていたジョッキを下ろしてシユイに向き直る。

「ピエールでいいぜ。そんなかわし俺もシユイって呼ばせて貰うからよ。ええと、そう、傭兵になった理由だったな。俺は、ジュー地方の小国の出身なんだ。お前も知っているかもしれないけど、あそこは大部分が砂漠地帯でさ。宝石とか、石油とか、地下資源はあるんだが働く場所はそんなにない。だから、あの地方に住む連中は他の国へ出稼ぎにいく奴が大半なのさ」

シユイはいつしか見た世界地図を思い出した。ジュー地方は大陸中央からみて南西の方角に位置する、広大な砂漠を領土に持つ小国群だ。キャノエからずっと西に行けば辿り着く。

「へえー、意外と苦労人なんだ」

シユイはしみじみと言った。

「意外とは余計だつづの。まあ、両親の他に弟と妹が四人もいるから、正直言つてあんまし暮らしは楽じゃなくてよ。腕っ節には自信があつたから傭兵になろうと決心したんだ。幸い、間に立つ人もいたからな」

「家族のため……か」

尊敬に値する動機だった。自分にそんな立派なものはない。守りたい人も既にない。

忌まわしい記憶が蘇り、シユイの心が闇へと沈みかけたその時

「おわっ」

シユイの身体が前に傾いた。危うく料理の並ぶ食卓にダイブする

ところだった。

「シユイの答えはー？ まだ聞いてないよー」

ミルカの張り手にやおら思考を中断させられた。容赦なく、手の平でびしばし肩を叩いてくる。酔いで余り手加減ができていないのだろう。踏ん張っているのに身体がぐらつく。何しろ鎧を着ているおとこピエールを軽々と持ち上げるくらいおとこの怪力なのだ。

「や、やめてくれ。痛っ、言っつて。言っつて。言っつて。あだっ」

「すまん、シユイ。こいつ酒に弱いんだ」

「……イテテテ。謝っている暇があつたら止めてくれよ」

心底困っている様子のシユイを見て、ピエールは苦笑いした。

「ああ、悪い悪い。でも、興味あるな、何で傭兵になった？」

シユイはやつとのことミルカの魔手から逃れると、用意しておいた嘘を付く。

「……そうだね。やはり名声と、後は金かな」

「なるほど、至極真つ当だ」

予想通りに、ピエールはあっさりと納得した。

そもそも、傭兵は金さえ払えば基本何でもやる職業だ。金目当ての人間の割合が多いのは当たり前のことだった。愛国心があれば騎士になるだろうし、平和に堅実に生きたいなら普通の職業を選ぶだろう。

「まあね、もう一杯どうだ？」

そう言っつてシユイは大瓶を持ち上げた。

「おお、すまねえな」

ピエールは微笑みながらジョッキを差し出す。とくとくと注ぎ込まれていく麦酒の白い泡を見ながら、シユイは二人が投げ掛けた質問を反芻する。

金と名声を目当てに傭兵になる者は多い。そもそもそついう職業だ。ならば、名声と金以外を目当てに傭兵になろうとする少数派の動機は何か。きつと、碌でもない動機の奴が大半だろう。自分がそつであるように。

酔っ払ったミルカが畳に寝転がったのを最後に、二人は晚餐をお開きにする。ピエールが先にミルカをおぶる。既にその小さい口からは寝息が漏れていた。シュイが前に出て襖ふすまを開けると、ピエールは礼を口にし、ついでにボソボソと謝罪の言葉を口にした。ホーヴイの件だろうと思ひ当たり、シュイもこちらこそ言い過ぎた、と謝った。悪い気はしなかった。

二人と別れて部屋に戻り、鍵をかけた。ふと、顔の妙な感触が気に障り、はたと思ひ当たる。

おっと、外すのを忘れてた。

鏡を見ると、皮膚が溶けているような顔が映った。目は溶けた皮膚で塞がりかけ、鼻は左側に傾き、唇は抜れている。誰が見ても醜い男がそこにいた。フードを外し、顔に手をあてがい、両側の耳元から前へゆっくり引つ張る。少し皮が突っ張り、微かに痛みを感じる。ややあつて、ペロンと皮膚が剥けるように、顔から樹脂で出来た厚い皮が剥がれた。濡らしたタオルで少し汗ばんでいる顔を丁寧に拭う。タオルを顔から外すと、いつもの顔がそこにあった。

念のために持ってきて正解だった、と独りごち、続いては皺がよっている樹脂のマスクに視線を移した。国を行き来する時、関所の兵を誤魔化すのに必要だと思つて、ホーヴイに滞在している時に作つておいた、魔力を込めた樹脂だ。これを付ければどんな美美女も醜い火傷顔に一変する。正直に言つてあまり付け心地の良い物じゃないが背に腹は変えられない。誰を偽ろうとも、万が一にもこんなところで躓つまづく訳にはいかなかった。

番外 〱お嬢様と執事(2)〱

シルフィール本部・最上階

「ハイッ」

「ホッ」

「ハイッ」

「ホッ」

稟議書を確認しつつ、ラミエルはテンポ良く、ポンポンと判子を押ししていく。押された書類を傍らでビリーが素早く抜き取っている。まるで餅付きの様な妙技である。

「　　ビリー。少し蒸すわ」

「お任せください!」

そう言っつてビリーが魔法を唱えると室内の水蒸気が凝集し、氷となって彼の左手に現れた。

「流石ね、すつきりしたわ」

「光栄にございます。つきましては、こちらでカキ氷など如何でしょうか?」

「名案ね、でもちょっと大きいわ」

「では、これくらいで？」

ビリーは、素早く右手で氷を半分程にカットした。

「まだ大きいわね」

「では、これくらいで？」

ビリーは、素早く右手で氷を更に半分程にカットした。

「流石ね、仕事が速いわ」

「光栄にございます」

ビリーは、恭しく礼をした。

「でも、どうやって削るの？」

「カキ氷製造機というものがありましてそれを……」

「私、あの音嫌いな」

「と、申しますと」

「氷がギシギシアンアン軋む音よ」

「それは、盲点でございました。……アンアン？」

「あれは人を狂わせる。近い将来兵器になるかも知れないわ」

「おぞましゅうじげにますね」

「……あら、何故かしら。床が濡れているわ」

ラミエルの視線に釣られて、ビリーが床に視線を落とす。

「これは、由々しき事態」

「あれね、雨漏りというやつね」

「私も、そう存じ上げます」

「何とかできるかしら」

「お任せください!」

そう言っつてビリーが魔法を唱えると床を濡らしていた水は溶けかけていた氷毎蒸発し、水蒸気と化した。

「流石ね、仕事が速いわ」

「光栄にございます」

「でも、少し蒸すわね」



### 第三章 く気になる依頼（1）

翌朝、シユイたちはベチユア亭で朝食とは思えない豪華な食事をし、昨晚丘の上から見えた、町の中央に聳え立つ大きな樹に向かっていた。キャノエには背の高い建物が少なく、町の中であればどこからでも見上げることが出来るようだった。

「フォルストロームではあの樹は長老樹って言われているの。千五百年くらい前から生えているみたい」

ミルカは歩きながらそう言った。

「凄いな、そんな昔からか。戦役の時も無事だったのか？」

「うん、独立戦争の時もここだけは戦渦に巻き込まれなかったんだ」

元々フォルストロームは魔族<sup>デモン</sup>の皇帝を頂くザークイン帝国が支配する植民地だった。獣族<sup>ビースト</sup>は魔族<sup>デモン</sup>の尖兵として駆り出され、不当な差別に喘ぎながら人族との戦いに投入されていた。ところが、およそ300年前に世界大戦が勃発し、戦乱の渦中に自由を求めた獣族<sup>ビースト</sup>たちがザークインに反旗<sup>ひるがえ</sup>を翻した。

その後ザークインの勢力は衰退の一途を辿り、広大な領土が少しずつ切り取られていった。西方に位置する森族<sup>エルフ</sup>の王が治めるエレグス王国。南方に位置する獣族<sup>ビースト</sup>が治めるフォルストローム。東方に位置する人族<sup>エイエル</sup>が治めるセーニア教国、そして北方に位置する魔族<sup>デモン</sup>が治めるルグスプレトン連邦。これらは他の国々に比べて領土が広く、人口が多いこともあって四大国と言われている。今現在、率先して戦争を行っている国は殆どない状態だ。

戦渦に巻き込まれなかったというだけあって、キャノエの町の建物はかなり古めかしいものが多い。セーニア教国の近代的な町々と

違い、自然人工物が調和した独特の雰囲気がある。町に風車や水車がやたら多いのも特徴だろう。ちよつと郊外に行けば粉引きの水車が、山間部にいけば山風を利用したたくさん風車が並んでいるらしい。

「確かに、歴史を感じる町並みだな」

シユイは周りを見渡しながら言った。

「お、見えてきたぜ」

ピエールが樹の少し下の方を指差した。そちらを見ると円柱形の白い建物があった。

「あれがそうか？」

「ええ、キャノエのギルド銀行よ」

マーシナー

傭兵の報酬は他の職業と比べてかなり多いため、依頼を達成したら銀行に預けるのが基本らしい。銀行のことだけではない。適当に相槌こそ打っていたものの、昨晚二人から聞いた話は耳新しいことばかりだった。

確かに、わずか四日で40万パーズだもんな。

依頼の度にぶらさげる布袋が増えていくのでは、直ぐに嵩張<sup>かさば</sup>つて、或いは重くて持ちきれなくなるだろう。仮に持てたとしても、今度は盗賊に付け狙われる。馬車や貿易船の護衛を依頼する人も引つ切りなしであるからして、決して昨今の治安は宜しくないのだ。

ニルファナがあつさりとして50万パーズ貸してくれたのも俄然納得がいった。C級任務一回でこれならば、ランカーにまで上り詰めているニルファナは間違いなく大金持ちだ。

まだ開店して間もない時間だったからか、銀行の受付はがら空きだった。

「よし、とつと入れようぜ」

ピエールはそう言うなり空いている受付に並ぶ。

「そうね、早く済ませましよう」

ミルカも同じように、ピエールの右隣の受付に進んだ。

シユイも並ぼうとし、そこで肝心なことに気付いた。口座を作っていないかったのだ。慌てて踵を返し、作成依頼の用紙を取ると一本足の丸い硝子テーブルの上で記入し始める。身分証を横に置き、必要事項をさらさらっと埋めていく。程なく空欄が漏れなく埋まっているのを見直し、筆を置こうとした。

「書くの早っ！ 何だか気色悪！ っていつか、シユイ口座持ってたの！？」

既に手続きを終えたのだろう。気がつくともミルカがシユイの後ろに立っていた。その言い草はあんまりな気がした。

速記法マフセルは魔法を使う上で非常に重要な技術だ。魔印ルンを綴ること、これは宙に文字を描いて詠唱と似たような効果を得る意味がある。

それを素早く出来れば魔法の発動もスムーズに行えるというわけだ。「あ、ああ。前に傭兵をしていた時は地方の銀行口座を使っていたからな、ギルド銀行の口座は持っていなかったんだ」

「ふーん、なるほどねー」

適当な事を言っただけで誤魔化したけど、どうやら怪しまれずに済んだようだ。そうは言っても、最近どうも綱渡りなのは否めなかった。もう少し予習して置かないとボロが出るのは時間の問題だろう。シユイは不勉強を反省しつつ受付に足を運んだ。

「畏まりました、口座作成をご希望ですね。身分証はお持ちですか？」

行員の女性が訊ねた。

「ああ、これだ」

まだ新しい身分証を提示すると、行員が目をじくじく走らせた。「シユイ・エルクンド様。はい、結構です。こちらの口座作

成は最低10万パーズからの入金が必要ですが」

「ああ、これで頼む」

布袋から10万パーズきっちり数えて出す。

「確認させていただきます。はい、確かに10万パーズ。承りました」

「それから、こちらの30万パーズを同じギルドの傭兵に振り込んで欲しいのだが」

そう言つて、残りのお金を袋ごと差し出した。ニルファナに借りた金を一刻も早く返すためだ。もつとも、借りていた五十万パーズの半分以上をこんな短期間で返せるとは全く思っていなかったのだが。

「畏まりました。振込先の支店名と通帳番号はお分かりになりますか？」

シユイは行員に尋ねられて初めて、肝心なことを知らなかったのに気が付いた。

「い、いや、ちょっと聞いていないんだが」

行員はそれを聞いてちよつと困つたような顔をした。少しの間考えてから、一応お相手のお名前を聞かせていただいても宜しいですか、とそう言った。

「あ、ああ。ニルファナ・ハーベルだ。」

「それはもしかして、ランカーの？」

行員は直ぐに反応した。所属するギルドも言わずに名前だけわかるのだから、彼女の知名度は推して知るべしだ。

「そのニルファナだ」

「それなら検索の必要はないですね。畏まりました、こちらをニルファナ様の口座へお振込みですね」

「ああ、願います」

五分程度のやり取りを経て、何とか手続きを終えたシユイは、入

り口の前にいる二人の下に戻った。

「シユイつてば、ハーベルさんにお金借りてたの？」

おもむろにミルカが言った。かなり遠くにいたのに聞こえたらしい。流石は獣族<sup>ビースト</sup>、恐ろしい地獄耳だ。純粹な感覚能に置いては人族の比肩し得るところではない。

「ああ、50万程ね。彼女はくれるって言っていたけど、他の事でも世話になりっぱなしだからな。流石に断った」

「へー、意外と律儀なんだな。そんな格好なのに」

ピエールがニヤッと笑う。

「……格好は関係ないだろ」

シユイは口を窄めて反論するが、二人の間にホーヴィの時みみたいな険悪な雰囲気はなかった。僅か数日ではあるが一緒に時を過ごしたことで、お互い徐々に気を許し始めていた。

「そついえば、今日って依頼の更新日だったよな」

銀行から出るなりピエールが言った。

またまた聞き慣れない言葉にシユイは、そろそろ覚え切れなくなってきたぞ、と首を傾げた。

「月曜だからね。良い依頼書入っているかもしれないし、早速行ってみる？」

良くわからないが、とりあえず賛成してみる流れだろう。うんうんと頷いてみた。

「じゃあ、それで決まりね。ムウルの支部はここから見て長老樹のちょうど反対側だよ」

三人は再び長老樹に向かって歩き出した。

町の中央に向かうにつれ、長老樹が視界を席卷してくる。気が付けば頭上は巨大な緑葉で覆われていた。密集した木の葉の隙間からは所々木漏れ日が差し込み、地面が帯状に照らされている。それでも尚、根元までは50m程の距離があった。峻巖に聳え立つ長老樹は、薄らと発光しているようにすら見えた。

樹齢千五百年、か。シユイはただ周囲に満ちる生命力に圧倒されていた。この樹に比べ、己のなんとちつぽけなことか。そうとまで老け込む齢でもないのだが、その雄大な姿は見る者を引き込む何かを裡に宿していた。

「うーん、この樹見上げると小さい事なんかどうでも良くなっちまうな」

「心が大きくなるよね。何回見ても飽きないよ」

気がつけば、二人だけでなく周囲の観光客と思しき人々も樹に見蕩れていた。芝生の上で麻布を敷き、のんびりと座っている家族もいる。それを見て、ふとシユイの脳裏に懐かしい風景が過ぎった。小高い丘の上に立つ一本の巨大な樹。その樹の下で友達と追いかけてっこをしている。そして

その続きを思い出した刹那、シユイの心は海の底へと沈んでいく。光すらも届かない、青い闇に呑み込まれる。気がつけばさわやかな緑の香りも、神秘的な雰囲気も、何もかもがどうでも良くなっていた。

「……さて、そろそろ行くか」

シユイが二人を急かした。

「ん、ああ。遅くなっちまうしな」

「そうだね」

今のは、何だろう。

ミルカは我先にと歩き出したシュイの後ろ姿に、何か違和感を覚えて立ち止まる。

「……どうした？」

シュイが振り返った。別段変わった様子は見受けられなかった。

「……ううん、何でも！」

気を取り直し、ミルカは再び歩き始めた。

三人は樹の根元をぐるりと、左に回るように歩いてギルド支部を目指した。キャノエのギルド支部に辿り着くと、入り口の前から人だかりが出来ていた。その様子にシュイは啞然とした。ホーヴィよりも幾分大きいその建物の入り口には、既に横三列の行列が出来ており、とても建物内に入れる状態じゃなさそうだ。

「今日もお客さん多そうだねー」

「へへ、いいのあるといいな」

ミルカとピエールはどこか澁刺とした表情で声を交わした。

依頼人。そうか、今日は依頼の受付日なのか。

シュイはやっと事情が飲み込めた。月曜日は客が依頼を頼みに来る日なのだろう。そういえば、ニルファナと初めてホーヴィを訪れた時も月曜日だった。巨大な掲示板がびっしり埋まっっていてびっくりしたのは昨日の事のように思い出した。

「裏口から入ろう。シュイ、こっちだよ」

ミルカに先導され、三人はごった返している入り口を避けるようにして建物の裏口に向かった。

周りの芝生が伸び放題の裏口では、既に何人かの傭兵が開店を待っていた。どうやらまだ扉が閉まっただけで入れないようだ。と、見知らぬ男がシユイたちの方に気付く素振りを見せ、近寄って来た。

「おお、やつぱピエールじゃねえか。一年ぶりだな」

「え……、あ、アルマンドさん！」

ピエールが嬉しそうに叫ぶとアルマンドと呼ばれた傭兵が手を翳した。

背丈はかなり高く、180は軽く越えていそうだった。灰色の短髪で無精髭を生やし、額には古い刀傷が見受けられた。年の頃は三十半ばくらいに見えた。肩当てが存在しない白銀の軽鎧を身につけ、シユイの鎌よりも巨大な槍を背負っている。如何にも歴戦の戦士と言った佇まいで、一見するだけでわかるほどの闘気が漲っていた。

「知り合いなの？」

ミルカがピエールに訊ねた。

「ああ、同じジウー地方の出身で、シルフィールに入ったばかりの時に色々と面倒見てくれたんだ。準ランカーの凄腕だぜ」

「ははは、そんなたいしたもんじゃねえよ。何せその上には十九人もいるんだ」

アルマンドは快活に笑った。

準ランカーか、伊達じゃないな。

肌を刺すような闘気に、シユイはアルマンドが相当な実力者であることを確信する。それと同時に、ニルファナの他にも下の者の面倒を見ている傭兵がいることを知り、少し不思議な気持ちにもなった。

「あ、私はミルカ・フランティアっています。まだ駆け出しでランクですけど宜しくお願いします。準ランカーなんて凄いですね！」

ミルカが勢いよくお辞儀をした。



「おお、元気が良いねえ。宜しくなお嬢ちゃん。さつきも言ったけれど準ランカーなんてそんなたいしたもんじゃねえ。あんたなら四、五年もすればなれるさ。……っと、そっちの黒い旦那は？」

「俺はシュイ・エルクンド。シルフィールにはほんの少し前に登録したばかりだから、同じく駆け出した。どうぞ宜しく」

そう言つてシュイも軽く頭を下げた。

「……！ ほう、あんたが……」

「へ、俺を知っているのか？」

返つてきた意外な反応に、シュイは首を傾げた。何故か周りにいる傭兵たちからも視線が送られてくるのを感じた。

「傭兵たる者、情報には敏感でなきゃいかんからな。ニルファナ・ハーベルの愛弟子つて聞いているぜ。彼女、意外とそういうのに無頓着だからな。あんたの名前はもう噂になつちまつてる」

「……愛弟子？ ……無頓着？」

「初の推薦だつて言うんだから、文句なく愛弟子だろ。それから、彼女はいちいち気を使わない性格だからな。誰かに聞かれりゃあ気軽に喋つちまう」

「え、私が推薦した傭兵？ あー、シュイの事が。確かに推薦したよー」

そんなニルファナの声が鮮明に脳裏に浮かんでくる。自由奔放な彼女のことだ。アルマンドの言う通り、己の発言がシュイに対する周りの心証に影響を与える事など毛筋ほども気にしていないだろう。その反面、人の細かい言動や行動にはケチをつけるのだから質が悪い。でも、わざわざ20歳で登録してくれたりもしたから、無頓着つてこともないような。

戸惑い気味のシュイを見て、アルマンドは大袈裟に手を広げてみせる。

「おいおい、何も全部鵜呑みにすることはないんだぜ。ほら、やつかみや嫉妬も混じっているだろうから。ま、暫くは気をつけたほうがいいかも知れないがな。ははは」

「

シユイは何となしにピエールを見る。と、ほぼ同時にお互いを見ようとしていた事に気付き、曖昧な笑いを交わす。

アルマンドは笑いながらも鋭い視線をシユイに送る。

「まあでも、Cランクでの登録だったっけか？ 実際見た感じ、Bランク傭兵だつて言われても納得できるけどなあ」

「……えっ」

「まじかよ！」

今度はミルカとピエールが顔を見合わせた。

Bか。そういえばニルファナさんもそんなこと言っていたな。目立たないようにすると、経験を積んだ方が良いつていう理由で見送つたんだっけ。

「少なくとも、お前ら二人よりは隙がねえ。周囲への警戒心が半端ないんだよ。こうして喋ってる時でもな」

「買い被り過ぎだと思っただけだね」

シユイは肩をすくめた。

「いやいや、そんなことは　　っと！」

突如アルマンドは体勢を低くし、腰に下げたある小さなナイフを左手で抜くと、シユイの顔目掛けて凄まじい速さで投げつけた。

殆ど反射的に、シユイが首を右に傾ける。ナイフはシユイの頬すれすれを通り過ぎ、後方のギルドの建物の外壁に突き刺さった。ナイフは小刻みにぶれてからその動きを止める。

「……すっ！」

「……今の避けれたのかよ」

ナイフの突き刺さった壁とシユイを二人はまじまじと見比べている。いやいやいやいや、避けてなかったら死んでるってば。てか、投げナイフでコンクリを易々と貫くなんて有り得ないだろ。シユイは肩越しに刺さったナイフを見て薄ら寒さを覚えた。

「ほらな、俺の目は確かだろう？」

アルマンドは再び快活に笑う。

「……実力を確かめるにしてもやり過ぎじゃないか？」

シュイが慄然<sup>ふせん</sup>として反論した。一歩間違えば棺桶に入っていたんだから何を言っても言い過ぎじゃないはずだ。

「はっはっ、悪い悪い。でも、少なくともこの場の連中は納得しただろ。お前が？シルフィールの傭兵？を名乗るのにさ。それに……ほら、あれだ。お前なら絶対に避けてくれると確信していたからやっただぜ」

何だろう、その如何にも後から取ってつけたような言い回しは。そう思うシュイを差し置いて、傭兵たちはアルマンドとシュイの今のやりとりを見て感嘆の声を上げていた。

「改めて紹介しておくぜ。アルマンド・ゼフレルだ。アルマンドで構わないぜ。これからよろしくな。ミルカ、シュイ」

アルマンドは大きな手を双方に差し出し、握手を求める。

「よろしくね、アルマンドさん！」

「……よろしく」  
二人は、アルマンドと力強く握手した。やたらとゴツゴツした手が印象に残った。

それから数分して、ようやく裏口の扉が開き、支部の男性ギルド員が出てくる。

「お待たせいたしました、準備が出来ましたのでお入りください」

その声と共に、傭兵達は我先にとロビーの掲示板目指して裏口に入っていく。

「さ、俺達も行くぞぜ！」

アルマンドの声に三人は頷き、人の流れに乗ろうとした。

「……アルマンドさんはちょっと待ってください」

「え、何？俺だけ？」

突如声をかけられたアルマンドは不思議そうに振り返った。ギルド員は無言で建物の壁を指差す。そこには、先程アルマンドが投げ付けたナイフが深々と突き刺さっている。

「……てへ」

アルマンドは頭に手をやり、笑って誤魔化そうとしたが

「 後日の始末書請求とどちらが宜しいですか？」

ギルド員はあくまで冷淡に対応した。自業自得と言わざるを得なかった。

### 第三章 〱(2)〱

建造物損壊の罪を犯したアルマンドを置き去りにし、三人がロビ―に辿り着くと少し小さめの掲示板が三つあった。早速、シュイたちも他の傭兵たちに混じって依頼書を確認しに掲示板に近づいていく。

今度はB級の任務もやってみよう。そんな事を思いつつも依頼書を適当に流し見ていく。程なくして、向かって右側の掲示板に一風変わった依頼を目にした。

>魔法教えてください。へえ、こんなものもあるんだ。

意外にもB級の依頼書だった。実際、飲み込み具合に関しては個人差があるから、拘束時間が長くなる可能性を考えるとリスクが高いと言えば高いのかも知れない。ただ、気になったのが何故傭兵ギルドに頼むのか、ということだ。魔法の家庭教師なら少し探せばどの町でもそれなりに見つかるはずだ。

少し心惹かれるものがあったが、とりあえずB級の任務が平均でどれくらいの報酬なのかも覚えておきたいと思い、他の依頼書も見ていることにした。

これは>影獣退治か。うーん、強いのか弱いのかもわからないな。

後で図書館にでも寄るかと考えていると、誰かが横からぶつかってきた。咄嗟に、シュイは黒衣のポケットに手を突っ込んだ。財布を擦られたのではないかと勘繰ったのだ。あまり良い癖でないことは疑う余地もない。ちゃんと財布がそこにあることを確認し、ようやく口を開きかけた。

「ああ、すま」

「ポーっと突っ立ってんじゃねえよ。クソが」

謝罪の言葉を逸した代わりに、自分からぶつかってきてその言い草はなんだ、とシユイは男を睨んだ。男は見た目二十台前半といったところだった。身長がやや高く、細身でまあまあハンサムと言えなくもない顔立ちだ。ただし、目つきがあまりに悪いので印象はすこぶる宜しくない。髪は見たこともないような鮮やかな青色をしていた。もしかしたら染色液を使っていたのかも知れない。こういう奴はどこにでもいるが、シルフィールにまでそんな奴がいることが何だか気に食わなかった。

「……何だ？ 手前、まさかBランクの俺様に文句があんのか？」

Bランクと言われて一瞬躊躇するが、それよりも理不尽に対する怒りが勝った。

「へえ、Bランクにもアンタみたいなのが混じっているのか。そりゃあ皆さんもさぞ迷惑しているだろうな。お気の毒様だ」

「……オイ、吐いた言葉は呑み込めねえぞ」

男から相当な怒気が漂ってきた。眉はVを通り越してUの字を描かんという勢いだ。物理的に不可能だとは思うが見てみたい気がする。

「はあ。ところで、シルフィールに性格適性テストがなかったのは聊か残念なことだと思わないか？ そうすればお互い顔を合わせる事もなかったろうに」

「……あん？」

男は暫くその意味を考えていたようだが、どうやら思い当たったのだろう。顔を引き攣らせ、次いで紅潮させた。まるで発情期の岩魚の腹のように。

「……まさか此処がギルド内だから安全だとか思っているんじゃないだろうな。俺様はそういう当てこすりが一番嫌いなんだよ」

「おや、単なる冗談なのに。ああ、そうか。御自分で性格の悪さを自覚していたということか。普通の人なら首を傾げるだけで済む話なんだけれどな。こりゃ失敬」

男の顔から表情が消えた。次いで男の右手が震えた。

半ば反射的に後方に跳躍した。その刹那、先ほどまでシユイが立っていた空間を剣が薙いだ。勢い良く剣が抜かれたせいで風が巻き起こり、顔を撫でていった。

「……おいおい、ただの脅しでそんなに逃げ腰になるなよ」

男はその性格に負けぬくらい歪んだ笑みを浮かべた。

明らかに当てる気マンマンだったのは言うまでもなかった。その場にいたら首から上がなくなっていただろう。

そっちがその気なら、とシユイは背負う鎌に手を掛けた。

「 やめろ」

穏やかだが、それでいて力の籠められた声が響いた。シユイは黒衣の下で一瞬ゾクリと身を震わせた。声が発された方を振り向くと魔道士らしき銀髪の森族<sup>エルフ</sup>の青年が立っていた。青年だけではない。気が付けば、周囲からもいくつかの殺気が迸<sup>はなはな</sup>っている。

戸惑い気味のシユイに構わず、森族の青年は言葉を続ける。

「貴様等がやっているのは業務妨害であり、他の傭兵たちに対しての単なる迷惑行為。そして、ギルド全体の品位を貶める許し難い罪だ。これは忠告ではない、警告だ。次に面倒を起こした場合は実力行使させてもらおう。当然、命の保証はしない」

「……ちっ」

斬りつけてきた男は森族<sup>エルフ</sup>の男とシユイとを交互に睨んでいる。まるでどちらに斬りかかるうか迷っているかのように。

「 貴様はエグセイユ・スキーラ、だったな。過去にも他の支部で数回に亘って問題を起こしているらしいが、うちは他の支部ほど甘い顔はしない。シルフィールは人材が豊富だ。Bランク如きが一

人抜けたところで、代わりの者はいくらでもいる」

エグセイユは齒を軋ませた。それを無視し、森族<sup>エルフ</sup>の青年はシユイの方へと向き直る。

「貴様は、新人か？」

「……ああ」

「名前は」

僅かに逡巡したが黙っていても利はないと判断し、不承不承答える。隠したところでどうせ直ぐに発覚するだろう。

「シユイ・エルクンドだ」

「そうか。確かハーベル嬢が推薦したとか。……それで？ お前は、今自分がやったことの意味をわかっているのか」

「……何だと？」

「お前は、推薦してくれた彼女の顔に泥を塗った」

一瞬、青年の言っている意味がわからなかった。次いで、己の行為のことを指摘されているのだとわかり、シユイは心外だと言わんばかりに声を荒げた。

「冗談じゃない！ 仕掛けてきたのはそいつの」

「たとえそうだとしても、余計な一言で剣を抜かせたのは貴様だ」

「……な」

何だそれ、と声が漏れた。挑発されても我慢しろと言わんばかりの言動に、やるせない怒りが全身に漲みなぎってくるのを感じた。その様子を冷やかに見つめていた森族エルフの青年は、おもむろに顔を険しくした。視線だけで壁を貫かんとする迫力があつた。

「まだわからないか？ 我々はギルド・シルフィールに属する傭兵。フリーの傭兵はともかく、ギルドに籍を置く以上、我々は信用商売に従事しているのと同義である。もし、今貴様等のやった行いが外部に漏れ、そのせいで依頼の件数が減ったらどう責任を取るつもりだ！」

シユイが絶句する傍ら、エグセイユが面白くなさそうにそっぽを向いた。

「ここにしか居場所がないという者はごまんといる。その者らに迷惑をかけるような行為は今後慎んでもらおうか。先達せんだつが文字通り命を懸かけて積み上げてきた信用を崩しかねぬ者は、遠慮なく排除する。忘れるな」

ぐうの音も出ない真つ当な論理だった。何よりシユイ自身、此処



にしか居場所がなかった。

「……以後、慎む」

今にも消え入りそうな声だった。フードの下で涙を堪えるのがや  
つとだった。

「……エルクンドだったな。今回は新人と言うことで処分は見送る  
う。だが、次はないぞ。覚えて置け。それから、スキーラ。貴  
様はギルドポイントの減点及び罰金200万パースだ」

今まで黙っていたエグセイユの額に青筋が浮かんだ。

「ふざけんな！ ぼり過ぎ」

「嫌なら除名でも構わん。どちらかを選べ」

「……くそが」

毒づきながらもエグセイユは小さく頷き、次いでシュイを鋭く睨  
んだ。その視線には禍々しさすら感じ取ることができた。シュイも  
真っ直ぐに睨み返した。

視線を合わせてわかったことが一つ。こいつとは永遠に分かり合  
うことはない。シュイは、ピエールと揉めた時とは違う類の確信を  
得ていた。

ふと、エグセイユはゆっくりとシュイの方へ歩み寄ってきた。そ  
して、擦れ違いざまに呟いた。

「……これからはせいぜい後ろに気をつけるよ。一年以内に誰に  
もわからねえように、必ず始末<sup>バラ</sup>してやる」

生理的嫌悪を伴うねこなで声だった。今事を起こせば誰の仕業か  
丸わかりだから、ほとぼりが冷めた頃に、といつつもりだろう。あ  
の青年の言葉もエグセイユにはなんら意味を成さないようだ。シュ  
イはやっぱりと言葉を返す。

「……早かろうが遅かろうが同じことだ。せめて身体を、特に脇の  
下とシモの方は念入りに洗っておけよ。葬儀屋に迷惑だからな」

エグセイユは舌打ちし、肩をいからせてその場を後にした。ふと  
視線を感じ、そちらを見ると、森<sup>エル</sup>族の青年が表情を殺してこちらを  
見ていた。まさか、聞かれていなかっただろうか。シュイは少し不

安になった。

森族<sup>エルフ</sup>の青年がその場を立ち去ると、段々と周りが喧騒を取り戻して来る。傭兵たちは突っ立っているシユイをあからさまに避けるように通り過ぎていく。擦れ違いざまに冷たい視線を浴びせる者もいる。

あの騒ぎを起こしたことで一瞬にして信用を失ったのだ。それに気づき、愕然とした。続いては世話になったニルフアナに迷惑がからないかという不安が脳裏を過ぎる。

そんな中、「よっ」と後ろから誰かに話しかけられた。振り返るとそこにはアルマンドがいた。

「途中から見てたぜ。しっかし、あれだな。お前って意外と喧嘩っ早いのだ。あんまりそういう感じしないけれどなあ」

「……悪かったな」  
ぶっきらぼうにそう言ったが、平然と話しかけてくれたで少し救われた気分になった。そんな自分がまた、何だか無性に情けなかった。

「まあまあ、そんなしけた面すんなよ。良かったじゃねえか、減点されたわけでもねえし、罰金も免れてんだからよ。俺なんか器物損壊で50万パーズも……トホホ」

「……フード被っているんだから顔は見えないだろ」  
シユイがしけた面という指摘に抗弁した。

「そんなもん見なくなつて想像は容易に付くんだよ。実はお前泣いちやってるだろ」

「な、泣いてなんかいない！」  
慌てて反論し、次いで唇を噛む。

「……入ったばかりなのに、こんな問題を起こしちゃうなんて……。もう、彼女に合わせる顔がない」

「ああ？ お前あんな言葉を真に受けてんのか」

「……え？」

「さっきの銀髪はこの支部の長だ。つまりは、問題を起こされたら一番困った立場に立たされるやつってことだ。あれくらいの脅しは誰にだつてするだろうよ。……大体お前、ハーベルのことを少し見くびつてねえか？ 彼女は些細な諍い如きで潰れる顔なんてしてねえぜ。あれくらいでランカーの名誉に響くわけねえよ」

「……ほ、本当に？」

顔を上げたシュイを見て、アルマンドは瞬時に笑みを消す。

「と、励ますのが普通だろうが、そのつもりはないぜ。彼女の名誉を傷つけたなら手前で埋める。どうやってかはわかるよな？」

「……依頼」

「そういうこつた。依頼人の信用を得ていけば、自然と名も上がっていく。きつちりやって、数こなして、経験を積み上げていくしかねえ。それから、世の中どこに行つたつて嫌なやつはいる。それならそれで、そういう連中との付き合い方、あしらい方を覚えなきゃ駄目だ。どんな経験も糧にしてやるつてくらいの意気込みがないと、到底上は目指せないぜ」

「……わかつた。ありがとう、アルマンド」

「ああ？ や、止めるよ。お礼なんてこそばゆいだろ」

そう言い、アルマンドは照れ笑いを浮かべた。

アルマンドが立ち去つた後、シュイは再び掲示板に向かつた。そうこうしている間に、依頼書はかなり剥がされていた。流石に少し焦ってきた時、誰かに長い袖を引っ張られた。シュイが振り向くとピエールがいた。

「探してるところ申し訳ないが、ちよつといいか？」

「ん、なんだ？」

シュイが尋ねた。

「これ、俺たちと一緒にやらないか？」

そういつてピエールは依頼書の控えを見せる。

Ｃ級任務、大毒蜂退治、定員三名（残り一名）、報酬75万  
パーズ（達成後即払い）、任務時間四日前後、締め切りまで残り七  
日。

Ｃ級ではあるが、報酬は悪くなさそうだった。それに、魔物退治  
とは如何にも傭兵らしい任務である。

「そうだな、やるか」

「流石、話せるぜ！」

ピエールはニヤッと笑う。もしかしたら、気を使ってくれていた  
のかもしれない。あんな騒ぎを起こした後では、暫く自分と組んで  
くれる人もいないだろう。シュイはピエールの気遣いに深く感謝し  
た。けれども、受付に向かった二人には予想外の事態が待っていた。

「え、定員締め切っちゃったんですか!？」

ミルカが受付の言葉を聞いて驚いた。

「申し訳ありません。つい二分程前に向かい側の受付に依頼書をお  
持ちの方がいらっしやいました」

二人はその言葉を聞いてがっくり頂垂れた。どうやら、シュイを  
人ごみの中から探している間に別の傭兵が三人目に入ったらしい。

「あちゃー、……どうしよ、キャンセルする？」

「そうだな。誘ったのは俺達だし」

ピエールは頷いた。

「いや、そのまま受けてくれ。キャンセル料かかるし減点だってさ  
れるだろ？」

「ええ？ でも……」

二人は本当にすまなそうだったが、シユイにはその気持ちだけで十分だった。

「俺のことなら気になってくれ。他にも良さそうな依頼はたくさんあるし、それを受けて見るさ」

やっと打ち解け合った二人と依頼が出来ないのは、正直言っただけで残念ではあったが、B級を受けてみたいという気持ちも多分にあった。それに、先ほどの騒ぎから間もなく自分と組んだら、もしかしたら二人まで白い目で見られるかも知れない。それだけは御免だった。

「うう、ごめん。じゃあ、お言葉に甘えるね」

「……今度、また一緒にやろうな」

「ああ、それまで身体に気をつけるよ」

二人が別れを惜しんでくれていることに嬉しさを隠せず、シユイは笑みを零した。

「うん、またね！」

ピエールとミルカは手を振りながらロビーを出て行った。

### 第三章 〓(3)〓

ミルカたちを見送ってから掲示板に戻ると依頼書は大分剥がされていた。シユイはそそくさと先程見たB級の依頼書を確認する。

あれ、影獣とかいうのが無くなってる。

依頼書は既に誰かに持ち去られていた。仕方なく、先ほど見たもう一つの方の依頼書を探してみる。

えーと。お、>魔法教えてくださいく。間違いなくこれだ。

幸いこちらはまだ残っていた。ザッと概要を確認してみる。

B級任務、基本魔法の家庭教師、定員一名、報酬150万パ  
ーズ(達成後即払い)、任務時間?日前後 締め切りまで残り七日。

任務時間?日ってのは、やっぱり覚えてくれるまでってことだよな、きつと。

確かに、その点について一抹の不安はあるが、報酬の額は非常に魅力的だ。

ま、失敗したらしただいいか。

定員一名だから、失敗したところで直接的に誰かに迷惑をかける事もない。前向きに考える事にし、依頼書を剥がして受付に持っていく。

「お疲れ様です。依頼の受諾手続きですね?」

「ああ、これをお願いしたい」

そう言っつて依頼書を見せる。

「承りました、身分証の確認させていただいて宜しいですか?」

「ああ、わかった」

シユイは皮袋から身分証を取り出し、受付に見せる。

「シユイ・エルクンド様ですね。はい、結構でございます。つきまで、依頼人の方がこちらにいらっしやっていたので直ぐ連絡を取って見ます。少々お待ちいただけますか？」

「わかった」

シユイが頷くと、受付は連絡用の青い魔石を取り出し、念を込め始めた。程なく、青い石は砕け散り、代わりに水色の鳥を模した可愛らしい霊体スクリットが現れた。それは受付の手の平から宙へと舞い上がり、いずこかへ飛び去っていった。

五分ほどすると、如何にもどこかの貴族、といった感じの亜麻色の髪の女が姿を現した。年の頃は三十前後だろうか。貴族と言ってもひらひらのドレススタイルではなく、フード付きの青いケープに黒いベスト、白いズボンといった狩猟にでもいけそうなフットワークの軽い出で立ちだ。おそらくアウトドア派なのだろう。肌は綺麗な小麦色に日焼けしている。

「依頼を受けてくださる方が見つかった、と連絡を受けたのですが？」

威厳ある態度で、女は受付に話しかけた。

「はい、こちらの方です」そういつて受付はシユイの方を示す。

女の顔はシユイを見た途端、あからさまに顔が険しくなる。全身黒ずくめでしかも巨大な鎌を背負っているのだから無理もないが。

「……貴方が？」

「……ああ」

失敗か。返事はしたものの、シユイは訝いぶかる依頼人を見て早くもそんな事を思い始めていた。依頼人が断ったらその時点で終わるだ。

女は暫く悩んでいたが、シルフィールの知名度を考えたのだろう。「……ま、まあ人は見かけによらない、といった格言もございますね。そうね、あなた、何か魔法を使ってくださるかしら」そう言

った。

実力を見て判断する、ということらしい。

「……はあ」

と言われても、何を使えばいいのやら。シユイはあれこれと模索を始めた。

付与魔法を見せるにしても、鎌の布を巻き直すのが面倒くさい。

建物内で攻撃魔法、障壁魔法は論外。防御魔法はまだろくに使いこなせない。回復魔法　そもそも怪我をしていない。

「……どうしましたの？　早く使って見せてくださらない？」

気がつけば、周りにいる傭兵たちがちらほらと、こちらの様子に注目し始めている。ただでさえさつき悪目立ちしたのだ。とつとこの場を切り抜けないとまた面倒な事になりそうだった。

と、打って付けの魔法があつたことを思い出す。

「……まさか、できないんですの？　シルフィールの傭兵さんとも

ある」

>これでいいかな？<

「うー!？」

女は途端に、周りをきよろきよろ見回した。受付の女は、依頼人のその様子を見てきよとんとしている。

>どうかしたか？　魔法を使え、と言われたから使っているんだけど<

そこまで言われて、やっと謎の声の発信源が目の前の黒ずくめの男だと気がついたようだ、女は見開いた目でシユイをしげしげと見つめている。それがあまりにもおかしく、シユイは必死に笑いを堪える。美人が台無しだよ、と心の中で呟きつつ。

「あ、あなたこれは……」

女がたどたどしく声を出した。

>念話というものだが、ご存知ないかな？<



シユイは、自分の頭をトントンと右人差し指で叩いた。勿論、知らないはずが無い。上級魔法の中でも使い手の少ない魔法としてかなりポピュラーだ。

>で、どうする？ キャンセルする？ それとも……<

ギルド支部から外に出、女についていくと、背の高い外灯に一頭の立派な馬が繋がれていた。全身が黒く、毛並みも揃っている見事な若馬だ。

「貴方、乗り物は？」

女が馬を繋いでいる紐を解きながら尋ねる。

「要らない」

シユイがそういうと、女は何故か首を捻った。どうやら質問に対する答えの意図が違ったようだ。

「も、持ってないということかしら？」

「えっと？ …… ああ、そういうことか」

シユイが納得したように頷く。

「私の屋敷まで少し距離があるのだけど、あなたの分、馬を借りましょうか？」

一応依頼を引き受けた、という事で気を遣ってくれているらしい。

「大丈夫。二、三時間でいける距離なら、馬とそう変わらないスピードで走れる」

それを聞いて、女は思わず吹き出した。

「ウフフフフ、お、面白い冗談ですわね」

冗談のつもりはなかったが、どうやら言った事を信じていないらしい。

「まあ、ゆっくり行っても一時間はかからないですし、いいですわ」

「ふむ、気を遣っていたかどうかはありがたいけど、シユイは辺りを見回し、ある一点で目を止める。」

「ご婦人、あの店が見えるかな？ あのお花屋さん」

そう言つて、50m程先にある店を指差した。

「え？ ええ……」

女は怪訝そうな顔をしながらもそちらの店を確認し、頷いた。もつとも、相当に距離が離れているため、眼を限界まで細めないとそれが花屋とわからなかった。

「じゃあ、三秒間だけ目を瞑ったらあの店を見てくれ」

「……わ、わかりましたわ」

一体この男は何を考えているのか、といった様子で女は目を瞑る。

3……2……1……0！

女が目を開け、先ほどの花屋を見ると、店の前に見覚えのある格好の男が立っていた。えっ、と女が周りを見回してみた。つい先程まで隣にいたはずの男は、どこにもいなかった。

「はあ！」

女は力強い掛け声と共に馬に鞭を入れ、畦道あぜみちを疾走していた。勿論、シユイも土煙を浴びないくらいの距離を取りつつ、後ろから遅れずに付いていく。周囲にはのどかな田園風景が広がっている。農水道に水車付きの粉引き小屋、畑の奥には鬱蒼とした森が見える。随分とのんびりした佇まいだ。段々になっている小麦畑の合間合間には、やはり水路が設けられている。シユイがチラリと後ろを振り返ると、既に長老樹の背よりも高い位置まで上っていた。

「そう言えば、自己紹介を忘れていたな。俺はシユイ・エルクンドだ」

「エルクンドさん、ね。私の名前はケイ、ケイ・モーガンですわ」

ケイと名乗った女は続けて尋ねた。

「それにしても、何故さつき目を瞑らせましたの？ そのまま走っても良さそうなものなのに」

「よりびっくりさせる演出だ。あまり気にするな」

それを聞いて、ケイは「見かけによらず、子供じみた事をなさるのね」と笑った。

子供で悪かったね。

シユイは聞こえないくらい小さい声で呟いた。

美しい田園地帯を抜け、赤い薔薇のフラワーアーチを潜り抜けると、眼前に蔦で覆われた古めかしい屋敷が姿を現した。

「どうどう」

ケイは手綱を引き、ひらりと馬から飛び降りる。そつのない身のこなしからすると、ケイも相当に活動的らしかった。やや遅れて、シユイも特に息を切らす事もなく辿り着いた。手すりに馬を繋ぎながらケイは半ば呆れた様子で言った。

「どんな訓練をしたらそんなふうになれるんですの？」

速度の事か、それとも持久力の事かと問うと、両方だ、という言葉葉が返ってきた。

「話せば長くなるが、コツを掴めば意外といけるぞ」と軽く請合う。

「そういえば、魔法を覚えたいと言うのは貴方なのか？ 少しは使えそうに見えるが」

「……いえ、私の……息子です」

不思議とケイの歯切れは悪く、表情も少し暗かった。

子供か、ある意味楽かも。

何を教えるにしても、大人よりは子供の方が呑み込みは早い。本人の感受性が非常に重要視される芸術や魔法なら尚更だ。

「まずは屋敷の中へお入りください。御茶でも入れますわ」

ケイはそういつて豪華な扉を開け、シユイを招き入れた。

「おかえりなさいませ、奥様」

二人が玄関に入ると、執事とメイド4人が出迎える。執事はシュイに気づき、その格好をじろじろと見ている。シュイも珍しかったのか、執事とメイドとを交互に見つめている。

「ただいま、ロディ。外の馬と、お客様の紅茶の用意をお願いしますわ」

「畏まりました。……お、奥様。もしかしてこの方が？」

ロディと呼ばれた執事はシュイに視線を移し、目を丸くした。

「ええ、家庭教師をしてくださるシュイさんよ。こんな格好ですけど、魔法の腕は確かみたい」

「こんな格好。そんなに変だろうか。少しは傷ついてみせた方がいいのだろうか。シュイは少し項垂れてみる。」

「お坊ちやまをこのような者に任せて宜しいのですか？」

シュイの心情を忖度することなく、年配の執事はうさんくさい格好をしたシュイに対し、あからさまに侮蔑の表情を見せた。シュイはむっとして顔を上げた。

「魔法の行使に関しては、教える側より教えられる側の才能に比重が偏る」

「……それはつまり、お主の教え方関係なしに、覚えられるかが決まっているという事ではないのか？」

執事の顔が一層険しくなる。

「そこまでは言っていない。要は打ち込む情熱があるかどうかさ」

シュイはそう言って肩をすくめた。魔法は誰にでも使える。ただ、そのコツを掴むまでが大変で、途中でやめる人間が多すぎるだけのこと。これはどの分野においても良くあることだろうから、魔法だけが特別と言っわけではない。

「シュイさん、カイルは二階の部屋にいますので先に案内いたしますわ」

「了解だ」  
シユイはケイに頷いた。

赤い絨毯の轆いてある螺旋階段を登ると、奥の壁に埋め込まれている美しいステンドグラスから柔らかい日差しが差し込んでいるのが見えた。ケイとシユイは一番奥の部屋の前に来るとドアの方を向いた。ケイが口を開きかけ、一旦口を噤んだのを見てシユイは首を傾げた。

「カイル、いるかしら」

「……何？ ケイさん」

部屋の中から小さいが確かに子供の声が出た。

「以前魔法を覚えたいって言っていたから家庭教師を連れてきたの。鍵を開けてもらえないかしら？」

「……今、忙しいから」

何だ？ この会話。

明らかに違和感があった。お互いの言葉にどこかよそよそしさを感ずる。

「そんなことを言わないで、貴方もたまには外へ」

「うるさいな！」

怒鳴り声がドアを貫き、ケイは思わずたじろいだ。

「……カイル」

「ほつといてよ、……僕なんて別に死んだって良いんだ！」

途端にケイは表情を変えた。彼女らしくもない、今にも泣きそうな顔だった。

>ちよっと、下で話を聞いていいか？<

青褪めた表情のケイは、何とかシユイの方を向いた。

屋敷の一階にあるリビングはかなり広々としており、美しい柄の

絨毯やシンボル入りの立派なソファが置かれている。壁には鹿の剥製や写真等が飾られていて、ぱっと見ただけでもなかなか裕福な生活をしていることが一目でわかった。

「……お恥ずかしいところを」

ケイはシユイにソファに座るよう薦めると、ぽつりと呟いた。

「いや、大体事情は飲み込めた。あなたは、あの子の生みの親ではないのか」

「……やっぱり、わかりますわよね。私は夫、ジェイク・モーガンの第二夫人です。あの子の母、ミゼルは私の親友で、あの子が生まれて直ぐに亡くなりましたわ。私はカイルが二歳の時に再婚いたしましたの」

メイドが話の合間にティーカップを二つ運んで来た。それをテーブルの上に置くと一礼して直ぐに立ち去った。中身はミルクティーのようだ。シナモンの香りが部屋をゆっくりと満たしていく。

「あの子の父親は？」

「カイルの父親、つまり私の夫ですが、セーニア教国の第二師団中隊長を務めておりました。私たちは二年ほど前までセーニアの城下町に住んでいたのです」

フードの奥で、シユイの顔が一瞬強張った。

「優しい人でしたわ。そう、ちょうどその頃のセーニアでは隣国に対する開戦論が持ち上がっていた時期でしたね。夫は和平派にしていたのですが、心労からか病に倒れ、急逝してしまっただのです」

「それは、気の毒だったな。それでこちらへ？」

「ええ、ここは私の実家の近くでしたので。お分かりのように空気も良いですし、子供の教育には良いかと思っただのですけれど。ある日、ついつうっかりして置きっ放しにしていた戸籍票を見られてしまいました、私が本当の母ではないことを知られてしまっただ」

シユイはちゃんと聞いていることをアピールするように深く頷いた。あの子、カイルは声の様子からするとせいぜい十かそこらだろう。多感な年頃にそのような事実を知ってしまったのだから、相当

なショックだったのは否めない。

「あの子は、自分が天涯孤独なのを知って自暴自棄になってしまったのです。一年ほど前からああして部屋に引き籠もってしまいました、何度かは自分の手首を切りつけるような事も」

そう言つてケイは眼をハンカチで拭う。

「なら、あの依頼というのは？」

「あの子は、主人の生きていた頃から魔法に興味を示していたのです。本当なら、ちゃんとした魔法学校等に通わせてあげたいのですが、ごらんの通りで」

ケイは寂しそうに笑った。

「それで、家庭教師というわけか」

「……ええ。心から学びたい物ができたら、部屋の外にも出てきてくれるのではないかと。何より、少しでも生きる希望が見出せるのではないかと考えたのです」

彼女の言葉と表情からは何としてもカイルを外に出したいという想いが伝わってきた。勿論、健康面や精神面も気遣っているのだろう。

「これも訊いておきたい。何でわざわざ傭兵ギルドに依頼を？ 魔法の家庭教師なら探せば幾らでもいると思うが」

「勿論です、実際にそう思いましたけれども何人かに手紙を出してみたのです。ところが一向に返事が来なくて……。流石に変だなと思ひまして、伝手<sup>つて</sup>を辿つて事情を聞いてみたところ、つい最近になつて腕の良い家庭教師の多くが派遣協会をやめてしまったようなのです。何でも、報酬の良い仕事が近隣の国にあるということなんです。少し話の内容にきな臭さを感じた。魔法の家庭教師を大勢雇用するまともな理由などそんなにはないはずだった。

まさか、戦争の準備か。

国家間が至つて平穏な現状で早合点は出来なかったが、全くないとも言い切れなかった。

「フリーの教師は当たり外れが激しいということですし、かといっ

て著名な方は半年待ち、下手すると三年待ちといった状況です。ほとほと困り果てていたんですが、ある知人が勧めてくれたのです。シルフィールは他のギルドと比べて受けてくれる依頼の幅が広いし、腕も良い人が多いから一度行ってみてはどうかって」

「なるほど、大体事情は飲み込めた。じゃあ、最後の質問だけど。あなたはあの子を愛しているか？」

「当然ですわ！ カイルの寝顔を見るたび、私が本当に生みの親であれば、と何度思ったことか」

ケイの言葉からは一切の曇りも感じられなかった。

「そうか、なら問題ないな」

おもむろにシユイはすくつと立ち上がった。

ケイは不思議そうに顔を上げた。

「ちよつとあの子を借りても良いか？」

「え？ え？」

話が飲み込めない、そう言わんばかりに口を半開きにしてるケイに、シユイは畳み掛けるように言った。

甘ったれた餓鬼に本当の世界を見せてやる、と。



番外 〱お嬢様と執事(3)〱

シルフィール本部・最上階

何かに聞き入っている様子のラミエル。手に持っているのは最近発売された伝達用の魔石だ。おそらく、誰かと交信しているのだろう。と、そこへビリーが紅茶ポットの乗ったトレイを持って入ってきた。

「お嬢様？」

「……」

「あの、お嬢様？」

「……」

「お嬢、様？」

「…… 1 - 1 1、 1 - 1 1」

「もしや、何かの暗号でしょうか？」

「…… 来い、来い、来い、来おい！」

「……何となくわかりました」

1分後

「……ふう」

ラミエルはビリーの淹れた紅茶を飲んで一息付いた。

「残念でしたね」

「当たったわ」

「これは、予想外の展開」

「中継の人もそんなことを言っていたわ」

「ということとは？穴？でございますね」

「穴。何だか卑猥な響きね」

「そう言われて初めて気付きました。これから意識してしまいますね」

ビリーは顔を赤らめる。

「そもそも、予想通りにいくはずはないわ」

「人生ままならぬものですからね」

「走るのは馬よ。人ではないわ」

「これは一本取られました」

「ふむ。仮に、競馬場で人が走るとしたら」

「相当に揉めそうですね。外枠か内枠か」

「馬達だつてきつとそう。内心何で俺こんなに外なんだよゴリア、  
て思つてる」

「表情がわかりにくいのも良し悪しですね」

「でも、内側は泥水が溜まるしぬかるみもあるのよね」

「……大分詳しくなられたようで」

「まるで人生の縮図ね」

「と、申しますと」

「内側はたくさんの人が走ろうとするから水が跳ねて泥塗ごりまみれ」

「左様でございませぬ」

「外側は遠回り、時間がかかるから誰もが避けていこうとする」

「そして、大外からの鋭い追い込み。なるほど、人生ですね」

「届かずに終わるのも、また人生よ」

「深いですね、お嬢様。          ところで」

「何かしら」

「お幾ら勝ったのですか」

「10万パース」

「おお、中々の高配当。今夜はしゃぶしゃぶですね」

「配当はもっと上よ」

「と、申しますと」

「ああ、ビリーの言っているのは勝ち負けの方ね」

「お嬢様が仰ったのは売り買いの方でしたか」

「御明察よ、ビリー」

「これは、不覚にも私の台詞が奪われてしまいましたね」

「油断は禁物ね、それで配当の方だけけれど」

「ドキドキの瞬間でございます」

「147・3倍、だったかしら」

「素晴らしい！ やはりすぎ焼きに致しましょうか」

「そだね、とじるとどっちが高くしゅくの？」

「より良い肉を使った方でしょう」

#### 第四章　く三つの生（1）く

真昼間にも関わらずカーテンを閉め切った部屋の中で、カイルは一人椅子に座り、机の上に飾ってある小さな写真立てをじっと見つめていた。そこにはもうこの世にいない二人、優しそうな表情をした綺麗な女性と、その女性の肩を抱く父の姿があった。カイルが母の友人だと思っていた彼女が実の母だと知ったのは、一年くらい前のことだった。

何で、自分だけが生き残ったのだろうか。何で、神様は両親と一緒に自分を連れて行ってくれなかったのだろうか。この言葉も、何度自分に問いかけたか分からない。答は出さず仕舞いで、疑問に答えてくれる人が傍にいるわけでもない。

今の母、ケイが実の母だと自分はずっと信じていた。なのに、ずっと皆に騙されていた。それがわかったことも凄く悲しかったけれど、何より許せないことがあった。実の母が映っている写真をケイが全て隠していたことだ。自分はそれまでずっと、実の母の顔すら知らなかったのだ。

カイルは今の母を？ママ？と呼びたくはなかった。今は？ケイさん？と呼ぶように努めた。そう呼ぶとケイは酷く辛そうな顔をする。それは、心の底からケイを嫌っているわけではなかったカイルにとっても心苦しいことだったが、それがケイに対する戒めになると信じただ上でのことだった。

「貴方のためを思って」だの「大人になったら言うつもりだった」だのと言われても信じられるわけがなかった。自分は既に一回嘘を吐かれている。とても許す気にはなれない嘘を。

ケイの話によると、実の母はカイルが一歳の時に流行り病で亡くなったとのことだった。ケイは、実の母と凄い仲が良かったと、大の親友だったとカイルに話した。それを聞いて、カイルは尚更腹の虫が収まらなくなった。本当に親友なら何で父と結婚できたのだ。

そう考えるのが自然だと思った。

カイルという名前は本当の母が付けてくれたものだった。母は、死ぬ間際までカイルのことを心配していた。それを聞かされた日、カイルは一晩中ベッドの上で泣き続けた。流す涙が枕に染みてぐしゃぐしゃになった。

散々泣いた後、カイルはこれからどうすれば良いのかわからなくなった。もう自分と血の繋がった者は誰もいない。ケイは優しいけれど偽りの母だ。何より、たった一人の肉親だと思っていたケイに裏切られたことが堪えていた。また嘘を吐かれることが怖かった。そう思い始めた頃、他の人と接するのも怖くなってきた。

カイルは、もしかしたら自分の目が届かない場所で、皆が自分の事を笑っているんじゃないかと思い始めた。学校にいる時に聞こえる声という声が、全て自分の悪口を言っている気がした。「アイツの家族って全部偽者なんだぜ」とそんな風に。胸の奥がむずむずして、血が出るくらい掻き毟った。そうしているうちに、本当に学校で噂になってしまった。アイツは、カイルは危ない奴なんじゃないか、と。

やがてカイルは学校にいけなくなった。段々気まづくなってきて、誰とも顔を合わせられなくなった。執事や女中の顔を見ても陰で笑っているのではないか、そんなことばかり考えていた。

カイル自身、部屋に閉じ籠っても何も解決しないのはわかっていた。でも、窓越しに聞こえてくる微かな話し声すらも、全て自分の悪口に聞こえてしまう。

気が狂いそうだった。何も聞きたくなかった。そう思ったカイルはいつの間にか、自分の存在を世界から隔離していた。

自分も死んだら両親に会えるのだろうか。二人は自分を快く迎えてくれるだろうか。余計なことばかり考えていた。部屋に閉じ籠っている、自分と対話する時間が永遠のように思えた。

「……どうかしてるよね」

カイルはぼつりと呟いてみたが、返事は返ってこなかった。いくら布団をたくさん被っても胸の中が全然温まらなかった。

この寒さをずっと抱えて生きていかなければいけないならば、それはきつと死ぬより辛いことだ。最近では寝ても覚めても、耳を塞いでさえも変な声が聞こえるようになってきた。

> お前がカイルかく

そう、こんな風に

「え！」

突如聞こえたその声にびっくりし、カイルは椅子から飛び上がった。

「だ、誰!?!」

辺りを見回すが誰もいない。部屋には鍵がかかっている。ハツとして窓際に寄り、カーテンを開け、陽光の眩しさに目を細めつつも外を見る。が、屋根の上にもいない。確かに声がしたはずなのに。自分は、もしかしたら本当に狂ってしまったのだろうか。

カイルは震えながら、自分の頭を両手で挟んだ。

> 俺は、死神だ<

と、再び頭の中に声が響いた。はっきりとした声だった。

「死神! ……って何なの?」

> ……ええ? あー、そう返されるのは予定外だったな。そう、人を遠くに連れて行くのさ。お前の父や母みたいにな<

「ぱ、パパやママを!?!」

驚きと、微かな希望が入り混じった声が出た。本当に父と母を連れて行った者ならば、当然行き先も知っているはずだ。

> その通り。そして、今日はお前の番が来た<

「……どういうこと?」

> 両親のところへ、お前を連れて行ってやろうと思ってなく

カイルは目を見開いた。勿論完全には信じ切れずにいたが、この頭に響く声はどう考えても普通ではない。



> さあ、扉を開けるんだ<

「パパとママに……会えるの？」

再び訊ねた時、声が少し上擦ったのがわかった。次いで一瞬、体がぶるりと震えた。両親に会えるならばもういつ死んだって良い。カイルはそう思っていた。

> ああ、会えるともさ<

頭に響く謎の声は、どこか自信に満ちていた。

「……わかった、直ぐ開けるね。待ってて！」

カイルは慌ててドアの方に早足で歩み寄り、ロックを外した。

部屋のドアが開けられ、シユイはゆっくりと視線を降ろした。十歳前後と思われる男の子はシユイを見た途端全身を震わせた。怯えの走っている二重の目は、パチパチと瞬きを繰り返している。小顔で背の高さは標準か少し低い程度。淡い光にも映える銀髪が印象的だ。

シユイは動揺しているカイルに構わず、念話を送る。

> 初めまして、だなく

カイルは再びびくびくと体を動かしたが、数秒して口を開く。

「あ、は、初めまして。あ、あの、本当にパパとママに？」

> ああ、勿論だとも<

シユイはそう伝えると、カイルの目の前に左手を差し出した。

> これをずっと見ている<

「う、うん」

シユイの手の平には大きな傷跡があった。カイルはそれを微動だにせずに見ている。

すると、段々とシユイの手の平がぼんやりと光り始め、何かが浮かび上がってきた。少なくとも、カイルの目にはそれが見えていた。見たこともない黄緑色の蝶だった。

「……あ……れ」

おもむろに、カイルは目の前が暗くなるのを感じた。

>……いい子だ<

シユイがその言葉を伝えた時には、前のめりに倒れかけたカイルの体が、シユイの腕に支えられていた。

「……う」

>気がついたようだなく

黒い人の声が聞こえた。何だかやたらと眩しい。光が僕の目蓋に当たっているのだ。

「ここは、どこ？ ……って、わぁ！」

薄らと目を開けると、高速で移動している景色が視界に飛び込んできた。少しして、移動していたのは自分の方だとわかった。どうやらいつの間にか外に出ていたようだ。驚きに息を呑み、その後で黒い人に抱きかかえられていることに気が付いた。風が体にびゅんびゅん当たって夏なのに少し寒い。

「……なんて速いんだろう。本当に死神さんなんだね」

自分の体が風になったような錯覚。草原を疾走し、大きな川をびよんぴよんと飛び越え、森の密集した木々をすり抜ける。

本当に、会えるんだ。パパとママのところに連れて行ってくれるんだ。

カイルは胸が高鳴るのを感じた。会ったらずなると言おうか、とそんなことを考える。

ただいまと言うのも変かな。あ、でもその前に、ママは今の僕を見ても、一目でママの子だとわかってくれるかな。

>……お前が父と母に会う前に、行かねばならないところがある。再び頭の中に響いた声に思考が遮られた。カイルは首を捻ってシユイを見た。

>……なに、もう少しだけ

シユイはカイルに何も言わず、ただ走るスピードを上げた。流石に速過ぎて怖くなってきたのか、カイルは万が一にも振り落とされないよう黒衣にギュツとしがみ付いた。

シユイはカイルを抱きかかえたまま、フォルストロームとセーニア教国の国境付近にある岩山の山頂から周囲を見回していた。

「……凄い。こんなの見た事ないや」

カイルは視線を忙しなく動かしていた。360。遮る物が全くない大パノラマ。視線の先にはたくさん白い雲。南にはフォルストロームの大森林が深緑の絨毯のように見える。遙か遠くにはキャノエの長老樹が小さく霞んで見えた。東西には人一人立つことすらできなそうなほどに鋭利な剣山が数多望める。後ろを振り向くと雲の隙間から北の大草原が、そしていくつかの民家らしきものが街道沿いに見える。山脈を隔てて北側は確かセーニア教国だ。そして

「うわあ！」

思わず感嘆の声を漏らした。突如とつがたに群成して空を飛ぶ真っ白な蛇。緩やかな斜線を描くように上空へゆっくり上昇し、次々と分厚い雲に飲み込まれていく。

> 大気中の水分、雲や霞をかすみ喰う蛇、白翼蛇だ。ケツアルコートル ああやって風に乗り、大きな雲に取り付いては雲と共に移動する。数年に一回は高地にある湖の中に卵を産むそうだ。神聖な動物とされているが、あまりに多くなると干ばつが引き起こされることもある。そんな生き物だから間近で見られることは滅多にないんだが、運が良いなく

「へえー、こんな生き物もいるんだね！ 僕全然知らなかった！」  
カイルは目を輝かせ、初めて見る光景にひたすら感激しているようだった。が、シユイはカイルに景色を見せるために山へ登ったわけではなかった。高所から、ずっとある物を探していた。ニルファナと会うよりも以前、逃亡生活をしてきた時にたまたま見つけた場所だ。こういつた場所は国境の至る所にある。国を滅ぼされた難民達が関所を越えられず、かといって帰る場所もなく、寄り集まって集落を形成するのだ。

少しして、鬱蒼とした木立の中から天に昇る一筋の薄灰色の煙を見つめる。その方角を覚えると、シユイはカイルを担いだまま山を下り始めた。

山をある程度下つていくと、シユイはカイルを土の上に下ろした。そこで初めて、カイルは自分が靴を履かされていることに気が付いた。

何だかゴミ捨て場みたいなところだな。

さっきの素晴らしい景色とのギャップがありすぎて、カイルは凄く残念な気持ちになった。山の中なのに色々な物がごちゃごちゃしていて、それに何だか甘いような、酸っぱいような、妙な匂いがした。

「ここは……どこなの？」

「貧民窟」

シユイはカイルを見ずに言葉を返した。

あれ、死神さんって頭の中に声を送ることだけじゃなくて喋ることもできたんだ。

カイルは、何でシユイがわざわざ頭の中に声を送ってきたのか、と不思議そうな顔をした。

「貧民窟スラムってなに？ 死神さんが行きたい場所って、ここのことだったの？」

「紛れも無く世界の一部さ。勿論先ほどの美しい光景もな。……手を放すなよ」

そう答えると、シユイはカイルの手を繋いでゆっくりと歩き出した。

何もかもがカイルにとつては初めてだった。学校でも家でも、そんな所があるなんて教えてくれなかった。近くには川が流れているのか、せせらぎの音が耳に入ってくる。頭上を見ると、日差しの差し込む隙間が殆どなくらいに梢が密集していた。昼間なのに夜を思わせる鬱蒼とした森の中には、みすばらしいほったて小屋があった。いや、小屋とすら言えないかも知れない。ただ樹の枝に大きな厚紙をかませただけの物すらある。そして、そんな物が木々の隙間を縫うようにして、至る所に立ち並んでいた。

シユイとカイルが手を繋いで道を歩いて行くのを、道端に座っている者たちが虚ろな目でじっと見ていた。ゴザでも敷いてればまだマシな方で、地肌の上に直接座っている者も多かった。

窪んだ眼で見つめられるだけで寒気がして、カイルは無意識の内にシユイの手を強く握っていた。彼らの髪は好き放題あちこちに伸びて、ボサボサでチリチリだった。着ている服は肌を覆っている場所の方が少ないくらい布地が擦り切れていた。そして、そこから見える地肌は土の色と同じだった。先ほど感じた妙な匂いがやたらと強くなっているのを感じた。もしかしてあの人たちから発せられる匂いなのだろうか、とカイルは疑った。

少しして、新たに気付いたことがあった。殆どの人がやたらと痩せているのだ。頬はこけ、骨が浮き出で、角張っていて丸みが全く感じられない。

驚いたことに、そこにいるのは大人だけではなかった。カイルとそんなに年の変わらなそうな子もたくさんいた。土の上で膝を抱えてじっとしている子。太い樹に寄りかかって足を投げ出している子。

切り株に座って、顔を両手で覆い隠している子。

中にはカイルより明らかに年下の子も混じっている。それだけではない。女の子なのに上半身裸の子、靴すら履いてない子までいた。その素足には岩や草によるものと思われる幾つもの切り傷や擦り傷があった。

カイルは隣にいるシユイをそつと見上げた。

「ね、ねえ。……えつと、死神さん」

「なんだ」

「あの子たち、ずっとじつとしていてるけどお家に帰らないの？」

顔はフードで覆われていて見えなかったが、カイルは不思議とシユイが悲しそうな表情をしているように思えた。

「ここが、家なんだ」

ややあつて、シユイがそう呟いた。

「……え？」

言っている意味がさっぱり分からなかった。どこに家があるんだろう。カイルは周りに視線を走らせたが、山と木とゴミしか見当たらない。少なくとも家と呼べそうな物は存在しなかった。

「ここはあの子たちが寝て、起きて、生活する場所だ。家に違いないだろう」

「だ、だって、家っていうのは、もつとこつ……」

大体、ベッドも屋根も無いじゃないか。

雨が降ったらどうするんだろう。カイルは不安そうに空を見上げた。葉で覆われた緑の天井は、隙間だらけだった。今は夏、けれども冬になったらあの葉も残らず散るだろう。

「さあ、先に行くぞ」

シユイに手を引かれ、カイルが慌てて足を踏み出した。胸に生じ

た得体の知れぬ不安が、段々と大きくなってくるのを感じながら。

## 第四章 〓(2)〓

カイルはシュイに手を引かれ、木立の間にある、少しうねった土道を進んでいく。ふと、道から少し離れた場所で、カイルは自分と同年代くらいの子供が、大きな木の根元に寄りかかっているのに気付いた。目を瞑っているから、多分寝ているのだろう。その子のお腹はやたらとごっごっしていた。洗濯板の代わりとして使えそうなくらいに。

「ね、ねえ。あの子裸のまままで寝ているけど、風邪引いちゃわないかな」

シュイは立ち止まり、カイルの指差した方を向いた。

「あの子は、……目覚めない」

「え……」

予想外の解答に、カイルが絶句した。

目覚めない？ それってつまり……。

シュイはカイルの疑問が分かっているのか、顔を伏せた。

「もう、死んでいる。まだ蠅が集<sup>たか</sup>っていないから、息を引き取ったのは今日か昨日か。どちらにしても最近だ。あれだけ痩せているところを見ると、ずっと食べ物にありつけなかったんだろう」

シュイはそう言うと、再びカイルの手を引き、歩き始めた。

死んでるって、子供なのに？ 食べ物食べられないことなんて、そんなこと、あるの？

カイルは無意識の内に呟いていた。部屋に閉じこもっていてもお腹は空く。その頃にこっそり扉を開けると、部屋の外にはいつも食べ物置いてあった。ケイが毎日欠かさずご飯を用意してくれていたからだった。自分が食べようと、食べまいと。

二人が更に先へ進むと、どこからか香ばしい匂いが漂ってきた。



何か焼けるような音が聞こえ、草むらの方に目を移す。そこには小さな焚き火を囲むようにして、何かを焼いて食べている者たちがいた。

カイルはそちらの方に興味を示した。大きさから察すると、串に刺さっているのは魚だろうか。

「あの人たち、何を食べてるんだろう。美味しそうだね」

そういえば、と意外とお腹が減っていることに気付いた。遅れて腹の音がなり、カイルは少し顔を赤らめながら、今日は何も口にしていなかったことに思い当たる。

「あれは……、多分イワモドキだ」

「イワ、モドキ……？ そんな魚、聞いたことがないけど」

訊ね返してきたカイルに、シユイは説明を続ける。

「普段は茶色い皮膚をしているが、危険を感じると皮膚の色を灰色に変化させる。そうなると岩と殆ど見分けがつかなくなるんだ。所謂擬態<sup>ゆゑ</sup>つてやつだな。勿論魚なんかじゃない。高地の川辺に生息しているトカゲの一種だ」

「ト……」

カイルの声はそれ以上続かなかった。

「国によっては爬虫類を食すところもある。へびとか、ヤモリなんかは薬用に使うこともあるらしい。この辺りでは貴重なタンパク源だろうな。……ん、どうした？」

地面に何かがいるのに気付き、カイルは固まっていた。少ししてようやくそこにいるのが人間だと気付いた。その人には両足<sup>りょうあし</sup>が付いていなかった。

髪も髭も生えっぱなしのその男は、二十代のようにも、五十代のようにも見える。手の指を土に埋め、手繰り寄せるようにして、自分の身体をズリ、ズリ、と少しずつ前進させていた。その光景はあまりにもおぞましくて、カイルの周りを取り巻く日常とかけ離れた

ものだった。

顎がガクガクと震えているのがわかった。全ての筋肉が縮こまったようになって、身体の自由が奪われていた。

恐怖で今にも腰を抜かしそうなカイルの手を、シュイが少しだけ強く握り返した。繋がったその手がカイルを現実には踏み止まらせた。

「あ、あんたら、何か持っていないか……」

そう言われ、カイルは何かって何だろうと一瞬思い、食べ物という答えに行き着き、持っていないことに愕然とする。と、いつの間にかシュイが握っていたカイルの手を放し、懐から何かをごそごとまさぐっていた。

取り出された三日月型のそれは、カイルにも見覚えのある物だった。ノイムの実だ。淡黄色をしていてほんのり甘く、厚い皮で覆われているので日持ちが良い。

「すまない。今はこれくらいしかない」

「おお、くれるのか……」

シュイはカイルから一時繋いでいた手を離すと地に膝を付き、あくまで丁寧な所作でその人の手にノイムの実を握らせた。

「では、失礼する。……行くぞ」

そう言い、シュイはカイルの手を握り直した。

「……ありがとう。ありがとう」

実を大事そうに持った男は、シュイの背中越しに何度となくお礼を口にした。

カイルは、殆ど自分の意志で歩いていなかった。半ば引き摺られるように森を出る直前になって、シュイが急に足を止めた。カイルはそれで正気に戻り、怒られるのかも知れない、と身を硬くした。

「……何故、泣いているんだ？」

「え。……あ」

カイルはそう言われて、初めて気がついた。眼からは涙が溢れて

いて、地面を濡らしていた。

自分には住む家も、暖かい布団も、食べ物もある。血は繋がってないけど自分の事を心配してくれるケイもいる。

カイルはそれを、ずっと当たり前前のことだと思っていた。生きていけるのを当たり前の事だと思い込んでいた。

「ここに住む人たちは一日一日を必死になって生き延びている。中には肉親に見捨てられた者だっているだろう。おまえがその目で見してきたように、彼らには家も、ベッドも、まともに着るものもない。それでも、トカゲを食ってまで生きようとしている。這ってまで生きようとしている。お前は彼らのそんな姿を、醜いと思うか？」

「そつ……」

胸が詰まって言葉が出なかったのか、カイルは俯き気味に首だけを振った。

「それならいい。ここに連れて来た意味も少しはあつたんだろう。今の生活をお前がどう思っているのかは正直俺にもわからない。だが、決して忘れないで欲しい。ここも間違いなくお前が生きている世界の一部分だ。……ここだけじゃない。こんな場所、探せば世界中にいくらでもある」

カイルは泣きながら何度も頷いた。

「カイル。きつと亡くなったお前の両親は、お前を愛していたんだろうと思う。でも、今のお前の母親も、ケイも間違いなくお前を愛しているよ。たとえ血が繋がっていなくなつて、お前をここまで大きく育ててくれたのは他の誰でもない。彼女なんだからな」

「う、うん……」

カイルは袖で涙を拭った。

「それを理解してもらった上で、俺はお前に問う。死んだ両親の元へ行きたいか。ケイを、今の母親を置いていくか。心からそう望むなら」

カイルは、シュイの問いかけを遮るように強く首を振った。そんなの決まっている、と言うように。

「僕、ケイさ……ママに、今までの……謝らなきゃ」

しゃくれ気味の、途切れ途切れの言葉だった。が、それでも伝わったのだろう。それは残念だ、と、さして残念そうでもない言葉がカイルの耳に聞こえてきた。

シユイは再び手の平を、カイルに翳<sup>かき</sup>した。涙で滲んでいるはずのカイルの視界に、黄緑色の蝶だけがやたらと鮮明に映った。

夢を見ていた。壁一面が真っ白で、部屋の真ん中には二つのベッドを隔てるように、白い布の衝立が置かれていた。窓際の方のベッドでは、上半身を起こしている優しそうな銀髪の女の人に赤ん坊が抱かれている。傍らには黒髪の男性が背もたれのない椅子に座り、その様子を穏やかな表情で見守っていた。

髭が生えていなくとも、一目でパパだとわかった。なら、あつちの女の人は

「随分大きくなったわねえ、私の皇子様は。段々貴方に似てきたわ」

そう言いながら、女はまだ髪の毛の生え揃っていない赤ん坊を優しく撫でた。赤ん坊は頭を微かに揺らしたが起きる事はなく、そのまますやすやと、気持ち良さそうに寝息を立てている。

「そうかい？ 友人たちにはどちらかというと君に似ていると言われるけれど」

男がそう言うと、女は同意できない、と言うように首を傾げた。

「うーん、そうかしら？ ほら見て。目元なんかはあなたそっくりよ。きつとこの子、将来ハンサムになるわね」

男はまんざらでもなさそうに照れ笑いを浮かべる。

「はは、遠回しな褒め言葉をありがとう。他ならぬ君がそう言うんだから、そっちが正しいんだろっね。君が一番僕とカイルを間近で見ているんだから」

女は男にただ微笑みを返した。ふと、その表情が僅かに曇った。

「……ごめんなさいね、ジエイク。こんなに早く」

「ミゼル、頼むから謝らないでくれ。僕の方こそ、もっと早く君の身体の変調に気付くべきだった。謝るべきは僕の方なんだ」

「……ごめんなさ」

「ほらまた」

「あら、いけない」

男の呆れた口調に、女はチロツと赤い舌を出した。そしてゆっくりと、窓に視線を移す。

「今年の紅葉は見応えがあるわねえ。まるで木々が燃えているようだよ」

「そうだな。庭の柿の木にもたくさんの実がなっている。そろそろ熟すだろうから今度持ってくるよ」

「ふふ、ありがとう」

ややあつて、女は男を真っ直ぐに見つめる。

「ジエイク。あなた、私と結婚して後悔していない？」

「していない」

「……本当に？」

「君は素敵な思い出をたくさん僕に与えてくれた。そしてカイルを与えてくれた。その一つ一つが、僕にとっては何より大切な宝物だ。後悔なんてしているはずがない」

「……そう、良かった」

女は大きく息を付き、今度は赤ん坊に目をやった。

「カイル、せめてもう少しだけいい、貴方と一緒にいてあげたか

った。それだけが心残りだわ。……どうか、どうか駄目なママを……許してちょうだいね」

「ミゼル……」

潤んできた目にハンカチを当てると、女は男に笑いかけた。それを見てカイルは、こんなにも寂しそうな笑顔があるのか、とたまらない気持ちになった。

「ジエイク。あなたもまだ若いんだから、いい人がいたら私に遠慮しないで結婚してね。その代わり、今度は私よりもしっかりした、健康な女性ひとを見つけなさい」

男の顔が思いつきり歪んだ。

「……ミゼル、いい加減にしないと僕だって怒るぞ」

「そうね。あなたは優し過ぎて殆ど怒ったためしがないし、今の内に怒った顔を目に焼き付けておくのも悪くないわ」

男は勢いよく立ち上がり、ツカツカとベッドの女に歩み寄った。

そして痩せた身体を両腕で労るように、女が抱いている赤ん坊ごと、そっと抱きしめた。

「……ジエイク」

「……ミゼル。こんなに苦しんでいる君に何もしてやれない。不甲斐ない僕を……許してくれ」

男の声は震えていた。女には、男の顔は見えないはずだったが、肩にいくつもの雫が滴っているのがわかったのだらう。再びその目に涙が滲じみ始めた。

「もうあなただったら、それじゃあ貴重な泣き顔が見られないわ。……でも、ありがとう。短い間だったけれど、私もあなたと一緒に過ごせて凄く幸せだった。……カイルのこと、お願いします。そして、いつかあの子が大きくなって、人の死を受け入れられる年齢になったら伝えてあげて。私は、遠いところからあなたの事を見守っている。誰にでも優しい、誰よりも元気な子に育つよう願っている。……お願いね」

おもむろにその声が遠くなり、二人の姿が、白い部屋が霞んでゆく。

待って！

そう叫んだはずなのに、声が声として発せられない。あつという間に、カイルの目に映る全てが白く塗り潰されていった。

「あ……れ……」

気が付けば、ベッドの中にいた。いつも寝ているふかふかのベッドだ。両目から涙の川ができていて、枕とシーツを濡らしていた。今の今まで見ていた人たちは写真に写っている二人、見間違えようがない、カイルが夢にまでみた父と母だった。

「夢……じゃないよね」

「当たり前だ」

はつとして、カイルが扉の方を見た。黒衣の男が部屋のドアに背を預けている。

「し、死神さん！ 僕……パパとママに」

「初めにちゃんと約束しただろう？ 両親に会わせてやると」

やっぱり、あの赤ちゃんを心配していた女の人が僕のママ、

……あの赤ちゃんは、僕自身。じゃあ

「じゃあ、あの人たちも？」

シユイはその疑問には答えず、淡々と言葉を続けた。

「両親たちから伝言を聞いてきてやった。信じる信じないは、おまえ次第だな」

伝言、と呟くカイルに、シユイは身を起こし、自分の寄りかかっていたドアノブを握った。

「カイル、いい加減外に出なさい！ だとさ」

「うん！」

カイルは急いで袖で涙を拭い、絨毯に足を付けた。

階段を一段一段、慎重に降りていく。シュイは、今度は全く手を貸さずに、先にスタスタと一階に降りていった。全然運動してなかったせいかカイルの足元は覚束なかったが、手すりに掴まりながら、何とか転ばずに一階についた。

「お、お坊ちやま！」

リビングに入るなり、執事のロディが驚嘆した。背を向けてソファーに座っていたケイも、窓を拭いていた女中たちも、ロディの声に釣られて姿を現したカイルに注目した。一方で、傍らにいるシュイだけは、じつと窓の外を見ていた。

「……カイル！」

「あの、ごめんなさい……ママ」

ケイが目を潤ませながらカイルに駆け寄り、その身体を力強く抱き締める。

「い、痛いよ……ママ」

「それくらい我慢しなさい！ ああ、カイル……私の方こそ、本当にごめんなさい……」

抱擁の痛みと、溢れるほどの温もり。それをカイルは全身に感じていた。吐息が耳にかかって、少しくすぐったくもあった。そして、少しだけわかった気がした。血の繋がりなどではなく、この温かさこそが母なのだ、と。



## 第四章 〓(3)〓

カイルが部屋から出てきてから三日が過ぎていた。その日の午後、シユイは屋敷の近くにある原っぱでカイルに魔法の基礎を教えていた。カイルは腰を降ろすのに丁度良さそうな岩に座り、シユイの話を実剣に聞いている。辺りの木々の梢には青や黄色といった小鳥たちが止まり、二人の様子に興味深そうに眺めていた。

「昨日も話したと思うが、魔法を使うための魔力は大別して二つある。一つは己の身体に潜在する物。今一つはそれ以外の、外界に存在する物。それを扱うために、まずは同調チューンという作業が必須になる。様々な形状の魔力を身体に取り入れ、自分が使いやすいように調整するんだ」

基本的に、魔法を発動させる仕組みは魔力を何らかの形で使うことチューンとあり、六種類に大別出来る。同調チューン、創造クリエイト、削除デリート、結合ユニット、吸収アブソープ、解放リリース。これらは何かしらの魔法を使う際、必ず起こる現象である。これらを単一で行使するわけではなく、かといって全てを行使するわけでもない。

例えば強力な召喚魔法。これは個人の魔力では足りないことが多いため、ほぼ必ずと言っていいほど吸収アブソープを使う。自然界に満ちる魔力を同調チューンさせて一旦我が物とした後、改めてそれを解放リリースし、ゲートクリエイトを創造する、といった具合だ。その作業をこなすわけだから、詠唱には相当な時間がかかる。

ニルファナから学んだ念話は、相手の意識に対して小さなゲートクリエイトを創造する。そこから極少量の魔力を相手の魔力と結合ユニットさせ、言語化するのだ。消耗は少ないため吸収アブソープの必要はない。その代わりに相手がそれを拒むことも容易く出来る。

付与魔法だと、自分の魔力を解放リリースし、そのまま無機物や有機物に

元々宿る魔力と結合させる。見ようによってはこれも同調の一種だと言えるだろう。外であるか内であるかの違いだけである。

他にも、対魔法障壁や対物理障壁などがある。その中でも自分の魔力を解放し、一定の範囲内において魔法に伴う魔力を全削除してしまう壁を創造するものを絶対魔法防御と呼ぶ。もつとも、これは敵だけでなく味方の魔法も同様に弾いてしまう。

魔法使いの中には七つめの概念、分離を引き合いに出す者もいるが、世間一般としては、分離は吸収や削除に含まれる、と考えられている。

ところで魔法を使う場合、一部の例外を除けば詠唱、すなわち言葉<sup>ス</sup>を唱えることが必要だが、シュイの扱<sup>チャント</sup>う祈歌は詠唱と少し異なる。これは自然界に散在する魔力の動きに影響を与えるもので、魔法の行使においても補助的な役割を果たす。付与魔法にも使えるが、死屍使役や人形使役等にも応用することが可能であり、様々な有機物、無機物に力を宿すのを助ける役目を持つ。

「さて、シュイ君。結合の一番のメリットって何だと思う？」

ニルファナは、何故か座学の時だけ君を付ける拘りがあった。当人いわく、気分の問題だと言ったことだった。

「一番のメリット……。うーんと」

「はい、時間切れ」

「早いよ、ニルファナさん。」

シュイが不満げに喉を鳴らした。

「これも覚えておいた方がいいよ。解答が5秒以内に思い浮かばない場合は、その授業中に出てくる可能性は一割以下。待つだけ無駄」

「……………」

「はいはい、拗ねないの。正解は、本来の能力を上回る魔法を使え  
てしまうということだよ」

「能力を上回る？」

「そ。通常、強力な魔法を使う場合は自然界の魔力を吸収アブソーブして使う  
わけだけど、自分自身の魔力容量を上回ることはない。これはわか  
るね？」

「うん。入る量が決まっているから、それ以上は外に溢れちゃうと  
いうことだよな」

「そうそう。多少なら無理も出来るけど、下手をすると術者が壊れ  
てしまう。ところが、自分の魔力を自然界で結合コンビットさせるとなると話  
は違う。自然界の魔力容量はほぼ無限だから魔法を使う際に魔力容  
量テイのことを気にしないで済むんだ。ま、厳密に言えば自分の魔力を  
解放リリースしてから結合コンビットするわけだから、限界はあるんだけどさ。少ない  
魔力でより多くの魔力を結合させる事が出来れば、自分の魔力容量キャパシティ  
からかけ離れた魔法を行使することも不可能じゃない」

それを聞いて初めて合点がいった。だからあの時僕は

「ん、何々？ 人が話している時に気にするようなこと？」

ニルフアナは目を細めてにつこりと笑った。

「い、いえ。……何でもありません」

「宜しい。人の話はきちんと聴くように」

「も、もちろんです」

怖いよ、ニルフアナさん。

「じゃあ続けるよ。本来は結合コンビットって未熟な者だと凄い時間がかかる  
んだけど、触媒を用いることによつて幾らか時間短縮が可能なの  
とは前に話したよね。君の祈歌チャントは触媒としてそれを加速させる役割  
を十二分に果たしている。そこまで祈歌チャントに効果を出せる人は稀有けうだ  
から、君の戦闘スタイルはそれを汲くんで考えた方がいい」

「ええと、そうすると攻撃魔法とかは……」

「万人が使える程度になら問題はないけど、お奨めはしない。祈歌チャント  
を活かすなら干渉魔法の方が向いてるかな」

「干渉まほお？」

露骨に嫌そうな顔をしたシュイに、ニルファナは片頬をピクリと動かした。

「む、何だね？ その馬鹿にした言い方は。君はお姉さんの言うことが信用できないのかね？」

「そ、そうじゃないけれど……。だって、確かあれって眠らしたり苛々させたりする魔法でしょ？ 何だか地味」

「しょうがないね」。特別に実体験をさせてあげよう」

「……え？ て、ちよ、ちよっと待つ」

うああああああああああ。

ニルファナに強烈な魅了チャームを掛けられ、普段口にもしないような台詞を散々忘れずメモリー・ストーンの石に録音された、そんな忌わしい出来事が脳裏にチラついた。

「シュ、シュイさんどうしたの？」

いきなり頭をブンブンと振り始めたシュイを見て、カイルは目を丸くした。

「いや、古傷が痛んだだけだ」

泣きたくなるような記憶を振り切り、実際泣いていたような気もするが、何とか立ち直ったシュイはカイルに手の平を見せるように差し出した。

「じゃあ、さっき言ったように掌を重ねてみる」

「う、うん……」

カイルは言われたとおり、シュイの左掌に自分の右掌を置いた。

「どうだ、何か感じるか？」

「う、うん、良くわからないけど何だか手の周りがざわざわする。」

それに何だかほんのりと温かい」

「それが、魔力を練っている状態だ。今からお前の手に少し流し込むぞ」

カイルは緊張しながらも頷いた。

「……ん？ うわわ！」

途端にカイルの右手の周りの周りの空気が震えだした。

「何これ、気持ち悪！ ……こ、これどうやって止めるの!？」

感じたことのない違和感にカイルはパニックを起こした。それもそのはずで、今カイルが感じている感覚は、手の周りを数多の虫が這いまわっているようなものに等しかった。

「落ち着け。別に何が触れているわけでもない。目を閉じて手だけに感覚を集中させ、周りを取り巻いている力に好きな色がついているようにイメージをしる」

シユイがそう言うのを聞き、カイルはおずおずと頷き、早速試してみる。

振動に色、 振動に。

「あれ、手の周り何だか」

「収まってきたようだな。それが同調<sup>チューン</sup>。俺の渡した魔力がお前の魔力に変化したんだ。殆どの魔法で必要になるからその感覚をよく覚えておけよ。ならその状態で」

「っ痛！」

シユイが人指し指を振ると、一瞬にしてカイルの左手の甲に小さい切り傷が出来、わずかに血が滲み始めた。

「その傷に手を当てながら、さっき教えた言霊<sup>スペル</sup>を唱えるんだ」

「え、う、うん。ええっと、慈悲深き神々よ、我が祈りに耳を傾けたまえ」

カイルが傷を右手で覆い、暫くすると

「あ、少しずつ傷が小さくなってきたよ！」

カイルが嬉しそうに叫んだ。それから三分もすると、傷は完全に

見えなくなっていた。

「うん、意外と早かったな。それなりに素質はあるみたいだ」  
シュイは満足そうに頷いている。

もしかして、そのためにわざわざ怪我させたの？

初めて魔法を使えたにもかかわらず何故か膨れっ面をしているカイルを見て、シュイは不思議そうに首を傾げた。

陽が沈みかけた頃になると、カイルはへとへとになっていた。

「はあ、はあ……な、何でこんなに疲れるんだろ。頭がくらくらする」

「修行が足りないだけさ」

事なさげに応じるシュイは、魔力で出来た流動体を指先でコントロールし、様々な形状に変えていた。

魔法の大部分は、自分の身体に秘められた魔力、又は自然に満ち溢れる魔力を集中力と詠唱によって引き出す。森族や魔族は自分の身体に秘められた器の容量が人族や獣族に比べて多いので、生まれつき数多くの魔法を使える才がある。

また、例外として自然に満ち溢れる魔力を利用するには吸収が結合によって自らが扱える魔力に同調させる工程を加えるので、自分の持っている魔力を利用するのに比べて非常に多くの集中力を必要とする。強力な魔法を使うには魔力の器を大きくすると共に集中力の底上げをしなければならない。

次に、その魔力を解放し、詠唱や描印によって思い思いの属性や形に変化させる。通常の魔法はその二、ないし三工程で行われる。上級の魔法使いだと更に行程が増える。詠唱しつつ魔力を練り、詠唱を終える前に必要な魔力を溜め終える。

カイルは、身体に秘められた魔力はまだたくさん残っているものの、子供ゆえに集中力に難があるため直ぐに疲弊し、魔力を引き出せなくなっているわけだ。

「……うう。な、何でさっきは出来たのに、出来ないんだらう」

懸命にやっているのに結果が出ないためか、カイルはすっかり自信を失ってしまったようだった。

「さっきの回復魔法か？ あれは俺が魔力の純度を高めて渡したからだ」

「じゅ、純度？」

「魔法を使う際には、自分の魔力にくつついた余計な不純物を集中「コンセントレ力によって削ぎ落とすんだ」

ちんぷんかんぷんな顔をしているカイルを見て、シュイは少し専門用語が多すぎたか、と頭を掻いた。

「あー、つまりだな。魔力を魔法として使うには下ごしらえが必要なんだ。料理と同じだよ。俺は自分が手にした林檎を、集中力「コンセントレイションというナイフで皮を剥き、芯も種も綺麗に取ってお前に渡したわけだ。

お前はそれを調理しただけ。だから、さっきは曲がりなりにも魔法が使えたんだ」

「う、うん」

「ところが、お前はまだ下ごしらえが上手くない。皮の剥き方は雑だし、芯も種もとりきれてない。ナイフに当たる集中力「コンセントレイションが研がれていないから切れ味も鈍い。そんなものを調理をしたって上手い料理が出来るはずもない、そうだろ？ 才能はあるんだから、まずは焦らずに魔力の純度を高める練習を続ける事だな」

「ど、どうやって？」

「今日までやってきたように、自分の身体を流れている魔力を常に意識すること。そして、それを一箇所に留めるようにイメージする練習をすること。あとは座禅を組んだり、本を読んだり、何か打ち込んだり。そういうことでも集中力「コンセントレイションは養われる。無論、一朝一夕には身に付かないけどな」

「わ、わかった、頑張ってみる。ところでシュイさん、僕、後どれくらいで魔法使えるようになるかな」

「うーん、同調にはあまり時間がかからなかったし、常に一定の効果が出せるようになるまでには、そうだなあ、おおよそ一カ月つてところかな。最初の内は体調や気分によって出来不出来の落差が激しいから。勿論、お前の頑張り次第ではもう少し短くなるかも知れないけど」

「ほ、本当につ？」

これだから子供は。

一瞬にして表情が明るくなったカイルに、シユイは肩を竦めて苦笑した。

「それでねママ。僕、少しだけ傷治せたんだよ！ 素質あるんだって！」

「あらそうなの、凄いわねえ。私も怪我したら治してもらおうかしら」

「うん、任せておいてよ！」

カイルが自信たっぷりに言い切った。

「その前に、切りつけた自分の手首の傷を治すんだな」

「……う、わ、わかってるよ！」

モーガン家の夕食時の団欒は久しぶりに明るさを取り戻していた。ケイも時折涙ぐみながらも楽しそうに笑っている。食卓にはケイと女中が腕を振るって作った料理が所狭しと並んでいた。

「いや、それにしても流石はシルフィールの傭兵様ですなあ。魔法を使うには早くても三月はかかると言われているのに、もう成果が出ているとは。噂に違わぬ仕事振りですなあ」

執事のロデイが実に調子の良いことを言った。あからさまに侮蔑の表情を浮かべていたくせに、とシユイは乾いた笑いで応じた。

「言っただはずだ。打ち込む情熱があるかどうかだ、と。カイルには



それがあつた、それだけのことだ」

「いやいや、謙虚ですなあ。私も見習いたいものですよなあ」

全く、羨ましい性格だなあ。シユイは変わり身の早いロディに、ある種の羨ましさを感じた。

そんな調子で夕食も終わり、カイルは余程疲れていたのか、直ぐに眠そうな顔をして自分の部屋に戻り就寝した。シユイがリビングのソファで一人寛いでいると、ケイがカイルの部屋からバッグを持って戻ってきた。そして、向かいの椅子に座るとテーブルにそれを置き、シユイに向かって頭を下げた。

「シユイさん、本当にありがとうございます」

「礼を言われるほどの事はしていない。大前提として、あなたがカイルを思っていたという事実がなければどうにもならなかつたさ」

結局のところ、説得の決め手になったのはケイの母親としての愛情なのだ。それがなければとても納得してくれなかつたはずだった。

「いえ、あの子の殻を破つてくださったのはあなたのおかげです。感謝してもしきれません」

そう言つと、ケイは置いてあつたバッグから封筒を差し出した。

何だかやたらと分厚かつた。

「これは……？」

「今回の依頼の報酬ですわ。お納めくださいませ」

シユイはティーカップをテーブルに置く。

「報酬だつて？ まだあの子は、魔法をきちんと習得できたわけでは」

シユイの言葉を遮つてケイは続ける。

「勿論わかつております。実を申しますと、カイルを来週からキャノエの魔法学校に通わせてみようかと。その、シユイさんには少し失礼に当たるかとも思つたのですが」

「あー、そういうことか。確かに、カイルのためにはその方が良い

だろうな」

同じ年代の魔法使いを目指す少年少女に囲まれた方が刺激にもなるし、競争心から上達も早いだろう。何より、他人に対する心をはぐくむ大事な時期だ。大勢の人と接する機会は逃さない方がいい。シユイは納得してから封筒を開けた。

「え、これ、200万パーズ!？」

長細い紙に束ねられた二つの札束を見て、シユイが驚愕の声を上げた。中座するならば依頼を達成したとは言えない状況だ。

「それもたかだか一週間で、いくらなんでも多すぎる。魔法学校の学費とて安くはないだろう」

通常、魔法学校の学費はどんなに安いところでも月に数万パーズはする。年間に換算すれば馬鹿にならない金額になるはずだ。

「ご心配には及びません。幸い主人は私達が何不自由なく暮らしていくのには、充分すぎるほどの財産を残してくれました。何よりあの子と私の絆を取り戻して、いえ、より強くしてくれたんですもの。それでも安いくらいですわ」

ケイは笑みを浮かべ、そう答える。

やれやれ、金持ちってのはどこにでもいるんだな。

とはいえ、感謝の気持ちは顔からも言葉からもひしひしと伝わってきた。

「わかった。そういうことならありがたく受け取っておく」

「はい。でも、明日まではちゃんとお願ひしますね。あの子も寂しがりますから」

翌日、シユイはカイルを連れて屋敷から程近い場所にある湖を訪れていた。午前中の修練が終わると、二人はケイが作ったお弁当の入ったバスケットを傍らに置き、昼食を取り始めた。

「……ねえ、シユイさん。ママから聞いたんだけど、家庭教師、今日で終わりって本当？」

カイルはシートに腰を降ろし、おむすびを食みながら訊ねた。

「ああ、本当だ。お前は魔法以外にも覚えなければならぬことが山ほどある。ただでさえ一年間も家に籠もっていたんだ。勉強も遅れているだろう。ケイもどちらかと言うとそっちが心配なのさ」

「う、それはそうだけど……」

「それに、大きな力を持つとする者は、先に力を使う心構えを知っておく必要がある。それを学ぶ下地として、色々な知識や人との触れ合いはどうしても必要だ。そもそも俺は傭兵<sup>マシネリ</sup>だし、教えるのが専門ではないからね」

シユイは水筒から紅茶を二人分注ぎ入れる。こぼこぼという音を聞きながら、カイルは首を捻った。

「んー、でも、シユイさんの教え方、凄くわかりやすかったよ？」

仮にそうだとしたら、つい最近までニルファナに教わっていて、記憶が鮮明に残っているおかげだろう。そう結論付けたシユイは、カイルに紙コップを手渡し、自分も紅茶を飲み始める。

「……ふう。じゃあ訊くが、お前は何のために魔法を学びたかったんだ？」

「……え？ えーっと、使えたら便利だし、格好良いかんと思ったから」

「そうか。なら、やっぱり学校に行った方が良いな」

カイルは目を丸くする。

「え、な、何でさ」

「自分と他人の目的意識の違いを知るのも、成長に欠かせないことの一つだから」

「目的……意識……」

「今のお前の目標は魔法を使う事。そういうことだろ？」

「うん、うん」

「それじゃあ少し勿体無いよ。魔法学校にはその魔法を使った上で、何かを成し遂げたいって奴も多くいる。そもそも、魔法はあくまで目的を達するための手段に過ぎないから。だが、それを言葉だけで納得させるのも難しい」

「……魔法を使って、成し遂げる」

「あくまで仮の話だが、例えば先日教えた回復魔法。あれを使って苦しんでいる怪我人を治してあげたい。もつと突き進めると、難病をも治せる新しい魔法を開発したい。……救えなかった両親をも治せるような魔法を、使えるようになりたい」

カイルの目の色が変わった。

「と、そんな具合にだ。どうせ魔法を学ぶならば目標を一つは持つべきだと思うし、明確な目標を持つことによつて覚えも早くなる。」

カイル、お前は魔法を使って何を成し遂げたい？」

「……ぼ、僕は」

カイルは手に持っている紙コップの中身に視線を落とす。ミルクティーの表面にそよ風が小さな波を立てる。

十秒を過ぎても返答がないのを見て、シユイはニルファナの言葉を思い出し、自然と表情を崩した。

「少し意地悪な質問だったな。別に今は答えなくても良いよ、カイル。今の言葉に引き摺られた解を聞かされるのは、俺の本意じゃないから。ただ、様々な立場にある人がどのようなことを考えて生きているか知っていても損はない。何より、それを知ることが世界の在り方を理解することにも繋がる。それを言いたかった」

カイルは頷き、顔を上げてシユイを見る。

「……うん、わかった。僕もちゃんとした答を見つける」

「宜しい。じゃあそれが、次回俺がここに来るまでの宿題だ」

少しして二人はシートを畳み、訓練を再開した。カイルは背筋を伸ばし、己の手を組んで瞑目し、風の音に耳を傾けている。シユイはその様子を観察している。姿勢に乱れがないことをチェックし、湖の方に視線を移す。澄みきった水面には、奥に在る山が逆さになって映っている。それが時折風で揺らぎ、形を崩し、やがて元に戻る。

「ね、シユイさん。もう一つだけ質問いい？」

「ちゃんと集中しろ」

「ご、ごめんなさ」

「とりたいところだが、最後まで見よう。何だ？」

「あ、ありがとう。その、生きるって、一体何だろう……」

シユイはカイルの方を見た。茶化して良さそうな雰囲気など一切感じられない、真剣な表情だった。貧民窟スラムでの出来事が余程シヨックだったのだろうが、それにしても随分と年に似合わぬ事を口にしたものだ。人生哲学を説くには、カイルだけではなく自分も、早いように思える。

どう説明したものかと迷っているうちに、シユイはふと、ある話を思い出した。

「もつずっと昔、俺がまだ子供の頃だ。似たような質問をある人にぶつけたことがある。その人は教えてくれた。生きるという言葉には大きく分けて三つの意味がある、と」

「三つの意味？ それって」

「姿勢まで崩すな。そのままの体勢で聴け」

「あ、はい。ごめんなさい」

カイルは慌てて手を組み直した。

「一つ目は、この世に生を受け、赤ん坊として産まれてから死ぬまで、生物学的に生命活動を続けること。いわば心臓が動いている状態だな。二つ目は、己に秘められた可能性を信じて目標を定め、それに向かつての努力を怠らない意思。お前が魔法を学びたい、そう思うのもその一つだ。さっきも言ったように、その一つ先を見つめ

られるようになれば尚よし。常に己を磨こうとする心、向上心を持ち続けることだ」

「うん。それで、もう一つは？」

シユイはそれを教えてくれた人の輪郭をなぞる。郷愁、悔恨、そして憤怒。様々な思いが去来する。

「記憶だ。誰かと出会い、そして別れ、自分以外の人々の記憶に何を残すか」

記憶、とカイルは繰り返した。

「お前は、何故今まで部屋に閉じこもっていた」

「え、と。それは……」

予想もしていなかった質問にカイルが言い淀んだ。

「……世界で僕だけ、たった一人だと思ったから……だけど」

「そう、おまえは血くという名の繋がりを求めていた。でも、それは本質とは少し異なる。この世界において血くという繋がりが、他の様々な繋がりにより温かな記憶を与える可能性が高い。それだけに過ぎない」

カイルは黙って聞いている。

「現に、おまえは血くの繋がりのないケイ、今の母親にも温かい記憶をたくさん貰っているはずだ。それと同時に、おまえ自身もケイに温かい記憶を与えている。その蓄積された記憶はいつか新たな繋がりを生む。心を通じ合わせれば血くにも負けぬ強固な繋がりが生まれる。古の言葉では、それを継キスナと呼ぶらしいけどな」

「>継キスナ<」

カイルは自分に言い聞かせるように呟いた。

「カイル、お前の亡くなった父親はどんな人だった？」

「う、うん。礼儀に厳しくて、しょっちゅう怒られてたけど、大好きだったよ」

カイルはどこか懐かしそうに言った。

「そうか、おまえは亡くなった父からも、未だに温かい記憶を与えられているんだな」

「うんっ。それに、シュイさんが会わせてくれたママも綺麗な人だった。……ちゃんと僕の事を心配してくれてたんだ」

少し涙ぐんだカイルに、シュイは「それは何よりだ」と頷いた。

「……家族、友達、教師、書物や芸術、或いは身近な動植物、偉大なる自然。それらはこれからもおまえの記憶に蓄積されていき、カイルという存在を形作っていく。そしていずれは、回りまわっておまえが、或いはおまえが作り上げた何かが、誰かに温かい記憶を分け与える、そんな日が来ると思う。もしかしたら、その記憶は誰かを立ち上がらせる、誰かに生きる力を与えるきっかけになるかも知れない。やがてはおまえが誰かとキスナ継ぐを結ぶ、そんな日がやって来るかも知れない。そうして世界の流れの中に身を置き、己の記憶を発信し、他者との繋がりを保ち続けること。それこそが三つ目の生きるって意味だ。ちょっと難しかったかな？」

「うーん、少し」

「ま、今は理解しきれなくても、そういえばこういう話があったな程度で構わないさ。いずれ自ずと知ることになる。たとえ目には見えなくとも人は支え、支えられて生きているってことが」

生命の奔流ほんじゅう、そして過去から未来へと描かれる世界の系譜けいふと記憶の連鎖。その只中に自分たちはいる。流れの激しさは一人で耐えられるものではなく、繋がっていないければあつという間に流されてしまっ。

「三つの生きる、かあ。何となくだけど分かった気がする。ありがとう、シュイさん！」

カイルは屈託ない笑みを見せた。シュイもフードの奥で微笑みを返した。

その一方でシュイは自嘲に近い思いを抱いていた。こんな事を言っている自分自身、きつとその流れから外れているだろう、と。

『私ね、君といると何だか淒く落ち着く。何故かしらね』

彼女、笑いながらそう言ってたな。今となっては、自分があの人に温かい記憶を与えることが出来ていたのか、確かめようがないけれど。

記憶は人を生かし、時に縛りつける。カイルに偉そうな事を説いておきながら、自分自身、縛られたままであることに、シユイは自嘲の念を禁じ得なかった。

「シユイさん聞いてる？」

「っと、何だ？」

知らず知らずの内に思い出に耽っていたのか、カイルの声が全く聞こえていなかった。

「えへへ、僕にとつてシユイさんもその繋がりなのかなって」

カイルは照れ臭そうにそう言った。シユイは何か言おうとしたが、言葉が出てこなかった。

「僕、シユイさんに会ったこと絶対忘れない。貧民窟スラムってところで出会ったあの人たちのことも。それってシユイさんも、あの子たちも僕の記憶の中に生きてるって事だよな」

「……そう、かも知れないな」

シユイは寂しげに呟いた。

夕刻、シユイがカイルを連れて屋敷に戻るとmケイが玄関から外に出てくるところに鉢合わせた。

「おかえりなさい、カイル、シユイさん」

「た、ただいまあ……」

カイルは昨日以上にへとへとだった。余計な話をした分、残りの時間で訓練の密度を増やしたためだ。既に報酬はケイから受け取っているのだし、手抜き仕事をするわけにはいかなかった。

「シユイさん、夕飯は食べていかれるのでしょうか？」



「いや、折角だが遠慮しておくよ。今からギルド支部へ戻ればぎりぎり依頼を受けられるかも知れないから」

「ええー、シユイさんもう行っちゃうの？」

「そうですね。そんなに根詰めなくても宜しいのでは……」

カイルは露骨に残念そうな顔を作り、ケイも名残惜しそうに頬に手を当てた。満更でもない気分になり、顔が自然と綻ぶのを止められなかった。

「お気持ちはありがたいが、何分せつかちな質でね。なあに、近くを通ったらまた寄らせてもらうよ。幸いここは町からそう離れていないし、カイルがサボらないでちゃんと勉強しているか確かめないと。曲がりなりにも、俺にとって初めての教え子だからな」

「ぶー、僕絶対サボらないよ！ シユイさんに負けなくらい強くなるんだ！」

頬を膨らませながらもカイルは元気良く答えた。

「そりゃあ楽しみだ。今言った台詞、絶対に覚えておけよ。       じ  
やあ二人とも、元気で」

シユイが軽く手を翳すと、ケイは小さく頷いた。

「……わかりました。シユイさんもお体に気をつけてくださいね」  
「絶対また来てね！ 約束だよ！」

シユイは軽く頷き、キャノエの町の方を振り向いた。長老樹の梢が茜色に染まっている。遠くでは大きな鳥の群れが、長老樹に向かって次々と下降していくのが見えた。あれだけ大きな木だし、きつと巣も無数にあるのだろう。

次にこの景色を見るのはいつか。それとも、もしかしたらこれが最後になるのか。

一度深く息を吸い込むようにし、足を踏み出す。二、三步、徐々に加速し、遅れて黒衣がふわりと風に靡き始める。強く地面を蹴り出し、緩やかな坂を一気に駆け下りていく。

「シユイさんまたねー！……つて、うわぁ……もうあんなに小さくなっちゃった！ 何だかシユイさんって風みたいな人だね」  
「ふふ、同感ね。カイルもシユイさんに負けないくらい、頑張らなくちゃね」

二人の親子はシユイの姿を見失うまで、精一杯の感謝を表すかのように大きく手を振り続けた。

## 第五章 不帰の傭兵（1）

ケイとカイルに別れを告げた後、シユイはギルド支部に行く途中でキャノエの銀行に寄った。ニルファナへ残りの借金20万パーズを振込み、生活費諸々を差し引いた残りを銀行に預金した。

ギルド支部に到着した時には、もう太陽は地平線の下へ隠れていた。緩慢な闇が町を包み込んでゆき、町のあちらこちらで灯りが点き始めていた。

建物内に入ると早足で掲示板に駆け寄った。依頼書はまだいくつが残っていたものの、割の良さそうな依頼は見当たらなかった。時間が時間だけに傭兵の姿も殆ど見受けられない。受付終了時間は十九時、中央の大きな時計花に目を移すと花卉は藍に近い。あと十分もなさそうだった。

さて、今度はどんな依頼をしようか。シユイが文字に注視し始めた時だった。

「よう、早いな。もう依頼は終わったのか？」

聞き覚えのある声に反応し、後ろを振り向くと見知った顔があった。

「見ての通りだよ、アルマンド。そっちこそ、まだここに残っているとは思わなかったけど」

シユイの意外そうな口調に、アルマンドはポリポリと頭を掻いた。「まあな、ちょっと面倒な事になっちまってよ」

「面倒……？」

言われてみれば、妙に浮かない顔をしているようだった。シユイの口調から疑問を察したのかアルマンドは続けた。

「実は、その、何だ。ピエールのやつが仕事中にドジ踏んじまっつな。放っておくとやばそうだから知り合いの治癒術士ヒーラーを呼んだんだ。

そろそろ来るって連絡を受けたんでここで待ってる」

「……何だつて？」

シュイの目が大きく見開かれた。少なくとも、六日前に別れた時まではピンピンしていたはずだった。

「大毒蜂の掃討依頼を受けていたようなんだが、大群に遭遇しちまったらしくてなあ。この辺りではそんなに大量発生した試しがないから油断していたんだろうが、目が覚めたら少し説教くれてやらなきゃな」

大毒蜂の掃討といえば、ピエールがシュイと一緒にやらないかと勧めてきた依頼だった。シュイは定員が埋まってしまい、遠慮したことを思い出した。

「……助かるのか？ それと、他の二人は無事なのか？」

「見たところでは、今日中に治療すれば問題ねえはずだ。獣族ビーストの嬢ちゃんの方も幸い軽傷で済んだ。ピエールを運んできたのも嬢ちゃんだからな。が、もう一人、一緒に受けていた奴は……」

アルマンドは力無く首を振った。それだけで十分理解できた。

「……ま、そいつはまだDランクだったみたいだから、不測の事態を乗り切るだけの実力がなかったんだろう。こういう仕事をしていりゃ偶にあることなんだが」

シュイは、デイジーが緊急クエストの説明の時に言っていた言葉を今更ながら思い出した。

『一番多いのは任務中に死亡、若しくは再起不能』

傭兵の任務は常に危険と隣り合わせだ。多少なりとも命の懸かっている仕事だからこそ、短期間で高い報酬が得られる。今日顔を合わせた仲間が明日には棺桶に入っていたとしても何らおかしくない職業だ。今回みたいに棺桶にすら入れない死に方することだって有り得る。

『当たり前前だけど、結構しんどいよ？』

シュイが傭兵になる前、ニルファナが言った念押しという言葉が脳内で再生され、微かな恐怖が込み上げてきた。あまりに軽く考えすぎ

ていた。今にして思えば、最初にやった護衛の仕事にしたってたまに襲われなかっただけだ。仮に襲われれば依頼人を守りながら戦わねばならぬのだから、襲われる側の条件は著しく不利だ。

「お待たせしました。アルマンド」

落ち着いた声に反応してアルマンドが振り返る。シユイは自分が負の思考による束縛から解かれた事に気付き、ほっと安堵の息を漏らした。

「おお、デニス。待ちかねたぜ」

デニスと呼ばれた男は、レンズの小さい眼鏡をかけ、神父が着ているような黒と赤が基調の修道服を身に付けていた。或いは、本当に神父かも知れなかった。粗野で奔放そうな感じがするアルマンドとは対照的に、非常にゆつたりとした雰囲気だ。柔らかな表情とラピスラズリを彷彿とさせる青みがあった眼が印象的だった。

「それで、患者はどちらですか？」

「一階の医務室だ。正直に言っただけかなり悪い」

「わかりました、急ぎましよう」

シユイは一瞬躊躇ったが、口を開いた。

「……じゃあ、俺はここで」

「……ん？ 何だよお前、見舞いに来ないのか？」

アルマンドは意外そうに、どこか不服そうに眉を上げた。

「ちゃんとした治療術師がいるなら俺に出来る事は何もないし、見舞いにいったところでかけてやれる言葉がない。じゃあ、もたもたしていたら受付が締め切られるから」

シユイは左隣にあるもう一つの掲示板へと歩いて行く。遅れて「アルマンド」とデニスが急かす声が、廊下の奥から聞こえた。

「……ああ、今行く」

アルマンドはシユイを一瞥すると、デニスと共に通路の奥に消えていった。

依頼書を一通り見てみるが、残っているB級の依頼は定員が複数  
の物が多く、今すぐに受けられそうな依頼が見当たらない。どうせ  
明後日にはまた依頼書が増えるのだ、とC以下に妥協する事にした。  
ランクが低いのなら、複数受けても良いかも知れない。

シユイは目的地が同じ依頼を複数探し、その中から一緒に出来そ  
うな物に絞る事にした。程なくして、一緒に出来そうな依頼を見つ  
ける。

D級任務、薬草の採取（キプロの森、中央部）、定員一名、  
報酬10万パーズ（達成後即払い）、任務時間三日前後 締め切り  
まで残り五日。

C級任務、人喰い虎退治（キプロの森、中南西部）、定員一  
名、報酬20万パーズ（達成後即払い）、任務時間三日前後 締め  
切りまで残り五日。

シユイは薬草の採取場所と虎の出現場所がほぼ被っていることを  
確認し、虎を倒した後に薬草を採取すればそんなに手間は掛かるま  
い、と考えた。取りかかる順番が逆だと採取中に襲われる可能性も  
あるかも知れなかった。万が一の可能性だが警戒するにこしたこと  
はないはずだ。ピエールがそういう目にあつた後なら尚更だ。

シユイは二枚の依頼書を剥がして受付に持って行く。受付の女性  
は既に身の回りの物を片付けて帰る準備を始めていたが、シユイに  
気づくとにこやかに話しかける。

「お疲れ様です。依頼の受諾手続きですか？」

「ああ、この二枚をお願いする」

声には嫌味の欠片すら感じられなかった。シユイは改めて、大人  
って凄いなと思った。もし自分がその立場だったら、帰る直前に客が  
きたらぶつちよう面を隠し通せるか自信がなかった。良くも悪くも  
今はフードが隠してくれているのだが。

「複数の依頼受諾ですね。そうしましたら、明日の午前中に時間を  
ずらして依頼人をお呼びするという事で宜しいですか？」

「ああ、構わないよ」

「畏まりました。それでは明朝九時にD級の依頼の方を、十時にC  
級の依頼の方をお呼び出し致しますので、その時間の十五分前にこ  
ちらの方まで来てください」

「了解した」

シユイは、受付に二枚の控えを受け取った。去り際に視線を後ろ  
に転じると、受付は必要事項をスラスラと書いていた。間もなくフ  
ァイルを閉じると後ろの戸棚に入れ、カチャリと鍵をかけた。それ  
を見送ったシユイは踵を返し、その場を後にした。

「アルマンド、どうかしたんですか？」

アルマンドの不機嫌そうな気配に気づいたのが、デニスは歩きな  
がらも肩越しに後ろを見た。

「……いや、随分薄情だと思ってよ」

「と言いますと、さっきの黒衣の方ですか？」

「ああ、せめて顔くらい見せてやればいいのに」

アルマンドは如何にも面白くなさそうに、わざとらしく息を吐い  
た。

「ははは、あなたらしいですね。でも、来ない理由にも一理あるか  
も知れませんかよ」

「あん、なんでだよ」

シユイの肩を持つようなデニスの言葉にアルマンドは訝る。

「詳細は聞いていませんが、目の前で仲間を失ったのでしょうか？」

二、「三日は立ち直れないんじゃないですか？」

「だったら尚更だ。背中叩いて元気付けてやりゃあ良いじゃないか」「しばらくは何を言っても気休めにもなりませんよ。時間でしか解決できないこともたくさんありますから。それに、彼はこうも言っていたでしょう。ちゃんとした治療術士がいるなら、つてね。あれは、もし私が来なければ何かしてくれるつもりだったんじゃないかもしれませんか？」

「……まあ、そう取れなくもないか」

「でしょう？ 何にせよ、我々みたいに長年こういう仕事をやっているなら兎も角、人の死を直視すれば割り切るまでにそれなりの時間を要するものです。在り方として、それは実に正しい」

苦笑するデニスを見ていてアルマンドは、まるで自分たちがそうではないと仄めかしているようにも思えた。デニスの言葉をそのままいれば、それは実に正しい。傭兵としての地位が高ければ高くなるほどに任務の難易度も上がり、人の死を間近で見る仕事も比例して増えていく。多少なりとも感情を殺すことを覚えなければ、遅かれ早かれ心を擦り減らして狂ってしまうだろう。

そんな話を交わしているうちに、二人は医務室の前にいた。

「……はい？」

チーク材で出来た薄茶色のドアを軽く二回ノックすると、ドア越しに女の声が聞こえた。

「嬢ちゃんか？ 俺だ、ダチの医術士連れてきたぞ」

「あ、ちよつと待ってください。直ぐに開けます」

五秒ほどしてカチャリと錠を外す音がし、ドアが開いた。アルマンドとデニスは連れ立って中に入っていた。



## 第五章 　　（２）

部屋の中は消毒薬の匂いで満たされていた。部屋の真ん中の天井には円柱形の青白いランプに火が灯っている。奥に一つだけある大きな窓の直ぐ手前に、ピエールが寝かされているベッドがあった。アルマンドとデニスは視線を交わして頷き合い、部屋の中に足を踏み入れた。

「待たせたな。まだ大丈夫そうか？」

アルマンドは爪先立ちをして、立っているミルカの後ろにいるピエールの様子を窺った。

「……かなり辛そうです。全身に毒が回っているみたいで」

ミルカは悲痛な表情を浮かべていた。まるで彼女自身が苦痛に耐えているかのようにだった。

ピエールは右の脇から左肩にかけて包帯が巻かれ、ベッドに横たわっていた。胸部の辺りには薄らと血が滲んでいる。眠っているようだが、色黒の肌にもかかわらずはつきりとわかるほどに顔が青ざめていた。かなりの距離を全力で走った後のように全身に脂汗をかき、荒く深く息をしている。ミルカの言うように相当毒が回っているのだ。

デニスはその様子を見て、ほんの僅かに表情を険しくした。

「……少し急いだ方が良さそうですね。ちよつとスペースを作つていただけますか？」

ミルカとアルマンドは頷き、ベッドの前にデニスの座る椅子だけを置いて他のものを手際よくどかしていく。

デニスは空いたスペースに進むと、ピエールに巻かれている包帯を手際よく外す。胸部には抉れたような生々しい傷があった。傷とついでに身も穿孔に近いそれを見て、ミルカは自分の身体を抱くようにして身を震わせた。一方のデニスは、その程度の傷は普段から見慣れているのだろう。顔色一つ変えずにベッドの前に座り、両の手

を包み込むように魔力を集中させ始める。程なく、彼の両手が白い光を放ち始めた。

「>慈悲深き神々よ 我が祈りに答えたまえ 命脈に巢食う負の力を浄化せよ<」

デニスの手には溢れんばかりの光が雫と化し、横たわるピエールの身体にポタポタと降り注ぐ。暫くすると、ピエールの身体全体から紫色の蒸気みたいな物が現れ始めた。

「こ、これは……」

ミルカが驚きの余りに声を上げた。

「絶対に吸うなよ。こいつの身体を蝕んでいた毒が出てきたんだ」アルマンドが簡潔に説明した。紫色の気体はピエールの身体から一定量出続け、デニスの目の先で一塊になる。デニスが息を強く発すると、その煙は立ち消えるように霧散した。視線を落とすと、先程まで苦しんでいたピエールの顔は驚くほど穏やかな表情になっていた。先ほどまで胸部にあった痛々しい穿孔も塞がっている。デニスは深く息を付き、立ち上がった。

「これで大丈夫でしょう。傷も塞いでおきましたから、直ぐに目を覚ますと思います」

「凄い回復魔法……こんなに早く……。あ、ありがとうございます！」

ミルカの顔が喜びに溢れ返った。

「流石はデニスだ。助かったぜ、感謝する」

ミルカとアルマンドは揃って頭を下げた。

「いえいえ、レムザ神は困っている者を見捨てはしませんよ。では、私は教会に戻ります。お大事にしてください」

デニスは音を立てぬようにそつとドアを開け、部屋を後にした。

「アルマンドさん、ありがとうございます。あんなに凄い治療術士ヒーラーさん連れてきて頂いて。……後で必ず治療費はお払いしますので」

ミルカは深々と頭を下げた。

「いや、あいつとは付き合い長いんだ。金なんて気にすんなって。つうか、こいつも油断しすぎなんだよ」

アルマンドは寝ているピエールを指してケラケラと笑う。それを聞き、ミルカは頭を下げたまま呻くように言葉を紡ぐ。

「……すみません。ピエール、魔物に挟まれた私を庇ったんです」

「何、そうなのか？」

「……普段から耳に頼り過ぎていたんです。蜂の羽音がとにかく凄くて、死角から接近されているのに気付くのが遅れてしまって。私を突き飛ばして助けたばかりに、ピエールはまともに毒針に……。ピエールの援護を失って孤立した彼は……。全部私のせい……。なんです」

ミルカは顔を両手で覆い、ついに泣き出した。ぽろぽろと、涙が床に出来た水溜りを少しずつ広げていく。いつもはピンと上を向いている三角耳も寝てしまっていた。

「ああ、いや……。な、何も泣くことはねえだろうよ」

アルマンドは両手を突き出した格好で固まった。気の利いた言葉が見つからずに困り果てているようだった。

「お前のせいじゃないよ」

呟くような、力の無い声だった。ハッと二人がベッドに視線を移すと、ピエールの眼が薄っすらと開いていた。

「お、こいつやっと気付いたか」

「ピエール！ ああ、良かった……。！ 大丈夫？ 気分はどう？」

「ああ、大分楽になったよ。少し寝ていたみたいだな」

ピエールはベッドに両手を付き、身体を起ここそうとする。

「ああ、ダメ！ まだ寝ていなきゃ」

ミルカが慌てて叫んだ。

「何、大丈夫だって……。あれ」

一瞬ふらつき、ドサツとベッドに倒れこむ。

「アホ。傷は塞がったつつつても失った血や体力が戻ったわけじゃ

ねえんだ。しばらくは安静にしてろ」

アルマンドは小指で耳を穿り、フツと耳垢を吹き散らす。

「……すみません」

ピエールは溜息混じりにそう言い、起こしかけた頭を再び枕に預ける。

「……俺の力が足りなかったんです」

「……ピエール」

ミルカは涙を拭ってピエールを見た。

「何度もやっている任務だからって油断してたんです。だから、大して警戒もせず」

「それは違うわ！　そもそも群れに遭遇したのは彼の迂闊さが原因よ。それに、私が奇襲にちゃんと気付いていれば」

「……違わない。あいつが新米だってちゃんと認識して、事前に慎重に行動するように言っていればこんなことにはならなかったはずだ」

「そ、それは……」

「俺が教えてやらなきゃいけなかった。どんな任務にも細心の注意を払って行動する事の大切さを。それなのに、先輩風を吹かすのも感じ悪いか、と勝手に判断した拳句がこのザマだ……」

結果としてピエールはミルカを庇って深手を負い、その様子を見て慌てたのか、木の陰から飛び出して来たもう一人の人族の青年は、横から飛び出して来た他の蜂に、二人の目の前で首を深々と噛み砕かれた。彼の身体はそのまま力を失って地面に倒れた。彼が殺されたと確信した二人は、蜂達にたかられている彼の遺体を置きざりにして、苦い思いを抱きながらも命からがらその場を脱出した。援軍要請の魔石を使うか判断する暇もなかった。彼の身体を犠牲にしな

ければ、或いは二人共助からなかったかも知れなかった。遺体とはいえ仲間をそのまま置き去りにした罪悪感が、二人の心をずっと責め続けていた。

「自分だけおめおめと生き残っちまうなんて、……情けねえな、本当」

ピエールは目を腕で覆った。頬から一筋の涙が伝うのを見てミルカも再び俯き、ズボンに皺が寄るほど腿の部位を強く握り締めた。

「……とりあえず今日は二人とも早く寝ろ。少し疲れてるんだ」  
アルマンドが溜息交じりに、何とかそう言った。

デニスが廊下に出て外に向かうと、奥の方から誰かが歩いてきた。先程の黒衣の男だった。

「依頼受諾は間に合いましたか？」

デニスがにこやかに声をかけた。

「ああ。さっきの……」

男は軽く会釈をした。

「ぎりぎり間に合ったよ。受付の人は既に帰り支度していたけどね」

「そうですね、それは何よりです」

デニスは目を細めた。

「あー、そういえばピエールは大丈夫なのか？」

予想よりも早く廊下に出てきたので気になったのだろうか。黒衣の男の言葉には、姿に見合わぬ若干の不安と気遣いが見て取れた。こちらに歩いてきたということは、後で医務室に顔だけでも出すつもりだったのだろうか。

ほらごらんさい、アルマンド。そう薄情な御仁でもなさそうですねですよ。

「ええ、毒は殆ど抜きましたし傷も塞ぎました。残りの毒は元々の身体に備わっている自浄作用で十分でしょう。体力は落ちていますが二、三日で全快すると思いますよ」

「そうか、なら良いや」

男は短く言った。

「そうそう、名乗るのを忘れていましたね。私はデニス、デニス・レッドフォードです。呼ぶ時はデニスでいいですよ。以後宜しくお願ひします」

デニスはある意図を持って手を差し出す。

「シユイ・エルクンドだ。俺も呼ぶ時はシユイで良いよ。まだ駆け出しだけど宜しく」

シユイはそれに気付かず、握手に応えた。言葉遣いや見た目に反してシユイの手は若々しく、艶のある感触だった。どことなく声も少し高く感じられる。

これは驚いた。……ハーベル嬢が目をかけるだけの事はありますね。

手から感じられるシユイの魔力の質は、一流の魔法使いのそれに近いものがあつた。握手をするように仕向けてついつい相手を分析してしまうのがデニスの、アルマンドに言わせると悪癖だった。

「いずれ、一緒に任務をする事もあるかもしれませんね」

「あなたは、準ランカーか？」

「ええ、良くわかりましたね」

「重傷をあんな短時間で治してしまうくらいだからな」

デニスは頷き、再び微笑みを湛えた。

「そちらは、駆け出しと言っていましたからBランクですか？」

「いや、Cランクだ。暫くは一緒にやれなそうだな」

シユイはきまり悪そうに頭に手をやった。

「いえいえ、早い人なら半年経たずにCからBに上がってしまいますから、あなたなら直ぐですよ。それに、準ランカーと言えども緊急時以外は下級の任務をやることも多いですしね」

「話半分を受け取っておくよ。では失礼する」

シユイは軽く頭を下げ、踵を返した。無事を確認しただけで十分だと考えたのだろう。

「お引止めしてすみません。またどこかで」  
シュイはデニスの言葉に軽く頷くと、何処かへ立ち去った。

シュイ・エルクンドか、中々興味深い。

デニスはその場で手帳を取り出し、シュイの名前と特徴を素早くペンで書き込んだ。自分の同胞たちに害を成さぬ人物であるよう、心から祈りながら。

## 第五章 〱(3)〱

宿を決めかねていたシユイは、ピエールたちと泊まった宿の事を思い出し、長老樹の方へと向かっていた。既に辺りは闇に包まれ、長老樹に辿り着くと昼間見た時とは全く別の姿を見せていた。青々とした枝葉が町の光に照らされたその美しさは、近くで見ると一層際立って見える。それを何組かのうら若いカップルがうっとり見つめていた。そんな光景を尻目にシユイは根元をぐるっと回り、宿の方へと向かう。

あつた、石畳の道だ。

大通りから外れ、見覚えのある形の悪い細道を進んでいくと、程なくベチユア亭くが見えてきた。

「いらつしゃいませー。あら、あなた確か、エルクンドさんだったわね」

宿に入るなりベチユアが愛想良く出迎えてくれた。有難い事に、もう自分の顔を、もとい黒衣を覚えてくれたようだ。

「遅くまでお疲れ様。今回はミル力たちと一緒にじゃないのかい？」

「ああ、ピエールのやつが負傷したもんで、二人してギルド支部で寝泊りするようだ」

「何だつて！ 大丈夫なのかい？」

ベチユアは心配そうに訊ねた。

「さつき治癒術士がやってきて治療したようだ。二、三日で全快だつて言っていたから心配ないよ」

「そ、そうかい。なら何よりだよ。つと、すまないね。エルクンドさん、泊まりで良いんだよね？」

「ああ、願います」

ベチユアは部屋の鍵をシユイに渡した。



「ご飯は直ぐ食べるかい？」

「そう、だな。出来ているなら頂くが、もし後で作る予定があるならその時でも構わない」

「そうかい、なら少し後にしてもらおうかな。ちょっと団体客が入っているからその時まとめて作っちゃうよ」

「了解だ。楽しみにしている」

シユイがそう言うのを聞き、ベチュアは笑って太鼓判を押し、肉厚の腹が思いの他揺れ、危うく吹き出しそうになった。

部屋に入るとシユイは鎌を置き、ベッドに座り、いつものように魔力を練り始める。

デニス・レッドフォードか。

優男に見えた彼だったが、シユイは握手した時にその手の大きさに驚かされた。歴戦の戦士であるアルマンドにも劣らないその手には、研磨された魔力が宿っていた。

やれやれ、本当にシルフィールってのは、化け物揃いだ。

デイジー、アルマンド、デニス、それにニルファナ。シユイがシルフィールの傭兵になってから、僅かな日数しか経っていないのに、これだけの実力者に出会えるとは想像もしていなかったことだ。そして、その実力者の中において、ニルファナは更に抜きん出た実力を持っている。

彼女と出会ったあの日、彼女が本気で自分を殺しにかかっていたらどうなっていただろう。シユイは度々、そう考えずにはいられなかった。

大陸にあるギルドはシルフィールだけではない。四大ギルドの他にも多くのギルドがあるし、フリーの、つまりギルドに所属していない傭兵にも数多くの猛者がいる。そして、彼らの目を掻い潜る狡

猾な賞金首や犯罪者が大勢いる。当然の事ながら、上級傭兵に匹敵する実力者も犇こしめいている。このまま傭兵を続けていけばいずれ相対する機会もあるだろう。

強くならなければならなかった。茨の道を歩むと決めた以上、彼らに負けぬ力を身に付けなければ自分の命は風前の灯。シユイにとつてピエールたちの件は決して他人事ではなかった。

『貴方はその力で何を成すのかしら』

カイルに掛けたのと同義の言葉が、懐かしさと優しさを含む声で繰り返された。少しして、口の中に鉄かねの味がゆっくりと広がっていった。

万人の目から見ると、自分が選んだやり方は多分に間違っているのかも知れなかった。死者のために生者を、そして己の人生をも犠牲にしようというのだ。

しかし、それではあまりにも死んでいった者たちが報われなかった。このまま放つて置けば、彼らの戦いが、悲劇が、歴史の闇に埋もれるのは避けられなかった。

そしてシユイは、それすらも建前なのだと自覚していた。きっと自分は、大切な人をこの手に掛けたことを正当化したいだけなのだ。

将来あけを夢見る資格なんてありはしない。シユイはひたすらに自分を責め続けていた。今はただ、滅ルイン・チャント祈歌を継ぐ者として、葬グレイ送曲ソングに相応しい終エン止符ノットを探す。それこそが自分に出来るせめてもの弔いであり、償いだと信じていた。

ミルカとピエールがようやく寝たのを確認し、アルマンドはギルド支部の屋上に出た。やれやれと大きく伸びをして、夜の町を眺める。視界の端には長老樹が町の光で妖しく照らされている。

どうもこういのは苦手だ。何か気の利いた事、言っただけなら良かったんだけど。

そんな事を考えながらアルマンドは夜景を眺める。生温い風が身体に纏わりついては離れていく。

二人はかなり落ち込んでいたようだった。仲間を目の前で助けられず、敵前逃亡せざるを得なかったわけだからそれはわかる。

けれども傭兵としての道を志した以上、暴力沙汰は日常茶飯事だ。いずれ二人が昇格し、Aランク任務等をするようになれば、凶悪な賞金首の討伐等を仲間と共に行う事もある。そういった危険な任務は、低確率ではあるにせよ味方にも死者が出ることもある。負傷者ならほぼ確実に出る。たれば、を言っていたらキリが無い。少しかつい言い方をするならば、この先目の当たりにするであろう多くの仲間の死を受け入れられないなら、端から傭兵なんぞやるべきではない。

と、そこまで考えてアルマンドは思考を切り替える。ピエールたちと同じく、自分にも新人の頃が、割り切れなかった時期が当然あったはずなのだ。

アルマンドとピエールの故郷、ジュー地方の諸国は程度の差はあるが、基本的に貧しい国が多い。国土の大部分は砂漠で覆われ、道路環境も整っていないし、農作物もあまり育たない。だから働く場所もあまりない。兄弟の多かった家は家計が苦しく、多くの者はこぞって各国に働きに出る。

アルマンドもその例外に漏れなかった。腕っ節には自信があったから、始めはセーニアにある中規模のギルドに入り、日々任務をこなしていた。そのうちに気の合う仲間が出来て、人並みに恋もして、

笑って、時に泣いて、生きていた。

確かに、あの頃は仲間が死んで涙した事もあつたかも知れない。だが

あの時の仲間はどうもない。ただ一人を除いて。全てが変わってしまったその日から、涙はただの一度も出なくなつた。ギルドが潰された後、シルフィールに入ってからそれもそれは変わらなかつた。自分の頭か心か、或いはもつと他の何かが狂っていた。

「……くつだらねえ生き方してんなあ、俺」

アルマンドは自嘲気味に呟いた。高い報酬と任務の達成感だけが辛うじて己の生きる糧と成り得た。だが、それすらも来るべき日きたが訪れるまでの退屈凌ぎに過ぎないのだと、強く自覚していた。

デニスは一人、キャノエのレムース教会で、首に下げている五芒星ペンタグのアミュレットを手に握り締め、祈りを捧げていた。

「今日も平穏な時を送ることが出来ました。新たなる始まりの日を迎えられる事に感謝いたします。レムザ神よ」

デニスはシルフィールの傭兵であると同時に、レムース教と言われる宗教の敬虔な信者だつた。

大陸に浸透しているレムース教は、今や世界全体で信者数が一千万人を超えている。逆に言うとそのだけ多くの者が救いを求めているということだ。そもそも、救いを求めている者が、宗教に惹かれるわけではないのだから。日々充実した生活を謳歌している者達には全く縁のない世界だ。

人族エイル、獣族ビースト、森族エルフ、魔族デモン。どの種族とて悩みは尽きない。大抵の

悩みは、家族や仲間と会話し、趣味や勉学に励む事によって払拭できるものだが、それだけではどうにもならない悩みも存在する。身内の死、仲間の裏切り、些細な嫉妬、他者の何気ない言葉、それらが己の心に陰を落とすことはままある。

そういつた者達を食い物にしようとする者はどこにだって群ぐいて  
いる。レムース教団内とて例外ではない。上層部にも神より金の方  
を愛する者が少なからずいる。しかし、己を節制して信仰を忘れず、  
多くの悩める者を救おうと活動する者だつて大勢いる。デニスはある  
理由によりシルフィールで傭兵をしているため、金の亡者だの、  
不信心だのと言つた心ない陰口を今現在も叩かれていた。無論、信  
仰を忘れたわけではない。救っている人間の多さなら教団内で五指  
に入るといふ自負があつた。

どうしたつて綺麗事だけでは生きていけない。デニスは傍らに置  
いてある、寄付を募るための募金箱を見つめ、苦笑いした。金は幾  
らでも必要だつた。デニス自身、孤児院に入つていたことがあるた  
めそのことを身を以つて知つていた。生き物である以上飲まず食わ  
ずでは生きられないのだ。

せめて暮らしていけるだけの生活を保障してやりたいと思つても、  
未だにその最低限の一線すら下回つてしまつ者が大勢いる。救つて  
も、救つても、今この瞬間にも餓死する子供たちがいる。

全ての人間を救うなんて無理だ、と何度となく諦めかけた。それ  
でも、まだ慈善活動を続けていられるのは、ある少女の存在があつ  
たからだつた。

レムース教の象徴でありながら、貧しい人々を救うために自ら現  
場へ赴き、法力を振るう幼い森族の少女、リーリ・フランデル。  
長い金髪と碧色の目を持つ彼女が白一色のローブを纏い、荒廃した

大地に凜と佇む姿はただただ神々しさに溢れていた。その姿に目を奪われ、心打たれたのは自分だけではなかった。彼女はレムザ神の神託に従い、多くの者たちを救い続けている。いずれ無理が祟り、力尽きるとわかっていても。

道半ばで諦めれば、意思を同じくする者たちに、何より彼女に全てを押し付けてしまう。たかだか十五歳の彼女に、である。そして彼女が放り出された責務を笑って引き継いでしまうこともわかっている。そればかりはデニスの矜持きょうじが許さなかった。

おそらく、リーリの願望が成就する日は永遠に来ないだろう。彼女としてそれが判らぬほど愚かでもない。それでも彼女が全ての人に尽くすことを止めぬならば、止められぬならば。自分は彼女の陰となり日向となり、その身を支えよう。いつの日か彼女が疲れ果て、純粹さを失い、羽を休めたいと請い願う時がやってくるまで。デニスはその決心と共に、シルフィールに身を置いていた。

番外 くお嬢様と執事(4)く

シルフィール本部・最上階

ラミエルは書斎机に頬杖を付き、物思いに耽っている。その向かい側ではビリーがラミエルの代わりに書類にペンを走らせているが、書類の向きはちゃんとラミエルの方に向いている。

「何だか少し頭が重いわ、ビリー」

「少し顔がむくみ気味のようですね、ちょっと失礼」  
ビリーはラミエルの額に手を当てる。

「あら、大胆ねビリー」

「熱はないようですね、むしろ」

「むしろ?」

「ヒンヤリしている」

「ならいいわ。でも、何だか息苦しいわね」

「もしま、悩み事でございませうか」

「確かに、悩みは尽きないものね」

「左様でございますね、お嬢様」

「でも、悩みは人を成長させる」

「私も成長するために日々悩んでおりますよ、お嬢様」

「あらそう、今日はどんなこと悩んだの？」

「珈琲と紅茶、結局どちらが美味しいのか、でございます」

「それは迷うわね」

「永遠の命題でございます」

「紅茶は今のために、珈琲は明日のために、ね」

「詩人でございますね、お嬢様」

「ということ、紅茶淹れてくれるかしら」

「畏まりました、お嬢様。ところで」

「何かしら」

「今日は中タイカした格好でございますね」

「わかる？ アフタールズ 閻祝祭に備えているの」



「おお、レムース教の伝統ある祝祭で巨大西瓜のお化けを被る風習があるあのお祭り、でございますね？」

「……詳しい説明ありがとう」

「光栄にございます。もう一つ気になったのですが」

「なにかしら」

「くり抜いた中身はどうなされました？」

「ジュースにしたわ」

「おお、果汁100%の西瓜ジュース、ちょっと惹かれますね」

「後で一緒に飲みましょう」

「うれしゅうございます。では、先に紅茶をどうぞ」

「頂くわ、……あら？」

「如何なされました？」

「ぬ、脱げないわ、ビリー」

「お、お嬢様、お気を確かに」

「な、何故一度入ったのに抜けないの」

「ふむ、指輪に良くあるエピソードですね」

「そういえばそうね」

「夫を失った後も太って抜けない婚約指輪。ああ、何たる悲劇」

「……ビリー、私を放置すると後が怖いわよ」

「ぞ、存じております、お嬢様」

「何とかできる？ ビリー」

「おまかせください！」

ビリーがラミエルの頭に触れるとそれは粉々に砕け散った。

「流石ね、仕事が早いわ」

「光栄にございます、心なしかむくみが取れましたね」

「勿論、後で作りなおすの手伝ってくれるのよね？」

「え、……はい」

## 第六章 く獣姫アミナ(1)

夜明け前に目覚めたシユイは、キャノエの町から少し離れた丘の上で大鎌を振るっていた。黒い刃が上下左右に動く度、朝の新鮮な日差しが乱反射を起こしている。

鎌は斧や槌などに比べれば重心のバランスが良く、刃の金属部分も少なめなので軽い。そうは言っても、先端部に重心があることに違いはない。全力で振るうと鎌の勢いが大きくなり、身体每持っていかれて体勢を崩してしまう。

シユイは掛かる力を確かめるように、少しずつ腕に力を加えていく。7、8割くらいの力で真横に薙ぎ、斜め下から斜め上へ振り抜き、身体を一回転させながら振り下ろす。と、地面すれすれで止めるはずだった三日月型の刃の先端が、土壌に潜り込んだ。

「とつ　くそつ、ぐぬぬぬ　」

かなり深めに刺さったのか、少々の力では微動だにしない。このままでは埒があかないと腕に渾身の力を籠め、膝を曲げ、カツオの一本釣りの如く腰を入れて一気に引いた。

「　おわっ、とつとつと」

スポンと抜けた鎌刃の勢いで、今度は後ろの方に倒れそうになり、背中を反らしつつも何とか踏みとどまった。

はあ、無駄に疲れた。鎌を選んだの、失敗だったかなあ。

芝生から覗いている岩に腰かけたシユイは、木に立て掛けた鎌を一瞥して溜息を付く。少なくとも、ある程度変則的な動きを取り入れないとまともにも使いこなせそうになかった。かと言って、鎌を動かすのに気を取られて魔法付与を使えなくなっでは本末転倒だ。

一先ずは慣れるのが優先か。シユイは立ち上がると再び鎌を手に取り、構えた。

一連の動きを繰り返している内に、シユイはあることに気が付いた。無理して刃を当てることに拘る必要はないのだ。持ち手の方も硬い金属だし、少し勢いを付ければ十分な破壊力を出せる。全く刃の付いていない棍という武器もあるくらいだ、それでも問題はないだろう。

先ほどまで柄の端側を持っていたシユイは、持つ場所を少しずつ変えながら鎌を振るってみる。柄の方で突きを入れ、身体を下げながら右手を固定させ、鎌を回転させて刃で横から刺す。

お、良い感じ。下に避けられたらそのまま蹴り、上だったら跳ね上げるか。

相手の動きを想像しながら、シユイは得物の修練に時間を費やした。

「おはよう。今日も随分早いお目覚めだね」

宿に戻るとベチュアが打ち水を撒いているところに出くわした。

「ああ、おはよう。今日も暑くなりそうだな」

シユイは太陽を直視せぬように手を翳し、天を仰いだ。まだ七時前くらいだというのに日差しはかなり暖かだ。薄雲一つ見当たらない快晴だった。舗装路では先ほどベチュアが撒いたばかりの水が、目に見えて小さくなっている。

「あら、あんたも暑いって感じるんだね」

ベチュアは可笑しそうに言った。

「ずっとそんな格好しているからさ、暑さに強いのかと勝手に思っていたよ」

「しゅ、修行のためさ」

シユイが苦しい言い訳を口にするのと、ベチュアは腰に手を当ててにんまりした。

「ふーん、修行ねえ。ま、いいさ。朝御飯後でもって行くから、汗かいたなら先にお風呂入ってきちやったらどうだい？ 今なら多分誰もいないよ」

「朝風呂か、いいかも……。うん、そうさせてもらうよ」

部屋に戻ったシュイは、皮袋から畳まれた黒衣と肌着を取り出して風呂に向かった。>ベチユア亭くには個室の風呂もあるので顔を見られる心配がなかった。気軽に湯に浸かることができるのは大きなメリットだ。大浴場しかない宿の場合、入浴は諦めるしかない。

さてさて、のんびりさせて貰うか。

一番奥の小浴場が空いているのを確認し、木戸に錠をかけてからフードを取り、黒衣を脱ぐ。そして備え付けの、洗濯石鹸の香りが残っているタオルを手にして浴室に入る。蛇口を捻ると、温水の水の直ぐ後にかなり暑いお湯が出てきた。少し水で埋めながら、軽くシャワーを浴び、汗を落としながら洗面器にお湯を溜める。桃色の薔薇石鹸を泡立て、身体を隅々まで洗い、身体に付いた石鹸を洗面器のお湯で洗い流した。まだ石鹸の残っていた部分をシャワーで落とし、湯船に向かう。お湯は少々熱めだったが我慢出来ないほどでもなかった。ゆっくりと足先から入り、1分くらい時間をかけてようやく、肩の下まで湯に浸かった。

「ふいー、たまらん」

言った後で、少し親父臭い台詞だったかと反省する。全身にゆっくりと熱が回っていき、手の指先にまで行き渡るとシュイは大きく息を付いた。風呂というものは全くもって素晴らしい。裸でただお湯に浸かるだけ、それだけで外界の全てを忘れられる。この一時だけは自分というものを取り戻せる。

湯に浸かってから暫くして、どこからかカラカラと引き戸の開く

音がした。反射的に浴室の引き戸に目をやるが、しっかりと錠をかけていることに思い当たる。ドアをぶち破りでもしない限りは侵入不可だ。おそらくは隣の浴室に誰かが入ったのだろう。

「おい、誰かいるか？」

今度はやや高めの声が発せられた。シユイは半ば反射的に浴室内を見回すが、目に映るのは立ち上る湯気ばかりだ。やはり隣の浴室だろうと独りごちる。

「いないのか？ いるなら返事をしてくれ。というか、絶対いるだろ。さつき水の跳ねる音が聞こえたぞ」

何やら上の方から声がした。頭上を見上げ、なるほど、と納得する。

5 mほどの高い天井と壁面との間に通気口と思しき隙間があった。壁向こうの浴室から声が届いているのだ。声からして女の子のようだから、隣は女湯なのだろう。この浴室と隣の浴室を隔てている壁が、ちょうど男湯と女湯の境界線らしい。

「……何か用？」

初めは黙っていたようかと考えていたシユイだったが、風呂から出た時に鉢合わせしたら気まずいのでしようがなく返事をした。

「おお、やはりいたか。実はこちら側の浴室の石鹸が切れてしまっているのだ。わざわざ着替えて取りに行くのもなんだし、そちらに余っている石鹸があったら一つ放り投げてくれぬか？ 壁の上は繋がっているようだから、多分出来ると思うのだが」

はきはきとした声が浴室内に反響する。そういう事かと納得はしたものの、果たして備品を無断で移動させても良いものかと迷ってしまう。

「……駄目か？ ……駄目なのか？」

罪悪感を増幅させるような猫撫で声が鼓膜に響いた。まるで小さな捨て猫にニャーニャー呼び掛けられているかのように気持ち揺れ動く。数秒ほどで思考はあっさりと一方向に傾いた。はつきりと断る勇気も、意地を通さなくてはならない理由も自分にはない。と

言うのも大袈裟で、所詮は石鹼一つの話に過ぎない。

まあいいか、後でベチユアさんに事情を話して謝っておこう。宿にある石鹼の数が減る訳じゃないし。

シユイは自得して湯船を出ると、端の方に置いてあった新しい予備石鹼をむんずと掴む。

「わ、わかった、今から投げるよ。頭に当たらないよう注意してね」「おおつ、手間をかけて済まぬ。さあ、いつでも良いぞ」

声の調子は間違いなく女の子だが、それにしても随分と特徴のある喋り方だった。そんな事を思いつつも、シユイは掴んでいた石鹼を天井の隙間目掛けて放り投げた。石鹼はパシツと音を立てて天井にぶち当たるも、上手いこと隣の浴室に落ちていった。何度も失敗するときまりが悪いので、一度でいってくれて安堵した。

少しすると「ありがたい！ どなたかは存せぬが本当に感謝するぞ」と丁寧な礼が返ってきた。

「い、いや、これくらい何でも。じゃ、じゃあ、俺はそろそろ出るところからどうぞごゆっくり」

シユイはそう言い、そそくさと浴室を後にした。引き戸を閉めたところでホツと一息付き、続いては首を捻る。何でこんなに心を乱されたのだろうか、と。

仄かな湯気を立ち昇らせて部屋に戻ると、既に朝食の支度が整えられていた。やたらと長細い川魚の塩焼きに山菜と山芋の汁、赤い茸の炊き込みご飯に納豆に温泉卵。朝から夕食並みに食欲をそらせるラインナップだ。

「おかえりなさいませ。おひつは置いていきますので、宜しければおかわりもどうぞ」

宿の女性従業員がにこやかに声をかける。

「ああ、是非頂くよ」

従業員が出て行くと、シユイは腰を下ろし、食事を始めた。まず

は山菜汁から口を付ける。しつかりダシを取っているのだろう、塩味を感じさせるか感じさせないかといった塩梅が、汁の具材と見事に調和している。

後で作り方、聞いておこう。ニルファナさんに今度会ったら食べさせてあげなきゃ。

そんな事を考えながらシユイは箸を進めるのだった。

朝から豪勢な食事を平らげたシユイは、腹ごなしに走りながらギルド支部へと向かう。時折すれ違ふ者が「ひえっ」と声を上げて避けていくような気がするが、気がするだけだろう。

ベチュア亭から十分ほどでギルド支部に辿り着いた。中に入って柱時計を確認すると、九時二十分前だった。先に受付のところまで行って待つ事にする。

「お疲れ様です。依頼人の方も間もなく来られると思います」

「ああ、わかった」

それから程なくして、依頼人と思しき獣族ビーストの女が現れた。依頼人はどうやら医者のもうで、止血に効く薬草を切らしてしまっただけ、まとまった数が欲しいとのことだった。

「二つ大きい岩が並んでいるところから、少し南に行った日当たりの良い場所にたくさん生えています。こちらが見本です、宜しくお願いしますね」

女は押し花みたいになっている薬草の標本を開いて差し出した。茎が細長く、葉の先の部分が薄っすらと赤紫色になっているのが特徴のようだ。

「わかった、これと同じものだな。似たような草は生えていないだろうか？」

「ええ、この辺りではこれと同じような草は生えていません。一目でわかると思います」

「なら良い。後ほど出立する」



一旦、その依頼人と別れて次の依頼人を待つ。しばらくして、こんどは背の少し低い、戦士の様な格好をした魔族デモンの男がシユイの前に現れた。魔族は比較的爪や牙が伸び易く、身体に流線型の痣ヒゲの様な文様があるのが特徴だ。耳も森族エルフと同じくらい尖っている。

「お待たせした」

その出で立ちからすると、偏見かも知れないが虎の一頭くらいは自分で何とかしそうな雰囲気だ。腕も足も太く、かなり厳めしい顔付きである。

「では、詳しい内容を聞かせてくれ」

「一週間ほど前に、キプロの森の奥で木を切っていた近くの住人が馬鹿でかい虎に喰われちゃったらしい。それで傭兵に敵討ちを頼みたいという事だ」

「ということは、あなたが直接の依頼人ではないのか？」

「ああ？ いや、うむ……い、依頼するように頼まれたのだ。だ、代理人というやつだな」

やたらと歯切れの悪い男を見て、シユイの頭にある考えが浮かんだ。この男、初めは自分で依頼を受けてみたものの、戦ってみたら手に負えなかったのでは。それでもって別の傭兵に投げ出したのではないかと。

ま、どっちでも良いか、詮索して取り消されるのもなんだしな。

「了解だ、遭遇した場所を聞かせてくれ」

依頼人の男は、まるで自分が虎に遭遇したかのように詳しい場所を教えてくれた。どうやら予想は正しかったようだった。

依頼人が帰った後で、シユイは短時間で手早く任務を終わらせる方法を考え始めた。

虎は縄張りを作る動物であるため依頼人が遭遇したポイントを中心に探せば見つけるのは難しくないはずだった。加えて、繁殖期以外は単独で行動する習性を持っているので群れに襲われる心配も殆どない。

勿論、想定外の事態に備えて道具はやや多めに持っていく必要がある。夜行性の肉食獣であることを考慮すると日没までには確実にケリを付けねばならない。

虎を仕留める算段が付いたところでシユイは支部の外に出で、必要な物を買ひ揃えにキャノエの町へと繰り出すのだった。

## 第六章 〵(2)〵

思わぬ上客の来店に、肉屋の主人は満面の笑みを浮かべていた。

「毎度ありやとやすつ！」

シユイは虎の餌用に一番安い豚肉を五キログラム買った後で、鎮静剤に使う>ヤスメ草<等の植物の粉末を購入した。更に雑貨屋では周辺地図と、もう一つの依頼用に薬草を束ねるための皮紐をいくつか購入する。最後には万が一敵の群れに遭遇した時のために魔具の店にも赴き、攻撃用の魔石を何種類か揃えた。

ほぼ万全の準備を整えたシユイは、買ったばかりの地図を見て現在地とキプロの森の位置を確認する。見る限りでは小走りで二時間ほどの距離だった。

まだ正午前、急いで森に向かえば日が暮れる前に終わらせられるかな。

シユイは買い揃えた道具を皮袋に詰め込み、目的地に向かって走り始めた。

キャノエから南西に伸びる街道を通り、そこから道を外れて南の森の中に入る。途中、小さな羽虫が大量に飛んでいてあまりに鬱陶しかったので一旦足を止め、弱い風の付与魔法を黒衣にかけて口に入らないようにした。更に森の奥へと進んでいくと程なく、虎退治の依頼人が説明していたと思われる場所に辿り着いた。

小川が流れていて向かいの木には縄張りを示す爪痕が二箇所、間違いないな。

シユイは周りに注意を払いつつ、豚肉が入った紙包みを取り出した。表面にヤスメ草の粉末をすりつけたそれを丈夫な紐で結え、振り子状にしてから辺りを散策する。

ややあって、虎のものと思われる唸り声が遠くに聞こえた。シユ

イは狙いを定めながら肉の塊を縦方向に振り回し、木の隙間を目掛けて放り投げる。

グアアアアウ！

ビリビリと、肌にヤスリをかけるような重厚な咆哮と共に、巨大な何か動くのが見えた。間違いなく例の虎だった。突然空から降ってきたご馳走に驚いたのか、しばらくは辺りを警戒しているようだった。そのうちに何かを食す音が聞こえ始めた。食欲に負けて鎮静剤入りの肉を食べ始めたのだ。

シユイはその場で気配を殺し、虎の食事が終わるのを待つ。ふと、咀嚼する音が聞こえなくなり、その代わりにざつざと、草を踏む音が聞こえ始めた。

薬の効果が現れる時間を計りつつ、シユイは虎を視界に捉えられる場所まで移動し、その姿を目視する。体長が3mほどもありそうな虎は、歩いてはいるもののふらふらの状態だった。

薬が効いているのを確認したシユイは、背負っていた鎌を手に持ち、おもむろに虎の側面に飛び出す。虎はシユイの方を見たものの、鎮静剤が効いているせいで動きに冴えがない。

鎌を携えたシユイが緩やかな弧の軌道を描くようにして虎に迫る。面食らって身を縮めた虎の喉元を目掛け、鎌刃を下から上に振り上げた。束の間、腕にかなりの重みを感じ、直後に強い抵抗感が失われた。

虎の皮を狩猟用のナイフで丁寧に剥ぎ、前と後ろの足を全て切り落として皮袋に詰め込む。本音を言えば骨も薬になるので全部持ち帰りたいところだが、この巨体を街道まで引っ張っていくのは一仕事だろう。人手があれば問題はなさそうなので、今日中に戻って医者への依頼者の方にも教えてやれば喜ぶかも知れない。さあ、次は薬草を取りに行こう、とシユイが立ち上がったその時だった。

どこからか妙な音が聞こえてきた。耳障りな、何か擦り合わされるような、そんな音が段々と大きくなっていく。生じた危機感に、シユイは素早く魔力の警戒網を周囲に張り巡らせた。遅れて、後方から何か接近してくるのを感じ取り、シユイは虎の遺体から離れて後ろを振り返った。

何だ、こいつは。

黒と橙色の縞模様をした巨大な昆虫が、耳障りな羽音を響かせてシユイの方へ勢い良く飛んできた。既に体勢を整えていたシユイは横に転がりこむようにしてその突進を避ける。昆虫は上空へ舞い上がり、方向転換をするとこちらを見てギギツと歯を鳴らした。威嚇しているのだとわかった。膨らんだ尾からは煌く銀色の針の先端が見え隠れしている。

もしかしてこれが大毒蜂、か。嫌だ、何だかとっても、……グロテスク。

昆虫なんぞ間近で見るともんじゃない、と心底思った。体長が大柄な大人並みにありそうなこいつは、ちよつとした木の幹をひと噛みで倒してしまいそうな巨大な顎あごを持っていた。腹の橙だいだいと黒の縞模様には薄っすらと血管のような管が見え、ピクピクと動いている。今は引っ込めているみたいだが、当然尻から毒針も出すのだろう。

見た目こそあれだったが、巨体のせいかわそれほど動きは早くない。おそらくは次の一合で問題なく倒せるはずだった。ただし、相手が一匹ならの話だ。現にピエールたちは群れに襲われたと聞いていた。或いはこの付近に巣でもあるのか、とシユイは周りの木々に視線を走らせてみた。ついでに滞空し続ける蜂の他にも仲間がいなか警戒してみるが、少なくとも今は大丈夫なようだ。

やや遅れて、再度大毒蜂がシユイに向かつて突進してきた。先程のやり取りでタイミングを掴んだシユイは鎌を背にして両手で持ち、ぎりぎりまで敵を引き付ける。そして、敵がシユイに噛み付かんとした刹那、シユイは引き気味だった足を前に大きく踏み出し、膝を曲げてお辞儀をするかのように体勢を低くして攻撃を避ける。後を追うようにして、地に付いていた鎌刃が大きく弧を描きながら大毒蜂に襲い掛かった。

鎌刃が蜂の胴体を寸分違わず捉える。シユイは手に突進の強い衝撃を感じるも何とか堪え、突き刺したそのままの勢いで前方の地面に思いつき叩きつけた。

強かに地面に押し付けられた蜂はブシュツと空気の漏れるような音を立て、緑色の体液を撒き散らして痙攣する。その震えが鎌の柄を持つシユイの手にも伝わった。

うわっ、気色悪！

ゾゾと、全身が泡立つのを感じた。これはなんとも見る人を選ぶ光景だ。今度からは焼き殺そう、そうしよう。やがて動かなくなった巨大な蜂から目を逸らしつつ、シユイは固く心に誓った。

鎌にこびり付いた蜂の体液をそのままにして布に包むのは流石に嫌だったので、小川のある場所まで戻り、流水に鎌の先を浸した。ザツと洗った後で火の付与魔法をかけて水滴を蒸発させる。

これでやっと薬草を取りにいける、とそう思ったシユイだったが、またしても耳障りな羽音が聞こえているのにげんなりする。しかも、先程と違って複数聴こえてきた。

ちよつとちよつと、本当に異常発生でもしているのか？

再び上空から大毒蜂が姿を現したのを目にして、やはり早めに出るのを去れば良かった、と後悔する。しかも今度は団体様、三匹もいる。これ以上増えたら流石にまずいかも知れない。そんな思考を無視して早くも一匹が空から迫ってきた。

「……>その身に焔を宿せく！」

方向転換させる間もなく、火に包まれた鎌を真横から振り上げて鎌刃を突き立てる。ボツという音と共に鎌刃に刺された蜂が火に包まれた。金属板が軋むような悲鳴を上げ、数秒ほどで息絶える。大きくとも昆虫は昆虫。火の魔法は相当効果があるようだ。何より、黄緑色の膿瘍のうようのような体液を見ずに済むメリツトは計り知れない。あれを浴びるかも知れない、と考えながら戦うのはお断りだ。

仲間のやられる様子を見ていたのか、二匹の蜂はシユイを側面から挟み込むように緩急を付けて襲い掛かる。その連携が完璧ではないことを見破ったシユイは先に突っ込んできた、自分に近い蜂のほうに火に包まれた鎌を思い切り投げた。回転した鎌の柄の方が、蜂の眉間の辺りに命中した。蜂の身体がボツという音を立てて燃え、付いた炎が羽を焦がし、燃え盛る鎌と共に地に落ちた。刹那、後方からの蜂を左側に跳躍して避けると、シユイは屈んだままの体勢で、空に舞い戻ろうとする蜂に手を翳した。

「>集束する雷く！」

雷の攻撃魔法が掌から放たれた。青い雷撃が蜂の身体に向かつて伸びていき、見事に命中。蜂はそのまま川の向こう岸に墜落した。倒すとまではいかなかったものの効果は十分にあつたようで、遠目からでも大きく痙攣しているのがわかる。

とつとつこの場を離れないとキリがない。シユイは手早く荷物をまとめ、火の消えた鎌を拾うと、その場から退散した。

少し街道側に戻り、くぼ地になっている辺りで無事に薬草の群生地を見つけたシユイは、周囲を警戒しながら手早く摘んでいく。あの程度まとめたら薬草を紐で束ね、十束ほどそれを作ると全部皮袋に入れて立ち上がった。

あれから大毒蜂に遭遇する事はなかった。もしかしたらまだ大量にいるのかも知れなかったが、あれ以上の数を一人でやるのは危険

が大き過ぎた。

とりあえずは、先に頼まれた依頼を達成するのが先決か。シユイは腰をとんとんと叩きながら、木の隙間にある茜色に染まった空を見上げた。

キャノエの町に着いた頃には、日はどっぴりと暮れていた。もうギルドへ行っても間に合わないだろう。達成報告は明日に回すことにし、シユイは再びベチュア亭くに向かう。

久方振りの実戦だったが身体の動きはすこぶる良く、鎌の扱いも付け焼刃の割には上々の出来だった。何より、自身の魔力が確実に上がっているを実感できたのは大きな収穫だ。この調子なら、飛翔魔法を扱えるようになるのも時間の問題か。

あまりにも順調な依頼の経過に気を良くし、自然と足取りも軽くなる。程なくベチュア亭くに着き、宿の扉を開けた。

「いらつしゃいませー。一名様で宜しいですか？」

従業員が愛想良く声をかけてくる。

「ああ、お願いします。つてあれ、ベチュアさんはどうしたんだ？」

「ああ、女将さんなら厨房でてんてこ舞いです。昨日今日つて、団体さんが入っています」

そういえば、そんな事を言っていたような気もする。今日も大繁盛の様だ。

「わかった、ありがとう」

シユイは鍵を受け取り、部屋番号が301であることを確認した。

階段を登る途中で獣族ビーストの団体が下りてくるのが見えた。独特の歩き方と威圧感、おそらくは軍人と目星を付ける。ベチュアたちが言っていた団体さんというのは彼らのことだろう。

ベチュアの料理は、はっきり言ってそこいらのレストラン等とは



比べ物にならないほど味がいい。宿代もかなり安いので場所があまり良くないことを差し引いても常連は付き易いだろう。隠れた名店という言葉がしっくりくる。かくいう自分自身も僅かな間に三度泊まっているのだし、もう常連と言って良いレベルかもしれない。

シユイが考え事をしている間に、軍人たちはシユイを胡散臭そうに見ながらその場を通り過ぎていく。末尾の男が舌打ち代わりだと言わんばかりに、ズボンから覗いた尾を尻にピシヤリと叩き付けた。どうにも感じが悪いな。上司の指導が行き届いていないのか。ま、あんな厳つい連中を指揮しているくらいだ。きつと装飾大猿エレガントゴリラみたいなブサ顔しているに間違いない。

自分の胡散臭い格好を棚に上げつつ、シユイは胸の内でき放題に罵るのだった。

「くしゅんつ。うむう、風邪でも引いたかな」

一階の大部屋の中にはやはり大きな四角いテーブルがあり、一番奥の窓際にある座布団に少女が一人、ちょこんと鎮座していた。身体こそ小柄だが胸にある二つの膨らみは水色の服の生地を押し出している。絹糸のように柔らかそうな銀髪は肩の上できちんと切り揃えられており、細長い眉毛の下には爛々と、紅光石ルビィにも似た濃密な赤に煌めく眼があった。獣族のようなフサフサの三角耳をしているものの、何故か尻尾がどこにも見当たらない。その外見的特徴は混血ハに見られるものだ。

服装はボーダーのカットソーにダークパープルのショートパンツというラフな格好。両手には甲の部分に銀系装飾が施された黒いアームカバーを付けている。

程なくして、大勢の獣族たちがぞろぞろと大部屋の中に入ってきた。少女はそれを一瞥し、何の気もなさそうに湯呑を持って茶を啜すす

った。

「姫様、大変お待たせいたしました」

「うむ、それで収穫はあったのか？」

「予測した通り、この近辺で大毒蜂が大量発生しているようです。既に何人が犠牲者も出ておるようです」

由々しき報告に少女は重々しく頷いた。

「そうか、ならば捨て置けんな」

「はっ、調査中に遭遇した蜂は全て始末しました。……が、異常とも言える繁殖の速度から考えますと焼け石に水かと」

「うむ。だが、異常なのは繁殖速度だけではあるまい。あれほどの成体が飛び回るには少々早い時期だ。ともすると亜種の母体がいるのかも知れぬ」

通常、大毒蜂の数が一番多くなるのは秋頃のことだ。夏真っ盛り  
の時期に飛び回る例はあまり確認されていなかった。

「確かにそうかも知れませんが。報告書によりますれば、この近辺で確認された大毒蜂達は普段の連中とは特徴が異なるようです。本来、巢に近寄らない限りはもう少し大人しいはずなのですが、やたらと好戦的な傾向も見受けられます」

「把握。それで、大体の場所は掴めたのか？」

少女の問いを受けた隊長は向かいの男に目配せを送る。合図と共に、若い獣族の男が手にしていたロール状の地形図をテーブルの上に広げた。

「ここが、キャノエの町にございます。調査隊が遭遇した蜂の分布図を見ますと、キプロの森の南西部へ行くほどに数が増えている傾向が見受けられます。そこから推察するに、おそらくはその近辺かと」

隊長が指を差した場所を確認し、少女は赤い双眸を少しだけ細めた。

「でかした、明朝は私も出よう。近日中に片を付けるぞ」  
「はっ、宜しくお願いいたします。姫様」

## 第六章 ～(3)～

明くる日、朝靄あさぎで霞むキプロの森の中をいくつもの影が疾走していた。その正体はフォルストロームの姫君、獣姫と謳われしアミナ率いる軍の精鋭部隊だった。

一行の動きの俊敏さはさながら野生の獣を思わせる。彼らはアミナを囲み込むように陣形を形成し、一丸となって森を突き進んだ。「警戒を怠るなよ。この程度の任務で犠牲者を出すのは許さぬぞ」  
『はっ！』

アミナの言葉からはぶつきらばうながらも兵たちに対する気遣いを感じられた。命じられる兵たちもそれをよく心得ているようだった。

二年前、アミナは一国の姫という立場であるにも関わらず、あるうことか傭兵ギルドに加入して国中の者を驚かせた。側近には危険だからと反対する者も多かったが、彼女は持ち前の押しの強さでそれを全て退けた。

既に一角の戦士であったアミナがギルド・シルフィールに入団した時のランクはB。体術と辰力しんりょくの扱いに長けていた彼女はその類稀なる身体能力を余すことなく発揮し、命の危険が伴う任務を幾度も潜り抜けた。Aランク傭兵、準ランカーにまで上り詰めたのは三カ月ほど前のことだった。

辰力は強化魔法の一種であるが、魔法とは少し力の使い方が違う。取り込んだ魔力を同調テューンさせるのではなく、自らの魔力を取り込んだ魔力の性質に近づける、という点で異なるのだ。内在する魔力を自在に変化させ、自らの能力を高めることに念頭が置かれている。

決して飾りじゃない実力を保持していることを周知に認めさせてからというもの、アミナの評価はより一層高まりつつあった。一見

すると華奢な容姿、誇り高くも情に熱い人柄であることも人気の一因だ。

一行は総勢十四名でキプロの森の南西を目指して疾走していた。そこに、異常発生元となる母体、つまり女王蜂がいると見当をつけていたためだ。

「……前方に蜂を何体か確認！」

先頭を走る兵が警戒を促す。上空に視線を走らせると五匹ほどの大毒蜂が飛来してくるのがわかった。

「打ち合わせ通り、20m圏内に入った蜂のみ飛び道具で迎撃しろ。それ以外は構うな」

「了解！」

一向は足を止めることなく森の土道を突き進む。その様子を見て上空から何匹かの大毒蜂が飛来してきた。だが、アミナに命じられた射程圏内に入った途端、獣族<sup>ビースト</sup>たちの激しい対空砲火に見舞われた。「ギイイイー!?」

走りながらの攻撃ゆえにそれほど精度が高いわけではなかったが、何しろ十四人からなる一斉攻撃である。密度の濃い魔法攻撃と飛び道具に晒され、蜂たちは空に逃れることすら叶わず次々と地に落ちてゆく。

統率の優れた兵たちの前には数匹単位の蜂等物の数ではなく、射程圏内に入った蜂は片っ端から弩<sup>ボウガン</sup>による射撃や魔法によって倒されていった。アミナの統率力もさることながら、獣族達個人個人の戦闘能力、判断能力も相当に高かった。

「気をつける、親衛隊だ！」

部長長の声に素早く反応し、一行が陣形を殆ど乱さずに足を止めた。今まで倒してきた大毒蜂よりも更に大きく、それぞれの足に鉤

爪が付いている蜂が二体現れた。仲間が殺された事を憤っているの  
だろうか、鉄同士を擦り合わせるかのような耳障りな音を出して威  
嚇している。

不意に二体の蜂が空へ向かって急上昇した。その速度を目の当た  
りにし、若い兵たちが動揺を見せたが、アミナはそれを見逃さない。  
「慌てることはない。近衛は気配を察知出来た者から順次、方角を  
指で示して合図を送れ。引き付けて一斉攻撃で各個撃破する。飛び  
道具を持つ者は合図があるまで通常の蜂の迎撃と回避を優先せよ」  
「は、はい！」

その落ち着き払った声と的確な指示に、兵の動揺があっさりと鎮  
まった。

「来るぞ、八時方向だ！」

気配を探っていた大柄な近衛の合図と共に、近衛の指が示した茂  
みに向かって矢や風魔法が放たれた。茂みから飛び出てきた瞬間一  
斉砲火を浴び、体勢を崩した親衛隊蜂に近衛が辰力を籠めた拳で襲  
い掛かる。

「せいっ！」

裂帛の気合に遅れて、肌に響くほどの打撃音が辺りに木霊した。  
近衛の拳をまともな腹部に受けた親衛隊蜂が水平に飛ばされ、木の  
幹に強く叩きつけられた。ひび割れた身体からはまるで膿のような  
黄緑色の体液が撒き散らされていた。

「よしっ！ 二匹目も来るぞ、五時方向！」

倒した余韻に浸る間もなく、一行は素早く迎撃体勢を整えた。

度々現れる蜂の妨害をもとせせず、ついにアミナたちはキプロ  
の森の南西部に辿り着いた。兵の一人が近くに生えていた背の高い  
木に登り、蜂の巣が作られそうな場所を探している。

「どうです？ 何かありましたか」

下から呼び掛けてくる若い兵に、偵察中の兵が釘を差す。

「そんなにでかい声を出すな、また連中が寄って来るぞ。ちょっと待ってくれ……。ここから少し西にそこそこ大きい岩山があるな。

もしかしたら洞窟があるかもしれない。後は、南東に巨大な木が生えているが」

「ふむ、おそらくは岩山の方だな。以前、先代の時にも似たような事があったが、その時も洞窟に巣を作っておった」

鬚を生やした近衛の男が思い出すように言った。

「よし、幸いどちらもここから距離は離れていない。分散はせずに岩山の方へ向かう。外れだったら木の方に向かおう」

アミナの方針に従った一行は、一路岩山の方角へと向かっていた。梢の狭間から見え隠れする山の頂上が少しずつ大きくなっていくが、その間にも大毒蜂の妨害は後を絶たなかった。

蜂の数は徐々に多くなってきているようだった。それは、一行が確実に巢の方へと近づいていることを意味していたが、あまりの多さに兵たちも焦りを隠せなくなってきた。360度、どこを見渡しても蜂、蜂、蜂だ。

「ちくしょうっ、一体何匹いるんだ！ 埒が明かんぞ」

「確かに数が多過ぎるな。こりゃあ近隣の町まで繰り出すわけだ」  
ここに至るまでの間、蜂以外の生き物には殆ど出会うことはなかった。おそらくはこの近辺の動物はあらかじめ狩り尽くされてしまったのだろう。

「……足を止めていたらやらされるな。麓<sup>ふもと</sup>まで一気に駆け抜けるぞ！  
一人も遅れるなよ！」

アミナの号令に反応し、一行は走る速度を一段上げた。行く手を遮る蜂を覗いては、自分たちからは攻撃を仕掛けぬよう努めた。

「け、結構な数追ってきてますよ！」

若い兵が走りながらも後ろにチラリと目をやり、顔を引き攣らせて叫んだ。追ってきた蜂たちの飛翔音が重なり、大音量で周囲に不気味に響いている。そのせいで大声を出さないと言葉のやり取りができないのだ。

アミナは山の麓にある洞窟に目を細め、次いで後ろから飛んでくる蜂たちを肩越しに一瞥する。

「洞窟の中からやって来る蜂はおまえたちに任せろ！ 入口から15m前後奥にいった場所で領域確保！ 外の蜂は私がやる！」

「え……、やるってあの数を一人ですか！？」

若い兵はアミナの身を案じる言葉を口にした。追って来ている蜂は少なく見積もっても数十匹はいる。その中には親衛隊蜂も何匹か混じっているようだ。

「心配するな、姫様は俺達よりずっと強い！」

部隊長が若い兵に振り返り、少しきまり悪そうに笑った。それを認める言葉を吐いた自分を恥じているようでもあった。

「は、はあ……」

「間もなくだぞ、飛び込んだ後の領域確保は任せたからな！」

そう叫ぶや否や、アミナは走りながら両手に魔力を集中させ始める。微かに、大地がカタカタと揺れ始めるが、走っているためその程度の揺れに気付く者は誰一人としていなかった。

獣族たちが先行して洞窟内に侵入し、中からの奇襲に備えて闇に向かって風魔法を放ちながら前進する。あくまで不意を突かれぬようにするために、空打ちならばそれで問題はない。

後を追うように、最後尾のアミナが洞窟の入り口に陣取り、踵を返した。一行を追って来た蜂たちは立ち止まったアミナ目掛けて突っ込んでくる。

アミナは細く息を吐き出し、己の両手を合わせ、走っている間に調整していた辰力を一所に凝集させていく。隙間風のような音がコ



ウコウと、高音域に移行していった。

敵が攻撃範囲内に入るタイミングを見計らうようにして、アミナは強く息を吐き出すと共に、洞窟の入り口に殺到してきた蜂の群れを目掛けて拳を振るった。

凄まじい衝撃音が兵たちの鼓膜に届き、洞窟を細かく振動させた。拳に乗せられたアミナの衝撃波が一瞬にして拡散し、蜂たちを次々に飲み込んでいく。突っ込んできた数十匹の蜂たちは一匹残らず弾かれるようにして吹き飛ばされ、羽が碎け散っていく。

身体が地面に叩きつけられる音がそこかしこで鳴り響く。ついさつきまで周囲に鳴り響いていた蜂たちの飛翔音は一瞬にして沈黙へと誘われた。

啞然とする若い兵たちを尻目にアミナは軽く息を吐き、髪を？き揚げながら洞窟の中へ入ってきた。だから言っただろう、と部隊長は少し誇らしげだ。

「中の様子は？」

「この辺りは大丈夫なようですね」

言葉を紡がぬ若い兵の代わりにベテランの兵が返事をする。兵たちが洞窟内に向けて撃った風魔法が蜂に当たった様子はなかった。

「では、灯りを付けよ」

アミナの命令通り、何人かの兵達がたいまつに火を付ける。灯りが洞窟内を照らし、視界が確保される。洞窟の天井はかなり低く、頭上からの奇襲は考えずに済みそうだった。

どこからか水が漏れ出ているのか、水滴が地面に落ちる音が耳に入る。奥に進むにつれて、段々と血の匂いが漂い始める。

「どうやら、いるようだな」

配下の蜂たちが女王にせつせと餌を運んでいたのだろうか。死臭

と鉄の臭いが鼻につき始めた。一行は警戒しながらも細い通路を抜け、大空洞に出た。天井は吹き抜けになっていて、外との光が差し込んでくる。一瞬、その場にいる者全ての視線がある一点に釘付けになった。

「……で、でかい」

年配の獣族が呻くように言った。体長4mはあろうかという巨大な蜂が、なだらかな高配の高台の上に陣取っていた。今は羽をたたくんでいるが、広げればもつと大きく感じられることだろう。

「……あ、あれが、女王蜂ですか？」

「ああ、間違いない。だがあれだけのサイズのもは、お目にかかったことがないな」

ぐちゃっぐちゃっ、と挽肉を素手で捏ね回す音を何倍にも増幅したものが大空洞に響いている。どうやら食事中らしい。中央に集められた餌の山には様々な生き物の死体があった。熊、鹿、猪、そして

「……くそっ！」

同胞たちの変わり果てた姿を見て兵たちが怒りを露にした。侵入者の敵意に気づいたのか、女王は食事を止めて羽を大きく広げた。刺々しい顎をこすり合わせ、キィキィと黒板をガラスで掻いているような不音を断続的に奏でる。

どこからともなく、たくさんの蜂が上空に集まってきた。その全てが親衛隊だ。侵入者であるアミナたちに向かって敵意を露にしている。

アミナは素早く上空に視線を走らせ、およその敵数を確認する。確認できるだけでも二十数匹。それだけでも十分な脅威であるが、奥に女王蜂が控えているのを忘れてはいけない。長引けば外から偵

察隊が戻ってくる可能性だつてある。

「……やるしかないな、短時間で片を付けるぞ」

「はっ！」

「女王蜂は尾から毒液を噴射する。常に尾の動きに警戒しろ」

隊長が皆に指示する。

「……女王は私が始末する。お前たち、援護を頼むぞ」

アミナはそう言うや否や地面を蹴り上げ、女王蜂に向かって一人で突っ込んでいく。

「ひ、姫様！？」

「狙いをご自分に絞らせるおつもりだ、姫様に続け！ 姫様を狙う蜂たちを殲滅するぞ！」

隊長は戸惑う兵たちにそう言い、続いて自分自身も走り出す。

「はっ！」

明らかに自分たちの主を狙って疾走するアミナを蜂たちが敵視し、上空から一斉に攻撃を仕掛けるべく降下する。それを阻むかのように、彼女の後方から走ってきた兵達が上空に魔法や矢を放ち、彼女の単独行動に気を取られていた蜂たちが次々に迎撃されていく。しかし蜂の数は相当に多く、親衛隊蜂だけあって俊敏でもあった。二匹ほどの蜂が兵の攻撃を掻い潜り、斜め後方からアミナに襲い掛かる。

「姫様！ 危な……って」

追い付かれかけた瞬間、アミナは息を短く吐き出し、走っている状態から更に急加速した。後方から突進してきた蜂を置き去りにして真正面から女王蜂に向かって跳躍する。女王蜂は彼女を噛み切ろうと顎を突き出してくるが、彼女は左手から魔力を解放し、空中で巧みに方向転換して女王の側面に回り込んだ。一瞬早く女王蜂の顎

から逃れ、そのまま女王蜂の横顔目掛け、辰力を籠めた右拳を前に突き出した。拳が女王蜂の眼、巨大な水晶のど真ん中に命中し、空気が細かく震えた。飛翔していた女王蜂は堪らず姿勢を崩し、そのまま地面へと落下する。

「やった！」

兵たちが歓声を上げた直後だった。女王蜂が羽を高速で揺り動かし、墜落する寸前で停止した。顔が下を状態から未だ上空にいるアミナに大きな尻尾を向け、猛烈な勢いで紫色の毒液を噴射する。

「くっ！」

半ば反射的にアミナは手から魔力を勢いよく放出し、強引に体勢を変えて何とか難を逃れる。しかし、空に噴射された毒液は拡散しながら重力によって舞い戻り、今度は雨のように地に降り注いだ。

「……> 燃え盛る炎くだ！」

隊長の咄嗟の指示と同時に兵たちが真上に炎を放ち、毒の降雨を蒸発させる。機転によって何とか事なきを得るも、毒液に当たった岩の床は熱された鉄板で肉を焼くような音を立て、溶け出していた辺りを飛んでいた蜂も毒液を全身に浴び、地に落ちてびくびくとのたうっている。皮肉なことに、親衛隊蜂は女王蜂の毒液によって全滅に近い状態だった。

「お、おつかねえ……」

「ひ、姫様！」

毒の雨を避け切れなかったのだろうか。アミナは何とか着地したものの、そのままよろけて床の上に倒れ伏した。その様子を見ていた女王蜂は好機と判断したのだろう。倒れた彼女目掛けて勢いよく飛び掛かった。

「ま、まずい！」

兵たちが次々とアミナを助けに走り出したが到底間に合いそうになかった。女王蜂とアミナとの距離はもう殆どない。小さな身体を噛み砕かんと両の顎が左右に開かれ、迅速に閉じられた。

「ギギ!？」

金槌を渾身の力で鉄板に打ち付けたような音が響く。女王蜂は嘔み砕いたはずの獲物がどこにもいない事に気づき、辺りを見回す。

「隙だらけだぞ、化け物」

後ろから掛かったその声に、女王蜂の動きが止まった。アミナは獣族たちにも捉えられぬほどの速度で女王蜂の真後ろに回り込んでいた。女王蜂が後ろを向くのよりも早く、アミナは十字に交差させていた腕を、掴まれているのを払いのけるかのように左右に開く。少なくとも、兵たちにはそうとしか見えなかった。僅かに風がそよぎ、アミナの銀髪をふわりと舞い上がらせた。女王蜂は全く反応を見せなかった。そして

「あつ!」

若い兵の声とほぼ同時に女王蜂の全身に裂傷が現れ、体液が一斉に噴き出した。羽がボロボロと崩れ、断末魔を上げたその巨体が地面にゆっくりと崩れ落ちた。

獣族たちは三人一組となり、分担して女王蜂の卵の駆除を行っていた。女王蜂がいなくなれば、確実に卵から新たな女王蜂に分化する蜂が現れるからだ。アミナのみ、腰掛けられそうな岩に座り、獣族たちに指示を飛ばしている。

「女王の尻尾はちゃんと持ち帰るぞ、貴重な素材だからな。……そうだ、そこに切り込みを入れるんだ」

「はい。うわ、ここは硬過ぎて無理じゃないですか? …… ああつ、なるほど」

年輩の兵が狩猟用のナイフを使い、若い兵に解体の仕方を丁寧に教えている。現場で学べる知識は有用なものが多い。新兵の教育に手を抜かなければ、いずれ彼らがフォルストロームを支える屈強な戦士となる。だが、教育はあくまで将来への投資であり、目的が今

を凌ぐためのものであつてはならない。例外的に即戦力になり得る者も稀にいるが、そういうたものを重宝してばかりでは人材も一向に育たない。

「姫様、側面の小部屋にあつた卵は全て焼却しました」

「よし、上のくぼみの方はどうなっていた？」

「確認しましたが、卵はありませんでした」

大空洞で確認作業をしている中、兵隊長他数人がわらわらと戻ってくる。

「お待ちせしました、奥の方の卵は既に孵化し、幼虫となつていましたので火を放っておきました」

「わかった。遺体の身元の特定はできたか？」

「はっ、一人だけ確認できましたが後は……」

兵たちは力無く首を振った。

「そうか、……火を貸せ」

アミナは隊長からたいまつを受け取り、女王の餌となつていた遺体の山に放り投げる。頂上の少し下辺りに火が付き、パチパチと音を立てて燃え出した。炎は徐々に大きくなっていく。腐臭と体毛の焼ける匂いが鼻に衝いた。

煙が吹き抜けへと吸い込まれていくのを見届け、アミナは目を閉じて手の平と拳とを合わせる。さり気ない所作にも関わらず、見惚れてしまう様な姿だった。兵たちも互いに頷き合い、それに倣うように手を組み始め、黙禱を捧げた。

一行が洞窟の外に出ると、もう蜂の姿はどこにもなかった。指示系統を失って離散したようだった。西の空を見ると既に日は沈みかけている。

「皆の者、ご苦労だった。お前たちの日頃の修練の証、しかと見せ

てもらったぞ。良く励んでいるようだな」

いち早く洞窟を出たアミナは兵たちを振り返ると、労いの言葉を掛けた。

「勿体無きお言葉です、姫様」

兵たちは一糸乱さず、アミナに敬礼する。その中には照れ臭そうな表情をする者も何人かいた。彼女の力添えがなければ、兵の犠牲は少なからず出ていただろう。彼女の武名を話半分聞いていた者も、より畏敬の念を強くしたようだった。

「しかし、この件に関してはもう少し調査する必要がありますね」

「確かに、あれほどの女王蜂がこのような人里に近い所に現れた前例はないな」

兵たちの言葉にアミナが頷く。

「私も同感だ。異常気象で偶然に現れたならまだしも、これが人為的に引き起こされた事ならばその罪は許されるものではない。そなたらの申しした通り、調査は引き続き継続する。何者かの悪意による行為であったことが判明した暁には、我が国で斯様な振る舞いを起こせばどうなるか、国内外に対して示さなければならぬ」

ぎゅっと握り締められたアミナの拳を見て、兵たちは各々に頷いた。

「私はギルドの方に戻るからそちらで探ってみる。隊長、ジジ様への報告は任せただぞ。それから、散った蜂と遭遇しないと限らぬ。軍営に戻る時も警戒は怠るなよ」

「はっ、お任せください！」

アミナの言葉に部隊長はビシツと再敬礼した。

不意に、アミナは表情を崩した。兵たちの何人かは思わず心の裡で感嘆した。先ほども纏っていた畏怖を全て脱ぎ捨てた、可憐な少女の笑顔がそこにあった。夕日が銀髪と相俟って黄金色に輝き、神聖さすら漂わせている。

「戻ったらちゃんと疲れを取るのだぞ。後日、身元が分かった者の遺族へは補償の手続きを行うように。身元がわからなかった者に対

しては失踪の時期と場所を照らし合わせよ。九割方間違いないと判断できればそれで由とする。では、解散！」

『ははっ！』

兵たちはアミナに膝を付き、深々と頭を垂れた。

アミナと分かれた一行はキャノエの隣町ボニにある駐屯地に向かっていた。あれだけの数の蜂を相手にしては、流石に疲弊している者も多いようだった。少し遅れ気味になっている者を慮り、部隊長は行軍の速度を緩めるように指示を飛ばす。

「しかし、凄かったですねえ姫様。時折耳にする武勇伝にしても、幾分誇張されているのでは、と思っていたんですがとんでもない。噂以上の強さでした」

「ああ、あれでまだ十六歳だと言っただから驚かされる。未恐ろしい事だ」

女王蜂を苦もなく葬り去ったアミナに、兵たちは圧倒されるばかりだった。あれ程の力を持つ者はフォルストローム軍全体を探しても五人といなかった。

「全くです、見た目はただの女の子なのに。身体もそんなに大きくないし……スタイルは抜群だったけれど、あだ！」

走りながらも部隊長が後ろから若い兵に拳骨をお見舞いした。

「ど阿呆が！ 下劣な目で姫様を見るな、全く！ ……気持ちいわからんでもないがな。あの強さは祖父のキーア様譲りだろう。先代も相当な使い手であったが、姫様はあの御歳にしてその域を超えておられる。さりとして強いだけでは人は付いてゆかぬ。あの思慮深さと優しさがあればこそ」

確かに、と兵たちは思った。類稀なる統率力、下の者への気遣いを忘れぬその心こそが、フォルストロームの全国民の信望を集める原動力なのだ。

「うむ、確かに姫様はお強いが、あの方の背負っている荷はあまり



にも大きい。だからこそ我々が全力で支えねばならぬ。少なくともこの程度の事で御手を煩わせないくらいにはならねばな」

年輩の兵の言葉に各々が頷いた。

「そうですね、我々ももつと強くならねば。フォルストロームの為に、姫様の為に」

兵たちは新たな誓いを胸に、愛国心を、アミナへの敬意を高めていくのだった。

「くしゅんっ！ …… つう、まだ少し痛むか」

痛みに顔を歪めたアミナは走りながら左脇腹をそつと擦った。

決して女王蜂を見た目ほど楽に倒したわけではなかった。何とか兵たちに被害が出る前に片付けようと、瞬発的に魔力を駆使せざるを得なかったためかなり消耗していた。また、毒液の噴射を避ける際に身体を無理に捻ったため脇腹の筋肉をも傷めていた。

兵たちの前でそのことをおくびにも出さなかったのは、誰にも弱みを見せられないという強制観念にも似た性格であり、彼らに心配をかけまいとする彼女なりの配慮でもあった。

巢に向かっていた時に比べて息も上がっているが、それでも周囲への警戒を怠ることはない。僅かな油断が命取りになることを知っているからだ。怪我をしていると勘繰らせぬ速度で疾走しながらも、視点は目まぐるしく動いている。危険に踏み込む決断力と距離を置く警戒心、一流の戦士に不可欠なその二つをアミナは併せ持っていた。

ようやく見覚えのある街道に戻り、アミナはようやく足を止める。立ち姿勢のまま息を整えてからゆっくりとキャノエの方を向き、その場から走り去った。

## 第七章 く蜂群来襲(1)く

アミナたちが女王蜂の巣を壊滅させるより時間は少し遡る。さかのぼ シュイは午前中、前日に終えた二つの依頼の達成報告を行った後、キャノエの町に繰り出していった。

キャノエの中心部には大きな目印があるため、自分のいる位置を把握しやすい。目印とは言うまでも無く長老樹のことである。万が一道に迷ったとしても少し開けたところに出れば長老樹が見えるのでそこを目指していけば問題ない。勿論所々に地図もあるが、そんなものがなくても太陽と長老樹さえ見れば容易に自分が町のどの辺りにいるのかがわかる。

町の観光も兼ねてのんびりと辺りを散策しつつ、シュイは図書館の方へと向かっていた。これまでは何とか誤魔化してきたものの、傭兵としての常識やギルドに関する知識に疎い自覚はあった。いずれボロが出るのは避けられそうにない。ともあれ、最低限の勉強が急務だと考えていた。

ギルド支部から小一時間ほど歩いただろうか。シュイは大人の背丈よりも高そうな灰色の外壁に囲まれた建物を目の前にしていた。一見すると、何の変哲もない二階建て。学校のような外観でもあるが、門の横には「キャノエ町立図書館」と書いてある。

敷地内には真っ直ぐな石畳の道を挟むように緑色の芝が敷き詰められており、両脇に生い茂る樹木からはステレオでポロロン蝉の鳴き声が聞こえてくる。豎琴を奏するような音を発する彼らは他の蝉と違ってそこまで五月蠅くはない。如何せんその鳴き声はどこか眠気を誘うので厄介なことに変わりないが、ただうるさいだけの蝉と

違つて乳児の母親や不眠症の者たちには喜ばれる。

建物内に入ると、少しだけ黴かびの臭いがした。風通しが然程良くない図書館の大半ではこういう臭いがする。ロビーでは学生と見られる多くの者達が机に座つて勉強している。比率で表すと8割方は獣ビ族ストで、1割5分ほどが人族エイル、森族エルフと魔族デモンがおまけ程度にちよこちよこつといふ。50年程前に大陸共通語が浸透してからは国境の垣根とやらも取り払われつつあるようだ。

シユイは階段を上がつて二階に移動する。本棚に貼られているプレートを確認しつつ職業関係の本棚に向かう。数分ほど読むべき本を吟味し、>ギルドの変遷<、>徹底比較！ 大手ギルド他中小ギルド<の二冊を選び取ると、仕切りだけで作られた読書用の個室に入った。

まずは>ギルドの変遷<を開き、ザツと流し読むことにする。本によるとギルドの体系を作ったのは>フラムハート<というギルドが先駆けらしい。その名前は勿論シユイも知っている。現在四大ギルドと言われているギルドの一つで知名度ならシルフィールよりも圧倒的に上だ。その歴史は、何と千年にも及ぶと言われている世界最古参のギルドである。

>レグナール<と呼ばれているこの世界は千年以上前からザーケイン帝国によつて支配されてきた。しかしながらその領土はあまりに広く、所持している軍だけでは犯罪者の取締りを満足に行うことが出来なかつた。そのため心ある者たちが自警団を組み、報酬と引き換えに犯罪者の討伐、捕獲、時には魔物の退治までこなしていたようだ。

ところがある時期を境に、滅法腕の立つならず者をリーダーとした盗賊団が各地に台頭し始め、自警団単独ではとても歯が立たなく

なってしまう。それに対抗するため志を同じくした者たちが手を取り合い、一つの組織を作り上げた。いつしかそれはギルドと呼ばれるようになり、同時期にフラムハートも発足している。それに続いて、六百年程前には四大ギルドの1つ>ミステイミスト<が。三百年前に起きた>ジュアナ戦役<後、百年の時を経て同じく四大ギルドの>アースレイ<が発足する。

シユイは主要な単語を脳裏に刻み込み、続いては隣の本を開く。徹底比較と銘打ったその本には各ギルドの特徴が事細かに書かれていた。軽いタッチで描かれているのでかなり読み易い。

フラムハートはギルドの中でも登録傭兵数が最も多く、末端の構成員を合わせると三万にも及ぶ。マスターは上級傭兵達の指名制。マスター直属の傭兵は>フラム・ガーディアン<と呼ばれ、大陸屈指の猛者が集う。北の大陸>ルクスプロン連邦<より領地を割譲され、自治権も与えられているため、その影響力はギルドというよりもはや国に近い。上級傭兵になることによって確実に自領を貰えるのが安定した人気の秘訣。目指せ、所持持ち傭兵！

三万という数は、中規模の国の全軍に比肩する兵数である。それを一組織が持つているとなれば最強の名も伊達ではない。

そういえば、とシユイはホーヴィにもフラムハートのギルド支部があることを思い出した。あそこのギルド支部が他の支部に比べて暇なのは、それも理由の一つかも知れなかった。同じ町で同じ商売をすれば、当然顧客の取り合いになるからだ。

次のページは>ミステイミスト<について書かれていた。

その歴史は六百年とフラムハートに次いで古く、ギルドとしては

オーソドックスな部類に入る。過去から現在に至るまでフラムハートと幾度となく衝突を繰り返しているため、潜在的に犬猿の仲なのはご存じの通り。勢力拡充のため小ギルドを幾度も併呑し、組織は複雑化している。

亡国の浪人等も雇い入れているため、お尋ね者でも腕さえあれば雇ってもらえる懐の深さが魅力。報酬額や任務達成率に定評がある一方で、裏では要人暗殺や政治工作等も引き受けており、懸賞金を目的とした仲間殺し等の黒い噂も絶えない。そんなサバイバルでバイオレンスな環境で働きたいなら一押し！

お尋ね者でも雇ってもらえるという謳い文句は、後ろ暗い者たちの心をさぞ攪ることだろう。シユイは遠い目をしながら過去を思い返す。もしもニルファナに出会わなかったら、こちらのギルドに入っていた可能性もあったのかも知れない、と。

確かに自分の目的を果たすには都合が良さそうだが、その前に同じギルドの傭兵に賞金目当てで殺されかねないのが玉に瑕か。

シユイはそんな事を考えつつも頁を捲る。もう見慣れた名前が目に入った。

シルフィールの歴史は三十年そこそこと非常に浅い。独自の組織構成により少数精鋭を旨として発足。大陸の各都市に支部を持ち、新興ギルドの中では知名度もダントツだ。

歴史が浅い故に比較的若い傭兵が多く、戦闘以外の依頼も数多く受け付けているため一見門戸は広いように思える。ところがどっこい、徹底した実力主義を旨としているようで、入団審査は熟練傭兵でも落とされる事があるほど厳しいとか。お尋ね者に告ぐ。ランカ―を見かけたら無駄だと思いつつ全力で逃亡することをお奨めする。目が合っただけで殺されるぞ！

この筆者のりのりだな、ちょっと尾ひれも付いているけれど、一応、ニルファナに遭遇した時は即殺されはしなかった。勿論、殺されかけたのは否定しない。

その後には、最後の四大ギルド、アースレイについて書かれてあった。

世界唯一の宗教ギルドであり、元々は大陸に浸透している三大宗教の一つ、セーニア教の系譜である。二百年前、当時のセーニア教の教皇に双子が生まれ、死後後継者争いに発展して兄側の勢力がギルドとして分離独立した。

一般的なギルドと異なり、かなり厳しい戒律を持つのが特徴だ。二百年前の因縁からセーニア教徒と対立しているものの、それ以外はいたって平穩。初心者、中級者傭兵のサポートが充実しているので、堅実でストイックなあなたはここで決まり！

宗教も観賞する対象としては中々興味深いが、自分で入る気は露ほども起きなかった。シユイは一旦本を閉じ、今までの内容をちゃんと覚えていくか反芻した。はんすう

本にも記載してあったが、今現在、世界で三大宗教と言われているものがある。一つ目は教皇を頂くセーニア教。世界最大規模の宗教であり、生きとし生ける者皆平等である、と最もらしく謳っているが、過去には異教徒の浄化や聖戦と嘯いた殺戮もやらかしている。良くも悪くも人間らしい発想と矛盾が混在した宗教と言える。二つ目はレムース教。レムザという半獣半人の唯一神を信仰しているが宗派がいくつにも分岐しており、過激派も保守派もいる。つまり一枚岩となって活動しているわけではない。教義や戒律は宗

派によって異なるが、同一宗派同士の抗争は避けねばならない、という暗黙の了解がある。

三つめは>ルクセン教<。世界最古の宗教だがどちらかというと秘密結社に近い。>エスペラン<と言われる存在を信仰しているが、それを描いた絵は存在せず、描くことも許されていない。エスペランとは世界を構築する流れの意である。創造主という概念は存在せず、この流れが歪まぬように動くことを目的とし、そのためには力の行使も辞さない。

ギルドの形態を取っているアースレイは一風変わって>神獣<を信仰している。例えば竜族ドラゴンや鳳族ファルコン、はたまた霊族スピリットまで。人よりも遙かに長寿で知能が高い存在を尊ぶ。今では確かめようもないが、この信仰は後継者争いという事態に陥り、袂たもとを分かたざるを得なかったセーニア教に対する擲掬も多分に含まれているのでは、というのが有識者の見解の一つだ。

その他の要注目ギルドもザツと読む。その中には悪名高いギルドも羅列されていた。>ダークロウ<、>クレア・レイズン<、>レツドボーン<等。この中には、犯罪者の温床となっているギルドもある。中には気に入らない他のギルドに対して狩りと称して襲うようなところも存在する。日々実戦を繰り返しているため手強い傭兵も多い。規模が大手より小さいというだけで上級傭兵の実力が劣るわけではないのだ。

注意するに越したことはない、か。

シユイは読み終えた本を重ね、脇に抱えた。

二冊を本棚の元あった場所に戻し、続いて>良くわかる傭兵入門書(図解付き)<を引き出しかけた時だった。

「あれ、シユイじゃないか。何してるんだ」

ぎくつとしたシユイが振り返ると、ピエールがそこに立っていた。「お、おお。奇遇じゃないか」

声がどもったが、別段怪しまれてはいないようだった。ピエールはただただ感心したように頷いている。

「おまえ、見かけによらず勉強家なんだなあ。まさか図書館にいるとは思わなかったぜ」

いちいち一言余計なやつだ。

「あ、ああ。正直、世情に疎いからな、少し覚えておこうと思ってそう言いながらもゆっくりと後ろに下がり、引き出しかけた本を後頭部で慎重に押し戻す。

「はは、それがいい。獣姫様を知らないと聞かされた時は正直度肝を抜かれたからな」

「ま、まあな。と、そういえば怪我の方は大丈夫なのか？」

シユイが訊ね返すと、ピエールはばつが悪そうに笑った。

「ああ、おまえもその事知っていたんだな。出来りや内緒にしときたかったんだが、ま、いいか。大丈夫、もう問題ないよ」

ピエールは腕を掲げ、力瘤を作って見せた。シユイが何気なく視線を反対側の手に移すと、生物学の本が二冊抱えられていた。ピエールはシユイの視線に気づいたのか恥ずかしそうに頭を掻く。

「その、魔物に付いてもう少し詳しく勉強しようと思ってな。同じ事を繰り返したくないんだ。あんな目に合うのは二度と御免だしな」「そうか、強いな。もう少し落ち込んでいるかと思ってたが」

シユイは正直な感想を口にした。

「そりゃ落ち込んださ。でも、いつまでそうしてたって、死んじまっただやつが生き返るわけじゃないだろ。だから、せめて同じ状況に会った時に無事切り抜けられる力を付けなきゃな」

事も無げにピエールは言うが、僅かな期間で立ち直りを見せたピエールにシユイは感心していた。もしかすると、シルフィールの入団審査では強さだけではなくそういった精神面も見ているのだろうか。



そう思ったところで何時しか絡んできた青髪の男の存在を思い出し、いや、それはないなと苦笑する。

「今日は、ミルカは一緒じゃないのか？」

いつも隣にいる彼女がいない事に気づき、シュイは辺りを見回しながら尋ねる。

「ああ、彼女は依頼を受けてホーヴィに向かっているよ。今頃は国境を越えた頃さ」

「へ？ 一人でか？」

「ああ、自分を一から鍛え直すんだとさ。それまでは俺にも会わないうつてよ」

ミルカもピエールと同じように考えているらしい。己の至らなさを恥じ、敢えてピエールと距離を取ったのだろう。

「だから、俺も負けてはいられないよな」

笑いながらも、遠くを見るような眼差しは真っ直ぐだった。

「切磋琢磨して上を目指す、理想的な関係だな」

「ああ、理想的な……、何だつて？」

「ミルカのこと、好きなんだろ。違うのか？」

シュイは極力済まして言った。

「な……ななな、何だとう！ だ、誰があんな口煩い奴！」

ピエールは唾を飛ばして反論したが、色黒の顔を真っ赤にしていてはなんと説得力がなかった。

「いや、一般的に言っただけなら良い線行っているんじゃないかな。面倒見は良いし美人だし。町を三人で歩いていた時にも、擦れ違った時に振り返って彼女を見ている男結構いたぞ」

シュイは、客観的な事実を包み隠さず述べた。ピエールは何か反論しようとしたが、口は動いても肝心の言葉が出てこない。口内炎でも気にしているかのように唇を歪めるばかりだった。

「っていうかさ、おまえもいい齡して照れるなよ。こっちまで恥ず

かしくなる。大体、好き合ってもいないのに年頃の男女が長い間一緒に行動したりしないだろ。安心しろ、数日しか一緒にいなかった俺の目から見てもちゃんと脈はあったから」

追い討ちをかけてからピエールの肩をポンポンと叩く。と、しどろもどろになったピエールの後ろから誰かがゆっくりとこちらへ近づいて来るのが見えた。シユイは自分の顔が強張るのを感じた。

「う、うるさい！ 大体おまえはいつもいつも」

「図書館ではお静かに！」

ドスを聞かせた声にピエールが慌てて振り返ると受付にいた、眼鏡を掛けた女性の図書館員がもの凄い形相で彼を睨んでいた。

「あ、す、すみません。でもこれはこいつが　あら？」

折り曲げた指で後方を差しながら振り向くと、シユイの姿はもうどこにもなかった。

図書館の敷地から出てようやく胸を撫で下ろす。ピエールには少し気の毒だったが、人の読書を邪魔したばちが当たったんだろうと結論付ける。邪魔する意図があったかどうかは関係ない。大切なのはたった一つの真実だ。

だが、ピエールのお話を聞いてみて少し思うところもあった。一所の町に留まらず、ミルカのように依頼を受けながら世界中を回ってみるのも悪くないかも知れない。

とりあえず依頼を見に行こう、とシユイがギルド支部に足先を向けた時だった。

突如、町中にけたたましい警報が鳴り響いた。

## 第七章 〱(2)〱

「この音は、何かあったのか？」

聞き慣れぬ警戒音に通行人たちは不安を滲ませ、しきりに周囲の様子を窺っている。遅れて、魔法で拡声された声がキャノエの町中に響き渡る。

『大毒蜂の群れが町の南東上空から侵入しました。繰り返します。

大毒蜂の群れが町の南東上空から侵入しました。急いで近くの建物内に避難してください。戦える方は長老樹付近にお集まりください』

「な、何だって!？」

若い男の顔から血の気がサツと引いていく。

「い、急がなきゃ!」

女は慌てて傍らにいた子供の手を握り、シュイがたつた今出てきたばかりの図書館に急ぎ足で入っていく。町のそこかしこからどよどよとざわめき上がり、キャノエの町は喧騒と緊張感に包まれた。

町の者たちがあちらこちらから図書館の中に走り去っていく傍ら、同業者と思しき者たちがその流れに逆らうように図書館から出て来る。その中にピエールの姿を見止めたシュイは少し及び腰になった。ピエールはシュイの姿を見つけると険しい顔で近付いて来る。

「ああ、いや、さっきのは決して逃げたわけじゃあないぞ? たま

たま外の空気が恋しくなったんだ」

「アホっ! んなこと言っている場合じゃないだろ!」とピエールが突っ込む。

「……だよな。大毒蜂って言っていたな。アレ、大量発生してるのか」

前回の仕事で遭遇していたためある程度の予想は付いていたものの、町を襲ってくる事態に発展するとまでは考えが及ばなかった。

「そうかも。俺も何度か依頼受けた事あるけど、多くても五、六匹くらいしかお目にかかったことなかったし」

ピエールの表情はどこか悔しげな表情だった。前回の任務で不覚を取ったことが我慢ならぬというように。

傍らで聞き耳を立てていたのだろうか。短い金髪をした森族エルフの男が二人に近づいてきた。背が高く美形と言って差し支えないが、それでいてどこかひょうきんそうな顔だ。年齢は二十前後といったところゆつたりした青いローブを纏っている。

「察するにあんたらも傭兵か。放送通りに長老樹へ行くのか？」  
シユイは少し考えてから返事をする。

「いや、幸いここは町の南側だ。分散する前に少しでも早く現場へ行って侵入を喰い止めた方が良いんじゃないか」

ピエールもシユイの意見に賛同する。  
「確かにな。一般人があんなのに襲われたらひとたまりもないし」

「……そうだな、わかった。遅かれ早かれ他の傭兵達も集まり次第駆けつけるだろう。そちらさえ良ければ、それまで共闘と行こうじゃないか」

森族の男の提案にシユイが応じる。  
「ああ、そつちの御仁は異存ない？」

シユイは男の後ろに隠れていた、背の低い傭兵を見た。黒装束を身に纏い、口に覆面を付けている彼は陶器を思わせる白く滑らかな肌、それと相反する漆黒の艶やかな髪をトップで纏めている。また、紫色に煌く目と横に尖がった耳から魔族であることが窺えた。それらは典型的な魔族の特徴である。

「……ん」

魔族の傭兵はシユイに視線を返し、小さく頷いた。  
「悪いな、こいつちょっと人見知りか激しくてな。普段から無口だからあんま気にしないでやってくれ」

森族の青年がすまなそうに言った。

「別に構わない。じゃあ、即席だが四人で組むとしよう。俺はシュイ、こいつはピエール。お前たちの名は？」

「シャガルだ。このちゃんまいのはピオラ」

シャガルは覆面の傭兵を指差して言った。

「ピオラ、何だか可愛らしい名前だな」

ピエールがもつともな感想を述べた。

「……ほっとけ」

思いの外高い声が返ってきて、シュイとピエールは顔を見合わせた。よくよく見れば胸に微かな膨らみが二つ。本当、人は見かけに寄らないものだとしユイは独りごちた。

四人は東の方に走りながら役割を確認する。南の方には町の外壁が見えるが、空を飛べる魔物に対してはあんなもの何の役にも立たない。

「遠距離攻撃出来る奴は？」

「問題ないぜ」とピエール。

「むしろそつちが専門だ」とシャガル。

「……可能」とピオラ。

「そっか、なら柔軟に戦えそうだな」

そうしている間にも、図書館の方角に逃げる街の人たちを何度か目の端に捉えていた。放送が入ってからそれなりの時間が経過している。大毒蜂がこの辺りに辿り着くまでそれほどの猶予はない。見かけた敵は片っ端から倒さないと、逃げている者たちが追いつかれる可能性は否めない。

それから間もなく「……敵、視認」とピオラが呟いた。

三人も前方にある建物の谷間に目を移す。大毒蜂が三匹、縦列に

走るシュイたちへと向かって飛んできた。シュイたちとしては、逃げる者たちのことを気遣わねばならない分、上空をすんなり通過されるより向かって来てくれた方が余程有難かった。みるみる内にその距離が詰まっっていく。

「よし、向かってくる蜂から狙い打つ。巻き込まれないように注意してくれよ」

三人が少し横に広がったのを確認してシャガルが左手に魔力を集中する。そして、先頭の蜂との距離が30m程に狭まったのを見計らい、手を掲げた。

ライトニング・スレテ  
「>雷の投槍く！」

シャガルの詠唱と共にその手の上に青白い雷が集約される。一瞬にして長細い形状に象られたそれを、彼は足を止めぬままに向かってきた蜂へ投擲するように放った。雷の槍が空を裂き、前後に重なって飛んでいた二匹の蜂をまとめて貫いた。辛うじて槍を避けた一番先頭の一匹が一旦退こうと上昇を始める。

「……遅い」

横にある赤いレンガの住居の壁を、ピオラは軽快に駆け上がっていく。瞬く間に蜂の飛んでいる高さを追い越し、壁を強く蹴って横方に跳躍した。身体を捻るようにし、頭を下にして蜂に上空から襲い掛かる。僅かに遅れて蜂が自身を覆った影に気付くがもう遅い。次の瞬間には、彼女の両手にある短剣が素早く蜂の身体を切り裂いていた。

微かに蜂の鳴き声が漏れ聞こえた。宙でくるりと一回転し、ふわりと着地したピオラの後を追うように、蜂が地面へと墜落する。

「……鮮やかだ」

その様子に見惚れていたシュイは、走りながらも賞賛した。

「いやいや、それほどでも」とシャガルは謙遜するが、そのくせどこか得意気だった。お調子者という印象は的外れでもなさそうだ

った。

「……シャガル、温い」

一方のピオラからは厳しいお言葉が発せられた。あれくらい一発で仕留める、ということだろうか。シャガルがしょげるのを見て、シユイとピエールは顔を見合わせて苦笑した。

路地を抜け、郊外の丘を駆け上がると古びた教会が姿を現した。

「おい、あれ！」

ピエールが叫ぶなり教会の扉の辺りを指し示した。蜂たちが教会の扉に何度となく体当たりしているのがわかった。どうやら、中に一般人が逃げ込んでいるようだ。

「まずいな、今にも壊れそうだ」

歪んでいる両開きの扉を見て、シャガルも言葉に焦りを滲ませた。ここから魔法を放てば教会の建物まで破壊してしまう可能性がある。この速度でいけばあと二十秒ほど、もつかどうかは怪しいところだ。

254

「先に行く」

シユイはそう言い残し、続いて三人が目を瞠った。既にかなりの速度で走っている状態から一気に加速し、シユイは教会に密集している蜂の群れを目掛けて鎌を振り上げながら飛び込んだ。

蜂たちが背後から迫る気配に気づいたのか、方向転換する。そこには太陽を背にした黒い影が黒い大鎌を振りかぶる姿があった。

「>絡みつくは雷の蛇く！」  
ライトニング・リロード

瞬時に鎌に雷を纏わせたシユイが回転しながら蜂たちの群れに襲いかかった。鎌で大きく円を描くように横薙ぎにする。その領域に触れた蜂たちは切断され、或いは鎌が帯びる電によって感電し、次々とその場に崩れ落ちていった。

宙を旋回していた蜂たちが異常に気づき、上空からシユイ目掛け

て急降下してくる。が、今度はそれを遮るかの様に真横から刃が次々に飛来。蜂たちの横腹に吸い込まれていく。シユイに気を取られていた蜂たちは、ピエールが放った投擲用の短剣を受け、そのまま地面へと墜落する。刃の部分に痺れ薬を塗っているのだろう。浅い傷で済んだはずの蜂も起き上がることが出来ずに痙攣している。

「……やるね」

三人が揃って教会の前に辿り着くと同時に、ピオラが感嘆の言葉を口にした。

「へへ、先輩直伝さ」

ピエールはニヤツと笑った。先輩というのはおそらくアルマンドの事か。前触れもなく顔に投げ付けられたナイフの事を思い出し、シユイは微かに顔をしかめた。

「入り口の蜂は片付けたぞ、中の者達は無事か？」

シャガルが扉に向かって声をかけると、中からは歓声が上がリ、牧師と共に男が数人出てきた。どうやら扉を中から押さえつけていたのだろう。牧師を除く者たちの手は真っ赤に腫れ上がっている。

「ああ皆様、ありがとうございます」

少し肥り気味な牧師が四人に向かって礼を述べた。

「怪我している者はいないかい？ 回復魔法使えるけど」

シャガルが言った。

「是非お願いします、二人ほど毒針に刺さってしまっていますので」

おもむろに、ピオラがぐいぐいとシャガルの青いローブを引っ張った。

「ピオラ、どした？」

「……あれ」

眉を顰めたピオラに促され、空を見ると



「ちよ、な、何だよあれ、全部大毒蜂か」

ピエールも口を半開きにした。南へと流れている雲を背景にして、空にある黒点が徐々にではあるが大きさを増してくる。パツと見、百をも軽く越そうかという蜂の群れ。それがこちらへと向かっていた。耳障りな飛翔音も少しずつ大きくなってきている。

「……この辺、他に建物はあるか？」

シユイが牧師に尋ねる。

「い、いえ。この辺りはこの教会の他には民家はありません」

そのためなのだろうか。丘にポツンとあるこの建物は蜂の格好の目標となっているようだった。だが裏を返せば、ここさえ守りきれば蜂の拡散は防げるし被害も激減するだろう。

「……シャガル？」

外にいるピオラが、中で怪我人の様子を見ているシャガルに声を掛けた。

「……二人とも傷がかなり深いから、治療に集中していないと危ないな」

「なら、三人でやるしかないな」

ピエールがそう言い、ピオラとシユイも覚悟を決めたように頷いた。

「いくらなんでも無策であの数をやるのは無謀だ。少し時間を貰うよ。牧師さんたちはもう中に入れてくれ」

シユイは急いで頭を回転させる。町には相当数の傭兵がいるはずだし援軍が来ればどうということもないだろう。無理して敵の殲滅を急ぐ必要はない。傭兵たちがこちらに援軍を出す余裕が出来るまで時間を稼げばいいのだ。

とは言つものの、三人で抑えるには数的不利を少しでも軽くしなければならぬ。敵が空を飛べるといのがとにかく曲者だ。息を付く暇もなく四方八方から襲われれば如何に手練の傭兵とて不覚を

取るのは避けられない。

せめて、敵が来る方向を限定できれば

「ピエール、この辺りの地面に急いで直径5m程のコの字を30m程度の間隔で四つ、向きを教会側に統一して描いてくれ。それから真ん中に番号を一から四まで振ってくれ」

「何だつて？」

ピエールが怪訝な顔をするが、シュイは構わず言葉を続ける。

「時間が惜しい、作業中に説明するから頼む」

「わ、わかった」

ピエールは剣を取り出し、その切っ先で地面に線を描き始めた。

「教会の入り口はどうする気だ？ 流石にもう持たないぜ」

シヤガルの声が教会の中から届いた。両開きの扉は既に元の形を呈しておらず、溶けてぐにやりと折れ曲がった板チヨコのようになっている。

「確か昆虫は温度差を嫌うだろ。扉を閉めた跡に氷の壁で塞げばいいんじゃないかな。幸い今は夏だし凍える事はないと思う。中からシヤガルが治療の合間に補強してくれば、何とかしのげるはずだ」

「なるほどな、良案だ。しかし、それをやるなら全員中に入って入り口から侵入しようとする蜂を迎撃した方が安全じゃないか？」

「……本当ならばそうしたいところだが何しろあの数だしな。教会の壁はそんなに丈夫そうでもないし。万が一体当たりで壁が壊されてもしたら多くの犠牲者が出るのは避けられない」

「……どうするの？」

ピオラが訊ねる。

「建物に被害が及ばないよう、俺たちが外で攻撃を引き付けるしかない。そのための目印さ」

シュイはそう言ってピエールが描いている図形を顎で示す。既にピエールは四つの図形を描き終え、番号を描くのに取り掛かっている。

た。

シュイは三人に作戦の意図を説明する。詳細を聞くにつれて二人の険しかった顔は徐々に和らいでいった。

「……………納得」

僅かに目を細めながらピオラは呟いた。

「とはいえ、かなり危険リスクを伴う事には違いない。効率良く倒すためだから仕方ないが」

「……………だが、あの大音量の中で合図が聞こえるかな」  
シャガルが心配そうに尋ねる。

「念話を使うから問題ないはずだ」

何気ない言葉だったが、二人はシュイが戸惑うくらいに眉を上げた。

「……………念話！」

「使えるのか！」

> 覚えてただけどねく

脳裏に響く言葉に、二人の顔つきが変わった。

「こんな感じだ、宜しく頼む。ピエール、話は聞いていたか？」  
準備を終えて戻ってきたピエールに声をかける。

「勿論だ、腕が鳴るぜ」

「よし、あの番号を覚えておいてくれ。左から数えて一から四までだ」

「……………了解」

既に会話が充分聞き取り辛くなっていた。迫りくる蜂の群れの飛翔音のせいだ。もう距離は500mもないだろう。

「じゃあ三人とも、頼んだぞ！」  
アイス・ウォール  
> 氷結壁く！」

シャガルは壊れかけた扉を氷で補強すると再び怪我人の治療に取

り掛かるべく教会の奥へと走っていった。

「来た」

ピオラが呟くや否や、外に残っていた三人が空を睥んだ。上空では夥しい数の大毒蜂たちが、まるで教会を覆い尽くそうとするかのように降下を始めていた。

## 第七章 〱(3)〱

空を埋め尽くす蜂群から漏れ出るように大毒蜂が二体、やや遅れてその上から二体、シューイたちに向かって来る。

「はあああああ！」

いち早く背負っている剣の柄に手を掛けていたピエールは、襲い掛かってくる蜂に対して長剣を抜刀しざまに振り下ろした。その刀身は見事に口を開きかけていた蜂の身体を捉え、縦に真っ二つにする。

「ギイイイ！」

もう一匹の蜂の突進をピエールが素早く伏せてやり過ごす。それを見計らい、彼の斜め後方に控えていたピオラが手に持つ短剣で素早く真横から切り裂く。蜂の身体が宙で斜めに傾き、そのまま高度を下げて行き、最後には地面に転がった。

遅れて二体が低空を滑走するように突進してきたが、既にピエールは体勢を整えていた。斜め前に飛び込むようにして蜂の顎から逃れつつ横一文字に長剣を振りかざす。見事に二体まとめて長剣が命中し、蜂たちは緑色の体液を撒き散らしながら滑り込むように地に落ちた。

その光景を見てフードの下で顔をしかめたシューイだったが、命がかかっている状況とあらばもう気持ち悪いとか言っている余裕はない。何より女性であるピオラが平然としているのに自分が怯んでは格好が付かない。所詮は見栄の話であるが、ゴキブリに大騒ぎする男がみつともないのは確かだ。

「次、来るぞ！」

ピエールの叫び声に呼応してシューイとピオラは再び空に目を移す。少数では勝てないと思ったのだろうか。こちらが一息付く間に上空

では蜂が十匹近く寄り集まり、一つの集団を作っていた。そして、横に広がるようにして一斉に空から突撃してくる。こうなると予想通り蜂の飛翔音で声が全く聞き取れない。

> 一番に入る、五秒前だ<

シユイの念話に二人は頷き、蜂をぎりぎりまで引き付けるとピエールが描いたコの字の領域に走る。蜂達は釣られるように移動し、シユイ達に近づくとつれて広がっていた陣形が段々と密集してくる。シユイ達が足を止め、蜂達が三人に後10m程に迫ったその時、シユイは下から上へと手を掲げた。

「> 裂風壁<！」  
ウインド・ウォール

シユイが高らかに魔法を唱えると、イメージし易いように描かれたコの字の溝に風の障壁が出現する。三人に突っ込んだできた蜂たちが、高さ4m程の見えない風壁に弾き飛ばされ、地面に激しく叩きつけられていく。五秒ほどで風の障壁が消滅するが、襲い掛かってきた蜂たちは漏れなく地面で身悶えていた。

障壁魔法の持続時間はある程度調整出来るものの、維持する時間が長すぎるとその分消耗も激しくなる。それを考慮し、シユイはある程度の効率が見込めるだろうと考慮した時間で魔法を解呪していた。

「……上出来」

のたうつている蜂たちを見てピオラが頷く。守りの呪文故に蜂達を一撃で殺すとまではいかないが、衝撃で翅を痛め付けるには十分だ。

「また来るぞ！」とピエールが上空を指し示す。

またしても大毒蜂は十匹程の集団となり、三人に襲い掛かってくる。再び教会の周囲が大音量の飛翔音で包まれていく。

> なるべく集団から外れている敵を始末してくれ。後は>ウインド・ウォール<で対処する<

シュイの念話に二人は目礼で答えた。

>次は四番、八秒前だ<

合図と共に三人は一番離れたコの字に向かって移動する。蜂達はシュイ達の動きを見て弧を描くように低空飛行し後を追う。先ほどよりも長細い列になっているが、線で来られるよりは点のほうが対処しやすい。

先頭の方に突出していた二匹を狙って、ピエールは両手を交差させるように痺れナイフを一本ずつ持ち、雄叫びと共に投擲した。最前列の一匹に命中し、ナイフを避けた二匹目にピオラの<集束する雷ルトが命中した。後を追って蜂達が突撃してくるが

「>ウインド・ウォール<！」

再びシュイの作り出した障壁が現れ、突撃してきた蜂達は三方に弾き出される。再び五秒ほどで障壁が消え、一番後方にいた蜂が障壁に当たることなく突進してくるが、ピオラの短剣によってあつさり片付けられる。

「これで二十体つてところか。へへ、順調だな」

「……油断、大敵」

不敵に笑うピエールに反して、ピオラはあくまで淡々と息を整えている。

三人は再び襲って来るかと上空を見やるが、何故か蜂たちはその場で滞空を続けている。

「……あ！ やべえ、教会の方が！」

異常に気付いたピエールがおもむろに叫んだ。釣られて二人もそちらの方を見ると、教会に集るように蜂たちが旋回を始めていた。何匹かが建物の壁に体当たりしているのを目撃し、三人の顔が揃って引き攣つった。

「ピオラ、こっちに注意を引くぞ！」

「……了承」

シユイは先日購入していた攻撃用の魔石を腰に下げていた茶色い布袋から手に出すと、教会に集る蜂たち目掛けて思い切り投げつけた。群れの中に投げ入れられた幾つもの紫の煌きが次々に小爆発を起こし、幾多の蜂を巻き込んでいく。何匹かの蜂が破裂して息絶えると、旋回を続けていた蜂がこちらへと敵意を向け始めた。

「……>ライトニング・ボルトく！」

尚もピオラの雷魔法が蜂の群れに突き入れられ、再び数匹の蜂が地に落ちる。教会への攻撃は収まったが、その代わりに蜂達の目標はこちらに固定された。

ピエールにも数減らしを手伝ってもらいたいところだったが、距離が離れ過ぎている相手に対して投げナイフを当てるのは至難の業だ。無駄にナイフを減らすよりは温存した方が良いと判断し、シユイはピエールの名を呼ばなかった。

「……う、いっぱい」

ピオラの顔が明らかに歪んだ。三十匹ほどの蜂がバラバラに、三方から取り囲むように突撃を仕掛けてくる。周りの音が先ほどよりも更に密度を増した蜂の羽音で塗り潰されていく。

ここからは我慢比べだ。

>今のうちに呼吸を整えておけよ。二番五秒前<

シユイ達は再び目標地点へ走り出す。敵の陣形に若干乱れは出るものの、数が数だけに完全に密集するとまではいかない。シユイたちがコの字に辿り着くと同時に横だけでなく上空からも蜂が迫る。

「>焔焼壁（ファイア・ウォール）く！」

シユイが詠唱を終えると共に、今度はコの字型の炎壁が発生した。横から突撃を仕掛けた蜂は壁に当たって火に巻かれた。上から突撃を仕掛けてきた蜂は炎による熱と、それによって発生する上昇気流



に怯えて再び上空へ逃げ戻っていく。黒い煙に燻された何匹かの虫がふらふらと、当て所なく彷徨っていた。

「……結構熱いな」

「……うう、我慢」

ピエールとピオラが呻くように言った。三人とて炎の壁に囲まれている状況だ。長居をすればミイラになるのは避けられない。そのためにシュイは壁を維持する時間を五秒と決めていた。

「空いてる場所から出るぞ。俺は詠唱インテーンと念話に集中するから露払いは頼む」

「あいよ！」

再び三人が走り出し、炎の中から飛び出してきた三人を追って上空から蜂が迫る。

>次、三番六秒前<

蜂たちの大まかな動きの流れを視認しながらシュイが念話で指示を飛ばす。蜂の一番少なそうな番号のエリアに走り込み、目一杯引き付けたところで比較的消耗の少ない障壁魔法で一網打尽にする。それがシュイの考えた作戦だった。コの字にした理由は四方を障壁魔法で覆うと魔法が切れた瞬間に包囲攻撃を受ける可能性があるためだ。魔法の効力が切れる前に出口から走り去り、次のエリアに向かう間はピエールとピオラの二人がシュイを護衛し、蜂を始末する。

>次、二番五秒前<

敵が低空飛行で密集している場合は風の障壁魔法で、敵が分散して襲ってきた場合は殺傷力が高い炎の障壁魔法で迎撃する。ただし、炎は発せられる熱によって中にいる三人の体力をも奪ってしまうのであるべく使うのは避ける。それが当初の取り決めだった。

しかしながら、状況は予断を許さなかった。既に敵は三人に対し

て包囲網を築きつつある。それから数分もするとシユイが風の障壁を展開する余裕は全くなり、全て炎の障壁で対応せねばならない事態となっていた。勿論>ファイア・ウォール<の方が殺傷力は高いのだが、それ以上に三人の負担も大きくなってくる。

>次、……一番七秒前<

段々と三人の表情に疲労の色が見え始める。走り通して蜂に対処しているため、息を付く暇が障壁を展開している最中しかない。息を整えられないよりはずっとマシだが、それにしても限度というものがある。

軽く五十匹以上は片付けたはずだったが、大毒蜂の襲撃が止む気配はついぞ見えなかった。数が徐々に減ってきてはいるものの、まだ半数以上は確実に残っているだろう。

「く、くそつたれ。……もうナイフねえぞ」

「……援軍、……ハア……遅い」

ピエール、ピオラの二人共が肩で息をし始めている。シユイの目から見ても限界がかなり近いようだった。シユイの黒衣は魔法による熱がある程度遮ることが出来るため、残っている体力に少し差が出ていたのだ。

「教会は……まだ無事のようにだな。……行くぞ」

呼吸を整え、三人は再び疲れた身体に鞭を入れる。ところが

「……んな！」

飛び出した直後、ピエールが驚愕の声を上げた。何と周りのエリアが全て蜂に覆われていたのである。この字のエリアがどこにあるかもはっきりと確認できない。視界の半分近くが大毒蜂で埋め尽くされていた。足を止めざるを得なかった三人に対して、蜂たちが我先にと襲い掛かる。

>……引き返す！ 後三秒<

急遽三人が反転し、先ほどまでいた一番のエリアに駆け戻る。前

方から迫る三匹の蜂をピエールとピオラが何とか片付け、後を追うように蜂が迫ってくるが間一髪、シユイが炎の障壁の魔法を唱えて難を逃れる。

「はぁ……畜生……、はぁ……逃げ場がねえな」

「……ハッ……ハッ、……困った……ハアッ……あれ」

炎の壁が消えないのをピオラが訝いぶかった。その刹那、ふらりとシユイの身体が揺れる。

「お、おい！」

「……シユイ！」

シユイは鎌の柄を杖代わりに地面に突き立て、辛うじて倒れることだけは避けた。拳を強く握り締め、手の平に爪が食い込む痛みによつて朦朧とする意識をはつきりさせる。

「無理しやがって！ 障壁を長く展開し過ぎだ！ 一旦」

「大丈夫、だ」

口ではそう言ったもののシユイには余裕など残っていなかった。如何に念話と障壁魔法の消耗が少ないとはいえ、あれだけ連発しては相当に疲弊する。こめかみの辺りがズキズキと痛むのもおそらく精神的な疲労によるものであると勘付いていた。

それに加え、二人よりマシとは言えども>ファイア・ウォールくが発する熱と度重なるダツシユが肉体的な疲労にも拍車をかけていた。頭皮から伝った汗が雫ではなく流水となつて頬を伝っている。

だが、今の状況で詠唱を途絶えさせれば間違いなく無数の蜂の襲撃に晒される事になる。今の三人の体力でどうにかなる数ではない。そして、三人が倒れば教会に避難している者たちの命運も遠からず尽きる。他の選択肢は、残されていなかった。

「……汝、留まり、続けよ。……その身に宿る焔により、天をも焦

がせ」

シユイは地面に突き立てた鎌を両手で持ち、身体を預けるようにして詠唱を紡ぎ続けた。鬼気迫るその姿は、ピエールとピオラを怯ませるに十分な迫力を有していた。

「……集中させよう。俺達は今出来る最善の事をやるだけだ」

「……同意」

唯一空いた方角から侵入を試みようとする蜂は熱に遮られ、はたまたピエールとピオラによって倒されていく。中央で障壁を維持しているシユイよりも、二人の方が炎に近いところで戦っている。手に持つ武器が炎によって熱せられ、柄の方も相当な温度になっているはずだが、呻き声すら聞こえてこない。

無理はお互い様だな、とシユイの口元に微笑みが浮かぶ。だが、極限まで張り詰めた糸が切れる時は、もう直ぐそこまで来ていた。

「……あぐー！」

迫る蜂に短剣を突き立てるや否や、ピオラが悲鳴を上げ、手にしていた短剣を取り落とした。

『ピオラ！』

シユイとピエールがほぼ同時に叫んだ。先ほどまで短剣の柄を握り締めていたピオラの手は真っ赤に焼け爛れ、肉を炙るような音を立てている。柄に布を巻いていたピエールの長剣と違って、短剣には布が巻かれていなかった。その分熱の伝導が早く伝わり、彼女は手に酷い熱傷を負っていた。

「……へ、平気」

ピオラが慌てて屈みこんだ瞬間、予想外の事が起きる。短剣を突立てられて動きを止めていた蜂に対し、後方から迫っていた蜂が勢い良く体当たりしてきた。体当たりを背中に受けた蜂の身体がピンボールの玉のように前に弾き飛ばされ、短剣を拾い直そうとしていたピオラにぶつかった。

「はぐう！」

強かに全身を打ち、ピオラの足が宙に浮く。次いで彼女が口につけていた覆面が外れ、ふわりと宙に舞う。蜂の動きを横目で追っていたピエールが咄嗟に彼女へと手を伸ばした。が、僅かに届かない。「くそっ！」

宙を舞うピオラの姿がやたらとゆっくり見えた。その行く手には炎の壁。解呪しても数秒は炎が残るから火に巻かれるのは避けられない。

ピエールに負けず劣らずシュイの判断も素早かった。自分の脇を通過しかけた小さな身体に反応し、鎌を放り出すと共に目一杯手を伸ばす。辛うじて中指の先が黒いズボンに触り、生地にしわが寄った。一瞬遅れて人差し指と薬指が引っ掛かった瞬間、力の限り下に引き付けた。

## 第七章 〵(4)〵

横へ身を投げ出しながら、引つ掻くようにしてピオラのズボンを下へと引き寄せると、宙にあるピオラの身体がぐんとつんのめる様に揺れた。ほぼ同時に、シュイの指先に鋭い痛みが走った。三本の指で易々と勢いを殺せるほど甘くはなかったようだ。

「……つくしよ！」

痛みに顔をしかめつつ、シュイは親指を下から捻じ込むようにして布地を3cmほど摘つまむ。束の間、布地が裂けてしまっても知らぬまいという懸念が脳裏を過るものの、それを振り捨ててズボンの外側へと、焰の壁の中央へと引き込むように腕を外側に振り抜いた。

焰の壁へと向かっていたピオラの仰向けの身体が空中で曲線を描き、先ほどシュイが放り棄てた鎌よりも少し後方にうつ伏せの格好で不時着する。着陸と言うには少々荒っぽかったが、かといって墜落と言っほどもなかった。

自ら展開した>焰焼壁ファイア・ウォールにピオラが焼かれてしまっのは辛うじて避けられた。シュイは地面に手を突いて素早く身を起こし、横たわる彼女に駆け寄った。

ピオラ！ しっかりしろ！

「……………ん」

ピオラを抱き起こし、念話で呼びかけてみるものの反応が鈍い。黒髪が汗でべっとり貼り付いた額を見ると、中央よりやや左側が赤く腫れ、薄らと血が滲んでいる。どうやら大毒蜂との接触時、武器を拾おうと前屈みになっていたせいで額を強く打ちつけたようだ。脳震盪を起こしているのか意識がはつきりとしておらず、半開きになっっている目もどこか虚ろだ。

一方で、ズボンの布地を引っ張った時に糸がぶつぶつと解ほれる感

触を指先に感じていたものの、かなり丈夫に作られているものらしく、破けることは免れていた。しかし

「……シュ、シュイ！ ピオラの、その……ズボンが」

後ろから何故か躊躇いとも戸惑いとも付かぬ声を掛けられ、ズボンと聞いてピオラの顔の下へ視線を走らせた。頬が思い切り引き攣るのを感じ、頭が真っ白になり、反して全身がカツと火照った。

確かに布地が裂けるといった事態は免れていた。代わりに、ズボンを強く引つ張ったせいで腰を締めていた帯が緩み、ピオラのズボンの右半分だけが膝の少し上辺りまでずり落ちていた。

薄いピンク色の下着と白く艶めかしい太腿が露になっているのを見て、シュイはフードの奥で赤面した。脱がしてしまったことと見ってしまったことに対して心の中で猛烈に詫びを入れつつ、慌てて穿き直させようとズボンに手を伸ばす。

その最中、差し迫る羽音が一気に音量を増したのに気付き、先に周囲へと視線を走らせた。いち早く目に飛び込んで来たのは、ファイア・ウォールくが消失するのを待ち構えていた蜂たちが突貫してくる姿だった。

窮地を察したシュイだったが、ふと蜂たちの後方にあるものに気付いた。それが混乱しかけた思考を一つに絞った。

ピエール！ ……走るぞ！

シュイはピオラを素早く右の脇に抱え込み、念話を飛ばした。ピオラの服の乱れを直すどころか、鎌を拾い直すことすら叶わぬままに走り出す。やや遅れて後方からピエールが追い付いて来る。二人は唯一包囲網が薄い方角、北側へと向かった。

傍らではピエールがこちらに向かって身振り手振りを混じえて口を金魚の様にパクパクさせている。しかし、蚊や蠅の飛翔音を何万倍にもしたような羽音が五月蠅くて何も聞き取れない。まるで出来の悪いパントマイムのようなようだ。「今更逃げてどうするんだ！」と非

難しているのかも知れないし「シユイ、まずいつて！ズボン！」とあくまで拘こたわっている可能性もあった。

シユイは念話を送る代わりに北の空を指差した。ピエールが訝いぶかりながらも空を見遣る。そちらの方角には蜂以外の、数頭の生き物が近づいてきていた。

ピエールが顔を綻ばせ、何かを叫んだのがわかった。読唇術の心得がなくとも、ピエールがどんな言葉を発したかはおおよそ理解できた。

白い生き物の姿が目に見えて大きくなってくる。その背には何人か乗っているようだ。

「……鳥獣グリフォン」

シユイの脇に抱えられたまま、ピオラがむくりと顔を起こした。

やっと意識がはつきりしてきたようだ。

頭部が鷲わし、胴体が獅子しし。五頭の鳥獣グリフォンが上空からその翼を真横に精一杯広げ、青空から教会に向かって勢いよく滑降してくる。

ピエールの振るう長剣に庇われながら、シユイたち三人は蜂の包囲網を掻い潜る。限界はとうに越えているが、助けが目の前に迫っているのを見ればなけなしの力も振り絞れるというものだ。

おもむろに、蜂に大分接近した鳥獣の頭がシユイたちの上空にいる蜂に向かって大きく翼をはためかせた。その凄まじい風に煽られ、シユイたちの頭上にいた蜂が次々に吹き飛ばされていく。次いで鳥獣の背から大きな矢が幾度となく放たれた。矢と言うよりは鉄杭に近かった。地面スレスレを飛んでいた大毒鉢が土を鋭く掘る音と一緒に地面に縫い付けられていく。露払いが済んだのを見計らうようにして、先頭にいた鳥獣が他の鳥獣の援護を受けつつシユイたち三人の前に降り立った。



「……エリク」

シュイの脇に抱えられたままのピオラが鳥獣から飛び降りた獣族ビーストの男を見止めて安堵の溜息を付く。シュイはまずその体格に目を瞠った。歩み寄って来たのは金よりもやや黄味がかった波打つ髪をした、熊の様にどっしりとした大男だった。左手に大きな弓を携えていることから、蜂を始末してくれたのはこの男の仕業だとわかった。鉄杭のような大きさの矢を弓で射るには凄まじいまでの臂力じりりくが必要となる。

「おお、ピオラか！ 良かった、長老樹で姿を見かけなかったから心配していたんだぞ」

大男は、どうやらピオラと旧知の間柄のようだった。幼い子供宜しく抱えられているピオラと見知らぬ二人のボロボロの有様を一瞥し、すまなそうに謝罪した。

「三人とも、遅れて申し訳ない。町の方にも分散していたので少し殲滅に手間取ってしまったな。あちらの数が割に少なかったのはここで食い止めていたからだだったのだな」

「ああ、それより急いで教会の方を」

ピエールがそう言いかけるのをエリクが落ち着かせるように制した。

「心配は無用だ、ちゃんと二頭向かわせている。背に乗る傭兵マインナーも選りすぐりだ。……ん、シャガルはどうした？ ここにいないのか？」  
エリクが少し不安げに辺りを見回す。

「ああ、それなら安心してくれ。あの中で怪我人の治療をしているよ」

そう言ってピエールは教会を指差した。既に教会の蜂は散らされ、入口前に展開した五、六人の傭兵によって各個撃破されつつある。もう心配はなさそうだ。

「なるほど、一般人がまだいたのだな。貴公らは？」

視線をこちらに戻すとエリクが訊ねた。今の今までピオラを抱えていたことを忘れていたシユイは右手の力を抜き、彼女をそつと地面に下ろして姿勢を正す。すると、エリクは何気なく下ろされたピオラに視線を移し、次いで顔を赤らめ、目を片手で覆った。

「お、おいピオラ。……ちよつとその格好は……何と言うか……けしからんぞ」

「……え」

ピオラはきよんとし、次いで頭を傾いだ。

「ひあつ！」

皮肉なことに、その悲鳴が今まで聞いた中で一番大きくはつきりと聞き取れた。ピオラは白い顔を尖った耳まで真っ赤に染め上げ、ずれていたズボンを慌てて直し始める。

「……あうー」

小さな身体をふるふると震わせながら、ピオラは抱えていたシユイに思いつきり非難の目を向けた。大粒の涙を湛えている彼女の目を見てシユイは慌てて謝罪する。

「ご、ごめん。君が蜂に突き飛ばされた時、このままじゃ>ファイア・ウォール<に当たっちゃうと思って咄嗟に手を伸ばして掴んだものを引き寄せてさ。……その」

「……うー」

弁明すればするほどに、自分でも言い訳がましく思えてしまう。ピオラを助けようとしたのは紛れもない事実だし、それによって>ファイア・ウォール<に突っ込むのを避けられたのも事実。しかしながら顔を赤らめて俯いているピオラを見ると、誇る気持ちよりも申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。

どうしよう、下着を見てしまったことも正直に言うべきだろうか。それとも、彼女の羞恥心に配慮してそれは伏せて置くべきだろうか。いや、決して自分が見たことを隠したいわけじゃなくて。

隠したい気持ちもないではなかった。助けようとして嫌われるのはどうにもやるせなかつた。散々迷った末に、シユイは助けを求め

るかのようにピエールを横目で見た。その場にいた第三者の意見ほど説得力のあるものはない。そう思っていたが、何故か彼はニヤニヤと笑っているだけだった。俺は蚊帳の外だ、と言わんばかりに。どうやら成り行きを見守る腹積もりらしかった。

こっ、なんてやつだ！ 詠唱破棄してまで必死に助けようとしたのを見ていただろ！

シユイは恨みがましい目をピエールに向けた。

「……続き」

無口なピオラの、しかしはっきりとした言葉にシユイがびくりと身体を震わせる。

下手に嘘を吐いたところで、いずれバレてしまう可能性は否めなかったし、何よりピエールに弱みを握られることが我慢ならなかった。それなら今この場で説明した方が納得してもらえるだろう。ただでさえ手一杯なのにこれ以上秘密を抱える羽目になるのは勘弁だった。シユイはそうと覚悟を決めて告白した。

「その、君を抱き抱えた時に服装が乱れているのは気付いたんだけど、その直後に>ファイア・ウォール<が消滅して蜂が殺到して来ちゃってさ。下着が覗いているのもわかっていたから本当は直してあげたかったんだよ。でも、今の今まで蜂から逃げ惑っていたからその余裕もなくて。本当、申し訳ない」

「……み、見たの？」

ピオラが小さな顔をくしゃくしゃにした。今にも泣きそうな表情だった。罪悪感が容赦なく心に突き刺さったが、見苦しい言い訳を展開しても仕方がない。

「正直に言っと、一瞬だけ。というか、ピエールが指摘しなければ気付かなかった」

「……ピエール？」

ピオラの紫色の目がピエールに向けて鋭い光を放った。

「……ちよちよ、お前何言ってるんだ！」

いきなり矛先が自分に向くとは思わなかったのだろう。ピエールが慌てて抗弁する様子を見て少しだけ気が晴れた。正直に打ち明けたことで後ろめたさは少ないし責任の所在もピエールと折半。最悪の結末は免れたと言えるだろう。

きつちりと保険を掛けたところで、シユイは再びピオラに向き直る。

「ごめん。でも、これだけは信じて欲しい。あくまで心から助けようと思った結果あなってしまったのであって、本当に事故だったんだ」

ピオラは羞恥に赤く染まった頬を小さく膨らませ、二人を交互に睨んでいる。が、蜂に体当たりを食らったことを思い出したのだろう。渋々といった様子で「……ん」と呟いた。

待ち惚けを食らっていたエリクが咳払いし、ようやく話に割り入って来る。

「あー、話は済んだかな。では、改めて貴公らの名を聞かせて頂こう」

「……あ、ああ俺はピエール、こっちの黒いのはシユイだ。俺たちも傭兵だ」

黒いと言うならお前の方だって色黒だろ、と言ってやりたかったがやめた。もうそんな元気もなかった。さっきの下らない騒ぎの処理だけでも十二分に疲れている。勿論、ピオラにとっては笑えない問題だろうが。

「そうか。……三人だけでよくぞ持ちこたえたものだ」

エリクは周りの夥しい数の蜂の死骸を見て呻いた。必死に戦っていたため途中からは数を数える余裕もなかったが、ザツと見るだけ

でも100に届きそうだった。

ふと、連なる蜂たちの死骸がぼやけ始め、シユイが眼を擦った。  
「ぎりぎりだったけどな、なあシユ」

勝手に膝が地面に突き、そのまま前のめりに倒れた。土の香りに混じって蜂の体液と炎壁で焼け焦げた臭いが鼻を突いた。

「……シユイ！」

突然前のめりに倒れたシユイを、ピオラが急ぎ助け起こそうとした。

このまま寝てしまいたいところだったが、意識を失えば顔を見られるのも避けられなかった。冬場の暖かい布団がもたらすようなまどろみを、シユイは首を小刻みに振って断ち切り、なんとか意識を繋ぎ止めた上で口を開く。

「悪い、ちよつと無理っばい。……少し横にさせてくれ」

「……お、お前なあ、心臓に悪いだろ。びっくりさせんなよあ」

ピエールもへなへなど、その場で尻餅をついた。前回の事があつただけに尚更焦つたようだった。

「無理もあるまい、長時間蜂の猛攻を堪え凌いでいたんだ。三人とも、後は我々に任せて休んでいてくれ」

エリクは再び鳥獣にまたが跨り、仲間たちの待つ空へと飛び立った。

ピオラはそれを見送ってからシユイの方に向き直る。膝に手を乗せて屈み、うつ伏せになっているシユイに心配そうに訊ねる。

「……平気？」

「問題ない」

シユイはズキズキと痛むこめかみを押さえながら、弱々しく返事をした。それをどう解釈したのか、ピオラはシユイの腰に自分の腰を降ろす。

「ぐへっ」

肺から息が押し出された。首を捻って後ろに顔を向けると、ピオラの小さな尻が腰の上に乗っかっていて、完全に許したわけではない、という意味表示のつもりなのだろうか。平気かと訊ねたのは氣遣ったわけじゃなくてそういう意味合いだったのか。様々な疑問が浮かんで消えた。

小柄な彼女故に重い、というほどのことはないが、それにしても必死に戦った拳句がこの仕打ちとは如何なものか。大体、十四歳になっただばかりの自分に人間椅子は早過ぎる。

「ピオラー、まだ怒ってるの？」

「……当然」

「本当、ごめんって。不可抗力なんだよ」

「……椅子、喋っちゃ駄目」

「……ええええ」

ピオラは約束を反故された子供の様に頬を膨らませていた。その顔は怒っているようにも、不貞腐ふてくされているようにも、どこか笑いを堪こらえているようにも見えた。

風が彼女の頬を撫で、波打つ黒髪がそよいだ。束の間、彼女の顔から険が取れ、その表情にシユイは思わず見惚れた。複雑で、それでも不快さとは無縁で、凄く良い表情だった。

そんな二人の傍らで、笑い転げている人物が一人いた。友人が腰掛け代わりに使われているのに弁護の一つもないのか、とシユイは顎を土に付けながら齒噛みした。

上空ではエリクの乗った鳥獣が蜂を殲滅していた他の鳥獣たちと再び合流していた。鳥獣はその巨体に見合ついはわぬ俊敏な動きで蜂を啄み、鋭い爪で引き裂いてゆく。或いは、騎乗している者達が魔法や飛び道具を放ち、蜂の数をみるみる減らしていく。

敵が大分少なくなってきた所で、五体の鳥獣達は蜂達を囲むよう

に陣取り、同時に翼をはためかせ、突風を放った。風は五体の鳥獣の中央に渦を巻くように吹き、風に煽られた蜂達はまるで竜巻に巻き込まれたかのようにクルクルと回転を始める。

蜂が密集したのを見計らうようにして、鳥獣の背から一斉に炎魔法が放たれる。炎は風に煽られて熱風と化し、やがては紅蓮の竜巻となつて中の蜂達を一気に焼き尽くしていく。その残骸が風に煽られ、あちらこちらに飛んでいく。竜巻から逃れていた数匹にも矢、若しくは魔法が放たれ、始末されていく。エリクが再び空へ戻つてから僅か数分程で、蜂たちの奏でる耳障りな羽音は、心地良い風の音へと姿を変えていた。

## 第八章　く祝勝会（1）

「よ、おはよう！　人間椅子君！」

「……おまえ、マジぶん殴るぞ」

一晩寝てようやくかさぶたと成りかけていた記憶を出会い頭に剥がされたシユイは爽やかな笑顔振り撒く。ピエールに忌々しげな視線を送り付けた。一日の始まり方としては最悪の部類だ。大方向おおかたとしては今迄散々からかわれた事に対する仕返しのもりだろうが、起きて間もない開口一言目で椅子呼ばわりされれば誰だって憤るだろう。

大毒蜂との激闘から一夜が明けていた。戦いが終わった後、町の中心部に戻って来たシユイとピエールは疲労困憊ひろうこんぱいの中、シルフィールのギルド支部にて今回の件に関する報告書を纏めさせられた。無論、治療術師ヒトラーによる傷の手当てが終わってからのことではあるが、それにしても体力まで戻ったわけではない。明日にして欲しいと二人して訴えてみたりしたのだが、その申し出は支部のギルド員にあつさりと却下された。記憶が鮮明に残っているうちに書き上げないと意味がないとの一点張りだった。記憶が鮮明でも思考が不鮮明ではまともな報告書を書き上げられるわけがない、と食い下がると、眠気が吹き飛ぶことで有名な【マダヤレ草】の粉を半ば強引に飲まされる羽目になった。

唯一の救いは、大毒蜂撃退に特別報酬が出る見通しであること。任務外報酬の詳細など知らなかったシユイにとっては確かに思いがけぬニュースだった。しかしながら聞かされた当初は、そんなことより一刻も早く眠りたいという気持ちが行先していた。どちらにしても具体的な金額が査定されるまで支払いが行われることはない。

口腔内で反復横飛びする激しい苦味に涙ぐみながら大急ぎで筆を



動かす。ちよつとした辞書くらいの厚さの報告書が纏め上がった頃には日付もとづくに変わっていた。開いている宿もないだろうということで、二人はギルド員のささやかな配慮によってギルド支部の部屋で寝泊まりすることになった。そんな優しさがあるならさくつと寝かしてくれたって良いのに。そんな思いを禁じ得なかった。

シュイは腕を天に伸ばし、ストレッチしながらピエールの後に続く。生欠伸を幾度となく炸裂させ、体内にある使用済みの空気を新しいものと入れ替える。

「……今何時？」

「もう正午近いぜ。随分ぐっすりと寝ていたみたいだな。って俺もさつき起きたばかりだけどな」

「そつか。……あいてててて！ うあー、ちよつと失敗したな。昨日寝る前にちゃんと身体を解ほくしておけば良かった」

「ははは、同感だ。ここまで酷い筋肉痛はちよつと覚えがねえなあ」  
二人は全身を蝕ほじんでいる鈍痛に顔を歪めながらロビーの方へよたよたと歩き出した。

今夜は長老樹に面した大きな酒場>ヨツテ亭<で祝勝会が催される事になっている。身一つで構わないと事前に言われていることから、奢りと考えて間違いない。差し詰め、町のために戦ってくれた者たちの労をねぎらうささやかなご褒美といったところか。

「シュイ。お前も勿論いくんだろっ？」

歩きながらそう言うピエールに、シュイはばつが悪そうに口を開く。

「……いや、実はパスしようかと思っっているんだ」

「ハア！？ 本気かよ。食べ物はい放題だしタダ酒飲めるんだぜ？」

確かに酒好きには魅力的な話だろうが、未成年のシユイにとっては単なる食事に過ぎなかった。何よりも、シユイに二の足を踏ませる理由が一つあった。

「はーん、わかったぞ。もしかしておまえ、ピオラに会うのが怖くないじゃないか？」

「うるせー。わかってるんなら訊くな」

昨日の気鬱な記憶がありありと蘇る。決して意図的ではないにしても、出会って間もない女の子の服を、脱がしてしまった後ろめたさといったらなかった。緊急時だから辛うじて許されたが、町中でやれば普通に手錠をかけられるレベルだ。

当然まだ怒っているよなあ。はあ、会わせる顔がないよ。

悶々とした感情が頭に渦巻いていた。昨日はピオラの顔を見てそんなに怒ってないのでは、という願望ともつかぬ考えで占められていた。けれども今朝になって冷静に振り返ってみたところ、腰掛け代わりに扱われるなんてどう考えても普通の出来事ではない、そんな結論に達していた。

「でもよ、こういうのは後に回せば回すほど問題が拗れるぜ。今のうちに手を打って置いた方が無難じゃないか？」

「簡単に言うな、それが出来れば苦労しないって。ところで一つ訊きたいんだけどさ」

「おう、何だ？」

「ピエールは椅子にされたことある？」

「ないないない。ていうか、そんなくだらない質問をされたこと自体今日が初めてだ」

ビツビツビツ、とテンポの良いジェスチャーを交えつつ、ピエールがそう言った。

「……だよなあ。ってことはやっぱり相当怒っていたんだろうなあ」  
「だな、常識的に考えれば逮捕モン。俺がやっちゃったら生まれて

きてごめんなさいって土に額を擦りつけつつ平謝りするレベルだからな」

こ、こいつ、好き放題に言いやがって。

訳知り顔で頷いているピエールにシユイは拳を震わせた。ピエールにしたって下着は見たのだから全くの部外者というわけでもないのだ。

「じゃあやつぱり行くのはよしておく。出来得る限り正直に話したし、状況説明も怠らなかつたし、心から謝罪したつもりだ。それでも許してくれないとなれば、時間が解決してくれるのを待つしかないだろう?」

「……ふふん。お前もまだまだ甘いな」

「何が甘いつて?」

ちつちつち、と舌を鳴らすピエールにシユイが顔をしかめる。

「一つ、効果的な手段を忘れてるぜ。昔から言っただろう、謝罪と賠償をつて」

「……賠償?」

「案外鈍いなあ。プレゼントだよ、プ・レ・ゼ・ン・ト!」

「プ、プレゼント? 許してもらうのに物で釣るのかよ。それで償いになるのか?」

「おいおいシユイ、そういう考え方は不健全だぜ。もっと楽観的に考える。単純に、おまえの誠意を目に見える形で渡すと思えば良いんだよ」

「誠意、ねえ」

「誠意ねえ、つてお前だつて、彼女にあんな真似しといて悪いと思つていないわけじゃないだろう?」

「あ、当たり前だ!」

ていうか、あんな真似つてなんだ、あんな真似つて。そういう言い方だと何だか僕が滅茶苦茶悪者みたいに聞こえるじゃないか。シユイの心情を察することなく、ピエールは言葉を続ける。

「ならいいじゃないか。それで機嫌が直るなら安いもんだろ? 別

に、そんな高いもの渡せとは言わねえよ。大切なのはセンスと気持ち、ちゃんと選ぶのに時間を掛けることだ。露店でポツと見つけたのをあげるのたあわけが違うぜ」

したり顔で説明するピエールだったが、言葉にそれなりの説得力を含んでいるのは確かだった。

ふーん、意外とマメな性格なのか。そう言えば兄弟が多いみたいなこと言ってたっけな。

「あ、おまえの目から見てピオラっていくつくらいに見える？ 俺、あんまり魔族を見た経験がないからわからないんだ」

ピエールはそうだなあ、と腕を組んで考え込む。

「そっぴや前に、魔族は森族と成長の仕方が似通っているってアルマンドさんに聞いた事がある。森族の老化が停滞するのは早くて二十歳前後からだけど、彼女の年齢はどう見てもそれよか下だろ。だからまんまの印象じゃないか？」

森族は二十歳くらいから八十歳くらいまでは老化が緩やかに進行する。例えば森族の十歳は人族の十歳とそう変わらないが、森族の八十歳は人族でいうとせいぜい三十台にしか見えない。魔族の成長がそれと似通っているというのなら、成人までの成長の仕方は四種族共通しているということになる。

また、寿命の差は異種間婚にかなり影響する。平均寿命がおよそ似通っている獣族、人族のカップリングは割に多い。反して、森族と魔族のカップリングが多いかというところでもない。ジュアナ戦役から三百年が経った今でも、支配者として長らく君臨していた魔族という種を毛嫌いしている者は少なくない。逆に他三種族を見下す古典的な魔族もまた然りだ。

「ふーん。なら十三、四つてところかな？」

シユイはピオラの姿を思い起こしながら言った。背は低いし線も細かったから少なくとも自分より上ってことはないだろう。相手の年齢によって態度を変える必要はないだろうが、ある程度の目星が付けば喜んでくれそうな贈り物も想像が付くような気がした。

「うーん、俺はもうちょい上な気がする。ギルドによっては入団に際しての年齢制限もあるしな。何歳からってというのは各々違うけど。まあ、多少の誤差があったって気にすることなんかねえよ。どちらにしたって俺たちから見ればお子様であることに変わりはないだろう?」

「……お子様で悪うござんしたね」

シユイがボソリと呟いた。

「ん、何か言ったか?」

「何でもない。ま、いいや。ちょっとは参考になったから一応礼を言っておく。ありがとさん」

「うわあ、全然気持ち籠もってねえ」

おざなりな言葉を残して離れて行くシユイの背中を、ピエールは呆れ顔で見送った。

キャノエで一番大きな商店街は町の北側にあつた。やたらに葉の大きい街路樹があちらこちらに植えられているため木陰が多く、夏の日中でも過ごしやすそうだった。

周りの店を物色しつつ、何を買おうかと思案する。まず、洋服類は絶対を買わないことを決めていた。ピオラに合うサイズを知っているわけではないし、昨日の事を否応なしに連想してしまうからだ。それから、彼女も傭兵であることを考えれば、家具に類する物もなるべく避けた方が良さそうだ。持ち家がある傭兵もいないことはないだろうが、色々なところを回る職業には違いない。折角あげた贈

り物が数年も経たぬうちに埃塗れになるのは少し寂しい気がした。

「そうになると、やっぱり普段から持ち歩ける物だよな。それでいて嵩張らないものがないな」

この結論に至って、シユイは宝飾品類が古今東西持てはやされている理由が少しだけ理解できた。特に、指輪や首飾りなどの装飾品は普段から持ち歩けるし嵩張らない。尚且つ見栄えまで良いときている。或いは可愛らしい小物入れでも良さそうなものだが、ピオラの着ている黒装束に合う物を探すのは難しそうだった。

あまり高い物だと反って気を遣われるかも知れないし、そもそも昨日会ったばかりの相手にそんな高価な物を送るのも不自然だろう。金を出すのが惜しいというわけではない。ニルファナへの借金は返済を終えているし、家庭教師の依頼報酬が大きかったので懐はそれなりに温かくなっている。買おうと思えば大概のものは買えてしまうのだ。

始めはスタンダードに指輪をあげようかと考えていたが、指輪は相手に対する好意を表すのに良く使われる贈り物だ。誠意を表すにはあまり向いていない気もする。そのうちに何でもいいやと投げやりな気持ちになり、更に数分すると適当に選ぶんじや誠意は伝わらないだと自分を叱咤する。

「意外と迷うなあ……。僕って案外優柔不断なのかなあ」

ぶつぶつと呟きながら、時に首を捻りながら、シユイは二時間弱、商店街を練り歩くことになった。

## 第八章 〵(2)〵

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」  
五十代くらいの、育ちの良さを窺わせる女性店員に笑顔で見送られながら、シユイは綺麗にラッピングされた小箱を懐に仕舞う。

回り回って八軒目の装飾店。入店して僅か三分で声を掛けられたのでハズレの店かと思われたが、幸い少しでも高い物を買わせようとする類の店員ではなかったため、様々な助言を素直に受け容れることが出来た。シユイは女性店員のアドバイスを参考にしながら候補の物を絞り込んでいった。

「その方は黒髪なのでですね。黒に映える色と申しますと対のホワイトは勿論、エメラルドグリーン、ワインレッド、ライトブルー等、色々ありますわ」

「へ、へえ。そうなんですか」

「ただ、髪留めなどは当然頭に付けるわけですから外光に晒される機会が多いですよ。黒に合う色は大抵、光の加減によつて色合いが変化しやすいので、日中と夜間、室内とでは印象もからりと変わつてしまいます」

「な、なるほど。勉強になります」

説明に相槌を打ちつつ、最終的に候補の品を三つにまで絞る。

「この三つならどれを選んででも間違いはないですね。お客様は男性の方にしては珍しく見る目がありますわ。後はお好みで選んで良いと思いますよ」

おそらくは毎度口に出ているであろう褒め言葉をさり気なく織り交ぜられ、それをお世辞だとわかっていながらも照れ隠しにうーん

うーんと唸ってしまふ。いつの間にか購入確定の方向に誘導されているのに気付くが、手を前で丁寧を重ね、シュイが選び終えるのを待っている店員からはこの三つのどれかを買いますよね、という無言のプレッシャーがひしひしと感じられる。それはもしかしたら自分の気のせいかも知れないがそうじゃないかも知れない。

兎にも角にも、あれだけ念入りに選んだのだから決して物自体は悪くないはずだ。少なくとも衝動買いではない。それに、店員さんに長々と選ぶのを手伝って貰った手前？ やっぱ帰ります？ と口にするのはそれなりに勇気が要る。断ったところで次の店で良い物が見つかるかはわからないのだ。

どちらにせよ、もう時間は残されていない。後は印象でズバっと決めようと、シュイはその三つを少し距離を置いて見つめる。どうせなら遠目から見ても映える髪飾りが良いだろう。一分後、腹は決まった。

「じゃあこれ、ください」

店を出てから少しして、シュイは商店街を抜けた辺りで魔石による連絡を受けた。青い蛍火のような魔力球が？ 長老樹で待つ、ピエール？ という簡素なメッセージを宙に描き出してから煙のように消失する。シュイは腰に下げている袋から青い魔石を取り出して？ 了解、今から向かう？ という返信のメッセージをイメージする。すると手の平で魔石が微かに明滅し、光に覆われて宙に浮かび上がった。本音を言えばピオラにプレゼントだけ渡してそそくさと退散したいところだった。しかし、ニルファナの忠言を思い出したことが、それを考え直すきっかけになった。

「同じギルドの傭兵同士が親睦を深めるのは当然として、他ギルドの傭兵と接触する機会があったら出来るだけ繋がりを作っておくん



だよ」

「へえ、そういうものなの？」

「そういうものなの。稀に合同任務って言って、他ギルドの傭兵と一緒に任務をこなす事があるんだ。そういう時、知己ちぎの傭兵がそのギルドにいれば組みやすいし、組めなかったとしても他の信頼出来る傭兵を紹介してくれるかも知れないでしょ」

「ああ、言われてみればそうだね」

「更に、共通クエストっていうものもあるの。これは入る時に詳しい説明があると思うけれど、基本的には誰でも受諾が可能なんだ。真っ先に受けられればそれに越したことはないけれど、絶対数が少ないから他ギルドや無所属フリーの傭兵と依頼の取り合いになる例も多くてさ。他ギルドの人が入っちゃったというだけで参加を見送っていったらいつまで経ってもやる機会が来ないから。割の良い依頼を逃さないためにも、なるべく他ギルドの傭兵とも仲良くしておくこと。わかった？」

如何せん周りにいる傭兵の殆どは大人なので心理的にどうしても弱腰になってしまう部分はある。今のところ積極的にそういった集まりに顔を出す気にはならないが、今回の件に関しては即席とはいえ合同任務を行ったようなものだ。誘いがあつた以上は今後のためにも出た方が良さだろう。

長老樹で合流した二人は、樹の南西側に面している町酒場、>ヨツテ亭くに入る。入口から店内を見渡すと既にテーブル席の八割方が埋まっていた。明色の木製家具で統一され、小型のシャンデリアのような照明も相俟って如何にも高級感がある。

椅子に座っているのはその殆どが傭兵なのだろう。祝いの席と言う割にはただならぬ雰囲気酒場に漂っている。屈強そうな大男も

いれば、眼鏡をかけている理知的な学者肌の人もある。自分と殆ど変わらない位の少女もいる。彼らの殆どが傭兵なのか、そんな驚きと雰囲気あに中てられ、シユイは思わず身震いした。

呆然と立ち尽くしていると、「ちよつと失礼」と後ろから声を掛けられ、二人は慌てて端による。ピエールとシユイの間を割り入るようにして、若い男女が腕を絡ませて店内に入ってくる。その所作は実に自然で堂々としたものだ。

「こりゃ、凄い。ちよつと場違いな気がしてきた」

「……ピエール。俺やっぱり帰ってもいいかな？」

「ば、馬鹿言うな、駄目に決まってるだろ。俺だってこういう場はあんまり経験ないんだよ。お前がいなくなったら俺だって身の置き場が無くなる」

「それは大丈夫だよ、多分シャガルたちは来ているだろ」

「往生際が悪いぞ。とにかく、空いている席に」

「お、ちゃんと二人とも来たな。感心感心」

入口でごちゃごちゃとやっている二人に直ぐ脇から声が掛けられた。カウンター席に付いている見知った短い金髪の森族を見て、ピエールは顔を綻ばせた。

「ああシャガル。良かった、ちゃんと来てたんだな。ホツとしたぜ」

「何言ってるんだか。一応俺たち四人は今回の件の主役なんだぜ。顔出さないわけにはいかないだろ」

そう言っつてシャガルは肩を竦めた。

「……四人と言うことは、ピオラも来ているのか」

「ああ勿論。はは、そついやおまえら、色々あつたみたいだな」

「まあ、ね。その、彼女の様子どうだった？」

歯切れ悪く訊ねるシユイに、シャガルは声のトーンを落とす。

「怒ってた、めっちゃ怒ってた」

ドスンと、背に重しが押し掛かっってきた気がした。

「……そ、そんなに？」

「彼女があれだけ感情を露にしたところを俺は見たことがない。：

昼食の時もさ、テーブルを拳で何度となく叩くんだ。置いてある食器類が浮く位にな。おかげで客や店員に白い眼で見られちゃったよ」

店員の顔つきまで容易に想像が付き、やるせない気分が一層濃厚になる。

「うへえ、そりゃキツイな。まー仕方ないか、あんだけ卑猥なことを」

「ピエール、俺やっぱ帰る。今日は>ベチユア亭<に泊まるんで」

「ちょい待ち！ お前、ここまで来ておいてそれはないだろ」

再び外に足を向けたシユイをピエールが慌てて引き止めた。

深刻そうな顔を作っていたシャガルは肩を落とすシユイを見て盛大に嘔き出した。

「シャ、シャガル？」

目に浮かんだ涙を擦りつつも腹を抱えて笑うシャガルに、シユイは怪訝そうに眉根を寄せた。

「わ、わりいわりい。ほんの冗談のつもりだったんだけど、まさか信じるとは思わなくてさあ」

「言っつて良い冗談と悪い冗談があるだろ！」

シユイが早口で詰った。

「やっぱりな、大方そんなこつたるうと思っただぜ。俺の目から見ても彼女があんまり怒っているようには思えなかったからな」

おまえも、何でそれを言っつて俺を安心させてくれないんだよ！

後ろで今更わかったようなことを口にするピエールに、シユイは憎々しげに齒軋りした。

「少しは気にしているみたいだったけど、怒っつてはいないと思う。」

それよか、もうそろそろ始まるな。一番奥のトイレに近いテーブル席が俺らの席だ。きつちり二名分空けてあるから行こうぜ」

シャガルが顎で示した方向を見ると、魔族デモンの少女がじつとこちら側を見つめている姿が目映った。

木の板を接ぎ合わせて作られた丸いテーブルの周りには四つの椅子が置かれていた。壁際の方の椅子ではピオラが足をぶらつかせている。食事をするのだから当然のことであるが覆面は外していた。

お風呂上りなのか髪の毛が少し湿っており、石鹸の仄かな香りが鼻を撥くすぐった。

「こ、こんばんは」

「よ、ピオラ」

「……ん」

一応返事をしてくれたことにシユイは少し安堵する。これを返事というかは多少議論の余地もあるだろうが、それでも押し黙らっけいられるよりはずっと救われた気分になる。

さて、と何気なく空いている二つの椅子を見、シユイは動きを止める。

どっちに座ろう。

正面に座ればピオラとの距離が一番遠くなるが、座っている限りは顔を付き合わせることになる。反して、隣に座れば顔は向かい合わないものの距離が近い。そんなに気にする必要もないのかも知れないが昨日の事があるので何だか意識してしまう。

まあ無難に、とシユイがピオラの正面の椅子を向くと、そこには既にピエールの旋毛せむぎがあった。

「何やってるんだ？ 早く座れよ」

シユイはピエールが不思議そうに振り返るのを見て、まさかこれはわざとじゃないよなと思いつつも、彼ならやりそうだという疑いを打ち消せぬままピオラの隣に座った。

数分もすると空席もきつちり埋まり、中央のテーブルに陣取っていた巨漢がゆっくりと立ち上がった。

「ギルド・フラムハートのキャノエ支部長、エリク・バウマンだ。町の責任者であるリーグ町長から代表者として飲食代を預かっている。昨日の大毒蜂襲撃に関する最終的な被害報告書では、建物半壊四棟、一部損壊二十七棟、重軽傷者四十八名という結果に終わっている。あれだけ大規模な襲来だったにも拘わらず死者が出なかったのは奇跡的と言って良い。それも一重に諸兄らの尽力があればこそ」  
フラムハートと聞いて、シュイとピエールは顔を見合わせる。ということとは、ここに座っているシャガルとピオラもそうなのだろうか。

「さて、諸兄の中にはまだ知らない者もいるだろうが、大毒蜂襲来の際、いち早く蜂の襲撃に備え、拡散を最小限に食い止めた者たちが何人かいる。当時の状況から判断すると、死者が出るのを防ぐことが出来た最たる理由は、彼らの勇気と実力に寄るものだと確信している。生憎とリーグ町長は町防衛に関する対策会議でこの場におられないが、この町の代表として深く感謝する、との御言葉を頂いている。この席はあくまで祝勝会であり、表彰する場ではないので名前と顔だけの紹介とさせてもらう」

エリクはそう言葉を切り、シュイたちのいるテーブルに視線を送った。遅れて、周りの傭兵たちの双眸もそちらへと向く。戸惑い気味のシュイとピエールを差し置いて、シャガルとピオラが厳かに立ち上がった。

「ほれ、何やってるんだ。二人共立て」と、シャガルが急かした。

「へ、……俺達も？」

「……早く」

「あ、ああ」

顔を見合せながら、シュイとピエールもテーブルに両の手を付い

て立ち上がる。

四人が立ち上がると喧騒が沈黙へと変化した。傭兵たちの鋭い視線を受け、緊張感による震えがシュイの身体を支配していた。

「フラムハートのシャガル・ウエアードだ。良かったら覚えといってくれ」

「……同じく、フラムハートのピオラ・ディ・スターニアル。……宜しく」

シュイは一人得心した。活躍し、こういった場で名を覚えて貰うことを積み重ねることによって知名度を増す。それも傭兵の大事な仕事なのだ。

それにしても、ピオラがこんな長口上を喋れたとはちょっとびっくりだな。

「えっと、シルフィールのピエール・レオーネです。宜しく願います」

僅かに上擦った声を聞いてシュイは吹きだしそうな口を必死に押さえた。シュイのその様子に、ピエールは何か文句あんのかよ、と顔を赤くして睨み付ける。

そんなやり取りのおかげか震えが止まっていることに気づき、ピエールにとっては甚だ不本意だろうが、シュイは少なからず感謝の念を覚えた。

「同じく、シルフィールのシュイ・エルクンドだ。宜しく頼む」

そう言っただけで軽く会釈する。少し周りがざわついたのは、多分フードを取らずに礼をしたからだだろう。不敬だとか生意気だとか思われなければ良いのだが。シュイは少し心配になった。

「この四名は南東で孤立していた教会の者ら十数人を見事に守り抜いた。後々に所属しているギルドの方にもフォルストロームから感謝状が贈られるだろう。と、堅苦しいのはこの辺にして」

エリクは言葉を切ると、傍らに控えていた支配人と思しき年輩の

女に頷いた。少しして、店員たちが各テーブルにシャンパンの入ったグラスを置いていく。

「今日は無礼講だ。店のメニューであれば何でも好きなだけ頼むといい」

太っ腹なご褒美に大きな歓声と疎らな拍手が上がった。

「では、最後に乾杯と行こうか。ああ、四人は立ったままで頼む。

困難を速やかに乗り切ったことを心から祝うと共に、諸兄らの更なる活躍と安寧を願って、乾杯！」

『乾杯！』

宴会が始まり、周りの傭兵たちはあちらこちらでメニューと睨めっこを始めている。

「まずは酒か。何か頼みたい物あるか？」

シャガルがメニューを見ながら三人に問うと、ピエールは下顎に手を当てる。

「ここ来たことないからな。シャガルのお奨めがあればそれを飲んでみようかな」

「じゃあ、俺もそれで頼む」

「……私も」

「って、ピオラはまだ飲める年齢じゃないだろ！」

ピエールが鋭く突っ込みを入れた。

「……ルクスプテロン、お酒十四歳から」

「何だって、そんなに素晴らしい国があるのかよ」

「何だ、お前も酒好きか」

シャガルは同類を見つけたと言わんばかりの楽しげな目をピエールに向けた。

「酒は俺にとつての水みたいなものだ。にしても、本当に十四歳で飲んでいいのか？」

「十四歳から飲めるってというのは本当。ルクスプテロンで作られて

いる酒はアルコール度数が低く設定されているからな。補足すると、十五度以上の酒はちゃんと十八歳からだぜ」

「ということは、ピオラは少なくとも十四歳以上ということか。シユイが一人納得したように頷いているのを見て、ピオラが首を捻った。」

「へえ、魔族って赤ワインとかを気取って飲んでるイメージがあるけどなあ」

「……酷い偏見」

「ピエールの言にピオラが口を尖らせた。」

「まあまあ二人とも。それじゃあ最初はピオラも飲めるやつにしよう。店員さん、フェルモーネを四つ。料理は適当にお奨め見繕ってくれ」

「はい、少々お待ちを」

店員が慌しく動き回っているのを横目で眺めていたシユイは、はたと当初の目的を思い出した。

「ああ、そうそう。ピオラ、これなんだけど」

シユイは黄色の包装紙と水色のリボンで包まれた物を懐から取り出し、ピオラに差し出す。

「お、早速買ったのか」とピエール。

「……これ」

「昨日のお詫び。受け取ってくれると嬉しいんだけど」

昨日の、と聞いてピオラは一瞬顔を赤らめたが、差し出された贈り物には興味を示している。シユイが更に彼女の方へと手を寄せると、ピオラはおずおずとそれを両手で受け取った。

「……開けても？」

勿論、とシユイが頷くのを見て、ピオラは蝶結びになっていたリボンをすると解き、包み紙を外した。中に入っていた小さな箱をそつと開け、目を丸くした。



「……ふわあ」

赤紫の固定布に嵌っていたのは双翼を模した黒い髪飾りだった。ピオラはそれを慎重に取り出すと、店内の照明に透かして見せる。鏤めちりばられているインディコライトトルマリンの電気石の粒が光を受ける角度によつて青い煌めきを放つ。

「おー、意外とセンス悪くないんだな。そんな格好しているのに」

「……もうその台詞は散々聞き飽きたんだが？」

ピエールに横目を送るシュイに、ピオラは紫色の目を爛々と輝かせる。

「……貰つて良いの？」

「ああ、そのつもりで買ってきたんだし、是非受け取って欲しい」

「……シュイ、ありがとう」

「綺麗な髪留めじゃないか。良かったな、ピオラ」

「シャガルもはにかむピオラに目を細める。」

「……うん、大事にする」

満面の笑みを浮かべているピオラを前にして、シュイはようやく心が軽くなるのを感じた。

## 第八章 〱(3)〱

店内が活気に包まれていく中で、ピオラはシュイに貰ったばかりの髪飾りを早速自分の髪に括り付けている。周りのテーブルにはちらほらと料理が並び始め、待つてましたとばかりにがつついている傭兵たちが見受けられた。

「けど驚いたな。凄腕だとは思っていたけど、まさか二人があこのラムハートの傭兵とはね」

ピエールの言葉にシュイも同意する。大陸最古のギルドにして最強と名高いフラムハート。知名度で言えばシルフィールより遙かに格上の存在だ。

シャガルはシャンパンを口に含み、二人の方に視線を戻す。

「一昔前ならいざ知らず、今はどこも大差ないさ。四大ギルドならどこも同格だと思う」

その言葉が本心なのか、それとも謙遜からくるものなのか、ギルド間の勢力図に疎いシュイには読み取れなかった。

テーブルの上に腕を乗せていたピオラが二人に向き直る。

「……二人のランクは？」

「恥ずかしながら、まだ二人ともCランクの駆け出しなんだ」

ピエールがきまり悪そうに頭を掻くと、ピオラは少し驚いたように眉を上げた。

「……ちよつと意外」

「あら、Dだと思った？」

シュイが訊ねると、ピオラは慌てて首を振る。

「……違う、Bかと」

「あははは、そりゃ光荣だ」

ピエールは照れ隠しに笑ったが満更でもなさそうだった。

「少数精鋭は伊達じゃないってことかな。それにしてもシュイ、お前念話なんてどこで覚えたんだよ。あれはフラムハートでも一握りの傭兵しか使えないんだぜ」

シヤガルが如何にも興味津々という風に言った。魔法を扱う者として上位魔法へ関心が向くのは理解出来る。誰しも自分の持っていない物には憧れを抱くものだ。シュイにしても、シヤガルの扱う攻撃魔法を羨ましく思っていた。

「ああ、あれはニルフアナって人に教わったんだ。一応ランカーなんだけれど、知っているかな？」

ピオラとシヤガルが口を半開きにしたまま顔を見合わせた。その様子を見て、シュイは肯定だと受け取った。

「へえ、やっぱり知っているんだ」

シュイが小さく頷くとピエールは呆れたような口を出す。

「聞くまでもないだろ。彼女のことを知らない傭兵なんてモグリもいいところだ」

わざわざ訊ねたシュイもシュイだ、と言わんばかりにピエールは大袈裟に万歳する。

「はは、まあそうだな。名前の方も珍しいし。>フラム・ガーディアン<の一人にマスター候補と噂されているアークス・ゼノワって人がいてさ。彼とニルフアナ・ハーベルは通っていた魔法アカデミーの同期だったそうだ」

ガーディアンという言葉には覚えがあった。図書館で読んだ本に出ていたフラムハートのマスター直属部隊だ。記憶を探っているシュイを差し置いてピエールが相槌を打つ。

「へえ、ゼノワ家っていやあ過去にも幾多の優秀な魔法使いを輩出してきた名門だろ？」

「ああ、俺もアークスさんとは面識があるから何度か話を聞いたことがある。あの人の年代は突出した才能の持ち主が多かったんだ。

勿論、その中には彼本人も含まれてる。アカデミー始まって以来のいわゆる所謂>奇跡の年<ってやつだ。ところが、彼女はその猛者たちを退

けて首席で卒業したそうだ。各機関がこぞって彼女の争奪戦に参加したって話は今でも語り草だな」

「……そりゃあ初耳だ」

「確かケセルティガーノの新王、オルネストもアークスさんと同期だったはず。その二人を差し置いて首席になったんだから、大陸でも指折りの魔法使いなのは疑いようがない」

ケセルティガーノと聞いてシユイが一瞬反応した。レグナルの南東、フォルストローム、セーニア教国のある大陸と北西のルグスブテロン連邦、エレグス王国のある大陸の狭間。世界の中心に位置する小さな島国だ。国土は大きくないが貿易港を多く持ち、世界各国から様々な人や物が流入している。

「アークスさん曰く『面倒見が良く、非常に出来る女性だが彼女の怒りに触れて生きていられる者はいない』。マスター候補の彼にそうまで言わせる人は他に知らない。もしかしたらシルフィールよりフラムハートの方が彼女に対する評価は高いんじゃないかな」

「……才媛」

ピオラもシャガルに同調した。

ニルファナの強さはシユイも身に沁みていたし、その評価が、おそらくは過分でないこともわかっていた。彼女の怒りに触れて、という件くだりに関しては疑う余地もない。のほほんとしている彼女にすら殺されかけたのだ。あの力が明確な敵意を以って一方向に集約したらと思うと、どんな天災よりも恐ろしく思える。

けれどもシユイは知っていた。実際会ってみればさり気ない優しさけいさと奔放な性格、際立つ容姿の美しさが強く印象に残ることを。滲み出る魅力が彼女の持つ爪や牙、けいかく圭角を丸く見せるのだ。

話が途切れた合間を見計らうように店員の声が響いた。

「お待ちせいたしました。フェルモーネとスカイタートルの燻製、食肉樹と胡桃の炒め物にございます」

「食肉樹!？」

シユイが素っ頓狂な声を上げ、身を引いたのを見て、シャガルとピオラは小さく吹き出した。

「なんだ、おまえ初めてなのか。心配しなくても意外と味は良いぜ。筍みたいな食感で全然生臭くない。味は、そうだな……、赤身の魚肉に近いかな。結構な高級食材だ」

ピエールが手短かに説明した。

「そうそう、始めからハーブ肉を食うと思えばなんて事もないだろ。おまえだって、普段は意識しないで肉食の動物食ってるだろ？」

「……ま、まあ確かに」

そう言われればそうだな、とシユイが曖昧に頷く間に、ピオラがきつちり四人分、その料理を小皿に選り分けている。食わずにやり過ごすのは無理そうだった。

「……はい」

「あ、ありがとう」

ピオラに差し出された皿を受け取り、盛られたそれをしげしげと眺める。短冊のように切り揃えられた樹肉の色は黄と橙だいだいの中間色。シャガルの言った通り、仄かに香草の匂いがするくらいで血生臭さは感じられない。

「……冷めないうちに」とピオラから催促が飛んできた。

「い、頂きます」

震える箸先でなんとか一切れ摘み、慎重に口に運ぶ。一瞬の躊躇の後、ええいままよ、と口に放り込む。

これは、美味しいかも。

ピエールの指摘の通り、筍のようなシャキシャキとした食感。一つ大きく異なる点は、噛むと口一杯に汁が溢れ出るところか。

「どうだ、意外といけるだろ？」

「……だな、ちよつとしたカルチャーショックだ」

小さく頷き、もう一片箸で摘むシユイを見て、三人は顔を見合わせて笑った。

フェルモーンで再び乾杯し直し、話が元の方角に傾く。ふと隣を見ると、ピオラが燻製肉を懸命に咀嚼していた。小さい口に頬張る姿はジリスや兎の食事風景を髣髴とさせる。

「まあ、お前の得体の知れない強さにも合点がいったよ。武器の扱い方はともかく、念話に障壁魔法に付与魔法と一通りこなすんだからな。それでコランクっていうのはちよつと有り得ないと思ったんだが、通りでな」

シャガルが酒を口に含みながら言った。シユイは武器の扱い方を華麗にスルーされ、どこらへんが不味かったんだろう、と首を捻っている。ピオラの短剣捌きやピエールの投げナイフに比べれば兎戯に等しいかも知れないが、全く問題視されないのもそれはそれで少し寂しい。

「ごくりと肉を飲み干したピオラが、ナプキンで口を拭いながらシユイに紫色の瞳を向ける。

「……ハーベル、師？」

その質問に対してシユイは即答を避けた。少し考えた後でゆつくりと首を振る。先生って呼んだら殴られた記憶があるから、師匠って呼んでも同じかもう少し酷い目に遭うだろう。

「面倒見の良いお姉さんってところかな。どこか掴みどころのないところはあるけど、意外に優しいし人当たりも良いんだよ」

「……ふーん」

自分から訊ねてきたくせに、ピオラは何故か面白くなさそうにそっぽを向いた。

「アークスさんも再三そんなこと言っていたっけなあ。彼女、相当な美人なんだろ？　ちくしょー！　俺も綺麗なお姉様に手取り足取り教わりたぜ」

大袈裟に拳を震わせているシャガルにシユイは苦笑いした。少なくとも訓練中にそんなことを気にする余裕は全くなかった。ニルフ

アナは身体に負担が出ないように身体を苛め抜く天才なのだ。それに、生半可な常識では推し量れないところもある。何分『ちよつと暑いから涼しくするね』とか言つて雨雲を呼び寄せるといふ人であるからして。

それを説明した所でようやくシャガルの締まりのなかつた顔が強張つた。易々と天候まで変えられるとは思つていなかったようだ。

そつか、それが普通の反応だよな。

いつの間にか、彼女の規格外の行動に毒されていることに、しかし悪い気はしないシユイだった。

少しして、シャガルが知り合いの傭兵に挨拶してくる、と席を立つた。周りを見れば結構席を入れ替わり立ち替わりしている者もいる。それを見てシユイは、大人数での飲み会はこういうものなのか、と一人感心する。

「そう言えば、火傷の方は大丈夫か？」

「……んと、ピオラ？」

「そう、ピオラ」

頷いたシユイに、ピオラははにかみながらテーブルの下にあつた小さな手を照明に透かすように掲げ、ひらひらと動かして見せる。指の動きも滑らかでこれといった後遺症は見受けられない。

「……ご覧の通り」

神経が焼き切れていないかと心配していたシユイだったが少し安心した。フラムハートにもデニスのように腕の良い治療師ヒーラーがいるのだろう。表皮が焼け焦げ、赤い筋肉が剥き出しになっていた手とは思えない。しかし、薄らとではあるが痕が残っているのを見てシユイは顔を伏せた。

「ごめんなピオラ。ずっと痛みに耐えていたのに気付いてやれなくつて」

「……大丈夫、これくらいそのうち消える」

ピオラがそう言っつて首を横に振るのを見て、シユイは首を軽く縦に動かす。

二人の横から、店の従業員がトレイから二つグラスをテーブルに置く。

「お待たせいたしましたー。レッドマリンとサウザントリーフです」  
深緑色の酒と血の様な紅の酒をシユイとピオラは互いに手に取り、顔を見合わせ、どちらからという事もなく乾杯した。

しばらくすると酒が廻つてきたのか、ピオラの白い顔には赤みが差し、舌も滑らかになってきた。もつとも彼女の場合、それでようやく普通くらいの口数だ。

「……シユイ。出身地どこ？」

「ん、俺？ 生まれはケセルティガーノの田舎村だよ。ピオラは？」

「……ルクस्पテロン連邦」

「ああ、そういえばさつきも言っていたね」

「……ん。兄弟いる？」

「残念ながら一人っ子だ。そっちは？」

「……姉と弟が一人ずつ」

「へえ、賑やかでいいじゃないか。皆傭兵なの？」

「……ううん。姉様は国軍。弟はまだ小さいからお家」

そんな身の上話をしている折、シャガルがエリクを伴って戻って来る。

「どうだ、楽しんでるか？」

そう言うなり、エリクはウイスキーの瓶を啜え、直接口に流し込んで見せる。

流石にラツパ飲みは酒の作り手に失礼じゃ。

「ああ、お陰様で」

シユイは思ったことを口に出さずにただグラスを掲げて見せた。

「ははは、それなら何よりだ。今回の件では本当に助かった。君ら



がいなければ、少なくともあの教会にいた者たちは確実に助からなかったはずだ」

「とんでもない、シャガルとピオラの力無くしてはとても対処し切れなかったさ」

そう言つてシユイは二人を指示そうとしたが、シャガルの方がエリクから少し距離を取っていることに気付いた。しかめ面から察するに、単に酒臭かったのだらう。

「いやいや、そんな本当の事を言わなくても」

「……シャガル」

ピオラは憐みを籠めた目をシャガルに向けた。

「しかし、あれだけの数の蜂が一斉に襲つて来るとはなあ。再度襲撃に来ないとも限らないし」

ピエールが思慮深げな顔を作った。何だか似合わない、そう思つてしまうのは失礼だらうか。

「……ああ、いかな。肝心なことを言い忘れていた。実は昨夜遅くにフォルストローム軍より連絡が入つてな。軍が蜂の巣を探し出して異常繁殖の元となつていたと思われる女王蜂を仕留めたそうだし」

「え、それ本当か！」

ピエールが驚きの声を上げた。元々蜂は集合体コロニを作る習性があるので巣があるのは自然な流れだ。敵の陣地に乗り込むことの危険性を理解しているからこそ彼は驚いたのだらう。

「ああ。我々が蜂の駆除に当たつていたのと同時進行で討伐に向かつていたらしくてな。巣にも火を放つたようだし、少なくとも大軍に襲われる心配はなくなつた」

「そうか、フォルストロームの軍兵つて強いんだな。巣つていうくらいだから相当数の大毒蜂がいただらうし、女王蜂だって手強いんじゃないか？」

「討伐隊だけならばてこずつたかも知れぬが、姫様が同行されたからな。魔物等物の数ではあるまいよ」

「姫様、つてフォルストロームの？ そこまで強いのか」

「な、何だと！ おまえはシルフィールにいるくせに姫様の事を知らんのか！？」

知っていなきや傭兵失格だと言わんばかりにエリクは声のトーンを一段と高くした。

「ま、まあ新米だし」

「そんなことは言い訳にならぬ！ ならば今の内に知っておけ。姫様、つまりアミナ・フォルストローム様は二年ほど前にシルフィールに入団し、僅か一年半でAランク、準ランカーに昇格された。祖父の獣王キーア様譲りの体術と辰力の達人であり、若干十六歳ながらもその戦闘能力は既にランカーに迫るとも言われている。好きな食べ物は魚全般。嫌いな食べ物は春菊。鍋物の時には必ず避けることで知られている。シルフィールに籍は置いているが、国の大事には自ら率先して軍の指揮に当たっている。少々男勝りなところはあるがお美しく、下々の者にまで心を砕く優しき御方よ」

大きな拳を握り締めて熱弁しているエリクに、シユイは好物まで知っておく必要があるのだろうかと首を捻る。シャガルは枝豆を摘み、口に放り込みながらただただ苦笑している。

「シユイも災難だな。エリクにアミナ様を語らせたなら今日は寝られないぜ」

「そ、それはちょっと勘弁してもらいたいな。昨日は遅くまで報告書を書かされたせいでまだ寝足りないんだ。でも、あれだね。何ていうかアミナ様って若いのに人間ができているんだね」

仮にもフラムハートの支部長を務めているエリクにそこまで信望されているのだ。この評価には間違いないはずだった。

「当然だ！ たとえギルドは違えども御身の一大事あらば、己の任務を放棄してでも馳せ参じる覚悟よ！」

ちらりととんでもない事を口走った。赤ら顔を見る限りかなり出来上がっているようだ。

「そんな事言っているからフラム・ガーディアンになれないんじゃないか？」

シャガルが肩を竦めた。

「よ、余計な御世話だ！」

続いて、ピオラがぼんやりとした様子で呟く。

「……エリク、実力充分。……でも足りない、忠誠心」

「ピオラ、お前まで！」

「全くだ。大体お前に助けられるほど弱くはないつもりなのだが、  
な」

「な、何だと！」

エリクが勢い良く後ろを振り返り、声の発生源を目にすると、石にされたかのように固まった。シュイが椅子を後ろに傾けてエリクの大きい図体の横から顔を覗かせると、獣族らしき銀髪的美少女が立っているのが見えた。

## 第九章　く疑いの目（1）

いつの間にか酒場の奥に立っていた少女の存在に、ようやく傭兵たちが気付き始めた。セミシヨートの煌めく銀髪とそこから覗く三角耳。深い緋色の瞳はやや釣り目で芯の強さを感じさせる。そして躍動感溢れるしなやかな四肢と褐色の皮膚。随分とタイトな服を身に付けているせいで、素晴らしいスタイルがこれでもかというくらいに強調されている。ニルファナとはまた趣の異なる、異国情緒溢れる美しさ。

見るだけでこちらが圧倒されてしまう程の存在感を持つ獣族の少女。にもかかわらず、シユイはその気配を悟れないまま接近を許してしまったことに愕然がくぜんとした。図書館でピエールに意表を突かれた時とはまたわけが違う。シユイは実力者に囲まれている状況を敏感に察知して店内に薄い魔力の警戒網を張り巡らせていた。現に、シヤガルがエリクと戻ってきた時もちゃんと認識できていた。それなのに、彼女に関してはどういうわけかその存在を知覚できなかった。完全なる気配の消去。そんなことが出来るものなのだろうか。

「ひ、姫様！」

エリクの発した言葉に目を丸くし、座っていた四人は慌てて立ち上がる。

この娘が、件の獣姫様？

獣族だということ差し引いても、目の前にいる美少女がランカに迫る実力を持つようには到底思えなかった。背丈だってせいぜい自分と同じ程度だ。

シユイはフードの奥で目を閉じてみる。視覚を絶って少女の純粹な力を感知しようと意識を集中した途端、後頭部が軽い麻痺を起こしたような感覚に襲われ、全身が泡立つのを感じた。準ランカーと

聞いていたが、下手をしたらアルマンドやデニスをも上回るかも知れない。そうと思わせるほどの実力を隠しているのが読み取れた。

「祝勝会が催されているとリーグに聞いたのでな。偶にはこういう場に出るのも悪くない。それで、こちらの四人がそうか？」

「は、はっ！ この者達の迅速な対応によって多くの人命が救われました」

敬礼するエリクにアミナは軽く頷き、四人の方へ向き直った。何気ない所作ではあるが、それがまたいちいちさまになっている。

「お初にお目にかかる。アミナ・フォルストロームだ。我が国の民を守るために尽力してくれた事、真に感謝する」

そう言つてアミナは軽く、しかし確かに、シュイたちに向かって頭を下げた。

「と、とんでもない！ こ、こちらこそ！」

虚を突かれた四人が急いで礼を返した。アミナよりも更に深く頭を下げているのは言うまでもない。

「ひ、姫様！ 仮にも王族が軽々しく頭を下げるなど！」

「下げるなど、何だ？ 恩ある者に対して礼を尽くす事になんの躊躇ためらいがあるうか。そもそも政まつりごとに携まわる者は民の模範となるべき存在高慢ごうまんちきな姿を見せていては国も傾かたむこう」

そうと言われては、エリクに抗弁の余地は残されていない。言葉の節々からも気の強さと、王族としての信念が垣間見えた。

「そんなことよりも、エリク。私の事をお前が出世できない言い訳に使われてはたまつたものではないな。少なくともこの者らはその様な印象を持つておるようだが？」

「うぐ……」

齒はに衣着せぬ物言いがエリクを仰け反らせた。結構はつきり物を言うタイプらしい。

「もし真に私のためだと申すのならば、一年以内にフラム・ガーデ

イアンの列席に名を連ねてみせよ。行動で示せる者が覚悟を口にする分には私も咎めることはせぬ。それに、そなたにその力が備わっていることも疑ってはおらぬ」

「は、はっ！」

すっかり酔いが醒めた様子のエリクは、背筋を伸ばして再敬礼した。さり気なく煽<sup>おた</sup>てられたせいかな鼻の穴がびくびくしている。

年齢に見合わぬ、有無を言わせぬ威厳がアミナの身体から滲み出していた。シユイは出会ったばかりの、殆ど齡が変わらぬはずの少女に深く畏敬の念を抱いた。周りの席では、アミナが来ていることに気付いた傭兵達が何やらヒソヒソ話をしている。

「……うん？ お主、その黒衣は脱がぬのか？」

本当に何気ない言葉だった。それを聞いて初めて、シユイはアミナの視線が自分へ注がれていることに気付いた。そして、一国の姫君である彼女から投げ掛けられたその質問が、自分にとってどれほど都合の悪いものなのかを悟るのに、更に数秒の時間を要した。

周りの傭兵たちは雑談を止めて事の成り行きを見守っている。注目を浴びつつあることを今更ながら知り、シユイは自分の体温が何度か下がったような気がした。

アミナはそんなシユイの気持ちを知ってか知らずか、言葉を続ける。

「雨の多いこの時節、そんな格好では暑かるう。ましてや今宵は酒の席ぞ。それに私としても、できれば民たちを守ってくれた者の顔を覚えておきたいのだが」

「ごもつともだ。言い換えると正論だ。じゃなくって、ど、ど  
うしよう。」

必死に対応策を頭に巡らせようとするシユイだったが、酒が入っ

ているせいがいまいち考えがまとまらない。その窮状を察し、隣で突っ立っていたピエールが慌てて助け舟を出す。

「お、恐れながら、姫様。実はシユイの顔には酷い火傷の痕がありまして……」

一瞬、シユイはピエールをポカンと呆けたように見る。

「そうだ、それだよ！」

自分で設定しておきながらその話を忘れていた。ナイスアシストだ。ピエール君。後で酒を奢ってやるぞ。シユイは心の中で盛大な拍手を送りつつその助け船に乗り込もうとした。

「そ、そうなんですよ。あまりに醜いんでとてもこのような場では

「  
ほう、それは難儀な事であるな」

アミナは目を伏せながらそう言った。ところが、シユイが内心でほくそ笑んだ次の瞬間、アミナは目を元の位置に戻し、朗らかに笑った。眩しいくらいの笑顔だった。

「しかし案ずることはないぞ。私は見てくれで人を判断することは一切せぬ。大切なのは中身であるからな。それに、私の友人の中には凄腕の治療術士も何人かいる。彼らなら古傷の一つや二つ、目立たなくすることくらい朝飯前であろう。うむ、そうだな、それが良かろう。今回の礼も兼ねて近日中に診察の機会を設けるから是非診て頂こう。何、遠慮は要らぬぞ」

「あ、そうですか！ 失礼しました！ ……だってさ、おい良かったなあシユイ！」

「……あ、……ああ」

傷を治してくれるというアミナの発言を聞き、喜んでくれているはずのピエールを見て、シユイはどうにもやるせない気持ちになった。助け舟はあつという間に穴だらけにされてしまった。最早補修出来る余地もない。

しかし、何と言うアミナの押しが強さだろうか。もしかしたら、樹脂で出来た変装用の樹脂もアミナには見破られてしまうのではな

いか。そんな恐れにも近い思いに囚われる。顔を出した途端に剥がされそうな予感がするのは気のせいだけではなさそうだった。こんな事になるとは予想もしていなかった。シユイは自分の甘さを、浅はかさを呪った。

「あれ、どした？」

「……シユイ？」

シャガルやピオラも未だ躊躇しているシユイを見て、どこか不審げに首を傾げる。

「シユイ殿。姫様もこう言っておられるのだ、私の顔を立てると思つて見せてくれぬか？」

エリクもさあさあと催促する。

「あ、ああ」

様々な想いが渦巻く中、シユイは何とか震える手をフードに掛け、握り締めた。だが、万が一自分の顔が賞金首だとバレたらどうすればいいのか。ここにいる者たち全員を振り切つて逃走出来るのか。否、ピエールが見逃してくれるとしても、フラムハートの実力者たちとフォルストロームの軍人、誰よりアミナがそれを赦すはずがない。無論、戦つたところで到底勝ち目はない。

と、そこで厄介な事実気付く。そんな心理的葛藤以前に、バレれば推薦人のニルファナにまで害が及んでしまう。それだけは何とでも避けなければならなかった。自分だけがこの場で捕まるか殺される方がまだマシだ。

「い」

と、再びアミナの声が聞こえ、思考が現実に戻る。

「……あ、はえ？」

シユイはフードに手を掛けたまま間抜けな声を出す。

「もう良い、と言つたのだ。醜い顔を曝け出すのに抵抗があるのは致し方なきこと。それを興味本位で無理矢理に晒そうとするは配慮



に欠ける行為であったな。……私の不徳だ、許せ」

沈痛な表情を浮かべるアミナに、シユイは嘗てないほどの罪悪感に襲われた。自分の付いた嘘が結果として彼女に謝罪の言葉を述べさせてしまったのだと。

「……あ、……と、とんでもございません。過分の御配慮、感謝いたします」

申し訳なさで胸が一杯になりながらも何とかその台詞を言い、深く頭を下げる。

「そなた、シユイと申したな。所属ギルドはどこか」

「は、はい。シルフィールでございます」

「ほう、私と同じか。それならば近いうちに再び会う機会も出来ような。シユイ、治療後でも構わぬ故、次会った時には必ず顔を見せてくれ。……約束したぞ？」

『必ず』という言葉を強調したアミナの大きな目がシユイの顔を真っ直ぐに捉えた。緋色の瞳がフードの闇をも見透かすのではないかと思ひ、シユイは大きく身を震わせた。

宴も酣たけなわとなつた頃、シユイは人目を逃れるようにして酒場の外に出た。エリクに何度となく酒を奨められたため、風に当たって少し酔いを醒ましたかった。店を出て少し歩いたところで目の前にある長老樹を見上げ、深々と溜息を吐きだす。

「まいったな……」

「何がまいったのだ？」

続いて後ろから声を掛けられ、シユイがビクツと身体を戦慄かせた。慌てて後ろを振り向くと、いつの間にかアミナが傍に立っていた。先程と同じように真っ直ぐな視線をシユイへと向けている。

「じゅ、獣姫様！」

またしても気配を感じ取ることが出来ていなかったことに、シユイは焦りを禁じ得なかった。敵意や殺気を漲らせている賞金稼ぎな

らいざ知らず、害意のない実力者に対して魔力の警戒網はあまりにも無力なのだ。

「……その呼び方は止めよ。あまり好いてはおらぬのでな」

「え、えっと。では、アミナ様で宜しいでしょうか？」

アミナは満足そうに頷いた。

「ふむ、本当なら『様』もいらぬと言いたるところだが、まあこの国の中ではそれも許されまいな。そなた、酒は苦手な様だな」

シユイは反射的に息を呑む。もしや、あれからずっと一挙一動を観察されていたのだろうか。

「は、はあ。普段はあまり嗜まないもので、申し訳ありません」

「別に責めているのではない。エリクは非常に優秀な男だが酒が入ると少々強引になるのが玉に瑕だな。自分が飲めるから他人も飲めると信じて疑わぬ。困った奴だ」

アミナは腰に手を当て、やれやれと溜息を吐く。

「でも、エリクさんはアミナ様を心底尊敬しています。いや、エリクさんだけではなく、フォルストローム中の方々がそうなのでしようね」

「……それが辛い時もあるが、な」

「……え？」

シユイは聞き返した。近くにいっても聞き取れぬほどに小さな呟きだった。

「いや、何でもない。ところで、顔を見せぬことを許した代わりには言っただけだが、お主に一つ訊きたい事があるのだ。構わんか？」

「訊きたい事、ですか。……わかりました。私に答えられることであれば何なりと」

「では問おう。何故、お主は傭兵になったのだ？」

シユイは幾分拍子抜けした。もっと核心に迫る質問をされるのか

と思っていたのだ。安堵の溜息を飲み込み、ピエールやミルカにした時と同じ説明を口にする。名誉と金のためだと。ところが

「それは嘘だな」

「……え？」

「金のためだと言うならばまだ納得もいく。が、名誉とはすなわち己の存在を世間に知らしめることであろう。顔を隠している者が名誉を求めているというのは矛盾があるように思えるが？ 如何に顔に火傷の痕があろうと真に名声を欲している者ならば、少し傲慢に聞こえるかも知れぬがこの私に顔を見せぬとは思えぬ。有力者に名を売る事は名声を高める何よりの早道。それなのに、そなたは頑なに顔を見せる事を拒んだ。……何故だ？」

言われてみれば至極真つ当な論理だった。アミナはフォルストロームの姫君であり、シユイは今回フォルストロームに少なからず恩を売った立場にある。名誉を望むものが顔を覚えて貰う、というのは確かに自然な流れだ。名誉と金。傭兵が求めるものとして自然な動機をチョイスしたつもりだったが、そんな落とし穴があるとは考えもしなかった。

「念のために断っておくが、此度の件こたひに対するそなたの立ち振る舞いは私も耳にしておる。そなたがキャノエの恩人であることは、本来疑うべきではないのだという事も理解している。しかし、そなたも承知の通り私はこの国において些細な懸念をも放置しておける立場にない。……私にだけは、本当のことを話してくれぬか。何なら全てはこの胸に仕舞っておくと誓っても構わぬ。喩えそれがどのようなことであれ、だ」

アミナの言葉が強制力を伴ってシユイの耳に届いた。おそらく、彼女が沈黙を守ると言うからには必ず守るだろう。しかしながら、ここで引いては取り返しがつかなくなる。顔を明かすにはまだ早すぎた。

「ほ、本当に名誉と金なのです」

呻くようにそう言ったシユイに対し、アミナは少し苛立ったように土を踏み抜いた。

「そなた、私の話をちゃんと聞いていなかったのか？ 先ほど私は火傷を治せる当てがあるとも言ったはずだ。それなのに何故顔を晒す事を躊躇った！」

「そ、それは……」

返事に窮したシユイは、ひたすらに考えを捻り上げる。

「……ア、アミナ様の眼前で晒すのが躊躇われたので」

「それも答えになっておらぬぞ。私は見かけて人を判断したりはせぬと申した」

「そ、それはわかっています。ただ、そう、あなた様があまりにも可憐で……」

「な、何？」

意表を突かれたのか、アミナが声を裏返した。

「その、悪鬼の如き醜い顔を妙齡の美少女に晒すのはやはり堪え難く……ですね」

「び、美少女……私が？」

アミナの攻勢が止まりかけたのを見計らってシユイは早口で捲し立てる。

「も、勿論私も名誉は欲するところですしアミナ様の見かけで人を判断しないという言葉を疑ったわけでもありませんが万が一私の顔を見た時にあなた様の表情が嫌悪に歪むようなことがあればと想像してしまい私も一人の男としてどうしてもそれが我慢できず……」

「……う、……む」

アミナは曖昧に頷いた、ように見えた。

「そ、そんなわけなので……ど、どうかこれで……お許しください」  
シユイは観念したように、フードを少しだけ斜め上にずらした。額の部分にケロイド状の痕が見え、アミナは口を嚙んだ。

「た、確かに、火傷の痕のようにも見える、が」

明るい店内でそれを見せていけば、見破られたかも知れなかった。だが、店の外は家々から漏れる光と街燈の照明のみで薄暗く、一見ではわかりにくいはずだった。

「幼い頃に負った火傷です。家が貧乏だったので、いずれは自力で金を溜めて治療術師に見て貰おうかと。勿論、アミナ様の温情には心底感激しております、ですが、特別扱いをされては良からぬ思いを抱く者もおりましょう。い、一年以内には何とか金も溜まるだろう、と考えておりました、もしその後で宜しければいくらでも顔をお見せいたします。も、もつとも、火傷を治した所でたいした顔ではございませんけれども。出来ればそれまで猶予を与えて下されば、と存じます。何卒……」

シユイはそう言い、頭を下げた。全身に冷や汗をかいていたのは言うまでもなかった。慣れない酒、恐怖、そして口にしたもつともらしい嘘、自分でそう思っているだけだが、それに矛盾がないだろうかという焦燥が相俟って身体に異様な熱を生じさせていた。自分が一体何を言っているのか、それすらよく理解していなかった。一年以内という期限を言葉として発してしまったことだけが、やたらと鮮明に記憶に残った。

そう、シユイには気付く余裕が全くなかった。

自分が口にした言葉がアミナにも熱を生じさせていたことを。彼女が必死に平静を装いながらも、真つ赤に染まった三角耳を忙しく動かし、せつせと放熱していたことを。

## 第九章　　（２）

大毒蜂の騒動から四日後、アミナはキャノエの東に位置する小さな港町ヤーベのとある喫茶店にいた。昼時なのもあって、店内はカウンター席も含めてほぼ満員だ。周囲の客たちの中にも彼女の顔を知っている者がいたのか、そこかしこで囁き声が発されている。

アミナは流入してくる囁き声を払うかのように三角耳をしつと動かしていた。いつもの事であるとはいえ、いつまで経っても完全に慣れることはなかった。気にしない振りはしていてもそれはあくまで振りに過ぎず、心のどこかで見られていることを意識している。せめて、食事の時くらいは人目を気にしたくないというのが偽らざる本音だった。

耳が良過ぎるのも意外と難儀な物。内緒話をしている当事者たちにとっては聞こえぬつもりだろうが、しかしてアミナには丸聞こえで気に障るのだ。

自分に対しての憧れや尊敬が主だったが、その一方で下衆な話題を話している者も少なからずいる。唇を奪いたいだの、胸に顔を埋めたいだの、おみ足に踏まれたいだの、それ以上の、口にするのが憚られるようなことも言いたい放題だ。

自分のことだけならまだ割り切れるが、加えて他人を仲間外れにする算段だの、世界に対する恨み節だの、下らないお愛想笑いだのといった物が絶え間なく聞こえてくれば苛々も募ってくる。

そんな声を聞くのが嫌で、普段は意識的に聴覚を制限する。一番簡単な方法は何か一つの主題、テーマに思考を傾けることだ。しかしながら、ここ二、三日に限って言えばそれすらももどかかった。

アミナはメニューを見ながら、その最たる要因が着用していた黒衣を脳裏に描き出す。ああいったものを着たところで奇異の目で見られることはあるだろう。しかし、それ故に向こうから敬遠してくれるから正体はバレにくいはずだ。周りはその格好が気になっていられるだけで達観できる分、気楽に過ごせるかも知れない。一度くらいは試してみる価値もあるか。

と、店員が近づいて来たのが見え、考えを区切り、片手を上げる。

「お、お待ちせいたしました。ご注文はお決まりですか？」

ウェイターが恐れ多いといった様相で恭しく会釈をした。立場ある者に対してどう接するべきか戸惑っているようだ。アミナとしては普段と何ら変わらぬ対応を望んでいた。

「大体な。ところで、ここの自慢の一品は何か？」

アミナが聞き返す。

「あ、そうですね。本日のお奨めは、港から直送の新鮮な魚介をふんだんに使いました魚介のパスタでございます。良質な竜糞ウニが北の方から入っております」

「おお、美味そうだな。ではそれを四人前お願いする。激盛りで」

「はい、よ……」

束の間、店員の声が停止した。この店での大盛りはおよそ1・2人前。特盛りは1・5人前。激盛りは2人前の量である。おそろく頭の中でもそのような計算をしているのだろう。

「四人前、でお間違えありませんか。……激盛りで。当店ではお持ち帰りはやっておりますませんが、それでも宜しいですか」

「うむ、あとシーザーサラダの大を一つ。オリジナルプリンとチーズシフォンも頼むか。……む！ 象苺のケーキも追加してくれ」

「か、畏まりました」

混んでいる時間帯とあって、店員は大急ぎで厨房に注文を伝えに行く。その様子を見送ってから、アミナは窓から海岸線の方を見つ

める。天気は晴れと曇りの中間、と言ったところだろうか。太陽が薄い雲に覆われているがその丸い輪郭ははっきりと見える。巨大な薄紙で包まれた行燈のようだ。

右往左往しているウェイターの黒い制服を見て、アミナは再びシユイとのやり取りに思いを馳せた。あれはやはり『告白』というやつだったのだろうか、と。

あの日以来、アミナは胸の奥から湧き出るもやもやを持って余して寝るに寝付けず、ベッドの上でタオルケットを腕と足に挟み込みながらゴロゴロと転がり回る羽目になっていた。

自分が人並み以上の容姿を持っているという自覚はある。人族の母譲りの銀髪は獣族では珍しい髪色であるし、フォルストローム以外の国の町を歩いていけば誘いの声を掛けられる事も多々あった。だが、自分と対峙した状態であそこまで必死に言葉を伝えてきた者は今までいなかった。

王城を空ける事が多くなった今でも上流階級の者たちからは連日のように自分宛ての恋文が届いている。その大半は『あなたの美しさに心奪われた』とか『結婚を前提に付き合っただけ』などといった内容だ。それに加えて『竜退治をしてきた』だの『凶悪な盗賊団を壊滅させた』だの、如何にも自分を大きく見せるための経歴、武勇伝が添えられたものも多い。

実際王城にまで押し掛けられて謁見<sup>えっけん</sup>を直訴され、あまりのしつこさに根負けして会ってみたことも何度かあった。ところが蓋を開けてみれば、どいつもこいつも吹けば飛ぶような連中ばかり。無敵を誇るのは手紙と妄想の中だけか、と声を大にして言っただけの落差だ。

実際に、アミナと顔を突き合わせ、その鋭い眼光で射竦められた



まま、送ってきた恋文と同じような台詞を口に出来た者はいなかった。つい、三日前までは。

アミナは三日目にしてようやく、冷静にあの夜の出来事を整理することが出来ていた。不覚にも告白されたくらいで浮ついてしまつたが、あれが実は偽りで、顔を見せぬために弄もよほした詭弁であつたという可能性も十二分にある。もしそうであればそれで良いが、三日間に亘つて感情を振り回されてしまつたその事実を認めたくはなかつた。

しかし、やはりあれが本音であつたならば。

もやもやとした感情が頭の中でぐるぐると輪を描いていた。何度吹き消しても、再び煙の様に立ち昇つて渦を巻く。普段の自分であれば、本音だつたからどうした、と言いつつなものだが、心のどこかでは彼の言葉が本音であつて欲しいと思つてしまつている。一方でそんな自分が情けなくも思う。

もしかしたら、と考える。自分は初めて真剣に告白されたその行為にときめいているだけで、シユイに魅かれていたわけではないのかも知れない。そもそも彼は顔すら見せていないし、かといつてお互いに内面を理解するほど親交があつたわけでもない。おそらくは初対面であるのだし。そうと考えれば、気になる要素は殆どないはずなのだ。

仮に彼の告白が本音であつたとして、顔を見せられぬような人間に心を許す気は毛頭ない。ここに来たのはあくまで確認のためだ。彼がフォルストロームに仇成さぬ存在であるかどうか、それを調べに来ただけだ。幾度となく、そう自分に言い聞かせる。

くつ、意識している証拠ではないか！

アミナは出された水を煽る様に飲んだ。テーブルに戻したグラスが思いの外高い音を奏で、周囲の注目を集めた。が、そんな瑣末な事に気を配る余裕は今の彼女にはなかった。その時点で当初の目論見は成功しているはずだったが、それすらも忘れていた。

そもそも大人しくあやつが顔を見せてくれてさえいれば、ここまで気になる事はなかったはずなのだ。

あの怪しげな格好はどうしても何者なのだ、と興味を引いてしまふ。ある意味卑怯である。まさか、本人はあれで目立たないようにしているつもりなのだろうか。だとしたら突っ込んでやりたいことが山ほどあった。

アミナには一つの誓いがあった。敬愛する父王が早くに亡くなつてしてしまったため、アミナは幼くしてフォルストローム唯一の後継者になった。自分が何かしらの不幸に見舞われればいずれ他の血筋の者が治めるようになるだろうが、その時に血が流れぬとも限らない。

ならばその可能性を少しでも低くするべく、強くなっておくに越したことはない。今は祖父のキーアが再度王を務めているが、もう齡は六十に近かった。祖父が王位を安心して退けるよう、自分が一刻も早く王に相応しい人物になるか、さもなければ国を支えられる婿を取らねばならない、そう考えていた。

元々シルフィールに入ったのはそのためだった。自分の力を鍛えられるし婿探しを兼ねることもできて一石二鳥。無論そのことは他の誰にも漏らしていない。

片方の目標は順調に達成へと近づきつつあった。シルフィールに入ってからというもの、アミナは元々の才に更なる磨きをかけ、驚異的な成長を遂げていた。今や押しも押されもせぬ準ランカーだ。このままシルフィールのランカーに昇格出来れば、国を治める者と

しても十分にやっつけていけるし自らを支えるに足る芯にもなる。ギルドの主戦力ともなれば、対外的にも名実共に十分な肩書である。そうなれば、別に婿の心配などしなくても良い。

目標達成を前に心を乱す必要はない。今はフォルストロームの事だけを考えよう。シュイについては敵であるか否か、それだけ確認できればそれでいい。アミナはそう自分に言い聞かせた。

けれども、何かの拍子でわかってしまえばそれはそれで仕方ないのであるからして。べ、別に気にしてなどおらぬ。おらぬと言ったらおらぬぞ。

はっとして、誰に対しての言い訳か、とアミナが拳をぶるぶると震わせた。先程まで水の入っていたグラスは氷を残して空になっていた。冷えたグラスの底が結露し、テーブルが濡れている。

形の整った爪で水滴を伸ばし、ゆっくりと線を引いている最中。赤毛の女性が店内に入ってきたのを見止め、アミナは一瞬身体を強張らせたものの直ぐにそちらの方へ手を振った。

「ここだ、ハーベル。いきなり呼び出したりして済まぬな」

「うっん、近くまで来てくれたし問題ないよ。まだお昼前なのに今日は蒸すねー」

ニルファナは朗らかに笑いながらアミナの向かいの椅子を引いた。

外から入って来たばかりで暑いのだろう。ニルファナは片手で水色のブラウスの胸元を摘み、もう片方の手で上から仰いで風を送っていた。若い女がその所作はどうなのか、とアミナは眉をしかめた。「アミナちゃんに呼び出されたことなんてなかったからちょっと驚いた。半年振りくらいかな？」

「そうだな、フラムハートとの合同任務以来か。その節は大変世話になった」

「それはお互い様だよ。あの任務大変だったもんね。稀に見る総力戦だったし」

かつて、悪名高い賞金首が名を連ねたバイルワールドという裏ギルドがあった。四大ギルドを始めとした正規のギルドは台頭してきたその大勢力と幾度も交戦を重ねていたが、半年前にフラムハートが本部の位置を割り出し、掃討戦を決断。シルフィールに協力を求めてきた。

バイルワールドとの戦いに際して度々犠牲者を出していたシルフィールはその申し出を受け入れた。双方の上位傭兵を結集させ、ケセルテイガーノの地下本部を強襲。ギルド同士の衝突としては史上にも稀な大激戦となり、双方に死傷者が続出した。その時アミナはまだBランクだったがニルファナを初めとした優れた傭兵たちと共闘し、多大な功績を残したのだ。それが準ランカーへの昇格の決め手となったと言っても過言ではない。

唐突に、白い留めボタン付きの袖が視界の端に入ってきた。トレイを両手に持つているウェイターが三人テーブルの前に並んだのを見てニルファナがはたと首を傾げる。

「お、お待ちせいたしました。魚介の Pasta と、シーザーサラダ（大）と、オリジナルプリンとチーズシフォン、それに象母のケーキでございます」

注文を読み上げてからウェイターたちは次々とテーブルに皿を置いていく。水の入ったグラスが置いてあっただけの殺風景なテーブルが、数十秒後には料理の乗った皿で埋め尽くされていた。

流石のニルファナも啞然あぜんとなった。続いては、注文のテーブルを

隣と間違えているのではないかと訝り、ウェイターと料理を交互に見る。隣のテーブルには四人座っているが、料理はまだ並べられていない。

「あなたも何か頼んだらどうだ？ 奢るぞ」

「あ、……え？」

ってことは、やっぱりアミナちゃんが全部頼んだのか。そんなでもって、この中にお姉さんの分が入ってるわけでもない、と。

自分の料理の並ぶスペースがあるだろうか。ニルファナは少し不安げにテーブル上へと視線を走らせた。

「ご、ご注文は？」

ウェイターが恐る恐るといった様相で聞いた。得体の知れぬ者を見るかのような失礼な目をしていた。こんな美人を捕まえてと思いつつも、ニルファナはメニューに視線を走らせた。彼女の感覚に照らし合わせると決して急いだわけではなかったが、十頁あるメニュー表をおよそ二秒で網羅した。

「んじゃあ、シナモンスティックティーとスペシャルツナサンドお願いしようかな。ティーはミドルで、サンドはトマト風味のソースでね」

「あ、はい。喜んで」

ウェイターがホツと胸を撫で下ろすのがわかった。店が相当混んでいるため、アミナのような大量注文が来たらたまらないのだろう。だが、その考えを客に悟られるようではまだまだ半人前だ。

「すみませーん、お会計お願いしまーす」

精算所で会計待ちの客が声を張り上げると、店員たちは慌しく作業に戻っていった。

もー、そんなに走ったら埃が立つでしょ。

ニルファナは、ウェイターたちを100点満点中30点と採点した後で、パスタをソース毎フォークに絡めているアミナに向き直っ

た。

## 第九章　　（ 3 ）

「それで、私に訊ねたいことって？」

頬杖を付いたニルファナを見ながら、アミナはパスタをむぐむぐと咀嚼し、ごくりと飲み込んだ。

「うむ、塩気は少し薄いの中々美味。そう、訊ねたいことだったな。人伝に聞いたのだが、シユイという男は貴方がギルドに推薦したらしいな？」

「うん、そだけだ」

一瞬、アミナの視線が鋭くなる。

「単刀直入に聞くが、奴は何者だ？」

ニルファナはアミナの視線を平然と受け止める。

「うーん、一言で表すのは難しいね。敢えて言うならお姉さんのお気に入り、つてとこかなあ」

「い、いや、そういうことではなくて、だな。火傷と偽ってまで顔を隠しているくらいだ。何かしら後ろ暗い事があるんじゃないのか？」

アミナの言わんとしたいことがわかるとニルファナはやれやれと肩をすくめた。

「アミナちゃんも勘が鋭いねー。もう少し引つ張れるかと思っていただけけど、まさかこんな短期間で見破られるとは予定外だなー。それにしても火傷、ねえ。もー、あの子ったらそんな古い手を使ったら遅かれ早かれバレるに決まってるじゃないか。賢い様でいて変なところが抜けているんだから」

あつさりと認めたニルファナに、アミナは少々拍子抜けしたように椅子を引いた。

「何だ、やつぱり火傷というのは嘘か」

「やつぱり、カマかけていたのね」

ニルファナは手に顎を乗せたままニツと微笑んだ。

「薄々わかっていたのか。その割には、否定する気もなさそうだが？」

「疑われている事には変わりないでしょー。下手に隠してシユイがアミナちゃんに公衆の面前でひん剥かれちゃっても困るし。絵画的には売れそうな気もするけれどね」

想像したのだろうか。アミナは微かに頬を赤らめた。

「さ、流石にそんな真似はしないが」

「そう願ってるよ。とりあえずもうしばらく、シユイの扱いについては私に任せて欲しいんだけどな」

ニルファナはアミナの顔色を窺うが、表情に変化は見受けられなかった。

「あなたのことは尊敬しているし可能な限りはそうしたいところだが、それは話如何に寄る。まず、我が国に仇なす可能性は？」

「ゼロだね。少なくともこの国には利こそあれ害はないよ」

「即答か」

「……食べるの早いね」

アミナが皿を重ねていくのを横目で見、ニルファナは眉を上げた。既にアミナはパスタ三皿を平らげている。だが食べるペースは最初と全く変わっていない。

「育ち盛りだからな。それに辰力を使うとやたら腹が減るのだ」

アミナはそう言いながらサラダのレタスを兎よろしくもきゅもきゅと頬張る。

「羨ましいやつめ。お姉さんがそれだけ食べたら非常にまずいことになるのに」

「んぐ、燃費が悪いのに羨ましいとは如何なものか」

「物は言い様だね。そうやって食べていられるのも、いいとこ二十歳までだよ」

そんな話をしてる間に、ウェイターがトレイを持ってやってきた。



「大変お待たせいたしました。シナモンスティックティーとスペシヤルツナサンドでございます」

「おー、きたきた」

「ウェイター、すまないがミルフィーユ追加で」

「あ、はい。畏まりました」

アミナはサラダを平らげ、今度はデザートに手を付けている。

「……底なしだね」と、ニルファナはアミナのお腹に視線を送り、首を捻る。その平坦さを見る限り、先ほどまでそこにあった山の様な食べ物が収められているとは到底思えなかった。どうにも、物理法則では説明のつかない胃袋を備えているようだ。

アミナは林檎程の大きさがある象苺を両手で持つ。余程の好物なのか食べるペースを落とし、ゆっくりと味わっている。幸せそうだなあと褐色の目を細めつつ、ニルファナは長方形のツナサンドを一つ掴んだ。

「で、どこまで話したっけな」

「フォロストロームに仇なす云々。それは絶対ないね」

「なら、何があるんだ？ 一体何を企んでいる？」

ニルファナは小さく口を開け、端の方からパンを食べ始める。

「んむ、お姉さんは彼に選択肢を提示しただけ。その結果、万が一無関係な人達に災いを成すような事があればこの手でちゃんと始末を付けるから、アミナちゃんは別に心配しなくていいよ」

「あなたは先程、シユイの事をお気に入りとか言ってたかったか？」

ニルファナは即答を控え、カップの取っ手をゆっくりと持ち上げる。少し間が空いて、ウェイターがラストオーダーのミルフィーユを運んできた。

「お待たせいたしました。ご注文は以上で宜しいですか？」

「うむ」

「大丈夫」

「では、ごゆっくりどうぞ」

ウェイターは頭を下げると早足で戻っていった。その背中が遠ざかるとニルファナはカップを口から下ろす。

「そうだよ。だからこそ、って言うべきか。でも、実はお姉さん、あまり心配してないの。あの子ならきつと明るい未来を見出せるって信じているからさ」

アミナの目から見てもニルファナは嘘を言っていないようだったが、一つ引つかかる言い回しにも気付いていた。

あの子、か。

「そうか、なら良い。実はキャノエで彼と会う機会があつてな。タイミングがタイミングなだけに、我が国で何かやらかさないと少し不安になったのだ」

「意外と心配性だね。それにしても、タイミングって何かあつたの？」

「うむ、実はシュイの事はあくまで序でな。こちらの方が本命なのだ」

アミナは自分でも気付かぬくらいの小さな嘘を口にした。

事情を説明する合間に、アミナは象苺を食べ終え、ミルフィーユを三口で平らげていた。

「ふーん、確かにそれはちよつと不自然だね」

ニルファナがシナモンスティックで紅茶をかき回しながら相槌を入れる。

「やはりそう思うか。あなたは魔法全般に精通していたな。屍術言語以外にも、たくさんの生き物を一度に操るような魔法は使えるのか？」

「勿論できるよ。幻を見せたり、催眠にかけたりね。ただ、そういうのはある程度知能が高い生き物に限るから、昆虫には使えないと思うな」

「そうか……、振り出しか」

人為的なものである以上、アミナは絶対に魔法が関わっていると信じて疑わなかった。それだけに当てが外れ、悔しげに下唇を噛む。「いや、別の方向からアプローチすれば出来ないこともないね。魔法とはちよつと異なるけど。アミナちゃんは、フェロモンって知っているかな？」

質問されたアミナは腕を組み、宙に視線を移す。

「ええと……うる覚えではあるが、動物や昆虫の出す匂いの事だと認識しているが」

「そうそう、大体そんな感じ。念のため補足しておく、特定の動物の体内で生成され、外に分泌することによって周りの動物にある一定の行動を起こさせる物質なんだ。近年、魔法薬学の分野で証明されたばかりだけど」

「なるほど。それを使えば使用者の意図した行動を起こさせることも可能というわけか」

「うん、そうだね。仮に人為的に起こしたとするなら、犯人は調香師か魔法薬学に精通している者かな。動物を集合させるものや、中には攻撃性を増加させたりするものなんかがあるんだけど、それに似た物質を作って風上から流したのかも知れない。魔法薬学と動物生態学に精通した人なら、やってやれない事はないよ」

「そうか、わかった。付近の学者を調べてみましょう。ありがとう」

「いえいえ、こちらこそ」

「……こちらこそ？」

「ん、アミナちゃんからシュイの近況を聞けるとは思わなかったからさ」

そういうことが、とアミナは納得する。

しかし、人為的にやったのだとしたら何のために。

ある程度の犠牲者が出るにせよ、蜂くらいで大きな町一つ落とせるとは考えないだろう。とすると、他に何かしらの狙いがあった町を混乱に陥れた可能性がある。

「一番手っ取り早いのは流した人を捕まえて聞いてみる事だね。今回の報告書を見れば集合した場所もある程度わかるだろうし、目星も付けやすいんじゃないかな」

「集合した場所、か。……もしや」

アミナの顔が険しさを増した。何故、エリクから報告を受けた時にその不自然さに気が付かなかったのか。蜂たちとの最大の激戦地、キヤノエの南東にある教会。町全体の被害の拡散具合から見ても、一つの建物如きにあれだけ蜂が密集していたのは不可解だ。

「……念のために、当時の風向きを調べねばならないな。本当に感謝する、おかげで手掛かりが掴めそうだ」

膝に手を当てて頭を下げたアミナを見て、ニルファナはカップの淵から唇を離し、微笑を湛えた。この娘もシユイに負けず劣らず良い子だと。

何が一番大切かをこの年齢にして理解している。これならフォルストロームも安泰だね。

「いえいえ、参考になれば何よりだよ。もしそうなら、シユイの疑いも大体晴れたかな？」

「この件に関してのみならそうだな。ところで、ギルド内で他に知っている者は？」

「まだいないはずだよ。だから、もうちょっとだけ待って欲しいな。時が解決してくれるはずだからさ」

「……わかった、これで貸し借りはなしだな。　　っと、最後にもう一つだけ良いか？」

「ん、何かな？」

ニルファナはアミナがそわそわしているのに気付き、どうしたんだらうと首を傾げた。アミナは質問をした後の会話内容をシミュレートしていた。

ストレートに聞いてみればいいか？

「……その、シユイはどんな顔をしているのだ。」

「あれ、まだ顔を見たわけじゃないの？」

「あ、ああ。一応見せて貰う約束はしているが」

「じゃあ、その時のお楽しみにしておいたら？」

「それもそうなのだが……どうにも気になってな」

「あら、何で？」

「あ、あやつが変な事を口走るから悪いのだ」

「え、何々？ どんなこと喋ったの？」

「……いい、言えぬ」

「あら、愛の告白でもされちゃった？」

目も当てられない、最悪な流れだ。

アミナはぶんぶんと頭を横に振り、質問を練り直す。シユイの年齢を訊ねてみようかとも思ったが、彼の正体を隠したいニルファナが本当の数字を教えてくれる可能性は低いだろう。加えて今迄の会話の流れから、アミナはシユイの年齢に対しておおよその見当を付けていた。

ならば、出来るだけ当たり障りのない事を訊いておくか。アミナは意を決して口を開いた。

「シユイの実力はどれくらいのものなのだ？ あなたほどの者が推薦したからには、もしか私よりも強いのではないか？」

「あの子がアミナちゃんより？ あはは、それは流石にないよ。少なくとも今はね。ここだけの話、アミナちゃんは来年のランカー昇格候補として名前が上がることもあるくらいだから。これはAラン

クに上がったばかりの傭兵には異例なことだよ」

「そうなのか。それは素直に嬉しいな」

「勿論、他にも候補者はいるからまだ何とも言えないけどね。或いはデニスさん、レッドフォードの可能性も捨て難いかな。まあ、来年が無理だとしても、遠からずアミナちゃんはランカーに指名されると思うよ。シルフィールがもつとも優れている点は、上層部が面子や肩書きに囚われないことだから」

「うむ、私が入ったのも一重にその理由が大きい。のびのびと過ごせるし、特別扱いされることも少ないからな」

「本当、ここは自由な気風を好む人が多いよ。シュイもそれに感化されてくれるといいんだけど」

「感化？」

「詳しくは言えないけど、シュイは心に深い傷を負ってる。そのシヨックで狂わなかったのが不思議なくらいのね」

「何だ、意外と繊細な奴なのか？」

「あの子の心は強いよ。……だから尚更、不憫でね」

ニルファナの表情を見て、アミナは二の句を継げなかった。哀しさや愛しさが入り混じったような、それでいて、感情を表に出すまいと堪えているような顔をしていた。だがそれも、数秒後には跡形もなく消え去っていた。

「ま、そんなわけ。シュイは自らの道を選び取った。私はちよつとその手助けをしただけ。彼は相応の覚悟を以って傭兵の道を選んだから絶対に強くなるよ。あまりうかうかしていたら、私も追い付かれちゃうかも知れないね」

ニルファナが口にしたその言葉は、アミナに微かな驚きを喚起させた。

話が済むとアミナは勘定を先に一括して払い、ニルファナを残して店を後にした。仮に大毒蜂の襲来が人為的なものであれば迅速な

措置を取らねばならなかった。

アミナはニルファナの言動から様々な物を読み取っていた。

『無関係な人達に害が及ぶような事があれば始末を付ける』という言葉。それを裏返せば、シユイは関係者に対して害を及ぼそうとしているのであり、そこまでなら彼女が見逃すつもりだということだ。そしてもう一つ、今はシユイよりもアミナの方が強いとニルファナは断言した。口振りからしてそれが本心かそうでないかくらいは察する事が出来る。だが、重要なのはそこではなかった。

今現在、準ランカーのアミナより弱いシユイがランカーである彼女に追い付かれちゃうかも知れないと危惧させるほどの成長を示すものだろうか。仮にそれが本心だとして、ある程度完成された実力を持つ成人がそこまでの成長を見せるとは考え難い。

とすると、あやつは未だ成長期なのか。

ニルファナが口にした『あの子』という言葉は親しみを籠めただけでなく、シユイの年齢を本来の意味で表しているのではないか。考察した結果、アミナはその考えに思い当たった。シユイは自分と同年代かも知れない、と。そして、世界にはそれくらいの年代の重犯罪者も存在する。

後で調べてみるか。

アミナはその思考を一旦頭の端へと追いやり、走る速度を上げた。

アミナと別れた後、ニルファナは頼杖を付いて海を物憂げな表情で眺めていた。想い人を恋い慕い、切なげな溜息を漏らす麗人。周りの店員や客たちにはそのように見えていたことだろう。

シユイのバカチンめー、何て芸のない言い訳を。どうせなら本当に顔を醜く焼いて、お姉さんと会った時だけ顔を治す、という風にすれば確実だったのに。

実際のところはどのような怖い事を至って真剣に考えていた。とはいえ、ばれたものは仕方がない。一先ずはきつくお灸をすえるだ

けで済ますつもりだった。

シュイが傭兵になってからもう一ヶ月か、早いもんだね。こちらの仕事も区切りが付いたし、一旦釘を刺しにいこうつと。

ニルファナは親指と人差し指で皮膚を抓る様な所作を幾度となく繰り返し、それをされるシュイの顔を想像してはにまにまと笑みを浮かべるのだった。



## 第十章 く陰謀の尻尾(1)

「ぶいくしゅー！」

「ぬわっ、きつたねえな！　せめて口くらい塞げよ馬鹿！」

シユイは盛大にくしゃみを炸裂させ、飲んでいた黒桃ジュースを放射状に撒き散らした。真向かいのピエールにも被害が及んだようだった。

夏場に長袖の黒衣を着ているのだから身体が冷えているわけではない。シユイは風邪だろうか、と得体の知れない悪寒に身震いした。テーブルに設置されている薄紙に気付き、一枚拝借して鼻を力一杯噛む。その薄紙をくしゃくしゃに丸めて皿の端に置くと、隣に座っていたピオラが少し嫌そうな顔をした。

「……ふう、それにしても」

「それにしても、じゃねえ！　自分だけすっきりしてないで早くそこのお絞り貸してくれ。シミになっちまう」

「わかつたわかつた、全く騒がしい奴だな」

シユイが面倒臭そうに、手前に置いてあった未使用のお絞りに手を伸ばす。

「おまえ、誰のせいだと」

「くしゃみくらい咄嗟に避けれるくらいじゃないと立派な傭兵になれないぜ」

シユイはピエールにお絞りを投げて寄越した。

「こ、この、予備動作なしで炸裂させたくせに何を偉そうに」

「おいおい、真面目な話の最中だぜ」

不毛な言い争いを始めた二人にシャガルが眉を潜めた。俺の服にシミが出来ちまうのは真面目な話じゃないのかよ、とピエールは口を窄めた。

中心街のレストランで昼食でも一緒に、とシャガルたちから誘いがあったのは昨日のことだった。明後日、今日から数えれば明日のことだが、キャノエを離れる予定なので、その前にちゃんと別れを告げておきたいということだった。勿論、シュイたちはその申し出を快諾した。

この三日間、シュイとピエールは依頼を受けずにベチユア亭<に居座り、温泉に入りつつ戦いの疲れを癒やしていた。身体が本調子でない状態で依頼を受けるのは危険だし依頼人にも失礼に当たるというのがピエールの言い分であり、シュイもその意見に異存はなかった。身体を休めるのも傭兵の大事な仕事だ。

但し、休みといえども最小限の訓練は怠らなかった。音楽家の奏法、或いは職人の技術のように、一日たりとも休む日を作ってしまうと成長に陰りが現れるからだ。

ピエールは服に付いたジューズをごしごしと拭き取っていた。

「二人とも折角意気投合したのに、しばらくは会えなくなるなあ。ルクスプテロンは遠いぜえ」

ピエールの言うように、ルクスプテロン連邦はフォルストロームから相当に離れている。世界地図で言えば赤道を挟んで対極に位置し、風の魔石を搭載した高速魔船でも一ヶ月近くはかかる。

シャガルは黄金色の半熟オムライスをスプーンで端からこそげとるように掬すくった。

「そう言うなって。俺だってこれでも結構がっかりしてるんだぜ。ピオラにしたってこんなに打ち解けることなんて滅多にないもんなあ?」

「……そんなこと、ない」

ピオラは素っ気なくストローに口を付けた。グラスの中でちよっ

とずつジュースの量が減っていくのをシユイは何となしに見つめていた。

「……シユイ、飲みたいの？」

「……ん、え？」

一瞬何のことかわからず、シユイは顔を上げる。

「……ジュース、じつと見てたから」

「ん、ああいや、気にしないで。何となく見てただけだから」

「……何となく」

ピオラは自分を納得させるかのように頷いた。確かに、出会った時と比べれば随分喋るようになってきているが、打ち解けたという意味合いにおいてはごく標準のレベルにも思えた。

「出会ったばかりの二人には判り難いかも知れないけどな。ピオラが他人に関心を示すのは本当、珍しいんだよ」

「関心？」

「……シヤガル」

ピオラは少しむっとしてストローから口を離した。

「そう照れるなって。昨晚だって今日ここに着てくる服を時間をかけて選んでたじゃないか」

シヤガルの指摘した通り、今日のピオラの服装は黒装束ではなく、薄いピンク色の清楚なワンピースだ。耳には先日まで付けていなかった銀のイヤリング、髪はシユイが先日プレゼントした電気石トルマリンの髪留めを付けてきちんと束ねている。如何にも女の子らしい服装だ。

逆に、変わり映えのない自分の格好を思うと少々申し訳ない気持ちにもなる。

「……べ、別に」

少し恥ずかしそうに俯くピオラの横顔がピンク色に染まっているのを見て、何故か胸が高鳴るのを感じた。あどけない顔立ちだが人形のように長い睫と蠱惑的な紫色の瞳は存分に人目を引く。今は幼さの抜けきらない彼女だが、数年後には間違いない美人になっていることだろう。

自分はどんな大人になっているんだろうか。そもそも大人になることが出来ているんだろうか。シユイは天井に吊り下げられているユリの花のような照明を見つめながら詮無きことを考えていた。

「しっかしまいったよな。大毒蜂つてのはあそこまで群れる物なのか？」

シャガルの声が頭に反響し、思考を現実に戻す。話題はいつの間にか蜂との戦いの方に移っていた。

「……まあ確かにそれは引つかかるよな。最終的には百を悠に超える数いたみたいだし、もしかしたらフェロモンってやつでも撒かれていたのかも」

「フェロモン？」

初めて聞く言葉に、シユイは首を傾げた。ピエールは「そう、フェロモン」と請合う。

「先日 ほら、蜂に襲われた日に図書館でばったり会っただろ？ その時読んでいた最先端生物学の本に載ってたんだ。昆虫に限らず色々な動物が体内で生成する物質らしくて、それを感じることによって特定の行動を起こすらしい」

「ふーん、そんな物質があるんだ。じゃあ、それを教会に垂れ流したって可能性もあるわけか」

「……ん」

ピオラの手が袖をくいくいと引っ張っているのに気付き、シユイは流し目を送る。

「ん、ピオラ。どうかしたのか？」

「……ずっと不思議だった。何であの拡声、長老樹に集まるよう言ったのか」

拡声と言われ、シユイは先日のことを思い出し、鳴っていたな、と頷いた。ピオラの指摘しているように長老樹に集まるようにという警告も薄らと覚えていた。

「そりゃあ目印にもってこいだつたから、じゃないか？」

そう言うシユイにシャガルも頷きかけたものの、途中で何かを思い出したかのように硬直する。

「……いや、ピオラの言う通りだ。この町は長老樹が中心にあるから、むしろ他の街より方角を認識しやすい。南東には教会以外に建物がないと牧師が言っていたらどう？ 確かにそうだった。あそこは小高い丘になっていて教会以外には目ぼしい建物は見当たらなかった。だったら教会が十分な目印になるじゃないか。長老樹なんか指定しないで、初めから南東の教会を目指す様指示していた方が自然だったと思わないか？」

「……どうということだ？」

シユイは皿の端にハンバーグが刺さつたままのフォークを置いた。シャガルは顎に手を当て、黙考してから面を上げた。

「これはあくまで仮説だけ？ 確かあの時、町内放送で付近の建物に避難してください、とも言っていたら。始めから教会にいた人間がそれを聞いたら、当然そこから動こう何て思わない。だって、直ぐ近くから蜂が侵入した事が判っていたわけだからな」

シャガルの意図していることを察したシユイは、フードの奥で顔を歪める。

「その上で教会を蜂の標的にしたってことか。じゃあ、戦える者に対して長老樹に集まるよう言ったのは、事を成すまでの単なる時間稼ぎ？」

「おいおい、まさか意図して教会の人間を狙つたって事か？ 一体何のために？ その説だと放送を流した奴もグルだったってことになるぜ」

ピエールはまだ納得し難い様子だった。

「信憑性を増す説明はもう一つあるぜ。もし、そのフェロモンとかいう物質を風に垂れ流しにただけだったなら、蜂たちの大部分は町の方に向かっていたはず。いくら周囲に建物が無かったとは言え、あの教会にあれほどの数の蜂が留まっていたのは明らかに不自然だ。

初めからそのフェロモンとかいう誘引物質が教会から撒かれていた可能性はないかな。エリクも言っていたように、俺たちが来なかったら教会の中にいた連中は絶対に助からなかったはずだぜ」

「……そうか、それで何となく辻褃が合うな」

「……何か？」

何か気づいた様子のシュイにピオラが訊ねた。

「うっかりしていたよ。あれだけ人気のない町の南東部。なのに何で蜂が侵入したって情報が直ぐにわかったのか、疑ってかかるべきだった」

「……流す場所がわかってた？」

眉を潜めたピオラにシャガルは小さく頷く。

「その可能性もあるな。ちょっと調べて見るか、あの教会」

「そうだな、でもどうやって？」

『えっ』

シュイの言葉に他の三人が目を瞠った。まずい台詞だったことに気づき、慌てて取り繕う。

「い、いや、どこで調べるんだったっけなーと思ってさ」

ピエールが呆れ気味に下唇を突き出す。

「おいおい、頼むぜシュイ。町役場の管理局に行けば詳しく調べられるだろ。食べ終わったら早速行こう」

町役場、管理局。シュイはそうだった、と頭を掻きながら脳裏に新たな単語を刻み付けた。

町役場はレストランから程近い、フラムハートのキャノエ支部の真向かいにあった。位置的にもシルフィールよりずっと中心街に近く、こんなところにも微妙な格差があるんだなあ、と新しい発見に

感心する。

三階の管理局受付に行くと、欠伸をかましていた男性の受付員が慌てて顔を引き締めた。しかしながら、目やにが睫毛まつげにこびり付いているのまでは気付かなかったようだ。

シヤガルは事情を話してから傭兵の登録証を差し出した。

「ああ、フラムハートの方ですか。いつももお世話になっております。資料閲覧の許可証は持っていますのですか？」

「残念ながら。が、一刻を争うんで見せて貰いたい」

「しかし、規則が規則です。まずは下の事務局にて申請を  
お  
つ  
つ

「おっと、こんなところに」

ポケットから手を出したシヤガルに受付員は微かに息を呑み、続いて他の三人に目を泳がせた。シヤガルが指で弄もてあそんでいるのは五万パース紙幣。葛藤している様子の受付員を見て、シヤガルは駄目押ししの台詞を付け加える。

「あくまでお国のためってやつなんだが、それでも見せられないって言うなら仕方ない。明後日改めて」

「い、いえ、国のためというのなら私も心を鬼にしましょう  
使い方が間違ってる、とシユイは思った。それを言うなら『目を瞑りましょう』のはずだ。

シヤガルも意外と芸が細かかった。敢えて明後日と口にしたのは、明日と違って休日だから対応する受付も代わると考えたのだろう。相手は仮にもフラムハートに所属する傭兵、企業で言えば一流と言つて差し支えない。本来なら申請書を求めるのも野暮とすら言えるはずだ。唯一違うのは自分が五万パースを貰えるか貰えないか。受付が考えたのはそんなところだろう。

「柔軟に対応してくれる事務員で良かったよ」

「……いつもこんなことやっているのか？」

シユイが呆れたようにそう言うと、シヤガルは笑みを返す。

「時と場合に寄る。いつもやっていたら儲けがいくらあっても足り

ない、そうだろ？」

一行を四階の資料室に案内すると、受付はそそくさと仕事に戻っていった。四人は届け出ている宗教団体の資料を隈なく漁っている。

「……シャガル、これ」

十分ほどして、ピオラが茶色に変色した資料を開いたままシャガルに差し出した。

「へえ、あの教会つてレムースだったのか」

「……そこじゃない、ここ」

ピオラが身を乗り出して指で示す。

「なるほど、こいつはおかしいな。たった五年の間に六件も？」「何かあったのか？」

ピエールが別の資料を手に持ちながらシャガルとピオラの方に歩み寄る。

「どうもあの教会、他の教会と見比べても信者に不審死が多いみたいだ。他の教会はせいぜい一件だけ。見過ごすにはちよつと異常な数字じゃないか？」

「……本当だ。身寄りの無い者が多いな」

シユイはどれどれ、とピエールの横から書類を覗きこむ。

「……六件中五件が天涯孤独か。明らかに偏っている」「シャガルが腰に手を当てるように立ち上がった。

「どうやら決まりだな。寄付金目当ての殺害、十中八九あの牧師が犯人だろう。あの時に教会にいた信者たち、もしかしたら誓約書でも書かされていたかも知れない」

「そういや、あの時怪我人も出ていたよな。まだ入院しているかな？」

少し不安げに訊ねた。ピエールにシャガルははっきりと頷く。

「いるはずだ。一般人には少々キツイ怪我だったからな」

「……行ってみる？」



三人がその問いに頷いたのを確認し、ピオラは資料を閉じて胸に抱き、本棚へと走っていった。

黄昏時、病院の中に入っていくシャガルを見送り、三人は敷地内にある四人掛けくらいのベンチに腰掛けた。花壇から漂ってくるエソジェルラベンダーの香りが心地良い。昼寝するには良さそうな場所だ。

病室に四人でぞろぞろと行くのも迷惑になるので、それなら治療に当たったシャガルが一番話を聞き出し易いのでは、ということになった。シユイは格好からしてあからさまに怪しいし、ピエールも如何にも傭兵然としているので一般人受けはしないだろう。人見知りのピオラに関しては問題外だ。

空が青みがかってきた頃、やっと病院から出てきたシャガルを見て、ベンチに並んで座っていた三人が立ち上がる。

「どうだった？」

「見事に予想的中。二ヶ月ほど前にそのような書類を書かされたつてさ。信者として籍を置くのに必要だからと言い包められたみたいだ」

シユイは少し首を捻る。重要な書類なのに碌々確認もせずにサインをするものだろうか。すると、シャガルはその考えを読んでいるかのように言葉を続けた。

「他にも何人かが同じような書類を書かされていたらしい。集団で書かせることになって警戒感を薄れさせたんだろう。或いはサクラも混じっていたかも知れないけどな」

「サクラ……ってなんだ？」

ピエールが訝しげに訊ねた。それにはシユイが返答する。

「暗喩だよ。演劇で言う客寄せの見物人のことさ。劇が始まると桜の花びらみたいに直ぐに散っていなくなることからそう言われてるらしい。フォルストロームではあまり使われていないみたいだけれどね」

「なるほど。覚えておこ」

「そこまで詳しくは知らなかったな。覚えておこ」

「……覚えておこ」

三人が感心したように頷いているのを見て、シユイはちよつぴり誇らしげな気持ちになった。

「じゃあ、教会に行ってみるか？」

ピエールがそう言うと、シャガルは少し渋って見せた。

「うーん、国軍の手柄を横取りすると後々揉めるかも知れないからなあ。それに、俺たち明日にはここを発つつもりだし……」

「……人命優先」

ピオラの言い分を聞いて、シャガルが困ったように唸る。

「まあ、確かにそうなんだけれど。でも軍に伝える分には問題ないだろ？」

「……内通者の存在は？」

シャガルは顎に手の甲を当てて考える仕草をし、短く頷いた。町内放送の組員を引き入れているくらいに手回しの良い連中なら、そちらにも考えが及んでいる可能性がないとは言い切れなかった。

空の薄赤色が地平線ぎりぎりにまで追い遣られる頃、四人はキヤノエの南東にあるレムース教会を目の前にしていた。地面にはピエールが剣で描いたコの字の痕跡がまだ残っている。掘られた地肌の両側には焼け焦げた跡が見受けられた。

大量にあつた大毒蜂の死骸は全て片付けられていたが、蜂に体当たりされて拉ひきげた扉はまだ直されていなかった。四人は空いた隙間から一人ずつ教会の中に入っていく。

教会の中は閑散としていた。入り口があつた状態であるから、未だ教会としての役割は回復していないのだろう。昼間は神聖で荘厳な雰囲気のある教会も、薄闇の中ではどこかおどろおどろしさに包まれている。如何にも何かが出てきそうな雰囲気があつた。

「誰もいないようだな。もしかしたら逃げたか？」

> ……いや、いるみたいだ<

シユイが間近にいる三人に念話を送る。教会に入る前から警戒網を張り巡らせ、周囲に潜む何者かの気配を複数感知していた。

四人が慎重に教会の中央へと進んでいくと、案の定、聖壇の奥から牧師が悠然と姿を現した。

「夜間の不法侵入とは感心しませんね。軍を呼びますよ」

「軍を呼んで困るのは、そちらの方ではないのかな」

「……ほう、これは異な事を」

牧師はシャガルにゆっくりと向き直った。その口の両端は醜く釣り上がっている。四人の傭兵相手に、無策でこんなに余裕を保てるわけがない。シユイは正確な人数を察知するべく素早く教会周辺にいる気配の位置を探る。

> 少なくとも、教会の奥に四人……屋根の上にも同じくらい<

シユイの念話を受けた三人はそれとわからないくらいに小さく頷

いた。

「どうせ教会内のどこかに調香具があるんだろ？ それが見つかった時点で手前もおしまいだ」

ピエールの指摘に牧師は一瞬動揺したようだったが、直ぐに落ち着いた表情に戻る。

「……やはりばれていましたか」

「やれやれ、牧師が殺人とは世も末だな」

シャガルが救えないとばかりに肩をすくめた。

「迷える子羊が救いを求めていたので、救ってやったまですよ。生きる苦しみからね」

今回の目論見は失敗しているはず。にも関わらず過去形を使った事から推測するに、何度か似たような事を繰り返しているのは自明の理。昼間に見た資料とも合致する内容だ。

「……何でそんな回りくどい事をやる必要があった？」

感情を押し殺したピエールの声には静かな怒りが含まれていた。任務中に蜂に殺された仲間の事が頭の片隅にあったのかも知れなかった。彼の死にしたって牧師が蜂を招いたのが元凶だった可能性もあるのだ。

「ここに来たということ、あなたたちも調べたのでしょうか？ 信者たちの中には、死んだら財産を我が教会に寄贈する者がかなりいます。ですが、私が直接この手で殺せば当然罪になりますし、かと言って暗殺者を雇うと金がかかるし足も付く」

「それで魔物を誘き寄せたのか」

「まあ、そんなところです。素晴らしいアイディアだと思いませんか？ 幸い、私は魔法薬学を専攻していましたのでね。蜂を誘引する物質を作るのに、そんなに時間はかかりませんでした」

得意気に話す牧師に、四人が憎しみの籠もった目を向ける。

「……女王蜂も貴方が？」

「女王蜂……？」

ピオラの問いに、牧師は不思議そうな顔をした。シャガルは牧師

を値踏みするかのように目を細める。

「そんじゃ、最後にもう一つ訊こう。あの蜂の群れの中で生きていられると思っていたのか？」

「愚問ですね。私がそんなへまをするわけではないでしょう？ 蜂が近寄らない物質も調合済みですよ」

「……その才能が別のところに役立てば良かったな」

「それこそ余計なお世話です。全く、あなたたちのおかげでとんだ無駄手間を取らされました。覚悟は宜しいですね？」

おもむろに牧師は親指と人差し指を合わせて音を鳴らした。パチンという音とほぼ同時に、黒い影が四つ、教会の奥から飛び出してきた。後ろに視線を送れば入口側からも数人中に走って来ている。

相手側に唯一つ誤算があったとすれば、四人がそれを予期していたことだ。挟み撃ちにされたはずの四人に一切動揺は見受けられず、シャガルはいち早く上級魔法の詠唱に入っていた。

「> 風嬰の円環フォレスティン・サークルく！」

シャガルの詠唱が教会の高い天井に反響する。四人の周りを囲むように小さな風の輪が出現し、敵が襲いかかってきた刹那、一気に外へと展開した。

「ぐあああつ」

「がはつ」

迫り来る男たちはドンツという音と共に後方へ強かに弾き飛ばされた。牧師の脇を通り過ぎ、教会の壁に叩き付けられる。教会に規則正しく並んでいた机や椅子がドーナツ状の突風に圧され、衝撃音と共に四隅に押し込まれた。中央にはぼつかりと歪いびつな円形のスペースが出来上がっていた。

入口側から走ってきた三名の内の一人在椅子の流れを目で捉え、跳躍して何とか風圧を回避する。が、それよりも高い位置に小さな影が待ち構えていた。ワンピースのスカートを捲めくれぬよう両手でし

っかりと押さえているピオラだった。

「なっ　ぐっ」

ピオラの控えめな回し蹴りが男の顎を捉えた。思い切り脳を揺らされた男は不恰好な体制で配列の乱れた机の上に墜落する。派手な音が響く中、殆ど音を立てることなくピオラが着地した。

「……ば、馬鹿……な」

ものの十数秒で勝負は決していた。予め暗殺者を雇っているとは念の入ったことだが、本来不意打ちは力に劣る側が使う方法。気配を悟られた時点で著しく不利になるのだ。襲う側に己の優位を戒めるだけの心が無ければ使うべきではない。

「全く、こんなくだらない理由で無差別殺人たあ反吐が出る。

けじめ、付けさせて貰うぞ」

剣を構えてにじり寄ってくるピエールに気圧され、牧師は二歩三歩と後ずさりした。

「同感だな。貴様のおかげで全てが台無しだ」

突如教会内に響いた低い声がその場にいた者たちの鼓膜を震わせた。その次の瞬間

「　うがっ」

がくと牧師の身体が揺れ、少しずつ宙に浮き始める。シユイが見開きかけた目を細めると、黒い線が牧師の身体に巻き付いているのが見えた。

> 金属系だ、警戒しろ！<

黒塗りの鋭利な鋼系。それが太った牧師の全身に絡み付いていた。さながらハムのようにきつく縛られた牧師は手足を震わせながら苦悶の声を上げる。かと思つた時には一気に宙に吊り上げられ、腹や手足に食い込んだ糸から血が滴り始めた。

「　……あ、あが……あ」

「　……何もんだっ、どこにいやがる！」

ピエールが素早く辺りを見回した。ややあつて、教会の最奥にある聖壇の傍らに佇む影を視界に捉えた。

「数年間綿密に進めてきた計画をおじゃんにしやがって。どういうつもりだ、ああん？」

いきり立つ影が拳を引く所作をすると、黒糸が先ほどにも増して牧師をきつく締め上げた。分厚い脂肪に深々と切れ目が入り、糸からは満遍なく血が滴り、床を紅色に染めていく。太い首にも食い込んでいるのか、牧師はまともに声を発することもできていない。

「……あ、……ば」

「待て、そいつにはまだ色々訊きたい事がある。勝手に殺すな」

シヤガルの命令口調に反応し、男から発せられていた圧力が一気に増す。

「……何だあおまえ、偉そうに。まさか、俺に命令しているつもりか？」

振動した空気が表皮を断続的に刺激し、シユイは自然と両手の平に汗が滲み出るのを感じた。

こいつ、やばい。下手すると準ランカークラス、か。

纏わりつきそうな不定形の殺気が教会内に充満していく。男の威圧感はアルマンドから感じたそれに近い。シユイは頭の中に生じた「勝てるのか」という疑問を、全身に力を籠めて掻き消した。

## 第十章 〵(2)〵

「……はん、貴様ら傭兵か」

互いに顔は見えぬ位置のはずだが、男は正確にシユイたちの所在を言い当ててきた。シユイは相手が自分と同じく、何らかの方法で力量を感じ取っていることを確信した。

「……警戒」

ピオラは先ほどの空気の中あでられた時点で短剣を抜き放っていた。経験上、全力を出さずに済む相手ではないと察したようだった。

「……小娘が。一丁前に刃を向けてんじゃねえ」

そう言い捨てるや否や、唐突に小さかった影が大きくなってくるのがわかった。突っ込んでくる男に対し、シユイは一瞬逡巡しゆんじゆんを見せたものの、直ぐに迷いを消した。相手に刃が向かぬように留意しつつ、一歩踏み込むようにして、腰ほどの高さに合わせて鎌を振りかざした。

勢いを増した鎌の柄の先が男の胸に当たる直前、男の姿が闇に溶けた。

「がっ」

シユイの斜め後ろから咽るような、喉が絡んだような声が発された。次いで何かが床に落ち、乾いた音を立てた。音源はピオラが先ほどまで手にしていた短剣だった。

「ピオラ！」

焦りを含んだシャガルの声に、シユイが瞬時に後ろを振り返ると仰向けになっている男の姿が目飛び込んできた。スライディングで鎌の下を潜り抜けられたのだとわかった。

予め狙いを定めていたのか、斜め上に向けられた靴の爪先がピオラの下腹に深々と食い込んでいた。躊躇を見せたシユイたちが動き



出す前に、男は両肘を床についたままの体勢で足を思い切り真上に振り上げる。

「ぐぶえ！」

前屈みになっていたピオラの身体が天井に向かって高々と蹴り上げられた。驚異的な脚力によって胃が更に圧迫され、宙に浮かされた彼女の口から粘っこい胃液が溢れ返る。

「てめえ……！」

激昂したピエールが背中から剣を抜き放ち、そのまま床に仰向けになっている男の首目掛けて振り下ろす。ほぼ同時に、シャガルが床に仰向けになっている男に手をかざしていた。男は素早く跳ね起き、ピエールが振り下ろした剣を間一髪で避ける。

床に長剣が打ち付けられ、鉄杭を金槌で打ち損じたような耳障りな音を奏でた。間を置かずして、シャガルが起き上がった男に素早く手の平を向け、至近距離から魔法を放つ。

「> 吹き荒ぶ風<！」  
ウィンド・ショット

風が放たれたのとはほぼ同時に屈んでいた男が膝を伸ばし、宙へと跳躍した。シャガルの>ウィンド・ショット<が先ほどまで男が立っていた方角の椅子と机を轟音と共に跳ね飛ばしていく。

「……まさかつ！」

男の狙いに気付いたシャガルがその姿を目で追う。男は先ほど宙に蹴り上げたピオラに狙いを絞っていた。痛めた腹を苦しげに両手で押さえたまま落下してくるピオラに向けて迎撃態勢を取る。最悪の光景を想像したシャガルとピエールの顔から血の気が一気に引いた。

「や、止める！」

「良い声で鳴けや」

ピエールの制止の声を意に介す様子もなく、男が歪んだ笑みを浮かべたが、それも束の間のことだった。宙に浮くピオラの傍にはもう一つの影があった。ピオラを受け止めるべく男より先に跳躍していたシューイだった。

くそっ、俺のせいだ！

遣り切れぬ想いが、自分に対する怒りがあつた。刃の向きに気を遣う暇があつたのなら、少なくとも男がスライディングを仕掛けられない位置にまで踏み込めたはずだつた。

「やらせるものか！」

男に、そして味方<sup>ピオラ</sup>を危機に陥れた己の温さに憤つたシユイは氣勢を上げ、男の頭に狙いを定めて斜め上から足を振り下ろした。男は出しかけていた拳を咄嗟に引つ込め、顔の前で腕を交差させた。一テンポ遅れてシユイの放つた鋭い蹴りが男の腕に直撃する。

「……ぬう！」

防御は間に合つたものの、体重をしっかりと乗せた蹴りの衝撃に圧され、男は体勢を崩しながら落下する。シユイはそのまま空中で落ちてきたピオラの身体をしっかりと抱き止める。

「……ピエール！」

「わかつてるつて！」

男の落下点には既に体勢を整えて待ち構えているピエールがいた。剣を下に構え、男の落ちてくるタイミングを見計らつている。頭から落下する男がチラリと下にいるピエール視線を走らせた。

「逝つちまえ！」

「ちっ」

男は咄嗟に教会の奥の方へ手を伸ばした。一瞬、単なる悪足掻きかと思われた。しかし、ピエールが下から長剣を切り上げた刹那、男の身体がまるで振り子のように教会の中央へ揺れた。

「何っ」

寸分違わず男の胸に直撃するはずの剣は男の二の腕を掠めただけだつた。ピオラを胸に抱き抱えたシユイが地面に降り立つ。遅れて男が教会の中央よりやや奥側で握つていた何かを手離して着地した。

「ピオラ！ 大丈夫か！」

「……………う、ぶぐ……………う……………ふう」

ピオラに返答する余裕はなさそうだった。唾液とも胃液ともつかぬ泡を口端から零しながらシュイの腕の中で身体を痙攣させている。仮にあのまま無防備な状態で追撃を受けていたらその命すら危うかったたろうことは想像に難くなかった。シュイは憎しみ滾る<sup>たぎ</sup>目を男の方へと向けた。

「……………何だ今の動き、どうやって……………。そうか、シュイの言っていた金属糸か」

ピエールの指摘は当たっていた。男は牧師を吊り上げるのに使っていた黒い金属糸に、重り付きの金属糸を絡めて樹から垂れ下がる長い蔦の様に扱い、ピエールの剣撃を逃れていた。

「おおいてえ、意外に粘るなあ。もつとも判断力はいまいちなようだが」

「……………何だと？」

「お荷物が増えた時点で捨てるのは定石だ、ろ！」

唐突に、男が何かを両手で放り投げるような動作をした。

「<sup>アイス・ウォール</sup>> 氷結壁<！」

シャガルが咄嗟に前方に障壁を展開する。楕円形の黒い何かが続々と氷に突き刺さり、雪を強く踏み付けるような音が連続して響く。僅か数秒ほどでまっさらな氷に西瓜の種のような装飾が施された。

その種は男が放った石飛礫<sup>いしりゅう</sup>だった。ご丁寧の一つ一つが黒く塗られている。間に乗じて使われれば、避けるのはおろか目に捉えることすら困難だ。

「おらあ！」

既に男は次の行動に移っていた。高々と真上に跳躍し、今度は氷の障壁の遙か上からシュイたちに向かって石を投げ付けてきた。ピエールとシャガルは咄嗟に横に転がり込む。シュイは背を向けてピオラを庇いつつ回避行動を取る。

「ぐうっ」

「いてっ」

全く軌道の読めぬその攻撃に晒された三人は、完全に被弾を免れることは出来なかった。殊にシユイは一人一人を抱えている分動きに精彩を欠き、被弾した箇所が他の二人よりも多かった。

「シユイ、大丈夫か！」

膝を突くシユイにピエールが声を掛けた。ピエールも全ては避け切れなかったのだらう。額の端には薄らと血が滲んでいた。

「……この程度なら問題ない」

心配を掛けまいとそう返したものの、決して無視できるダメージではなかった。背中に二か所、右肘に一箇所、左脛ふくらはぎに一箇所、飛礫の当たった箇所がジンジンと熱を帯びてきていた。

くそっ、地に足を付けないでこの威力か！

通常、足で踏み込むことが出来なければ投擲の威力は著しく激減する。にもかかわらず、男の放った石飛礫は、少なくとも相手にダメージを与える分には、威力、速度共に申し分がないものだった。そのことから男の膂力の非凡さが窺えた。

シユイは痛みを堪えながら再び男の方に向き直る。驚いたことに、男の身体は未だ宙にあった。おそらくは太めの鋼糸を何重にも張り巡らせ、その上に乗っているのだと察した。

「ひっひっひ、お荷物を庇って怪我をしていちゃあ世話ねえよなあ。扱いやすく助かるぜ」

男が馬鹿にしたように言い放った。痛みを呻くピオラを貶めるような発言に怒りが喚起され、感じていた痛みが一気に薄らいでいく。

「……この野郎」

「待てシユイ！ お前は一旦ピオラを連れて安全な場所に……」

「ざんねーん、それも無理だな」

シャガルの言葉を遮り、男が悠然と言い放つ。

「何だと？」

「敵が一人だと考えている時点でもう貴様らの負けは決まっているんだよ。俺の仲間が外で張り込んでいるからな。勿論、ハツタリだと思っならご自由に」

その言葉の意味を理解した三人の顔に隠し切れぬ焦りが滲み出てくる。一人相手にも手こずっているのに、同じレベルの敵が教会の外にもう一人いたらどうなるか。結果は火を見るより明らかだった。

「どうやら自分たちの置かれている状況が理解できたようだなあ。

……ここで優しい俺様が、おまえらが確実に助かる方法を一つ教えやろう。その小娘をここに置いて全力で逃げることだ」

「……お断りだ。どうせ殺すつもりだろうが」

そう言うシユイに、男は眉をひそめた。

「ああん？ 手前も一応男なら女に何をするくらいわかるだろうが」

男なら？ どういう意味だ？

シユイは訝りながらもピオラを抱く腕に力を籠める。

「てめえは馬鹿か。飽きるまで玩具にするに決まってるだろうが。

魔族の小娘如きが人族様に逆らったらどうということになるか骨の髄まで味あわせてやるんだよお」

男のその台詞を聞き、シャガルの形相が変わった。普段のお気楽さからは想像もつかないほどの峻烈な眼光だった。ピエールも腰のベルトに下げられている投げナイフに手を掛け、青筋が出るほどに握り締めている。

シユイはその幼さ故に男の意図を完全には理解しきれていなかったが、お気楽な二人を一瞬にして憤怒の様相に変えてしまう最低な言葉だということはわかった。それで十分だった。

「もう話を聞き出すのはヤメだ。確実に葬ってやる」

「同感だ。こんな奴に人族を名乗って欲しくねえ」

凄むシャガルとピエールを見て、男は尚も嘲笑う。

「聞き出す、だと？ 雑魚共が笑わしてくれる。相手が一人だからと気を抜いていただけだろうが」

「>宵の穹よいそらに現れしは月の眷族 その意を律して示威の刃を借り受け賜たまうく」

挑発に構わずシャガルが詠唱を紡いでゆく。程なく彼の掲げた両手に挟まれるようにして、青白い光を帯びた球体が現れ、ブーメランのような形に凝縮されていく。

その様子を見ていた男が初めて感嘆の息を吐く。

「ほう！ 若くして矢の魔法を扱うとはあながち口だけでもなさそうだな。 が、お遊びはここまでだ」

男が勝ち誇ったように笑った直後、入口の方から微かな物音が聞こえ、シュイは咄嗟に後方へ視線を走らせた。

## 第十章　　（ 3 ）

束の間、脳裏を過った最悪な予想に反して、姿を現したのはあまりにも意外な人物だった。

「……なっ」

「……！　ア、アミナ様！？」

シユイの上擦った声に、シャガルは男に対して構えを崩さぬまま肩越しに一瞬だけ後ろを見た。目に映ったのは銀髪を夜の闇で黒金のように輝かせたアミナの姿だった。

「悪いがそんな物騒な魔法を使うのは勘弁してもらいたい。一応、この教会は我が国の指定重要文化財なのでな」

薄闇に紅の眼を光らせたアミナは片手に何者かの足を掴み、ずると引き摺って中に入って来た。顔を床に擦り付けられた男が微かな呻き声を漏らした。出血しているのか、群青色の床に歪な線が引かれてゆく。それを見て、宙に佇む男が息を呑むのがわかった。

「まだ辛うじて生きてはいるが、少しやり過ぎてしまったようだ」

アミナはシャガルの隣で立ち止まると掴んでいた男の足を無造作に手放し、宙に浮かんでいる男に視線を送る。

「さて、貴様らが何者であるか、何を企んでいるのか問いたいところだが、当然答えてくれる気はないのだろうか？」

「　　ガーソンが、こうもあっさりやられるか。……噂以上の化け物だな」

アミナの質問には反応せず、男は肩を竦めた。が、先ほどよりも余裕がないのは明らかだった。声に微かな震えが含まれている。

「それならそれでいい。　　無理矢理聞き出させて貰う」

会話の余地なしと即断したアミナから鋭利な圧力が発せられた。否、その表現すら温い。辰力を極限にまで高めた彼女の周りには、

力の渦が具現化していた。そのまま相手の方に手を突き出し、身を低くしていつでも飛び出せる体勢に入る。

「……流石に分が悪い。ここは引かせても」

「どうあっても逃がさぬ。なに、幸いにしてこの場は教会だ。全てを聞き出した後でそのまま供養してやる」

語尾すら結ばせず、明確な殺意が表された。国に仇成す者に対してあくまで強硬な姿勢を貫くアミナに男は舌打ちし

「ふっ！」

おもむろに、男は近くにある黒糸を引っ張った。宙吊りにされ、存在を忘れられていた牧師の身体が一瞬にして細切れと化し、宙に撒き散らされた。既に失血死していたのか、血が噴き出すような事はなかった。

アミナを除く三人がそれに気を取られた時には男は金属糸から飛び降り、教会の奥へと走っていた。月明かりに照らされた教会の壁に薄い影が一瞬過る。

だがしかし、アミナは男の俊敏さを凌駕する速度で一直線に礼拝堂を駆け抜ける。落ちてきた牧師の肉片が彼女の顔や肩に降りかかったが、それを意に介した様子はない。そのまま速度を緩めることなく矢の如く疾走し、瞬く間に男との距離を詰めてゆく。只ならぬ気配を感じたのか、僅かに後ろを振り向いた男の眼に、恐怖が過った。

慌てた男が奥の扉を蹴破らんとする。アミナがその横腹目掛けて拳を握り締める。ドアが蹴破られた刹那、奥の壁面で小さな影が大きな影を飲み込むのが映った。豪快な音に遅れてタンスでも倒れたかのような鈍い音が響く。

「おぐっ！」

決して大きくないアミナの拳が男の脇腹に、杭を打ち込んだかのように突き刺さった。男の身体が壁面に押し付けられ、拡散した衝



撃によって壁が円状に浅く陥没し、その周囲にもヒビ割れが走る。余程の激痛に襲われているのか、男は完全に沈黙していた。声を漏らすことすら叶わなかった。

「詰めが、甘かったな」

唾とも泡ともつかぬ物を吐き出す男に対し、牧師の血と肉片に塗れたアミナは男の脇腹から一旦拳を抜き、尚も第二撃を放とうとする。

束の間、濁った男の眼に暗い光が宿った。アミナはただならぬ危険を察知したのか、すぐさまシュイたちの方、後方へ低く跳躍する。遅れて男の身体が爆ぜ、石床が弾け飛んだ。大小の破片が四方八方へ飛び散っていく。迫る破片を間近に見て、このままでは避け切れないと判断したのだろう。アミナは床に手を向けて魔力を放出し、上空へ逃れようとした。だが次の瞬間

「つう！」

上昇し掛けた途中でアミナの身体がつんのめるように停止。間を置かずしてゴム糸で弾かれるようにして床へと戻っていく。アミナの落下点に爆風で飛ばされた破片が猛スピードで迫る。それを目に捉え、回避が不可能と判断したアミナは強く目を瞑り、我が身を襲うであろう苦痛に堪えるべく歯を食いしばった。

アイス・ウォール  
「>氷結壁<！」

異変を察したシャガルとシュイの声が重なった。落ちてくるアミナを守るように分厚い氷の壁が展開される。アミナが四つん這いで着地するや否や、飛んで来た破片が氷に突き刺さっていく。幸いにも重ね掛けになった氷の壁は強固で、大き目の破片であっても貫通するまでには至らなかった。

「アミナ様、大丈夫ですか！」

シャガルが慌てた様子で床に膝を突いているアミナに駆け寄った。

「……ああ、すまぬ。……私とした事がぬかったな」

アミナの背には薄らと赤い線が引かれ、そこから血が滲み出ている。宙を見上げると、先ほど男が使っていた黒糸が主を失ったクモの巣のように未練がましく残っていた。アミナはそれに背を引っ掛けたのだ。

「……情報を漏らさぬよう自ら死を選ぶとは、な。徹底している」  
アミナの重々しい呟きが耳道に残る。シユイはもう一人の、アミナが引き摺ってきた男に目を移した。外で待ちうけていたのは間違いないこの男だろう。もし彼女がこの場に駆け付けなかったら、確実に挟み打ちにされていた。そうなっていたら、果たして切り抜けたらだろうか。

運が良かったただけだ。  
己の無力さを痛感したせい、アミナを抱くシユイの腕に力が籠もる。

「……う、シユ……イ？」

「……！ ピオラ、気が付いたか」

「……わ、私……また」

自分がいつの間にかシユイの腕に抱かれていることに気づき、ピオラは唇を震わせた。羞恥ではなく、悔しさを滲ませていた。足を引っ張ったことに対して打ちのめされているのか、両手で顔を覆いかけた彼女に、シャガルが慰めの言葉をかける。

「ピオラ、落ち込むことはない。……今回は相手がちょっと悪過ぎた」

「……でも。……う、……ぶふっ」

再びピオラがシユイの腕の中で咳き込んだ。喉に痞えていたと思われる胃液が、閉じかけられていた口元から飛び散った。黄色い飛沫がピオラの顔、或いは抱えているシユイの腕に跳ねた。

「ピオラ！」

「……う、うっ」

醜態を晒す自分を恥じているのか、強い吐き気と酸味に涙腺が刺激されたのか、ピオラの紫色の目から涙がぼろぼろと零れ落ちた。

遅れて、酸味のある匂いがシュイの鼻を突いた。微かに吐き気を催したが、鼻で息を吸わぬようにしてそれを鎮めた。

「……一旦全部吐かせた方がいいな。気管支に入ったらまずい」「ちよつと先に外に出てますね。アミナ様はこれを……」

シュイは懐から清潔なハンカチを取り出し、アミナに差し出した。アミナは一瞬キョトンとしたものの、直ぐに思い至ったようだった。顔に牧師の血と肉片がこびり付いていたのだ。

「あ、ああ。……すまぬ、気が利くな」

アミナはおずおずと、差し出されたハンカチを受け取った。

外の芝生でピオラの小さな背中をさすりながら残りの胃液を吐かせる。

「思ったより量が少なかったな。教会の中で殆ど出ていたかな」

「……ん」

ピオラは膝に手を乗せてゆっくりと立ち上がる

「お、おい。まだ動くのは早いぞ」

「……大丈夫……う」

膝を伸ばした途端にがくと折れ、ピオラが後ろに崩れ落ちる。

シュイが慌てて腕を伸ばし、ピオラの背中を下から支えた。

「ふう、あまり無理するなって」

「……ごめん……ふぁ！」

そのまま膝の裏に手を入れられ、両腕で抱え上げられた。ピオラは悲鳴に近い声を発した。

「……や、ちよつと」

「はいはい、怪我人は大人しくね」

抗議の声を意に介した様子もなく、シュイは膝をゆっくりと伸ばして立ち上がった。そして

「ごめんな」

「……え？」

聞き違えたのかと思ったのか、ピオラは不思議そうにシユイを見上げる。

「ピオラが殺されかけたのは、俺が躊躇ためらったせいだ」

「……躊躇ためらったって？」

シユイは己の背負う鎌を肩越しに見つめた。

「……大毒蜂を倒せたから、もう対人戦も大丈夫だと思っていたんだ。こんな如何にもな武器を携えておきながら、いざ人を相手にしてみたら動きが縮こまってしまった。情けないよな」

シユイは守勢を余儀なくされたことを恥じていた。黒糸の男は自分たちよりも明らかに格上だった。たとえ自分が殺さずとも、確実に生き延びるには誰かがあの男を始末せねばならなかった。結果として、罪悪感を感じたくないという身勝手な思いが動きに制限を課した。それが敵の行動を容易にし、ピオラが大ダメージを負う要因を招いてしまった。

最終的には辛うじて切り抜けられたものの、シユイにしてみればアミナに責を全て押し付けた形だ。勝利とは程遠かった。何より、過去のトラウマを克服できていないことに落胆した。

顔を伏せるシユイの裾を、ピオラが強く握り締めた。

「……大丈夫」

「……え？」

「……次がある」

「そ、そりゃあそうかも知れないけれどさ」

「……今度、ちゃんと守ってくれる」

上目遣いをするピオラがやたら色っぽく見え、シユイは身体を一瞬震わせる。

「……ふふ、冗談。……今度は私が守る」

「……ええ？ 俺、ピオラに守られるの？」

一回りトーンの高いシユイの口調に、ピオラの細い眉が跳ね上が

った。

「……………どういう意味！」

「あ、ああいや。あ、皆が来たよ、ほら　ゲホッ」

教会を指差した途端に至近距離から肘打ちを浴びせられ、シユイは堪らず胸を抑えた。

「じ……………、事実なのに……………」

「……………誤魔化す人、キライ」

その翌日。フォルストローム軍の綿密な搜索により、教会の隠し倉庫から調香具が発見された。牧師は殺されてしまったものの公民館から警報を流した職員が緊急逮捕され、彼らの悪行の全てが明るみにされた。他に仲間はいないということで、軍に内通者がいるのでは、という予想は杞憂に終わった。

殺された牧師は、以前からちよくちよく身よりの無い信者に死後寄付をさせるよう約束を取り付けてから自然死に見せかけて殺し、私腹を肥やしていた。いずれ不審に思われると予想は付いていたので、一気に荒稼ぎしてからきっぱり足を洗おうと考えたらしい。

何か方法がないかと考えた結果、大量に発生したと聞き及んだ蜂を利用した殺人を思いついたということだった。金と引き替えに協力をもち掛けられ、計画に加担した職員に対しても近日中に死刑が執行されるとの事だった。フォルストロームの裁判は非常にスピーディで、冤罪、若しくは酌量の余地がない限りは遅くとも半年以内にケリがつくそうだ。

「やれやれ、とんだ大騒動だったなあ」

ピエールは疲れた顔をしていたが、言葉からは達成感が滲み出ている。任務放棄の雪辱を即座に果たせたこともその一因と思われた。今回の事件を迅速に収束させた功績に対し、フォルストロームからは四人に感謝状が送られることになった。また、ギルドの方でもA級任務の達成に値する大幅なギルドポイントの加算が決定した。昇格に関わるポイントらしく、二人共にBランクに大幅に前進したと言っただけそうだ。

「まあ、すっきり解決したわけじゃないけれどな」

牧師の件は片付いたものの、自爆した男たちの企みまで明るみになったわけではなかった。もう一人、アミナが先に倒していた男も翌朝息を引き取ってしまった。検死の結果、胃の内容物からは解けかけたカプセルが発見されたい。解剖に立ち会った医者の話では予め毒を飲んでた可能性が高いということだった。彼らが所属する組織の秘密保持のため、撤収が完了した時点で解毒剤を飲むような方策を取っていたのでは、というのがアミナの意見だった。被疑者死亡に終わったその件については、フォルストロームの軍部が引き続き調査を行うということだった。アミナを始めとして優秀な者たちが集まっているため、遠からず明るみになる日は来るはずだ。

シャガルはピオラの回復を待つてから、ルクスプレトンのギルド本部に報告に行くとのことだった。海を隔てた遠い北の地、再び会える日が来るのかはわからなかった。

「シユイ、おまえはこれからどうするんだ？」

シユイは聳え立つ長老樹をゆっくりと見上げ、目を細める。

「依頼を受けながら、世界中を旅してみると見上げ、目を細める。に助けられっ放しだったし、つくづく自分の非力さを痛感した。もっと強くなりたいのは勿論、学ばなければならぬことも多すぎる。次はフォルストロームの王都にでも行くつもりさ」

今回の一連の騒動に関しては反省しきりだった。アミナとの力量の差を感じ取ったのもそうだが、もし初めからフェロモンや蜂の特性のことを知っていたいれば、もっと早くに牧師を疑う事も出来たはずだった。そうすれば迅速な解決も不可能ではなかっただろう。

キャノエの西方、フォルストローム王都には大陸有数の図書館が存在する。そのことをシャガルに教えてもらったシユイはそこで知識を蓄えたいと考えていた。

「そっか、そんなら名残惜しいけれどここでお別れだな。俺はおまえとは逆にあつちの方から来たから、一旦ホーヴィに戻ることにするよ。ちょっと悔しいけれど、俺も今のままじゃ命がいくらあっても足りないことを痛感したし、一から鍛え直すことにする。今度はお前にも負けないくらい強くなっておくぜ」

「わかった、楽しみにしているよ。……それにしても、ホーヴィでお前に絡まれた事がまるで大昔のようだな」

「ははは、全くだな」

二人は顔を見合わせ、微笑を交わした。嫌味が一切含まれない清々しい顔だった。

爽やかな夕暮れ時、僅かに湿り気を帯びた風が吹き、二人はどちらから、ということもなくお互いに右手を差し出した。

「じゃあなシユイ。またどこかで会おうぜ」

「勿論。それまで生き延びろよ、ピエール」

二人は長老樹の下で硬く握手を交わし、互いに違う方角へと、振り返ることなく歩み始めた。シユイの影が伸びていき、ピエールの影が縮んでゆく。それを見守るように、キャノエの長老樹は夕陽にその葉を煌かせ、やがて来る闇の訪れを待っていた。

## 第十一章 くランカー（1）

「ハッ、ハッ、ハア」

黒衣の男が石林の間を縫うようにして必死に走っていた。赤髪の女性がそれを追うように、風を切るように飛翔しながら魔法を開始する。

「ちょ、ちよつと待ってよ！ あれにはわけが ハア」

シユイは走りながらも視線だけを後ろ斜め上に向け、必死に弁解しようとしたが、言葉が続かなかった。全力疾走しながら喋っているのだから当たり前だ。

「男の子が言い訳なんて見苦しいよ。 そりゃ！」

ニルファナが手を振り下ろすと共に、直径5mはあるつかという氷の塊が瞬時に生成された。詠唱破棄された魔法の氷が大地を走るシユイへ勢い良く放たれた。あんなのに当たったら凄く重そうだ。

阿呆か！ 重さを感じる前に死ぬるだろ！

「うわわわわわわ！」

行く先に逃げ場がないと悟ったシユイは慌てて百八十度方向転換した。

ドゴツ スゴツ ドドンツ

書類に次々と判を押す勢いで絶え間なく氷塊が振ってくる。地面にぶつかる度、破碎した氷の破片が後頭部にビスビスと当たる。フードがなければそれだけでも血塗れになりそうだった。

「痛つ…… あ痛い！ ちょつ、殺す気ですか！ …… って、うわわわわー！」

不意に自身を覆った巨大な影に気付き、前のめりに身を投げ出し、



ヘッドスライディング。間一髪、氷塊の落下領域から逃れる。だがその前方には、いつの間に地に降りていたのか、仁王立ちするニルファナの姿があった。不意に黒いスカートが風で巻き上がりそうになり、シユイは慌てて視線を反らした。死の香り漂うこの場においては律義とすら言えた。

「シユイー。一月も経たないうちに正体を見破られるなんて、どーいう了見なのかな！」

びっと人差し指をシユイに向け、ニルファナが言い放った。責めるような口調だった。

「ハッ……ハッ……ちょ、ちよつと……待つてよ。息が……」

喋っている最中、氷の槍が空から降ってきて鼻先を掠めた。突き刺さった部分から土がパキパキと凍りついていく。身を支えている手まで凍りつきそうになり、慌てて跳ね起き、尻を地に付けたまま後ずさりする。

「お姉さんが質問している時はしやしやしき答える！」

む、無茶苦茶だ。い、いつもだけど。……そ、そうだ！ 念話！

この上ない良案を思いついたシユイは直ぐにニルファナに念を送る。

>だから、これにはわけがあるんですつて！<

「……強情な、まだ黙っているつもりか。そんな子に育てたつもりはなかったのに。お姉さん悲しい、悲し過ぎるよ」

ニルファナは酌量の余地なし、と言わんばかりに首を振った。赤い長髪がゆらゆらと左右に揺れた。

あ、あれ。おかしいな。

>ちょ、ちよつと待つてくださーいよ！ あれは獣姫様に詰められて仕方なく、ですね <

「もーいー、どーやら見込み違いだったみたいだね。ボロが出る前にお姉さんの手で終わらせてあげる」

シユイの顔から血の気が失われた。どういわけかはわからない

が、兎に角念話を通じていなかった。気象条件が悪いわけではないし魔力だって足りていたが、きちんと行使できぬ以上何かがおかしいことだけは確かだ。

「まつ、……ハア、ちよつと……待ってください」

喉がひりついて言葉がまともに出ず、唾を飲み込んで湿らせようとすする。そうしている間に

な、何の冗談だ。

ニルファナの身体がみるみる内に巨大化していった。一瞬幻術かと疑うが、近くに感じている気配がどうにも説明を付けられなかった。

「さよならシユイ。君の事は忘れないよ……多分！」

10m程に巨大化したニルファナは、周囲に木霊する大音量でそう言い放つ。シユイの頭上にはスカートの中が丸見えだったが、そんなことに気を取られている余裕は全く無かった。

「た、多分つて……待つてよ」

巨大な手が振り上げられ、シユイに向かって

「ニ・ル・ファ・ナ・チョーップ！」

無慈悲に振り下ろされた。

「……まつ　　うわあああああああ！」

枕に頭を預けていたシユイの<sup>まいた</sup>瞼がカツと見開く。

「うわっ！」

聞き覚えのある高い声が聞こえたような気がした。次の瞬間強烈な一撃が見舞われた。

思わず額を押さえ、呻き声を上げ、もんどり打った。シユイが布団の上で怪しげな踊りを披露している傍ら、枕元に座っていた赤髪の女性が何故か腹を立てている。

「び、びっくりするじゃないか！　いきなり目を開くなんて！」

聞き覚えのある声が耳に届き、遅れてやっと頭がはっきりしてく

る。目の前の人物を見、涙目のシユイは額を擦りながら口を開く。

「……二、ニルファナさん？ ……あれ、僕……生きてるの？」

ネジ回して少しずつネジを締めるかのように辺りを見回す。自分が掴んでいる白い掛け布団。床には滲み一つない黄緑色の畳がある。緑色のレースカーテンは左右共に閉められているが、光を含んだその色合いは既に世が明けていることを示していた。

「そーだよ、寝ぼけてるの？ 酷いなあ、いきなり驚かすんだもん。お姉さん反射的にチョップしちゃったじゃないか」

「……ああ、夢だったのか。……良かった」

道理で念話を通じなかつたわけだよ。

暴力を見舞われた理由は相も変わらず理不尽だったが、僅かに生まれた怒りもそれより強い安堵感に飲み込まれていった。魔まされていたせいだろうか、額から頬にかけて汗が滴っている。以前より大分伸びている前髪がびったりと肌に貼り付いている。シユイはそれを左右に選り分け、良好な視界を確保するとニルファナに向き直った。

「……で、何でニルファナさんがここにいるんですか？ 僕、ちゃんと鍵掛けたんですけど」

口調が傭兵になる以前のものに戻っているのにも気づかず、シユイは額を擦りながら訊ねた。まだ多少頭の中が混乱しているようだった。

「何だか暢のんき気だなあ。君に忠告するためにわざわざ来てあげたんじやない。駄目じゃないか、火傷なんて古典的な手を使うなんて。それじゃあ疑いをかけられるのも無理ないよ」

「……あ」

疑いと言われ、シユイはやっとニルファナが来た理由に思い当たった。先程の悪夢がまざまざと脳裏に蘇ったが、それよりはニルファナに対する罪悪感が勝っていた。

「そっか、アミナ様に会ったんですね。……その、ごめんなさい」  
あまりの申し訳なさに口を噤み、頭を深く下げた。教会でアミナ

に会った時にはその話題に触れられなかったため、上手く誤魔化し切れたかと考えていたが、やはりそんなに甘くはなかった。万が一、正体が明るみになればニルファナの立場とて非常に危うくなるのだ。恩を仇で返す行為はシュイが最も毛嫌いしていることだった。

落ち込んでいるシュイに対し、ニルファナは先程よりも少しだけ声を和らげる。

「ほらほら、男の子が軽々しく頭を下げないの。幸い、というか多分顔がばれても、アミナちゃんなら平気だったと思うけど、黙っていてくれるって約束してくれたから。あの娘、約束は破る子じゃないからそこは安心して良いよ」

それを聞いてようやくシュイの表情が明るくなった。少なくとも、ニルファナに迷惑がかわからないことがわかっただけでも朗報だった。「はい、以後気をつけます」

「宜しい。でもね、わざわざ会いに来たのはその件だけじゃないんだ。凄いじゃないシュイ、キャノエに立ち寄った時に聞いたよ。フォルストロームから勲功授与されたんだって？」

「え……ああ」

そんな事はすっかり忘れていたという顔のシュイを見て、ニルファナは花が咲いたかのように微笑んだ。

「いやあ、推薦したお姉さんも鼻が高いよ。あ、勿論君ならやっていけるとは思っていたけれどね。それでもまさか、傭兵になって一月もしないうちにA級に類する任務をこなしちゃうなんてさ。これからも無茶しない程度に頑張りなさいね」

シュイは目を瞬瞬いた。ニルファナに出会ってから、おそらくは初めて手放して褒められた瞬間だった。

「あ、ありがとうございます！」

込み上げる嬉しさにシュイは満面の笑みを浮かべた。髪が大分長くなっているせいか、少女のようにも見えた。

うーん、愛愛い奴。……それに、前よりは少しばかり立ち直っているみたいだね。

ニルフアナはまるで愛玩動物でも見るように目を細めた。

「……あれ？　そう言えばニルフアナさん、どうやってここに入ったんですか？」

シユイは先ほども気になった事を尋ねた。寝る前には確実に鍵をかけていたはずだった。

「ん？　ああ、宿のマスターキーを拝借したんだ。色々考えたんだよ。ドアノブ溶かすとか、窓ガラスに穴空けて鍵を開けるとか。でも、後始末が面倒じゃない？」

拝借と聞いてシユイの顔色が青褪めた。今頃フロントの方で大騒ぎになっているのは想像に難くなかった。

「ノ、ノックしてくれればいつでも開けたのに」

「いやー、寝ているところを起こすのも悪いかなと思ってさ。それに、久しぶりにシユイの寝顔を愛めでようとか思ったりなんかしてね？」

その言葉が脳内のフィルターを通り過ぎるのに五秒ほど要した。次の瞬間、シユイは顔を思い切り紅潮させた。

「は、恥ずかしいからやめてくださいよ！」

「たっぷり三時間くらいは堪能させてもらったからお姉さんも大満足。そう言えばさあ、寝言で」

もう聞きたくない。

両の耳を手で塞ぎ、目をぎゅっと瞑る。だが、それすらも無駄な抵抗だった。

> 脱がしたんじやないよ。脱げちゃったんだよ<

頭に入ってきた声に愕然がくぜんとして目を開ける。ご丁寧ごていねいに念話で伝えてくれたニルフアナの満面の笑みを見て、シユイはどうしようもなく泣きたい気持ちになった。

出発の準備を整え、二人が宿のロビーに行くとき案の定、従業員たちがあたふたしていた。既に鍵受けにマスターキーがない事に気づ

いているようだった。

>それにしても、ここの管理はなってないねー。普通はマスターキーなんて、ちゃんと鍵付きの引き出しにしまうものだよ？ 物取りに盗まれたらどうするつもりだろ<

ニルファナは思慮深げに首を振る。

>……盗んだ人が言わないでくださいよ<

シユイは溜息を吐き出した。

>まだ怒ってるの？ もっと心を大きく持とうよ<

>どーせ僕の心はちっぽけですよ。……ていうか、どうやって戻すつもりですか<

>それは勿論、こーやって！<

ニルファナは持っていたマスターキーを素早く後ろ手の状態から上にポーンと放り投げ

「すみません、チエックアウトお願いしますー」

そのまま明るい声で受付の従業員の気を引いた。

「あ、はい。ただいまー」

従業員がニルファナの方にいそいそと駆け寄って来た。その間にホルダー付きのマスターキーは急な放物線を描き、鍵受け目掛けて落下する。素晴らしいコントロールだが、幾らなんでも音ではれるんじゃ。シユイが肝を冷やしたその時

鍵が落下する速度が急激に遅くなり、僅かにチャリツという音を発しただけで、ホルダーがフックに引っかかった。勿論それくらいの音では、受付は振り返る素振りも見せない。シユイは自分の見た光景が信じられず、パチパチと瞬きを繰り返した。

>な、何やったんですか？ 時間に干渉した、とか？<

>ん？ そんな大それたことするはずないでしょ。あの地点に絞って無詠唱魔法で上昇気流を起こしたただだよ、シユイも念話出来るくらいだし、練習すれば出来ると思うけど<

事も無げに応じるニルファナだったが、顔色を全く変えずに集中力を要する詠唱破棄魔法を行使出来る使い手など探してもそうそう見つかるものではない。さり気なく規格外の力を扱えるのだから、その力は推して知るべしだ。

「ご利用ありがとうございます、またお越しくださいますせ」

お騒がせさせて本当、ごめんなさい。

心の中で深々と詫びながら、シュイはニルファナと旅館を後にした。

## 第十一章 〱(2)〱

なだらかな傾斜の山道をのんびりと歩く。路傍の叢には白髪頭を出しているタンポポがちらちらと見受けられた。

時折ニルファナの方を向くと、彼女が必ずと言って良いほど自分の方を向いているのでどこかくすぐったく感じられた。

「それで、これからどうする気？ 何かあてはあるの？」  
訊ねられたシユイは考えていた事をそのまま口にする。

「依頼をこなしながら世界中を回ってみようと考えているんだ。まずはフォルストロームの王都で勉強でもと思っているんだけど、その前に近場のレムザ大聖堂に寄り道しようかと思って」

レムザ大聖堂はレムース教徒たちの総本山だ。元々聖堂は違う位置に建てられていたが、300年前のジュアナ戦役によって完膚なきまでに破壊され、険しい山の奥に居を移したと言われている。標高7000mという世界最高峰の山の頂に見守られ、その建物は神々の加護によって守られているという話だ。

「大聖堂か。確かにあれは一度見て置く価値あるかも」

「その言い回しからすると、ニルファナさんはもう行った事があるんですね」

「うん。まあ、ねえ」

おや、と思った。ニルファナの歯切れが悪い事などそうそうあることではなかった。だが、表情を伺うと、別段いつもの彼女と変わらないように見えた。ポーカーフェイスを貫く彼女の感情を読み取るのは至難の業だ。

「とりあえず、城下町まで一緒に行くよ。たまには歩くのも楽しいし」

「そ、そうですか」



「あれ、あんまり嬉しくない？」

「そ、そんな事はありません！」

嬉しいような、おっかないような。そう、手放しでは喜べない、とても言うべきだろうか。

「そういえば話は変わるけどさ。シユイってアミナちゃんに何かした覚えある？」

「え、何かって何です？」

何かしたかと問われれば何かしたんじゃないかと不安にもなってくる。シユイは宙に視線を向けて記憶を懸命に辿る。

「うーん、何と言うかね。君に抱いているのは疑いだけじゃないよ。うな気がするんだ」

「それだったら、フォルストロームへの貢献に対する感謝の気持ちとか」

「それとも違うかな。何て言うんだろう。彼女って個人の話題を口にするのが滅多にないからさ。取るに足りない人なら尚更だし」

さり気なく酷い事言うんだよな。

シユイはフードの奥で少し膨れっ面になる。

「それなのに、疑いが晴れた後も君の事に付いて色々訊いてきたからおかしいなーって思ってたさ。だから、もしかしたら彼女の印象に残る様なことをしたのかなーって」

「うーん、ちょっと記憶にないです。結構飲まされてあまり覚えてないんです」

疑いを掛けられたところでそれを晴らすと必死に弁明したことは間違いなかった。が、エリクに慣れない酒をたくさん飲まされたせいか会話の内容までは思い出せなかった。

「そっか、それならいいや。酔っていたならそんな気の利いた事、言えないはずだしね」

気の利いたことって何だろう、と首を傾げるシユイを尻目に、ニルファナは前を向いた。

それなりの高さまで上つてくると、進行方向の右手には剣山が見え始め、逆に左手の崖の下には大森林が望める。このまま進むとレムザ大聖堂　の前にレグゼムという小さな町があるはずだ。

そこは絶滅した翼族ガルガリンの町で、その名残として玄関が複数箇所設けられている家が多い。いちいち地上に降りなくても家に入るといふ親切設計というわけである。中には一階に入口がない物もあるが、そういった家にはちゃんと二階から入れるように階段が取り付けられている。

「ニルファナさん、レグゼムにはシルフィールのギルド支部ってあるの？」

「流石にないよー。あそこは町って言うよりも村に近いしね。フォルストロームの王都に行けばちゃんとあるけどさ」

「王都か。そこにシルフィールの本部があるの？」

「ニルファナは手を振り上げかけ、シユイが身を竦すくませたところで引つ込めた。

「あ、やっぱ言っただけだったか。ギルド本部は首都に作ってはいけないという暗黙の了解があるんだよ」

「へ、へえ。どうしてなんだらう」

危なく勘違いで殴られるところだったようだ。シユイはホツとし、次いでムツとした。

「どうしてだと思う？　自分なりに考えてみて」

「あ、はい」

首都は殆どの国で最多の人口を誇る場所であるが、国の中枢であるから何事が起きた時には被害も一番大きくなる。ギルドと言えば響きは良いが、やや斜めから見れば単なる戦闘集団だ。それを懐に招き入れるにはそれなりのリスクが発生する。

「多分だけれど、その国に対して在らぬ疑心や危惧を必要以上

に抱かせないため、かな？」

「なるほど、良い解答だね」

お褒めの言葉にシユイは少し誇らしげに胸を張る。別に今回だけが特別というわけではなく、シユイはしばしばある物事について自分なりに感じたことをニルファナに訊ねられていた。

「概ね正しい。もう一つ付け加えると、ギルド同士の抗争をむやみに誘発しないようにするためでもあるんだ」

「良い餌場の取り合いを防止するってこと？」

「そうそう、そんな感じだね。と言っても、共通クエストは公民館で受けられるからそんなに不自由はしないけれど。仮にギルド同士の抗争が起きたら、どちらかの本部が潰れるまで止まらないこともままある。そんな時、国のお膝元で殺し合いってことになったら巻き込まれる人が大勢出るでしょ」

シユイは二人のニルファナが相争う姿を想像し、重々しく頷いた。どう想像したところで大惨事だ。

「でもさ、ギルドって申請すれば作れちゃうものなの？」

「それは国に寄るかな。主要の四力国ならそれなりの武力を備えているから必要以上に戦力を囲う必要はないし、さつき説明したようになりスクもあるから許可は出さない。でも、小国なら出すことも有り得る。他の国への示威目的だね」

「……そういうことか」

つまりはギルドを国の戦力として囲い込み、他国に攻め込まれないように威嚇するということだ。ただ、必要以上に力を持つと逆に警戒させることもあるだろうから、その辺の兼ね合いは難しそうでもあった。

レグゼムの建物、三角形の屋根がちらほらと見えてきた。崖の切れ目まで差し掛かると真っ直ぐだった道はV字に分かれており、道の途切れている先、谷の部分には幾つもの円筒形の建物が建っ

た。普通の町と違って高低さを活かした作りになっており、至る所に交差する吊橋が見受けられる。

二人は右側の道を進んだ。左側に目新しい町を望みながら、今度は緩やかな坂を下っていく。

「シユイは、今何か依頼を受けているの？」

「あ、ええとね。ある企業の公文書の郵送依頼を受けて あだいつ」

不意に脇腹をぎゅっと掴つねられ、シユイが大きく身悶えた。

>シユイー、秘密文書の郵送は口に出しちゃ駄目だよ<

シユイは痛みに堪えながらぐくぐくと何度も頷いた。訊いてきたのはそつちじゃないか、という念話を返すのを何とか堪えた。

「二、ニルファナさんの方は何か依頼を受けているんですか？ そういえば、ホーヴィで別れた時、南の方に用があるって言っていましたね」

話題を振ることによってニルファナの手からようやく解放され、シユイは怯えるようにしてニルファナと少し距離を置いた。

「お、偉いなあ。良く覚えてたね、お姉さん嬉しいよ。どこにいてもシユイはちゃんとお姉さんの事気にしてくれているんだね」

「……ま、まあ」

彼女の言い分はあながち間違ってもいないが、こうもストレートに喜びを表現されるとシユイとしてはどうしても照れてしまう。或いは彼女はそこまで先を読んだ上で、敢えて仕向けているのかも知れなかった。

「その件に付いてお答えしようか。実はタレコミがあつてね。キャノエの近くに小さい港町があるんだけど、そこにある物が持ち込まれたって噂を確かめにいったんだ。S級の緊急クエストだね」

「確かめにいくだけでS級任務？ 一体何が持ち込まれたの？」

「>神獣殺しくと言われている希少な毒の果実だよ。極北の秘境に生息する樹から何年かに一度採れるんだ」

「……何だか物騒な名前だね」

「名前だけじゃなくて効果も相当物騒だよ。見た目は真っ白なパブリカみたいで可愛らしいんだけど、強靱な生命力を持つ竜ですらあれを飲み込んだら無事ではられない。死に至る事がなかったとしても苦しみにのたうち回り、怒り狂うだろうね」

「……何のためにそんな物を持ち込んだんだろう」

そう訊ねてはみたものの、シユイは漠然とその理由を察していた。大毒蜂の騒動とタレコミのあった時期が重なっているのは偶然の一致とは思えなかった。

「そう、正にそれが問題。仮にシユイが悪人だとして、そんな実を手に入れたら何に使う？」

「……えっと」

「ああ、漠然と悪人と言われてもわからないか。じゃあ、敵対国に所属しているとして国家転覆を狙うとしたらどうする？」

ニルファナの言葉の意味を考え、ややあつて背筋がぞくりとする。フォルストロームに仇成すことを目的とするならば自ずとやる事は絞られるが、浮かんだ考えのどれもが非人道的なものだった。

「……人に使う事も考えられるけど、それだと他者の悪意に寄るものだと直ぐに察知されるよね。原因を有耶無耶にしつつ国を疲弊させるなら、有名な森竜とか、フォレスト・トラゴン他の強い生命力を持つ獣に飲ませて暴れさせるとか。それなら死ぬことはなさそうだし」

神格化される程の魔物にそれを上手く飲ませて怒り狂わせれば、国は容易に滅茶苦茶になるのではないか。いつの間にか、自分がそれを己の目的に当て嵌めようとしているのに気づき、シユイは慌てて頭をブンブンと振った。

「そうだね。その可能性もあつたかな、と思ってる。もっとも、そういう生き物は人を遙かに超える知能を持っているからそう簡単にはいかないだろうけれど」

「それで、賊の方は見つかったの？」

「一応ね。実の方は破壊出来ただけだけど、賊を一人逃しちゃった」

「……逃げた？ ニルファナさんが？」

シュイの声には相当な驚きが含まれていた。彼女から逃げ切られる人間がこの世にいるとは思えなかったのだ。

「そりゃ、私だって無敵ってわけじゃないからね。準ランカークラスの敵が二人混じっていたことを鑑みれば上々の結果だと思ってるけど」

「え！……準ランカーが二人つて、怪我とかしなかった？」

「んん？ もしかして心配してくれているのかな？」

「そりゃそうだよ！」

「そっか。嬉しいなあ」

人の気も知らないで照れ笑いを浮かべているニルファナに、シュイは僅かな憤りを感じた。

「……はぐらかさないで答えてよ」

「大丈夫。掠り傷は負ったけど、それくらいだね」

「見せて、どこに負ったの！」

「いやー、シュイったら意外と大胆になったなあ。寝言でもなしに、こんなところでお姉さんに脱げって言うなんて」

「……え？」

「相手の攻撃魔法が左胸の辺りをちよつと掠めてねえ。でも、シュイが見たいと言つのならお姉さんは異存ないよ。じゃあしっかり確認してね」

そう言い、おもむろにニルファナは着ていた水色のブラウスのボタンを外し始めた。

「……ちよ、ちよつと待つてよ！　　うわ！」

ニルファナが両手をバツと開いたのを見て、シュイは慌てて両手で顔を覆った。が、しばらくしても何の反応もないので恐る恐る指に隙間を作つて覗いてみる。目に映つたのはお腹を抱えて声も出せないくらい笑っているニルファナの姿だった。

「……ひ……くく。あつひっ……はは……」

「……キャミ、ソール？」

ワンピースの下には、胸にリボンの付いている黒いキャミソール

があつた。だが、シユイにとっては「だからどうした」と言うところだ。シースルーだって立派な下着である。通行人たちが顔を赤らめ、立ち止まったり足早に通り過ぎているのを見て、シユイは両手で頭を抱えた。

「か、可愛いなあほんと。私だってねえ……ぷぷ……公衆の面前で素っ裸になるほど落ちぶれちゃあいないよ。まあでも、シユイがどうしても確認したいなら今夜宿に泊まった時にでも」

「早く着直して！ その格好だって十分恥ずかしいってば！」

こんな、ペースが乱されっぱなしの状態でも王都まで行くのか。シユイは重い溜息を一つ、ニルファナに悟られぬように留意した上で吐き出すのだった。

## 第十一章　く(3)く

黙々と山道を登っていくと、強い吹き下ろしの風音に混じってどこからか荘厳な音が響いてきた。坂を登り切ると、奥の方には白塗りの壁に囲まれた、お城のように大きな建物があつた。建物の頭頂部には細長い石柱が並んでおり、その隙間から金色の鐘が見えた。鐘を囲む柱の上に蓋をするように、円錐の白い屋根が取り付けられている。

まだ八月半ばだったが、山頂部には涼やかな風が吹き、秋の気配が漂い始めている。土肌の山道が途切れ、人工の、様々な文字が彫られている灰色の石板が嵌めこまれた道が奥まで続いていた。

神殿の背後に佇むのは世界最大級の山脈、オーギユス。失われた言語で、高みに在らんくという意味らしい。

「うはあ、随分と立派な建物だね。こんな高いところまで資材を運び込んで、大変だっただろうなあ」

一体いくらくらいかかったのだろうか。シユイは半ば感心し、半ば呆れつつも見た目には美しい建築物を舐めるように見渡した。

「そうだねえ。でもさ、シユイ。これって全部レムース教徒の寄付金で作られているんだよ」

「へえ、そうなん……え！」

驚き振り返るシユイに、ニルファナは肩を竦めてみせた。

「御覧の通り立派で綺麗な装飾も施された建物は世界中見回してもそうはない。だから見ておく価値はある。ただ、それ以上の価値はないよ。こんな山奥に作られても巡礼する信者さんが困るだけだよ」

「……う、うーん。確かに」

「なのに、こここの聖堂を訪れないと真のレムース教徒とは言えず、



なんて平気で嘯うそいているんだからお笑い草だよね。そんなこと言ったら足や腰を悪くしている人は皆信者失格になっちゃう」

ニルファナの指摘はもつともだった。救いを求めている人の金で立派な建物をこんな僻地に作ってしまうとは、確かに少々異常な事とも思える。特定の人にしか恩恵を享受させぬ建物を作るのはどう考えても効率的ではないのだ。これは宗教に関わらず、国や自治体等が建てる、所謂箱物にも通じることだが。シユイは先ほどニルファナが言葉を濁した理由わけがわかった気がした。

「で、それは兎も角。ちよつと後ろを見て御覧」

「え、後ろ？」

シユイは首を傾げながらも、自分達の登ってきた山道を振り返り「……うわあ」

今度こそ、混じり気のない感嘆の息を吐いた。

登って来る時には気付かなかったが、レグゼムの谷の全景を見渡すと、その菱形の谷がまるで眼のように見えた。建物が中央に密集しているのは瞳を表しているのだろう。

「……気付かなかった。これ、計算して作っていたのかな」

「きつとそうだね。空を飛べる翼族ガルガリンだからこそ、上から見える景觀にも拘くわったんだと思うよ」

「そうだよ、凄いなあ。これを見ることが出来ただけでも来た甲斐があったよ。教えてくれてありがと、ニルファナさん」

「ふふ、どういたしまして」

ニルファナは褐色の眼を細めた。

それでも一応、ということと二人は神殿の中に入ることにした。銀箔が施されたアーチ門をくぐる。入口には受付が何人がいたが、シユイとニルファナを見るとにこやかに挨拶した。

「いらつしやいませ。世界に名高きレムザ大聖堂へようこそ。こちらで入館料を取っておりますので先にお納めくださいね」

自分で世界に名高きとか言っちゃう辺り、世俗臭に塗れているよなあ。

シユイは感心しながら、受付の一人がよたよたと持ってきた木箱に目を映した。かなり重そうなその箱は、縦に振ればさぞかし濁った音がするだろうと容易に想像が付いた。

「入るだけなのにお金取るの？」

不満そうに訊き返したシユイに対し、受付はあくまで丁寧に応じた。

「申し訳ありません。風雪の強い地域なので施設の補修にお金がかかりますまして、あくまで維持するための費用のみ徴収させて頂いております」

苦笑いを浮かべながらもへこへこする受付を見て、シユイは以前どこかで似たような人種を見かけた気がした。

そうだ、思い出した。ケセルテイガーノから来ていた行商人に違いない。

「あー、まあそういうことなら仕方ないね。いくらくらい？」

「7000パーズでございます」

フードの奥で、シユイの顔があらさまに変わった。良心的な宿なら二食付きで泊まれる値段だ。周りの受付では渋々といった様子で払っている旅行者が見受けられた。

「以前、お姉さんがここに来た時より2000ほど上がっているんだけど？」

ニルファナが口を挟むと、受付の言葉が詰まった。

「も、申し訳ありません。つい最近、料金の改定がありました」

「あっそあ。さっき補修とか言っていたけれど、具体的にどこをどう直したのか教えてくれるかな？」

「え……あ、いえ、それはその、担当者が違いました、詳しく訊いてみないことには、ですね」

どもる受付の返答を聞くにつれ、徐々にニルファナが不機嫌になっっていくのがシユイにもわかった。

「何だかなあ。この分じゃレムース教も長くなさそうだねえ」  
「なっ」

ニルファナのはきはきした声が響き、周りにいた旅人と受付の視線が一斉にこちらを向いた。

「シユイ、行こう。この中にそれほど価値のある物はない」

「ちよつと！ 営業妨害は困りま」

「は、営業？」

鼻で笑うニルファナに対し、受付はしまったという顔をした。

「ほらね、シユイ。御大層な事言ったって、所詮この程度の低俗な連中が管理している施設だよ。レッドフォードから話は聞いていたけど、正直これほど酷いとは思わなかったな」

周りの旅行客にも漏らさず聞き取れるように、ニルファナは声を大にしてそう言った。

「お、おい！ 衛兵！」

堪りかねたのか、他の受付が大声を上げた。直ぐに奥から六人の鎧を来た宗教騎士が現れ、ニルファナとシユイを取り囲んだ。

「レムザ神を侮辱しに来た不届き者だ。少し痛い目に遭わせてやれ」  
そういう話だったつくとシユイは溜息を吐き、次いで騎士たちを睨む。その一方で周りにいた旅人たちは関わり合いになるまいと、払い終えた者は施設の中に、未払いの者は外に撤収していく。

「シユイ、ちよつと」

「ニルファナさんが出るまでもないよ」

シユイは一步前に出るとゆっくりと背負っていた鎌を降ろし、布を取り払いかけ

「はぐっ」

後ろから殴られた。

「な、何するのさ！」

「こついった建物内では刃物は禁制なの。やるなら武器なしでやりなさい」

「あ、ああ。そういうものなのか」

しょうがなくシユイは鎌を床に置き、拳を構える。ただ、体術のみで六人を相手にしたことはない。視点を視界に変化させ、目に映る全体を見渡す様に相手を捉える。

おもむろに、一番端にいた騎士が襲いかかってきた。鉄甲に覆われた手を上から振り翳して来るのを見て、シユイは迷わず前に進む。相手の拳を掻い潜ったところで手を鎧の腹の部分を抑えるようにして、言霊を紡ぐ。

「>絡み付くは雷の蛇く」  
ライトニング・リロード

鎧に青い電流が走り、それを身に付けていた男が電撃で悶えた。

そのままシユイは添えた手を軽く押す様にしてその男から離れると、男は背中から後ろに倒れ込んだ。

「おー、大分決断力がついたね」

「こ、この野郎！」

感心するニルファナを差し置いて今度は両脇から同時に向かってくる。左側の騎士が放った拳が頭部を捉える直前、シユイは相手の手首を下から甲の部分で弾く。と同時に、右側の騎士が胸を狙って回し蹴りを放ったのが見えた。シユイは柔軟体操の様に足を前後に伸ばし身を低くする。ぺたんこ両足が地に付き、蹴りが頭上を通過した。その風圧を頭を感じながらも、相手の踏み込んだ方の足首に水面蹴りを仕掛ける。身を支えている軸足を外された騎士はあっさりとするめき、前のめりに倒れる。その傍らから鎧の脇に手を添えて再度>ライトニング・リロードくを放つ。四つん這いになっていた騎士は凍えているかのように細かく痙攣し、そのまま動かなくなった。残りの四人が慌てて向かってこようとしたが、直ぐに体勢を整えて跳ねるように立ち上がったシユイを見て動きが止まった。

「どうした。この程度じゃば……俺だつてやれないぞ」

予想外のことが起こった。驚くべきことに残っていた騎士たちが揃いも揃って剣を抜き放った。刃が煌めくのを見て、今度はニルフ

アナが眉を顰めた。

「自分たちが作った誓約すら守れないのか。もうお話になんない」  
ニルファナの正論に対し、騎士達は苦い薬を口に含んだかのような顔をする。

「生憎と、信仰を脅かす者には力づくでの排除が認められている」  
「……それで？ その剣でお姉さんたちをどうするつもりかな。黙っていれば大人しく帰るって言っているのにわからない連中だね」

騎士たちは旅行者がこの場にいないことを確認した上で、口を開く。

「アンタは一応女だからな、態度次第で見逃してやらんこともないが、その黒いのは我々に危害を加えた。極刑以外考えられぬな」

『一応』という言葉と『極刑』という言葉。果たしてどちらの言葉で怒りを喚起されたのかはわからなかったが、ニルファナの赤髪が揺れ動いた。全身から発させた魔力の風に靡いたのだ。

「>更なる威に屈せよ<」  
ブレスチャー

短くそう言い、手招きするように左腕を振り降ろした。その途端、騎士たちが剣を取り落とし、一斉に膝を付いた。次々に剣が床に落ち、カツンカツンと音を鳴らし、横になった。

「なっ、た……立てぬ！」

「こ、これは……一体……」

「……お、おい女！ 貴様、何をした！」

まるで数人の大人にのしかかられているように、騎士たちは地べたに手を付きながら喘いでいる。

「身の程知らずが。シュイが手加減してくれていたのもわからずに良くもまあ、そんなことを言えた物だね」

ニルファナは空いている右手の平を騎士たちに向ける。彼らの顔色が一瞬にして蒼白に変化した。

「ま、待て！ ここで刃傷沙汰をやらかせば貴様はレムース教全てを敵に回す事に

「で？」

「で……って……」

他に反応はないのか。そう言いたげに、しかし男は口を噤んだ。ニルファナの全身が魔力に覆われ、薄らと光を放っていた。

「ま、こんなことで敵に回る様な組織なら潰したって誰も咎めないだろうし」

不遜な言動が騎士たちの耳をその思考每貫く。

「ば、馬鹿な！……イカれてる」

「そのとーり、今更気付いたって手遅れだけどね。誰がシユイを極刑にするって？ ふざけた事を言うのもいい加減にしてくれるかな。この子がお姉さん以外に殺されるなんて絶対に許さないよ」

そう言い、ニルファナは右手に魔力を溜め始めた。>プレツシャ  
―<で相手を拘束したままの二重魔法だ。

「……や、やめてくれ」

動けぬだけでも騎士たちには相当な恐怖があるはずだったが、今また、新たな魔法を放とうとしているのは一目瞭然だ。その選択次第では彼らの命が奪われるということに疑いを挟む余地はない。

「わ、悪かった。悔い改めるから」

「ちよつとばかり、遅かったね」

身体と声を震わせている騎士たちに向けて、ニルファナが妖艶な笑みを浮かべる。その刹那、右手から溢れんばかりの眩い光が放たれ、発された絶叫と共に神殿内を覆い尽くしていった。

「口ほどにもない連中だねえ」

ニルファナは口から泡を吹き、レギンスの隙間から小便を垂れ流している騎士たちを見つめ、腰に手を当てて下唇を付き出した。その所作は少女のように可愛らしかったが、やったことは蛮行と言って差し支えぬ行為だった。

「ニルファナさん……。ちよつとやり過ぎ」

彼女が最後に放ったのは、>照明魔法フッシュユくだった、はずだ。暗い洞窟

や夜道を照らすための魔法だが、あれほどまでに光量が多い、昏間の明るさまでもが白く塗り潰される様な>フラッシュ<を目の当たりにするのはシュイも初めてだった。本当に自分の知っている魔法だったか、その確信は持てなかった。

「まあまあ、硬い事言わない。そもそもシュイのために怒ってあげたんだよー?」

「う、うん、それはわかっているんだけどね。……それよりさ」

「ん、何だね?」

「……この魔法、どうやって解くの?」

シュイの質問に、ニルファナは訝いぶかしながら視線を横に向ける。が、そこには誰もいない。更に視線を下に向けると、いた。先ほどの騎士達と同じように、四つん這いになっている黒いのが。彼女は両膝を持って前屈みになりながら一言。

「……何遊んでるのさ?」

『遊んでるわけないでしょ! 僕もさっきの巻き添えを食ったんだよ!』

そう怒鳴るシュイを見て、ニルファナは長年会っていなかった友人に偶然会ったかのように口に手を当て、目を丸くした。

## 第十二章 くフォルストローム王都（１）

「シユイ、傭兵は体が資本だからね。絶対に無茶だけはしちゃ駄目だよ」

「わかつてるよ」とシユイが返した。

「もし、腕とか足とか切られちゃったら凍らせて保存しておきなさい。後でくつつけてあげられるかも知れないから、わかった？」

縁起でもないことを言わないでよ。切断面まで想像しちゃったじゃないか。

と、これは口にはしなかった。

「それから、黒衣のサイズが合わなくなったらどこかで仕立て直してもらいなさい。合わない装備を身に付けるのは危ないからね」

「わ、わかったよ。もう良いから」

そんなやり取りを２０回ほど繰り返し、尚も「何だか心配だなあ」を連呼するニルファナを何とか宥め<sup>なだ</sup>まし、シユイはようやく手を振って別れを告げることを許された。

フォルストロームの城下町北部に着いたのは、レムザ大聖堂での騒動から二日後のことだった。シユイは名残惜しむニルファナと別れて寂寥感<sup>せきりょうかん</sup>と安堵感<sup>あんどかん</sup>を同時に噛み締めていた。散々な目に遭わされたせいだろうか、今回は安堵が勝っていた。彼女と一緒にいると楽しいのは確かだが、同じくらい疲れもするのだ。

滞在するにあたってはまず宿を決めねばならなかったが、まずはニルファナがお奨めだと紹介してくれた所に向かうことにした。けれども、敷地内に入ろうとしたところで、門の外から宮殿のような建物が目に入り、外壁面に埋め込まれていた大理石の案内板を流し読みし、引き返す羽目になった。国の首都の物価が多少高いのは社会の常識であるが、それにしただって一泊２０万はないだろう。



それと同時に、ニルファナの金銭感覚がどれほどのものなのか、何となく理解できた。以前貸してくれた50万パーズは、つまりは彼女の三泊分の宿代に過ぎぬというわけだ。

平民と富裕層<sup>セレブ</sup>の境界線。もとい、CランクとSランクの圧倒的な差という物をまざまざと見せつけられたシュイは、来た道をとぼとぼと引き返して行った。

それからしばらくの間、手頃な宿を探してみたものの、地元住人に訊いてもどこがいいかはつきりした返事はもらえなかった。それも考えてみれば仕方ないことだった。自分の持ち家がある住人が、地元で宿に泊まる機会などあまりないのだから。

歩きまわっているうちに小腹が空いてきたシュイは、近くにあった飯屋に入った。そして、注文を頼むついでに一応店員にも宿について訊ねてみた。

「うちの親戚が近くで宿をやっていますが」

「え、本当？ 値段はこれくらいで考えているんだけど」

「ええ、問題ありませんよ。料理もうちが作っているので大丈夫です」

しかし料理は不味かった。などというオチが付くこともなく、普通に美味しかったので、シュイはその宿に案内してもらうことにした。

案内されたのは飯屋から徒歩一分もかからぬ、馬車道に面した町の一角だった。赤い煉瓦積<sup>レンガ</sup>のアットホームな雰囲気<sup>雰囲気</sup>の宿屋だ。

宿を決めたシュイはひとまず三日分の料金、纏め値引きで3万パーズを払ってから部屋に荷物を置いて外に出た。

大部屋では鉄の刃が重なる音が断続的に響いていた。広々とした空間に奥行きをも印象付ける、壁面を埋め尽くす巨大な鏡。アミナは自分の髪型の変化に目を細めつつ、肘掛椅子の背もたれに身体を預けていた。首回りにはタオルとコートが巻かれ、切られた髪が衣服の中に潜り込まぬようにしてあった。その後ろに立っているのはセミデイカットの、少し背の高い獣族の女性だった。

久方振りにフォルストローム王都の実家へと戻ってきたアミナは、浴場に赴く前に散髪をしてもらうことにした。実家と言ってもそこは大きな城であるからして、帰宅よりは帰還という言葉の方が相応しいかも知れなかった。

髪を整えているのは幼馴染のリズ・ヘイロンである。大人の色香が漂うと王城でも評判のメイドで、アミナにとっては大切な友人であり、頼れる姉のような存在でもあった。

スキバサミとコームを上手に扱いつつ、リズはカット中に何度か首を傾げることになった。普段、アミナはカットが終わるまで背筋をピンと伸ばし、肩を抑えて体勢を整える必要がほとんどない。しかし、今日に限って言えば、何故か体勢が崩れることが多いように思われた。あるいは自分の気のせいかと小首を傾げつつ、美しい銀髪に櫛を通していく。

「姫様、今日はなんだかそわそわしていらつしゃいますね」

「そ、そうか？ 普段と変わらぬ心積もりだが」

口ではそう言ったものの、アミナは見透かされていた事に驚きを禁じ得なかった。共に過ごした十年という年月は、どうやら様々なことを見破ってしまうらしい。

「何と言いましようか、心が少し乱れているのではありませんか？  
やはりこの所の激務で」

半分以上正解だった。疲れていないわけではなかったし、心は少しどころではなく乱れていた。シュイは一体全体どういっつもりであんな歯の浮くような台詞を口にしたのであるかと、と。

咄嗟の嘘と言う事だったらまだいいと思い、いや良くないと断じる自分がいる。ほんの冗談ですよ、などと言われたことを想像するにつけて、自然と拳がみしみしと音を立てる。

けれども、と考える。もし嘘ではなく本心だったのであれば。自分は彼に対してどう対応するべきなのだろうか。いっそのこと、リズに相談してみた方がいいかも知れない。彼女なら恋多き女だし、様々な応対の仕方を教えてくれるのではないか。アミナはそのようなことを考えていた。

とはいえ、リズにからかわれるネタをむぎむぎ提供するのも気が引けるし、何より今の自分の心持を正確に伝えられる自信がなかった。

未だ告白と断定できる状況ではない。こんなことを考えている間に、近日中に決めなければならぬ案件の一つや二つ処理できたのではないか。そう思うと苦々しさもひとしおだ。大体、顔も見せず告白とはどういう見なのだろうか。

ああ、火傷していたからと言っていたか。って、それは嘘だとニルファナに聞かされたばかりじゃないか。

なんとも煮え切らない思いが、腹の底に溜まっている気がした。やはり教会で会ったときに問い質しておくべきだっただろうか。けれども、あの場にはシュイの仲間らしき者たちがいたし、そういうえば、あの少女は彼とどういった関係なのだろうか。

「これくらいの長さで宜しいですか？」

リズに声を掛けられ、アミナが肩を震わせつつも取りとめのない思考を現実に戻した。鏡にはほどよく切り揃えられた前髪が映っている。このほどよく、というのがポイントで、揃い過ぎては幼く見えるし、乱れ過ぎては品がなくな感じられる。いつもながら素晴らしい腕前だった。

「ん、問題ない」

「畏まりました。後は細部をちゃっちゃとやってしまえますね」

再びリズが鋏を入れ始めたのを見て、アミナは切られた髪が入らぬよう瞳を閉じる。

引き続き、シユイが顔を隠している理由はなんだろう、と考えてみる。真っ先に考えられるのは、特定されるのを防ぐため。ひいては何らかの犯罪に加担していた可能性だ。

だが、そう考えるとシユイの取っている行動に一貫した説明を付け難い。追われているなら何でわざわざ傭兵ギルドに加入したのだろうか。もしも犯罪者なら、賞金首を捕まえるのが仕事でもある傭兵ギルドに近寄ろうとすらしなはずだ。ほとぼりが冷めるまで静かに息を潜めて暮らすというのが、一番利口な考え方だ。

加えて、もう一点奇妙なことがある。仮にもランカーであるニルファナが、ただの犯罪者を見逃すとはどうしても思えないのだ。現に、彼女は何度となく賞金首を捕らえているし始末したこともあるはずだ。一見するとちぐはぐな行動の裏には、何か深い意味が隠されているのだろうか。

と、ここまで考えたところで、再び自己嫌悪する。何で私は好きでもないやつのかかり考えているのか、と。

「様」

「ひあ！」

リズに耳元で囁かれ、アミナの身体が椅子から泳いだ。

「終わりましたよ、姫様。やはり心配ごとがおりなのですね。よろしければこのリズムにお話しして頂けませんか？」

「い、いや、別にないぞ。まったく、そなたの心配症は全く治らぬな」

アミナが立ち上がりながらそう言つと、リズムは訝しげに視線を上にずらす。そこにはぴろぴろと動く三角耳があった。

「やっぱりあるんですね、お耳が」

「だからそなたは！ 前々からそれはやめよと言っておるだろう！」

アミナが顔を真っ赤にして怒鳴つた。耳を見られるだけで隠し事が露呈してしまうのでは溜まった物ではない。以前からリズムに悉く隠し事を看破されてきた理由を知つたのは、ごく最近になってのことだ。

「まあ、心外ですね。私は姫様を心の底から案じているからこそ」「それはそうであろうが、私にだって守りたいプライベートというものがある」

善意が必ずしも当人にとってためになるとは限らない。アミナは臉の上に落ちてきた短い髪の毛を指の腹で拭つた。

「ご安心ください、姫様の心配は杞憂に終わりますわ。姫様に解決出来ぬ困難はありませんもの」

杞憂とは取り越し苦労のこと、ってどっちがだろうか。本音を言えば、あれが本当に告白だったのかそうでないのかだけでも判断したいところだった。

「告、白？」

「え、」

「まあ！ 姫様、どなたかに告白されたのですか！ あらあらまあまあまあ！ どんな方ですか？ どこその皇子様ですか？ それとも渋い傭兵さんかしら？ お悩みになつていふことはま

んざらでも」

迂闊にも、口から漏れ出ていたようだった。リズが興奮気味に身  
を乗り出して来たのを慌てて両手で押し留めた。

「ま、待て待て！ 告白されたと決まったわけではない！ 大体、  
相手の顔すらわかっておらぬのだ！」

「顔がわからないということは、恋文でラブレターございますか？ ってそん  
なはずはありませんよね。姫様に届く手紙の選別は私たちがやって  
おりますし。そういえば姫様、確か最近までキャノエに」

「話はこれで終わりだ！ 部屋に戻る！」

「あ、姫様っ！」

ボロが出る前に話を切り上げんと、アミナが早歩きで化粧室を出  
ていった。開きつ放しのドアの隙間から覗く後ろ姿に目を細め、リ  
ズがほうつと溜息を吐いた。

「あの気丈な姫様が顔もわからぬ方に心惑わされるなんて、なんだ  
かすっかりお年頃なのですな」。それはそれで少し寂しい気もしま  
すが。やはりここは主人を応援して差し上げるのが真のメイドの心  
意気でしょうか」

ややあつて、リズは何かを思いついたように手を叩いた。そして、  
ポケットから手帳を取り出すと、少しうきうきした様子で、今後の  
休暇日程を確認し始めた。

## 第十二章 〵(2)〵

四大国の一つ、フォルストローム。ジュアナ戦役に乗じ、ザーケイン帝国から独立を果たした獣族たちは解放軍を指揮した奴隷剣闘士イデという男を王に据えて国を成した。彼らは同時期に独立した人族を中心とするセーニア教国と交流を深め、未開の土地を開拓しつつ生活様式を発展させていった。世界最大の森林資源を有していたが、賢明にもいち早く輸出規制をかけたために砂漠化するようなことはなかった。

比較的温暖で降水量も多いため、国土の大半は森林で覆われている。そのため、人口密度も河口や平野部に偏っている。自然を尊び、その恩恵を享受、保護する姿勢を変えることなく、建国以来300年に亘って栄えてきた。のんびりとした気風を好んで移住してくる者も後を絶たず、人口は年々増え続けている。

この国では政治家、官僚の給与と面に関して非常に面白い体制を取っており、それによって根が腐敗することを避け続けてきた。

まず、国会議員の数が他国に比べて非常に少ない。その数わずか四十八であり、任期も三年と短い。その代わりに、彼らの作った国策を検討する評議員が政治家一人に二名ずつ付く。彼らは一年ごとに受け持つ政治家を変わり、任期は二年である。国王が4分の1、国民が4分の3を選ぶことによって、政治家は常に双方から監視されている状態になる。

斬新な方策としては、国会議員の給与が年一回の国民投票で決められるということと、投票の結果が一定数を上回らなかった者は強制的に辞職させられるところだろう。つまり、不正が発覚した政治家には即座に国民の審判が下されるのだ。

そしてもう一つ重要なルールがある。政治家になった者は3期連続では出馬できない。これは各派閥の構築によって思考が固定化、

流れが汚濁することを避けるためであり、常に若い政治家を入れることによつて新しい発想を国に招き入れることを目的としている。

王都を図形で表すと、北東と南西に鋭角を持つ平行四辺形に近い東西を流れる大河によつて北区と南区に分かれており、南区の四分の一が王城の敷地にあたる。そして、シルフィールの支部は北区から南区へ繋がる陸橋を渡つてすぐの所にある。

国民的アイドルであるアミナがギルドに所属してからというもの、フォルストロームでは自然とシルフィールに好意的感情を持つようになり、1年ほど前には空いていた土地に誘致を行った。フォルストローム王都において、シルフィールは南区に存在する唯一のギルドだ。

「確か、この辺りだった、ような」

自信のなさそうな声が漏れた。リス・ヘイロンが前任のメイド統括長から後継に指名されてから三年になる。普段は城で使用人たちを指揮する立場にあるため、買い物は専ら部下メイドたちに任せている。それ故に街に出かける機会はそれほど多くない。長年住んでいるにも関わらず地理には未だ疎く、地図を手に町を練り歩く有様だった。

「困りましたわ。かなり大きな建物と聞いておりましたのに、見当たらないなんて」

まさか潰れてしまったわけではないと思うのだけど。リスは芝の敷き詰められた広場を見回し、通りかかった通行人を見つけ、一瞬にして捕まえた。文字通りに、さながら獲物を捕らえる蜘蛛のように。

「わっわっわ、な、何ですかあ！」

制服と黒縁眼鏡を身に付けた若い男を後ろから羽交い締めにして



持ち上げ、リズは悠々と言葉を続ける。

「あの、申し訳ありませんが。差し支えなければ、シルフィールという傭兵ギルドまで案内していただけないでしょうか」

「え、シルフィール、ですか？ それならここですよ」

宙に持ち上げられた男は左でも右でも前でも後でもなく、下を指差した。そこにはヒビ割れた正方形の石畳があつた。

「ここ、でございますか」

リズは首を傾げつつも何となく足踏みを試みる。

「ええと、あちらに下り階段が見えますでしょう。高台を少し下りた所に入ります。この地下がシルフィールですよ」

「あらまあ」

その言葉をきっかけに、リズは聞きかじっていた雑学を思い出した。元々ギルドは正規の組織ではなかったために、古くは地下や洞窟の中にひっそりと作られていた所も多いのだ。至極納得し、男の両腕を解放する。

「御親切にありがとうございます。では、ごきげんよう」

リズはフリル付きの黒いスカートの端を両手で持ち上げ、丁寧に礼をした。

「う、ごきげんよう」

眼鏡の男は先ほど背中に押し付けられていた二つの柔らかい感触を思い出し、赤面しながら礼を返した。

段差の大きい階段を慎重に下りていくと、中腹くらいところで一旦階段が途切れた。その脇には確かに入口、というよりもトンネルらしきものが二つ存在した。リズはちらほらと出入りしている人の流れに、躊躇なく加わっていった。

「依頼書は、依頼書はいずこ？」

リズはギルドに入るとキヨロキヨロと辺りを見回した。そこは本  
当に洞窟の様なところで、端っこの方に小さな窓が空調のために付  
けられているのみだった。ロビーには大きな灯火が硝子で出来た四  
匹の動物の中で燃え盛っている。虎と羊と海豚と猿。関連性の無さ  
そうなラインナップだ。

ほどなくして、依頼書の置いてあるテーブルを発見した。用紙を  
一枚取り出し、記載事項をスラスラと書き連ねていく。依頼内容、  
名前、報酬、期限、備考。詳細に書かれたこれを出すことによって、  
受付のギルド員が依頼書にランク付けをするのだ。

アミナの話では、シルフィールで受付をやっている者のランクは  
B以上らしい。ある程度の依頼の数を実際にこなさないと明確な基  
準がわからないし、ごねる客を力ずくで納得させることもできるた  
めだ。

幸い今日は月曜日なので、この場で依頼書を出せばすぐに受諾し  
てくれる。リズは埋められた空欄を二度見直してから比較的空いて  
いる列へと並んだ。そこは五人待ちの列だったが、七人待ちの隣の  
方がやたらと早く列が動いているのを見て、何だか負けた気がする、  
と口を窄めた。

更に二十分ほどが経過し、ようやくリズの番がやってきた。

「いらっしやいませ。依頼の申込みですか？」

「はい、そうでございます。ここって人探しとかでも、お願いでき  
るのでしょうか？」

「承っております。ただ、記載事項の詳細によってはお受けできな  
いこともありますし、相当な時間お待ちいただくことも多々ござい  
ます」

「そうですか。一応確認して頂きますでしょうか？」

「畏まりました。では拝見させて頂きます」

受付はリズから受け取った書類に目を通し 注目せねばわから  
ないほどかすかに 頬をひきつらせた。

「こ、これは」

「やはり、この報酬では受け入れられないでしょうか？」

「い、いえ。報酬は問題ありません。ありませんが、ちょっとこれは難しいかと」

受け付けがそこに書いてあった依頼内容をもう一度確認した。『人を探して欲しい(ただし顔はわかりません)』。高名な占い師でもない限り、この依頼を進んで受けようとする者はいないだろう。報酬と内容を考慮すればC級の依頼だが、難易度だけが著しく高い。このお客は天然であろうか。受付員は表情に出さないように留意しながらもどう扱うべきか迷っていた。

「難しいですか」

相手の沈黙に何かを嗅ぎ取ったのか、リズが小首を傾げた。

「そ、そうですね。せめて名前か、そうでなければ特徴を教えてくださいただければ」

特徴か、とリズは灯火に視線を移す。

「そうでした。最近キャノエで騒動が起こったと聞いていますが」

「ええ、確かに。シルフィールの傭兵の何人かは事件に関わっていますね。それが何か？」

「その方たちの名前ってご存知でしょうか」

「所属する傭兵の名を部外者に教えるのは控えさせていただきます。傭兵というのはある種当たり前のように恨みを買って商売ですから、所属員を守るために過度の情報提示は……」

「そうですね。では、人数だけでも教えていただけませんか？」

「うーん、まあそれくらいなら良いでしょう。小さいですが地方紙にも名が載りましたから探そうと思えば探せますしね。ちよつと待って下さい。あ、ありました。シルフィールで大毒蜂の殲滅に

関わったのは五名ですね。そのうち、功労賞が送られている人物が二名います」

リズがおもむろにメモ帳を胸ポケットから取り出し、手掛かりになりそうなその情報をすらすらと書き留める。

「付かぬ事をお聞きしますが、その中に顔を隠している方はいらっしやいますか？」

「顔、ですか？」

「ええ、例えばあちらの方ように」

リズは傍らを通り過ぎていく大鎌を背負った黒衣の男を指差した。「そついえば、そついった方がいたと耳に挟んだような……」

受付は曖昧な記憶を辿るように、腕を組んで中空に視線をさまよわせた。

企業の秘密文書の配達を終え、依頼の達成報告に来ていたシユイは、四方に設置されている掲示板を見渡しながら感嘆した。依頼書の圧倒的な数に加え、ホーヴィヤキャノエの支部に比べて明らかに高ランクの任務が多い。王都と言うだけあって人口も富裕層の数も他の町とは比較にならないようだ。

これまでお目にかかったことのなかったS級の依頼書も二つあった。【ブランシー一家を壊滅せよ】。【暴走海豹<sup>オルトン</sup>を討伐せよ】。

何気なく成功報酬の数字に目を走らせ、仰天した。ブランシー家の方に関しては標的の賞金とは別に二千万パーズ。国からの賞金を加算すれば億を超えてしまうかも知れなかった。

世界各国に別荘を立てるのも悪くはないなあ。

などという妄想はさておき。CランクではどうやったところでS級は受けられない。B級だって決して捨てた物じゃない。塵も積もればなんとやらだ。

と、ここまで考えて、自分の金銭感覚が狂い始めていることに気がついた。C級任務の報酬に感動していた自分が、たかだか一月ち

よつとでB級だつて捨てた物じゃないなどと嘯うそいていることに、あの種の恐怖すら感じられた。

安くてもいいからとにかく何か受けよう。そう決心し、次に目に入ったB級の依頼書を受けることに決める。

十秒もしないうちにBの文字を確認。上の方に貼ってある紙を背伸びしてひつぺ剥がす。紙には【ケセルティガーノへの物資輸送】と書かれてある。

よし、やめよう。

硬い決意を紙吹雪よりも細かく砕いた上で空の彼方へと解き放つ。ここに来た目的の一つである知識習得が終わらないまま他国に行けるはずがない。気を取り直し、隣の依頼書に目を移した。

B級任務、大怪鳥退治、定員二名（残り一名）、報酬200万パズ（前金25%支払いあり）、任務時間六日前後、締め切りまで残り七日

募集人数が残り一名となっているから、すぐに始めることができる。今度こそ即断したシユイは依頼書を持ってカウンターへ向かった。

建物内の中央にある柱の四方を囲むようにカウンターテーブルがあり、その中で各方面3人、合計12人の受付が対応していた。シユイは傭兵専用の受付に近づいていく。

「こんにちわ」

軽く会釈をすると、男性の受付員は笑顔を返した。

「やあ、こんにちわ。依頼の受諾手続きかい？」

「ああ、これをお願いしたい」

手にした依頼書をカウンターに置く。

「承わった。身分証の確認いいかな？」

皮袋から取り出した身分証を依頼書の隣に差し出す。身分証に書かれている名前を見て、受付はふんふんと納得顔をする。

「へえ、やっぱりそうか。おっと失礼、もう仕舞っていいよ。今から依頼人ともう一人の傭兵に連絡する、ちょっと待っていてくれ」

中々親しみやすい、もっと言えば馴れ馴れしい話し方をする男だった。男は魔石を二個取り出し、念を込め始めた。少しして水色の霊体が二体、手の平から飛び去るのを確認し、ゆっくりとこちらに向き直った。

「最近活躍しているらしいね。随分とギルドポイントも溜まっているじゃないか」

「ギルド、ポイント？」

不思議そうに聞き返したシュイに、受付があんぐりと口を開けた。「ちょ、ちょおっと待ってくれ。きみってば、もしかしてうちのシステム理解してないのかい!？」

「シス、テム？ ごめん、何を言っているか良くわからないんだけど」

「ちょっとー、頼むよー。確かにたまにいないこともないけどさ。もう十に近い依頼こなしてるでしょ？」

十個もやっただろうか。シュイは自分のやった任務を指折り数えてみる。護衛、家庭教師、薬草採取に虎退治、大毒蜂の件と教会の件、文書の輸送。

「まだ七個」

「十分だつて。ちょっと、仕舞った矢先で申し訳ないけど、もう一度身分証出してくれる？」

「お、おお」

シュイは皮袋に放り込んだ身分証を再びごそごそと漁り始めた。

「はい、どうぞ」

「いや、渡さなくて良いからちょっと裏側の、右下の数字を見てくれるかい？」

そう言われ、指をスライドさせてカードの裏側を見る。すると

「ああ、確かになにやら数字が書いてあるね」

おっかしいなあ、入団した時に絶対説明あるはずなんだけどなあ。そんなことをぶつぶつ言いながら、受付は後ろの本棚から黒いパンフレットを持ってきた。

「じゃあ、大雑把に説明するよ。うちはDからSまでランクがあつて、昇格するにはギルドポイントが必須となる。Aランクまではね」

「Aランクまでつて、Sランクはどうなるんだ？」

「ランカーに関しては、一年毎に依頼や貢献度を審査されるんだ。

問題が無ければそのまま更新になるし、死亡や怪我、病気などで離脱することもある。若しくはAランクで他に有望な者がいれば落とされることもある。ランカーは19人つて決まっているからね」

「じゃあ、常にランカーでいられる保証はどこにもないつてことか？」

「正解じゃない」

「というと……」

「結局、ランカー落ちを危ぶむような傭兵はランカーになれない。それくらい審査が厳しいんだ。傭兵としての実力は言わずもがな、向上心に溢れていて、他人の尊敬を集めることが出来る人物でなければならぬ。一度でもランカーに上げられるような人ならまず落ちてこないつてことさ」

シユイはニルファナの姿を思い浮かべ、肩を窄めた。実力はまったく問題ないし、向上心も……むしろ好奇心と探究心に溢れているが、尊敬できる人物かと言われると困ってしまう。

でも、何故か周りの評価は高いんだよな。近くにいないと見えないものがあるってことか。

「ありがとう、参考になった」

受付は小刻みに首を振る。

「いやいやいや、まだその数字の説明してないから」

「あ、そっか」

受付は軽く溜息を吐き出してから、パンフレットをカウンターに広げた。何かの資料なのか、アルファベットの横に数字が書き連なっている。

「このパンフレットにあるように、昇格するための規定は決まっている。二年以内に規定のポイントを貯めた者が、半年以内に規定のポイントを貯めた者だ」

「何で分かれているんだ？」

「半年以内の方は規定ポイントの敷居が相当に高い。己のランクで受けられる中でも難易度の高い依頼を短期間でこなさなければならぬため、かなりの実力者でなければ無理だ。これは、有望な実力者を手早く発掘するため。それから怪我などの事情があつて長期離脱し、ランクが落ちてしまった者に対する救済措置つてところだね。焦らず普通にこなしても、決められたポイントが貯まれば二年以内には上げれるよ」

「へえ、よく考えられているんだなあ」

「で、今の君のポイントはいくつになつてる？」

シユイは慌ててカードの方に視線を移し、297と答えた。

「よし、君が傭兵登録したのつていつだったか覚えてる？」

「ああ、きりが良かったから。7月1日だよ」

「いいペースだ。今は8月17日だから、あと四ヶ月半以内に703ポイント獲得すれば、君は無条件でBランク傭兵に昇格できるよ」  
「1000ポイントも必要なんだ。それを逃すとどうなる？」

受付がCランクの文字から指を横になぞった。

「次の半年間で新たに1000ポイントを貯めるか、二年以内に合



計で2200ポイント貯められれば昇格だ。でも、今の君のペースなら十分半年以内を狙えるんじゃないかな」  
「そうか、わかった。頑張ってみるよ」

ややあつて、青い鳥の霊体が二人の前に羽をばたつかせてカウンターの上乘り、魔力球と化して文字を描き始めた。

「依頼人のものだね。あと二十分で到着します、か」

「なら、このまま待っていていようかな。ところでもう一人の傭兵の方は」

「ん、多分あれじゃないかな」

受付が指差した入り口の方を見て、体が硬直した。あれじゃないことを切実に祈るや否や、耳に叫び声が飛び込んでくる。

「お、おおおおーあ。……きた、キタ、キタキターー！」

おいおい、大丈夫かあいつ。呂律が回ってないぞ。あ、今度はなにやら怪しげなリズムを刻み始めたぞ。

鳩が餌を啄むように地面スレスレにヘッドバッキングする背の高い男を見て、背中に冷たい汗が流れていく。

「やっぱりそうだ」

受付の言葉に思考までも完全停止。肩をいからせるように、痛みきった長い金髪と筋肉質な尻を左右に振りながら、のっばの男がこちらに近づいてくる。

「彼が今回一緒に依頼を行う傭兵だ。まあ、その、色々あると思うけど頑張ってくれ」

受付はシユイの肩を手の平で軽く励ますように叩いた。やっぱりもくそもない。遠目からだっで見間違いないようがない。

### 第十三章 く解決手法（1）く

湖が連なったような大河を小舟がゆっくりと遡さかのぼっていく。どちらが上流でどちらが下流かわからないくらいに緩やかな流れの中を。川辺に植わっているマングローブの細い幹が水面を覗きこむように傾いている。穏やかな川のせせらぎの音と、森の奥から聞こえる鶉うぐいすの聲が耳に優しい。

「ウエイイ！」

時折鼓膜を震わせる音が無視し

「ヒアツ！ ウエイイ！」

鼓膜を震わせる音を

「ランナアウエイイ！」

鼓膜

「あはアハアハ、ウエイイイ！」

「うるせえーいー！」

無視できるわけもなく。

水に浸かる櫂かいの傍から魚が一匹、面と向かい合う傭兵二人をおちよくるかのように小さく跳ねた。

昨日。ギルドのカウンター前にやってきた依頼人の表情が不安に歪むのをしかとその目で確認する。僕までそんな目で見ないでください。シュイが切実にそう願う。

「こ、こいつらがその、傭兵？」

遠洋漁業の漁師のように逞しくも肉厚な腕。満遍なく日焼けした黒髪の森族の男は不審げに、不安げに黒衣の男とのつぼの男を見比べた。

のつぼの男は魔族だった。整髪料の影響か、元々美しかっただろ  
う肩にかかる金髪は無残に色落ちしてちりちりになっている。じつ  
としていられないタイプなのだろう。心臓の拍動が身体全体に及ん  
でいるかのように痙攣を繰り返して、正直少し怖い。

白いワニ革のジャケットは胸元を肌蹴るように着こなし、オレン  
ジ色のカーゴパンツを穿いている。無駄に爪先が長く尖った黒い靴  
を履き、首には緑柱石が付いたネックレスを下けている。背負って  
いるのはおそらくリュートだろう。場末の酒場で丸椅子に座り、一  
人拗ねたように楽器を弾いているのが似合いそうな格好だ。

こいつら、って一緒にすんな！

などと心の中で叫びつつも、シュイは仕事と割り切って紳士的に  
会釈した。

「シュイ・エルクンドだ、よろしく頼む」

「アーハアー！ イヤツハアー！ ウーハアー！」

ベベンベベンベベン

台無しだ。自己紹介の後に三文芝居で入りそうなリュートのリフ  
を入れられ、シュイが閉口する。こんなんじゃないもコンビを組ん  
でいるものだと勘違いされかねない。依頼を受ける前から帰りたく  
なったのは初めての経験だ。

シュイを差し置いてのつぼの男はリュートを両手に抱え、呆気に  
取られた依頼人を前にして苛烈なまでに自己アピールを繰り返して  
いる。音階を低音から五音ないし六音ずつ階段状に重ね、一気に高  
音域へと引き上げていく。上り詰めて吃音を響かせ、耳鳴りの様に  
細い音が脳の奥にまで余韻を残す。

相当な技術を要するのであろうし、楽器自体の音色も決して悪く

ない。が、男の決死の形相を見ながらもそう思えるかはまた別問題だし、それを今やる必要があるのかも別問題だ。

「……ハア……ハア」

仕事前に息切れしてどうする。

自分のことでもないので何だか頭が痛くなってきた。のつぼの男の声が途切れたのを見計らい、受付がやっと口を差し入れる。

「あー二人とも、こちらが今回の依頼人であるガラムさんだ。ガラムさん、黒衣の方がエルクンド殿、背の高い方がビアラス殿だ」

「あ、ああ、そうか。まあ、シルフィールだし、腕はまともなんだろう。きつと、な」

ガラムはシユイとビアラスを見比べながら剃り損なつた顎髭あごひげを摘つまんでいる。先人たちの功績は偉大だ。僕は頭もまともですよ、と念話で伝えようかと思つたが我慢する。格好の方を言われているのかも知れないからだ。まあ、依頼人を責めるのは間違っているのだろう。普通なら廻れ右して他のギルドに駆け込んでいるところだ。自分が依頼する側だつたらまずそうしている。

「もちろんですとも。エルクンド殿は先だつての件で大毒蜂の大群からキャノエを守つた新進気鋭の傭兵。ビアラス殿は仮にも、Bランク傭兵ですからね」

な、なんですか？

当然の如く自分と同じランクかそれより下だと思ひ込んでいたシユイは愕然がくぜんと、横にいるビアラスの方を向いた。

彼はがに股で踏ん張り、両手をつ張り、腰を動かして身体全体で円を描いていた。その動きの滑なめらかさに驚くとともに、その恐ろしくも真剣な表情を見て、何が彼をこうまで突き動かしているのだろう、とこちらも真剣に考える。考えた後でその無意味さに気付き、げんなりする。

「わかった、詳しい話は船です。外の河に出してあるから付いて来てくれ」

「了解だ」

「ダニロ・ビアラスですす！」

遅れる事二秒半、『遅いわ！』と三者息の揃った突っ込みが入った。

洞穴みたいなギルドから出てくると、暗闇に慣らされていたせいか日差しがやたらと眩しく映った。片手で光を遮りながら階段を下りていき、南区と北区を隔てている大河へと向かう。滑らかな曲線を描く巨大な陸橋を左手に望みながら河のほとりにある階段を下りていくと、波止場に大小の船が連なって停泊していた。

「奥から二番目の船が俺のだ」

ガラムは二人が後ろから付いて来るのを確認し、浅瀬に設けられた板組みの栈橋へと飛び移る。シュイとビアラスも後に続く。突端の少し手前にあるガラムの木造船は全長がおよそ10mといったところだった。小型船の範疇に入るが立派な寝室も付いているようだ。先に乗るよう奨めたガラムにうなずき、船に飛び乗ると微かに揺れを感じた。後ろのビアラスが乗ったのを見計らって、ガラムは船を繋いでいた太い鉄鎖を係船柱ピットから外し、自らも船に乗り移る。

やや船尾寄りに設置されている大きな風魔石の円柱の上にガラムが首にぶら下げていた鍵石キーを翳かざすと、船の底の方から泡が立ち上がり始めた。私印を感知して魔石の共鳴が始まったのだ。遅れて、船が栈橋からゆっくりと離れていく。魔石が完全に起動すると、ガラムは舵の方に手をかけ、停まっている船団から抜け出た船首をゆっくりと川上の方へ向け始めた。

「大怪鳥メルセグがモビ河の上流に現れたのは、半年程前だった」

二人の傭兵が四角い木箱に腰を降ろすのを見計らって、ガラムがポツリポツリと語り出した。進行方向の水面には強い日差しが直視できぬほどに煌いている。

「俺あ、河ん中に拵しじゆえた生簀いけすに高級魚の稚魚を放流し、増やして成長させてから売っているんだ。所謂いわゆる養殖業いわざるって奴だな。商売を始めから、そう、足掛け十年くらいにはなるか」

シユイは聞いている、という意思表示をするべくガラムに顔を向ける。一方のピアラスは空にある大小の雲をぼんやりと眺めている。ガラムは一人でも聞いていれればいいかと諦め顔だ。

「始め立ての頃は、そりゃあ色んな苦勞もあつた。稚魚が大きくなる前に侵入してきた他の魚に食われちまったり、餌が悪かつたのかあまり大きく育たなかつたりといった具合にな。何度諦めようと思つたことか。だがまあ、性格なんだろうな。未練がましく試行錯誤しているうちに、なんとか商売も軌道に乗り始めた。幸い固定客にも恵まれて、ここ数年くらいは上り調子だ。天候も穏やかだったし出荷量も悪くなかつた。小さいとはいえ、魔石付きの船を購入できるくらいは潤っていた」

そういいながら、ガラムがばしんと船縁を叩いた。通常、この規模の魔石船であれば一千万パーズ近くするはずだ。それを買う余裕が出来るほどには、儲かる商売なのだろう。

「ところが、邪魔が入つたつてわけだ」

「ああ、そうだ。半年くらい前、肥え太つた魚の出荷を目前に控えていた日のことだった。四つある生簀いけすの一つに様子を見に行つたら、中にいるはずの魚が忽然こつぜんと消え失せていたんだ。あまりに鮮やか過ぎて、初めは密漁者かと思つていたくらいだ。そのときの怒りといつたらなかつた。見つけ出して殺してやりたいくらいにな」

穏やかではないがわからないでもない。馬泥棒が殺されたという事件は何百年も前から今日に至るまで、毎年何件も起きているのだ。何の苦勞もせずに他人の血と汗と涙の結晶を奪おうというやつらには相応の報いを以ってしかるべきだとは思う。

「今度は絶対に追いついてやろうと、場合によっては腕の三本くらいは折<sup>へ</sup>り折<sup>へ</sup>ってやろうと、他の無事だった生簀の前で張っていたんだ。そうしたら深夜、犯人が思わぬ所から現れた。凄まじい羽音を立てて夜空から舞い降りてきたのは、とんでもない大きさのメルセグだったんだ」

腕は三本もないと心の中で突っ込みつつ首を捻る。夜に活動する鳥類は相当少ない。メルセグにしても少なくとも夜行性ではなかったはずだとシユイは記憶していた。

「そいつ、本当にメルセグかな？ 大きさはどれくらいだったんだ？」

「慌てていたんで細かくはわからんが、翼を広げた時は5メートルに近かったんじゃないかな。遭遇した時は開いた口が塞がらなかったぜ。奴ときたら空から雷サンダーブレスの吐息を放って河底にいる魚を一気に感電させちまったんだ」

「ご、5メートル？ それに、サンダーブレス？ メルセグが？」

メルセグの大きさは4mで成体と言われているし、連中が吐き出すのは熱ヒートブレスの吐息だ。話を総合する限りではもしかしたら未確認種の可能性もある。

「俺も目を疑ったが、青白い稲妻みたいなのを吐き出しやがったのは確かなんだ。実際に魚は浮き上がってきたわけだしな。そもそも、水面に浮いてきた無数の魚を河の水ごと吸い上げ、美味そうに平らげていきやがった。一網打尽だ。これじゃあ商売上がったりなもんで、ギルドに頼むしかなくなっちゃってわけだ。俺だって腕っ

節にはそれなりに自信があるが、あくまで一般人レベルでの話だ。戦闘の専門家ってわけじゃない。あんなのを相手にしたら逆に殺されちまわあ」

「つまり、討伐というよりは撃退ということかな？」

ガラムは返事をする前に河の中央に突き出ている岩を避けるべく舵を修正する。

「まあ、追い払ってくれりゃあ問題はない。無用な殺生は俺だって避けたいからな。ただ」

「ただ、なんだ？」

ガラムはばつが悪そうに頭を掻く。

「ああ、その、気を悪くしないで聞いて欲しいんだが。実はシルフイールに頼む前、他のギルドの傭兵たちがもつと安くやってやるって言っんで任せてみたんだ。ところが、倒すどころか大怪我して逃げ帰ってきたもんだからさ。相当手強いのは確かだぜ」

被害が出てから依頼するまでに半年も間が空いたのはそういう理由か。シュイは先ほどの言葉を思い出し、納得する。

「それは別に構わない。どこのギルドを選ぶのかは依頼人の自由だしね。じゃあ、あと一つ確認しておきたいんだが、メルセグは決まった場所に現れるのか？」

ガラムは支流に入るべく、河の左側を見遣りながら小刻みに船首の向きを修正する。

「ああ、向こうも良い餌場を見つけたと思ったらしくてなあ。幸か不幸か、前に依頼した傭兵の話じゃ巢も作っちゃまっているらしい。おおよその場所も聞いているから後で地形図に印付けておくよ」

「それは助かるな、無闇に森の中を歩き回らないで済みそうだ」

ふと、先ほどと打って変わってやたら大人しいピアラスに視線を移した。彼はいつの間にか取り出したノートに鉛筆で何やら一生懸命書き込んでいた。



何だ、結構真面目なところもあるんじゃないか。シユイは先入観に囚われ過ぎていた己を少し窘めた<sup>たしな</sup>。それはそうだ。どこか一つくらい取り柄がないとBランク傭兵になどなれるわけがない。ちゃんと依頼人の話した情報を事細かに

「フンフンフフーン」

一目ではわからなかった。ピアラスの身体は、止まる寸前の時計の振子ほどではあったが、左右に小刻みに揺れていた。

何を書いているんだ？

興味をそそられたシユイはゆっくりと立ち上がり、後ろに回り込んでノートを肩越しに覗き込み、絶句した。

>ヘイツ！ あなたの足首は何でそんなに細いの 太腿とのギャツブがまるで大根 ヘイツ！ その厚ぼつたい唇は赤芋虫の番のよう<sup>つがい</sup> 歯の隙間から洩れ出る息が堪らなくセクシー でもちよつと臭い モーニングキッスなんて幻想よ ちゃんと歯を磨いてからチュツチュして byピアレス<

魚の代わりに釣り針に引っ掛けられたかのように頬が引き攣るのを感じた。どうみても依頼の詳細を書き込んだ内容ではない。もしや暗号かと一瞬考えた自分を意識の底で引っ叩き、何かを言おうとしたが何と言って良いのかわからず、拳を振り上げてみたものの殴るほどのことかと疑問に思い、不完全燃焼のまま座っていた元の場所に戻り、勢い良く腰を降ろした。その弾みで船が大きく振動するくらいには。

とにもかくにも、これだけは言える。もしニルファナがこの場にいたら全力で殴っているレベルだ。

翌朝、事情を聞き終えたシユイたちはガラムが以前使っていた動力なしの小舟で現地に向かっていた。万が一にも、メルセグのサンダープレスで魔石船が破壊されたら大損害だからだ。両手にオールを持ち、押しては引き、引いては押す。

その様子を不思議そうに眺めているビアラスを見て、船から蹴り落としてやりたい衝動に駆られる。緩やかな流れであろうと上流に遡って漕ぐのは相当にきついのだ。その作業をやっている真正面で涼しげな顔をしながら傷み具合を確認するかのように金髪を弄られていては憤るのも無理ないと思うのだがどうか。

全く、何を、どう評価したらこんな奴がBランク傭兵になるんだよ。

コミュニケーションはまともに取れてないし、常々叫んでいるし、落ち着きもないし、戦闘能力にしたってそもそも楽器しか持っておらず、懐疑的にならざるを得ない。

一日経った今でもその疑問が解消されることはなかった。昨日、ビアラスは船から降りると今度はリユートの弦の調整にやっきになっていた。結局、地形図やメルセグの特徴などは全て自分の頭に叩きこむ羽目になったのだ。これで報酬が均等分配。切ないにもほどがある。

時折我に返ったように叫び声を上げるビアラスを怒鳴りつつも、シユイはガラムに教えられた場所を目指して必死に船を漕いだ。川を遡ること三十分。ようやくその目印を見つける。川の中州を取り巻く様に蓮の葉がびっしりと浮いている。中洲の中央には石が上へ

行くほど小さくなるように何段も積まれている。

その付近から辺りを見回してみると、あつた。茂みで覆われている岸辺に細い間道を発見し、そちらに船を接岸する。陸地に降り、二本の太い木の幹と船をロープでしっかり繋ぐと、シユイとビアラスは森の奥へと歩き出した。彼が大人しく付いてきてくれることが意外に思え、その程度のことですと喜んでいる自分にまた腹が立った。

### 第十三章 〵(2)〵

人一人通るのがやっとくらいの狭い林道が奥へと続いていく。日差しが高木の梢によって遮られ、正午前にも関わらず地面の大半が影に侵食されている。道の両側にある木の根が所々で張り出しており、土が盛り上がっている箇所も見受けられた。

それらに足を取られぬよう注意しながら、シユイは慎重に歩を進める。水はけが悪いためか足場が柔らかく、湿気が籠もり、腐葉土の臭いが漂っている。その臭いに微かに獣臭さが混じるのを感じ、シユイは息を嚔ひそめて慎重に行動

「あばあバババピー！　ぎゅーんぎゅーん！」

しても意味がないことを悟り、後ろを振り向いて声を荒げた。「アンタさつきから、って違う！　昨日からだ！　どういっつもりだ！　やる気あんのか！」

怒声で捲まくし立てるシユイに対し、ピアラスは目を大きく見開いた。シユイを見ようとしているのではなく、シユイの目の奥にある何かを探しているようだった。

「アーあ？　足りない！　足りないーイ！」

ピアラスは筋肉質な尻を左右に素早く往復させた。尻文字で？　跳ね？　若しくは？　クイツク？　を表現するような所作はらわたに腸が沸騰する。果たして目の前にいるのは本当に人間なのか。そんな疑問すら湧き出てくる。

出来ればそのまま無視したいところであるが、むざむざ敵に気付かれそうな行為をする彼をこのまま放置しておくわけにもいかず、シユイは恨めしげに頭を抱えた。

「……大体、アンタどうやって戦うつもりだよ。楽器しか持っていないじゃないか」

「戦う？　チツガーウ！　俺はオレ八癒して愛して信じてるールルルーー」

今夜は何を食べようか。麺類が良いかな。でも、折角なら郷土料理的な物を食べたいな。

シユイは現実から目を反らした。

「アッホーイ！」

「ああ、うぜえ！」

しかし回り込まれてしまった。何で無意味な一言がこんなにイラつくのか。上手く説明が付かないのがまた腹立たい。一体こんな調子でどうやって今まで生き延びてきたんだ、こいつは。シユイはわだかま蟠る疑問と不満を抱えつつも森の奥へと向き直る。

「お……」

急に静かになったビアラスにも構わず、足を進めようとする。ところが、突然枝がパキパキと折れる音が聞こえ始めた。次いで、上後方から突風が吹いてきたことに気付き、咄嗟とっさに身を屈め、フードを抑え付ける。強風が木々と二人を包み込み、時を同じくして魔力の警戒網の端にその存在が感知された。それはすぐさまシユイの警戒網から外れ、二人の進行方向へと飛び去っていく。

一瞬のことではあったが、直ぐに理解した。件の鳥は大毒蜂とは比べ物ならぬ程の巨体を誇り、力に満ち溢れていた。

一目で恐るべき力を感じ取ったシユイは音を立てぬように留意して立ち上がる。宙を見上げると、まだ瑞々しい緑色の葉が風圧で剥がされ、ひらひらと舞っていた。

葉っぱに混じって大きな羽が何枚か落ちてきた。シユイは手の平を上に向け、それを空中で受け止める。根の方は白いが、先端に近づくに連れて段々と青緑色が濃くなっていく。触ってみると、まるで針金のような硬さがあった。どう見ても、それはメルセグの羽ではなかった。

「参ったなあ、こりゃ。俺一人じゃ手に負えないかも」

その弱気な台詞にはビアラスを戦力として数えていない皮肉も僅

かに含まれていたが、肝心の当人から反応が返って来ない。不思議に思ったシユイが後ろを見ると、ピアラスは立ったままうつらうつらと船を漕いでいた。

(…………)

引つ叩くべきかおおいに迷ったが、結局放置しておくことにする。いけ好かない奴ではあるが、戦いの巻き添えで死んで欲しいとまでは思わなかったし、それ以上に戦いの邪魔して欲しくなかった。

シユイは踵を返し、鳥の飛んでいった方角へ歩き出す。少ししてその場に取り残されたピアラスの鼻孔から、呼気に合わせて水漬が顔を出し始めた。

道は徐々にせまくなり、獣道といって差し支えなくなってきた。土道が伸び放題の芝や苔に覆われ、殆ど原形を留めていない。

草を掻き分けて進むにつれて、獣臭さが濃くなってくるのがわかった。先の方を窺うと、木々の隙間から木漏れ日が漏れているのが見えた。シユイは強い臭いに顔を顰め、なるべく鼻からではなく、口から息をする。極力足音を立てぬように気を配りながら、抜き足差し足で進んでいく。やがて密集していた杉の樹が途切れると視野が急に明るくなった。

そこは空が見える円形の草むらだった。その場から30m程奥、広場のほぼ中央の位置には葉っぱ付きの細い枝が折り重なるように積まれている。その上では巨大な鳥が翼を畳み、身を縮めている。目を瞑っていることから察するに、眠っているようであった。

シユイは寝ている鳥に一瞬戸惑うも、素早く相手の全身に視線を走らせる。エメラルドグリーンの、青銅を思わせる堅そうな羽毛に覆われ、頭には櫛にも似た黄色い鶏冠を乗っけている。それを含めれば背丈は4mくらいだろう。菜箸を重ね合わせたような長い嘴は

刃物のように鈍い光を放っている。姿形はメルセグに近いが、メルセグの羽毛は毒々しい朱色だ。色といい大きさといい、長い嘴といい、凶鑑でも見たことがないタイプだった。ガラムの話ではサンダープレスまで吐くということだし、舐めてかかったら痛い目どころか永遠の間を見ることになるだろう。

さて、どうしようか。

今回の依頼は討伐しなければいけないわけではない。寝首を掻くならそれこそ今の内だが、まだ一般人に被害が出ているわけではないから、殺すとすると気が引ける。

だが、少なくともこの近辺から去って貰わねば依頼を果たしたことはない。中型の動物だったら運ぶのも可能かも知れないが、この巨体を運ぶとなるとかなりの大作業だ。そもそも生かしたままそれが出来るかという疑問の余地が残る。万が一運搬中に目を覚ましたら大惨事になる。

ここから退去するようお願いし、尚且つ鳥がそれを受け入れてくれれば問題ないのだが、念話を通じさせるには少なくとも相手の知能が人間並に高い必要がある。それに、移動した先で問題を起こさぬとも限らない。何しろこの巨体である。お腹が空けば人くらい食べてしまえそうだ。

止むを得ず、シユイは背負っていた鎌を手にする。その途端、巨鳥がパチリと眼を開けた。シユイの殺気に反応するかのよう。

鋭敏に過ぎる野生の勘に舌打ちしつつ、シユイは寝起きの巨鳥に疾走する。身体を半身にし、鎌を自分の身体に隠れるように構え、最接近するタイミングで跳躍。斜め下から勢いよく振り抜く。柄が撓り、先端の鎌刃が巨鳥の無防備な喉元に襲いかかる。

鉄火場で耳にするような、鋭い金属音が奏でられた。鎌を支える両の手に強い痺れを感じたシユイは瞬時に状況を把握。巨鳥が頭を引くとほぼ同時に鎌から手を離し、急ぎ後方に跳躍する。一瞬遅れて、巨鳥が頭突きするような所作で嘴を振り下ろした。長さが大人の背丈程はありそうな嘴が堅い地面に突き立てられる。その衝撃で

掘られた土や砂利が飛び散った。

シユイは両手を地面に付き、バク転の要領で大きく跳ね上がり、四つん這いで着地。10m程の距離を取って顔を上げると、巨鳥の嘴の半分程が地面に埋もれていた。これほどの威力なら人間の身体如き、易々と貫くだろう。

加えて厄介な事に、巨鳥を覆う羽毛はそれこそ合金の頑強さを備えていた。何といつても勢い良く振り抜いた、鋼より堅い金属の鎌が弾き返されたのだ。

流石に無傷とまではいかなかったようで、巨鳥の喉元からは薄らと鮮血が流れ出ているが、致命傷とは程遠いし、その傷を付けた鎌も今は巨鳥の足元に横たわっている。もっとも、手放さなければ先ほどの一撃を避け切れなかっただろうが。

シユイは戦法の見直しを余儀なくされる。殆ど無防備な相手に渾身の一撃が通じなかつた以上、武器単体での効果はおよそ期待できない。鎌を拾い直して付与魔法付きの一撃を喰らわせるか、弱点を見つけて攻めるくらいのものだろうか。

ヒエツ　ヒエツ！

午後の情眠を妨げられ、あまつさえ己を傷付けたシユイに巨鳥は威嚇を以って応じた。その鳴き声はしゃっくりの音が引っくり返る寸前の音に少し似ていたが、音量は比較にならなかつた。あまりの喧しさにシユイは両の耳を抑える。

ほんの一瞬、巨鳥の口の外に電気が散るのが垣間見えた。直後猛烈な悪寒に襲われ、シユイは咄嗟にその身を側面に投げ出した。

巨鳥の細い嘴から、先ほどシユイのいた場所に向けて雷が放たれる。それは巨鳥の足元から土を抉り、下から扇を描く様に、嘴が上を向くに連れて軌道も空へと向かう。

本来拡散するはずの吐息を限界まで集束させた雷線は土の水分を瞬時に蒸発させ、シユイの後方に生えていた木々の太い枝までも難なく断ち切っていた。射線上にあった幹から切断された梢がドサドサと地面に落ちる音が響く。破壊力だけなら最上級魔法にも匹敵し



そつだ。現状、自分が扱える障壁魔法くらいでは防ぐことは不可能だし、避雷針が通じる類の攻撃とも思えなかった。

状況を再度整理する。障壁魔法は牽制に使えるかも知れないが、下手に視界を悪くするとブレスの餌食になるかも知れない。弱点となりそうな目や嘴、首を狙って攻撃するのが効果的だと判断するが、鎌で頭部を狙うとなれば一瞬とはいえ相手の目の前にその身を晒さねばならない。

かといって、現時点では相手に効果のありそうな攻撃魔法を扱う事が不可能だ。あれほどの雷を放つ化け物に雷魔法の効果があるとはいえないし、焰魔法を森の中で使うのは愚行に過ぎる。水魔法は足場を悪くするから空を飛ぶ相手には向かない。唯一使えそうなのが風魔法だが、果たしてあの巨体に通じるかどうか。

シユイが悩んでいるうちに巨鳥が大きく翼を広げた。一瞬飛翔するのかという考えが脳裏に浮かんだが、残念ながら違った。

不意に広げられた双翼が勢い良く交差し、突風が巻き起こった。対魔物の実戦経験の浅さがシユイの初動を遅らせた。避け切る間もなく、全身が風に煽られる。足を懸命に踏ん張るも身体が起こされ、弓なりの格好になる。両足がわずらずと後退し、踵が堅い土を抉っていく。

束の間突風が止み、再度風圧が放たれた。一瞬風が止んだことで踏み止まっていたシユイはバランスを崩し、前に体が泳いでいる。今度は踏ん張ることすら出来ず、突風をまともに受けてしまう。

「うわあっ！」

足が地面から離れ、弾け飛ぶように身体が宙を舞った。シユイは広場を囲む木の幹に背中から突っ込む。

「がはっ！」

背中から強かに叩きつけられ、肺から息が押し出された。意識が遠くなり、身体中の感覚が失われる。樹の幹に寄りかかるように、ずるずると崩れていく。剥き出しの木の根に尻餅を付き、何とか意識は覚醒したものの全身の倦怠感が背中中の痛みと共に一気に増して

いった。

な、何てでたらめな強さだ。

視線を前に向けて巨鳥の姿と位置を確認し、自分が30m近くも飛ばされていたことに気付く。攻守共に隙が殆どない。これで空まで飛ばれたら手の打ちようがなかった。

遙か遠くに巨鳥の姿を見据え、シユイは激しく咳き込みながらも立ち上がるうとする。と、再び巨鳥の嘴が青白く光るのが見えた。痛みを押し殺して木の根を強く蹴り出す。シユイの身体が傾ぐや否や、雷線が巨鳥の足元から彼が寄りかかっていた木の根へ、そして空へと弧の軌道を描く。

縦に真っ二つに裂かれた木の、燻ぶっている切断面を眼前に見据え、シユイは安堵に、次いで恐怖に襲われる。身体が反応してくれなかったら、間違いなく息絶えていただろう。

たかが魔物一匹倒せないなんて、何て様だろうか。シユイは己を恥じ、慢心を強く戒める。

必死にやるしかない。蜂の群れを撃退した時のことを思い出せ。

膝を立て、痙攣する足に力を込める。何とか立ち上がると、巨鳥に向かってゆらりと身構える。

そこで、シユイはようやく気付いた。どこか暢気そうに巨鳥に近づいていく、ピアラスの姿に。

### 第十三章 〵(3)〵

いつの間に目覚めたのか、広場にはビアラスの姿があった。リュートを大事そうに抱えながら、巨鳥の方へと歩いていく。

「何やってるんだ！ とつとと逃げ」

制止し掛けたシュイに、ビアラスがゆっくりと振り向き、しーつと口元に人差し指を立てた。

巨鳥がシュイからビアラスに視線を移し、唸り声を上げる。ビアラスは巨鳥に向き直ると無造作に一步進む。その距離はもう10mほどしかない。巨鳥の口から燐光が生じた。ブレスの兆候。と、ビアラスは緩慢な動作で、しかし絶妙のタイミングで真横にステップする。

嘴くちばしから雷線が迸こぼった。硬い地盤に深い穴を容易く穿うつ。下からしやくりあげるような動作によって雷線の向きが下から正面へ移行。奥の木々を縦に寸断し、最後には空へと消える。

当たれば必死の攻撃を目の当たりにしながら、未だビアラスから戦意が伝わってくることはない。そのことにシュイはやきもきする。いつまでも避け続けていられるとは思えない。巨鳥には両翼を使った突風攻撃もあるし、空だって飛ぶかも知れない。若しくは鋭い嘴で襲いかかって来るかも知れない。いつ何時、ビアラスが殺されるかわからないのだ。

「オロロウ」

信じ難いことに、ビアラスはその場に腰を降ろした。意表を突かれたシュイが戸惑いの声を漏らす。ビアラスは柔らかい草の絨毯に胡坐あぐらを掻き、持っていたリュートを奏で始めた。未だ敵意の収まらぬ巨鳥を目の前にして。シュイは余りの無謀な行動に喉を震わせた。

「お、おい……」

何とか声を掛けようとしたが、踏み出しかけた足が止まる。ピアラスはギルドで出会った時の様に、やたらめったと打ち鳴らしているわけではなかった。子守唄のように優しげに、弦を摘むように弾く。

零れ落ちるような音。硬質な水が指の隙間から一滴、また一滴と垂れていく。生じた単音は周りの空間に少しずつ散らばり、森の奥へと吸い込まれる。一方で合間合間に紡がれる分散和音がいつまでも余韻を残している。

そして不意に気付く。その音色に力が乗せられていることに。自然界に満ちる魔力と結合コンビットさせるための魔力だ。自分と同質の。

まさか。

シユイが瞠目する。ピアラスは両手の指を均等に並んでいる弦の上で踊らせていた。ゆったりとした旋律が辺りに木霊している。

唐突に、巨鳥の怒気が収まった。先ほどまで耳に劈つんざくような雄叫びを上げていた巨鳥は首を傾げ、リュートを弾くピアラスをどこか興味深そうに眺めている。

上位干涉魔法の一つ、>身デポートも心も委ねよく。だが、それとて普通に使えば対人専用のはずである。少なくとも、シユイはそれが魔物に通じるなんて聞いた事がなかった。

『戦う？ チッガーウ』

先ほどピアラスが口にした言葉が脳裏に再生された。

やる気がなかったんじゃないやなくて戦う気がなかったのか、最初から。

「トウラントウラン、トウトウトウ」

口では不可思議な鼻歌を刻みながら、しかしリュートの音色だけではどこまでも穏やかに肌に伝わる。森が吐き出す清涼な吐息のように、どこか冷たさを伴いながらも決して不快ではない。身体全体が耳になったような感覚。敵意がないことを相手に伝える愉快なリズムが心の鼓動と同期する。

予期せぬことが起こった。碧色の巨鳥はピアラスが奏でるリュー

トの音色に合わせ、ゆつくりと、たどたどしく足踏みを始めた。すっかり警戒心を解いてしまったようで、ズシンズシンと大きな足音を響かせながらその場でぐるりと一周した。一瞬とはいえ、あれほどいきり立っていた巨鳥がこちらに背を向けた事が信じられなかった。

シユイはリュートを弾き続けるピアラスを茫洋とした面持ちで見つめていた。一心不乱に、額に汗して弦を摘み弾くその姿に、不覚にも美しさを感じ取った。

傷付けたくない。殺したくない。貴方を理解りたい。そんな感情が魔力を含む韻に乗って具に流れ込んでくる。まるで念話の効力をそのままに旋律へと変化させたかのようなであった。耳に触れてくるメロディはどこまでも牧歌的で、音色が自分の殺気立っていた心までも解きほぐしていくのがわかる。

緑豊かな故郷の風景が目の前に開かれていく。牧羊犬に急かされて柵の中に入っていく羊の群れが。丘の上に佇む大きな杉の木が。澄み切った水を湛えた小川が。その小川から水を汲み出す風車小屋と粉引き小屋が。

郷愁と拒絶、二つの感情の波が双方向から同時に襲ってきて、目の前でぶつかった。衝突は白い波紋を生じ、自分の身体を包み込んでいく。

恋しい、怖い、観たい、観たくない。

「あ……あ……」

シユイは両手で頭を抱え、その場に膝を付いて蹲る。

フラツシュバツク。懐かしい顔が見える。顔を合わせる度に挨拶してくれた、優しい青年が。日が暮れるまで一緒に遊んでいた、こましゃくれた幼馴染が。戦い方を教えてくれた、父にも似た威厳を持つ壮年の男が。強くて誇り高く、でもどこか儂げな、あの少女が。

ミレイ。

ロッキングチェアに揺られながら、自分に向かって微笑みを浮

かべる白髪の少女に、シユイは蹲りながらも手を伸ばす。しかし、その手が届く事はない。少女の顔が、少女のいる景色ごと遠ざかっていく。

行かないで！

堪え難い感情の波が胸を震わせているのがわかる。上半身の筋肉が痙攣し、胃液が込み上げてくる。喉の下が鳴る。今にも吐きそう

だ。  
僕は、最後の最後で彼女に拒絶されたのだろうか。皆のためと嘯うそいて、自分勝手に力を振るっただけなのだろうか。そんな僕が存在することを、世界は赦すのだろうか。

シユイの思考が疑問で黒く塗り潰されていく。いつそのまま消えてしまえば。そんな考えが浮かんだ刹那、耳に不快な雑音が生じた。

「あ……」

見ていた景色が再びホワイトアウトする。掲げた自分の手すらも見えない、白い闇の中。それでも聴覚だけは機能していた。先ほどの心地良い音色が無残に破壊されていくのがわかる。頭とも耳とも付かない場所に鋭い痛みが生じ、堪らず目を瞑る。

痛みが徐々に治まっていき、再びそつと目を開けると、そこには今の自分が見ている景色があった。

「うわっ」

視線の先にいる物体を頭が理解し、反射的にのけぞった。ピアラスの顔が間近にあった。

「だダーいジヨブ？」

首を傾げるピアラスを視界に捉えながら、シユイはずきずきと痛むこめかみを捻る様に押さえる。

「……な、何だったんだ。今の……」

ピアラスは申し訳なさそうに、少年のように指で鼻の上を擦る。

「アーあ。おレノメロディに中<sup>あ</sup>てられテ、ノーもあカオスがどんと  
コーイ！」

「……アンタの奏でた音に、頭の記憶が一気に蘇<sup>あ</sup>ったってことか？」  
「イエーア！」

ビアラスが両手の親指を下に向け、高らかに叫ぶ。どうやら合っ  
ているのだと察するも、その指が何を意図しているのかまではわか  
らなかった。

数秒ほどぼーっとしてから、周りの様子に明らかかな変化があるこ  
とに気付く。

「……あれ、あの鳥はどこに？」

「トンでトンで、回<sup>あ</sup>ってばいばーい」

ビアラスは両手を滑らかに動かし、羽ばたく真似をした。

「……逃したのか」

「チツガーウ！ 帰<sup>あ</sup>っタおうちあっチ！」

「お家？」

「俺ノジシン作、？望郷の旋律？。キソウホンのーこそばユイ、ツ  
ンツン」

望郷。帰巢本能の刺激か。

「……あの演奏は、詠唱破棄の干涉魔法？ >デポートくなのはわ  
かったけれど」

「アッテルしまチガってル。音楽は全てにツーじる！ ……でも、  
最近おツージきてナイ」

ビアラスはしょんぼりと肩を落とす。

演奏に魔力を乗せる手法は祈歌に魔力を乗せるチャンターに通じ  
る物がある。だが、魔物にすらそれを理解させるとは、ビアラスの  
吟遊詩人としての腕前は相当なものなのかも知れない。ついでに、  
便秘なのかも知れない。

魔物に対しても力で解決しようと思わず、研鑽<sup>けんさん</sup>した干涉魔法を用い  
て心を通わせたビアラスに、シユイは尊敬の念を抱き始めていた。  
段々と会話が成り立ってきていることに妙な感動を覚える。その反

面、自分が聞き慣れただけでなく、彼の言葉が輪郭を取り戻しつつあることに気付く。

取り戻しつつある？ あれ、何でそう感じたんだ？

その違和感は少し気になったが、否いやと思ひ直す。今はビアラスの話の続きを聞くことにする。

「アーン。彼ワカレはイヤーいやー連れテ来られタ言ッてタ、こ  
こニ」

「……嫌々ここに？ あれだけでかい鳥が……誰に、どうやって？  
俄にわかには信じ難い話だった。あれほどの魔物を力にづくでどうにか  
出来る者がそうそういるとは思えなかった。

「黒イ変ナの言ッてタ！ たくさんタクサン……貴方黒いけどタク  
さん？」

「いや、俺は違うけど……。それより、俺のような格好をしていた  
奴に無理矢理この場に運ばれたってことなのか？」

「ソウそうソんな感ジ。タぶん、俺ビアラス」  
「それは知ッてる」

黒いのがたくさん。それを聞き、シユイは一つだけ心当たりがあ  
った。そして、おそらくはそれが正しいことを確信する。

やはり、キャノエの教会にいた奴らの仲間か。でも、何のた  
めに……

「……ビヒン！」

突然ビアラスが立ち上がり、何やら喚わめき始めた。シユイは思考を  
強制的に中断される。

「あ……イケナツ！ 駄メツ！ キレ……かかってル！ このまま  
ジャ俺キレル！ とても、ヨク……きれル！」

キレルも何も最初から十分キレキレではないか、とそう思わない  
ではなかった。悪い意味でも良い意味でも、侮蔑と尊敬の念を同時  
に抱かせる者が存在するのだということに軽い感動すら覚えていた。



だがビアラスは、今度は熱でもあるかのように自分の身体を抱き、ぶるぶると大きく震え始めた。下唇が真っ青になり、小刻みに振動している。どう見てもただごとではないその様子にシユイが慌ててビアラスの両肩を揺り動かす。

「ど、どうしたんだ！ 病気の発作か！」

「……三日ニイツカイ！ 夢イツパイ！ 素敵……なオク……すり」  
急激にビアラスのテンションが下がってきた。彼は震える手でガラスの小瓶を取り出した。コルク栓で封がされたそれには薄い青色の粉末が入っている。どうみても医薬品の色とは思えない。毒じゃないかと疑いたくなる鮮やかな青だった。

次に取り出したのはスプーンだった。手を震わせながらも使い慣れた様子で、スプーンに粉末を乗せ、次いで溶剤の小瓶を取り出し、透明な液体を粉末の上に数滴垂らす。

「……あヒヒヒ……ウヒ火ヒ」

ビアラスはスプーンを持っていない方の手を上に向け、人差し指の先に火を灯す。スプーンを慎重に火にかけると粉末と溶剤が溶けだし、次第に混ざり合う。

「これデ……ゲンキ。ウヒツ……うひっ」

虚ろな笑い声を上げるビアラスの様子に、シユイは得体の知れない寒気を感じた。明らかに、彼はいけないことをしている。彼は注射器を取り出し、出来た混合液をそれに充填する。次いで袖そでを捲り上げ、痛々しい注射痕に更なる痕を加えようとする。

「……ちよいまち。もしかしてアンタがまともには喋れないのって」  
「……それどころか、髪が荒れているのも、急に叫びだすのも、……ついでに便秘なもの？」

「ノンのん！ ……これオレノ勲章、オトこのあかシ！」  
ビアラスは赤黒く変色した注射痕を指差して誇らしげに語った。

「何が勲章か！ 刺青いれずみより質悪たちいわ！」

シユイは怒鳴りながらビアラスの腕をむんずと掴む。するとビアラスは何を勘違いしたか

「お！ おまオマもやる？ ヤルー!?」

と期待の籠もった目をシユイに向ける。酒か煙草に誘つようなお気楽さで。

「アンタ、話ちゃんと聞いてんのか！ 誰がやるか！」

「やる!? ハイどウゾー！」

ビアラスは興奮気味に薬剤充填済みの注射器を差し出した。

「ニュアンスで気付け！ 全否定だ、馬鹿！ 絶対やらん！」

「あら！ せっかく、ソウ。もーソウ、まいソウ、俺死にソウエイ！」

支離滅裂な言語を乱発するとビアラスはおもむろに口を開け、舌を出した。普通より長くて、やたらと血色が悪い。だらしく垂らした舌をゆっくり注射器に近づける。

注射痕関係ねえ！ やっぱ止めよう。

シユイは無造作に、ビアラスの目の前に手の平を差し出した。

「おろウ?」

「……>母の温もりに抱かれよ<」

シユイが言葉を紡ぐと、段々とビアラスの動きが弱々しくなる。

やがて力を失い、そのまま寝息を立て始め、あまつさえ鼻提灯はなちよつちんを作り始めた彼を見て、何とも言えぬ感情に囚われる。

溜息と一緒にそれを吐き出すと、シユイはビアラスが手放した注射器を粉々に踏み砕き、彼の身体をそつと肩に担ぎ上げた。

## 第十四章 風雲（1）

フォルストローム王都の北部。火山に点在するカルデラ湖の一つ、シャダラ湖。夏にはボート遊びに訪れる者達で賑わうこの湖も、深夜とあつてひっそりと静まり返っている。薄雲を被せられた月が微かに光を放って存在を主張しているが、灯りとするには心もとない。虫たちの声に交じって、時折魚の跳ねるだけが断続的に聞こえる砂浜の近くには、息を潜める人影が四つあった。

ふいに、砂浜にほど近い浅瀬で何かが動いた。それは水辺の側からでもはつきりわかるほど大きく、かなりの速度で何度も円を描くように旋回していた。その姿が再び見えなくなり、次いで気配を殺していた四つの影が慌しく動き出した。

「よし、引き絞れ！」

合図と共に三人の男が手に持つ荒縄を思い切り引っ張る。撓たわんでいた荒縄が双方向に引き伸ばされ、一本の直線となつて小刻みに震えた。

縄の先端は湖の中に沈んでいる。湖面にはピンと張り詰めた縄が縦横無尽に踊り回り、それを白い水飛沫が逃さずに追い掛ける。何か仕掛けた罠から逃れようと懸命に足掻いているのだ。

「と、とんでもない力ですよ！」

「まったく、化け物相手に体力勝負を挑むなんて馬鹿げてるぜ！」

綱を引いている二人の獣人、やや小柄なトムスと上背のあるウーダが言動に焦りを含ませる。必死に縄を引き寄せようとするが、踏ん張る足の方はずると湖に引き摺られ、履いている靴の爪先が砂に埋もれていた。幾重にも編んだ丈夫な縄が軋んだ音を立てている。

「ぼやいている暇あったら手え動かせ。これを逃したらまた野宿に逆戻りだぞ。ワイリー！ そちらはどうだ？」

一番先頭にいる人族の男、ザツシュはしつかりと縄を握り締めながら後方に視線を走らせた。そこには石の混じった地面に両膝を付き、手を組んでいる若い獣族がいた。何事かに意識を集中しているようだ。

「方陣の配置終わりました！ いつでもどうぞ！」  
頼もしい返事を聞いたザツシュは水面に視線を走らせる。

「よし、奴をもう一度水中から引っ張り出すぞ。出し惜しみはなしだ、短時間でケリを付ける！」

『了解！』

縄を持つ三人はガニ股になって腰を落とし、渾身の力を以って縄を引き寄せる。先ほどよりも湖面に生じる水飛沫が大きく、荒くなり、幾重にも波紋を残す。

「ぐぬぬぬ……」

「ぐつ、こんちくしょー！」

三人は顔を真っ赤にしながら、歯を砕けんばかりに食い縛った。

「いつせーのー……」

ザツシュの小さな掛け声に反応し、獣族二人の踏ん張る足に力が込められる。

「せい！」

肘を斜め下に引き、瞬間的に体重を掛ける。湖面からの引きが和らいだ。待ちに待ったチャンス到来に、三人は疲弊していた身体に力が戻るのを感じた。余った力を全て、縄を引き手繰る作業に注ぎ込む。

いつの間にか、触れている縄には水に濡れている感触があった。

徐々に獲物がこちらに引き寄せられているのだ。

唐突に抵抗が止む。引ッ掛かっていた何かを外れた様な、そんな感覚があった。

「ワイリー！ 来るぞ！」

「わかつてますつて！」

間をおかずに、鮮やかな黄色をしている何かが水面に揺らいた。ただ一人、縄を引く重労働から逃れていた細身のワイリーは舌舐め擦りをする。

湖面が半球状に盛り上がった。湖の水に包み込まれた黄色い物体が、喉の奥に引ッ掛かっている釣り針から逃れるべく水面に向かつて急浮上する。

「>雷ライトニング・スピアの投槍く！」

間髪入れずワイリーが準備していた魔法を発動。ワイリーを囲む術式の強化方陣が明滅し始める。掲げる手の平の真上に細い雷が四方から集結し、槍の形状を形作っていく。

続いて水面から飛び出したのは怪物の巨体だった。魚が跳ねるかのように、黄色い化け物が空中で全身をくねらせる。即座に待ち構えていたワイリーが、それに向かって槍を投擲。雷を帯びた槍が闇夜に稲光を散らしながら獲物に迫る。

グギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

槍が怪物の長い首の付け根辺りに命中。背の方から僅かに突き出た。槍から生じた電流が貫かれた怪物の身体を蝕むくは。怪物が軋へたむよくな悲鳴を上げ、水面に叩きつけられる。湖面の水が大きく跳ね上がり、屋根の高さ程に至った。

跳ねた水飛沫をまともにも身に浴びながらも、三人が縄から手を離すことはない。

「……上出来！ ワイリー、どれくらい維持できる？」

「たつぷり時間貰いましたからね。あと数十秒くらいならもたせられます」

「よし、魔法が効いているうちにやつを陸に引き揚げる。いくぞ！」

ワイリーが刺さった雷槍を詠唱で維持することに努め、残った三人が縄を手繰り寄せる。先ほどと違って抵抗はかなり弱くなっている。槍から持続的に放たれる電撃で怪物が思うように動けないためだ。反して、三人が持っている革製の縄は電気を通さない。引つ張る三人がついにワイリーの体を追い越し、更に後ろへと下がっていく。

水面が鈍く光った。雷の槍が燐光を散らしている。間を置かずして水面に怪物の長い首が現れた。怪物の口の中には三人が手に持つ太い縄が続いていた。大きな鉤爪のような釣り針に豚の死骸を括り付けた、特製の釣り道具だ。

黄色い怪物の巨体を湖から陸地に全て引つ張り出し、ワイリーが詠唱を中断する。雷槍が消失したのを見届けたザツシュが縄を手離し、鞘から剣を抜き放って怪物に突進した。

怪物が自分に向かってくるザツシュを敵と見定め、長い首を後方に撓らせて鞭のように振り抜いた。ザツシュは左から地面スレスレに迫る首をジャンプして飛び越える。

大きな風切音が辺りに響いた。攻撃を避けたザツシュがそのまま怪物の背中目掛けて刃を下向きに固定。体重を乗せた剣を大きな背中に突き立てる。

刀身の八割ほどが埋まり、噴出した血が剣柄まで溯る。怪物が苦痛に身を大きく仰け反らせた。背に乗ったザツシュを何とか振り落とそうと足掻くものの、動きに先ほどの精彩はない。怪物には水を掻くための鰭も背鰭もあるが歩くための足は存在しない。無論水中では凄まじい速度で泳げるのだから、陸の上では無力に等しかった。加えて、ワイリーの電魔法にかなり体力を削られていたのも一因だろう。

己を足蹴にするザツシユに意識を向けた怪物に、残った二人の獣族が疾走。振り回している首の動きにのみ注意を払いながら無防備な脇腹の方に回り込み、剣を振り下ろす。

肉を裂く音が響き、怪物の身体に新たな傷が生じる。呻く怪物がそちらに意識を向けかけた刹那、逆方向から鋭い一撃が加えられた。今度はカツンと硬質な音がした。トムスの槍の穂が怪物の肉を貫き、腰の骨にまで到達したのだ。

瞬く間に傷が一つずつ増えていき、怪物の動きは目に見えて弱々しくなっていく。流れる血が身体の半分ほどを紅に染め、ついにその場に崩れ落ちた。

「やれやれ、これでやっと王都に戻れるな」

今回の任務に置けるパーティリーダー、人族のザツシユは血糊のついた刀身の細い長剣をゆっくりと鞘に納めた。一月ほど前に現れたという怪魚、魚と言って良いのか迷う形状だが、そのグロテスクな死骸を見て、軍人たちは安堵した表情を浮かべている。

「あーあ、やっぱり手袋してくれば良かったなあ。おかげで手がこんなに」

トムスは口を窄めながら両手を見せた。荒縄の摩擦と格闘していた手は皮がずる剥け、所々赤い筋肉が剥き出しになっている。

「うわっ、やめてくれよ。見るだけで痛いって」

ワイリーは血が滴るトムスの手から怯えるように視線を反らした。

「それより早くひとつ風呂浴びたいぜ。いくら近くに温泉があるっていつてもあれじゃあなあ」

「はは、お前は猫肌だからな」

同期の獣族ウーダに、ザツシユは親しみとも苦笑とも付かぬ笑みを浮かべた。討伐を命じられ、この湖に着いてからも二週間近くが経っている。人的被害が出ていたため、敵の姿が見えないからと

いって直ぐにその場を離れるわけにもいかず、四人は交代で見張りを続ける羽目になった。少し体臭も気になり始めている。

一応温泉はあったが、付近が火山帯とあって湯の温度がかなり熱かったため、長く浸かるのは無理だった。熱い湯が苦手なウーダにとってはこの二週間、拷問のような日々だったに違いない。

「……ザツシュ先輩。こいつってどう見ても湖にいる類の魔物ではないですよね」

トムスは自分の手に包帯を巻きつつ、怪物を見降ろして形状を確認する。

既に息絶えている黄色い怪物は、首が異様に長く、ウツボと鮫さめを合体させたような姿をしていた。口元には小さくて平べったい歯がびっしりと生えている。噛み砕くと言うよりも、すり潰すための形状だ。口蓋の大きさだけでもゆうに1mを超えているだろう。この口で水遊びをしていた子供を捕らえ、丸呑みにしたのだという。その子が果たしてどれほどの恐怖と苦痛に襲われたかは想像に難くない。

腹の中央から尾に掛けてはザツシュの剣によってかつ捌かれている。当然ながら、子供の痕跡はどこにも見当たらなかった。とつくに消化されてしまったのだろう。

「どこにいたって困るぞ。こんな気色悪いやつ。姿形を聞いた時には耳を疑ったが、よもや本当に化け物が釣れるとはなあ。世界の果てで共食いでもしていりゃあいいものを」

ザツシュが忌々しげに首を振った。ゲテ物耐性のない彼にとっては、こんな不可解な形状の生き物が存在していること自体が腹立たしいようだ。

当然と言えば当然のことだが、子供を目の前で一飲みにされた両親たちの取り乱しようは、半端なものではなかった。てつきり聴取された情報には少なからず脚色を加えられているものと思っていた



のだが、こと姿形に関してはそれほどの開きがなかった。

「仇を取れたのがせめてもの慰めですね。やっぱり、この化け物も昨今の異常と関連性があるんでしょうか」

先般よりフォルストロームでは似たような事件が頻発していた。平年と比べても近隣での魔物との遭遇率は異常値を示している。王都に限らず、領内の町でも同じような状況だという。今回は軍の大半の者が出払っているため、今回も已む無く経験が浅い、若年の軍人ばかりでチームを組まされた。

それでも四人は各々の力を存分に発揮し、別段重傷を負うような事もなく怪魚を討伐した。普段から厳しい訓練を課されているが故に、フォルストロームの軍人たちの戦闘能力は四大国の中でも随一と言われている。その背景として、この国では上の者に対する国民の信頼が厚く、軍属を望む者が後を絶たないことが挙げられる。大勢の中から優れた者だけを選別する余裕があり、一番下っ端の兵卒であっても並大抵の戦士では及びもつかない練度に達しているのだ。

痒いのか、ウーダは背中をぼりぼり掻きながら口を開く。

「あつてもなくても俺らのやる仕事は同じさ。脅威が現れたら排除する、ただそれだけだ。ま、難しい事はもう少し偉くなってから考えようぜ。それよりこの魚、どうする？」

「何だ、もしかしておまえ、食べたいのか？」

「ザッシュはそう言いつつもウーダからじりじりと遠ざかる。」

「ばっ、ちげーよ！ って、何距離取ってんだ。そんな目で見んな！」

ウーダは心外だと声を荒げる。

「まあ、いかにも珍種ですし、学術的価値はあるかも知れませんが、そうそう、ワイリーは流石に良く理解して」

「が。幾らなんでも大きすぎますね。何よりこの温度と湿度では街に着くまでに腐敗してしまうし。氷魔法の使い手がないこと

を鑑<sup>かん</sup>みても持ち帰るのは……」

淡々と事実のみを告げるワイリーに、ウーダの言葉が続く事はなかった。

「はは、確かに良く理解しているよなあ」

「うっせーよ！」

そっぽを向くウーダの耳に三人の笑い声が響いた。

老年の獣族の男が城郭の屋上で佇<sup>たたず</sup>んでいる。布地の中央に銀糸で獅子を象った刺繍が施されたマントを風に靡かせ、緑豊かな王都を眺めていた。フォルストロームの王にして大陸最強と謳<sup>うた</sup>われし戦士、キア・フォルストローム。既に六十を越そうという年齢であるが、精悍な顔立ちはかつての強さを未だ堅持していることを窺<sup>うかが</sup>わせる。巨木を思わせる体幹を持ち、身の丈は2メードを超えている。袖から剥き出しになった丸太のような腕には幾多の戦いを乗り越えてきた証である小さな古傷が無数に刻まれていた。

「やはりこちらにおられましたか」

キアの後ろ姿を見止めた森族の宰相、レギンからのんびりとした声が発せられた。灰色の髪に褐色の肌は一見すると獣族にも見えるが、横に尖った耳は森族の特徴である。見た目は四十ほどにも見えるがエルフは長寿で知られている種族である。実年齢はキアよりもかなり上だった。

「ここ数日どうにも寝付けぬのでな。少し夜風に当たりに来た」

その言葉を表すかのように、振り向いたキアの目には濃い隈が

ある。視線が合うとレギンは丁寧に会釈し、数歩の距離をおいてキアと同じように手摺に手を乗せる。レギンとて中背といって差し支えぬ体格だが、それでもキアと並ぶと大人と子供ほど差があった。

「あまり根を詰め過ぎませぬよう。お体に障りまするぞ」  
気遣いの言葉を掛けられたキアは不快そうな顔を作る。

「はあ、ついに古参のそなたまでが年寄り扱いを始めたか。全く、アミナが力を示し始めてからというもの、城の者どもが口煩くわんわんくなって敵わぬわ。いつそふらりと温泉巡りにでも出掛けるか」

「お戯れを仰いますな。皆、あなた様のことを心底案じておるのです」

「生憎だが、体は頗すこぶる調子がいい。要らぬ心配と切って捨てるのは気が引けるがな」

「王という立場を考えれば、用心に用心を重ねても足りぬほどですぞ」

説教される年齢でもないのだがな、とキア王は肩を竦めてみせた。

「まあ、それはそれとして。解決済みの事項ですが一応ご報告に伺いました。先日王都東のパラミア峡谷にて発見された鋼獣ベヒモスがフラムハートの面々によって無事退治されたということです」

「そうか、事態の收拾に時間がかからなかったのが救いだな」

「御意。依然として楽観視は出来ぬ状況にあります。被害の方は最小限に食い止められていますね」

ここ数か月の間、魔物が人里に近い場所に現れたという知らせが軍部に相当数舞い込んできている。迅速な対応を行ったために被害の方はそれほど拡大していないが、兵たちへの負担は増すばかりだ。どの町も人手不足に悩まされており、応援を求む声もちらほらと

出始めている状態だった。

「まこと、皆の働きに感謝せねばならぬな。冬の特別報酬ボーナスはちと弾まねばなるまい。時にレギン、そなたは今回の騒動、どう見ている？」

「どう、と申されますと」

レギンは表情を変えずに応じた。ある程度は質問の意図を理解しているようだった。

「まあ、大雑把に言えば騒動の背景、首謀者の推測、そして今後の対応だな」

「ふむ、私如きの意見で恐縮ですが、求められたならば答えねばなりませんまい」

「忌憚きたん無く申してよいぞ」

「畏まりました。まず、これほど大掛かりな騒動を起こすと考えるとかなり綿密に計画を練らねば実行は不可能、最低でも数年越しの計画でございます。相当数の人手も必要ですし、大規模な組織が動いているのは確かかと」

「うむ、我が国の転覆を狙っていると考えている者たちも少なくないようだが」

「憶測に過ぎませぬが、私は、敵はそこまで望んではないのではないかと考えております。と言うと、少し語弊ごへいがありますかな。それほど効果を期待しているわけではないのだと存じます」

「我々がそれほど甘くない相手であることを理解している？」

レギンはキアアの質問を吟味し、数秒してうなずいた。

「それも理由の一つでしょうな。しかしながら、被害が少ないとわかって尚実行するということは、少なくともこの国を混乱させる、若しくは目を騒動の方に向けさせる陽動、といった意図が見えてきます。本来の目的を達成させる前の下準備、といったところですか」

キアアの目が鋭さを増した。

「ふん、この騒動すらも前座と言うわけか。気に食わぬな」

「お怒りはごもつとも。ですが、そう考えると幾つかの不可解な点に信憑性を持たせられるのです。まず、軍の者が始末した魔物の何匹かには、明らかに人の手で刻まれた呪字が見つかったという報告が届いております」

「聞き及んでいる。呪術系の<sup>デビル・マンサー</sup>魔物使い<sup>く</sup>が与しているのは間違いなさそうだな」

「ええ。それからもう一つ気になる情報が。先頃城下のギルド・シルフィールの傭兵たちが魔物討伐の依頼を受け持ったそうなのですが、彼らが申すには騒ぎを起こしていた魔物が妙な連中に無理矢理運ばれてきたようだ、と」

「ほう。それは、目撃証言か？」

「いえ。俄<sup>にわ</sup>かには信じ難い話ですが、魔物と意思疎通を図ったということですね」

「そういうことが」

「……割にあつさりと納得されるのですね。私などは耳を疑いました」

「そういった知り合いもいないではない。状況と照らし合わせればありえなくもない話だし、わざわざそのような妄言を申す傭兵もいるまいよ」

確かに、とレギンは相槌を打った。

「ただ、あれだけの数の魔物を力ずくで従わせてしまうような連中にしては、やり方が少々手温い気がします。魔物を<sup>けしか</sup>嚇けるといふ作業においては如何せん不確定要素が強いため、開花せずに破綻した計画もあると思われませんが」

「それにしても被害が少な過ぎる、か」

「左様でございます。それほどの使い手がいるならば、正体を気づかれぬよう末端の方から我々の戦力を削っていく事も不可能ではないはず。しかしながら、先ほども言いましたように表立って仕掛けてくる様子はありませぬ」

如何にフォルストロームの兵の力量が確かだとはいえ、皆が皆魔物を顎あごで使うような相手と互角に戦えるかというところと決してそんなことはない。やるうと思えば魔物討伐に現れた兵たちを逆に強襲するようなことも出来るはずだが、未だそのような報告は届いていない。

「ともすると、兵力の分散が狙いか」

「現時点では、その可能性が一番高いかと。殊ことに、隣国のセーニアで不穏な動きがあるとの噂もありますからな」

老王の三角耳がピクリと動く。

「戦の準備か」

「おそらくは。仮にも教国を名乗る国が不可侵条約を結んでいる我が国に出兵するとは考え難いですが、一年半前の件もありますからな」

「コンラッド・デアアードの暗殺、か。未だあの内乱には得心がいかぬが、あれがなければセーニアはもう少し早くに動き出していたのかも知れぬな」

「でしような、何せ彼の者はセーニアの精神的支柱であったと言っても過言ではない。我々が先王を失った……」

口にした後で自分の言動に気付き、レギンが慌てて口を噤む。

「も、申し訳ありません。口が軽うございました。この罰は如何様にも」

「よい、もう過ぎたことだ。悔いたところで戻らぬし、一番辛かったはずのアミナが立ち直っておるのに儂が悲嘆に暮れているわけにもいくまいよ」

レギンは安堵とも自嘲とも取れる溜息を吐き出した。

「失礼いたしました。いずれにせよ用心に越したことはございません」

「うむ、新兵の訓練を急がせよう。そなたは、今回の件にセーニアが絡かんでいると思うか」

レギンは即答を避け、黙考ふけに耽る。

「正直、解りかねますな。先方とは長年に亘ってそれなりに良好な関係を保ってまいりましたし、ここ最近目立って何か起きたという事もありませぬ。それは件の組織にしても同様、我が国に明確な敵意があるかは何とも」

「敵意がなくとも敵対行動を行っているのは紛れもない事実だがな」  
「ですな。加えて、油断できぬ相手なのは確實。魔物を駒のように扱っていることから見ましても、魔物の力量を遥かに凌駕する使い手が加担していると見て間違いありません。……その」

「うん？ 何だ」

流暢に喋っていたレギンが言葉を濁すと、キアがわずかに首を傾げた。

「少々申し上げ難いことなのですが、獣姫様にはしばらく単独行動を控えていただく方が宜しいかと。姫様のお力は私とて重々承知しておりますが、敵の規模や目的が掴めていない以上、御身に万が一のことがないとも言い切れませんまい」

「……ああ。ううむ」

孫娘のことに話題が及んだ途端齒切れが悪くなった老王に、レギンは場にそぐわぬ笑みを誘われる。なればこそ、これだけは伝えておかねば、と語気を強くする。

「仮の話ですが、獣姫様が捕らわれて人質と使われるような事あらば王の身、ひいてはフォルストロームの危機ですぞ。ディアード殿を殺めた犯人も未だ捕らえられていないようですし、その二の舞となることだけは避けねばなりません。少なくとも敵の目的や動向が明るみになるまでは」

何卒、と上半身を斜めにするレギンを視野に収め、キアは重い溜息を吐き出した。

「わかった、そちの忠言を無駄にはすまい。アミナには儂から伝えておこう。……すまぬ、そなたらには今しばらく苦勞を掛けることになりそうだ」

「なんの。フォルストロームを守りたい気持ちは王と一兵卒、なんら違いはありませんぞ。では、新兵の訓練と警戒区域については私なりに纏めてみますので、キア様も少し休まれますよう。明後日、立案をお持ち致します故」

やはり氣遣われてるな、と老王は苦い笑みを浮かべる。

「では、その言葉に甘えるでしょうか。休める時に休むのも仕事だからな」

「そうなされませ。寢所は既に整えてございます。下に参りまじょう」

キアはうなずき、歩き始めたレギンの後に続いた。去り際、ふと広い肩越しに遠い町の灯りに目を凝らす。

活力に満ちたこの数多の輝き。たとえ相手が何者であろうと絶やさせるわけにはいかない。キアの双眸には歴戦の戦士すらも戦慄させるだろう強靱な意志が漲みなぎっていた。



## 第十四章 〵(2)〵

巨鳥を追い払ったシユイとビアラスは、再びガラムの操縦する魔石船に乗り、フォルストローム王都に戻ってきていた。本来は依頼を達成した時点で完了報告をする必要があるのだが、近いうちに鳥が再び戻って来ないとも限らなかったため、ガラムが一週間生簀いけすの様子を観察し、異常がないのを確認してから報酬が支払われることになっていた。

完了報告までの一週間。知り合ったばかりのビアラスはギルド支部の受付の計らいにより、麻薬を抜くための専用施設へ拘留されることになった。医師の話によれば、服用していた物は一応合法化されている薬のようだ。とはいえ、明らかに使用限度量を超えていたため、緊急の処置が望ましいとのこと。結論から言うと、数ヶ月くらはいは療養生活を余儀なくされるようだった。

そんなこともあって、甚はなはだ不本意ながらビアラスの分の報告書までシユイが纏め上げるようになった。仕事中に歌詞ともポエムとも付かぬ物を書いてきたから、ビアラスも報告書くらいは書けるはずだ。そう必死に訴えたシユイだったが、禁断症状でそんな物が書けるはずがないと断言され、申し出は敢え無く却下された。

何でこんなことをやらされているのだろうか。シユイはぼやきながらも宿に籠もり、二人分の書類と向かい合い、必死に筆を走らせた。丸一日掛けて何とかそれを纏め上げると、筆記用具も片付けぬままに布団に入った。

翌日、シユイは朝早くに呼び鈴を鳴らされ、次いで宿のボーイに来客を告げられた。客と聞いて真っ先に浮かんだのはニルファナの顔だった。

シユイが恐る恐る一階のロビーに顔を出すと、フリル付きの黒い生地で作られた服を着た獣族の女がパーソナルソファから立ち上がるのが見えた。

「初めまして。シユイ・エルクンド様ですね？」

シユイが口を開く前に、女が機先を制した。

「あ、はい。初めまして」

かつて見た事がないほど優雅な会釈を披露した女に、シユイは自分なりの、精一杯の会釈を返した。やや背の高い、大人びた女だ。服だけでなく頭にもフリルの付いたカチューシャを付け、その一挙一動には、戦闘とは別の意味で隙がない。背筋はピンと伸び、合わさった足は些細なズレもなく、着こなしを見ても一家言ありそうな雰囲気だった。シユイは自分がどこか構えているのに気付き、その事に苦笑いした。知らずと年上の女性に対する苦手意識が芽生えているらしかった。

「よかったです。昨日こっそり後を付けさせていただいたのですが途中で見失ってしまい　あら、いけない。私とすることが申し遅れました。私、フォルストローム王城でお勤めさせていただいているリス・ヘイロンと申します。実は少々お聞きしたいことがございました」

「俺にですか？　何でしょうか？」

聞き捨てならないことが一点あったが、触れるのも怖いので後回しにした。

「失礼ですが、シユイ様は我が主君アミナ様とご面識が？」

「あ、ええ」

シユイは返事をしつつアミナの姿を思い浮かべた。続いて、あれが面識と言えるかどうかは微妙なところかな、と首を傾げる。

「それより今、主君と言いました？」

「はいつ。私は姫様が幼少の頃からお仕えさせていただいております。言わば、幼馴染兼お付きメイドといったところでしょうか。あ、どうぞそちらの席にお掛けになって」

「は、はあ」

シユイはどこか緊張気味に、奨められるがままに、向かい側にあるプライベートソファに腰掛ける。

「では、単刀直入にお聞き致しますね」

リズはコホンと一つ咳払いをする。

「その、姫様への想いはまこと、偽りなきものなのですか？」

「……は」

言っている意味がわからず、シユイは言葉を返すことが出来なかった。

「真剣に答えていただきたいのです。その、恐れ多いことだとはわかってはいるのですが、私は姫様のことを実の妹の様に思っています。あの子が思い悩む姿を見るのはどうにも辛過ぎて、一周して萌えてしまっんです。このままでは仕事に手が付かなくなってしまうんですわ」

「はあ、それは」

何かを言いかけたシユイに、リズは言葉は不要とばかりに首を横に振る。ついでに向けられた、白い手袋に覆われた手の平に妙な威圧感を感じた。

「仰らずともあなたの懸念はわかっております。ええ、わかっております。確かに由緒正しき王家の姫君とそこいらの犬の糞、身分差は歴然です。悲劇的なまでに。ですが、だからこそ萌え、もとい、燃え上がると思いませんか？」

「その、ええとですね」

とりあえず、犬の糞はないんじゃないでしょうか。せめて石ころくらいに格上げしていただけると。そのささやかな反論はリズが継ぐ言葉に遮られた。

「ああ、やっぱり！　そうですね。禁断の恋、いいですよ。大丈夫、ベタと言われようと怯むひることはありません。良いものは良いのですから。そう、恋愛小説でいえば、ナハル・ベルファー二辺りの作品でしょうか。引き裂かれた運命を何度も紡ぎ直す甘く切ない恋物語は巷ちまたでも泣けると評判で」

「あ、あの！」

歯止めのかからぬ会話を遮断せんとシユイが発した大声に、リズは我が意を得たとばかりに強くうなずいた。

「そうなんですっ、あのナハル・ベルファー二ですよ。やはり有名なですね。如何にも貴族チックなペンネームを使っていますし、作者のあと書きでも男性作家のように振舞っています。ここだけの話、実は、何と女性なんですって！　あの微妙な男性の心理描写が、まさか女性に執筆されていたなんて驚きですよー」

違っ違っ。そんな裏情報はどうでもいい。シユイは半ば必死に首を振りながらも最後の手段に打って出る。

「そうそう、男性と言えば私も以前は」

すみませんが。先に誤解を解かしていただいても？

念話を送ったシユイは、リズの目が丸くなるのを見て作戦成功を確信する。だが

「　そう、誤解での擦れ違いといったこともありました。でも、彼っいたら照れる表情がとても素敵で、　キャッ。あまり恥ずかしい事言わせないでくださいっ！」

頬を染めるリズを視野に入れながら、シユイは万策尽きたことを悟った。

フォルストローム王都の程近くにあるレダの森。入り口から少し奥まったところには伐採済みの木々に囲まれた丸太小屋があった。家を形作る丸太は長い蔦や色鮮やかな茸の苗床となっている。切る木がなくなつた後はそのまま解体されることもなく、長い間放置されていた。小屋の周りを囲んでいる切り株は断面が荒れており、ここからは新しい芽や他の植物が芽吹いている。

かびの臭い漂う小屋の中にいる長身の男は外に人の気配を感じ、呼吸の音を消すと腰に提げている物に手を添えた。所々風化し、白アリに食われ、細い線状の日差しが差し込んでいるドアがゆっくりと開く。一呼吸置いて何者かが中に入ってきた。

「ヒッ」

真横から喉元に刃を突きつけられ、侵入者が掠れた声を上げた。

「何だ、あなたか」

人族の男は逆手に持った短剣をピクリとも動かさぬまま、侵入者の喉元から上へと視線を移した。魔族の女は顎を上向きにしたまま「な、納得されたなら早く、その物騒な物をしまってください」そう言った。

「そうだな」

イヴァン・カストラは突き付けていた刃を一瞬にして引いた。三本の薄い刃がついた短剣を扇のようにパチンと閉じ、視線を向けることもなく無造作に鞘に戻す。その一連の動きに三秒とかならなかつた。

凶器から解放された女、ヴィオレーヌはゆっくりと止めていた息を吐き出した。青く染められた薄絹で作られた、体に吸い付くよう

な法衣を身に纏っている。肩甲骨の下まである黒く長い髪は漆を施した木製品のように上品な艶があった。その佇まいはどことなく育ちの良さを匂わせる。

「全くもう。警戒心が強いのは結構なことですが、何度となく驚かされるこちらの身にもなってください」

「以後気を付けよう」

イヴァンの気のない即答にヴィオレー又は頭をがっくりと傾いだ。こういうやり取りが以前にも何度があったようだが、その分立ち直るのも早かった。

「決行日は明日に変更です。ジュキ二様の占いでは明朝から夜半にかけて雨が降るとの事ですので」

自分を抱くように腕を組むヴィオレーの少し怒ったような言葉に、壁に寄り掛かっていたイヴァンが伏せ気味だった顔を上げる。

「やれやれ、当日になってから計画変更を伝えられるとはな。そんなに俺たちは信用されていないのか」

「それについては申し訳なく思っております。少し前に痛い目を見たことがあります、ここ数年は新参の者に対する警戒感が強いのです。でも、今回の仕事が終わるまでの辛抱ですよ。ジュキ二様を初めとして、上層部の何人かはあなたの力量を高く評価しておいでです」

「だいたい、な」

高く評価している割にはこの扱いか。イヴァンはそう言いたげに肩を竦めた。

「そんなことよりも、もつと気にするべきことがあるのではないのか？ 下準備の段階で実行部隊が五人もやられるとは上も予想していなかったはずだ。今後の計画に差し障りがないとも思えないが」  
投げかけられた問いに、ヴィオレー又は顔色を変えずに答えた。

「予想外の被害であったことは否認ませんが、四大ギルドの上級傭兵が相手では致し方ありません。ガーソンとベルゼルにのみ言及するならば、むしろ殺してくれたことに感謝すらしていますけれどね」  
「思うのは個人の勝手だが口にすべきではないな」

今は亡き人族至上主義の二人を思い浮かべ、イヴァンは特に悲しんだ様子もなくそう言った。腕は確かだったが、差別意識に満ちた連中の言動が鼻に付いたのも確かだ。厄介払いが済んだといわんばかりのヴィオレーヌの態度もわからないではない。

「『全てはエスペランの意志のままに』ですわ。教団内で反目しながらできるほど楽な業ではありませんもの。森龍と接触できなかったのは少し残念ですが、あれを計画に組み込めば危険因子も大幅に増えてしまいます。結果としては悪くない首尾だったかと」

ヴィオレーヌが長い己の前髪を横に払った。指に纏わりついた髪が一瞬解け、再びいくつもの束となる。

機は熟していた。普段は警備の厳しい王都だが、この所は魔物騒動によって兵たちが各地に駆り出され、今は通常の七割ほどの体制だ。王城の警備には手拔かりがないものの、騒ぎを起こすための環境は整っている。

「まあ、そういう考え方もできぬことはないが。明日以降、フォールストロームの民は眠れぬ夜を過ごす事になるだろう。気の進まぬ仕事だな」

「あら、今更怖気づいたのですか？」

重い溜息を吐き出したイヴァンに、ヴィオレーヌが咎める様な口調で訊ねた。

「愚問」

単純明快な返答だった。

「危機は刻一刻と迫っている。目的のために手段を選んでいられる状況ではない。個を殺してでも逸脱した流れを食い止めねばならん。」

それを理解しているからこそ俺は貴様らの申し出を飲んだのだ」

「……そうでしたね。これが終わればセーニアも、必ず動きだすはず」

「ああ、最後の仕上げに取り掛かるとしよう。そして、これが始まりだ」

束の間、小屋の中に沈黙が下りた。イヴァンの遠くを見るような視線に気付いたヴィオレーヌは、よく見ねばわからぬくらいの憂いを顔に滲ませている。彼が何を考えているのか、誰を想ってそのような目をしているのか。それがわからぬことにもどかしさを感じているようだった。

「長い戦いに、なりそうですね」

霧囲気に流されて出た言葉だったが、ヴィオレーヌは口にしてからその意味を考えずにはいられなかった。数年越しか、あるいはもっとかかるのか。戦が無事に始まり、無事に終息したそのとき、彼は、そして自分はどうなっているのか。

「承知の上だ。ところで、船はいつ頃到着する？」

思考を仕事モードに切り替え、ヴィオレーヌは覚え立ての台詞を口にする。

「明後日の六時、モビ川の下流に五分間だけ停泊する手筈です。作戦の成否に関わらず船は時間通りに到着し、時間通りに出発します。絶対に遅れないようにお願いします。あと、以前にもお話ししましたが長い船旅になりますので必要な物がありませんたら持参してください」

「了解した。……ん、どうした？」

去り際、ヴィオレーヌがドアを開けかけて立ち止まったのに気づき、イヴァンは不思議そうにそちらを見る。



「いえ。どうかご無事にお戻りください」

ささやかにして、強い願いの籠もった言葉が小さな背中越しに、  
イヴァンへと向けられた。

「そのつもりだ」

「はいっ」

肯定の言葉を聞いて満足したのか、ヴィオレーヌは明るい声で応じてから小屋を後にした。イヴァンは彼女が出ていくのを見送った後で、果たせるかどうかもわからぬ約束をする必要があったのかどうかを考えた。

## 第十四章 〵(3)〵

他のテーブルでは軽食を頼む者がちらほらと出始めている。柱時計は正午十分前を差していた。

二時間余りに亘って赤裸々な慣れ染めを聞かされたシュイは、疲れを隠しながらも口を開く。

「た、確かにアミナ様は素敵な方だと思いますが、少なくとも告白した覚えはありません。おそらく、俺以外の誰かじゃないでしょうか？」

リズは「うーん」と首を傾げた。

「ですが、姫様は相手の顔がわからないと仰っていました。顔を隠している傭兵は」

「他にもいないことはないですよ。実際、キャノエのギルドでも二人程見かけましたし」

「本当ですか？ ……ふう、振り出しですかあ」

三角耳が寝るほどにしょんぼりしたリズを見て、シュイは少し申し訳ない思いに囚われた。が、心当たりが無いのに滅多なことを言えないのも事実だ。

「でも、あれですね。アミナ様って本当に人気がありますね」

リズはシュイが話の合間に頼んだオレンジジュースを一口飲んでから頷いた。

「そうなんですよー。傍から見ても頑張り屋ですし、同性の私から見ても魅力的に映りますからね」

「ですよ。だったら放って置いても自己解決するんじゃないですか？」

リズは視線をテーブルに落とした。

「まあ、そうなんでしょうけれど。姫様の場合、背負う物があまり

に多過ぎますから。その反面、自分のことに対して無頓着なところもありますし、出来得る限り力になってあげたいのです。多分、姫様自身にも周りにそう思わせる何かがあるのでしょうけれど」

リズはそう言っただけで眉を潜めた。確かに、十六歳の少女が国の期待を一身に背負うのは生半可なことでは務まらないことはわかる。アミナ以上に王族の責務を全うしている者が果たしているだろうか。シユイには想像もつかなかった。

「どうやら私の早とちりだったみたいですね。お時間を取らせてしまい、申し訳ございませんでした」

「ああ、いえ。俺も結構暇していたので気にしないでください。どうせ図書館にいくくらいしか予定はなかったのです」

「図書館、でございますか？」

依頼完了まで六日の猶予があること、勉強をしにフォルストロームを訪れたことをシユイが告げると、リズは何かを思い付いたように手を叩いた。

「まあ！ それなら私もお力になれそうですね」

「力、ですか？」

怪訝けげんそうな表情を浮かべるシユイを尻目に、リズはポケットからメモ用紙を取り出し、一枚破ると何かをペンで書き始める。

「ええ。あそこには一般の方には立ち入り出来ない区域があります。希少な書物もいくつか置かれています。もし宜しければ」

「

リズは書き終えたメモ用紙を破り、シユイに両手で差し出した。

「この署名を入口から入って一番右奥にいる受付員にお持ち下さい。閲覧制限区域に入れますので」

「制限区域……。でも、良いんですか？」

シユイは受け取った紙をマジマジと見つめながら訊ねた。

「シルフィールの傭兵さんでしたらこれから先、姫様のお力になる

こともあるでしょう。その方の手助けをすることに問題などありませんわ」

リズの朗らかな笑顔がシュイの躊躇ためらいを払拭した。

「そうですね。ではお言葉に甘えさせていただきます」

「はい！ では、私はそろそろ王城に戻る時間ですので失礼致します」

「ええ、ありがとうございま、あれ？」

リズが立ち上がり、シュイが釣られて顔を上げると、リズの姿はそこにはなかった。既にリズは宿の出口に移動していた。入り口を振り返り、固まるシュイを見て、リズは優雅に一礼するとあっという間に姿を消した。

「な、何て身のこなしだよ」

囁きのような声が、勝手に口から漏れ出ていた。

北区から南区への陸橋を渡り終え、大理石で出来た長い階段を上っていく。

図書館はシルフィールのギルドから程近い場所にあった。ギルドの入り口から階段を上り、高台に出て遠くに見える建物だ。

近くまで来ると、建物はまるで神殿のように、筋状の窪みがある長い円柱に支えられていた。屋根の付いた広い階段を三階分ほど上ったところに入口があった。そうしている間にも何人かが中に入ってきて、それと同じくらいの数の人が外に出てきている。

図書館内に入ったシュイは思わず感嘆の息を漏らした。建物は一階から五階まで四角い吹き抜け状になっていた。雨による湿気と強い日差しは蔵書の天敵であるため、高い天井は曇りガラスで塞がれている。驚くべきはその広さだ。中央の通路の突き当たりの壁は5

0メートル近くも先にあつた。

館内は利用者の貸し出しの応対を除いては内緒話しか聞こえないくらい静かではあるのだが、ちよつとした規模の食料品店を思わせるほど人の往来が多い。

長いカウンターには受付員が8人も座っており、それでも列になつて順番を待っている利用者が大勢いる。

シユイはしばしの間立ち止まつてそれを眺めていたが、自分の目的を思い出すとリズの言い付け通りに右奥の通路へと歩いていく。突き当たりを左に曲がると、地下への階段の手前に小さなカウンターがあり、その奥側に受付が座っているのがわかつた。

制服を着た若い森族の男が読んでいた本から目を離し、近づいてくるシユイの格好に戸惑いつつも会釈をした。

「申し訳ありませんが、こちらは一般の方は立ち入り禁止となっております。もし読みたければ王城にて閲覧の――」

「これを確認して頂きたいのだが」

「え？ …… あ、これ！」

シユイがリズから託された続け字のサイン入りのメモ用紙を見て、受付の顔が明らかに強張つた。

「いや、大変失礼致しました。ヘイロン家所縁ゆかりの方だったのでですね。失態を犯したかのように謝罪する受付を見て、シユイは目をぱちくりさせた。

「え、あ、ああ。そんなところだ」

出会つて間もないが、縁は縁だろう。自分に都合の良い様に解釈することにする。

「こちらの書物は全て持ち出しが禁じられています。内容を書き写すこともありません。係の者が監視しながらの閲覧となりますが、それで宜しければお入りください」

「わかつた。でも、随分と嚴重なんだな」

本を読むだけなのに監視まで付けられるとは、今までに聞いたことがない。

「悪用を防ぐためです。封呪とまではいきませんが、それに継ぐ魔法書なども置いてありますので」

「えっ、魔法書が置いてあるの？」

「……の？」

「……か？」

予想外のことに地が出てしまったシユイは、律儀に語尾をつけ足した。

案内する　　と言うより監視の意味も含めているのだろうか

受付の後を追って地下への階段を下りていくと、空気が段々とひんやりしてきた。紙が痛まぬように空調を効かせているようだ。

螺旋状の狭い階段を下りきるのにはそれなりの時間がかかった。おそらく4階分くらいは下りただろう。階段が途切れた先は狭い通路になっていた。床には黄色い絨毯が敷かれているが、5メートルほど先に影のような物があった。

「あれって、油污れか？」

シユイが絨毯を指し示して訊ねると係員は

「いいえ、血です」と顔色一つ変えずに頷いた。

ああ、そうなのか、とシユイは頬を搔く。

「ちゃんと事前に忠告していたのに書き写そうとしていた閲覧者がいたので無理矢理連れ出そうとしましたら殺意を以って抵抗してきました、仕方なく強制的に排除しました」

ということは、受付が手を下したのだ。シユイの目が自然と受付の腰にある剣に向いた。

「へえ、そういうことって結構あるのか」

「以前は一般の方にも限定的に公開していたのですが、そんなことが立て続けに起こった時期がありましたね。王城の司書家を介さないといけないような措置を取るに至った次第です」

そんな会話をしながら二人は柔らかい絨毯を歩いていった。

通路の先には、かなり広い閲覧室があった。ただ、天井がかなり低かったので妙な圧迫感がある。真ん中のスペースに大きなテーブルが一つあった。それを囲むように、三方に衝立が置かれ、更に周りを本棚が六角形を象る様に配置されているといった具合だ。

「本日はあなた以外にお客様はいらっしゃいませんので、存分にお使い下さいませ」

「え、でも俺も飛び込みと言って差し支えなかったけど」

他に飛び込み客がくることもあるのでは、とシユイが含ませると、受付は苦笑しながら首を横に振った。

「司書家の署名を持ち出す人なんて、年間に5名もいませんから。ちゃんとした閲覧許可証ですと日時はこちらで取り決めさせて頂く事になっておりますので。仮に今日先客がいたら、明日以後に来館するようお願いしてましたよ」

「ということは、閲覧は一日に一人だけなんですか？」

「多い時で三人くらいですかね。学生が気軽に来るような場所ではありませんし。何よりほとんどの利用者は上の図書館だけで事足りてしまいますから」

「ああ、それは確かに、そうだよね」

地上の図書館だけでも蔵書数は相当な数に達しない。少なくともキャノエの数倍はあるだろう。

「ここに置かれているのはかなり希少な書物が多いです。それを読めるのですからあなたは運が良い」

「はは、そうなんだ。じゃあ、時間を無駄には出来ないな」

「こちらの閉館は午後9時となっておりますので、それまで存分にご利用ください。私は一旦係の者と呼んできますので本を選んでいただきます。それから」

受付の笑みが瞬時に消えた。戻ってくるまでは絶対に本を開けないでください。抑揚のない声で、そう言った。明らかな脅し文句を耳にして、シュイの鼓動がドクンと大きく跳ねた。

扱えるのが初級の魔法だけでは心もとなかったので上級魔法書を探す。上級付与と干渉魔法の本を選び取ると他の項目の棚にも向かい、>魔物解体新書<、>知って丸得、傭兵生活の小ネタ<の三冊を抱えて席に向かう。

四人、もしくは六人用と思われるテーブルには椅子が二つしかなかった。

「このテーブルが閲覧席でいいんだよね？」

「うむ。許可を取るのが大変なので、そんなに来客数は多くないんじゃないよ」

受付が呼びに言ったのは七十にもなるうかという背の低い獣族の男だった。頭の頂点は髪の毛が後退し、見事に光沢ヒツヤクを帯びている。耳が剥き出しになっている頭は、不思議と潔ツギさを感じさせる。

受付は監視業務を引き継ぐと、元いた場所へと戻っていった。

「わかった。では贅沢に使わせてもらおうかな」

シュイは大つぶらに本を広げて読書に耽り始めた。所々滲んだり皺シワが寄つたりして読み難い場所もあったが、前後の文から推察して補充していく。

黙々と机に座って読み耽ふけっているシュイを見ながら、係員も自分の仕事を始めるべく、向かい側で書類を広げる。

それに気づいた様子もなく、シュイは上級付与魔法の術式を確認している。上級付与魔法はどちらかというと防御系統の魔法が多い。



防御魔法との明確な違いは持続時間が長い点に尽きる。その分結合ユニットにはより多くの集中力を必要とするし、そのために解放する魔力リリースの量も初級魔法の比ではない。

これ、いいなあ。

素直にそう思わせたのは、魔を打ち払い縛鎖デイスベル・リロードくという魔法だった。武器や防具に付与する魔法だが、維持している間は術者の実力に応じて触れた魔法を霧散させてしまう効果がある。

まさしく対魔法使いの切り札にも成り得る効果を持つ魔法だが、致命的な欠点も書かれていた。必要とする魔力量が半端ではない。一回の戦闘で何回も使える類のものではないため、発動するタイミングの見極めが難しいのだ。

だが、この魔法が使えるというだけでも、相手にとっては相当戦い辛くなるはずだ。ともすれば、フェイントにも使えるかも知れない。

シユイは他にも数点、気に入った魔法を暗記するべく音読を繰り返した。

「結局一日中付き合わせてしまって、申し訳ない」

シユイは階段を上りながら係員に詫びた。

「いんや。稀な事じゃから気になさるな。それより凄い集中力だったのう。流石はシルフィールの傭兵になられるだけのことはある」  
「そんなたいしたことはないです。その、また来ても良いでしょうか？」

「うむ、予約がない日ならばいつでも構わんど。ちゃんと閲覧許可を持っていればな」

いつでも、というのは社交辞令の言葉だったかも知れないが、図々しくもうなずいておくことにした。

図書館を出ると、既に辺りは闇に覆われていた。空は厚い雲で覆われ、どこにも星が見当たらなかった。明日はかなり荒れそうじゃな、と係員が呟いた。

「では、気をつけて帰りなされよ」

「ああ、お休みなさい」

係員に別れを告げ、シユイは月明かりの無い暗い夜道を歩き始めた。高台の階段を下りていく途中、傭兵と見られる者たちと擦れ違った。橋の真ん中で、真下で汽笛が鳴り響いた。河口から王都の港に入って来る定期船だ。

足元から来る妙な震動を知らずと楽しんでいる自分に気付く。続いて、橋の手摺に手をやり、海の方へ目を向ける。

シユイは一日一日を満喫していた。ニルファナにからかわれるのも、色々な人に出会うのも、見たことのなかった景色を目にするのも、新たな知識を得る事も。

まるで幼い日に戻ったかのようだった。五感を全開にして、世界の全てを受け入れていた、あの頃のように。雪山の尾根から見た、金剛石よりも輝かしい黎明<sup>れいめい</sup>。鼻を痛めるほどに強い、真夏の深緑の香り。広大な滝水が地へと落ちる、大地の叫びのような轟き。何もかもが新鮮で、世界を知ることにはただただ喜びを感じていた自分が、そこに再現されていた。

ニルファナへの感謝の念は日増しに強まっている。だがそのことが、重荷にもなっていた。初めの覚悟を忘れたわけではない。だが、日々の積み重ねに埋もれてしまうのは避けられなかった。初志貫徹という言葉があるが、あれほど実行が難しい言葉もそうはない。

一年半前、罪無き多くの者が徒<sup>たたり</sup>に運命を狂わされた。シユイもその一人だった。その元凶を駆逐<sup>くしゆく</sup>するべく、シユイは傭兵になることを決断した。世界の裏側の情報を収集するのに都合が良いと踏んだ

ためだ。

けれども、蓋を開けてみれば充実した生活を送っている自分がいた。そのことに言いようのない罪悪感を抱いていた。苦しみ抜いて死んでいった者たちの屍の上に、自分は立っていた。

果たしてこのまま手を拱こまねいていても良いのだろうか。そんなわけがない。自問に胸の奥から自答が返された。断罪されるべき者たちに罪を贖あがなわせた後で、己の罪を償つくなわなければならぬのだと、自らの心が告げていた。

そして、そのためには大きな力が必要だった。強大な国をも打ち崩す力が。投げ遣りな行動に運命の女神は微笑まない。歯痒くとも、前に進むための準備を整える必要があった。

その声を思い出した時、シユイは幸せな記憶を払いのけ、埋もれた記憶を掘り起こして傷口を剥き出しにし、その痛みを思い出した。繰り返し、何度も、何度も。例えるなら精神の自刃症だった。女々しくて、愚かしい行為。だが、それによってもたらされる痛み以上に恐れていたことがあった。自分が思いの外、薄情なやつだと知ることだ。

ふと、自分の行動を疑問視する声上がる。何で勝ち目の見えぬ戦いを続けようとするのか。苦しむためだけの人生なんて馬鹿みたいじゃないか。仮に実行出来た所で他の者たちの運命をも大きく変えてしまうのに。誰も救われるやつなんていやしないのに。

そうやって、自分のしようとしている行動を、してきた行動を、冷ややかに窺たしなめるもう一人の自分が存在した。堪たえ難い憎しみを忘れることは果たして強さか、それとも弱さなのか。

肯定と否定を交互に積み重ねて生きてきた自分の周りには、選択肢を自然と選取り、求道し続けている者がいた。ニルファナ、アミナ、ある意味ではビアラスもだろう。

彼らのように生きてみたい。けれども憎しみを捨て去ることも出来ない。表面上、傭兵としての日々を過ごす一方で、意識の深層で

は悲鳴に近い自問自答が繰り返されていた。納得できる終止符の打ち方を、決着の付け方を教えて欲しかった。そして、何時しか自分の選んだ答を誰か一人だけでもいい。肯定してくれることを望んでいた。

この時まで、シュイは知る由もなかった。自分より一足早く一つの解を導き出した者との、今一度の邂逅いまひとたび かいこうが目前まで迫ってきていることに。

イヴァン・カストラ。

かつての悲劇を分かち合った、同郷の青年の変貌振りに。

## 第十五章 〱総力戦（1）〱

1567年 8月23日

その日、太陽は姿を現さなかった。陽光の祝福をすっかり遮断した炭色の雲からは、雨が雫ではなく細く束ねられた流水となって大地に降り注いでいる。

日が下り始める時間帯に差し掛かっていた。はたと郊外の森の中から、薔薇を思わせる紅の花火が、暗闇に染まりつつある空で咲き誇った。少なくとも離れた場所からはその様に見えたに違いなかった。

だが、花火と思われたその光は咲いた後も燃え尽きなかったし、激しい雨に濡れて消失することもなかった。空に拡散した光は明滅しながら同じ方向を一齐に目指し始めた。ぼつりぼつりと家の灯りが灯り始めた王都へ。

急いでくれ。大木の根元に寄りかかるように座っていた若い獣族の男が、血に濡れた手から生じた霊体を見届け、言葉にならぬ声を発した。

霊体を飛ばしたその手が再び男の胸元に治まった。その指の隙間からは湧水のように、とくとくと濃色の血液が溢れ、男の腹を、腰を、太腿を汚していく。その血もやがて雨水に混じり、急激に色を薄めていく。男の意識と同じように。

男の視界が空と同じ色に塗り換えられていく。輪郭がぼやけ、物の形が失われる。つい先ほどまで感じていた、雨に濡れた髪の鬱陶しさも、既に意識の外へ出ていた。

これが死か。今度は声すら出ず、意識の表層を擦るこすだけに留まった。口を動かさず、喉を鳴らすことを赦すほど、男の身体に力は残った。

ていなかった。男は霧散しかけた思考の中で家族への謝罪の言葉を綴ろうとし、それより先に意識が途切れた。

木の幹に寄りかかって息絶えた男を一瞥もせず、黒衣に身を包む者たちはその光の行く先を追っていた。その眼下にはフォルストロームの王都が広がっている。北区の雑多な商店街と住宅街が、南区の城下町と王城が。そして、それを分断する川と、繋ぐ架橋が。

「援軍要請の魔石、か。好都合だな」

やや背が低い黒衣の男の呟きを、同じような黒衣を着た男が窺める。

「油断するな。全てが計画通りに運んだとして、五分五分だ」

「わかってるって。イヴァンさんの言い分が全て正しいってことはさ」

あっけらかんとした、少年のような声が返ってきた。

「皆も本懐を見失うな、ここでなすべきことはただ一つ。我らの犠牲を最小限に止めた上で、最大限の成果を出すことだ」

「当然、抵抗する者は皆殺しで宜しいでしょうな？」

今度は老人のようなしゃがれた声が響いた。

「我らの真の戦場はここではない。それを踏まえた上での行動を望む。俺が言えるのはそこまでだ」

「はんつ、アンタともあろう者が何とも温い言い回しだな。ここんところ実戦からは遠ざかっていたみたいだが、勘は鈍っていないのかねえ」

巨軀の男がからかうような声を出した。頭が大き過ぎて被れるフードがないのか、その男だけは顔が剥き出しだった。無精ひげを生やした獣族の中年の男だ。鋼のような胸筋、太い眉に犬歯が剥き出しになったその威容は初見でも攻撃性を警戒させる類のものだった。

「おいリック、イヴァンさんに舐めた口を叩くなよ。僕がただじゃ

すまさないぞ」

「てめえみたいなオシメも取れていない餓鬼に呼び捨てされる筋合いはねえ。ちゃんとリックハルドさんと呼べ」

「何だと……」

取っ手のついた細い金属棒を腰から抜きかけた黒衣の男に対し、イヴァンが手を出して制する。

「いい加減にしろ、イルナヤ。目上の者に対してその口の利き方は感心しない」

「でも！ そいつイヴァンさんを ひっ」

イヴァンの身体から凄まじい圧力が放たれた。二度は言わぬ、と言わんばかりに。周りの者が思わず喉を小さく鳴らす中、リックハルドだけがいと笑った。

「くっ、はっはっはっ！ ちったあ安心したぜ、多少のブランクで鈍る腕じゃないってわけだ」

リックハルドの豪放な笑声を聴いて、しかしイヴァンの表情には何の変化も訪れなかった。遙か遠方にある、要塞で囲まれた王都の上空に視線を送っている。

ややあつて、空に変化が訪れた。

「連絡が飛び交い始めたようだな。そろそろ相手も動く頃合いだ、抜かるなよ」

「はい！」

「うむ」

「任せろ」

一斉に各所から立ち上ってきた螢火のような魔石の光を確認し、イヴァンの周りにいた黒衣の八人は各々全く重ならぬ返事を口にしてから方々に散っていく。イヴァンはそれを一瞥してから、息絶えた若き獣族の男に視線を向けた。その目は哀れみとも、諦めともつかぬ憂いに満ちていた。

勇敢に戦った者に対して謝罪の言葉を口にするのは、違うな。口を開きかけたところでイヴァンは思い止まる。人差し指と中指、二本の指を揃え、国のために戦って散った兵士へ略式の敬礼を捧げた後、王都の方に向き直った。

煤<sup>すす</sup>けた空からは篠<sup>すす</sup>突く雨がひたすらに地面を叩き、万雷の拍手のような音を打ち鳴らしていた。シルフィールのギルドに所属する総勢三十余名の傭兵が、緊急召集の連絡を受けて高台の上を集っていた。そろそろ炊事の白煙が上がり始めても良い時間帯。眼下にある王都の大通りには人手がほとんどなく、ひっそりと静まり返っている。十数分前に町の全域に鳴った拡声魔石による警鐘のためだ。

フォルストロームのギルド支部を統括する獣族の準ランカー、白髪混じりの茶髪をウルフヘアに整えた美丈夫、鈍い光沢の金属鎧を上半身に纏ったランベルト・タルツフィは集まった者たちを一瞥した。

「急な呼び出しにも関わらずよくぞ集まってくれた。火急の件故、先に要点だけ説明させてもらおう。小二時間ほど前にフォルストローム王都の周辺にて魔物が多数出現した。近隣の村々で待機していた軍の二個小隊が駆除しに向かったところ、正体不明の集団と鉢合わせしたらしい。交戦の<sup>のち</sup>後に、壊滅させられたとの報告が来ている」  
ついに軍の者にも犠牲者が出た。話を聞いていた傭兵たちの群れが揺れた。雨の音に小波<sup>さざなみ</sup>のようなざわめきが加わった。



「静粛に。大方の者は気がついていようが、連中の狙いは十中八九陽動。おいそれと王城の警備を緩めるわけにはいかぬ。よって、町の巡回兵の大半がアミナ姫と共に魔物退治と敵の迎撃に駆り出されている状態だ。我々の任務は彼らの穴を埋めるべく町中を見回り、異常が見つかった時点で対処することだ」

ランベルトが一呼吸置いたところで、傭兵の集団から声上がる。「異常が無くとも給与は出るんだろうな」

発された声にランベルトは一瞬険しい顔をし、次いで不快を顔に出した自分を恥じるかのように瞑目する。

「無論、事無くともランクに応じて支払われる」

「だが、フォルストロームが出し渋ったら」

「諸君らは緊急クエストの原則も知らぬというわけか。万が一報酬が支払われなかった場合はマスター・ラミエルが私財で賄<sup>まかな</sup>うと取り決められている。これでいいか」

違う場所から出掛けた声も怒りの籠もった返答で即座に封殺された。これ以上時間を無駄にしたくないようだ。

「話を続けるぞ。シルフィールの傭兵は南区でフォルストローム軍と共に三人一組で警戒を行う。同じく北区は軍とフラムハート他、北区に支部を持つギルドの傭兵が共同で任務に当たる予定だ。橋を境として領分を定めている。北へは行かずに持ち場をしっかりと確保　うん、今度は何だ？」

アルマンド・ゼフレルが大きな手を上げているのに気づき、ランベルトが再び話を中断した。

「腰を折ってすまんがちよいと質問。警戒中、魔物に出くわしたら討伐でいいんだよな」

「無論だ。手に負えぬほどの魔物が出た場合は近くにいる組と合流して対応しろ。連絡の魔石を有効に使い。今回に限っては赤も使って問題ない。援軍要請の連絡を受けた組は状況が許す限り早めに合流しろ」

「なら、使役者の方と遭遇した場合はどうすんだ？」

アルマンズの問いにランベルトの顔が少し曇る。

「本格的な対人戦闘になれば民間人に危険が及ぶ可能性が高くなる。敵を追い詰めたところで人質に取るような行動に出る可能性もないとまでは言えない。始末しておきたいのは山々だが、フォルストローム王が望んでいるのはあくまで民間人と町の安全確保。戦闘行為に及ぶのは相手から仕掛けてきた場合など、已むに已まれぬときに限定する。それから、Bランク以下の傭兵は決して戦ってはならん」

「Bランク以下、ね」

そう言い、アルマンズは肩越しに後ろを向いた。自分に向けられている視線に気づき、シユイは首を傾げた。

「ははん、そこまでの相手ってことか」

エグセイユ・スキーラが列の一步前に出、会話に割り込んだ。シユイの瞳がそちらに向けられ、じと目に変化した。ああ、こんなやつがいたような気がしなくてもないけどやっぱりいなかったことにしたいかな、と。

「公にはされていないが、フォルストローム軍大隊長の一人が敵に重傷を負わされ、戦線離脱している。私を知る限り、準ランカーラスと言って差し支えない實力を持っている男だ」

その言にシユイを含む大部分の傭兵たちの顔が引き締まったが、エグセイユだけは嬉しそうな顔をした。

「面白え、大隊長様をやった奴を殺せれば準ランカーも務まる力量ってわけだなあ」

何をそんなに浮かれているんだか。シユイは薄笑いを浮かべるエグセイユを見て、注意しなければならぬ相手が敵だけではないのだということを感じていた。こういう人間は根に持つタイプだと相場が決まっている。今回の件は仕掛けて来る絶好の機会だ。ドサクサに紛れて後ろからブスリとやられかねなかった。

「遊び感覚は捨てる、連中の実力は未知数だ。使役されている魔物などはまだ可愛い物だが、準ランカークラス以上と本格的な市街戦にでもなってみろ。未曾有の被害を齎すぞ」

ランベルトの言葉に陽気さはいっさい含まれていなかった。それもそのはず、準ランカークラスとの戦闘ということはアミナやアルマンドを敵に回すようなものだ。味方であれば非常に心強いが、敵に回ればこれほど恐ろしい存在もない。

「そうなってしまうえば連中だけではなく我々も非難され、積み上げてきた信頼を一瞬にして失墜させることになる。そのことを肝に銘じて行動　むっ！」

突如遠方で雨音を掻き消す程の爆音が轟き、ランベルトも含めて傭兵たちが瞬時にそちらを向いた。彼らの視界に飛び込んで来たのは住宅地から火の手が上がり、黒煙が空へと上り始める光景だった。「……おいおい、連中、本当に戦争でもおっぱじめるつもりかよ」アルマンドが凝らした目には、空を飛ぶ数匹の飛竜クイバーンが住居に向けて火焰を吐きかけている光景が映っていた。油樽が何かに引火したのか、再び小規模な爆発が起こり、火花が上空に吐き出される。

「手を拱こまわいている暇もなさそうだな。あれは私に対応する。説明は以上。お前達は各々チームを組んで魔物の掃討に当たれ」

ランベルトがそちらへ歩き出そうとするのを、アルマンドが肩を掴んで制した。

「いくら何でも一人じゃきついだろ。俺も行くぜ」

「馬鹿を言うな。大体、同じチームに準ランカーを二人も配置するわけにはいかんだろう」

戦力のバランスを考えてのことだろう。シユイはそう解釈した。

「んー、それもそうか。じゃあシユイ、お前付いてけ」

そうだな、一人じゃ危ないし

「て、俺が？」

予想外の提案に対し、シュイは返答するのに数秒の間を要した。そもそもランベルトとの面識がないため、自分が組むのに適しているのかどうかもわからなかった。

「使えるのか？」

「足を引つ張る事はないはずだ。ランクこそのだが、実力はブランクと思っ方がいい。おまえもいいよな、シュイ？」

「いいだろう。シュイとやら、遅れるなよ」

返事をする前にランベルトから促す声が掛けられた。どうやら拒否権はないようだった。

シュイはアルマンドに向けていた恨めし気な視線を渋々飛竜の方に転じた。空は滝のような雨と夜の闇で不気味に霞んでいた。

## 第十五章 〵(2)〵

二つの人影が幾つもの水溜りを踏み越え、次々と波紋を連ねる。側溝を勢いよく下る雨水に負けぬ軽快さで、流される落ち葉と並行するように駆け抜けていく。

町の景観が後ろへと、高速で流れていた。街路樹、垣根、あるいは門前に置かれていた植木鉢が。

シユイは前を疾走するランベルトの背を見失わぬよう雨の並木道をひた走った。水溜りをまともに踏んで、跳ね上げぬよう留意しつつ。普段は煩わしいフードも、雨天では非常に有用だ。雨は走る速度が速いせいで横殴りに近かったが、それでも視界を遮られることはなかった。

時折ちらちらと人影が見えるが、そのほとんどが軍人か傭兵の格好だった。少ない人数ながらも果敢に任務を果たそうと町の各所で動いている。傭兵の方はシルフィール以外の者だろう。

先を行くランベルトは視線を上に向けて飛竜の位置を確認、進む方向を微調整していく。偶にシユイの方を振り返っては、距離が開いていないことを確認し、速度を徐々に上げていく。ちゃんといてくることが出来るようにある程度速度を抑えていたようだ。

「先に聞いておくが、ぬしは実際に飛竜と戦った経験があるか？」  
ランベルトの問いに対してシユイは小さく首を振る。

「ないのか、知識としては知っているのだろうか？ 動きの傾向とか弱点とか」

「ああ、昨日頑張って読んだからある程度は」

「そ、そうか。何とかタイムリーだな」

その困ったような顔からは若干の不安が読み取れた。少なくとも

シユイの目にはそう映った。おそらく彼の頭の中では「アルマンドのやつ、なんで並みいる傭兵の中からこんなやつを援軍によこしたのだ」とそんなような言葉が浮かんでいることだろう。だから、シユイは一言だけ物申したかった。「僕にもさっぱりだから推薦した当人に聞いてください」と。

世間一般に「飛竜フイバイン」と呼ばれている魔物は、「竜ドラゴン」とは別個の種類として考えられている。竜は四足を持つが飛竜は二足。前足が翼に進化した鳥に近い性質を持ち、長距離飛行が出来るように骨格も軽くなっている。

ただし、それはあくまで竜と対比したらの話である。いくら骨が軽いと言っても身体の質量は大きい。少なくとも、衣服を全段に目一杯詰め込んだタンスの数倍は重はずだ。まともに圧しかかられたらぺしゃんこになるだろう。

知能、身体能力においては竜よりもずっと低い。ブレスの威力に關しても、魔力の潜在量、肺活量で圧倒的に劣るので比べるべくもない。だが、その飛行能力、特に旋回能力においては小回りが利き、竜をも凌駕する。それでいて鋭い鉤爪と牙の他に、鋼鉄並みに硬い皮膚に覆われた尻尾をも併せ持っている。評価が低く見られがちであるが、恐るべき魔物には違いないのだ。

一方で、竜族は翼を持っている者が大半なのでわざわざ飛竜と呼ばれることはない。そもそも人間に使役されるような存在でもないのだ。ありとあらゆる魔物を上回る力と、頭を頼りに生きてきた人を遙かに凌駕する知識と知性を持つ。仮に神という絶対的存在がいるとしたら、竜はそれに一番近い所にいる種族だ。

シユイは昨日流し読みした「魔物解体新書」の記憶を頭の中でなぞっていた。

角を曲がり、段々と燃えている家屋が大きく見えてくる。気を取

り直したのか、再びランベルトがこちらに視線を送る。

「それで、魔法の心得はあるのだな？」

飛んでいる敵が相手とあって、基本的に魔法が主体の戦いとなることを見越していることだろう。攻撃魔法にはあまり自身がなかったので、シユイはばつが悪そうに返事をする。

「一応は。攻撃魔法よりは付与や干渉の方が得意だけど」

「それは珍しい。ふむ、アルマンドが敢えてぬしを奨めたのはそういうことか」

「どういうことだ？」

「なに、私の武器は付与と実に相性がいいのでね」

そう言つと、ランベルトは腰に手をやり、何かを解き始めた。金属の擦れ合う音が聞こえ、もしかしたらと想像する。

予想通り、それは細い金属の鎖を繋ぎ合せて作られた鞭だった。

今まで腰に巻き付けていたのだろう。先端の方には殺傷力と遠心力を高めるための分銅が付けられている。

「チエーンクロス、だね。なるほど、確かに相性いいかも」

「ぬしの背負っている得物よりは、マシだろうな」

ランベルトが濡れた髪を左右に選り分けながら、どこか可笑しそうに言った。気に入り始めている武器を貶けなされた気がして少し腹が立ったが、あまり使いこなせていない事実は否定できなかった。今までの戦いを省みても、肝心なところでは手放しているのだ。

「ところで、かける付与魔法は何にする？」

「風か水、どちらでもいい」

雷という注文がなかったので、シユイは一瞬おやつと思った。だが、その理由はすぐに思い当った。雨天で施される雷付与は物質の電位を低くする性質がある。効果は高くなるのだが時として本物の雷を誘導してしまうことがあるのだ。

落雷とは本来地面から天に向かって放電する現象を言う。雷雲が

あるときに雷を付与すると発生した電磁波が自然由来の雷を引き寄せる。その際に生じた電流が術者の制御を上回った場合、余った分の雷は使用者に跳ねかえってしまう。準ランカーであり、実績の確かなアルマンドの推薦をある程度は信用しているものの、組むのは初めてであるため少々慎重になっているといったところだろう。

湧いて出た微かな不満を吹き消し、うなずいた。

火災が発生した家の周囲は騒然としていた。飛竜が現れたのが住宅街であったことが災いし、周囲の建物から一斉に人が出てきてしまったために街道がごった返し、收拾が付かなくなっていた。

『おい、押すな………つてえ！ 今俺の足踏んだ奴どこいった！ だ・

か・ら、押すなって！ あつ、お前か？ それとも手前かあ！？』

『お祖母ちゃん、こつちよ！ ……つて、あなたは違うわ、お隣のお祖母ちゃんですよ。皆さんはどこいったの？』

『全く、軍は何をやっているのだね！ 町に容易く侵入を許すとは責任問題だぞ、これは！』

『皆さん落ち着いて！ 焦らないで！ 二列になって公民館の方へ』

人々が雨に濡れながらも火と飛竜の両方から逃れようと右往左往している。その結果揉みくちやになり、倒れては争いを起こしている。町に残っていた軍人が声を張り上げて避難誘導を試みているものの、鼻屑目に見てもあまり上手くは行っていない。注意を促す声が喧騒に混じり、雨の音に溶ける。飛竜の影が地面を横切る度に、しゃっくりのような悲鳴が零れている。



避難民の列の最後方では獣族と人族の軍人二人が飛竜を迎撃すべく弓を手に戦っていた。だが、悪天候に置いて遠距離武器の命中率は著しく下がる。対空となれば尚更で、上を向けば否応なしに雨水が目に入るし、高度が上昇するほどに遮蔽物がなくなり、強い風に煽られてしまう。結果、イメージした軌道を大幅に逸それることになる。

とはいえ、狙いを定めることすらままならないことは軍人たちも承知の上だ。あくまで攻撃の動作を飛竜に見せる事が狙いであり、飛竜の目が逃がっている民間人に向けられぬようにするための牽制けんせいだった。

もちろん、内心が穏やかなわけではない。滝のような雨によって建物に付いた火が拡散することは免れているが、民間人の列にブレスが直撃すれば、その恐怖による混乱も相俟あそばって大惨事になるのは避けられないだろう。

必死に時間を稼いでいる軍人たちを嘲笑うかのように、列の中ほどから叫び声が上がった。誘導していた軍人と牽制していた軍人がほぼ同時に振り返り、上空を睨む。

「なっ、三体目だと!？」

先ほどまで相手にしていた二体の飛竜とは別の飛竜が建物の屋根の上から姿を現した。軍人たちが慌てふためいた直後、上空から細長くなった列の真ん中辺りに向けて、炎ファイアブレスの吐息フタヒくが放たれる。誘導している軍人も、牽制している軍人も手の出しようがなかった不可避の一撃。数名の女子供から悲鳴ほとほしが迸はつた。大人たちが子供を庇うかのように覆い被さり、身を低くして強く目を瞑る。

突如、何かがあさつての方向から勢いよく飛んできた。巨大な球体のようなものが撓たわみながら、軍人たちの視界を横切り、上から覆

い被さつてくる炎に命中する。炎が地面に届くまであと数メートルという瀬戸際だった。

ランベルトの放った>凍フリーズ・フロウてつく泡沫くが破裂音を立てて拡散した。水膜の上部が蒸発して割れた途端、中に溜められていた冷気が空いた穴から一気に噴出し、上空からの炎を相殺していく。

吐き出された炎が途切れたときには、白い湯気が辺りに濛々と立ち込めていた。失われた視界の中、泣きじゃくる声はまだ聞こえることに軍人たちが安堵の息を付く。

湯気が薄らいでいき、急ぎ被害状況を確認する。流石に全員無傷とはいかなかったようで、起き上がれずに蹲すくまっている民間人が何人かいた。が、全員息はあるようだった。続いて水泡が飛んできた方角を見やると、見覚えのある傭兵の男が、やはり傭兵と思しき黒衣の男を連れ立って走ってくる。

「タルツファイ殿か！ 危ないところを助かった」

その名を聞いた軍人たちからちらほらと歓声が上がる。シルフィールの支部を統括しているだけあってランベルトの知名度は高いようだ。

「キーア様の依頼により馳せ参じた。ここは我々に任せて民間人の非難に専念してくれ」

頼もしき援軍の登場に軍人たちの顔が綻んだ。

「助太刀かたしけな忝い。よし、おまえたち、熱傷を負ってしまった者を優先的に背負ってやれ。公民館への避難誘導を開始する」

再び慌しく動き出した軍人と避難民を尻目に、ランベルトは手に持っている鎖をシュイの方に差し出した。シュイが紡いでいた祈歌を中断し、詠唱。ランベルトの武器に手をかざし、付与魔法を掛ける。

「>風精ドローロー・ドゥン・ドゥンの加護を以てく」

自身の魔力を>解放リリースしく、武器に付着させて>結合ユニオンく。術者の手

元から離れるため、持続時間は二分少々。そのことを走りながらのやり取りで伝えていた。それでも祈歌を紡いだ分、初級の付与魔法としては長い方だ。

＜ウィンド・リロード風精の加護を以てくは熱や電撃で威力を後押しするタイプの火、雷系統とは違い、空気抵抗を弱める風の膜を周囲に張り巡らせる効果を持つ。元々威力の高い斧や大剣などの重い武器には向かないが、弓矢や鞭などの軽い武器には打ってつけの付与魔法だ。嵐などの悪天候の状況下では特に力を発揮する。

「感謝する。では、行くぞ」

おもむろにランベルトは膝を曲げ、傍らにあった家屋の二階の手すりに向かって驚異的なバネで跳躍、宙に身を躍らせる。しっかりと手すりを掴んだかと思うと、間をおかずに今度は後方へ跳躍し、姿を消した。シュイの背後にある家屋の屋根へと飛び移ったのだ。大柄な体格にも関わらず、ピオラに勝るとも劣らぬ身軽さだった。

「凄いな。でも、そう簡単に言われてもなあ」

鎌を背負っている自分にはまず不可能な動きだった。シュイは猿のようなランベルトの身のこなしに舌を巻きつつも、飛び移れそうな高さの石垣を探し始めた。

ランベルトが屋根から屋根へとジグザグに飛び移り、自分に背を向けたまま低空を飛んでいた深緑色の飛竜を追う。

上空から、何者かが仲間の飛竜との距離を縮めつつあるのを見咎めたのだろう。ランベルトが追っているのは別の飛竜が急降下してきた。奇襲を予測していたのか、ランベルトは斜め上から叩き付けるように振るわれた飛竜の尾撃を見切り、濡れた屋根に這い蹲くる様にして避ける。大きな尾がランベルトの頭上の空気を斜めに切り裂き、髪を靡かせた。

「うわっぶっ！」

遅れて屋根にあった水溜りの水が尻尾の風圧で跳ね上がり、水の柱となってランベルトを襲った。顔を含めて全身に浴びるが、ダメージには至らない。

飛竜の身体がランベルトの真横を通過し、そのままの勢いで宙に戻ろうと上昇を始める。が、そのときには倒すべき目標を変更していたランベルトが、反撃に移行していた。

屋根に付いていた両手を腕の力だけで押し出し、勢い良く身を起こす。次いで驚異的な跳躍力で後ろ向きに、上昇中の飛竜の背に向かうように飛んでいた。

身を捻って飛竜の姿を目視。手に持つ鞭を肩から背にかけて垂らす様に置き、間合いをぎりぎりまで詰めたところで、渾身の力で振り下ろす。

遅れて鎖が軋み、鞭が撓しなった。分銅の重量によって遠心力が加わり、更には鎖を覆う風の膜が強い横風を遮断。脳裏に描いた軌道を外すことなく、剣とは比較にならぬ大きな円弧を縦に描く。

頬を平手で打ち据えるのを何倍にも大きくしたような音が生じた。傷と痣の中間のような、赤黒くも太い筋が飛竜の右片翼に刻まれた。翼膜を損傷した飛竜がバランスを崩して地面へと落ちていく。

ランベルトはそれを横目にしながら、飛んだ先、前方にあった建物の壁面に備え付けられている木の雨どいを驚掴む。掴んだ雨どいに体重がかかり、みしみしと音を立てた。

壁にへばりついた格好で、肩越しに飛竜の落ちた位置を確認、そのまま壁に両足を付けて膝を曲げる。

次いで墜落した飛竜の方へ向かうべく雨どいを手放し、膝を伸ばして壁を蹴り放った。壁に大きな足型が残り、その周りに細かいヒビが入る。雨どいの一部が破損し、その中を流れていた水が穴から溢れ出す。

巨大な猛禽類もつきんるいが地上の獲物に飛来するかのような威容だった。ランベルトの体が再び空へ戻ろうともがいていた飛竜の首に両足を揃えて着地。爪先から膝の辺りまで飛竜の分厚い首肉に埋もれ、遅れて鈍い音が二度鳴り響いた。前後の頸骨を砕かれた飛竜の身体が、ぐったりと弛緩した。

一方で、シユイは付与を掛けた後、ランベルトを追うべく石垣から屋根に飛び移っていた。数十メートルほど先には滞空たいくうするべく大きく両翼を飛ばたいている飛竜がいる。何かを狙っているのか、下に向かって長々と炎を吐き続けている。

先手必勝とばかりに、シユイが無防備な飛竜の背に向けて、集束ライトニする雷シゲ・ホルトを放った。不意に後方から飛来した雷に飛竜は反応しきれない。わずかに振り向く素振りを見せたところでまともに命中。雷に体を硬直させ、崩れ落ちるように落下していく。建物の裏側に消えた飛竜を見送ったシユイは口元に笑みを浮かべる。

飛竜の巨体が地面に真つ逆さまに落ちていく。が、落ちていく途中で瞑っていた目が大きく開かれた。翼を横に広げ直して風を受け、飛ばたいて落下速度を弱める。

墜落を免れて着地した飛竜が、今度は元の高さまで一気に上昇、そこでシユイを発見した。

不意打ちを仕掛けた憎き敵シユイに対し、飛竜が唸り声を上げる。ワニを思わせる口蓋を何度となく噛み合わせて威嚇しているようだ。

流石に初級の攻撃魔法くらいで倒すというのは虫が良過ぎたか。シユイは心中で舌打ちする。背負っていた鎌を手に持ち、持ち手が滑らぬように刃を巻いていた布を素早く柄に巻く。飛竜の噛み合わせている牙の隙間から、炎がちろちろと漏れているのが見える。

ほどなく、炎ファイア・シブレスの吐息フアイア・シブレスが勢いよく吐き出された。降りしきる雨をものともせず、放射状に広がった炎が視界を席卷する。

避け切れないと判断したシユイが後方へ駆け出し、鎌の柄を掴ん

だまま屋根の下へと身を躍らせた。その際、屋根の角に鎌刃が引つ掛かるよう上に向ける。屋根の窪みに引つ掛けた鎌に両手でぶら下がったのとほぼ同時に、頭上を炎が通過した。

五秒ほどを経て、炎が途切れてもシュイはまだ屋根へ上がらなかつた。息を潜めて近づいて来るのを待つ。飛竜の飛翔音が段々と近づいて来ているのがわかる。魔力の感知網でおよその位置を確認。10メートルほどの距離に縮まったところで壁を蹴り上げ、鎌を窪みから外してくるりと屋根に舞い戻った。

突然下から飛び上がって来たシュイの姿に、低空で羽ばたいていた飛竜がたじろいだ。それを目にしたシュイが鎌から片手を放し、飛竜のいる方角と逆に向ける。

「>吹き荒ぶ風く！」

手の平から突風が生じ、雨の水が後方に噴霧となつて拡散。踏ん張らぬシュイの身体が前傾し、前へと弾き出された。

急加速した黒い影が屋根に出来ていた小さな湖を水鳥のように滑る。靴の爪先に水が割られ、白い水飛沫が四重に上がる。そのまま勢いを殺すことなく、通常走行に切り替えた。消えていた足音が戻ってきたところで、両手で鎌を持ち直したシュイが飛竜に襲いかかる。

飛竜の尾が鞭のように撓るのが見えた。が、それが振り切られるよりも早く、飛竜の懐に飛び込む。軸に近ければ近いほど、回転の勢いを殺すのも容易い。迫る尻尾を肘で受けると同時に、鎌刃を斜め下から振り上げる。

確かな手応えが両手に伝わった。鋭く尖った鎌刃が飛竜の顎に深々と食い込んでいる。

下顎を貫かれた飛竜が堪らずしゃくり上げるように、鎌を手に持つシュイごと振り落とそうとする。宙に振り上げられたシュイは、それでも鎌を手放さず、更なる追撃を掛けるべく>ライトニング・リロードくを発動。手元から鎌刃へ電撃が伝わり、飛竜の顎、脳幹

にまで届く。

飛竜が苦悶の叫び声を上げた。耳が潰れたかと錯覚するほどの音に思わず顔を顰めた。顎を貫かれたことで口が半分閉じていなければもつと酷い音が出ただろう。だが、それも数秒と続かなかった。流石に口蓋内からの電撃は効果靦面だったようだ。飛竜は炎の代わりに泡を吹き始め、痙攣しながら屋根の上にとっと身を横たえた。深く食い込んだ鎌刃を外し、ホツとしたのも束の間、シユイは身体に微かな揺らぎを感じた。足元の屋根を見て、横たわる飛竜を中心として亀裂が広がっていくのがわかった。

「やばっ」

危機的状况に気づき、慌てて隣の屋根に向かって二歩、三歩、段に乗って踏んでジャンプ。着地するのとほぼ同時に、今まで足場にしていた側の屋根が飛竜の重みをモロに受け、支え切れずに下へ撓み、陥没した。

家屋が崩れゆく様子を目にしながら、シユイは今度こそ安堵の溜息を付いた。

と、遙か後方から飛竜の咆哮が迸り、慌てて振り向く。が、空には何の姿も見受けられない。下に視線をずらしていくと、屋根の上にはいたランベルトが微かな笑みを湛えながらこちらに振り向くのが見えた。どうやら先ほどの咆哮は断末魔だったようだ。

シユイはわずかな間に二匹を屠った彼の力量に驚きを隠せずいた。

## 第十五章 〱(3)〱

雨音に混じって吐息にも似た呟きが聞こえた。年季のいった櫪かしの杖を横向きに、祈りを捧げるように両手で掲げていたゲシュペト・キルピオは肩越しに後ろを睨む。そこには並び建つ建物の隙間から見える南の空に目を凝らしている黒ずくめの男、モルゾウ・クウガの姿があった。

「何じゃ？ 何か言ったか、クウガ殿」

ゲシュペトがしわがれた声で訊いた。見た目は六十ほどと思われるが、髪の毛が真っ白であるから実際はもう少し上かも知れないが、綺麗さっぱりと剃られた髯と背筋が真っ直ぐに伸びた姿勢はむしろ若々しい印象を与えていた。

「上空を旋回していた飛竜の姿が見えない。どうやら排除されたようだな」

コントラバスの響きにも似た低い声が返された。年齢は四十過ぎくらいだろうが、細い目の下にある刀傷が人相の悪さに拍車をかけていた。髪の毛は剃髪と言わぬまでも相当に短く刈上げ、頭の形がはつきりとわかる。喉に見える縄のような痣は拷問の痕のようだ。

「ほっほ、そんなことか。心配しなくてもネタはまだたくさんあるぞい」

ゲシュペトは他愛ないと言わんばかりに視線を元に戻す。老人の足元には赤い線で小さな六芒星の魔法陣が描かれていた。ゲシュペトが瞑目し、念じると両手に置かれていた杖が宙に浮かぶ。それに呼応するように、魔法陣が淡く光り始める。

「呪術とは便利な物だな。こつも容易く魔物を呼び寄せることができるとは」



「随分と簡単に言ってくれるが、こう見えても色々と制約があつての。一度に使役出来るのは三匹までじゃし、遠くに離れている魔物を呼ぶほどに魔力を消費する。まあ、暴れさせるだけならそんなに苦勞もないが」

そう言いつつもゲシュペトは指先から魔力を解放し、魔法陣の上で創造した文字を三重の輪で形成された空欄に継ぎ足していく。その際、魔法陣の中央を向くように配慮もしているようだ。

杖がくるくると回り、並ぶ文字が増えていく度に、陣から放たれる光量が多くなっていった。その様子をどこか眠たそうに見ていたクウガは再び後ろの方を見た。どこか未練がましそうに。

「そろそろ、地味な作業にも飽いていたところだ。少し遊んでくるか」

そう言うなり踵を返したモルゾウを、ゲシュペトが非難めいた口調で制止する。

「待て待て！ クウガ殿、カストラ殿の命を忘れたわけではあるまいな」

「この区域での目標は既に成している。多少暇を潰したところで問題なからう」

「あのな、あまり勝手なことをする  
「直ぐ戻る」

「あつ、これ、待たぬかつ！」

言い捨てるや否や、モルゾウは住宅街の方へと走り出していた。ゲシュペトが慌てて振り返ったときには、その姿は遙か彼方にあつた。

今から走つても追いつけまい。ゲシュペトの眉間に深い皺が幾重にも刻まれる。

「全く、仕方のない戦闘狂じゃ」

彼だけではなく、どいつもこいつも自己中に過ぎる。ゲシュペトは振り回されてばかりいる現状が腹立たしかったのか、道端に落ちていた小石を爪先で蹴り飛ばした。小石は路地を数回跳ねてから壁の方に軌道を変え、ぶつかって止まる。

「まあ、無用な心配かのう」

エレグスの要人暗殺によって一億五千万パーズもの懸賞金を掛けられている賞金首、モルゾウ・クウガ。賞金額の高さは実力に比例する。彼の安否を気にするより先に、やらなければならぬことが山ほどあるはずだ。

ゲシュペトはようやくと落ち着きを取り戻し、魔物を呼び寄せる作業を再開した。

屋根の上で合流したシュイとランベルトは付近を見回し、魔物がないことを再確認していた。

「ここは、もう良さそうかな」

鎌刃に布を巻き直しているシュイに、ランベルトがうなずいた。

「うむ、長期戦を覚悟していたが存外早く片付いた。嬉しい誤算というやつだな」

「つまり、あんまり期待されていなかったってことだね」

語感に自嘲の響きを感じ取ったのか、ランベルトは笑みを誘われたようだった。

「評価を改めた、と言ってもらいたいな。あまりくだらぬことを気に病むものではない、一応は私なりの褒め言葉のつもりだ。悪天候らしかめ素晴らしい使い心地だったぞ。如何せん使い手は少ないが、付与とは真いいものだな」

「ま、そこまでたいしたことないけどさ」

褒められたら褒められたでこそばゆい。シュイは照れ隠しにぷいと横を向いた。ランベルトは束の間頬を緩めてから、周囲の様子を

把握するべく三角耳をピクピクと動かし始めた。

「使役者もここを離れたようだな。少なくとも、何者かの気配はない」

「どうする？ 一旦ギルドの方に戻ろうか」

「ふむ、異常がなければ連絡が来るまで待機するべきか」

「よし、じゃあ」

微かに軋むような音が空気を震わせ、ランベルトが、次いでその様子に気付いたシュイが南側を向く。小高い丘の上では鉄塔が拉ひきちぎげ、危なっかしく揺れていた。

「あれも……だよな？」

「いや、あそこは王城に近いからあちらで対処するだろう」

ランベルトの表情を見る限り、口にした言葉は必ずしも本心ではないようだ。上の立場にある者は下の者の働きを信用しなければならぬが、相手の実力が未知数だけに不安が残るといったところだろうか。

「そっか。なら戻ろうか」

ランベルトがうなずきかけた時だった。

『！！』

峻烈な殺気が並び立つ二人の間を風と成って通り抜けた。シュイとランベルトが瞬時に後ろを振り返る。50メートルほど後方には、フードの有無以外、シュイの姿を写し取ったかのような格好をした男が一人、煙突の上に佇んでいた。

この距離を無視して明確な畏怖を感じさせたことから、相当な手練なのは疑いようがない。明らかに、キャノエの教会で相見えた男よりも強い。シュイは背筋に冷たい物を感じた。

「敵、だよな。あいつ、何でわざわざ？」

ランベルトは、返事はせずに目を細めた。

「誘っているつもりか？ いや、それよりあの顔は、どこかで」  
「知っているのか？」

というか、ここから見えるのか。シユイは雨の中に目を凝らしてみるが、霞む視界の中では顔の輪郭すらも判り難かった。

「人相は少し変わっているようだが、おそらく間違いない。やつはモルゾウ・クウガ、高額賞金首リストの前頁の方に載っている暗殺者だ」

どの雑誌にでも言えることだが、前頁に近いほど知名度が高い者が載っていることが多い。その事実を知るだけでも実力を窺い知ることが出来る。

「強いんだな」

というのもいささか間抜けな発言だったようだ。ランベルトは少し苦い顔をしてみせた。

「弱いはずがなかるう。シルフィールでも第一級指定犯罪者に分類されている危険人物だ。しかし、あれほどの大物が加担しているとは。どうやら敵は想像以上に厄介な相手のようだな」

「どうするんだ？ やっぱり、ここは住宅街だから戦闘は避けた方がいいかな」

ギルド前に集合した時のランベルトの弁を思い出しながら、そう言った。

「少し考えを修正せねばなるまい。ぬしは魔石を使い、私の名においてギルドに連絡を取れ。受付員を遊ばせておくような事態ではないから閉店しろとな。どうせ今日は客も来ないだろう。受付員は全員Bクラス以上の傭兵。戦いに加わってくれば楽になる」

シユイはその言に驚きを隠せない。

「タルツフィさん、まさか戦う気？ 出来るだけ戦闘を控えるんじゃないのか？」

「幸いこの近辺は先ほどの飛竜騒ぎで避難も済んでいる。やつとて己の腕だけを頼りに闇の世界に生きてきた男だ。人質を取るような真似をして茶を濁す、もつと言え己の名を汚すことはあるまいよ。ぬしは連絡を取った後一旦ギルドに戻って彼らと合流し、任務を続行しろ」

「その、一人で勝てるのか？」

シユイの言葉に不安を感じ取ったのか、ランベルトは軽く肩を竦めた。

「心外な台詞だな。私とて伊達に支部長を張っているわけではないぞ。それに、相手が一人ならこちらも一人の方がやりやすい。これは心理的な問題にもとるが」

対等に戦いたいという気概によるものか。暗に手出し無用と言われ、シユイは口を噤む。

「仮に私が全力を出しても勝てぬような相手なら、ぬしがいたとてあまり助けにはなるまい」

その言葉は流石に聞き逃すことが出来なかったのか、シユイが食ってかかるうと一歩踏み出した。それを手で制し、ランベルトは言葉が続けた。

「別にぬしの力が劣っているとは思わぬ。が、その力を遊ばせておく気もない。何より、負けるつもりは毛頭ない。我儘ついでに済まぬが、先ほどの付与をもう一度頼む。それで十分に過ぎる」

シユイは不承不承ながら、出した足を引っ込め、差し出された鎖に手をかざした。

> 世の産声を今尚伝える風よ　その息吹掴みし手に　加護を施す力を

再び、ランベルトの持つチェーнкクロスが風の膜に覆われていく。「感謝する。では、健闘を祈る」

「こつちの台詞だろ。後で豪勢な晩飯驕って貰うからな」  
シユイの軽口にランベルトが眉を上げる。  
「ふむ、良かるう。約束しよう」

シユイがその場から離れていくのを合図に、モルゾウとランベルトがほぼ同時に互いへと走り出した。10メードほどの距離を空けて、双方違う建物の屋根の上で足を止め、対峙する。

「……ランベルト・タルツフィか。シルフィールの支部長自らお出ましとは痛み入る」

「どこまでも侮れぬやつらよ。フォルストローム軍に限らずシルフィールの組織構成も把握済み、というわけか」

「我らが草は至る所に伸びている。取り除いたとてその根は残る。いつまでも」

ランベルトの眉がわずかに上がる。

「我ら、か。ぬしのような者が群れているとは少々解せぬな。忍びの者が表舞台に出てきて一体何を成そうというのかな」

「悪いが世間話をしに出てきたわけではない。退屈たたくい凌ぎにきたのだ。わかつたらさつさと構えろ」

素っ気なくそう言い、モルゾウは袖に仕込まれていた妙な形状の短剣を取り出す。ランベルトはそれに見覚えがあった。苦無くぬいとかいう異国の諜報員が使う武器だ。刃と柄との境目がはっきりしないそれは黒く塗られており、いかにも無骨で、無機質な冷たさがあった。

「意外とせつかちだな、ぬしは。元々暗殺者向きの性格ではないということか」

そういいつつ、ランベルトも鞭持つ手を後ろ手にし、モルゾウに構えを取る。

降りしきる雨が少しずつ弱まってくる。雷が二人のいる建物を分かつ様に空を縦断。互いの右目と左目を稲光が覆い隠す。

「……辞世の句はあるか？」

雨音の中、不思議と響くモルゾウの低い声に、ランベルトは薄く笑う。

「退屈凌ぎで命を落とす事もあるぞ、と言ったところか」

「ふん、面白い」

モルゾウがいかにも愉快そうな笑みを返す。

二人の放つ氣勢に触れ、弾き飛んだ雨が更に細かい粒子と化す。霧雨のようになつたそれらが辰力を高めつつある二人に纏わりつき、螺旋を描きつつ蒸発霧を生む。屋上から二対の白い柱が天へと駆け上っていく。

張り詰めた空気が限界まで凝縮して行き、遠方で響いた爆発音をきっかけとして、相対する二人の目が見開かれた。

魔石での連絡を終え、シュイはギルドへ戻るべく来た道を逆戻りしていた。雨は先ほどより勢いを弱めていたが、時折成り響く雷鳴は相変わらずだった。

ランベルトは大丈夫だろうか。ちらちらと後ろを振り返りながらも、シュイは心にこびりついた微かな不安を払い落とせずにはいた。だが、彼とて準ランカー。しかも支部長ということはランカーに相に近い位置にいるのだろう。

そうと認めたくなかったが、自分がいたところであまり出来ることがないのも確かだった。アミナの助太刀でなんとか勝ちを拾った

キャノエの教会での一戦から、さほど時間が経過したわけではない。今の實力ではまだ足を引つ張るだろうし、たとえ奥の手を出したところで援護に使えるような代物ではない。

走っている最中、遠雷の音に混じってやや近くで爆発音が響き、足を止めて音が聞こえてきた方角を見遣る。束の間、明滅した視界に映ったのは高さ15メートルほどの、屋根がドーム型の大きな建物だった。

「なにかの工場か？」

まさか中で魔物が暴れているのだろうか。その可能性が頭に浮かぶと、続いてはそのまま見過ごしていいのか、という考えに囚われる。

「一応、様子だけでも見ておくか」

自分の力でも倒せそうな魔物なら始末しておいた方がいいだろう。どうせギルドに戻ったところで魔物を始末することに変わりはない。万が一、敵が複数であっても足には自信があるから逃げながら魔石で応援を呼べばいい。

結論が出るとシユイは警戒網を限界まで張り巡らせ、そちらの方角へと爪先の方向を変えた。

その判断が、自分の運命を大きく左右するとも知らず。

工場と見られる建物の近くまでくると、丸太で作られただけの簡素な資材置き場があった。石炭が木の箱に入れられ、うずたか堆く積まれている。その箱の奥には、長方形に切り揃えられた木材が一定数に分けて縄で束ねてあるのが見える。

シユイはそれを尻目に、建物の入り口にゆっくりと入っていく。

五階建てくらいだと思っていたその建物は、一つの大きなフロアだった。中に置いてあるのは作業台、あるいは建物を支えている鉄



骨といったものだ。入り口の左右側には二階側の細い通路へ上るための階段が設置されている。

「おかしいな、この辺りで爆発したはずなんだけど」

音の発生源になりそうなものはどこにもなかった。ぱつと見る限りでは魔物の姿形も見当たらない。シユイは息を殺し、慎重に中へと足を進めていく。外套に弾かれた雨が雫となって流れ、滴り落ちた。その音がやたらはつきりと聞こえた。

広間の中ほどまで来た途端、警戒網に何者かが引っかかった。素早くその方角に向き直る。だが、そこにあつたのは鉄製の、舟形の石炭入れだ。

唐突に視界が暗くなるのを認識し、瞬時に斜め上を向く。目に飛び込んできた影に、反射的に右肘を曲げて防御態勢を取る。

手の甲に強い衝撃が走るのを感じ、シユイが呻き声を漏らした。5メートルほど後方に押し出され、履いている靴の底が床を擦り、生じた熱で焦げついた。何とか踏み止まってそちらを向いた。間をおかずに黒い影が目の前に迫る。咄嗟に横に身を投げ出す様に転がり込む。遅れて左頬が熱を帯びるのを知覚した。敵の足先が掠っていた。

床に両の手を付いたまま、シユイは敵の再度の跳躍に合わせるように詠唱。

アイス・ウォール  
「>氷結壁<！」

地面から天へ伸びるように氷の壁が出来上がる。刹那、摩擦音と粉碎音が混じったような音が鼓膜を震わした。敵の足が氷の壁の中央にめり込み、亀裂が壁の四隅に伸びていく。

危険を察したシユイがその場から飛び退くと同時に氷の壁が破碎される。シユイが先ほどまでいた場所に氷の破片が飛散、床にも落ちて硬質な音を奏でた。

距離を取ったシユイは、頬よりも手の甲のダメージが大きい事に

気づいた。鈍い痛みがじわりじわりと指先に向かって侵食していく。右手の中手骨のいくつかにヒビが入ったようだ。

まだ動くことを確かめるように痛む手を軽く握り、ゆっくりと開く。ただそれだけだったが、目の前にいる青髪の男は勝利を確信したかのようにほくそ笑んだ。

「くく、痛んだようだなあ？ それなりの手応えがあったからな」  
敵の正体と洞察力に対する動揺を飲み干し、シュイは構えを崩さず口を開く。

「予期していたとはいえ、それでもまさかという思いが否めないな。任務中にこんな真似をしておいて、よもやただで済むと思っていな  
いだろうなっ！」

歪んだ笑みを浮かべるエグセイユ・スキーラを見据え、シュイが怒りを露にした。

## 第十六章 く修羅、二人(1)く

黒いバンダナを額に巻いたエグセイユは、雨傘が付いた銀の肩当てと膝当て以外、これと違って防具を付けていなかった。鎖骨の部分には釣鐘型に身を覆うマントの留め金が黄金色に光っている。表地が灰色、裏地が黒色。それに隠れていて上着は見る事ができなかったが、穿いているのはベージュのスラックスだ。

美青年と言つて差し支えない顔立ちに反して、圭角を一切隠す気のないその態度。何より全てを睥睨しているような目で見られれば、どんな良識人も嫌悪感を募らせること請け合いだ。顎でしゃくる所作は、最早生まれつきなのではないかと思わせるほど様になっていた。

シュイがキャノエで初めてエグセイユと会った時、彼に抱いた感情を一言で表すならば「何コイツ」だった。二度目の今日は「本当何なのコイツ」だ。シュイは一カ月以上の時を経ても印象が変わらぬこと以上に、一度言葉を交わしただけの自分を本気で殺そうとする男が存在するという事に驚きを禁じ得なかった。それも、よりによって緊急事態に陥っているこの状況で。

こんなことをしている間にも、他の傭兵や軍人は人々を守るべく魔物と必死に戦っている。下手をしたら自分たちが穴を開けたせいで人が死に至ることだってあるかも知れない。傭兵としての責任感の欠片もない目の前の男に、シュイは怒りを禁じえなかった。

「さっきの音はなんだ。まさか、俺を誘き出すためにやったのか」「引つ掛かるのかもわからねえのに、んな七面倒臭いことするかよ、馬鹿が。あれは俺がやつらを倒した音だ」

エグセイユが素っ気無く親指で示した方向を見て、シュイは納得

した。

彼の立つ位置の更に奥側には体長2メートル強くらいの黒い魔物が二匹、並んで倒れていた。影獣とかいう魔物だ。そのうち一頭はこちらの方向に向かって、黒く長い舌をだらしなく晒している。体毛がところどころ焦げていることから、魔法か魔石に寄るものだろう。

大型の狼に似ていて、牙までもが黒いこの魔物。>魔物解体新書<によれば豹をも上回る敏捷性を持つているとのことだった。が、目前の男の健在振りから見ると、それを苦もなく倒したということだろう。人格はともかくとして、腕だけはそれなりのものだろうだ。

「しっかし、たまには真面目に任務に取り組んでみる物だなあ。まさかてめえまで釣れるとは思わなかったぜ。それも、こんなお謎えめづ向きのシチュエーションでな」

新しい玩具を貰ったかのように、どこか楽しそうなエグセイユを、シユイは冷気が漂ってきそうなほどに伶俐な面持ちで見る。

「何故一人でこんなところにいる。他の二人はどうした」

ランベルトの指示に従っていれば三人一組で行動しているはずだ。その詰問に、エグセイユはさして悪びれる様子もなく、自分の顎を指で撫でた。

「さあ、そんなのこっちの知ったこっちゃねえなあ。Cランク傭兵のお守もりなんざ冗談じゃねえ。まっ、どっかで必死こいて戦っているんじゃねえか？ まったくどいつもこいつも、こんな雨の中ご苦労さんなこつたな」

馬鹿にしたような口調でそうのたまうエグセイユに、シユイは胸奥から沸々と怒りが湧き上がるのを感じていた。

「明らかな任務妨害、それに服務規定違反もか。確実に処分対象になるはずだ。それも、よりによってこの大事に、下手をすれば追放だぞ？ それとも、もしかしておまえ、連中のスパイだったのか？」

「……任務？ スパイだあ？」

それを聞いた途端エグセイユは目を丸くし、次いで両手で腹を抱えて笑いだした。

ようやく笑気が収まったのか、エグセイユは憮然とするシユイの前で、これみよがしに目を拭った。

「見当違いもいいところだな。何でやりたくもない任務を汗水垂らして、ずぶ濡れになってまでやらなきゃいけないんだあ？ それから、仮に俺がスパイで妨害を目的とするならお前みたいな三下じゃなくてタルツフィの方を狙うに決まっているだろう。脳味噌あんのか？ カス」

正論を語るときですらいちいち語尾に相手を貶す言葉を付けなきや気が済まないのか。シユイが苛立たしげに足踏みすると弾けるような大きな音が鳴った。エグセイユが顔から笑みを消す。

「じゃあ理由もなしに俺を襲ったと？ それこそ頭悪いだろ」

「理由ならあるさ。俺を馬鹿にした奴が同じ世界に息づくことを許せないって何より正当な理由がなあ。それから、安心しろ。お前はオークにでも殺されたことにしてやる。名誉の戦死だあ」

下級の魔物相手に殺されたことにされたら名誉も糞もあったものではない。もつとも、屈辱感を煽るためにわざと言っているのだということはわかっていいる。傍若無人、自己中という言葉ですら言い表すには温い。全く共感出来ない論理思考に、シユイは構えを崩さない程度に肩を竦めた。

「やれやれ、おかげでまた一つ利口になっちゃったな。世の中には人間の姿を借りた度し難い生き物があるんだね。世界は今も尚、不思議に満ち溢れているよ」

シユイが放った言葉に応じてエグセイユの目に仄暗い炎が宿る。

「そうそう、思い出した。そういう舐めた口の利き方だったぜ、てめえは。精々煽って俺を怒らせてみる。その分だけ死に様が悲惨になるからなあ」

エグセイユの脅し文句をシユイは鼻で笑い飛ばす。  
「そうそう、精々そうやっていかにもな悪役を演じていてくれ。俺はあんたと違って至極常識まとも人なんでね。外道相手じゃないと本気を出し切れないんだ」

売り言葉に買い言葉。叩き売りに対する衝動買いを繰り返す二人だが、今はギルド内と違って諫める者は誰もいない。互いの感情の沸点は既にふっ切っていた。最早穩便に事が収まる要素はどこにもなかった。

「ならば、その本気とやらで精一杯抗ってみるがいい。俺がもたらず死の恐怖からなあ」

エグセイユの言葉を最後に、二人を隔てるわずかな空間に力場が生じる。空気を撫でるように緩慢にな動きで、腰に差している剣柄に手を掛けたエグセイユから辰力が発せられた。

同じように、シユイは背負っていた鎌を左手に持ち、覆っていた布を取り払う。所々、雨水で薄まった飛竜の血によってピンク色に滲んでいる麻布が宙に舞った。水気を多分に含んでいるため木の葉のように揺れ落ちる事はない。

布が見る間に地面に到達し、二人の姿がブレた。

鋭い鋼の調スウシが建物内に戦慄わななき、場の空気を長々と震わせた。

その余韻が消えぬ間に建物内を二つの影が跳ね回る。

地に足を付け、宙を舞い、床で、作業台の上で、獰猛な狼が幾度となくぶつかり合う。

鎌と長剣、武器で描かれる円弧同士が広げゆく領域を掻き消し合い、都度に金属音を打ち鳴らし、火花を散らした。

疾はやい！

互いの印象が一時、嫌悪から称賛に塗り替えられた。身軽さを身上とする己の動きに付いてくる相手に対し、驚嘆ともつかぬ息が漏

れる。だが、続いては大人しくやられてくれない相手に苛立ちを募らせ、齒軋りしていた。称賛などは言わずもがな、彼方へと吹き飛んでいる。

間を取った二人が残像を残し、距離を瞬時に詰める。刹那的に大きくなる敵の姿を互いに視界に捉え、接近と同時に渾身の力で得物を振り抜く。

先ほどもずっと大きく耳障りな、鐘の音にも似た交錯音が辺りに木霊した。強烈な振動が四方に拡散し、天井の方に近い羽目殺しの窓硝子にヒビを入れていく。

「ぬうつ！」

「ちいつ！」

お互いの武器をぶつけ合い、弾かれた反動で腕が痺れにも似た痛みを訴える。踏み留まって体勢を直し、尚も前屈みに突進。猛る二匹の獣が己の牙をかち合わせた。互いの吐息がかかる距離で己の持つ得物を両手で支え、前へ前へと強く押し付け合う。擦れ合う金属同士が傷にも沁みそうな音を奏でる。

「へえ。少しは、やるじゃねえか。Ｃランク風情にしては、な」

「少し、だ？ それにしては随分と、険しい形相じゃないか」

「それはどうカァー　ペッ！」

喉を鳴らした直後、唐突に言葉を打ち切ったエグセイユがシユイの顔に唾を吐きかけた。避けられない物をそれでも一瞬避けようと怯んだシユイを嘲笑うかのように、エグセイユが鏢<sup>つば</sup>迫り合いを押し切る。後方に突き飛ばされたシユイに対し、流れるように前に出て間を詰めると上段から剣を振り下ろした。

「このっ！」

シユイが眼前に迫る刃を鎌の柄で間一髪横にいなした。続いては背中を反らし、首を折らんかという勢いで水平に飛んできた蹴撃を

回避。そのまま後転するように、足を宙に投げ出す。その慣性で、今度はエグセイユの蹴り出していた足の踝くるぶしを上方へ蹴り上げた。エグセイユの蹴り足が浮き上がり、その勢いで地に立つ軸足までもが宙に数センチ浮く。

エグセイユが後方に宙返りしたシユイとほぼ同時に着地。痺れる足を強く踏みしめ、憎しみの籠もった目でシユイを睨む。

「つてえだるうが！」

そう吼えるや否や、返す刃をシユイの首元目掛けて薙いだ。シユイが大きく一步下がって避ける。それを見計らったエグセイユが手首を捻り、突きに転じて踏み込む。

シユイが顔に迫る剣の切っ先を頬の薄皮一枚で避ける。突いた拍子に剣がフードを突き破り、外れかけた。

「ゲウツ!？」

突かれた剣と擦れ違うように、咄嗟に繰り出した頭突きがエグセイユの鼻頭に命中。めきりと嫌な音を立てた。よろめいて後退するのを見計らい、シユイが鎌を振り抜く。一瞬早くエグセイユが後方に跳躍し、鎌刃が空気を切り裂く音を響かせた。

頬を何かが伝っているのを感じたが、それよりも逆の頬にこびり付いた物が気に障った。シユイは頬を拭うことなく、鼻から血を滴らせたエグセイユに突進した。顔に唾を吐き掛けられた経験がなかったシユイの怒りは殊の外大きい。

つてか、まだ落ちてないし！ 痰まで混ぜやがったな、この人でなしが！

「っざけんな！」

鎌刃を振り下ろすと見せ掛けてテコの要領で柄を引き下げ、柄の方を下から振り上げる。怒気によって多少荒くなったシユイの呼吸を捉え、エグセイユが身を横にして回避。膝を曲げた状態から前蹴りを繰り出した。シユイは鎌の柄を両手で支え、盾代わりにしてそ



れを受ける。蹴られた衝撃で、両手で支えた鎌の柄が細かく振動した。負傷していた手首の痛みが更に増し、フードの下で顔をしか顰める。後退し、たたらを踏んだシユイに向かって、エグセイユが明らかに届かぬ場所から剣を薙ぐ所作を取る。シユイが危険を感知し、呼応するように左手を前に出して詠唱。

「> ヴィーク流・疾風の剣く！」  
ゲイル・ブレイド

「> 吹き荒ぶ風く！」  
ウィンド・ショット

辰力を込めた剣から放たれる三日月形の剣風と、魔力で密集させた球形の突風が双方向から発生。二人の狭間でぶつかり合う。衝突で巻き起こった旋風が縦横無尽に荒れ狂い、建物内の備品を遮二無二押し倒していく。シユイの黒衣が、エグセイユの灰のマントが風に乗って暴れ出す。

十秒ほどのせめ鬨ぎ合いを経て、やや押され始めていることを確信したシユイが発動を破棄。側面に跳躍する。一瞬遅れてエグセイユの剣風がシユイの突風を押しつけた。シユイの後方にあった、建物を支えている鉄の柱を何本か、まるで豆腐でも切るかのようにいと也容易く切り裂いていく。

黒衣をひるがえ翻して向き直り、真っ先に目に飛び込んできたその光景に、シユイは薄ら寒い思いを禁じえなかった。性格破綻者でも腕は一流。現時点では相手が格上だ。

ならば我武者羅に戦うまでだ。そんな考えに囚われかけたその時、記憶の一部が明滅した。

『戦いに怒りは不要だよ。相手が格上なら尚更、怒りを鎮めて冷静に現状を把握しなさい。傭兵にとって一番大切な仕事は、生き延びることだからね』

ニルファナの言葉が脳裏に蘇り、シユイは怒り任せに行動してい

た自分を諫めるべく、エグセイユの方に踏み出しかけた足を止める。自分の方に倒れてきた幾つもの鉄柱を見止め、横に退いて避ける。見事な切り口で切断された鉄柱がわずかに弾み、床に密着した。

「おら、出てこいよお！」

エグセイユがのべつ幕無しに、周りの鉄柱をシユイの方へと倒れるよう斜めに切れ目を入れていく。シユイは倒れてくる鉄柱を避けるべく縦横無尽に動き回り、加速し、ときに減速する。

鉄柱が傘の骨組のように積み重なっていく最中、エグセイユから視線を外さぬままに次なる魔法を準備すべく、持っている鎌に自身の魔力を結合<sup>コンビネーション</sup>。エグセイユが痺れを切らしてこちらへ跳躍したのを見計らい、即時詠唱する。

「>絡み付くは雷の蛇<！」  
ライトニング・レポート

シユイの鎌が雷に覆われたのを見てエグセイユの顔色が変わった。雷を纏わせた鎌がシユイの手から、エグセイユに向けて放たれる。

まさか得物を手放すとは思わなかったのだらう。二重の驚きでエグセイユの反応が一瞬遅れた。そして、その遅れは鎌に触れずに回避することを許さない。

飛んできた鎌を剣で打ち払うも、帯電していた雷が金属を伝い、エグセイユの身体をひた走る。空中で体勢が崩れたのを目に留め、勝機を見出したシユイがエグセイユに向かって跳躍。これで終わらせるとばかりに、折れてない方の拳に渾身の力を込めた。

こんなところで時間を潰している暇は毛筋ほどもない。内心には短時間でケリを付けねばならないという焦りがあった。

だがしかし、仮にもBランクの傭兵相手にその考えは少し甘かった。

勝負を急いだシユイを見透かしたかのようにエグセイユの目が色を失い、白い歯が歯茎毎剥き出しにされた。不安定な体勢ながらも

革袋から何かを掴み取り、接近してきたシユイの方へと撒き散らす。

魔石だ。視界に散らばる黒い物体を確認し、半ば反射的に>吹き荒ぶ風ド・ショットを詠唱。魔石が爆発を生じさせるのとほぼ同時のことだった。魔石の半数近くがシユイの間近で爆発を起こし、工場内に轟音が響き渡った。室内の窓ガラスという窓ガラスが一瞬にして砕け散り、建物の外側へと押しやられる。

生じた爆煙に吞まれたシユイを目で捉え、エグセイユが歪んだ笑みを浮かべた。だが、勝利を確信したのは一瞬だった。

爆煙を突き破り、石礫のような物が飛来してきた。>吹き荒ぶ風ウィンド・ショットによつて弾かれ、誘爆ゆうぱくを免れた魔石が自分の方へ戻ってきたのだ。身体に吸い寄せられるかのように迫る魔石を見てエグセイユの顔色が青褪めた。ろくに防御姿勢を取る間もなしに、魔石が眩い閃光に包まれた。

爆風に卷かれたシユイの身体が、生じた歪ひねな球状の爆煙の下部から突き出る。背中から強かに地面に叩き付けられ、10メートルほど床を滑る。その際骨折していた手が地面に擦り付けられ、激痛を訴えた。

「がああっ！ あああっ！」

熱さと痛みとでまともな声すら発せられなかった。痛んだ方の手を首を掴みながら、はぐきから血が出るほどに歯を食い縛る。気が遠くなるような痛みで頭が真っ白になりかけたが、辛うじて意識を繋ぎ止めることに成功する。

シユイよりやや遅れて、上空へと吹き飛ばされたエグセイユが天井の鉄骨に激突した。こちらも飛びかけた意識を取り戻すべく落下中に頭を揺り動かし、四つん這いで床に着地する。

「んぎっ！ ……う」

ピシツ、と磁器に亀裂が入った時のような音がし、エグセイユの口から掠れた音が漏れた。見る見るうちに額から脂汗が浮かんできた。肘か、それとも膝か。どちらかにヒビが入ったのは間違いなさそうだ。

二人の着ている服は焦げてボロボロになっていた。露になった肌からは軽い火傷の痕。血が滲み出ている箇所も増えてきていた。

どちらかといえば好戦的な二人が、お互いに姿勢が崩れているのを目の当たりにしても、すぐに飛びかからない。それは、両者共に決して軽くない怪我を負っていることを意味する。

エグセイユが床に剣を突き刺し、それを支えにして立ち上がるうとする。対するシユイも、折られた手を庇いながら膝を立てた。

「て、手前は、いちいち小賢しい真似しやがって。ゲリ野郎が」

「それは、こつちの台詞だ。痛う、この、ウジ虫」

エグセイユの美しくない言動に中<sup>あ</sup>てられたか、らしくもない台詞がシユイの口から漏れた。謂われなき因縁をつけられた上に怪我まで負わされては腸が煮えくり返るのもせんなきことだ。

爆発でのダメージがかなり響いたのか、お互いに喋るのも億劫そうだった。痛みが治まるのを待つかのように、二人はその場で座り込んだまま荒く息をしている。

鎌を回収するか、それともそのまま……

全身の痛みを請け負う頭の中に、戦略思考を強引に割り込ませる。ダメージは鎌に込められた雷をまともに浴びた分エグセイユの方がやや重かっただろうが、手元には武器がなかった。

二人がほぼ同時に立ち上がり、荒い息を押し殺し、構えた。

「もう……冗談でした、じゃ済まさねえぞお。手足の端から一寸刻みにしてやるぜ！」

毒づき、拳をこちらに向けて握り締めているエグセイユの言動に、シユイは片頬が引きつるのを感じた。ここまでやっといて今更何を言っているんだ、こいつは。溜息を吐き出そうとしたが、呼吸が乱れていてそれらしき息がその他多くの呼吸の中に埋もれてしまう。

心配しなくても貴様の存在自体が冗談みたいなものだ。だが、性格の悪さに加えて言語の扱いまでが不自由とは何とも不憫でならぬ大人しくママのおっぱいでもしゃぶっているのがお似合いかと思うがいかがか。お望みならびったりな乳母車をチョイスしてやる。そうだな、ガラガラ付きが宜しかろう。

念話で順に伝えていくうちに、エグセイユの顔が段階的に紅潮していき、頭から湯気が立ち上ってきた。

「……こっ、ここまで俺をムカつかせた奴は、いなかったぞ！ このゴキブリが！」

黒いだけに、ということだろうか。洒落にしても本心にしてもゴキブリ扱いは腹が立つ。乱れていた呼吸が整ってきたところで、シユイがようやく溜めていた言葉を返す。

「……お互い様だ。それと、一つ教えといてやる。人様に向かつて虫けら呼ばわりするようなやつに、生きている資格なんかない！」  
指先を向けて高らかにそう言い放った後で、はたと思い出した。こいつ以上にムカつくやつは、以前にも確かにいた。

「……こっ、先にウジ虫呼ばわりしたのは手前だろうが！」

「……おや？」

言われてみればそうかも知れないが、結構どうでもいいことを主張するのだな、この凡夫は。シユイは体中に感じる痛みと熱を押し殺し、肩を竦めた。どうやら自分は、嫌いな人間に対してはどこまでも嫌な奴を演じられるらしい。シユイは自分の新たな一面を見出し、しかしそれがお世辞にも褒められたものではなかった。何ともやるせなさを感じた。

度重なる挑発的な所作が気に食わなかったのか、エグセイユは酷い風邪でも引いたかのように肩をわなわなと振るわせていた。だが、少しして大きく深呼吸した。落ち着きを取り戻す術も一応は身に付けているらしかった。感情が高ぶり過ぎて風船のように漏れ出てしまったのではないことを切に願う。

「……もういい、時間の無駄だ。これ以上俺の有意義な人生にためえ如きが出しゃばることは許さん」

自分勝手な人生哲学の一節を、これまた一方的にのたまうと、エグセイユが剣を両手で持ち、天に掲げた。次いで自身の魔力を解放し始めた。剣を取り巻く魔力流量の多さから、どうやら切り札的な何かのようだった。

まだやる気か。シユイがあからさまに舌打ちし、構え直そうとした。

「……魔石か？」

先に気付いたのは、天を見上げていたエグセイユの方だった。シユイにもそれが、所謂騙すための振りでないことがわかった。連絡用の魔石の霊体が、戦いを止める調停者のごとく、二人の間に下りてくる。

背筋が寒くなった。いつもの青ではなく、最寄りの者に緊急事態を知らせるための、毒々しいまでの赤だった。そして、それが二人を隔てる空間に書き殴った言葉を見て、シユイとエグセイユは息を呑んだ。

『劣勢につき至急援軍を求め、アミナ・フォ

』

切羽詰まった状況を表すかのように、その名前は途中で断ち切られていた。

## 第十六章 〵(2)〵

魔石に送っていた念を中断し、アミナは石を空に放り投げ、身を潜めていた茂みから飛び出した。一瞬遅れて上空から複数の無形の刃が襲来。アミナが先程まで潜んでいたアベリアの茂みを切り刻み、桃色の花弁と堅い葉を散らしていく。一方でアミナの投げた魔石は木の梢を突き抜け、宵闇の空に浮かぶと赤い霊体を象り、彼方へと消え去った。

カスタネットを打ち鳴らしたかのような舌打ちが響いた後、高木の上から森の奥へ走っているアミナに向かって数多の風の刃がばら撒かれた。アミナは殆どそれを見ることなしに超感覚だけで飛来する数多の刃を感知。高速で移動しながらも舞うような流麗な動きで攻撃を悉く躲していく。アミナの周りには切断された細かい枝葉だけが落ちていく。

正に妖精の如き身軽さだったが、首元には薄らと汗を掻き、息もわずかながら上がっている。雨の降りしきる中、森の中を走っているとあつて体中は泥だらけだ。休む間もなく攻撃を仕掛けてくる敵に対し、準ランカーたるアミナが未だ反撃の糸口を掴めていなかった。なぜならば

「くっ！」

唐突に、刃とは別方向、側面から飛来してくる物を感知し、アミナが背を弓なりに逸らした。空を見上げる格好となり、木々の梢と暗い空を背景に眼前を横切ったのは直径5センチメートル程の小さな鉄球だ。それがアミナの胸の上を猛スピードで横切り、傍らにある木の幹に深々とめり込んでいた。摩擦で生じた熱が黒く細い煙を燻ぶらせ、妙な臭いを放った。恐るべき膂力から放たれたであろうそれは頭に当たれば即死、他の場所であつても深刻なダメージを負わ

せるに足る威力だった。

一息付く間もなく、再び後方から風の刃が迫る。アミナは背を反らした時に上に見えた太い枝に向かって跳び上がり、それを回避すると共に両手で枝にぶら下がる。一度、振り子のように反動を付けてから足元の茂みを一気に飛び越えるべく枝から手を離す。枝が細剣ヒナのように大きく震えた刹那、その枝に今度は鉄球が直撃した。

長い距離を飛んで着地するとアミナは二人の追手から逃れるべく走り出した。個々の能力を比べれば自分の方がやや上回っているという確信がある。しかしながら、実力差が然程さほどない敵二人を同時に相手するのは如何な彼女と言えども厳しく、機を待つ以外に良策はなかった。

実を言えばもう一つ、選択肢があつたはずだった。明らかにアドバンテージのある敏捷性を武器に振り切れることは出来た。だが、アミナはそれをしなかった。出来ない理由があつた。

兵士たちと共に大勢の魔物と戦っている折り、何者かの接近を遠目に確認したアミナは、彼らの顔を見て悪名高い犯罪者である事を理解した。

見た目が三十半ばほどの、肩くらいの黒髪を紐で纏め上げた女はテクラ・エモンという名の人族だ。元々はセーニアの上級貴族で高名な魔術師でもあつたが、癩癩かんしゃく持ちで気紛れに従者を殺したり、耳の形が悪いと言つて削ぎ落したりするなど目に余る残虐さがあつた。あるときその話がどこからか外に漏れ、紆余曲折つよきよくせつを経て死刑囚になつたらしい。

密告したのは家人の誰かだと言われているがもはや確かめる術はない。彼女が牢番を籠絡さうらくさせて脱獄した数カ月後、彼女の家族が住まう屋敷が原因不明の火災に見舞われ、一家揃つて焼死体となつてしまつたからだ。他にも悪名高い数々の逸話を持つ人物だが、無詠唱で風魔法を乱発できるほどの実力は認めざるを得ない。



四、五十台の、人の良さそうな細目の男はゾラン・ダレラック。こちらは獣族の武器商人として世界的に有名で、小国同士の紛争、あるいは内乱に介入して対立感情を煽り、抗争を激化させ、国が立ちゆかなくなるまで金を啜り続けたことで知られている。

真偽は定かではないが、敵対国の仕業に見せ掛けて町一つを滅ぼしたという話もあることから、自作自演<sup>ハマ</sup>の異名を持つ男だ。表立って行動することがあまりないため戦闘能力は未知数だが、彼によって蒙った被害の大きさを鑑みて賞金額は相当に高く設定されており、5億パーズは歴代の賞金額でもトップ10に連なる金額である。彼らと魔物と、双方を相手にしての混戦となれば兵達に多くの犠牲が出ることは避けられない。それを嫌ったアミナは兵隊長に指揮の継続を命じた上で一人突出し、敵が自分に狙いを定めてくれたのをこれ幸いと、魔物との戦場から徐々に遠ざかるように努めた。振り切らない速度で敵を引き付け、身を隠す場所の多い森の奥へと誘い込んで時間稼ぎをしていた。

今以って、付近では大勢の兵士が魔物と戦っている最中だ。もし自分がこの場から離脱すれば、自ずと追跡を諦めた彼らの矛先は近くにいる誰かに向くことになるだろう。それが、魔物を相手に戦っている兵士であればどうなるか。これほどの腕前を持つ敵を魔物と同時に相手すれば、結果は火を見るよりも明らかだ。人一倍強い責任感が、そのような事態に陥る可能性を見過ごせなかった。

けれども、腕利き二人を相手に防戦を繰り返していれば体力は急激に失われてゆき、集中力も摩耗<sup>まもう</sup>する。

いつまでもつだろうか。援軍は間に合うだろうか。アミナは湧き出た不安を胸にしまい込もうとしたが、段々と重くなってきた足が、はたまた追手の二人が垣間見せる獲物を甚振<sup>いたぶ</sup>る狩人のような歪<sup>いびつ</sup>な笑みが、それを許さなかった。

さらには、平常時にはそれほど気にしていなかった、連日の激務による疲労の残渣<sup>あざ</sup>が思いの外足枷となっていた。アミナは、集中力を維持出来る時間が、当初の予想より遥かに短かったことに気づく。

だが時既に遅く、今や振り切る体力が残っているかも怪しい。  
タイムリミットは刻々と近づいてきていた。

全く攻撃が当たらないことに業を煮やしたテクラが走りながらもヒステリー気味に舌打ちし、隣にいるゾランを睨んだ。

「アンタ、いくらなんでも距離を取り過ぎだろ！ 腰の剣は飾りかい！ もう少し近づいて注意を引き付けてくれりゃあいいものを！」  
並行してアミナを追走するテクラの剣幕に、ゾランは苦い笑みを誘われる。

「あれほどの辰力使いを相手に接近戦を挑めとは、相変わらず無茶を言いなさる。いや、それにしても流石に疾はやい。あれだけの密度の攻撃を潜り抜けるとは見事なものです。こりゃあひと工夫しないととも当てられませぬなあ」

「暢気なことをお言いでないよ！ さっきの魔石を見ただろう。あまりもたまたしていたら援軍が来ちまうよ」

「わかっております。そろそろ相手も私の攻撃に慣れてきた頃。仕込みはこれくらいで宜しいでしょう。次で仕掛けます、先ほどのように獲物を追い立てていただけですか」

そう言い、ゾランは懐に手を入れ、二つの鉄球を取り出した。  
「わかった、しくじるんじゃないよ」

テクラはぶっきらぼつにそう言ってから両手を上下に合わせ、念じ始めた。

数分後、アミナは楠くすの木のの上に登り、気配を消して周囲の様子を窺っていた。

もしや諦めたか、と思ったのも束の間、アミナに向かって何かの木をするすると登ってくるのがわかった。

螺旋を描くように迫ってくるのは5mほどの大蛇だった。恐らく

はどちらかの使い魔なのだろう。

蛇には生き物の温度を感知する能力がある。如何に気配を消そうとも体温までは消しきれない。居場所がバレたことを確信し、アミナは再び木から飛び降りて逃走劇を開始する。

一分少々のこととはいえ、体力はわずかながら戻っていた。アミナは木々の間をすり抜け、迫る風の刃を跳び上がり、あるいは伏せて避け続ける。

もう一人、ゾランはどこへいったか。視線を目まぐるしく暗い森の中に走らせ、木の上からこちらに向かって振り被る姿を見止めた。斜め上からはゾランの投げた鉄球が連続して二つ、それより先に斜め後ろからは地を這う風の刃が飛来。挟み撃ちにされたアミナが真後ろに跳躍し、風の刃を回避すると共に鉄球の落下点から逃れる。

予想せぬことが起こった。一個目と同じく地面にめり込むはずの二つ目の鉄球が水飛沫を上げ、アミナに向かって勢い良く跳ね上がった。

「なっ がはっ！」

予想外の鉄球の動きに腹筋を固める間もなく、下腹部に衝撃が走った。弾んだ鉄球が右脇腹にめり込み、薄い板の上に乗った時のような軋んだ音を立てた。

「か……あっ……ぐっ」

何とか両足で着地するもたたらを踏み、腹を押さえて蹲るアミナの腹から、それがぼとりと落ちた。黒い球は固い地面に何回か弾んだ後でわずかに転がり、停止した。

アミナは目の前に転がった黒い球を見て、それが鉄球ではなく、精巧に似せた違う物だということに気付いた。艶を出すことによつて先ほどまで男が投擲していた鉄球に似せてあるが、おそらくは弾力性のある樹脂を固めて造られた物だろう。そうでなければ、雨で

幾分ぬかるんだ地面で弾むはずもなかった。ご丁寧にも威力を増すために重りまで入れてあるようだ。

痛みに悶え、身動きが取れないアミナを見て、ゾランはじつとりと湿った笑みを浮かべる。

「……流石に、あれだけ刷り込まれては避け切れなかったようですなあ」

ゾランが持っていた球は二種類あった。今まで一種類しか使っていなかったのは、獲物の油断を誘うための策だった。アミナはそれに見事に嵌ってしまった。

ゾランの舌舐めずりをした口から涎が一滴跳ねた。アミナはガチリと歯を噛み締め、痛んだ身体を押して側面に走り出す。

「ぐう……うぐ……う！」

足を踏み出す度に振動が鈍痛を呼び起こし、食い縛った歯から呻き声が漏れ出す。そして、その痛みがアミナの集中力に綻びを広げていく。

数分もすると、その弊害は顕著に表れていた。敵からの度重なる攻撃に反応しきれなくなってきたのだ。上空から迫る攻撃を間一髪跳躍して避ける。だが、次の攻撃に対する予想が追いつかなくなってくる。脳からの電気信号は増していく痛みと思考とを往復する。それが反応を遅延させ、精彩を欠く。結果、相手の攻撃がついにアミナの身体を捉え始める。最早、個人の力では逃れようもない悪循環に嵌っていた。

「ほらほら、どうしたあ！」

アミナの衰弱具合を確認したのだろう。止めを刺すべくテクラの手から衝撃波が無数に放たれた。威力を落とすし、形状も刃から殺傷力の低い球状に形を変え、代わりに数を増やしてきた。アミナが何とか横に身を投げ出そうとするが、脇腹に再び激痛を感じ、動きが

止まる。衝撃波がアミナの肩を掠め、着ているジャケットの袖を剥いだ。反動で身体が起こされ、捻る様に斜めに回転し、地面に投げ出される。

「あつ、ぐう……うあ！」

地面に叩きつけられた衝撃で再び脇腹に痛みが襲ってくる。珠のような脂汗の雫が形の良い鼻の先から滴り、泥の水溜りに小さな波紋を作る。

銀色の美しい髪の毛は泥に塗れ、体には生傷が無数に出来ていた。体が頭からの命令に耳を閉ざし、動こうとしない。痛みと疲労はたくさんだと言わんばかりに。

テクラがゆっくりと暗闇から姿を現し、四つん這いになった泥塗れのアミナを見降ろして勝ち誇ったように胸を張る。

「くく、獣姫様ともあるうものが泥遊びかい？ 嘆かわしい限りだねえ。まるで何年も使い古した雑巾みたいだよお」

アミナは荒い息を途切れ途切れに吐きながら言い返す。

「……年増を必死で隠そうと、バターのように白粉おしろいを塗りたくっている、涙ぐましいそなたよりはマシだ」

「なっ」

テクラの噛み締めた歯が剥き出しになった。

「何だこの豚！」

テクラの手から衝撃波が発せられた。それを見てアミナの紅い目が煌いた。千載一遇のチャンス。辰力を込めた左手を後ろ手に、空を引っ掻くかのように振り抜く。

連なる五本の三日月形の刃が生じた。残っていた力を余すことなく込めた一撃はテクラの風魔法を容易く貫通する。

「しまっ がっ！」

テクラの悲鳴が聞こえ、アミナは微かな笑みを浮かべた。だが、

すぐに顔色が変わった。引き裂かれるはずのテクラの身体が横に弾き出されるように吹っ飛んだのだ。テクラは泥を転がり、うつ伏せの状態でようやく止まった。

「いつつつ、な、何すんだい！ このトンマ野郎！」

味方のはずの自分に向けて風の魔石を発動させたゾランにテクラが自分の腰を擦りながら悪態を付いた。

「せ、折角助けたのにその言い草はないでしょうに。そちらを御覧なさいよ」

顔を真っ赤にして怒鳴ったテクラが、ゾランの指差した方角を見、一気に顔を青褪めさせた。目に映ったのはメキメキと音を立てて倒れている幾つもの大木と、腰丈くらいの切り株だった。アミナの渾身の一撃はわずか数秒で森の中に緑色の谷間を作っていた。

は、外した。

アミナは起死回生を狙った一撃を躲されたことに落胆を隠せなかった。一人だけでも消えれば、弱った体でも逃げ切れる見込みはあった。一方で、テクラは頬に何かが垂れているのに気付き、さり気なく手で顔を拭い、それを見て硬直した。

「……貴様あ、よくもアタシの顔に！」

激昂したテクラの手の平がアミナに向けられ、再度衝撃波が放たれた。避け切れないと判断したアミナが咄嗟に両手を交差させ、防御する。

しかし、力がほとんど残っていない身体では踏ん張ることすら叶わず、華奢な身体が跳ね飛ばされた。交差させた手が衝撃に堪え切れず、大の字になったその瞬間

「いつ！」

左腕の裏が楓の幹かえでに激突し、肘の少し上辺りからあらぬ方向に折

れ曲がった。ぶつかつた木の幹を軸としてアミナの身体が横に投げ出され、泥の中を無様に転がっていく。

「……ぎ……あっ！」

仰向けの格好で、激痛にのたうつアミナの細まった視界に影が横切る。咄嗟に右手で地面を強く押し出し、横に転がって逃れる。数瞬遅れて、アミナの腹部を狙ったゾランの膝蹴りが地面に飛沫を作った。何とか身を起こそうと膝を突き、立ち上がり掛けたアミナを再び衝撃波が襲った。

「あああ！」

またも押し飛ばされ、小さく身を縮めたアミナの背が浅い窪みに溜まっていた泥水を巻き上げていく。

「ぐ……ごぼっ！……うっぶっ……げぼっ」

口の中に流入してきた泥に、アミナが何度となく咳き込んだ。その振動すらも響くのだろう。脇腹を押えようとするが、その腕は折れている。反応する代わりに違う痛みを訴えてきた。唇の端から涎が一筋伝う。

どうやらここが、死に場所か。

ゆっくりと歩み寄ってくる敵二人を霞む視界に捉え、アミナは操り人形のように、左右にふらつきながらも立ち上がるうとした。だが、体を支える両膝が笑い、再び地に付いた。最早立つことすら叶わなかった。黒い水溜りに映った己の顔には、絶望の影がちらついていた。

「さて、どうやって殺してくれようか。少なくとも顔を傷付けてくれた礼はしてやらないとねえ」

テクラが妖艶な美貌に不思議と良く馴染む醜悪な笑みを浮かべた。頬に刻まれた一筋の傷、そこから雨で禿げたペンキのように垂れる

血がおどろおどろしさを助長している。

「しつかしまあ、巷ちまたじゃ聡明だなんだと聞いていたけれど存外馬鹿な小娘だねえ。一人でアタシら二人を相手にしようとするなんて、己を過信し過ぎじゃないか？」

テクラの意見は一見正しくあったが、アミナの胸中を正確には現していなかった。アミナは痛みにも白んだ意識の中、自身の思惑が、誘導が成功したという一点においては安堵していた。

「じゃあ止めを」

「御待ちを。少し時間をかけてもらえませんか？」

後ろから掛けられた声に反応し、テクラが肩越しにそちらを見た。「どういうつもりだい、ゾラン。あまり時間はないんだよ。任務そちのけで遊んでいることがばれたらただじゃすまないし」

テクラの言葉にも、ゾランは商人らしい愛想笑いを崩さなかった。「いやなに。幾つかのメモリーストーン忘れずの石くに獣姫様の悲鳴を吹き込もうと思ひましてね」

淡々と、しかし非道な提案をしたゾランにアミナの目が見開き、反してテクラの口元が釣り上がった。

「ま、それくらいなら別に構わないけどねえ。そんなのどうするんだい？」

「これがまた、物好きにはそれなりの値段で売れるのですよ。以前攫った有名な踊り子の物などは億近く稼げましたのでね。ましてやあの獣姫様であれば、もつと上を狙えるかも知れませんかあ」

「そりゃあいいね。……合作ってことでアタシとアンタで4：6でどうだい？」

「2：8です」

ゾランの突き放した言い方にテクラが唇を尖らせる。

「そりゃないだろうに。アンター人では倒せなかっただろうし、せめて3：7ってとこだ」

「1：3、これ以上は譲れません。売る場所を知っていなければ価



値は著しく下がりますから」

小数点まで切り詰めるゾランに、テクラは苦々しい表情を隠せない。

「が、がめついねえ。まあいいだろ。　　と言うわけだよ、獣姫様。

楽には死ねると思いなさんな」

アミナに向けたテクラの笑みが数瞬して消える。唇を噛むアミナの目がまだ死んでいないことが、テクラにとっては面白くないことのようにだった。

「まさか、まだどうにかなるとか思っているのかい？　その身体で」

「……生……憎と、諦めが……悪いので、な」

痛みを堪えながらたどたどしく言葉を紡ぐ満身創痍のアミナを見て、テクラは失笑しながら横に首を振る。そして、視線の先に、アミナを絶望の淵に追いやる格好の材料があることに気付く。

「……わかつているよお、援軍を待っているんだらう。　　でも残念ながら、一縷の望みすら断られたようだねえ」

テクラが唇を吊り上げながら顎で示した。アミナはそちらに視線を走らせ、今度こそ目の前が真っ暗になった。女の言うことが事実なのだと悟った。敵を前にして不覚にも、唇が恐怖で小刻みに震え、歯がかちかちと音を鳴らした。

三人目の、彼らと同じような格好をした黒ずくめの者が、500メートル程先からこちらに向かってくるのが見えた。これほど離れていてもある程度はわかる。彼らに負けず劣らずの実力者だということ。青い燐光を纏い、そして、鎌を背負っていないということが、もしかしたらと思わせた、見知った黒ずくめの男ではなかった。

万事休す、か。

詰んだと言って間違いはなかった。折られた腕は動けと命じても小さく震えるだけで使い物にならない。腕が振れず、さらに脇腹まで痛めていては目の前の狡猾な狩人たる二人を振り切れるはずも

ない。集中力は既に途切れている。普段のアミナの五感であれば、敵の接近をテクラより早く察知していたはずだった。更に敵が増えるとあつては、助かる見込みはない。

魔石の霊体は届かなかつたのか。援護にくるほどの余裕がなかったのか。それとも、自分が霊体を飛ばした場所から離れ過ぎてしまったせいなのか。待ち望んだ援軍は、終ぞ来ることはなかつた。

仕方がない。アミナは心の中でそう呟いてみた。自分で納得するために、己の蒔いた種なのだと言いついてみた。

案の定というか、その一言で割り切れるものではなかつた。国のためにやるべきことを、祖父のキアを置いて、孫娘の自分までもが先に逝くのだ。死ぬことに対する恐怖以上に、申し訳ない気持ちで埋め尽くされた。

ジジ様、ごめんなさい。

謝罪の言葉が浮かび、思いがけず目尻に涙が浮かんだ。アミナの様子を見て、女は愉快気に高笑いした。

「はっはあ。どうしたんだい？ 滑稽な話じゃないか。あの獣姫様が、こともあろうにべそを掻くとはねえ。悪いけどこれから本番だよ。せいぜいよがってもらって、高く売れる商品を作らなきゃね」

投げ掛けられた挑発の言葉は、アミナの紅い目に火を灯す。

ただでは死ねない。せめて残った彼らの為に、一人だけでも道連れに。悲壮な覚悟を胸に、アミナが反応の鈍い身体に力を込めようとした。

「 止まり、ませんね」

微かに上擦ったゾランの呟きが、アミナの鼓膜に届いた。

「 ……何だつて？」

テクラは眉を潜めているゾランの視線の方角を訝しげに見遣り、

彼の言わんとすることを理解した。

自分たちが優位に立っているのは遠目から見ても明らかだろう。なのに、何故彼はあれほどの鬼気を纏い、猛然と走ってくるのか。

まさか。

はっとしたアミナは、先ほど見た方角へと視線を走らせた。一時お互いの顔を見合わせていたゾランとテクラも再度そちらを見た。朽ち果てた傘のような、穴だらけの黒い外套を闇に透かし。瞳目に値する足運びで間合いを詰めてきた三人目を。

## 第十六章 〵(3)〵

「……ありえん……ありえんぞ。……俺は、認めない……絶対に」

一人その場に置き去りにされたエグセイユは茫然自失といった表情で、うわ言とも呪詛とも付かぬ言葉を呟いていた。その視線の先には、石灰色の堅い石床が無残に踏み抜かれた跡があった。その脚力の凄まじさを物語る様に、中心から半径5メートルの床に蜘蛛の巣のような亀裂が入っている。

俄かには認め難い光景。しかしそれが、己の網膜にありありと焼き付いている。憎き男の姿を、言動を思い浮かべるだけで胸に何かが蟠わたかまっていく。そして、そのはけ口はどこにも見出せなかった。

エグセイユの気質を鑑みれば、現実から目を逸らすことなどプライドが許さなかったに違いなかった。どれだけ否定の言葉を吐き出そうとも、それが己の耳を通し、反転して還ってくるのだ。シユイの力が、現時点では己の上をいつていたのだと。

未だかつてなかった屈辱を噛み締めていた。先ほど垣間見た化け物じみた力が、自分に向けられなかったことに憤った裏で、安堵してしまった。相手に手加減されていたこと以上に、一時とはいえ胸を撫で下ろしてしまった自分自身が許せなかった。

俺は負けてなどいない。そう自分に言い聞かせようとしたが、その響きのあまりの空々しさに寒気がした。戦っていれば明らかに負けていたものを、たまたまその戦いを避けられたから負けていないと言い張るのか。これほどまでに厚顔無恥こうがんむちだったのか、エグセイユ。スキーラという男は。

「……んな、そんなわけがあるかあ！ あのかそがきがっ！ ちくしょうがあっ！」

エグセイユががなり立てながら、遮しよ二無にむ二剣にけんを振り回した。己の

青髪を振り乱しながら薙ぎ払い、振り下ろし、切り上げる。乱れ飛ぶ数多の剣風が建物や工場の備品を容赦なく傷つけていく。鉄製の石炭入れの中央部分に亀裂が生じ、そこから中に収まっていた石炭が床に散らばり始める。

物に当たり散らしたところで、己の刃があつた男の喉元に届くことはない。そんなことは嫌と言うほどわかつていた。虚しいだけの行為だったが、それでも体を動かさずにはいられなかった。

エグセイユは一心不乱に剣を振り回しながらも、揺るぎなかった自分の存在そのものが、床に毀れ落ちる石炭と同様、音を立てて崩れていくのを感じていた。

アミナの伝文を綴った霊体が最後に矢印を象り、魔石が使われた方角を指し示して消失した。エグセイユはそれを見届けた後、溜息を一つ吐き出した。

「……受け取つちまつた以上、放置しておくのは流石にまずいなあ。仕方ねえ、とつとと終わらせるか」

そう言い、エグセイユは再びシュイに向き直り、剣を掲げ直した。尚も構えを崩さぬエグセイユに、シュイはどこか遠くを見るような目を向けていた。ややあつて、小さく口を開いた。

何をやっているんだ、お前は。

「……何だつて？」

囁くようなその声を聞き取れなかったのか、エグセイユが訝りながらも訊き返した。しかしてシュイのその言葉はエグセイユに対し

ての問いかけではなかった。己の不甲斐なさに対しての強い憎しみが心情を吐露させたものだった。

また少女の死を、己に見せようというのか。

今度は言葉にもならなかった。唇がそれとなく動いただけだった。謂われなく町を襲う連中に、己に尚も剣を向けているエグセイユに、それに付き合っている自分に抱いていた憤激と怜悧の感情が混じり合つて消失する。

空っぽになつた頭に浮かんできたのは、陰惨いんさんに過ぎる記憶。頭の中では雨音だけが鳴り響いている。その音が現実へと派生し、全ての音が呑み込まれていく。

嫌だ、嫌だ、嫌だっ！ 冗談じゃないっ！

冷たかった。己の肌を打つ幻視の雨が、体のみならず心までも凍えさせていくのを感じた。抗いようのない恐怖が生じ、今度はそれを掻き消すための憤怒が生じた。

「嫌なんだよっ！ もう間に合わないのはこりごりだっ！」

今度はエグセイユの耳にも、はっきりと聴き取れた。シユイは激しい頭痛を少しでも和らげようとするかのように額を左手で鷲掴み、剣を構えているエグセイユにも、落ちていく自分の鎌にも目をくねることなく、ふらりと出口へ向かつて歩き出した。

「おい、何のつもりだ手前！ まだ決着はついてな」

エグセイユが放つた制止の言葉は、それ以上続くことはなかった。

シユイは二、三步歩いた所で立ち止まり、エグセイユに背を向けたままに両の手を交差させていた。

一見無防備なはずのシユイの姿に、しかしエグセイユは気圧され、構えた剣を振るうのを躊躇した。何か得体の知れない力が、黒衣を取り巻いているのを感じ取っていた。

> 万象にうつろう数多の力の欠片よ 我が身を苗床に顕現せよ <

シユイが祈歌チャントを紡ぐと同時に自身に内在する魔力を余すことなく放出。己の身体の周囲を覆いつくしていく。

ややあつて、周囲に存在する魔力の微粒子がエグセイユの目にも可視化された。塵のような白い光が。シユイが展開している無数の微粒子に引き寄せられていく。それらが接触した瞬間、次々に結合ユニットを起こし、もの凄い勢いで青い燐光の領域を広げていく。

エグセイユは思わずたじろいだ。シユイの解放した魔力量に対して、引き寄せられる魔力量が半端な量ではなかったのだ。周辺から集まってきた魔力の粒子がシユイの魔力に我先にと群がっていく。その様は、投じられた餌に群がる魚の大群を想起させた。

収縮した魔力がある程度の質量に至ったところで魔力印ルインを象つていく。それらがシユイの周りをゆつくりと、左回りに回転しはじめた。二十四目の魔印が配置された途端、シユイの身体を軸とする積層型の魔法陣が姿を現した。苛烈な力が渦を巻き始め、シユイの黒衣が音を立てて靡く。巨大な死神の影を壁面に描き出す。

> 我を制する剣と化し 封ずる盾と化して 不埒なる者どもを理の淵ふちより追い落とさん <

言霊を紡いでゆく度に、シユイは己の意識が段々と遠ざかりつつあるのを感じた。以前ニルファナに対して使用し、それ以来彼女に使うことを禁じられていた > 滅祈歌ルイン・チャント <。周囲に点在する力を掻き集

めて魔法陣を形成し、一時的に己の能力を強化するシュイの切り札。ニルファナの地力はその上をいつていた。束の間、そのことを思い出したシュイは束の間苦い笑みを浮かべた。が、その笑みは次なる言葉と同時に消え去った。

「> 我が心身を修羅と化せくッ！」

瞬間、大気が大きく戦慄せんれついた。力の微粒子が工場内の壁を突き抜け、風となつて拡散していく。

発動と同時に、シュイは先ほどまで感じていた体中の痛み、気だるさが失われるのを感じた。代わりに備わったのは、空舞う綿毛の如き身の軽さと、全身から溢れんばかりの力強さだった。

エグセイユは青い燐光に覆われたシュイを見て肌が泡立つのを感じた。目の前にいる男は、姿形こそ同じでも先ほどとはまるで別人だった。胸ほどの高さに淡く光る魔印で描かれた円形の魔法陣を展開しているその姿は、着ている黒衣と相俟あいまって異様の一言に尽きた。

「て、手前、一体何なんだ、そいつぁ……」

我知らず、エグセイユがわずかに後退あとひきりした。シュイはまるで物を見るかのような目で、恐れおのれているエグセイユを見た。一切の感情が読み取れぬ、しかして名剣の切先を思わせる眼光を向けられ、エグセイユが喉を鳴らす。

『追つて来るなら好きにしろ。ただし、殺されるのを覚悟の上でな』

先ほどまで発していた声と明らかに違う響きだった。同じ声を幾重にも重ね合わせた様な、残響がいやに耳道に残る声だった。シュイの身体を覆っている得体の知れない力がそうさせているようだった。



無造作に、アミナの放った霊体が先程指し示した方向に向き直ると、シユイは敵を退けるべく戦場へと走り出した。そのはずだった。あまりの瞬発力に、間近にいたエグセイユの目にはまさしくその姿が消えたように見えたのだ。

それを知覚した時には、人一人分の質量の移動によって生じた一陣の風が屋内の空気を、次いでエグセイユの青髪を掻き乱していた。

「ま、待ちやが……！ あ、あの野郎！ この俺様を無視するだど！」

激したエグセイユが後を追おうとしたが、足が一步も進まなかった。彼は信じられないという表情で自分の足元を見た。小刻みに震えていた。足だけではなく、全身が。憤怒の感情に負けぬくらいの激しさで、眼前の脅威を恐れた己の本能が、その行為を拒絶していた。

それからしばらくして、エグセイユはようやく落ち着きを取り戻していた。明日か明後日か、ついさっきまで工場だったこの建物を訪れた者が、変わり果てたこの様子を見てどんな顔をするだろうか。そのようなことを笑って考えられるくらいには。

床や壁には無数の刀傷があり、周りにあつた作業台や手押し車等の備品も切り刻まれている。施設としてはとても使い物にならない状態だ。建物を支える鉄柱も四分の一近くが切断されている。安全面を考えてもこのまま工場として稼働させるのは不可能だろう。

「そうだ、俺の力はこんなものじゃないはずだ。あんなやつなんか、遅れを取るわけがねえ」

エグセイユは、自分がこれからどうすれば良いのかをわかっていた。至極単純な事だ。今以上の、シユイが自分に見せつけた力以上の力をもつてして、シユイを屠れば良いだけの話だ。

無論、あれほどの力を身に付けるには一朝一夕にはいかないだろう。が、それでも、このまま羞恥心を抱えて生きていくなど堪えられるはずもない。今この時こそが、エグセイユが生まれて初めて、心の底から力を欲した瞬間だった。

だが、とエグセイユは考える。この不快感を何年間も燻くすぶらせたまま修行に明け暮れることを想像し、頬の皮膚が破れんばかりに顔が歪んだ。

冗談じゃない。このままで済ますものか。まるで道端の石ころでも見るかのように自分を見た、フードの奥にあった忌々しいあの目を。出来る事なら今すぐにでも、絶望の色に染めてやりたい。

でも、どうやって。

エグセイユは顎を撫でながら入口の方へと向き掛け、そう言えばと思い返した。周りに視線を走らせ、数秒後、目当ての物を見つめる。

そうだ、あいつを使えば。

エグセイユは、視線の先に落ちているそれに向かって歩き出した。憎しみに滾たぎる、悪魔ですら忌避きひするだろう笑みを浮かべて。

アミナたちの居る場所と走っている黒衣の男との距離はもう100メートルほどもなかった。同じ生き物とは思えぬ足の速さ。テクラはようやく近づいてきた男を敵だと認識し、すぐに手の平をアミナの方に向けた。

「残念ながら遊ぶ暇はなくなっちまった。先に逝きな」  
地に両膝を付いたまま、アミナは己にかざされた手を見て、ゆっくりと目を瞑る。

不思議と心は穏やかだった。甚振られずに死ねるだけでも感謝しなければ、とそのようなことを考えられるくらいには。

だが、目を瞑ってから少ししても衝撃波が発される事はなかった。

「……こ、これ、は！」

動揺の色を含むゾランの呻き声にアミナが薄らとまぶたを開ける。目に飛び込んできたのは険しい表情で歯を食いしばっているテクラとゾランの姿。何らかの重みに堪えているかのようにはらふらふらとよるめき、足をがくがくと震わせている。

「>更なる威に屈せよくか！ こ、小賢しい、真似を！ あの距離から届かせるかい！」

テクラが吐き捨てるように言った。上位干渉魔法の一つ、>プレッシャー<。相手の動きに制限をかける魔法で、術者の実力に比例して効果範囲、射程距離が広くなる。

ただ、一定の効果を望むには少なくとも掛ける対象と同格か、それ以上の魔力が必要だ。黒衣の男がこの距離をして、それも自分たちほどの腕利き二人に纏め掛けたとするならば、一流の魔法使いと遜色ない力を秘めていることになる。

「 かあ！」

「 なんの！」

魔法を掛けられてからわずか数秒で、テクラとゾランは強靱な精神力をもって自分たちに押し掛かってくる魔力を跳ね退けた。瞬間的に四散した静電気が歪な線を描き、暗い地面を青白く照らしている。

「はっ、数秒だけ寿命が延びたな！」

今度こそはと、テクラの手からアミナに向かって風魔法が放たれた。殺意を込めた、強力な衝撃波が炸裂し、表面の泥水と抉り出した土砂とを激しく撒き散らした。アミナの後方にあつた節くれだつた木が根元から爆ぜ、樹皮が捲れて中身が剥き出しにされた。

黒い雨が止んだ後には跳ねた汚泥が周りの木々にへばり付き、地面には半球状の窪みが出来ていた。その様子をアミナは、10メートルほど離れた場所から、見下ろしていた。

「あ……れ……」

アミナは一瞬の内に切り替わつた視界に眉を潜め、次いで妙な浮遊感に気付く。顔を逆の方向に向けてみると、黒い衣服から誰かの白い首元が覗いていた。

『今度こそ、間に合つたみたいだ』

不思議な響きを伴う声だったが、おぼろげながら聞き覚えがあつた。張り詰めていた緊張の糸がその一言であつさりとは断ち切られ、前触れもなく目が潤んだ。

顔がぐしゃぐしゃになるのを懸命に堪えながら、アミナは少しずつ、視線を上にならしていく。潤んだ瞳が相手の顔をはつきり見ることが妨げていたが、優しげな眼差しが自分の顔に向けられているのはわかった。何か言わなくては、と口を開きかけたが、胸が詰まってしまう言葉にならなかった。

無意識に掴んでいた黒衣の裾を、アミナがギュツと握り締めた。傷だらけのアミナの身体は、青い燐光を纏うシユイの両腕に収まっていた。

## 第十七章 く滅祈歌（1）く

テクラは攻撃が当たらなかつたことが信じられぬという面持ちで、己の震える手を見つめていた。その傍にいたゾランは魔法が炸裂した地点と、青白い燐光を帯びているシュイの姿とをまじまじと見比べている。

いかにシュイのフレッシュより更なる威に屈せよと数秒ロスしたとはいえ、それくらいの時間ではどうにもならないはずだった。長年実戦に身を置いてきた自分が、シュイの驚異的な速度を目で捉え、それでも救出するには間に合わないかと判断したのだ。

相手の魔法を跳ねのけてから時間にして二秒弱。テクラが再度無詠唱魔法を発動させようとしているその間に、ゾランはアミナに止めを刺そうとしているテクラをシュイから庇うように立ち塞がり、テクラの詠唱を妨害されないようにした。シュイがアミナの救出に動くならば、それを妨害しようという目論みだった。けれども、暗闇の中で存在感を示していた青い燐光が消えた瞬間、ゾランはシュイの姿を完全に見失った。

テクラの手から風魔法が放たれた瞬間には、アミナの身体は彼女の目の前にあつた。距離にしてわずかに数メートル。発動から風が届くまでに果たしてどれほどの猶予があつたのか。もし仮に、当たつたと錯覚するほどの刹那にシュイがアミナを攫つたのであれば。あまり考えたくないことではあつたが、先ほど見せたスピードすらも、全力ではなかつたことになる。アミナを抱きかかえているシュイに、二人は緊張の面持ちを向けた。

アミナは、このような時にどう振舞えば良いのかわからなかつた。そもそも、男の腕に抱かれた経験などほとんどなく、あると

言っても父と祖父くらいのものだし　それも遠い昔のことだ。

ふと、シユイの顔から視線を下げ、身体を見て愕然とした。今までも魔物と戦っていたのだろう。熾烈な戦闘を想起させるように、着ている黒衣は穴だらけで、全身の至るところに傷があった。傷口は降雨によって洗われたのか、濃いピンク色になっている。

流石に、同じシルフィールの傭兵であるエグセイユと戦っていたなどとは思いつかなかったのだが、アミナは無事とは言えぬその身体で救出に駆け付けてくれたことに強く胸を打たれた。それだけではなく、一旦は仕舞い込んだはずの煩雑な感情が、再び表に出始めていた。安堵、疑問、深い感謝、アミナ自身気付かぬくらいのささやかな思慕。

そしてようやく、真っ先に言わねばならぬ言葉があることに気付いた。そうだ、まずは助けてくれた礼を言わねば。アミナは震える唇を何とか動かそうとした。

「わっぷ！」

そして、それはあっさりと遮られた。シユイが懐から取り出した白いタオルをアミナの顔に押し付けていた。

「……んむ、んう、んむう」

シユイはそつと屈んでアミナの腰を片膝の上に乗せ、空いた片手で泥に塗れたアミナの顔と前髪をタオルでわしゃわしゃと拭う。汚れが目に入らぬように留意しつつ丁寧に、所々タオル越しに摘むように拭き取っていく。テクラとゾランは口を半開きにしながらシユイと、されるがままになっているアミナを見つめている。

ややあって、アミナの顔からタオルが取り払われた。

「ぶう……い、いきなり何を」

『うん、綺麗になったね』

「……なん」

上がりかけたアミナの抗議の声は、満足そうにうなずくシユイに敢え無く遮られた。

それはつまり、顔から泥が取り除かれれば綺麗になるという表現が適するのは当然のことであつて。無造作に投げ掛けられた言葉に混乱し、次いで顔が熱くなるのを感じた。あまりの気恥ずかしさに、先ほど礼を言おうとしていたことなどはすっかり忘れていた。

何をこれくらいで動揺しているか。それくらいの褒め言葉は普段から言われているだろう。落ち付け、いつもの私を取り戻すのだ。アミナは懸命に、毅然とした態度を取るべく自分に言い聞かせた。

「そ、それよりも！」

アミナは主導権を握るべく声を荒げた。

「それよりも？」

シユイが首を傾げ、アミナと視線をきつちりと合わせた。雨とも涙とも付かぬ物が拭き取られたおかげで、暗闇越しではあつたが顔が薄らと見えた。以前見たはずだった偽りの火傷の痕が何故かここにも見当たらず、その代わりに滑らかな肌が見えた。闇の中に黒真珠のような輝きを放つ目が、自分へと向けられている。

アミナはシユイが素顔であることを理解し、言わんとしていた言葉を喪った。

「それよりも……よ、よくこの場所が、わかつたな」

言つた後で、後悔にふるふると思えた。違うだろ、と。考えているのとあまりに違うことを口にする自分を心底詰りなじたい気持ちになり、そんな気持ちを知ってか知らずか、シユイは穏やかな声で応じる。

「そうだね、流石に焦つた。霊体の示した方角通りに来たつもりなのに、どこにもいなかったから。何人か、フォルストロームの軍人たちが必死にあなたを探していたし。途中で戦場を離れたって聞いたけれど、こついうことだつたんだね」

それを聞き、アミナの顔がやや曇つた。良かれと思つてやったとはいえ、兵たちに要らぬ心配を掛けてしまったことに対して、言い



様のない罪悪感を覚えていた。

『彼らと手分けして探していたら、偶然この辺りから鳥が一斉に飛び立ったのがわかった。夜目の利かぬ鳥が夜に群れを成すことなど滅多にないし、あるいは近くで誰かがやりあっているんじゃないかと期待してきたんだけど、勘が当たって良かったよ』

アミナは先ほどテクラに繰り出した一撃のことを思い出した。相手には当たらなかったものの、木々が薙ぎ倒されたことよって就寝している鳥たちを目覚めさせたのだらう。周りに異常を知らせるくらいには役に立っていたようだ。

「そなたが霊体を受け取ったのか。何の巡り合わせか、よくよく縁があるようだな」

『教会で救われた恩があるからね。そう言えば、きちんと御礼を言っていないかったつけ。あのときは、ありがとう』

「……っ、な、何で」

何でそなたがそれを先に言うのだ。そう言おうとしたところで、喉が絡まった。普段通りに喋れぬ己の口が何とももどかしく、苛々にも似た感情が募った。

『どうかした？』

「……い、いや。大したことではない。それに、これでおあいこだろっ」

『そうだね。じゃあ、アミナ様も御礼はいいよ』

「……い、いや、そなたが口にした以上は私も言っ」

『そ、そういうものなの？』

「そういうものなのだ！」

と、口調ほどに思っていたわけではなく、半ば意地になっていただけだった。アミナは俯き気味に、ぼそぼそと言葉を紡ぐ。

「……そ、その」

『うん』

「……あ……がとっ」

ぼしょつと、空気が漏れた様な声が出た。顔どころか全身が、強い酒でも煽ったかのようにカツと火照るのを感じた。それでもシユイは消え入るようなアミナの言葉に、軽くうなずいた。

居た堪れなくなったアミナはシユイから顔を逸らし、そこで違和感に眉を潜める。

う、少し臭うな。私としたことが、気付かなかった。

体からは汗と土の臭いがした。先ほどまで森の中を走り回り、泥の中を転げ回っていたのだから無理からぬことだった。雨が降っていないければもつと酷いことになっていただろう。はつとしてシユイの方を見ると、シユイが纏う黒衣の袖や裾に汚れがすっかり移っていた。

「す、すまぬ！ 大分汚してしまったな。……その、もう良いから下ろしてくれぬか」

シユイの服を汚すのはもちろんのこと、一応年頃の娘として臭いと思われるのはとても堪えがたいことだった。加えてこの格好、お姫様抱っこは流石に恥ずかしい。何より、いくら闇の中とはいえ、これだけ顔が近ければ自分の感情を見透かされてしまうような気がして落ち着かない。

ばつが悪そうなアミナの上目遣いに、シユイは微かに笑いながら、少し呆れた様な口調で応じる。

『汚れなんてどうだっていいよ。大体、そんな身体で立てるの？』

「……あ、えつと……た、多分」

口ではそう言ったものの、無理だとわかっている。命の危険が差し迫っていた先ほどさえ、立とうとして立てなかったのだ。未だ敵を目の前にしていることから完全には言えぬまでも、安心して身体から力が抜け落ちてしまった今となっては尚更だ。仮に下ろしてもらったところで、無様に泥の池にダイブするのが落ちだろう。

『やっぱり無理だね』

「そ、そんなことないぞ！」

『本当に立ち上がる余裕があるなら、あなただったら人に頼むまでもなく、腕を振り払ってでも下りるでしょ。それに、さっきあのおばさんが使った魔法だって、少なくとも避けようとするくらいは出来たんじゃない？』

「……あう」

凶星を刺され、アミナはすまなそうに、自信を持って答えた解答にペケ印を付けられた子供のように唇を噛んだ。

「お、おぼっ」

ほぼ同時に、どこか緊張感のないやり取りに見入っていた外野から、どもった声が発せられた。

「き、貴様、言うにこと欠いて」

シユイは、齒軋りしているテクラを見て、すつと膝を伸ばしてアミナを抱き上げた。アミナはその不意打ちに一瞬身体を震わし、次いでそんな自分を恥じるかのように小さく首を横に振る。

『いや、あまりに見え透いたお世辞を言うのもどうかと思つてさ。対象外に無理に当て嵌めるのは露骨に過ぎるでしょ。型に似合わぬ服を着せようとするみたいでいかにも見苦し』

「黙れ！」

テクラの手の平が瞬時にシユイの方へと向けられた。が、魔法を発動することまではしなかった。常人離れた動きを見せたシユイに対しては、ただ闇雲に攻撃を仕掛けても無駄だということをおぼろげにわかっていただろう。

『そつちも、大分息が荒いけどその身体でやる気か？』

「……む」

シユイに視線を投げ掛けられたゾランの、鉄球を取り出そうとした手が懐の手前で止まる。

『まあ無理もないよね。二人掛かりとはいえアミナ様とやり合ったんだ。相当に体力を消耗していても不思議じゃない』

アミナの三角耳がぴくぴくと動いた。自分が化け物か何かのように言われているのを聞いて少し不満げな表情を作っていた。

「随分と余裕ですねえ。両手が塞がっているその状態で」

ゾランは淡々とした口調で応じたが、その実、手の平にはじつとりと汗を掻いていた。

賞金首であることもあってテクラとゾランは二人共に追手を撒くため、場合によっては撃退するために相当な修練を積んでいる。疲労は感じているものの、息が漏れ出る音が出るほどの物ではない。こちらはシュイが燐光を纏っているために彼の動作もはっきりと見える。が、向こうは違はずだ。直ぐ隣にいるテクラの顔を識別するのがやっとというこの暗闇と雨。ましてやあの距離で、どうして疲弊しているのを見破られたのか。

『解せないと言う面持ちだね』

ゾランが、今度こそはつきり顔を引き攣らせた。やはり、シュイは何らかの方法で闇を無効化し、こちらの動きを読み取っている。

『っと、忘れていた』

シュイはアミナを抱いたまま手の平を空へと向けた。そして次の瞬間

「くっ!」

テクラとゾランが反射的に腕を掲げ、両目を庇った。眩い光がシュイの手の平から放たれ、白い光を湛えた巨大な柱となって天へ伸びていく。アミナは眩しさに目を細めながらもシュイの方を見、息を呑んだ。光はフードが作る陰影すらも取り払い、束の間シュイの顔を露にしていた。

「……あ」

知らずと声が漏れた。アミナは、以前からある程度シュイの正体

について見当を付けていた。おそらくは自分と同一年か、やや年齢上くらいの青年ではないか、と。そこにいるのは、思慮深げな老齡の魔法使いでも、精悍な顔付きをした青年でもなかった。どこか表情に陰りのある、それでいて優しげな、まだ顔立ちのあどけない少年だった。

アミナが思わず身を乗り出し、シユイの顔をもつと良く見ようとした瞬間、視界が白く染まった。樹木を覆う葉の色が黒から鮮やかな緑へ、闇に溶けていた雨水が光のシャワーへと変化した。辺りを真昼の姿に照らし出すその光柱は段々と細くなっていき、面から線となり、消失した。

光が収まり、再び森に暗闇が戻ってきた。その様子を見ながら、テクラとゾランはシユイが何をしたのかを瞬時に悟っていた。>照<sup>ラッシュ</sup>明魔法くを使い、アミナを探しているフォルストローム兵たちに居場所を知らせたのだ。あれほどの光に気付かぬはずもない。もたもたしている内に敵の援軍が馳せ参じることだろう。

「随分と、面倒なことになっちまったねえ」  
テクラが苦々しそうに呟いた。選択肢は二つ。そう遠くないうちに援軍が来るのを承知でこのままシユイと戦うか、この場から退散して仲間と合流するか。

戦う場合、シユイがアミナを抱えているのは大きなハンデになる。が、先ほどシユイが垣間見せた身のこなしを考慮すると、逃げに徹された場合、援軍が駆けつけるまでの間に捕えることはまず不可能だろう。

「だけど、ねえ。」

もし、このままこの場を退散した後この件が明るみになれば、これほど大きな騒ぎが明るみにならないはずもないのだが、二人がアミナを執拗に追っていたことも周知の事実になるだろう。彼が、

イヴァンがそれを耳にしたらどうなるか。追跡者の正体を必ず突き止めようとするに違いない。万が一にも任務そっちのけで人狩りを楽しんでいたのだとバレたら、ひよっとすると処分されてしまうかも知れない。

「流石に彼に知れたら不味いです。やるしかありませんね」

隣にいるゾランから背を後押しする声が発された。

「そうだね。せめてその死にかけの小娘に止めを刺していかないとねえ」

あのアミナ・フォルストロームを始末したとすれば、当初の目論見とは異なるものの自分たちの目的は達したも同然だ。イヴァンも文句は言わないだろう。テクラは己の持論が間違っていないと信じ込む。

「折角荒稼ぎ出来そうだったのに、残念です」

「荒稼ぎ、だと？」

ゾランは自分の微かな声を反復した耳聴みみさこさに舌を巻きつつ、シュイに愛想笑いを向ける。

「ええ、獣姫様の悲鳴をメモリーストー忘れずの石くに吹き込んで売ろうと思っていたのですよ。どうです、よろしければ貴方も一枚噛みませんか？」

訊ねるまでもなく、アミナを助けにきたシュイが応じるはずもない提案だった。ゾランにしてみれば戦闘前に交わす社交辞令みたいなものだった。何か怒りの籠もった文句がシュイから返されるかと思っていたが、予想に反して即答はなかった。

シュイは、胸元が少しだけ引つ張られたのを感じ、視線を落としたり。アミナの小さな右手がそこにあつた。気丈な彼女が、それでもゾランの言葉に怯えたのだろう。微かに肩を震わせている。その小さな身体は自分以上に無残な、見ているだけで胸が痛むような状態だった。左腕は一目で折られているとわかる。二の腕辺りが酷

い内出血を起こし、青黒くなっていた。手足も擦り傷と切り傷だらけだ。束の間、アミナのその姿が、自分が良く知る少女と重なった。

シュイが狼狽ろっばいを見せたが、それも時間にして数秒の事だった。次にはそんな自分を律するようにゆっくりと目を閉じる。長い上下の睫毛が合わさり、色濃さを増した。

間近にいるアミナにはその様子が見えた。少し間が空いて、今度は自分を抱く腕に力が込められるのがわかった。少し窮屈になったが、何故かそのことが自分を安心させた。身体の震えも止まっていた。

『エクスキューション  
> 執行く』

遅れて、無理やり感情を押し殺したようなシュイの低い呟きが、三人の鼓膜を震わせた。

それから数分後、ゾランは何気なく放った己の軽口を、心底後悔することになった。

## 第十七章 〵(2)〵

世界は、様々な想念に満ち充ちて<sup>み</sup>いる。大気、大地、生物、無機物。人の作った道具には作り手の魂が宿り、ある土地で生き物が死ねば、無念の思いがその土地に住まう。

姿なきそれらは、善意に依ることもあれば悪意に依ることもある。一定の量が集まると目に見えぬ微細な魔力を帯びる。精霊族<sup>スピリット</sup>の多くはそれらを食料としている。彼らは様々な想念を含む魔力を身体に取り込み、長い時間をかけて分解して無害なものとし、世界に還流する。

だが、取り込んだ物の全てを分解できるというわけではなく、本当に少しずつ、澱とも言うべきものが、精霊の中に溜まっていく。何かしらの原因で想念が渦巻くような場合には、分解しきれずにどんどん増えていく。それが善意であれ、悪意であれ。

彼らは善意に満たされると聖霊と呼ばれるものに転生することがあるが、反して悪意を摂り過ぎると悪霊に身を落とし、世界に仇成す事もままある。転生した際に発生する膨大な魔力によって転移層と呼ばれる物が現出し、これに触れると現世とは別個の世界に移送される。隔絶されたその世界に住まう存在を、人は召喚獣と呼ぶ。

自然界に存在する魔力は魔法にも使われるが、滅祈歌<sup>ルイン・チャント</sup>はそれを過剰に利用する。故に、リスクも並大抵の物ではない。過剰に力を集めようとすれば、それだけの想念も集まってくる。もしそうなった時に制御を失えば己以外の想念に自我を引っ張られ、最悪取り込まれる。そうなった場合にはどうなるか。文字通り、自分を喪ってしまふのだ。悪霊に身を落とした精霊族のように。

思考と肉体がゆっくりと切り離されていく。シユイはまるで馬に



乗った時のような浮遊感を味わっていた。強化された体を思い通りに動かすのは非常に難儀だ。以前と全く変わらない。

シユイが滅祈歌を使うのはこれで都合三回目だったが、使ったからと言って慣れるというような類のものでないということくらいはわかっていた。

一回目は、意識が強烈な想念と融合して別人格となったが奇跡的に想念から解放され、何とか自我を取り戻した。二回目は相手が悪すぎたのか、何だか良く分からないうちにあっさり封殺された。

効果を試すような機会などなかったし、そもそも使うことが怖かった。己の意志を失うのは死んだのと同義だ。他ならぬ自分が世界と関われなくなるのだから。仮に肉体が生きていたとして、器に自分とは別の意識が吹き込まれているだけのことだ。

過去にも、滅祈歌を行使し過ぎて狂気に呑み込まれた者は少なからずいる。シユイはそれを知識として知っていた。しかしながら、もっと恐れるべきことがあることを知っていた。己の目的を果たせないことを。親しい者を目の前で失うことを。

周囲の空間認識を終え、魔法陣を展開する身体が活性化されていき、同時に意識が遠ざかっていく。

『ぐっ！』

シユイが苦しげに呻いた。辛うじて思考の崖の淵で踏み止まり、引つ張られている意識の綱を引き止める。自我は薄れているが、喪つてはいなかった。

「……ぶか！」

間近で発されたはずのアミナの声が、やたらと耳に遠く聞こえた。おそらくは大丈夫か、だろうか。

『平気、だ』

心配を掛けまいと何とか応じたが、発した言葉の違和感に気づいていなかった。>我が心身を修羅を化せくを発動してからの言動の

変化に。制御に手一杯で、些細なことに気を配る余裕がなくなっていた。

様子を窺<sup>うかが</sup>っていたテクラが、よろめいたシユイを見てついに動いた。両手を前方に広げて風魔法を発動する。

「> 狂嵐<sup>レイジンク・キャノン</sup>の砲撃<！」

細長い十指の爪先の空間に歪みが生じた。左右合わせた手の平から螺旋状の風が解き放たれた。降り注ぐ雨と地に落ちている濡れ落ち葉を巻き込み、粉にし、さながら横向きの竜巻のように、アミナを抱いているシユイに向かっていく。

ふいに変化が生じた。視界の一部で雨が白い霧と化した。ぴちゃぴちゃと、濡れた地面を踏んだような音が響き、向かって右側にある木の幹の辺りから水飛沫が跳ねた。テクラたちがその音に気付いたときには、シユイの姿はどこにもなかった。

テクラの放った風魔法が何もない空間を虚しく抉った後、先ほどまでシユイがいた場所の後方にあつた木々に風穴を空けていく。およそ七、八割の横面積を失った木々が左右に頼りなく揺れた後、抉られた内側にゆっくりと傾いていった。

ひらひらと、木の葉が無数に舞い落ちている。木が倒れる音を聞きながら、アミナたちに逃げられたのではという考えがテクラとゾランの脳裏を過ぎつた。だが

「> 怒れる霆<sup>ホルテックス・オブ・ヒューベル</sup>の渦流<！」

頭上から聞こえた声に反応し、二人が素早く空を見上げた。

「なっ………！」

不意に稲光が連続して明滅し、上空の雲の輪郭が目には焼き付いては消える。刹那、いつの間にか大木の太い枝上に移動していたシユイの掲げた左手に、四方八方から雷<sup>いかずち</sup>が乱れ落ちた。耳を劈く轟音が鳴り響き、シユイの立っている木の幹が、彼の掲げた手の高さまで、

上空から飛来する雷の束に一気に焼き潰された。脇に抱えられているアミナが思わず目を瞑る。

だが、集まった雷の束がシユイやアミナの身体に届くことはなかった。シユイの左手に収斂した歪な雷線の束が、風車のように回転しつつ眼下へと撒き散らされていく。

視界を埋め尽くす雷の渦流かりゅうを目の辺りにし、テクラとゾランが顔色を変えるや否や大きく跳躍した。辛うじて直撃を避けたものの、地場のことを失念していた。幾つかの雷が水溜りに落ち、足場が帯電した所に二人が着地する。

「ぎいあああッ！」

「ぬぐあああッ！」

瞬間、爪先から頭の天辺までテクラとゾランの身体を強烈な電流が走り抜けた。聞くに堪えない絶叫が長々と響き渡り、雨音を掻き消していく。

恐るべき効果範囲を誇ったシユイの魔法は分類すると攻撃魔法ではない。れっきとした付与魔法だった。本来雷を拡散させて飛ばすような効果はないが、魔法陣により発動と同時に強化され、威力と攻撃範囲が大幅に増したのだ。周囲に集まる魔力を利用して自己催眠を掛けつつ身体能力と集中力を大幅に底上げする。これこそが滅祈歌の真骨頂だった。

「……………が、はあ……………はあ」

「……………ぐっ、何という」

思わず屈み込んだテクラとゾランは、未だ痺れている身体に何とか力を込めようとする。地面に落ちて威力が拡散された雷でさえこれだ。もし直撃したら死、良くて意識を失うだろうからやはり殺される。

準ランカーでも上位クラス。下手をしたら、それ以上か。

ゾランは魔法陣を展開するシユイを睨みながら頭を働かせる。彼は、もしかしたらイヴァン・カストラにも匹敵する速度を持つている。少なくともアミナを追いかけて消耗した身体で勝てるくらいに甘い相手ではない。動きを目で追えないのに攻撃を当てるのは、出来なくはないがせいぜい相打ちに持ち込むのが関の山だろう。

そして、この戦いはそこまでして勝つべきものではない。二人にとって、アミナを追い詰めるのは遊びの域を出なかった。そんなことで命を危険に晒す気など毛頭ない。

逃げの一手しかない。損得勘定を終えた二人は束の間顔を見合わせ、よろめきながらも撤退を始めた。

木の上からテクラたちが退却していく様子を見て、アミナが安堵の息を漏らした。兵たちが魔物を討伐するのにかかるくらい時間は稼げたし、あの二人も今ので相当なダメージを負っただろうから下手なことではできないだろう。何より、シユイが自分を窮地から救ってくれた。そのことを思うだけで胸が熱くなった。

「……………良かった。何はともあれこれで」

『クズ共が、そう簡単に逃がすかよ』

「……………え？」

三角耳を震わしたアミナが、彼の顔を恐る恐る窺う。無論、付き合い合いとも言えぬほどの短い時間のやり取りしか交わしたことはない。それでも、シユイが発するような言葉とは思えなかった。

表情こそ変わっていなかったものの、その顔色は先ほどと明らかに変わっていた。一目ではつきりとわかるほど血色が悪い。

続いて、シユイの黒衣を掴む自分の手も同じような色になっているのがわかった。アミナは首を捻って後ろを見、ようやく違和感の正体に気付く。シユイを取り巻く魔法陣の色が、青から黄緑色に変化しつつあった。

何かがおかしい。アミナはどうしようもない不安に囚われる。雨が熱した頭を冷やし、唐突にあることを思い出した。以前ニルファナと食事をした時、シュイの実力は自分に及ばないという主旨の言葉を口にしていた。そして、彼女がそういう類の嘘を付かない性格であることもよくわかっている。

だが、今の彼は明らかに好調時の自分と匹敵、もしかしたらその上に行くかも知れない。ならば、どうやってそれほどの力を得ているのか。

そういえば、と思い返す。キャノエで初めてシュイと出会ったとき、彼は自分に対して敬語を使っていた。だが、今回はその様子がほとんど見受けられない。

その考えに至り、恐怖が顔を覗かせた。シュイが今これほどの力を駆使出来ているのは、精神に変調を来すほどのリスクを犯しているからではないか。辰力の秘術にもそういった効果を持つものがないことはない。

「、シュイがテクラたちが消えたのと違う方へ視線を移した。

『集まって来たな。いいタイミングだ』

そう呟くと、シュイは無造作に、足場に使っていた枝から地面に飛び降りた。落下中、再び両腕に抱き抱えられたアミナが素っ頓狂な声を上げた。

「く……はっ」

次いで着地時の衝撃が折れた骨に伝わったのだろう。小さな口からひゅっひゅっと、隙間風のような声が漏れた。先程までの、怪我をしているアミナに対するシュイの気遣いは、見る影もなくなっていた。

森の奥から現れたのは、腕に鎖を巻き付けたランベルトだった。体の至る所に傷を負っているものの重傷と言えるほどのものはない

ようだ。それから五秒ほど遅れて、フォルストロームの軍人と思しき者が数人やってきた。先程シユイが使った照明魔法フラッシュに気付いたのだろう。

「ア、アミナ様！ それに、その姿は……シユイ、なのか？」  
『無事だったようだ。タルツファイ』

シユイの変貌振りに動揺したランベルトに構わず、シユイは素っ気なく抱えていたアミナを差し出した。ランベルトは、半ば操られたように手を出してアミナを受け取る。アミナが慌てて自分を手放したシユイに手を伸ばすが、あっさりと後ろに引き下がった彼に届くことはなく、空を掻いただけだった。

「シユ、シユイ。そなた……」  
「一体何があった。……アミナ様？」

怪訝そうに首を傾げるランベルトにシユイは微笑を返す。  
『とりあえず彼女は任せた。医術師にでも見せてやってくれ。僕は連中を追う』

「ま、待て、シユイ！ そなた、何か……おかしいぞ」  
シユイは踏み出しかけた足を止め、アミナを肩越しに見た。  
『おかしい？ だから何だったんだ、文句でもあるのかよ』  
シユイの口から、先ほどとは打って変わって冷たい台詞が飛び出した。アミナはより一層濃くなっていく不安に身を震わせた。

「貴様、それが獣姫様に対する口の利き方か！ 幾らなんでも無礼に過ぎるぞ！」  
シユイの暴言に兵たちが語気を荒げたが、シユイは意に介す様子もなく、肩を竦めた。

『悪いけど今は説教なんか聞いている暇ないんだ。狩りを楽しむ様な連中に、もつと別の楽しみを教えてやらなくちゃいけないんでね』  
「な、なん……」

齒に衣着せぬ物言いに兵たちが目を見開いた。

折角の機会だ、狩られる者の気持ち教えてやるつ。心胆寒からしむまで。

シュイは再びテクラたちの消えた方向を睨み、ゆっくりと腰を落とした。

『じゃあな』

「い、行くな！ シュイ！」

一方的に別れの言葉を言い放ったシュイが、呼び止める悲痛な声にも耳を傾けることなく、ぬかるんだ地面を蹴り放った。泥が勢い良く跳ね上がり、咄嗟にランベルトが広い背でアミナを庇った。兵たちは避けきれず、全身に泥の装飾を施された。

「……ぶえっ、ぺっぺっ！ き、貴様あ！」

アミナとランベルトは呆然と、兵たちは憤然と、あっという間に遠ざかっていく背を見送った。

シュイを取り巻く魔法陣が黄色から橙色へと変わり始め、より一層輝きを増していった。

## 第十七章 〽(3)〽

雨の勢いが和らぎ、西の空では雲が少しずつ取り払われていた。テクラとゾランは時折後ろをちらちらと振り返りながらも暗い森の中をひた走っていた。葉に落ちる霧雨の音は、まるで森そのものがざわめいているかのようだ。

その音に自分たちの足音以外、異質な音が交わっていないか耳を敬たてる。シユイが深手を負っているアミナを抱えている以上、すぐに追撃をかけてくるとも思えなかったが、先ほどの照明魔法で異変に気付いた者は多いはずだ。解き放った魔物も殲滅される頃合。敵に見つかれば矢継ぎ早に仲間を呼ばれ、その数がネズミ算式に増えていくことだろう。

先ほどシユイが駆使した雷を思い浮かべ、テクラは小さく身震いした。自分の首に賞金が掛かって早十数年。今までも追手はたくさんいたが、彼の強さはその中でも間違いなく五指に食い込む。二人掛かりだからといって手に負える相手ではない。広範囲魔法の威力もさることながら、あの俊敏な動きに対応出来る者はそういない。体力が十全であれば勝負にはなつただろう。だがそれでも、あれと戦おうとは思わない。勝てるか怪しい相手に勝負を挑むのは自己愛主義に反している。

「何にしても、早く他の仲間と合流しないとねえ」

テクラが走りながら言った。

「そうですね。先ほどの敵が使った照明魔法フラッシュくに気付いた仲間もいる筈です。あとは、どうにか誤魔化せればいいんですが」

誤魔化さなければならぬのは、言うまでもなく持ち場を離れてアミナを追っていたことだ。そのためには、何故こんな森の奥にいたのかというもつともらしい理由を創作せねばならない。そうでな



ければ自分たちの命が危うくなる。

「大軍と遭遇したから周りが仕事に集中出来るよう注意を引き付けていた、で良いんじゃないかい？ 実際、あの小娘が指揮していた兵の数は相当いたんだし」

ゾランが視線を前方に固定をしたまま深刻な顔を作る。

「それは、一時的にはそれでも良いかも知れませんが」

「もしバレたとしても相手から単独で仕掛けてきたことにすれば良いさ。多分、奴が逃げ回っていたなんて情報が広まる事はないと思うけど。仮にもフォルストロームの偶像アイドルだから。王侯貴族つてのは意外と体面を気にするものさ」

「なるほど、妙に説得力がありますね。って、そういえばあなたも元貴族でしたか」

「元は余計だよ。心の中は今でも貴族さ」

儂げな表情を作るテクラに、ゾランは何とか吹き出すのを堪えた。

木々の間隔が大分広がっていた。もうすぐ森が途切れそうだ。二人が安堵の息を付きかけ、次いで自分たちに近づいてくる音を聞き取った。二人が肩越しに後ろを見た。

「やはり、そう簡単には逃がしてくれないようですねえ」

動揺を抑えようとするかのように、ゾランは己の胸に手を当てた。シユイが背後から徐々に差を詰めてきていた。走ることにより生じた風が穴だらけの黒衣を靡かせている。

妙なことに、先ほど彼に抱えられていたアミナの姿が確認できない。どこかに置いてきたのか、それとも誰かに受け渡したのだろうか。

「ちっ、しつこい男は嫌われるつてのに！」

テクラの眉間に皺が寄った。直後、左手のみを後ろ手にし、前を向いたまま風魔法を放った。その勢いでテクラの身体がやや前に押

し出され、反して後方には突風が向かっていく。

束の間、シユイの姿が横に傾いだ。そう思った時には、姿を消していた。数秒遅れて、テクラとゾランは左側面から発される音に気づいた。ザツザと、濡れ落ち葉と小枝を踏みしめる音が継続的に鳴っている。立ち並ぶ黒い柱のような幹を盾として、宵闇よりも濃い影だけが俊敏に動くその様は、自分たちが追われている獲物であることを嫌でも彷彿とさせた。

影があっさりとは横並びになったのを見て、テクラとゾランは息を呑んだ。影はそのまま、二人の足運びと自分のそれを合わせてきた。走りながらも自分の優位を見せ付けるように。

焦燥に駆られたゾランが魔石を取り出し木々の隙間を狙って投げたが、投げた魔石は男の後方へ曲がる軌道を描き、むなしく爆発した。相手の姿は、視界にこそ固定されていたが、その実高速で動いている。進行方向を狙って投げなければ当たるはずもない。

「落ち付きなゾラン！いつもの冷静さはどうしたんだい！」

そういうテクラの声からも、先ほどアミナをなぶ飛ばしていた時の余裕は消えている。そして、彼女を放置してまで追ってきた以上、向こうに自分たちを逃がす気はない。それをまざまざと実感する。

「……悪足掻きは終わりか？」

訊ねるようにそう言ったシユイが、袖から白い右手を覗かせた。人差し指と中指を密着させ、その手を内側に振り被り、薙ぐ所作を見せる。その指の先端に雨水が糸の様に巻かれて集約していくのを見て、テクラの顔から血の気が引いた。

『>水禍アクア・リロードで杯を満たせく』

シユイの手が薙ぎ払う様に内から外へと振るわれた。水流で作られた白い曲線が巨大な鞭のように撓り、前方にある木々から次々に薙ぎ倒していく。

だからこそ、軌道は明確に読み取れた。テクラとゾランが目前に迫るそれを、手前に見える木々が倒れるタイミングで大きく跳躍。高圧で凝集された水流が二人の真下を通り過ぎた。飛び越えた鞭は、しかし後方に至るまで猛威を振るっていた。辺りにあった大部分の木々がめきめきと音を立て、あちらこちらで倒れ始めている。

着地し、自分たちに向かって倒れてきた木々を横目で見遣り、ゾランは咄嗟に足を踏み出した。その刹那、黒い何かが目に過った。息が詰まったような声が漏れた。シユイの脚が振るわれるや否や、ゾランの視界が上下逆さまになった。あまりの衝撃に両足が宙に浮き上がり、その勢いで弾かれた顔が下を向いた。

間を置かずシユイが無防備な背中に掌底打を放つ。逆さまになったゾランの食い縛った歯の隙間から唾液と血とが飛び散った。

ゾランは頭から抜かるんだ地面に到達し、三回バウンドし、そのままつんのめってうつ伏せの状態になり、一瞬間が後方へと向きかけ、直ぐに地面に突っ伏した。遅れて、先程ゾランが避けようとした木が、シユイの背中すれすれに倒れた。

一瞬にして森の中に出来上がった扇状地帯と、びくびくと痙攣するゾランを見比べ、テクラは発するべき言葉を失った。ゾランとて決して弱いわけではない。準ランカーに及ぶとは言わずとも、上級傭兵に匹敵するだけの力は持っている。その彼が沈黙した。たった二発で。

震える太腿を掴つかむことで、テクラは無理やり体の感覚を取り戻した。そして、何も言わずに森の出口を目指して逃げ出した。

シユイはその様子を冷やかに見ていたが、追うことはしなかった。押し飛ばしたゾランの方に向き直り、ゆっくりと歩き出した。

黒く淀んだ水溜りがぼこぼここと、湯が沸騰したかのように泡立っていた。シユイは突っ伏しているゾランの髪を遠慮なしに左手で掴み上げた。

「が……ひっ……はあっ！」

口と鼻を塞いでいた泥水から解放され、ゾランはひゃっくりでもするように荒く息をした。持ち上げられている白髪の入り混じった髪の毛が頭皮を引っ張り上げた。

『ははは、そんなに森の空気は美味いかい？』

シユイが意図的に声を潜めた。己の声にじっとりとした恐怖を含ませるように。魔法陣の輝きは紅への変化に移行しつつあった。

「は、はなしなさい」

痛みに呻きながらも呼吸を回復しつつあったゾランは喉から声を絞り出した。

『はっ、言われなくなったってこんな脂ぎった髪の毛をいつまでも掴んでるはずがないだろう。それより聞かせてくれよ。今の気持ちをさ』

鼻で笑うシユイをゾランは憎々しげに睨みながら、それでも頭の中で必死に生き延びるための方策を思索していた。商人である以上、客の顔を立ててプライドを捨てねばならぬことは往々にしてある。もっとも、それを実際にしたのは遙か昔のことだったが。

「そこまで執拗に追って、何が目的です。私の賞金ですか。見逃ししてくれるなら、それくらいの金なら」

『へえ？ アンタ賞金がかかっているんだ？』

ゾランはその意外そうな口調に、束の間目を見開いた。賞金が目当てでないのならば、何故ここまで執拗に追ってきたのか。アミナを甚振いたぶった報復のつもりだろうか。だが、それほど彼女のことを大切に思っているならば手当ても済ませず放置したままここに来るわけがない。急ぎ、その足で手当てに向かうはずだ。

そもそも、シュイがアミナの窮地に駆けつけたのは彼女を助けるのが第一の目的だったはず。だが、彼は彼女を放置してここにいる。この矛盾はどこからくるのか。

ゾランは、まさかシュイの精神状態が駆けつけたときからずっと、今に至るまで変質しているなどは想像もしなかった。故に判断しかねていた。相手の目的が何なのかを。

ゾランの迷いを、目まぐるしく動いている眼球から察したのか、シュイは相手の反応を確かめるように、淡々と言葉を紡いだ。

『明確な目的なんてないさ。ただ、自分が強いと勘違いして世の中を舐めきった野郎が、いざ自分の目の前に死を突き付けられたとき、どんな反応をするのか知りたくなった。単にそういう気分になった。それだけさ』

何とも明解な回答だった。その言葉が、シュイが所謂こちら側の人間ではないかというくだらない考えをゾランに抱かせた。

『教えてくれよ、何が愉しくてあんな真似をしたのか。相手を好きなようにいたぶるのって、そんなにも愉しいことなのか？』

シュイの眼光がフードの奥で怪しく光った。己への害意を明敏に感じ取ったゾランは両手を同時に、自分の着る服のサイドポケットに突っ込もうとした。だが、左手はあっさりと外側に弾かれ、返した手で右手首を掴まれた。一瞬にして妨害したシュイの手の速さにゾランが唾を呑む。その途端

「うぐあっ！」

シュイが右手の指に力を込め、ゾランの手首を握り潰した。すぐさまその手を離し、激痛に仰け反ったゾランの両肩を両手で押し出

し、地面に突き倒した。

後頭部をぬかるんだ地面に埋もれさせたゾランは赤黒い手形が付いた手首を無事だった手で押さえながら痛みを喘いでいる。シユイはその様子を見ながらどこかつまらなそうに溜息を吐いた。

「なあ、楽しいか？」

再びゾランに訊ねたはずの言葉が、今度は自分に返ってきた。相手を屈服させて見下ろし、優越感を感じ、果たしてその後何が残るのか。

別に残らなくなたっていい。淡々と作業をするだけだ。その言葉が頭の中に響いた。

ゾランが泥だらけの上半身だけを起こした。シユイがゆっくりと右手を翳すのが見える。

「……ぐっ、本当にここまでの、ようですね。やはり火遊びに手を出す物ではない。ひり付くような危険に魅力を感じてしまうのは、性でしょうか」

ゾランは達観したように言葉を紡ぐ。遺言となるだろう言葉を「私の凶器が狂気を纏い、戦場で何より美しく映える様を。命同士がぶつかり合う、儂くも燦然とした輝きを、もう一度でいい、見たかったですねえ」そう締め括った後、ゆっくりと目を瞑った。

たとえようのない倦怠感に包まれていたシユイが、ようやく己を取り巻く魔法陣の変化を見咎めた。既に深紅を通り越して、静脈血の色よりも濃くなっていた。この色が闇にまで落ちた時、自我は消え失せる。薄れかけていた自我がそのことを漠然と思い出した。

流入した想念の塊が、それでも良いじゃないかと呟いた。そうすれば少なくとも、これ以上苦しむことはなくなるのだと。自責の念に駆られ、眠れぬ夜を過ごすこともない。夢を見ないくらいの深い

眠りを得られるのだと、甘言を囁きながら手招きした。

薄れかけたシュイの自我は、ちゃんと己が目的を果たしてくれるのかを想念に問うた。答は返って来なかった。彼らは純粹な力故に嘘を付くことを知らない。だから、その問いにも答えられないのだ。唐突に、心が醒めていった。

何で僕は、こいつと戦っていたんだ。

知らぬ間に、戦う動機そのものをどこかに落としていたようだった。シュイはゾランと、ゾランに向けた手を見ながら瞬きを繰り返した。

いつまで経っても止めが刺されないのを疑問に思ったのか、ゾランが薄らと目を開け、一挙に見開いた。視界の中には黒ずくめの男が二人映っていた。その表情の変化を悟り、シュイが素早く後ろを向く。

斜め後方に、黒ずくめの男が両腕を組んで悠然と立っていた。今のシュイであれば効力が増した感知魔法によって殺気を敏感に察知できるはずだったが、それでも接近に気付かなかった。それもそのはずだ。その男からは敵意どころか、意と呼ぶべきものが一切感じられなかった。心を沈黙させた男が、そこにいた。

「随分と、手酷く痛めつけられたものだな、ゾラン」

「イ、イヴァンツ！」

ゾランが驚愕を含んだ声を発した。そして、その言葉はシュイにも別の驚きを与えた。

聞き覚えのある名前だが、どこにでもある類の名前ではない。男の顔をまじまじと見て、やはり見覚えがあることを確信する。静けさと精悍さを内包した締まった顔立ち。切れ長の漆黒の瞳、シヨートスタイルの珈琲色の髪が雨に濡れて傾いている。

『イヴァン、さん？』

ゾランの言葉を追うように、口からその名が繰り返された。イヴァン・カストラはゾランから視線を外すと、己の名を呼んだシユイに目を細めた。



## 第十八章 くイヴァン・カストラ（1）（改）

イヴァンと視線を重ね合わせたシュイは、彼が自分の知る青年とは別人なのではないかと疑った。かつてのイヴァンには、寡黙のみならず、どこかほっとするような陽だまりの暖かさがあつた。なのに、目の前にいる男はどうだろうか。その佇まいはあまりに冷然としていて、視線を向けられただけで凍土に誘われたような心地がする。

だが、左目の外側に縦に走る刀傷は、紛れもなく以前の彼にもあつた傷痕だ。頬は少しこけているがその顔にも間違いなく見覚えがあつた。

「その呼び方からすると、俺のことを知っているようだな。どう見ても軍の者ではなさそうだが」

よく通るその低い声を聞いて不意に懐かしさが押し寄せてきたが、同じくらいやるせなさも募つた。

『……どういうことだ。なんであなたが、よりもよってこんなところ』

易々と答えてくれるとは思っていなかったが、それでも訊ねずにはいられなかつた。

「生憎と、素性も判らぬ者に喋る口は持っていない」

眉一つ動かさずそう返したイヴァンに、唇を噛んだ。背後にいるゾランと似た黒衣を着ているのを見咎め、認めたくはない可能性に行き当たる。ゾランとお互いに名前を呼び合ったということは、イヴァンはやつらの一味なのだ。フォルストロームの人々に再三魔物を喉<sup>けしか</sup>け、アミナを甚<sup>いたぶ</sup>振って殺そうとした連中の。

戦う動機を思い出したシュイは、心が熱されていくのを感じた。たとえ相手が知己<sup>おき</sup>であろうと加害者の側に回るのならば、一切容赦するつもりはなかつた。

『答える、あんたらの狙いは何だ。返答次第によつては』

「殺すか？」

鋭く睨むシュイにイヴァンが表情を一切変えずに応じる。

『……必要があれば、そうすることになるかもな』

「それは、おまえには無理だな。だから答える必要もない」

最後まで聞き終わらぬうちにシュイが前進、すかさずイヴァンも反応。互いが渦に引き寄せられるかのように徒手の間合いに侵入。ほとんど同時に拳が振るわれ、闇の中に大きな波紋を生じさせる。

上半身だけをやっと起こしたゾランが、イヴァンの援護をしようと折れていない方の手をポケットに突っ込んだ。が、魔石を握り締めたところで、そのまま凍ってしまったように動かなくなった。二人の動きがあまりに迅過ぎて目に追えず、手の出しようがなかったのだ。

闇を二つの影が縦横無尽に行き来していた。二回、三回と拳を交わすも決定打には至らない。驚異的な反射神経と瞬発力が克ち合い、先に鳴った衝撃音の余韻が消えぬ間に次の衝撃音が奏でられる。その様はさながらティンパニの独奏曲だった。一際余韻を響かせる大きな音が鳴ったかと思えば、数回に渡って連続した音が続く。二人の呼吸に合わせて次々と音が連ねられていく。

埒の明かぬ攻防に一度距離を取ったシュイが、体を低く維持したまま突っ込んだ。イヴァンの放つ蹴りの軌道を読み切り、横に回り込むような動きで回避。無防備な脇腹目掛けて左拳を振り抜いた。が、こちらの拳の軌道を見切られたのか、手の甲が逆手で外側に押しやられる。腕を畳むようにしてイヴァンが側頭部目掛けて肘打ちを叩き込んでくる。頭を下げて躲した刹那、目の前にあるイヴァンの膝が揺らいだ。

両足が地面から離れた。そう思ったときには背に風圧を、交差させた腕に強い痺れを感じていた。体重が軽いとはいえ、両腕での防御ごと宙に蹴り飛ばすとは驚異的な脚力だった。しかし、痛覚は滅祈歌のおかげでほとんど麻痺している。

と、地上にいるイヴァンが跳躍した。止めを刺さんと一気に距離を詰めてきているのがわかる。

飛ばされた方角にあった木の梢に背と後頭部を何度となく叩かれながらも、シユイは左手を後方へ向けた。

『> ウインド・シヨット吹き荒ぶ風くー！』

詠唱とともに強化された突風が手の平から勢いよく噴射され、シユイの身体が真逆へと方向転換。イヴァンの目が見開かれたが、すかさず思い直したのか拳を構える。遅れずシユイもイヴァンに向けて蹴りを繰り出す。

『らあー！』

『ふっ！』

上空と地上から描かれた二つの斜線が苛烈に衝突し、お互いの身体が弾かれるように真逆の方向へと離れる。一際強烈な重低音が轟き、周囲に伝播した衝撃波が木の幹と葉を震わせ、枯葉を散らしていく。

ひるがえ地上へと飛ばされたイヴァンが頭から墜落する寸前、素早く身を翻した。きりもむように一回転してもの見事に両足で着地。踏み込んだ靴の踵がぬかるんだ地面に二本の短い線を引く。

対するシユイも間近にあった高木の枝に腕を伸ばした。逆手でそれを持ち、飛ばされた勢いを利用してくりと上に向かって回転する。間を置かずに、下にある足場になりそうな枝を見遣り、二回、三回、と飛び降り、地上へ舞い戻った。

降り立ったところで気づいた。赤黒い色になっていた魔法陣が激しく明滅していた。>滅祈歌ルイン・チャントで掻き集めた魔力が長時間展開し続けたことによつていよいよ底を尽きかけていた。

時間切れ、か。あと二発がいいところだな。

どうするかを考える間もなく、遠目にイヴァンが互いの距離を詰めんと速やかに疾走してくるのが映った。シュイが舌打ちをした。体重を乗せた渾身の蹴りを拳で受けたにも関わらず、全く堪えた様子が見受けられなかった。相当に鍛えられているのはわかっていたが、それにしただって呆れるほどの頑丈さだ。先ほどの二人とは強さの次元が違う。

しかしながら、唯一の決め手と成りそうな>怒れる霊ホルテックス・オブ・ヒューベルの過流くを詠唱するには魔力を使い過ぎている。足早に近づいてきていることから策を練る暇も与えない気だろう。

束の間地面に視線を落とし、腹を決めてイヴァンに手をかざした。思い付いた一手に全てを懸けるべく。

相手が30メートル圏内に到達したところで、再び>吹き荒ぶ風ウインド・シヨットくを発動。手の平から放たれた突風は、イヴァンに向けられてはいない。発動の直前に手をやや斜め下に傾け、泥の川へと向けていた。強化された風圧がぬかるんだ地面を一気に抉り、溜まっていた雨水が除かれて地面が露になる。

風圧で前方に押し遣られた泥水が落ちていた小枝などと共に高々と舞い上がった。シュイとイヴァンとの間が暗幕で隔てられる。

突然現れた汚泥の高波に、しかしイヴァンは動じる様子もなく、真っ向から向かっていく。

「>風精フェーローロ・ファンイウの加護を以てく」

着ている黒衣に風の付与魔法を行使し、イヴァンが泥の波に体当たりした。纏う風が泥や小石を左右に掻き分けながら等身大の穴を

穿ってゆく。けれども、それを潜り抜けた先にシユイの姿はなかった。

視界が遮られたわずかな時間を利用して側面にあつた木の裏に身を伏せていたシユイが、イヴァンの後方へと回り込む。相手の視線がこちらに向いていないことを高速で切り替わる視界の中で確認。間髪入れず>ライトニング・ボルト<を発動。死角からの不可避の一撃で動きを止めたところで追撃を食らわせる。そのはずだった。

思いも寄らぬことが起きた。強化された電撃が背に直撃する寸前、イヴァンが電撃を避け切れる高さすれすれに跳躍した。真上ではなく正確にシユイの方角へと、明らかに狙って飛んでいた。

宙で身体を捻り、自分の方に向き直ったイヴァンを見て、反射的に両手を前に出して防御しようとした。だが、イヴァンは蹴りを入れるでも拳を振るうでもなく、宙でシユイの防御するその手を掴んだ。予想外の事態にシユイが瞠目した瞬間 視界が斜めに傾いだ。

『 がっ 』

一瞬にして、度の強過ぎる老眼鏡を掛けさせられたようになった。あらゆるものが歪み、距離感が全く感じられなくなった。足が勝手にたどたどしい歩を踏み、そのまま仰向けに倒れた。

数秒して、空の方を向く歪んだ視界に黒い影が現れた。イヴァンが自分を見下ろしているのだとわかった。

シユイが歯を食い縛りながらも、何とか手足に力を込めようとする。が、体が言うことを聞かず、全く身を起こすことが叶わなかった。

「無駄だ。如何に痛みがなくなるとも、脳を揺らされては立ち上がるこ  
となど叶わん」

戦闘中、攻撃を受けても平然としているシユイに対し、イヴァン

はシュイの顎に狙いを付け、長い腕を利用して真横から掌底打を放っていた。脳が揺れれば脳震盪を起こし、身体への命令が滞ってしまう。あまりに決定的な一撃だった。

『く、……そんな、な。何で……あの状況で、位置が正確に……』

ただたとしくも紡がれる質問に、イヴァンは少し表情を緩めた。何がそんなに可笑しいのか。シュイは憎々しげに唇を噛んだ。

「それはお前が、最後の最後で詰めを誤ったからだ」

『……何、だと』

全く訳がわからないといった様子のシュイを見て、イヴァンは鼻梁を撫でながら言葉を続けた。

「察するに、お前は夜戦の経験がほとんどないようだ。骨折って作った折角のチャンスを己の行動で台無しにしてしまったのだから」

シュイは茫々としている頭で、それでも投げ掛けられた言葉の意味を必死に考えようとした。

『そういう……ことが』

数秒して、夜戦という言葉からシュイは己の失態を理解した。

イヴァンが指摘したのは、シュイが不意打ちに電撃魔法を選択したことだった。風の膜に覆われていたイヴァンに対し、シュイは炎や水、或いは風の魔法では効果がやや薄まると判断し、風膜を貫く電撃魔法を行使した。だがしかし

「そう、昼間ならばさほど問題はなかったはず。けれども、この宵闇の状況下において雷から放たれる光は目立ち過ぎるのだ。無論、火の魔法も同様だ。視界に映っていた木の幹や葉に、淡いながらも反射光が垣間見えた。照らされた範囲と角度でお前のいるおよその居場所がわかったというわけだ。大抵の者ならばそれでも反撃するまでには及ばなかっただろうが、残念だったな」

『……完敗、か』

口が勝手にそう呟いていた。多分に悔しくとも認めざるを得なかった。あまりに戦闘経験の差があった。たとえ自分の体が万全の状態であっても、彼には到底勝てなかった。それがはっきりわかるほどの実力差があった。

イヴァンが緩めた表情を再び引き締める。

「徐々に血が滾たぎった。楽しませてくれた礼だ、せめて苦しめぬように送ってやる。だが、その前に」

イヴァンがシユイの顔の横に一步を踏み出した。

『何、だよ』

「顔くらいは見せてもらおうか」

そう言い、イヴァンはシユイのフードに手を伸ばした。視界が黒で覆われ、思わずシユイが身体を硬直させたが、構うことなくフードを掴み取って上にずらし、そして、そのまま彼も硬直した。

「まさか」

ややあつて放たれたその言葉からは、初めて感情の揺らぎが読み取れた。

『もう、どうでもいいや、とつとと殺してくれ。幻滅した、アンタまでこんな、くだらない真似するなんて』

シユイは言葉にして、一年半前の出来事を思い出し、胸を掻き毟りたい思いに駆られた。あらゆるものが信じられなくなった日を。全ては変わってしまった。己の生き様も、世界への関わり方も。

「やはり、生きていたんだな」

イヴァンは意外そうに、そしてどこか懐かしそうにシユイの顔に見入った。

『生きてて悪かったな。どっちだっていいだろ、今から殺すんだから』

「まあそれはそれとして、何故こんなところにいる？ その妙な技は、誰かに教わったのか？」

シユイの歯がぎちつと音を立てた。

『相変わらぬのマイペースだな！ 大体、人の質問に答えなくてそれはないだろ！』

あまりの剣幕に、しかしイヴァンはわずかに笑みを誘われたようだった。

「やれやれ、そっちこそせつかちな所は変わっていないじゃないか。顔を隠していたくせに」

「貴様、シユイから離れろ！」

唐突に張りのある声が響いた。イヴァンが、次いで倒れているシユイが声の方に振り向く。二人から少し離れた場所にはランベルトと、彼に抱きかかえられたアミナの姿があった。



## 第十八章 〵(2)〵(改)

上下逆さになったランベルトとアミナを見止めたシュイが、目を大きく見開いた。

「な、何でのこのこやってきた！ 怪我人は大人しく」

「馬鹿者が！」

ランベルトの怒声が轟き、シュイの言葉を丸呑みにした。その存在に気付いていたにも関わらず、不意打ちで脅かされたように全身が震えた。一方で、シュイを動けぬよう固定しているイヴァンは特に動じた様子もなく、肌突き刺す威圧感を楽しんでる風だった。

「ばつ、誰が馬鹿だと」

「ぬし以外に誰がおるか！ 私とて後足で泥を掛けていくような不届き者を好き好んで追うものか！ なのに、アミナ様はぬしの非礼を気にするよりもその身が心配だからと、御身の手当てを後回しにしてまで追うように頼まれたのだ！」

「……な、ん」

「仮にも準ランカーの傭兵が深手を負ったまま戦地に向かうリスクを承知していないわけがない。自分が死ぬ危険とて少なからずあるというのに、ぬしの身の安全を優先したのだ！ その心すら無碍むげにすると言つのならば、たとえアミナ様が許そうとも私が許さん！」

「……シュイ」

痛みを堪たえながらも自分の名を呼ぶアミナの声に、シュイは腑が震えるのを感じた。気の強さを彷彿とさせるその紅い目は、憂いに満ちていた。先ほどまで頭を埋め尽くしていた怒りが一斉に別の感情に侵食されていくのがわかった。

魔法陣の光が急激に薄れていくのを見て、シュイが戦意を失った

ことを悟ったのだろう。イヴァンはシュイの服から手を放し、数歩後ずさった。

「ランベルト・タルツファイ。それに おまえがアミナ・フォルストロームか。随分と豪華なメンバーだな」

「 イヴァン・カストラか！」

ランベルトが、次いでそれを耳にしたアミナが瞠目した。ランベルトの反応はモルゾウ・クウガの時よりも明らかに大きなものだった。

『な、何で二人が、イヴァンさんを知っているんだ』

「何で、って、当り前であろう！」

そう返すアミナに、シュイの顔には疑問しか浮かばなかった。

「本当に知らぬ、か。そやつは特級指定犯罪者だ。一年半前にエスニールの反乱に加わり、当時のセーニア騎士団総隊長コンラッド・ディアードを殺害した罪で追われている。もつとも、他にも要人暗殺の余罪は腐るほどあるがな。八億もの賞金を掛けられている神出鬼没の殺し屋だ」

『な、コンラッド……？』

思いがけぬ名前を聞き、シュイが愕然とした。アミナの言葉の意味を計りかねていた。

「むしろこちらが訊きたい。そのことを知らずしてそやつを知っているそなたは……一体何者なのだ」

アミナから発された問いに答えることなく、シュイは自由が効かぬ身体を何とか上半身だけ起こし、イヴァンの方を向く。

『い、今の話は本当なのか』

イヴァンは無造作に腕を組みながら目を瞑った。

「それは、どちらの意味で訊いている？」

「……どういふことだ」

ランベルトが訝しげにイヴァンを見た。

「実際にその罪状で追われているのは事実だ。賞金が掛けられていることも。しかし」

イヴァンは目を開け、再びシユイを見た。

「ディアーダ卿を殺した者が誰か、それは彼が一番よく知っているはずだ」

顎で示されたシユイが苦しげに呻いた。アミナとランベルトの視線が揃ってシユイに集中する。

「何故シユイが知っている？　ぬしら、やはり旧知の間柄なのか？」

唸る様にそう言うランベルトに、イヴァンは肩を竦めた。

「俺が答える義理はない。そんなに知りたいなら彼に教えを請う」

「　　」  
「　　」

「ん、どうし　　むっ」

「ぐっがつ、があああああつあああああッッッ！！！」

明滅していた魔法陣が消失した途端、シユイが野生の肉食獣のように咆哮した。そう勘違いさせるほどの絶叫だった。見えない手で首を絞められているかのように喉元に五指を突き立て、冬の海に落ちた後のように身をがくがくと震わせていた。

「お、おい！　シユイ！　シユイツ！」

アミナの発した声が色を失っていた。乗り出して危うく腕から落ちかけたところをランベルトが何とか防いだ。その間にもシユイの全身から脂汗が吹き出していた。体中の水分が全て抜け切ってしまうのではと心配になるほどの量が。

身体の内側から、棘に覆われた虫がそこかしこから突き破って出てくるような痛み。魔法が自動解除されたことによってエグセイユとの戦いで負った傷の痛みがぶり返し、また、滅祈歌によって強化された身体を酷使した反動が起こっていた。

腹筋が呼吸もままならぬほどに痙攣し、イヴァンとの戦いでいつの間にか骨折した手が意識を蹴り飛ばす。閉じた瞼の裏側に赤とも黒とも付かぬ光がチラついている。耳鳴りが酷く、近くで掛けられているはずのアミナの呼び声すら聞こえなくなる。

これは、罰だ。痛みに苛まれながらもシユイはそのような思いに囚われた。あれほどニルファナに固く禁じられていた滅祈歌を怒りに駆られて使ってしまった。己の怒りに共鳴した想念に取り込まれ、拳句の果てには守りたかったはずのアミナにあんな悲しそうな顔をさせた。他ならぬ自分が。

激しく身悶えしているシユイにイヴァンが歩み寄ろうとする素振りを見せたが、思い直したのか踏み止まった。ゆっくりと背を向け、わずかに目を伏せた。

「……助けたくば一刻も早く手当してやることだな。このまま放置しておけば、確実に死に至る」

「何？」

その台詞を聞き、ランベルトが呆気にとられた。腕に抱えられているアミナは苦しみ喘ぐシユイを見てそれどころではなさそうだった。

「どういっつもりだ。ぬしら、今の今まで戦っていたのである」

「くだらぬ擦れ違いは誰にでもあるものだ。それに、彼にはどうにも返し切れない大恩がある」

「恩、だと。それは一体」

「プライベートに立ち入られる筋合いはない」

ランベルトの疑問を切って捨て、イヴァンが足を踏み出した。

「ま、待て！ 特級犯罪者をそう簡単に逃がすわけにはいかん」

背中越しに放たれたランベルトの声に、立ち止まったイヴァンは振り向くことなく言葉を返す。

「ほう、彼を見捨てて戦うか。まあそれならそれでいいだろう。もしそうなった場合は、姫の命も保証できないが」

「……ぐっ」

イヴァンの指摘は的を射たものだった。ランベルトが先ほどのシユイから感じた力は相当なものだったが、そのシユイが横たわり、あまつさえ死にかけている以上、イヴァンがそれを凌いだのは間違いない。この場で二人が全力で戦えば、衰弱している二人の命は風前の灯火だ。

「もうよい、ランベルト。シユイがひどく苦しんでいる。このままでは本当に……」

「し、しかし奴を見逃せば」

視線を落としたランベルトはアミナの目が真っ赤に充血しているのを見て、口を噤んだ。

「頼む。あやつはきつと、私を助けようとしてこうなってしまうのだ。そなたが彼の非礼に反感を抱いているなら、むしろ私の不甲斐なさにこそ責がある。頼む、頼む……から」

縋るような言葉にランベルトは弱ったように瞑目した。イヴァンは肩越しにアミナを見た。苦しむシユイを見て、まるで己がその痛みに耐えているかのように顔を顰めていた。

「王族らしからぬ言葉だな。強い責任感が成せる業か、それとも」

「な、何だ」

語尾を濁したイヴァンに、アミナが潤んだ目を擦りながら訊ねた。「いや、栓なきことか。久し振りに彼と話したせいか、どうもいつもの調子ではないな」

イヴァンは独りごとのように呟いた。

「ぬしらの目的は何だ。何故フォルストロームを襲ったのだ」

最早追撃を諦めたランベルトの問いに、イヴァンは歩みを止めずに肩をすくめた。

「それに答えたら達した目的が水泡に帰す。心配しなくても、いずれまた会うことになる。そのときを待つがいい」

その言葉を最後にして、イヴァンの姿が音もなく、夜の闇に溶け込んだ。

雨は上がっていた。木の葉に付着した雫が先から零れ落ち、しきりに水溜りを叩いて高音を鳴らしている。

イヴァンが森の中を歩いていると、前方の木の影からもう一つ木の影が浮かび上がった。それくらいの太さがあった。

「話は終わったみたいだな。アンタにしては少々口数が多かったが」  
暗闇から現れたのは熊のような巨体。

「やはり見ていたか」

「途中からな」

「それで、そちらの首尾はどうだ」

「へっへっへ、この身体を見ればわかるだろうが」

そう言っ胸を張るリックハルドの全身は無数の刀傷と痣で覆われていた。イヴァンはそれを確認し、小さく溜息を付いた。

「案の定、無理だったか。予想していたとはいえ、一朝一夕にはいかんものだな」

「何でわかる？」

「馬鹿でも分かることだ。キア・フォルストロームが刀を使うなどど聞いたこともない。そして、彼の御仁がおまえに傷を負わせずに負けることも考えられん。ならば解も絞られるだろう」

タネがわかるとリックハルドはつまらなそうにあさっての方角に

唾を吐いた。

「そんな単純なことかよ。まあ、一応ご尊顔は見れたんだが、思わぬ邪魔が入ってな」

「近衛たちがついていたか。流石に抜かりないな」

「いんや、兵たちをばべらせていたわけじゃねえ。俺を止めたのは一人だ。正直に言つて王に手を出す余裕はなかったな」

聞き捨てならぬ台詞にイヴァンが柳眉を持ち上げた。

「おまえを一对一で止めた、だと」

「全く、世の中には未知の化け物があるもんだ。あんなひらひらした格好でどうして目にも止まらぬ速度が出せるのか、理解に苦しむぜ。まるでおまえを相手にして戦っているみたいだった。おーいてえ」

リックハルドは傷口が滲みるのか、腕にふうふうと息を吹きかけた。

「やはり、国を崩すとなると一筋縄ではいかない、か」

「ま、いい予行演習にはなったんじゃないか。成果は上々だし次が本番だろ。腕がなるぜ」

リックハルドの剛毅な言葉に、イヴァンはえも言われぬ頼もしさを感じた。

「ところであいつ、どういった関係だ？」

リックハルドの問いに、イヴァンはシュイのことを指しているのだと察した。

「同郷の馴染みだ。異国の地で、しかも敵味方に分かれて再会するとはな。何とも運命の皮肉を感じる」

少し考えた末にイヴァンはそう答えた。友と言う言葉を使おうかとも思ったが、齢の差を考えれば滑稽に思われるかも知れなかった。

「へえ、強いのか？」

「おまえは、何かと言つとまずそれだな。」

実際に先ほど戦った。

「瞬ひやりとさせられたな」

「おお、いいねえ。今度は非手合わせ願いたい」

歯を見せて破顔したリックハルドにイヴァンは鼻白む。

「あいつと戦う機会はないぞ。次はルクスプロンだ」

「言ってみただけだって。そんなに肩肘張ってて疲れねえか？」

如何にも皮肉っぽい問い掛けであったが、イヴァンは表情を変えずに答える。

「これが地だ」

「かあ、羨ましいねえ」

「ちつとも羨ましそうに見えないのは気のせいか」

「そう見えるならそれが俺の人徳ってもんだな。はっはっは」

豪快に笑うリックハルドに、イヴァンは前髪の辺りを掻いた。付き合い切れないと言いたげだった。

「さて、早めに皆と合流するぞ。明日も早い」

リックハルドは伸びている顎鬚を弄びながら鼻を二回啜る。

「やれやれ、ついにこの国ともお別れか。この気候に慣れちまうと雪国はちよつときついぜ」

「年がら年中半裸でいれば誰だってそうだろう。向こうにいたら特注で体に合う服を作ってもらえ、それくらいの金なら出してやる」



## 第十八章 〵(3)〵(改)

階段を上りきったランベルトがドアを開けると、赤く染まった太陽が海に姿を隠しつつあった。長い雨が降ったこともあって、その色合いは一際鮮やかだった。藍色に染まった空には一際明るい星が三つ瞬いている。

「ふう、少し遅れてしまったか」

屋上のオープンレストランには落下防止のための鉄柵が四方に取り付けられていた。白木の丸いテーブル一つにつき、四つの椅子が置かれている。混む時間帯ではあるが魔物襲来直後ということもあって客は少なめだ。ランベルトが目的の人物を見つけ出したのとは同時に、相手の大きな手が掲げられた。

「……やれやれ、とんでもねえ忙しさだったぜ」

アルマンドはランベルトと軽くグラスを合わせると早速麦酒を煽った。テーブルに置いたグラスの淵にきめ細やかな泡がこびり付き、白い輪が出来上がった。

一昨日の戦いの後、フォルストローム軍部は戦後処理で被害状況の確認、はたまた破壊された主要道路の復旧作業などに忙殺されていた。その間、シルフィールを含むギルドの傭兵たちは軍に代わって身回りを任されていたため、碌々寝る暇もなかった。

「結局、敵の狙いは分からず仕舞いか。せめて痕跡だけでも残してくれていれば」

そういい、ランベルトも麦酒を口に含んだ。アルマンドが枝豆に手を伸ばしながらランベルトを見た。

「過ぎたこと言ってもしょうがねえ。前向きにいこうぜ、前向きに。あれだけ大規模な戦いになったのに被害の方は軽微で済んだんだか

らよ」

「うむ。しかし、あのイヴァン・カストラが陰謀に関わっているとすればのんびり構えてはおられぬ。各支部の増員を検討せねばならぬな」

麦酒の立ち上る泡を、それに映る自分の顔を物憂げに見つめるランベルトに、アルマンドは興味深げにテーブルの上に乗り出した。「実際会ったんだってな。どんな奴だった？ 似顔絵でしか見たことがねえからちつと興味あるんだが」

「どんなやつ、か。そうさな」

ランベルトは遠くを見るような目を宙に向ける。

「想像していたよりは、人間臭い男だったな」

「ほお、稀代の暗殺者の意外な素顔、か」

アルマンドが眉を上げた。

「茶化すな。その力については疑う余地もない。一目見ただけで武者震いがしたわ」

「そりゃあそうだろうな。やつあ言ってみりゃ犯罪者のランカーみたいなもんだし。ああ、そっぴや」

「ん？」

「シユイもその場にいたって聞いたんだが」

何気なく発された言葉に、ランベルトが手に持つグラスから酒をわずかに零した。木目に落ちた酒がゆっくりと吸い込まれていった。

「……誰から聞いた？」

「さつき道すがら軍人たちが話していたぜ。あまりいい雰囲気じゃあなかつたけれどな」

アルマンドが思い出すように顎を上げた。

「軍人、とすると、情報源はあのかの兵たちか。やはり口に戸は立てられぬな。少し厄介なことになるかも知れん」

「何でもアミナ姫を口汚く罵倒したとか、泥の川に突き落としたとか言って憤慨していたんだが、それホントなのか？」

「これはまた、随分と脚色されてしまったようだな」

ランベルトは溜息混じりに頬を搔く。

「搔い摘んで言うと、シユイがアミナ様に暴言を吐き、意図的にではないにせよ蹴り足で泥を引つ掛けた。それだけの話だ。まあ、泥の方は未遂に終わったのだが、どうやらその噂が一人歩きしているようだ。内容が内容であるし多少の尾ひれがついても仕方あるまいが」

アルマンドが口をあんぐりと開けた。

「それだけの話って、いくらなんでもまずいだろ。彼女はフォルストロームの顔だぜ。何をどうしたらそんなことになるんだ？」

「私に訊くな、むしろ知りたいのはこちらの方だ。シユイとはぬしの方が付き合いは長かるう。私もやつと少しは話もしたしある程度分別はつく者だと感じていたのだが」

「が？」

「一度別れてから再び合流したとき、やつの様子はとかく尋常ではなかった。もしあの場に私が駆け付けなかったら取り返しの付かぬ事態に陥っていたかも知れん。今となってはどちらが本性だったのか」

「お待ちせしましたー、こちらボンボン鳥の手羽先、天日干し大根の旨煮になりますー」

女性店員が湯気立ち上る大皿を二つ、器用に両手に乗せてきた。

「おお、きたきた。アルマンド、その皿、少しそちらに寄せてくれ」  
ランベルトが枝豆の皿を指差し、アルマンドがそれに従った。テーブルに大皿が二つ並ぶと、店員は一礼して去っていく。

「シユイ個人が非難されるならまだしも、シルフィールに対する心象が悪くなつたらまずいな。ギルドの評判まで落としたりあいつ、居場所がなくなるぜ」

アルマンドは渋い顔を作りながらフォークで大根を一口サイズに切り分けていく。

「身から出た何とやら、だ。私とて泥を掛けられたのだから怒っていないわけではない。　　と言いたいところなのだが、当のアミナ様本人は、シユイが駆け付けなければ確実に殺されていたと言っておったからな。それが事実ならば酌量の余地はあるう」

「んー、つて、事実なら？　ランベルト、おまえまさか、アミナ姫を疑っているのか？　彼女、礼節には人一倍うるさいし、嘘を吐くタイプでもないぜ」

「それはわかっているのだが　　アルマンド、ぬしの目から見てもシユイはどういった印象だ」

「ん？　んー」

アルマンドは空になったグラスを置き、天を仰いだ。

「そうだなあ。意外とやんちゃなところがあるみたいだけど、それなりに好感は持っている。といつても、俺もそこまで親しいわけじゃないんだが。あ、おねーちゃん。ここ、麦酒追加。二本ね」

「あ、はい。ただいまー」

横を通り過ぎようとした店員は足を止め、メモ帳にアルマンドの注文を書き込むと足早に去っていった。ランベルトはその後姿を見送ってから姿勢を正した。

「そうなのか。推薦までするくらいだからつきりそれなりの親交があるのかと思っていたぞ」

「ああ、俺の、まあ弟分つてところか。ピエールって傭兵がいるんだけどな。そいつとは結構仲良いみたいだ。力量は申し分ないし今までそれなりに任務もこなしていたみたいだから問題ないだろうと思っただが、まさかそんなことになるとはなあ。ちつと責任感じちまうぜ」

「ふうむ。一先ずは保留か。王国側がどう出るか、だな」

ランベルトは二つの小皿に手羽先を二本ずつ入れ、片方をアルマンドに寄越した。

「おお、さんきゅ。ま、しばらく大人しくしていればほとぼりも冷

めるだろう、ってそう言やあ」

「ん、どうした」

「当の本人はどこにいるんだ？」

ランベルトは啞えていた手羽先を口から離す。

「危篤状態に陥っていたのでな。私がアミナ様共々王城へと運んだ」

「危篤って……ああそうか、イヴァンにやられたのか。となると、

Bじゃとても太刀打ちできねえなあ」

「私たちとて、一対一では相当に危うい。葬るなら最低三人、捕えるなら十人は必須だ」

「うへえ、おつかねえな、そんなやつが街中をうるちよろしてるなんてよ。それはそうとして、なんでわざわざ王城に連れていったんだ。ギルドにだって治癒術師はいるぜ？」

「頭の回る彼女のことだ。こちらの負担を減らすことも考えていたのだろう。一般人にも傭兵にも少なからず死傷者が出たせいでギルドの医師が引っぱりだこだったからな。あとは、この件についてシユイの立場を気遣ったのもあるかも知れん」

「いくら命の恩人だろうと、礼節を欠いた行為をしたのは確かなんだろう？」

「うむ……。私も確信を持っているわけではないが」

ランベルトは声を一段と抑える。

「もしかしたらアミナ様がシユイに好意を抱いているのでは、と思わせる節があつてな」

束の間、沈黙が下りた。いつの間にか周りのほとんどの席が埋まっていた。先ほどより音量を増した喧騒は二人の耳にも届いていなかったが、意に介した様子もなかった。

「ほお。ほーお」

アルマンドが口を窄めながら何度となくうなずいた。

「何を面白い顔をしておる」

「生まれつきだ、ほっとけ。てか、あれじゃね？ シユイの無礼云

々よりその話が広まる方がよっぽどやばいんじゃないか？」

そう言いつつも、アルマンドは凄く楽しそうだった。

「言われてみればそうかも知れぬな。ま、人の恋路に他人がケチを付けるのも野暮と言うものであろう」

「へえ、あのお姫さんがねえ。いやあ、一大事だなあ、そりゃ」

にやにやが止まらない様子のアルマンドをランベルトが鋭く睨む。

「他言は無用ぞ」

「おうおう。俺の口の堅さはお墨付きだぜ」

「……誰のだ」

「へ？ えーと、そりゃ、俺のだな」

それは単なる自画自賛ではないか。どこか胡散臭さを感じる笑顔を貼り付けたアルマンドに、ランベルトは不安げに髭を撫でた。

フォルストローム王城。アミナは角部屋の執務室にて黒い革椅子に座り、己の背よりも高く積み重なった書類を処理していた。ドアを挟むように木の本棚が設置され、向かい側の二つある窓にはクリーム色のカーテンが掛けられている。処理済みの書類の束がある程度の厚さになったところで足元にある木箱に移していた。

「ん、誰だ？」

ノックの音が二回室内に響くと、アミナは書類に向けていた顔を起こした。

「リズでございます。姫様、お茶をお持ちいたしました」

「ああ、すまぬ。入っていいぞ」

少しして、ドアの蝶番がきいと軋んだ音を立てた。

「怪我は大事ないか？」

アミナはトレイを持ったリズの左頬に貼られている白い絆創膏に、次いで左腕の包帯に目を移した。

「ご心配には及びません。この通りですわ」

紅茶をアミナの前に差し出したリズは、包帯の巻かれた腕を掲げて力こぶを作って見せた。アミナはそれを見て、胸を撫で下ろした。「良かった。ところでシユイの方は、相変わらずか？」

「ええ、それはまだ。骨接ぎは済んだのですが、身体に負荷を掛け過ぎたのか手足の筋肉繊維の断裂が酷くて、熱もあまり下がりませんね」

「そうか、わかった」

礼を述べるとアミナは紅茶を一口飲み、再び書類の処理に取り掛かった。

「あの、姫様もお疲れでしょうし、少し休まれては。なんなら私もお手伝い致しますし」

「いや、大丈夫だ。丸一日十分に休んだ」

そう言いながらも書類の上でペンを躍らせている。

「姫様。お気持ちはわかりますがそうやって無理をした結果、今回危ういことになったのではありませんか。タルツフィ様がぼろぼろの姫様を抱えてこられたのを見たとき、キーア様や私がどれほど肝を冷やしたかお分かりですか」

「うぐ……」

アミナの手が止まった。普段の口調が柔らかかなりズであるだけに、その言葉は胸に突き刺さるものがあるようだった。

「そもそも、指揮官の姫様が突出してどうするのですか。仮に被害が出ようともそれは兵としての責任、領分です。そのために常日頃訓練しているのです。他者への気遣いは大切ですがそれにも限度というものがありますよ。万が一あの場で姫様が殺されていたら、兵たちの士気にどれほど影響があったか、どれほど被害が拡大したか計り知れません」

「……すまぬ、返す言葉もない」

力なく俯くアミナに、リズは少し言い過ぎたかと自分のこめかみを軽く叩いた。

「別に寝ているとは申しませんが、少しくらい気分転換されてきては如何ですか。夜風が気持ち良いですよ」

「しかし、シュイが未だに苦しんでいるというのにそのような気分には……」

「早くに治療した甲斐もあって大事には至りませんでしたし、私の見立てでは明日にも目覚めますわ。それに、エルクンド様だって目覚めたときに姫様の元気がなかつたら絶対がっかりします」

「が、がっかり……？」

確信に満ちたような言葉を聞いて、アミナがおずおずとリズを見た。

「めつさがっかりですわ。彼だつて姫様を心配して助けに馳せ参じたのでしょうか？ 元気な姿を見せて差し上げた方が喜びますわ」

「い、いや、それはわからぬが。そうか、そういうものか」

アミナは、今度は恥ずかしそうに俯いた。

「絶対にそうですわ。傷付いた身体で尚も守るべき少女のために身体を投げ出す男……の子。……ああ、素敵ですわ」

どこか恍惚とした表情のリズにアミナが上目遣いをした。

「リズ、シュイの容姿については」

「他言無用、でございますね。わかっております、姫様のご判断に従いますわ」

「うむ。今後もし、シュイがイヴァン・カストラに関わり合いがあると知られれば、在らぬ疑いを持つ者が現れぬとも限らぬ」

「イヴァン・カストラですか。凄い美男子だそうですねー、是非一度お目に……」

アミナのきつい眼差しに気付き、リズは慌てた様子で口を片手で抑えた。



「じよ、冗談はそれとして、姫様。エルクンド様が起きたらどうなさるおつもりですか？」

飲み終わったカップをいそいそとトレイに戻しながらリズが訊ねた。

「あまり人の事情を根掘り葉掘り訊きたくはないが、最低でもイヴァン・カストラのことは問い質たださねばならぬな。黙っているなら、それなりの対応を取るしかあるまい」

「それもそうなのですが……姫様に告白した方ってエルクンド様なのでしょう？ 本心を訊くチャンスではございませんか？」

「今は浮ついた気分になれぬ」

アミナはふいと横を向き、次いで己の身体をそっと抱きすくめた。伏せられた紅い目には不安の色が過ぎっていた。

## 第十九章 故郷（1）（改）

眼下にあるただっ広い草むらが一斉にざわめき始めた。遅れて、なだらかな丘の上に牧草の素朴な香りが風に乗って運ばれてくる。高原の涼やかさを伴ったそれを鼻に感じながら、黒髪の少年は両手の平に収まるくらいの黒い物を乗せ、日差し遮る梢の付け根にあるもじかもじもとしたものを見上げていた。

黒い綿のようなもこもこが少年の手の上で頼りなく揺れ、少年は慌てて左右の親指同士をくっつけて蓋をした。そうしてやらなければ、十秒もしないうちに足元の枯れ草の中に埋もれているはずだった。

「うーん、少し高いなあ」

少年が呟くと、指を組んで作られた檻からも同意するかのようによく抜きを回す時のような細かい音が発せられた。閉じられた手の中に、小さいながらもちゃんとした温もりを感じた。束の間、指の間隙に視線を落とし、それから小枝を寄せ集めて作られた見事な野鳥の巣を見上げた。とうに命を終えたはずの枯れ枝が生き物の住処としてしっかり役立っているのを見ると、何とも不思議な気持ちになった。

「イエルド、こんなところで何をしている？」

背後から声が発せられ、少年が後ろを振り返る。と、牛皮で譚えた薄茶色のコートを着た、背の高い青年がいた。少年は見知った顔を見止め、満面の笑みを浮かべた。

「イヴァンさん！ 丁度良かった！ あ、その前にこんにちは」

イエルドが元気良くぺこりと頭を下げるのを見て、イヴァンと呼ばれた青年はわずかに目を細めた。

「ああ、こんにちは。相変わらず元気だな、おまえは。それはそう

と、村でディアーダ卿のご息女がお前を探しておられたぞ」

「ええ、アデイが？ おつかしいなー、今日は来られなくなっただけ聞いていたんだけど」

イエルドは記憶を探るように首を傾げた。

「急遽予定がキャンセルになったそうだな、帰りに立ち寄ったらしい。折角だから後で顔を見せてやれ、彼女も喜ぶ」

「うん、わかったよ。あ、それよりイヴァンさん。これ、なんだけど」

「うん？」

イエルドはおずおずと、両手の平に乗せている物を差し出した。尾根の先が白い以外は薄黒い羽衣で覆われた、丸みを帯びた生き物がもそもそと動いていた。

「トルバの雛、か。それでしきりに木の上を見ていたのだな」

イヴァンは納得したようにうなずいた。

トルバは夏季に繁殖期を迎える渡り鳥で冬鳥の代名詞だ。今頃は雛が巣の中で親鳥にせっせと餌をねだっている時期なのだが、何かの拍子で落下してしまったのだろう。

「戻してあげたいんだけど、巣の場所が高過ぎて僕には無理っぽくて。でも、イヴァンさんならこれくらい余裕でしょ？」

イヴァンは雛からイエルドに視線を戻した。

「あまり気が進まないな」

「え、何で？ このまま放置したらこいつ絶対に助からないよ」

眉を潜めるイエルドにイヴァンは少し困った顔をし、間を取って言葉を選びながらゆっくりと話し出す。

「自然の流れ、生命の循環は人がおいそれと手を出していいものではない。助からなかったはずの命を救ったことで、失われる何かが必要である。世界とはそういうものだ」

イエルドはその言葉の意味を考えてみた。確かに、この雛を助けたことで失われる命は増えるだろう。雛がいる以上親鳥はせっせと餌を運ぶし、やがて成長すれば自力で虫や小動物、或いは果実を食

するようになる。失われる命は確かに増える。あるいは、この雛を食べることによって他の動物が生き長らえることもあるかも知れない。

「言いたいことは、何となくわかるけど」

「仮に巣に戻したところで、親鳥が一度落ちたそいつを育ててくれるかはわからないぞ。最悪の場合、殺されてしまうことも考えられる。そういう例も少なくないからな」

「ううう、でもさあ」

「残酷に感じるかも知れないが俺たちは自然と共に生きる民だ。起きた事象を有りのままに受け入れることも」

「矛盾してるよ」

イエルドが冬籠りに備えた栗鼠リスのように頬を膨らませた。

「矛盾？」

「だってそうじゃん。自然と共に生きるなら僕ら人間だって自然の一部だってことでしょ？」

「そういうことだな。だからこそ」

「ああ、待って。今言わないと多分忘れちゃうから先に最後まで言わせて。つまり、僕が落ちていたこの雛と出会ったのも自然に起きた現象だよ」

「それがどうかしたのか？」

「それでもって、僕がこいつを巣に戻したいなって気分になったのも自然に起きた現象で、偶々イヴァンさんがここに来たのも」

「ま、待って待て。それは屁理屈じゃないか」

イヴァンが慌ててイエルドの言葉を遮った。

「屁理屈じゃないよー。イヴァンさんの考え方は、自然と共に生きると言いつつまるで人間だけ自然と独立しているような感じじゃん。人間が自然の一部に含まれるというなら、起きた事象もその一部のはずじゃない。例えば、その考え方だと奇特な猫とか鳶とかが雛を啜くわえて巣に戻すのはいいいんでしょ？」

「それは、まあそうだな」

イヴァンは宙に視線を向け、きまり悪そうに同意した。  
「そうでしょ？　じゃあ、人が戻しちゃいけない理由って一体なんなのさ。知性があるから？　それとも感情があるから？」

イヴァンは切り返しの言葉に詰まった。今回だけではなく、時折目の前の少年は年に似合わぬ聡さを見せる節があった。

「人が自然の流れを乱しちゃいけない。そんなことを考えるのは傲慢だよ。人だってその流れにいるんだから。世界の懐はもっと広くて深く、僕らはその中にいるちっぽけな存在だ」

「そう考えられないこともないが……しかしだな」

「そうでしょそうでしょ。というわけで、はい！」

あからさまに反論されなかったことにほっとしたような笑顔を浮かべつつも、イエルドは黒い羽毛に覆われた雛を差し出した。イヴァンは束の間、雛の小ささと愛らしさに見入ってから、深く溜息を吐いた。

「……甚だ不本意ではあるのだが」

半ば諦めた表情のイヴァンは親指と人差し指と中指、三本の指で雛を軽く支えると、視線を木の上に向けた。木漏れ日煌く深緑色の天井に程近い巢の位置を見定め、ゆっくりと両膝を曲げ

強く息を吐き出すと共に真上に向かって高々と跳躍した。イヴァンがイエルドの傍に着地した時、その大きな手には何も握られていなかった。イエルドの顔に、満面の笑みが宿った。

目蓋に映る闇が少し薄らいだ気がした。ゆっくりと目を開けると手の届きそうな所に真っ白い天井があった。

「ん、ここ、は、……うぐっ」

体中の痛みにも顔を顰めながらも、なるべく痛みが出ないように、慎重に身を起こした。何かが一瞬だけ視界を遮り、手元にぼとりと落ちた。数瞬して、白い濡れタオルだと認識した。誰かが看病のために自分の額に乗せていたのだ。

長方形のベッドの四角には透けるような薄さの、レース付きの柱が備え付けられていた。高級なベッドにのみついているそれを見て、シユイは天井と想像していた物がベッドの天蓋だったことに気づいた。次いで、何故自分が一生縁もなさそうなベッドで寝ているのか、疑問に思った。

「ここ、どこなんだろ、って、あれ」

違和感に気付いたシユイが慌てて腕を、次いで胸を見た。肌を覆っているのは着馴れた黒衣ではなく、白いシャツだった。生地が羽毛のように柔らかく、半ば無意識に指を這わせて滑らかな手触りを確かめた。もちろん、全く見覚えがない服だった。頭を両手で抱え、程なくして記憶が途切れていることに気付いた。

シユイは記憶をゆっくりと遡り、思い出した地点から再び辿っていくことにした。

「確か、飛竜と戦って、それから……ああ、あいつだ」

シユイはエグセイユのことを思い出した途端に顔を顰めた。あの妙に鮮やかな青い髪を思い出すだけで胸糞が悪くなった。だが、それも長くは続かなかった。

「はっ、アミナ様！　ぐっ」

立ち上がるうとした途端、強烈な頭痛に襲われた。シユイが頭皮を鷲掴みながら呻いた。

と、部屋の角にあるドアがゆっくりと開いた。シユイが何とか片目を開けてそちらを見ると、見知った顔があった。

「あら、お目覚めになられたのですねー。おはようございます」

茶色いセミデイの髪が縦にふわりと揺れた。優雅に頭を上げた女を見て、シユイは絆創膏の張られたその顔に見覚えがあることに気付いた。

「……あれ。確かリズさん、でしたよね」

シユイの言葉に、リズは微笑を浮かべた。その両手には淵に白いタオルのかかった金属製の洗面器が握られていた。

「はいー、リズでございます。たった一度で覚えていただけなんて光栄ですわ」

「……もしかして、看病してくれていたのリズさんだったんですか。あ、ありがとうございます」

「こちらこそ、その節は姫様が大変お世話になったそうで、本当に感謝しております」

シユイが目を丸くした。

「姫様！ そっか、ここは王城の中なのか。道理で……」

シユイは寝ていたベッドの豪華さにようやく得心した。

「じゃあ、アミナ様はご無事、なんですか？」

「お陰様で大事には至りませんでした。もう公務に復帰しておられます」

「そうですか。……良かった、本当に」

「だ、そうですよ。姫様？」

安堵した様子のシユイを見て、リズはほろほろと笑った。

リズがそう言うのを聞いて、シユイは不思議そうな顔をする。と、リズの後ろからひよっこりと、銀髪の少女が姿を現した。二重の驚きで、何と言えいいのか思い付かなかった。

「め、目覚めたようだな。此度は色々、その、世話を掛けた、な」

恥ずかしそうにもじもじとする少女の肩に、リズが小動物に触れ

るかのようにそつと手を置いた。淡い水色のワンピースを身に付けた少女の唇にはほんのりと赤い口紅が塗られており、深い緋色の瞳と相俟って大人びた印象を与えていた。白い革のベルトが腰回りを引き締め、スタイルの良さを印象付けている。

「ア、アミナ様、ですよね？」

普段のジャケットとホットパンツではなかったものの、その面影に明らかな共通点を見出したシユイは恐る恐る訊ねた。

「う、うむ。や、やっぱりこんな格好は私には似合わぬな。すぐに着替えて」

「ま、待つてください！……その」

慌てて部屋を飛び出そうとしたアミナを、シユイがギリギリで呼び止めた。

「み、見惚れてしまいました。童話の世界のお姫様みたいで、凄く素敵です」

その真つ直ぐな褒め言葉に、アミナの三角耳が慌しく動き始めた。その涙ぐましい放熱も込み上げてくる熱には及ばないようだった。褐色の肌でもそれとわかるほど、顔が火照っていた。

「リ、リズう」

「わ、私を見つめられても困りますわ」

頬を真つ赤に染め、助けを求めような視線を送ってくるアミナから、リズは何とか顔を逸らした。見てしまえば自分にもそれが伝染してしまうのがわかつているようだった。

「あぁっ！」

唐突に、シユイが小さく驚きの声を発した。我に返った二人がシユイを見ると、感触を確かめているかのように自分の顔をぺたぺたと触っていた。ややあつて、その顔がすうと青褪めていく。

「ああ、そう言えば顔を隠されていたのでしたね。申し訳ないので



すが、着ていた黒衣の方はあまりにぼろぼろで泥だらけだったので廃棄処分にさせていただきました」

それどころか顔につけていたはずの魔法樹脂までがなくなってる。シユイは、いつ取れてしまったのか思い出そうとするが、心当たりがあり過ぎて確定のしようもない。

「そなたの素性のことなら安心しろ。現時点で知っているのは信頼出来る者たちだけだ。ランベルトとリスと私、それに王宮治癒術師が二名だな。一応全員に口止めはしてある」

「そ、そうですか。本当にすみません」

シユイは申し訳なさそうに謝罪した。

「謝るのはこちらの方だ。私を助け出すために、その、随分と無理をさせたようだな」

しおらしいアミナの言葉にシユイは呆気に取られたが、程なくして納得した。

「>滅祈歌ルイン・チャントのことですね。今にして思えば軽率に過ぎる行為でした。下手をしたらアミナ様にも害を及ぼしかねなかった」

「滅祈歌、というのか。あの技、と言っていいのかわからぬが」  
考えている風なアミナに、シユイは一息おいて口を開く。

「あれは、>我が心身を修羅と化せくといつて、魔法言語の一種です。術者の周囲に存在する微細な力を掻き集めた後に、己の魔力と結合コミットさせて魔印に組み換えます。それで魔法陣を形成、展開することによって強化呪法と自己催眠を同時に掛けるものです。痛覚を遮断し、その他の感覚と身体能力を強化する。ある意味、強化魔法の集大成と言えるかも知れませんか」

「それは、凄まじいですね。そんな闘法があるなどとは終ぞ知りませんでした。ですが、それだけのメリットがあるならリスクも生半可なものではなさそうですね」

その言葉からはリスも何らかの武術を心得ていることが窺えた。シユイは口を挟んだリスに、少しづつが悪そうにならずいた。

「おつしやる通りです。身体能力を無理に底上げするわけですから、長時間使うと身体の方が過負荷に耐えきれなくなります。具体的に言うと全身の筋肉の断裂、神経系の麻痺。それと、戦闘中に負った傷。あくまで魔法陣の展開中に痛みを感じないだけであって、術効が失われれば痛みは一挙に襲ってきます」

アミナはシュイが絶叫した時のことを思い出したのか、ぶるりと身を震わせた。

「また、術者が使用する際の思念に共鳴した、ええつと。要するに詠唱の際に考えていることに似た思念が集まるのですが、掻き集めた思念の量が多過ぎると自我が抑制され、最悪取り込まれてしまいます。完全に融合したら、二度と戻ることは不可能だそうです。もっとも、記録に残っているだけでそうなった人を実際見たわけではありませんけれど」

「では、あのときも？」

「焦りと怒りに任せて、つい。考えなしと言われても否定できません。初めはコントロール出来ていたのですが、途中で感情を乱してしまったのか、自我が集まった怒りに呑み込まれてしまい、正直その後の記憶は定かでは」

「馬鹿者が！ そなた、そんな危険な術を用いたと言うのかっ！」

いつの間にかベッドの間近まで歩み寄ってきたアミナが、体を強張らせながらも怒鳴った。

「返す言葉もありません。どうなるかもわからない博打みたいな魔法を使っただんです。処分はいかようにも受けるつもり」

「そんなことを言っているのではない！」

「……え」

「自我がなくなるということは、お前がお前でなくなってしまうというのだぞ。お前と言う存在がこの世から消えてしまうのだぞ！」  
「それは、そうかも知れませんが」

まだわからないのかと言わんばかりに、アミナは握る拳に力を込めた。

「そうかも、ではない！　そなたは、自分に頓着が無さ過ぎるっ！」  
アミナの目に涙が滲み出たのを見てシュイが慌てて頭を下げる。

「も、申し訳ありません」

「謝って済む問題ではない！　私が助かったとてそなたが助からなかったら、私はそなたを大切に想う者たちに何と詫びればいいのか！」

返す言葉が見つからなかった。半ば、自分と己を対等に扱うアミナの情の深さに感じ入り、反して己の浅はかさに恥じ入るばかりだった。

「姫様。私も是非その言葉を使って差し上げたい方が一人いるのですが？」

背後からのリズの穏やかな声に、アミナが一瞬身体を竦ませた。

「み、水を差すでない！　シュイ、此度のことに関しては言葉では伝えられぬほどの感謝がある。それを踏まえた上で敢えて言わせてもらう。もう何があるうとあの技は絶対に使うな。私との約束だ、いいな！」

「は、……はい」

シュイはそう答えつつも、既にニルファナとの約を違えてしまったことを思い出し、胸中では存分に後ろめたさを感じていた。

アミナは潤んだ目を袖でごしごしと擦ると、シュイに向き直った。「戦いの最中に性格が攻撃的になっていったのはそういうわけだったのだな。合点がいった」

「すみません。その……生意気な口の利き方をしまして」

今度は、アミナは口元に微笑みを湛えた。

「そなた、先ほどから謝ってばかりだな。そんな瑣末なことは気にしておらぬ。まだいくらでも訊ねたいことがあるのだが、構わぬか？　疲れてはいないか？」

「大丈夫です。話すくらいなら何てことありません」

頭痛はまだ収まっていなかったものの、起きた当初よりは随分和らいでいた。シュイは布団を取り払おうとしたが、アミナが手で制止した。

「そのままが良い」

「で、ですがアミナ様が立たれているのに、それは」

「そなたのは名誉の負傷であろう、案ずるな。まあ、こちらが立っているのがどうしても気になると言うなら椅子もあるしな」

「ここで宜しいですか？ 姫様」

いつの間にか、リズが壁際に置かれていた三つの肘掛椅子の内、二つを拝借してきた。

「うむっ……て、リズ。何故二つも持ってきたのだ」

「あら、まさか姫様は私を仲間外れにするおつもりなのですか？」

「そ、そんなことはないが、シュイにだって聞かれたくない話というものもあるだろう」

「構いませんよ、アミナ様。リズさんは口も堅そうですし」

シュイがそう言って微笑んだ。

「そうですよ。エルクンド様もこう仰っておられることですし、ささ、姫様もどうぞお座り下さい」

そう言いながらもリズはちゃっかりと持ってきた椅子に腰掛けている。アミナは釈然としない様子で、それでもリズが奨めた椅子に腰かけた。

「では、何から話しましょうか」

シュイはベッドから向かって右側に置かれた椅子に座る二人を見比べながら訊ねた。

「本心を隠さねば初めから全てを、と言いたいところだが、そなたが話せると判断したところまでが良い。だが、イヴァン・カストラについては出来得る限り詳しく頼む。あやつを取り巻いている事情

がわかれば、その狙いを予測して阻止できるかも知れぬからな」

「そう、ですね。あの、この話は絶対に漏らさないでもらえますか？」

「フォルストロームの名において、シルフィールの名において他言はせぬと誓う」

「私も、メイドの誇りにおいて他言は致しませんわ」

「アミナとリズの宣誓に、シュイは小さくうなずいた。

「あのとき、イヴァンさんも少し触れていましたから、最初に断っておきます。一年半前、セーニア教国の騎士団長を殺した犯人について」

その言葉に、アミナとリズが目を見開いた。

「コンラッド・ディアーダか。い、いきなり核心ではないか」

「それを話さないと、おそらく納得は出来ないと思っていますので」

「……うむ。あなたがそう言うならそれで構わぬが。それで、コンラッド・ディアーダを殺めたのは誰なのだ。やはりカストラのやつか？ それとも他に誰か真犯人が？」

「誰か、ではありません」

「……あの、どういうことでしょうか？」

「彼を殺したのは……」

シュイはしばしの間口を嚙み、掛け布団をぎゅっと掴んだまま目を瞑った。そして

「俺、なんです」

重々しい溜息にも似た、小さな声を零した。

## 第十九章 〵(2)〵(改)

シユイの信じ難い告白に、アミナとリズは束の間、息を吸うことを忘れていたようだった。

「い、今なんと申した？ 何かの、間違いではないのか？」

間が空いて、アミナがようやくそう言った。彼女に似つかわしくない、どこか虚ろで重みのない声だった。

他人の内緒話すら聞き逃さぬアミナの三角耳である。シユイと三歩と離れていない距離であれば聞こえぬはずはなかった。それでも、あまりの驚きに念を押さずにはいられなかった。国の重鎮を殺すような重罪をシユイが犯したのだと、とても心情的に認められるものではなかった。

「間違いありません」

シユイは短くそう言うのと左手を掲げて手の平の傷痕を眺めた。何気ないその所作が、如何なる言を弄するよりも強い信憑性を与えた人を斬った剣の血煙を確かめるかのような、伶俐な眼差しだった。

「馬鹿な、有り得ぬ。ディアーダ卿の武量にはジジ様、キア王も一目置かれていた。今の私であっても、まず勝てぬと信じて疑わぬ相手だぞ。だ、大体、彼が殺されたとされるエスニールの内乱は一年半以上も前のことだぞ。そのときそなたの年齢は」

「十三になる少し前、でした。仰りたいことは良くわかります。事実、彼の強さは勇名に違わず恐るべきものでしたし、まともにやり合っても倒すことは叶わなかったでしょう。同じ事をもう一度やれと言われても限りなく不可能に近い。殺すことが出来たのは、そう、偶然によるところが大きかったんです」

アミナの顔が険しさを増した。出来たというその言葉こそは、暗にシユイが殺害を目指していたという意味を表す文言でもあった。

「先ほど言っていた滅祈歌か。その口振りからすると、そなたは明確な殺意を持っていたと言っただな？」

シユイはアミナの鋭い視線を臆せずを受け止めた。

「そうですね、あれを用いてコンラッドと相見えました。それから、殺意も否定しません。少なくともあのときの俺にとっては、彼の存在は排除すべき対象に過ぎませんでしたから」

アミナが何かを言おうとしたが声の形にならず、開きかけた口を噤んだ。その横で、リズは黙考に耽っていたが、ゆっくりと顔を起こした。

「何故、ですか？ デイアーダ卿は人格者として名高いお方でした。かくいう私も何度かお会いしたことがありますし、噂に違わず聡明な方だと認識しておりましたが」

「俺も、そう思いますよ。いえ、思っていました」

シユイは微かに笑った。どこか諦めを感じさせるような笑顔だった。

「違う、と仰るのですね？」

重ねて訊ねたりズに、シユイは小さく首を振った。

「申し訳ないですが、そのことについてはまだ仔細を話すことは出来ません。俺も全てを把握しているわけではないので。ただ、コンラッドの殺害がイヴァンさんの手に寄るものだという誤解だけは、どうしても解いておきたかったです。どうしても彼に濡れ衣が着せられたか、その経緯はかなり気になりますけれど」

アミナは腿の上で組んでいる両手に視線を落とした。

「おそらくは、その後のやつの動向のせいだ」

「その後の動向、ですか？」

シユイはリズからアミナに視線を移した。

「そなたはその辺の事情を何も知らなかったようだが、カストラがデイアーダ卿を殺害したという罪が明るみになったのはごく最近に

なつてからのことだ。やつはエスニールの内乱より半年ほど経過してから、つまりは一年くらい前からセーニアの要人を立て続けに何人が暗殺している。こちらの件に関しては目撃者も複数いるようだ」  
その言を耳にし、シュイが驚愕した。

「そ、それは確かなんですか？」

「うむ。そういった事情を鑑みれば、一連の動きがディアード卿の殺害と結び付けられても不思議ではあるまい。とはいえ、何故シュイがその罪を免れていたのかは少し気になるところだが。いや、待て」

アミナは言葉を切り、少しの間黙考した。

「一つ腑に落ちぬな。もしカストラが冤罪だと言うのなら、というより、セーニアがそう解釈しているのなら、そなたは何故顔を隠しているのだ？」

アミナの疑問は無理からぬものだった。イヴァン・カストラに濡れ衣が着せられている現状では、シュイが逃げる必要はないはずだ。実際、彼女はシュイに疑いを抱いてから何度か高額賞金首のリストをチエックしていた。だが、今目の前にいる少年の顔は、他のどの似顔絵とも一致しなかった。

シュイはさして動揺も見せず、淡々と応じた。

「全く身に覚えのない医者夫婦殺害の罪を、でっち上げられたためです」

「何だと？ ディアード卿の件ではなくか？」

アミナが混乱と怒りを含む声を発した。

「少し妙な話なのですが、俺は本来の罪ではなく別の罪を着せられ、賞金首として追われることになったんです。それでも結局、一年近くに亘って各国を逃げ回ることになったんですけれど。ニルファナさんはセーニアがそのようなことをした理由について、ある程度の目星を付けているようでしたが」



「そついう、ことですか」

「ん、リズ。わかるのか？」

アミナが隣に座っているリズを見た。リズはアミナと視線を交わし合った。

「何となく、ですけども。多分、ディアーダ卿を殺したのがエルクンド様だったからまずかったのではないでしょうか？」

「俺だったから、まずかった？」

シユイが首を捻る一方、アミナはリズの言葉を鑑みて、何かに気付いたように小さく口を開いた。

「言われてみればそつだな。そんな単純なことだったのか」

「ええつと……」

一人置いてきぼりを食らったシユイは少し困った表情になった。

アミナは神妙さの薄れたシユイを見て少しほっとしたようだった。

「シユイ、わからぬか？ 十中八九、セーニアは体裁を重んじたのだ。仮にも騎士団総隊長、国の最高位騎士ともあるう者が年端もいかぬ子供に敗れたとなれば、強国たるセーニアの面目は丸潰れになる。ゆえに、事件の詳細を周辺諸国に悟られなくなかったのだ。確かあの頃、かの国では開戦論で盛り上がっていたと聞き及んでいる。そのような時に軍の最高責任者が名もなき子供に殺されたとあつては士気にどれほどの悪影響があるか、容易に想像が付くであろう」

明快な説明を聞いて、俄然納得がいった。コンラッド・ディアーダの名声は大人はもちろんの事そこいらの子供にまで浸透し、英雄視されていた。裏を返せば、悪い噂が知れ渡るのもあつという間のことだ。ナイト・マスターとまで呼ばれた男が取るに足らなかつたと見なされれば、敵対国を勇気付けてしまう可能性は非常に高かつた。

「とりあえずは犯人の正体を不明としておいて、ディアーダ卿を殺し得る犯罪者が現れたときに罪を擦り付けてしまえば良いと考えた

のでしよう。濡れ衣を着せられた方は、ご愁傷さまですけれど」

リスがアミナの説明を補足した。

「さりとて、実行犯であるそなたを見逃すわけにはいかぬ。だから全くの別件で賞金を掛け、足取りを掴もうとしたのだ。それほどの重罪であれば、ある程度責任のある者ならそなたのことを知らされている可能性もあるな」

セーニアの立場としては、コンラッドの殺害に付いては秘密裏に処理したい案件。シユイを探し出すためとはいえど、大々的に兵を動かすことは出来ない。そこで傭兵を利用しようとしたのでは、というのがアミナの意見だった。

「ちなみに、そなたに掛けられていた賞金額は？」

「金額は、確か400万前後だったと思います」

「なるほど。法外な金額を付けていない辺り、セーニアにも奸智に長けている者がいるようだ」

「えっと、どういうことですか？」

「多すぎず、少な過ぎず、現実味のある、魅力的な金額を提示しているということだ。あまりに高すぎると何かと話題になるし、かといって見向きもしない値段では意味がない。しかし、それくらいの賞金首に似顔絵が付くのは異例なことだ。先方は余程そなたを始末したかったとみえる。それがまさか、こんな所で傭兵をしているとは夢にも思わぬだろうがな」

アミナは髪を掻き揚げながらそう言った。指に絡んだ銀髪が絹糸のように撓たわんだ。

「それで、顔を隠すというのは、ハーベルのアイディアなのか？」

「それは、どちらとも言えないというか、自然とそういう方向になっていました。ニルファナさんが僕に気付いたのは、おぼろげなイメージと顔の特徴が一致したからだそうです。ただ、実際に顔を合わせたとき」

「 違和感に気付いたのだな」

「 みたいです。似顔絵が、当の僕が笑いたくなるくらいに凶悪な顔に描かれていたこと。それから、相對して感じた力量に見合わぬ賞金額だったことが引つ掛かったって言っていました」

リズがぼんと相槌を打った。

「 ああ、それは何となくわかる気がします。エルクンド様の顔って、こう言うては何ですけど人殺しというにはいささか迫力に欠けますし。おめかしすれば女の子にも勘違いされそうですね」

どこか楽しそうにそう言うリズに、アミナもうんうんと乗っかった。シユイは少しだけむすっとした。

「 犯罪者の似顔絵が印象悪く描かれることはまああるが、度が過ぎたということか。すこぶる勘が良い彼女のことだ。おそらく裏にきな臭い物があることを嗅ぎ取ったのだろう。ハーベルは、この話を知っているのか」

「 捕まった後、無理矢理聞き出されまして」

「 そ、そうか」

シユイがあからさまに落ち込んだのを見て、アミナはそれ以上この話題に触れるのを止めた。無理矢理ということは拷問に近い事が行われたのだろうと想像した。

「 姫様、顔が赤くなっていますけれど、どうかなさいましたか？」

「 き、気のせいであろう。そ、それで？ カストラはエスニールの民なのだな？」

リズの突込みを強引に流し、アミナは質問を続けた。

「 そうです。俺は魔法道具の売買をする商隊キャラバンに居候していたのですが、色々あってエスニールに居付くことになりました。イヴァンさんと出会ったのもその頃ですね」

「 なるほどな。ちなみにやつは、どのような人物だった？」

「 最初こそ少し近寄りたがたい雰囲気がありましたけれど、何とというか、真摯な人でした。季節の訪れと自然をこよなく愛していて、相

手が子供であつても大人に接するのと同じようにしてくれて。格好良いし、戦士としても一流だし、子供たちの憧れでしたよ。実際、俺もイヴァンさんみたいな大人になりたいと思っていましたし」

「……そうか。そのような人物が、な」

アミナは複雑な心境だった。今回のフォルストロームの襲撃に際しては、死傷者は少ないとはいえ出ている。一国の姫の立場として、彼を許す気になれるはずはない。そのことはシュイもリズもよく理解していたのだろう。あえて口を挟むようなことは差し控えていた。

「あの、エルクンド様。エスニールの内乱の時、彼もそれに加わったのですか？」

「内乱」

リズの問いかけに、シュイの雰囲気が一変した。その瞳には仄暗い怒りが見え隠れしていた。リズではなく、己の発したその言葉に対しての怒りだった。

「そう、ですよ。他国での認識としては、その程度のものですよね」

「シュ、イ？」

「イヴァンさんは、エスニールにはいませんでした。フリーの傭兵でもあつた彼はしばしば村を空けることがありました。あの日の彼は、当事者ですらなかったんです」

「なんと、その場にいなかったというのか？」

「ええ。戦力として頼れる彼が不在のときに、果たして内乱など起こすかどうか。聡明なお二人ならわかりですよ」

「では、仕掛けてきたのは」

アミナとリズの視線を受けて、シュイは力なく項垂れた。

「当時、セーニアとエスニールが何かと揉めていたのは事実です。が、先に襲つて来たのは、セーニアの方だったんです」

## 第十九章 〵(3)〵(改)

コンラッド・ディアードはセーニアの国民的英雄であり、象徴でもあった。誰かに例えるならば、フォルストロームにおけるアミナのような存在だ。

下級貴族の出身であった彼は騎士道精神をそのまま体現したような男で、十年に一人と言われるほどの英傑だった。文武両道に優れていたが、芸術にも造詣が深く、特に絵の才に長けていた。彼が戯れに描いた風景画は、亡くなった後では相当な高値が付けられている。

剣技に卓越していたコンラッドは長きに亘ってセーニアを苦しめていた蛮族の一派を退けて名を上げた。その後は史上最年少、齡二十三にして騎士大隊長に昇格。軍学校時代から恋仲だった現教皇の妹カティス・セーニアを妻に娶り、一男一女を儲けた。貴族としては珍しく晩婚であったが、大恋愛を経て一緒になった妻カティスとの仲は睦まじかった。

コンラッドは生涯側室を持たなかった。大貴族となった者が妻を一人しか娶らぬことは、セーニアという国に置いて非常に珍しく、その一途さ、生真面目さも彼の評価を高めた一因だ。

年の近い教皇アダマンティス・セーニアとは幼馴染であり、学友でもあった。コンラッドとカティスとの仲を取り持ったのもアダマンティスだと言われている。婚姻によって王族の系譜に名を連ねてからというもの、彼に対する国民の信望は教皇へのそれと並ぶほどになった。

セーニアで確固たる地位を築いたコンラッドは、特使として諸外国に赴くことも多くなった。何時しかその名声は周辺諸国にまで響き渡り、道端で遊んでいる子供たちのごっこ遊びに彼の名が挙げら

れることも多くなつた。ナイト・マスターという万人に判りやすい字面も多分に子供心を擲つたのだらう。

誰もが羨むような順風満帆の人生を歩んでいたコンラッド・デアード。シユイがそんな彼と出会つたのは、やはり外遊がきつかけだった。その頃には騎士団総隊長に昇格し、所有する屋敷から王城へと移り住んでいたデアード一家は、セーニアの北西にある同盟国ディボルクの闘技祭に賓客として招かれた帰り道、エスニールに立ち寄つた。以前からエスニールとは個人的に付き合いがあつたようだが、シユイにとってはそのときが初対面だった。

エスニールの族長の一人、ミレイ・ロズベルクの家で居候していたシユイは、コンラッドが訪ねてきた折に彼女と一緒に出迎えた。最高位騎士に名を連ねるだけあり、第一印象は厳格さが強く残つた。傍目には三十前半くらいの容貌で身の丈が高く、身体も見るからに鍛え上げられたものだった。後日にシユイは、実年齢が四十を越えていると知らされ、相当に驚かされることになった。騎士と言えば大方日焼けしているものだが、彼もその例に漏れることなく、小麦色の肌だった。色の濃い碧眼に対してオールバックにした薄茶色の髪が若々しい印象。類稀な家族思いでもあり、言葉の節々に妻や子供への気遣いが垣間見えた。

シユイは、彼の息子ゼノンとは年齢が一回り以上離れていたせいもあつて疎遠だったが、同年代の娘アデライドとはすぐに仲良くなつた。

ゼノンとアデライドは教皇の妹であるカティスの血を、セーニア王家の血を引いている。そのせいもあつて、年端もいかぬ頃から周囲の好奇の的となつていた。腹に一物抱えた大人たちが取り入るために、あるいは利用するために、父であるコンラッドの目を掻い潜つて二人に近づこうとした。謀議渦巻く王宮内は、心許し合える友人を作れるような環境ではなかつたようだ。

兄のゼノンは、現教皇に未だ子供が出来ないこともあつてセーニ

アの第一王位継承者だった。自分に跪く者たちを毎日のように見ながら育った彼は、次第にそれを当たり前のことのように思い始めたのか、少しずつ驕慢な性格に傾いていった。

妹のアデライードも、ゼノンほどではないにしろ様々な思惑に晒された。具体的に言うと、十にも満たぬ幼少の頃から見合い話が何件も来るようになった。アデライードと婚姻関係を結んだ家系は、当然王家の外戚に名を連ねることになる。それによって得られるメリットは計り知れぬものがあつたのだ。

その内にアデライードは人と会うことを避けるようになり、家に引きこもりがちになった。内向的になり、一人部屋で歌を口ずさんでいる愛娘を見るに見かね、コンラッドは思い切つて外遊に連れ出すことにした。少しでも気分転換になつてくれれば、と考えてのことだつたのだろう。

実の所、アデライードから話を聞く限りでは、当初はいい迷惑だとしか思つていなかったらしい。大人同士が談笑している間、見知らぬ土地で、やはり一人寂しく暇を潰さねばならなかったからだ。子の心親知らずよね、と彼女はしょっちゅう頬を膨らませていたものが、シユイは相槌を打ちながらもお互い様だと思つていた。

コンラッドに連れられてエスニールに立ち寄つた際、暇を持て余したアデライードはこっそりと族長の屋敷を抜け出した。窓から見えた丘の大きな木を目指して歩いていたが、その途中でシユイたちと鉢合させた。

シユイが初めてアデライードに出会つたとき、彼女は胸元に桃色のコサージュが付いた薄絹のドレスを着ていた。一目で高貴な身分だとわかるものだった。五指を何の抵抗も感じさせずに通しそうなほど手入れの行き届いた、肩の下まである金髪は如何にもお嬢様然としていて、そのくせ碧眼は捨て犬のような寂しげな光を放つていた。そんなアデライードと視線を交わしたシユイは束の間、仲間たちと顔を見合わせてうんうんとうなずき合った。

人懐つこいエスニールの子供たちに遠慮の二文字はなかった。彼女をいつも自分たちがしている遊びに容赦なく巻き込んだ。牧場で草を食<sup>は</sup>んでいる羊たちいきなり抱きついたり、ミミズを餌にして小川で釣りをしたり、厚紙を下に敷いて芝生に覆われた川縁の坂を何度となく滑り降りたりした。

遊んでいる間、ずっと澄まし顔をしているように見えたアデアライドだったが、後日、再びエスニールを訪れたコンラッドの話では帰り路でまた是非連れて行って欲しい、と自分からせがんだそうだとそれを聞いてシユイは、ちゃんと楽しんでもらえたのだとわかって少し嬉しくなった。次第にアデアライドはエスニールの子供たちと打ち解け合い、笑顔を見せてくれることも多くなっていった。

元気になっていく娘の姿に、コンラッドも思うものがあつたのだろう。外遊の有無に拘わらず、一家総出で村を訪れることも増えていった。

コンラッドは暇を見てはシユイに体術を教えてくれた。元々エスニールでは何かしらの武芸を学ぶことを推奨していたのだが、シユイは組み手というものがどうしても苦手だった。練習とはいえ実戦稽古、寸止めではない。訓練中に相手に怪我させてしまうことだつて当然ある。

実際、道場では鼻血や青痣は日常茶飯事で、骨を折られた子も何度となく見かけた。有り得ぬ方向に曲がった腕を見て、その場から逃げ出したくなることもしばしばだった。

コンラッドはシユイの運動神経を早くに認め、エスニールを訪れた時にはしばしば稽古を付けるようになった。全ての打ち込みをあつさりといなししてしまうコンラッドに対して、シユイは遠慮の二文字を取り払い、思う存分拳を振るえるようになった。

シユイは、てつきりコンラッドが剣の扱いにのみ優れているのだとばかり思っていたが、彼の強さを支えていたのは優れた体捌きと動体視力だった。何しろ、拳をまともに手で受けてもらえるように



なるまで一年以上の時がかかったのだ。

時を経るに連れて、ディアーダ家との関係は深まっていった。年齢の垣根を越え、お互いに心を許し合い、様々な話をするようになった。国の成り立ちや経済問題。各国間との微妙な軋轢。はたまた、病弱な妻、カティスの心配。思春期を過ぎても反抗的なゼノンの愚痴。以前と打って変わってすっかり明るくなったアデライドの様子も。

食卓で自分の話題がしょっちゅう出てくると聞かされると少しこそばゆかった。面映ゆそうなシュイに、コンラッドは笑いを禁じ得ぬ様子だった。

時にはシュイも身の上話をした。故郷のケセルティガーノを出て商隊に加わることになった経緯や、訪れた国々での人々の暮らし振り。はたまた、商品として扱っていた魔法道具のことなどについて。かなり細かい性格なのだろう。商売や魔法道具の話をするや質問攻めにあつた。取り扱っている道具にどんな効果があるのかはもちろんのこと、どういう風に使うのか。どのような材料で作っているのか。はたまた、どんな客が多いのか。どれくらいの利益が出るのか等々。

シュイはコンラッドと話すのが好きだった。実際に最先端で政務に携わり、各国を巡っている彼のする話は、同世代の子供たちと遊ぶのとはまた違った楽しみを与えてくれた。逆に、幼い自分と話しているてもコンラッドの方がつまらないのではと不安になり、実際にそう訊ねてみたことがあつたが、彼はやんわりと否定した。大臣なんかと話すよりも君と話している方がずっと楽しい、と冗談めかして言ってくれた。シュイが十一歳の頃までは、不穏な空気など一切感じられなかった。

疎遠になり始めたのは出会ってから二年が過ぎた頃。コンラッド

の妻であるカティスが病に倒れたことが始まりだった。

元々身体があまり丈夫でなかったカティスだったが、それでも起き上がれなくなる程ではなかった。王妹という身分もあり、彼女はセーニアの王城で有効と思われるありとあらゆる治療を施された。しかし、一時的には持ち直しても、また徐々に容体が悪くなっていた。一向に治らぬ彼女の病に、巷では誰かの呪い、はたまた一服盛っている者がいるのではなどといった噂が囁かれ始めた。その頃のコンラッドとアデライドの落ち込みようといったら、声も掛けられないくらいだったのをシュイは覚えていた。

そんな家族たちの前で、しかしカティスは笑顔を絶やすことはなかった。闘病で体力が衰えていき、口数が少なくなってきたても、苦しみを呑み込んで背筋をぴんと伸ばし、微笑みを浮かべ続けた。そのいじらしさが、尚更に見舞い人たちの胸を詰まらせていた。

シュイが十二歳になって間もなくのこと、カティス・デアードは帰らぬ人となった。享年三十九という若さだった。

そして、それからわずか八カ月後のこと。

その日、シュイはミレイに食料品の買出しを頼まれ、エスニールの村はずれにある市場を歩いていた。

コンラッドとは三カ月前に会ったのを最後に、ぷつぷつと音信が途絶えていた。度々人目を忍んでエスニールに来ていたアデライドも、何時しか姿を見せなくなっていた。

カティスが亡くなってから間もなく、セーニアの軍部では様々な動きがあったようだ。セーニアに対して反抗的な態度を取る北方諸国への開戦論を支持する一派が台頭。穏健派の中心だったコンラッドを抱き込もうという動きが強まっていたらしい。

同盟国であるエスニールは首尾一貫して穏健派の立場を貫いていたが、ある時期を境に徐々にその立場は悪くなっていった。エスニールの族長たちはセーニアに対する不信感と警戒感を強めていたが、

とある事件をきっかけに決裂が決定的なものとなった。

シュイの保護者であるミレイ・ロズベルクは危機感を募らせていた。密かに非戦闘員を友好国に避難させられるよう、上に顔の利くユウヒ・タカナシという人物と連絡を取り合った。シュイとも行商を通じて知己であった彼は、その依頼を快く引き受けてくれた。

シュイは保護者代わりであるミレイのやることに文句こそ言わなかったものの、内心ではあまり快く思っていないかった。セーニアにコンラッド・ディアードがある限り、実力行使などするはずがない。彼がそんなことを許すはずがない。仮に強硬派を止められなくなっても、親しい自分たちには危機を教えてくれるはずだ。そう信じて疑わなかった。

頬に何かが触れ、イエルドは雲行きの怪しい空を見上げようとした。が、視界に何かが映り、首の動きが途中で止まった。

普段遊び場に使っていた丘の稜線が、数多の黒いもので埋めつくされている。目を凝らして、それが連なる騎馬隊だとわかった。

唐突に、その列が乱れた。中央から徐々に下方に曲がっていき、横一線のそれがうねうねと波を打ち始めた。背筋から足先まで一気に冷え切った。

即座に声を発して警戒を呼びかけようとしたが、喉が痙攣して上手く動かなかった。震える喉を片手で驚掴むようにして、無理矢理捻り出した。

「セーニア軍だ！ こっちに向かっている！」

突然叫んだイエルドに、お釣りを渡そうとしている商人や露店を物色している者が振り返り、硬直した。突然何を言い出すのだと困ったような笑いを浮かべたが、シュイの表情を、続いてはその手が示した方角を見て、顔を引き攣らせた。

「ば、馬鹿な！ 連中本気か！」

大人たちが次々に驚嘆を口にした。イエルドとて信じられぬ気持

ちだったが、迷っている時間は残されていなかった。距離はあるが、馬であればここに至るまでに五分とかからないはずだった。

「うただ言っている時間は無いよ！ 非戦闘員を湖の方へ誘導して！ 僕は族長たちに知らせて来る！」

イエルドが脇目も振らずに走り出して間もなく、敵襲を知らせる魔石があちこちらで爆音を鳴らし、村の中が一気に騒然となった。時を同じくして驟雨が地面を叩き始めた。乾いた砂が飛び散り、次第に泥の領域を広げていった。

どうして……どうしてなんだ！ コンラッド！

心中に湧き出た疑問と憤怒を押し潰し、イエルドは泥を蹴散らしながらミレイの屋敷目指してひた走った。

それから間もなくして、騎馬隊の見るに堪えぬ殺戮劇が始まった。普段から武芸を奨励しているだけあり、エスニールの大人たちはよく戦った。実際、後日に判明した死者の数はセーニア兵の方が多くくらいだった。しかしながら、絶対的な数量の差とイヴァン・カストラの不在。ましてや非戦闘員を庇いながらの不利な戦い。突然の奇襲によって準備時間がなかったことも災いした。

隊列をまともに組むことも叶わなかったエスニールの戦士たちは、孤立した者から大群に呑み込まれ、息絶えていった。エスニール側が非戦闘員を含めて約八百人。対するセーニアの兵は四千を下らなかった。

培われてきたはずの信頼は、血と汚泥と、無念の涙によって洗い流された。エスニールの戦士たちの必死の奮戦、駆けつけたユウ・タカナシの助力もあって全滅こそ免れたが、それでも助かった者の方がずつと少なかった。そして

シュイは言葉を切り、かたかたと震え出した己の身体を何とか止めようと抱きすくめた。アミナとリズは、涙で滲むシュイの、それでも挑みかかるような双眸に、一切の声を発する事が出来なかった。せめて零すまいと目を細めて瞬きを堪える所作が尚の事、健気に映った。噛み締めた唇から血が一筋流れ出で、シュイの着ている白いシャツに赤い斑紋を残した。

「イヴァンさんは、戻ってきたはずですよ。全てが終わってしまった後に。大勢の友人や親類が殺され、家も畑も焼き尽くされた、変わり果てた故郷へと。そのとき、一体彼が何を思ったのか、何を想像したのか。昨日は頭に血が上っていて考えが及びませんでした。頭が冷えた今ならわかります。俺だからこそ」

イヴァンはさぞセーニアを、何より自分自身を憎んだことだろう。どうして肝心なときに自分は故郷を離れていたのか。皆の為に戦えなかったのかと。

そして、それはシュイにとっても同じことだった。自分がもつと早くに滅祈歌を以って戦いに加わっていれば、被害をもつと少なくできたかも知れなかった。だが、そのリスクを知っているが故に、我を失う可能性を恐れていた。もしかすれば、その牙が味方にも向くのではないかと。どちらが正しい選択だったのかは、今更証明できるはずもなかった。

「彼がセーニアへの復讐心を忘れるはずがなかった。アミナ様の話を聞いて、そう確信しました」

彼の国への報復。最終的にシュイは滅祈歌を使い、万難を排してコンラッド・ディアーダを殺すことに成功した。それによって復讐

を一部果たしていた。

そしてイヴァンも、おそらくは傭兵時代に培った独自のルートから情報を収集し、エスニールの虐殺に関わった者たちを消していたのだ。もしかしたら、今回のフォルストロームへの襲撃もセーニアへの報復に何らかの関わりがあるのかも知れない。シユイはその結論へと達した。

「やああって、聞き入っていたアミナが目を瞑ったまま口を開いた。そなたも、同じか？ 今もなお」

セーニアを憎んでいるのか。シユイは続く言葉を察して眉をしかめたが、ゆっくりと目を伏せた。

「ニルファナさんと出会う前は、道すがら聞こえる子供たちの笑い声ですら、聞くに堪えませんでした。重なるんです。殺戮さつりくに興じていたセーニア兵たちのそれと」

シユイはそう言つて両耳を押し潰すように頭を抱えた。それが曲がりなりにも戦いと呼べるものであれば、踏ん切りがつくこともあったかも知れない。だが、仮にも同盟国に宣戦布告もなしに襲いかかり、内乱の汚名を着せて自分たちの罪をなかつたことにする。そのようなむごい仕打ちに我慢できるものだろうか。そんなことは、絶対に不可能だ。

セーニア兵たちの罵声や笑声に混じつて死んでいった子供たちの悲鳴が、未だに耳にこびりついていていた。ふとした時にそれを思い出し、呼吸もままならぬほどに胸が震えた。その度に、身体の奥底にまで根を張ったそれを周りの肉ごと削ぎ落としたい衝動に駆られた。

「今でも憎い、です。どうしようもなく。エスニールの仲間たちあれほどの地獄を見せておきながら安穩と笑っていられる連中を、どうして許すことができるでしょうか」

知らなければ許されることなのか。殺戮に加担した兵にのみ全ての責があるのか。違うはずだ。その兵を支えている国が、国を支え

る民たちが根幹にあるはずなのだ。

兵を飢えさせぬための食料を作る者が憎かった。人を殺すための道具を作る者が憎かった。乗っている馬を育てた者が、殺した者たちの金で何不自由なく生活している家族が憎かった。虐殺を内乱という言葉に挿げ替えた者たちが、何ら疑問を抱かずにそれを受け入れた者たちが。

「俺は、なんとしてもエスニールの汚名を雪ぎたい。今は無理でもいずれは必ず。その気持ちは変わりません。その一念で、傭兵として身を立てることを志したんです。ただ、わからないんです。本当にそれが正しいことなのかどうか」

「シユイ……」

シユイを悩ませていたのは、やることの困難さ以上に、それをやり遂げた後の影響だった。出来るか否かは別として、セーニアの上層部が総濼いされれば国は乱れ、諸外国の脅威に晒され、そして力無き者は悲惨な末路を辿ることになる。

それでも構わないと言う自分がいた。強国に牙を剥く以上、相手の犠牲など慮る余裕などない。その必要もない。やられたことをそのままやり返すだけの話だ。強い者が弱い者を潰すならまだしも、弱い者が牙を剥いて何が悪いのか。ただひたすらに、万感の憎しみを込めて相手の喉元に突き立ててやればいいのだと。

一方で、事情を知らぬ者に果たして罪があるかを己に問い続ける自分がいた。復讐に大勢の者を巻き込んで何が残るのか。より多くの憎しみが残るだけだ。世界を不幸で満たすことに何の意味があるのか。保護者だったミレイが語った三つの生。それに真つ向から反逆する道を選ぶのか。

シユイは細く長く息を吐き出した。わだかまった感情を少しでも外へ吐き出そうとするように。

「ニルフアナさんは、俺の話を通じてくれました。そしたら彼女、俺に言ったんです。違う人生を歩んでみる気はないかって」

「それは、如何にも彼女らしいですね」

「ずっと話に聞き入っていたリズは束の間アミナと顔を見合わせ、ようやく頬を緩めた。」

「ランカーの彼女は資金力もありましたし、ほとぼりが冷めるまで一人を保護するくらいは簡単なこと。そう諭された俺は、そのことを前向きに考えました。考えようと思いました。山奥でひっそりと畑を耕すのか、ほとぼりが冷めたのを見計らって以前の様に商隊に加わるのもいい。でも」

「無理だった、か」

シユイはアミナに力無くうなずいた。

「どうしても、忘れられなかった。穏やかな生活をしていると余計に思い出してしまう。逃亡生活を続けていたときよりもはつきりとあの日の光景が浮かんでくるんです」

今でも鮮明に覚えている。セーニア兵に殺された皆の、無念だけを浮き彫りにしたような顔が。セーニア兵を殺した自分の、どす黒い血に汚れた手が。

「どうすれば気が晴れるのか。どうすれば先に進めるのか。いの一歩にやりたい事を考えてみたくです。答はあっさりと出ました。あの悲劇を仕組んだ者たちを全て見つけ出し」

シユイは二の句を継がなかったが、その場にいる二人には容易に想像がついた。彼が傭兵という道を選んだことから察せられた。仕事はきついが、短時間で力をつけ、裏情報を探り出すにはこの上ない職業だ。陰謀を企てた者たちが寿命や病気で死ぬなど許せない。そうと言わんばかりの壮絶な気迫が感じられた。

アミナは、ニルフアナもこの決意を聞いて自分と同様の印象を持ったのだとわかった。以前二人で話したとき、彼女はこう言ったの



だ。シユイが無関係な者たちに害を及ぼすのであれば始末をつける、と。

シルフィールのランカーという立場である以上、ニルファナがシユイの復讐に直截的に力を貸すことはできない。知名度の高い彼女が動けばギルドの傭兵たちをも巻き込むことになるからだ。

けれどもセーニアに非があると知った以上、シユイの復讐を止める気も起きなかったのだらう。双方に譲歩した結果が、シユイをシルフィールに誘うという選択肢を提示させたのだ。

「奇しくも、俺もイヴァンさんと似たようなことを考えていたんです。俺には彼の行動を否定できないし、する資格もない。こんな場違いなところでお姫様と、アミナ様と話してられるような人間じゃあないんです。滾る憎しみに身を任せ、コンラッドのみならず数えきれないくらい人を殺めた。彼らの家族をどん底に叩き落とし、人生を狂わせてしまったんですから」

シユイは許されざる罪の告白を終え、自嘲気味に笑った。アミナはそれを見て、悲しそうに目を細めた。死に際に至った老年の男が、自分の人生を省みて浮かべるような寂しい笑みだった。

「それは、違う」

小さいが、鈴の音のようにはつきりした声だった。伝えようという意志が明確に感じられた。シユイの顔から笑みが消えた。

「決定的に、違う。仮にイヴァン・カストラがセーニアに対する復讐の布石としてフォルストロームを襲ったのだとしても、全く無関係な者に害を成したのは変えられぬ事実だ。しかしそなたは、フォルストロームを必死に守ろうとした。後先を考えず、私の元に駆けつけようとしてくれた。これほど嬉しかったことはない」

アミナは自分の胸元をそっと手で押さえた。今も尚秘められた熱を、ワンピース越しに確かめるかのよう。

「そうですね、エルクンド様。きっとハーベル様も、あなたの本質的な優しさを見抜いたからこそシルフィールに誘ったのではありませんか？ と、私はそう思いますけれど」

リズも腰に手を当て、まるでシユイにそうしろと促すかのように胸を張った。

「……アミナ様、……リズさん」

アミナは高まった熱を入れ替えるかのように大きく息を吐き出した。

「たとえそなたが罪人であろうとも、私の命を救ってくれた事実に変わりはない。そして、そなたが戦ったことで救われた命が大勢あったことも信じてやまぬ。私は、そなたの選択を支持する。正道を歩もうと畜生道に落ちようと一向に構わぬ。この先何があるうと私は、私だけは、そなたの歩む道を肯定し続けよう」

唐突にシユイは瞬きが収まったのを感じた。顔の筋肉がどうにも上手く動かなかった。

「だからと言って、滅祈歌の使用を許したわけではないがな」

アミナはそう結び、シユイに悪戯っぽく微笑みかけた。

自分を見つめているアミナの一言一言が、自分の味方であろうとする彼女の強い意志が、心の深くへと沁みこんでいくのがわかった。荒れ果て、渴ききつた土壌に潤いを与え、埋もれた感情がゆっくりと芽吹いていった。

シユイは、握られた手の甲に熱いものが滴つたのに気付き、半ば無意識に左手の窓の方へ顔を逸らした。頬を伝うのは、悲しみの涙ではなかった。滲んだ視界には部屋に差し込む陽光が、いつも以上に眩しく映っていた。

## 第二十章 く追放劇(1)く(改)

フォルストロームの王都が魔物に襲撃されてから二週間が経過していた。朝、キャノエのシルフィールギルド支部には早くから二人の軍人の姿があった。

受付員は、物々しい雰囲気を纏う獣族の男たちに戸惑いつつも応対したが、話を聞いている内に己の手に余る案件だと判断し、早々に支部長に取り次いだ。

やってきた軍人たちを応接間に招き入れるとキャノエの支部長エヴラール・タレイレンは背中まである銀髪を撫でつけながら、三人掛けの椅子に座るよう奨めた。二人が座ったのを見計らうようにして、四角いテーブルを挟んだ向かい側の椅子に腰掛けた。

「朝っぱらから済まないな。こちらも手間を取らせたくはないんだが事情が事情でな」

右側にいる背の低い軍人が言った。

「取り次いだ支部員からおよその話は聞いている。が、二、三腑に落ちぬ点があるな。それを確認してからでないと判断は下せない」  
「わかっている。こっちはアンタの判断を仰ぐことになるのはわかっていたんだ。ところで、それがあってことは吸ってもいいのかな？」

テーブルの隅に置かれた銀の灰皿を指し示した軍人に、エヴラールは表情を変えずにうなずいた。

「 というわけで、結果的に村人は手を出されずに済んだらしいが、中には殺されかけたと訴えている者もいるようだ」

一旦話が途切れると、軍人は火の付いた煙草を指で挟んだままエヴラールを見た。エヴラールは束の間視線を合わせて聴いていると

いう合図だけ送り、目を伏せた。少しの間に、テーブルに置かれている灰皿は拉げた吸い殻で一杯になっていた。室内の空気が灰色に淀み、独特の臭いが充満している。

軍人たちの話を取り纏めるとこのような内容だった。つい三日ほど前、フォルストロームとセーニアの国境に程近い、セーニア領の小村が野盗の一団に襲われるという事件があった。その野盗たちが相当長い期間に亘って近隣の村々を荒らし回っていたこともあり、セーニア南部にあるいくつかの町では遺族たちが報奨金を集めて討伐を国に要請し、公的な共通クエストとして貼り出されていた。その共通クエストを受諾したという者の名前を軍人たちから聞かされ、無表情だったエヴラールの片眉が微かに動いた。

深夜、村に押し入った野盗たちは見境なしに建物に火を放ち、逃げ遅れた村人たちを容赦なく殺害した。程度の差はあれど、それくらいならこのご時世、どこの国にでも転がっている話だ。

ところが、事後処理に訪れたセーニア騎士団の話によると、驚いたことに死体の大半は村人のもではなく、野盗のものだった。そして生き残った村人たちは口々に、野盗たちがたつた一人の黒ずくめの男によつて始末されたと証言した。その後の調査で、男の特徴が別の町で共通クエストを受けていた男と一致したという。

宗教国家を自認するセーニアは、戦意を喪失した者に対しては法による裁きを重んじるところがある。しかしその男は命乞いをした者たちをも次々と殺して回つたらしい。騎士団の見回りの間隙を縫つての犯行でもあつたため、彼らとしてはせめて見せしめとなる者だけでも捕えたかつたはずなのだが、皆殺しにされてはそれも叶わず、二重に面子を潰された格好だ。

そこまで聞いて、エヴラールは彼らが提言しようとしていることをほぼ予想出来ていたのだが、敢えて自分からは何も言わず、思慮深い顔を作るだけに留めた。軍人たちはそれを見てどう勘違いした

のか、少し卑屈っぽい笑みを浮かべた。

「そんな顔しないでくれよ。軍人の中には傭兵なんて、って卑下するやつもいるが、俺ああんたらとはこれから先も仲良くやっていきたいと思ってる。たとえ獣姫様がシルフィールに入っていないくたつてそうだ。一介の戦士として尊敬できるやつはシルフィールに何人もいるし、アンタもその一人だ。だが、わかるだろう？ このままじゃどうにも収まりが付かない。ただでさえ、獣姫様が泥まみれにされたって噂は国中に広まっていることだしな」

支部を預かる立場である以上、町の噂などは嫌でも耳に入ってくる。キャノエの支部を預かるエヴラールもその話は聞き及んでいたし、軍人も大雑把にしか話さなかったことから既に知っていると思していたのだろう。

「しかし、当のアミナ姫からは何の苦情もきていないが？」

「それは、あれだ。彼女はシルフィールの準ランカーという立場でもあるし、一応はギルドの評判が落ちないよう気を遣っているんだろっね」

そう言いつつ、軍人は口にした言葉が自分でもやや説得力に欠けると思ったのだろう。おさまりが悪そうに吸っていた煙草を灰皿に押し付けた。アミナ・フォルストロームは若いながらも礼節を弁えており、どちらかと言えばはつきり物を言うタイプだと周囲からも認知されているはずだ。実際にそのようなことをしようものなら倍返しに遭う可能性の方がずっと高いし、目の前にいる二人とてその気質は重々承知していると思われた。

だが、支部を預かる責任者としては、取るに足らない話であろうと付き合わねばならぬこともある。エヴラールは如何にも聞いているという風に、話の合間合間で「ほう」とか「ふむ」などという相槌を繰り返した。

「良く考えてみてくれ。いくら相手が野盗だからと言っても、命乞

いをした者ですら皆殺しにするようなやつだぞ。それほどの危険人物だったら泥を引つ掛けるくらい平気でやりかねないじゃないか」  
熱弁する軍人を前にして、心持ちは一層冷えていった。エヴラー本人としては、殺された野盗たちに一切同情の念は湧かなかつた。罪なき者を殺めし罪が命乞い如きで帳消しにされては被害者も浮かばれまい。結局の所、目の前の二人はいちやもんを付ける口実が欲しいだけなのだ。

「……証拠はあるのか？」

ずっと黙っていた左側の軍人が、その言葉を待っていましたとばかりに不敵な笑みを浮かべた。

「凶器が残されていた。黒い大鎌だそうだが村の路傍に放置されていたらしい。血糊がこびり付いていることから、実際使われていた物であることは間違いないさそうだ」

それを聞いて、しかしエヴラーはますます解せないという面持ちになった。敵味方が入り乱れた乱戦や撤退戦などであつたなら、武器を失うこともあるかも知れない。もしくは、使われたのが手槍や手斧などの投擲に適する武器なら納得もいく。

けれども、敵を皆殺しにした後で回収する余裕があるのにも拘わらず、自分の得物を置いていくとは到底思えなかつた。武器だつて無料ただというわけではないのだ。

「……何だ？　まさか俺たちが嘘をついているって言うんじゃないだろうな」

エヴラーの訝るような顔を見て、軍人たちがいきり立った。

村人という目撃者が多数いる以上、そういつた殺戮劇があつたことは事実なのだろう。だが、果たしてそれは本当に本人だったのか。そのような意図の言葉をエヴラーが淡々と口にするのと、右側の軍人はヤニ臭い溜息を一つ吐き出し、声を荒げて反論した。

「何を言っただやがる。どこの世界に他人の名を騙ってそんな大仕事をやる馬鹿がいるんだ。まさかあんた、同じギルドの傭兵だからって庇い立てするつもりじゃあないだろうな」

「そんなつもりは毛筋ほどもない」

エヴラールのきつぱりとした口調に、軍人たちが気圧された。左側の軍人がいち早く気を取り直し、姿勢を改めて尚も続けた。

「もし仮に、あんたの言うように野盗を皆殺しにした奴がエルクンドって傭兵の名を騙った偽者だとしても、だ。エルクンドという傭兵がそれだけの恨みを買うような人物であることには変わりないな」

「まあ、その理論は否定しないが。それで、どうしろと？」

「納得できるような処断を求めたい。火のない所に煙は立たないって言うからな。先に言うておくが、そちらが動かないっていうならこちらにも考えがある」

エヴラールは微かに眉をしかめた。

「脅しのつもりか？ 法的な罪を犯したわけでもないのに処断だと？」

軍人の要望は言い掛かりといって差し支えないものだった。そもそも傭兵自体が倫理と一つ境界を隔てたところにある職業だ。討伐依頼を果たしただけで処断するわけにいかないことくらいは軍人たちにだつてわかっているはずだった。その上で、疑わしきは罰せよ、と言っている。これは明らかに相手が踏み込み過ぎだ。

エヴラールの眼光に射竦められ、左側の軍人が沈黙した。そうかと思うと今度は右側の軍人が喋り出した。

「いいか、度重なる魔物の襲撃で民たちはいつまた襲われるんじゃないかって不安がっているんだ。しかも先日王都を襲った連中の何人かは、揃いも揃ってやつと同じような黒ずくめの格好だつたって話じゃないか。やつが連中と仲間じゃないって保証はどこにもない」

そうは言うものの、黒衣を好む者が魔法使いに類する者に根強くいるのは事実だ。同じ服装をしているというだけでは根拠が薄過ぎ

る。確かに弱過ぎる根拠と言えども積み重なることによつて真実味を帯びてくることはある。が、シユイはキャノエで襲撃者の一味と思しき者たちと戦っているのだ。

これ以上は不毛だな。

エヴラールは思案を巡らした後にゆつくりと立ち上がり、予め用意しておいた台詞の一つを重々しく口にした。

「この国の民のことを思えば仕方あるまい。一応調査はさせてもらう」

譲歩の言葉を引き出した軍人たちが意気揚々と退室すると、エヴラールは足早に部屋の窓に向かい、ガラス戸を掴んで回転させた。縦に仕切られた窓から直ぐに新鮮な空気が流入してきたが、数秒後には淀んだ空気が逆流してきた。そこで一息付くと、再び座っていた元の椅子へ腰掛け、灰皿の方へ手をかざした。ぼつという音と共に、山盛りになっていた吸い殻が煙を出す間もなく消し炭となった。段々と煙が薄まってきた室内で、エヴラールは腕を組みながら肘の辺りを指でとんとんと叩いていた。

先ほどの軍人たちの態度は多分に虫が好かないものだった。愛国心に溢れる、といえば聞こえはいいが、頭が固くてどうにも柔軟性に乏しい。こんな些細なことでもいちいち騒がれてはアミナとてありがた迷惑なだけだということがわからないのだろうか。自然と鼻息が荒くなった。

会ったのは一度きりだったが、エヴラールはシユイのことをよく覚えていた。ギルド支部内でシユイがエグセイユと一悶着起こしている所に遭遇したときには不快感が先に立った。シユイに対する評価があのまま変わっていなかったら、庇うことすら考えずに軍人の要求に従っていた可能性もあっただろう。

しかしながら、先の大毒蜂の騒動ではアミナに次ぐと言っても良



い功労者であるし、彼の仕事振りに対し、依頼人の満足度が高いのも事実だ。その一人、ケイ・モーガンからはご丁寧に礼状まで送られてきている。単に仕事をこなしたというだけでは、この手の物が届くことはまずない。

その堅実な仕事振りから、エヴラールはシユイに対する評価を改めていた。着々と成果を上げている者をそう易々と切り捨てる気にはなれなかったのだ。

その上で、エヴラールは打開策を黙考する。現実問題として、アミナがシルフィールに所属する傭兵に泥を掛けられたという噂が広まってから支部に舞い込む依頼の数が一割弱減ってきている。今後更に依頼の受付数が減少していくとなれば無視することはできない。受けれる依頼が減ってしまえば、傭兵たちがシユイに不振を抱くことも避けられないだろう。

ともあれ、本人の所在と意志の確認が肝要か。そう思い立ったエヴラールはローブのサイドポケットから黄色い魔石を二つ取り出し、それぞれに念を込めると宙へと解き放った。

## 第二十章 〵(2)〵(改)

「タレイレン様からの報告は以上です。他に何かございますか？」  
黒髪を肩の上で切り揃えた受付員の女は臨時報告を終えると持っていた書類から目を離した。

ランベルトは重厚な書斎机に両手で頼杖を突き、目を瞑ったまま緩慢に呼吸していた。寝ているように見えたのか、受付員が揺すつてみようかと手を伸ばした。が、直ぐにその手が引つ込んだ。薄らと片目を開けたランベルトに彼女は慌てて失礼しました、と頭を下げた。

ランベルトは特に受付員を咎めるようなこともせず、顔の位置はそのままに視線だけを横にずらした。そこには彼女がたつた今持ってきたばかりの投書箱があった。上にある投函口からは折り畳まれた紙片がはみ出している。

苦情がこれほど押し寄せるとは少し甘く見ていたか。表情こそ変えなかったが内心では舌打ちしたい気分だった。甘く見ていたのはアミナに対する軍人たちの信望具合であり、フォルストロームの民たちの行動力だった。行き過ぎた、と付け加えた方が適切だろうか。

先日、ランベルトは王城に足を運んでアミナと面会し、紆余曲折は別として、シュイが彼女の命を救ったのは間違いないことを再確認した。滅祈歌という魔法言語によって意志の制御が上手くいかず、あのようなことになったとも聞かされた。本来ならそれで一件落着となるはずなのだが、一つ厄介な問題が残っていた。既に広まってしまった不名誉な噂をどうするか、ということだ。

アミナがシュイによって救われたことを公にすれば、噂が下火にはなるかも知れない。が、その代わりに軍人たちが更に不満を抱く懸念がある。本来ならば彼らが身を挺してでも彼女を守らねばなら

ないはずだったところを、逆にアミナが彼らを守ろうとして無茶な行動に出てしまった。それが原因で危機に陥り、あまつさえシユイに助けられていたとなれば、軍人たちの面目が丸潰れになる。

最終的に被害は最小限に抑えられたが、後々の影響を鑑みてはアミナの取った行動が少々軽はずみであったと思わざるを得ない。小さな不確定要素も積み重なるところまで深刻な事態を招いてしまう。懸念は他にもあった。魔物襲来による民たちの心境の変化だ。フォルストロームが建国されてからおよそ三百年が経つが、王都がこれほど大規模な敵の襲来に晒されたのは過去に遡っても前例がない町から一步出れば自然と警戒心が増すものの、天災は別としてぬるま湯に浸かっていた民たちに、町の中なら安心だ、という意識が定着していたのも無理からぬことだ。

ところが、今回の件でその安全神話が覆された。正体不明の敵の襲撃からはまだ日も浅く、未だ取り払われぬ不安によって温厚であるはずの住民の心が知らず知らずのうちにささくれ立っている可能性は、決して低くない。上手く騒動を沈静化しないとやり場のない怒りの矛先がシルフィールへ向けられることも考えられる。

詰まるところ、その話を公にしたところで禍根は残る。元々軍人たちが派生したと思われる噂であるし、アミナへの信望にこそさほどの影響はなさそうだが、シユイやシルフィールに対する印象は決して良いものにはならないだろう。むしろ、今後の風当たりが強くなりかねない。何よりも、この不穏な時期にフォルストローム軍との連携が覚束なくなるのは非常にまずい。

ランベルトはやっと頼杖を崩し、上半身を起こした。

「それで、セーニア教国が近々出兵するという話は真なのだな？」

「は、はい。騎士団にいる身内からの情報ですので間違いありません。相手はルクスプテロン連邦、相当大規模な遠征になるのでは、とのことでした」

セーニア教国はこの百年ほどで周辺の小国を幾つも呑み込んできたが、ここ最近ではセーニア騎士の精神的支柱であるコンラッド・デューアーダが斃れたこともあり、表立った動きを見せていない。それが、フォルストローム王都の襲撃直後に何年来の遠征となれば、民たちも偶々時機が重なっただけとは考えまい。

「あるいは、フォルストロームが先の襲来の余波で未だに動けないと踏んで行動を起こしたのかも知れません。あちらも我々の被害状況は逐一把握しているでしょうし」

受付員の推測に、ランベルトは小さくうなずいた。現状、度重なる魔物襲来に対応するため、セーニアとの国境付近に配置していた兵たちは近隣の町村の警戒に中<sup>あ</sup>てている。これはセーニアの意図を確かめるために宰相のレギンが命じたことなのだが、ここ一週間ほどはセーニア側の国境警備兵たちも姿を見せなくなっているようだ。これについてランベルトは一つの仮説を立てていた。セーニアとフォルストロームは長きに亘り同盟を結んでいる間柄であるが、今においてはそれほど親交が深いわけでもない。ともすると、セーニアは遠征の際にフォルストロームから背後を突かれることを危惧していたのではないか。そして、魔物の対応に手一杯で国境警備兵にも人数を割けぬほどに余裕がないことを知り、満を持して今回の遠征に至ったのではないかと。仮にそれが事実なら、レギンの策はセーニア側を早く動かしたという点において一定の効果があった、ということになる。

ただ、セーニアに害意を抱いていなかったらどうフォルストローム上層部にとってはあまり愉快な話ではない。フォルストロームが兵を引き上げるまで出兵しなかったということは、先方が自分たちの想定以上に猜疑心を抱いていたという何よりの証。同盟を結んでいる間柄にもかかわらず、向こうがフォルストロームをそれほど信用していないことが今回の件で露見したわけだ。

目下の所襲撃者の目的は不透明なままであり、セーニアが一連の

襲撃を裏で糸を引いていると断定できるような証拠も上がっていない。けれども、襲撃からまだ日も経たない内にあたかも連動したかのような動きがあれば、彼の国に疑いを持つ者も少なからず出てくる。今回はいち早くシルフィールが情報を拾ったが、数日もしないうちに軍部でも情報が共有されているはずだ。

王都襲来以降魔物の出現は也を潜めているが、再度の襲来がないと断言出来る状況でもない。セーニアがフォルストロームに攻めてきた場合は別として、動いたところで直ぐにどこまでできるというわけではない。が、現段階で両国間の仲が悪くなると、後々の戦乱の火種にならないとも限らない。

そしてそれはシルフィールを初めとする傭兵ギルドとて決して無関係ではない。ルクスプテロン連邦とセーニア教国。四大国同士の大規模な戦いが始まれば、中立を貫くかどちらかに肩入れするかで揉めることになるだろう。所属する傭兵の半数近くはこの二カ国の出身者だ。

場合によっては支部の閉鎖も検討する必要があるだろうし、最悪、ギルドが割れることすら想定する必要がある。ランベルトの顔から憂いは晴れなかった。

「あなたにだけは頼みたくないの、今回は見送らせていただきます」

そう言い放った若い獣族の女はシユイをきつと睨みつけてから足早に去っていった。二件目の依頼をもあっさりとは破棄されたシユイは、フード越しに頭を掻きながら重い溜息を零した。

滅祈歌と戦いによる傷が癒えたのはつい三日前のこと。外傷こそ  
少なかったものの痛んだ筋肉や体力の回復には思った以上に時間が  
掛かった。今も体が本調子とは言い難い。

アミナとリズに見送られて王城を後にしたシュイは、以前泊まっ  
ていた宿に荷物を回収しにいく途中で、少なからず自分の噂話を耳  
にすることになった。アミナを「雌犬」などと口汚く罵倒し、あま  
つさえ泥の川に投げ落とした、という信じがたい尾ひれを聞いて、  
暗澹あんたんたる気持ちにならないわけがない。

そもそもアミナを泥まみれにした、という疑惑に関してはシュイ  
に心当たりは全くなかった。自我が薄れかけていたこともあってテ  
クラとゾランを追う時の蹴り足のことなど及びもつかなかったから  
だ。けれども、心当たりがないからこそ、噂話が実は本当のことで  
はないか、と自分で自分を疑っていた。自我が薄まってしまった折  
に、半ば無意識的にそういった暴挙をやってしまったのでは、と。  
それは半分正しくて、半分間違っていた。

一方で、騒がれている当のアミナは祖父のキア王から城を出ぬ  
よう命じられているとのことだった。孫娘にして唯一の肉親である  
彼女があれほどの重傷を負って帰還するなどということはただの一  
度も前例がなく、王も多分に堪えたのだろう、というのがリズの話  
である。

シュイはアミナの背負っている物が、おそらくは自分の荷物以上  
に重いのだと理解していた。あの小さな体で国の期待を一身に背負  
い、フォルストロームの姫として、シルフィールの準ランカーとし  
て責務を果たしている。それを考えると、復讐に身を焦がす自分が  
どうにも浅ましく思えた。

もやもやとした気分を一新すべく、南区のギルド支部に来たまで  
はよかった。けれども、掲示板の依頼書を剥がして依頼人に会う際  
名を名乗ると即座に拒否された。どうやら自分は相当この国に嫌わ  
れてしまったようだ。

とはいえ、自分で撒いた種が発端だ。結局はキャノエのときの様に悪い評判を払拭するしかない。

そう自分に言い聞かせたシュイが、もう一度掲示板に歩み寄りうとしたときだった。

「あまり芳しくないようだな」

横から声が掛けられ、シュイがロビーの方を振り向いた。

「あ、タルツフィさん」

軽く会釈したシュイに対し、ランベルトは片手を上げて応えた。

「依頼を探しているということは、怪我はもう治ったようだな」

「お蔭様で。その節はありがとう、あなたが俺を王城まで運んでくれたんだって？」

「礼など構わん。まあ、傭兵である以上色々な噂は付き纏うものだ。有名になればなるほど、な」

「………すまない。本当なら良い噂を流さなくてはならないはずなのに」

肩を落とすシュイにランベルトは周りをきよきよと見回しながら言った。

「キャノエでの事件のあとは一割強増えたのだが、今回は逆だな。

まあ致し方あるまい。ほとぼりが冷めれば徐々に客も戻ってこよう。私にもそういった経験の二つや三つ、ないではないしな」

そう付け足して、ランベルトはにやりと笑った。それでシュイは、少し心が軽くなった。

「ああ……。あのさ、迷惑ついでに一つ訊きたいことがあるんだけどいいかな？」

ランベルトは軽くうなずいた。

「その、俺がアミノ様を罵倒したり泥の川に突き落とした、っていうのは、本当の話なのか？」

ランベルトは顎を撫でながら視線を宙に向ける。

「解釈次第では暴言と言えなくもなかった。が、内容については罵

倒と程遠いものだ。むしろ口答えという語句が正しかろう。それから、……なるほど。確かに後ろ向きでは見えなかったであろうな」「後ろ向き?」

「おぬしがアミナ様を私に預け、賊二人を追って走り出したとき、蹴り足で泥を飛び散らせたのだ」

「じゃあ、やっぱり本当の」

「その点は大いに感謝するがいい。私が反射的に彼女を背で庇っていないければ、間違いなく泥塗れになっていただろう。もっとも隣にいる兵たちは見事に被害を蒙ったようだが。その後は兵たちと別れてぬしらを追ったのだが、今にして思えばアミナ様に泥が散っていないかったかどうか、あの暗闇では見分け難かったかも知れん。噂を流した兵たちも、自分らの有様を見て勘違いしてしまったのかも知れん」

「そうか、そういうことだったのか……」

「まあそういうわけで、豪勢な食事の約束は取り消しだな」

シユイは一瞬キョトンとし、数秒してようやく思い出した。

「あ、ああ。あの話か。覚えていたんだね」

ばつが悪そうに笑うシユイに、ランベルトはやや声を顰めた。

「シユイ。こうなればアミナ姫に泥のことだけでも事実無根であると弁明させては」

「駄目だよ、彼女にはこんなことで嘘を吐かせたくない。泥をぶちまけたのが本当のことだと知った今なら尚更だ。ただでさえ多忙な方なのにこれ以上手を煩わせることなんてできない。これ以上彼女の荷を増やすわけにはいかないよ」

「そなたの気持ちはわからぬでもない。しかしな、これ以上騒ぎが大きくなれば返って彼女に大きな迷惑をかけることになるぞ」

「今回の件は全て俺の至らなさが招いたことだ。だから」

「随分と物分かりがいいじゃねえか」

あさつての方から聞こえた声に二人が振り返ると、軍人の服を着



た者らが二人の方に近づいてくるのが見えた。

「何だぬしら。ぞろぞろと」

眉をひそめるタルツフィに先頭にの軍人が手をかざした。

「悪いがタルツフィ殿は黙っていてもらおう。その格好、貴様がエルクンドとかいう傭兵だな。よくまあ、のほほんこの国にいられたものだな」

居並ぶ六人の軍人たちは顎をしゃくるようにしてシユイをあからさまに見下した。

「……アミナ様の件、か」

「それもあるが、それだけじゃないだろ？ 貴様にはセーニア領の小村での過剰防衛の疑いがかかっている。この不穏な時期にごたごたを起こしてくれやがって」

「……何の話だ？ 過剰防衛って」

首を傾げるシユイの隣でランベルトが目を見開いた。

「はっ、すっ呆ける気か。なら訊くが、貴様は鎌を得物としているらしいな」

「それが、どうかしたのか」

何でそんなことを訊ねてくるのかわからず、シユイは首を捻る。

「それはどこにある？」

「魔物の襲撃時になくした。うる覚えだが、多分どこかの工場みたいなところに置き忘れたんだと思う」

軍人たちが顔を見合わせ、せせら笑った。

「やれやれ、随分とわかりやすい嘘をつくもの いや待て、工場だと？」

「まさか、あそこを廃墟にしたのも貴様なのか！」

途端、男たちが色めき立ったのを見て、シユイは尚も首を傾げた。少して、おぼろげながら記憶に引っ掛かるものがあった。

「廃墟？ …… ああ、もしかしてあの建物か？ そうなっていたと

したらそれは」

「待て。ぬしはその件にも心当たりがあるのか？」

出掛けた言葉を遮ったタルツフィに、そういえば説明する暇が全くなかったな、と頭を掻く。

「飛竜との戦闘が終わって一旦別れた後、スキーラって傭兵に絡まれたんだ。以前あいつとはちょっと揉めていたんだけど、いきなり不意打ちを仕掛けられて骨まで折られたもんだから、戦わざるを得なかつたんだよ」

シュイの説明を聞き、ランベルトは唸りながら額を押さえている。「何故そのことをもつと早く言わなかつたのだ！」

「こつちだつて色々あり過ぎてそんなこと忘れていたし、城にいたから言う機会だつてなかつたんだよ」

「たとえそうであつたとしても、魔石による連絡くらいはできたはずだ！ぬしとてシルフィールの規約まで忘れていたわけではあるまい！」

シュイが城を出たのは一昨日のことだつたが、長い間臥せつていたせいか体の動きが固く、ギルドに来るのは差し控えていた。王城にいるときには、少なくとも意識を取り戻した後には、ランベルトと一度も会わなかつたし、それ以外ではイヴァンらの襲撃日にしか顔を合わせていない。

確かに、魔石での連絡くらいは出来たはずだつた。しかしながらイヴァン・カストラとの邂逅や彼の狙い。アミナとリズが掛けてくれた暖かな言葉。滅祈歌に対する恐怖。何よりこれからの身の振り方を考えることで頭が一杯だつた。それらのことに比べればエグセイユや彼との戦いの場となつた建物の記憶など些事に過ぎず、相当奥深くに仕舞われていたとしても仕方がなかつた。

いつの間にか、シュイたちの周りには人だかりが出来ていた。そんな中、軍人たちが険しい顔をしたままシュイに詰め寄ってきた。

「スキーラという名前には聞き覚えがあるぞ。確かその者もシルフ

「イルの傭兵ではなかったか！ 貴様ら一体どういうつもりだ！」  
「あんなやつと一緒にしないでくれ。本人に聞いてみればいいだろ」

しつしと手を振りながらシュイがぶつきらぼうに返した。幾らでも言い分はあつたはずだが、意識的にアミナの名を出すことを避けていたためにどうしても付け込まれる隙があつた。一度見えた綻びからはどんどん糸が解けてきて収拾がつかない。ランベルトにしても、工場を廃墟にしたのが二人だと聞かされ、こちらがそれを認めるような発言をしたとすれば庇う手立てがなかっただろう。

「何と軽率な……。この上は一刻も早くスキーラを呼び出し」  
「その必要はない！ そもそも今問題にしているのはエルクンドのことだ！ 時間稼ぎをされて有耶無耶にされては敵わんっ！」

その言葉にランベルトが何か言いかけたが、それより先に別の軍人が喋り出した。

「大体、俺は傭兵なんぞが信用出来るか当初から半信半疑だったんだ。いつか必ずこうやって馬脚を現すときが来るんじゃないかと思つていたぜ。シュイ・エルクンド、貴様が今セーニア南部一帯でどう呼ばれているか教えてやるうか？ 死神だ！ ランカーのハーベルが推薦したつて聞いているが、こんな馬鹿を推薦するとはあの女、強くとも目はとんだ節穴だな！」

シュイの顔がフードの奥で醜く歪んだ。自分が言われる分にはまだ我慢できていたが、尊敬しているニルファナまでも貶されては、思考に炎が走るのを止めようがなかった。

「だから、それは身に覚えがないって言っているだろうが！ 戦つてばかりで共通言語も通じないほど脳みそが干からびているのか！ 大の大人共が雁首揃えて憶測並び立てただけで鬼の首を取つたような顔しやがつて。大体、アンタらがもうちよいしっかりしていやあアミナ様だつて」

「シュイ！」

ランベルトが止めに入ったが、遅かった。その言葉が軍人たちの気に障ったのは間違いがなく、既に何人かの顔は、触っただけで火傷しそうなほど真っ赤になっていた。

「話は終わりだな。シルフィールにここから出ていってもらおう。王城に嘆願書を出さねばなるまい。喉元にカミソリを括りつけているも同じ、危なっかしくて敵わん。いずれは王都だけではなく、この国からも出ていくことになるかも知れんが」

何だと、というシユイを遮り、ランベルトが前に進み出た。

「しばし待たれよ。こちらに落ち度があったのは認めるが、そなたらの端から決めつけるような態度も問題ではないか」

「支部長殿までこちらに非があると云いたいのか？」　　「う」

ランベルトの全身から鬨気じみた威圧感が滲み出し、詰め寄りかけた男が逆に半歩引いた。

「我々は此度の襲撃騒動に関して常々そちらの要請に応え、再三にわたって民たちの安全確保に力を注いできた。言うに及ばず、ここ数年の間、我々は良好な関係を築こうと努力してきたはずだ。ぬしらはそれすらも否定するというか」

「そ、そこまでは言っていない」

「言っているだろう。そなたらが非難しているシユイとてキャノエでは百を越える大毒蜂を相手に命の危険を顧みずに戦ったのだ。他ならぬフォルストロームの民のために、だ。それを柵に上げて自らの鬱憤を晴らすだけのために責め苦を並び立てるのが、フォルストローム軍の流儀と申すか」

「……ぐ」

黙り込んだ軍人を押しのけて、後ろから軍人の女が進み出た。

「だからといって、そいつをそのまま見逃すわけにはいかん！ 我々のことならまだ我慢も出来るが、アミナ様の件に関しては譲

れぬ！」

そつだそつだ、と周りからも囁し立てるような声上がる。

「無論、処罰はする」

シユイはその言葉に、信じられないといった面持ちでランベルトの頭を見上げる。ランベルトは肩越しにシユイを見下ろした。

「シユイ、私はぬしを個人的には嫌っていない。が、私がここにいる以上は、個人である前にフォルストローム支部長としての責務が優先される。そして、ぬしはシルフィールに少なからず害を成そうとした。その意味がわかるな。先程の言葉は失言に過ぎる」

「……だ、だけど」

「支部長としてぬしに処罰を申しつける。ぬしはこれより」

「待て。この件、悪いけど私に預らせてもらえないか」  
聞き覚えのある声にシユイが周りに先んじて振り返った。

「二、ニルファナ……さん？」

呆然と呟いたシユイに、黒と金色のドレスローブを正装したニルファナは一瞬だけ褐色の目を向けたが、興味なさそうに視線を外した。そのままランベルトの方を見て軽く目礼をする。

「ハーベル嬢！ ご無沙汰しておりますな。何故こちらに」

ランベルトも同じように礼を返した。突然の珍客に軍人たちからもどよめき上がる。その美しさと、美しさに隠された死の棘を持つ赤髪の麗人は、一瞬にして場の空気を飲み干した。

「なに、タレイレン殿が気を利かして私に連絡を寄越してくれたのですね。推薦した傭兵が粗相をやらかしたっていうから、後始末を付けにきたまでだ」

後始末、という言葉にシユイが竦み上がる。そして、二言目でや

っと気づいた。口調がいつものものではないのだ。自分のことをお姉さんと呼ばず、今までシユイの前で披露していた、間延びした話し方は見る影もない。

「二、ニルファナさん。信じて、俺は」

「言い訳は不要。シユイ・エルクンド。表に、出る」

愛らしい桃色の唇が紡ぐ言葉は、しかして強制力を伴った呪詛だった。普段優しげだと思っていた目は、極限まで引き絞られた強弓にも似た威容を誇っていた。

シユイは、今までの経緯からニルファナがどういう人物か、ある程度理解していた、気になっていた。時々乱暴だけれど気立てが良くて、思いやりのある女性。そう信じて疑わなかった。けれども、今日の前に映っているのは、凶悪な犯罪者が畏怖するに値する一人の傭兵だ。歴戦のつわものの一言一句すら結ばせない。ニルファナの放つ冷徹にして超絶的な魔力に中てられ、四大国最強と言われたフォルストローム軍の精鋭が、まるで置物になってしまったかのよう委縮してしまっている。

それは恐怖そのものだった。気迫だけで人の呼吸を、心臓を止めかねないほどだった。直ぐにも吐息を吐き出そうな巨竜の口蓋を、眼前に突き付けられたように。

だが、それ以上に不安があった。もし彼女が、味方だと信じて疑わなかった自分を本当に見放してしまったのだとしたら。その心細さたるや、陸地の見えぬ大海の只中に取り残された漂流人の心地だった。

「表に出ろ、と言っている」

もはや、まともに見ることをすら出来なかった。これほどの怒りを買ってしまった自分が、ただただ情けなかった。かつて覚えが

ない凄みを見せるニルファナの命に、シュイは生唾を飲み込みつつも従った。

## 第二十章 〵(3)〵(改)

壁際に備え付けられた木の本棚ときちんと整理された机一式。大きな窓を挟む白いカーテンと壁紙だけの殺風景な部屋。鼻歌を口ずさみながらもテンポよく稟議書に判子を押ししていくアミナを、リズは目を細めて見守っていた。

こここのところ機嫌がすこぶる良いアミナに、リズは顔が綻ぶのを止められなかった。どちらかと言えば体を動かしている方が好きなアミナである。普段、彼女が公務のために城にいるときはしかめっ面をしていることの方が多かった。

ことに、シュイが城に滞在している間はそれが顕著に現れていた。忙しい中でも何かと理由を付けてシュイの見舞いにいこうとする甲斐甲斐しさは何とも表せぬ愛おしさを感じさせた。らしいと言えはらしいのだが、アミナの思慕は真っ直ぐに向いているようだった。色恋沙汰をとんと聞かなかつたリズにしてみれば、この状況は一段階文明の進んだ革新的な玩具を与えられたに等しい。こんなに愉快でからかいがいのある材料は今までにそうそうなかった。

そんなわけで、リズは今日もそのささやかな楽しみに浸っていた。「姫様、一つお伺いしてもよろしいですか？」

「ん、何だ？」

「姫様は、エルクンド様のことをどう思われているのですか？」  
綺麗な褐色の手がぐらりと揺れ、押した印が書類の四角い捺印場所から左に二割ほどはみ出した。アミナはうるたえたことに対して恥じ入るように唇を噛み、眉をひそめつつも笑いを隠し切れぬリズの顔を見上げた。

「い、いきなり何を言い出すのかと思えば」



「いえ、素朴な疑問というか、好奇心でございます。好きですか？それとも嫌いですか？」

「す、好きか否かと問われれば、……ほんのちよっぴり好きの方に傾いているような気がしないでもない」

語尾に近づくとつれて段々弱々しい声になっていく。想いは真っ直ぐであつても、それを人に知らせるのはなかなか難儀なご様子。

「に、煮え切らない言い方ですねえ」

「よ、余計な御世話だ。私だって戸惑っているのだ」

年が近いとは予想していたものの、年下の可能性は全く考えていなかったのだろう。リズもアミナの戸惑いは薄々勘付いていた。初めてシユイに会ったときは、アミナと同じか、少し年上くらいの印象だった。

「まあ、傭兵らしからぬ可愛らしい顔立ちではありませんでしたねー。でも、二、三年経てばきつと男前になりますよ」

リズはしたり顔でうなずいた。

「……自分の心がわからぬことなど生まれて初めてだが、シユイが城から出ていくのを見送った際には言い得ぬ寂しさを感じたのも事実。多分、好いてはおるのだろう。しかし、な」

「立場があまりにも違う、ですか？」

二の句を接いだリズに、アミナは首を左右に振った。

「そんなことは些事に過ぎぬ。ただ、シユイが本当に殺意を以つてディアード卿、ナイトマスターを殺めたのだとすれば、民の模範となるべき私が彼を慕うことなど許されまいよ」

寂しく笑うアミナに、リズは少し間を置いてからゆっくりと口を開いた。

「これは、私がエルクンド様の話を聞いて勝手に想像したことなのですが」

どこか思わせ振りのリズに、アミナは再び顔を上げた。

「姫様はエルクンド様の話していた滅祈歌の性質、覚えておいで

すね」

「うむ、大体な。能力強化や感情が呑み込まれるといった類の話である。そんな危険を侵すとは、全く度し難い無茶をやったものだ」  
そう言いながらも、どこか嬉しそうな声だった。

「シユイが滅祈歌を使ったことは許し難い。その一方、心のどこかではそのことを喜んでしまっている。後先を考えず、とにかく私の下に駆け付けようとしてくれたことを」

胸の裡を滔々と語るアミナに、リズは頬を緩めた。が、目だけはわずかに鋭さを増した。

「エルクンド様の説明によれば、効果は周囲にある想念を取り込むことだと、そしてまた、集まった想念が多過ぎると呑み込まれやすくなるとも、仰っていましたよね」

アミナは宙を見上げながら思い出すような素振りを見せ、こくりとうなずいた。

「それが事実だとするならば、ですよ。志半ばで死した者の念はその土地を長きに亘って呪い、そこに住まう者に不吉をもたらすと言われております。エスニールの者たちとて例外ではないでしょう。突然として凶行に遭った恨みや憎しみは、相当に凄まじいものだったのではないのでしょうか。そして、親しい者たちを大勢殺されたエルクンド様が、どのような精神状態で滅祈歌を使ったのかを考えれば」

アミナは、耳の先から爪先まで一気に冷え切っていったのを感じた。胸の中に灯った火の熱さがじんわりと、全身に広がっていった。容易に想像が付く話だった。痛み、悲しみ、怒り、憎しみ。そして、残された家族を守りたいという強い想い。そして滅祈歌を使った場所、血生臭い戦場の只中だ。

「彼はまた、似たような想念を引き寄せる、とも仰っていた。とも

すれば、とても正気を保つてはいられないほどの想念が集まったことでしょう。だからこそ、ランカーにも匹敵すると言わしめたディアーダ卿を手にかけることが可能だったのかも知れませんが」

「それは、つまり」

「ええ、エルクンド様が本当に殺意を持っていたかどうかは、彼が自分で思っているほど定かでないのでは、と私は考えます」

アミナはしばしの間口を嚙んだ。もし、シユイが死んでいった者たちの感情を全て引き受けたのだとしたら。そう考えるとたった一人、現世でその罪を背負うことになってしまった彼があまりにも不憫でならなかった。

「シユイは死した彼らの、文字通りに依代となつてしまった。そういうことか？」

「何百人分もの死者の想念。それにたった一人の人間が、ましてや精神的に未熟な少年が抗うことなど、できるはずありません。彼は、終始自分だけを責めておられました。殺した記憶がしかと残っている以上、それしか出来なかったのでしょうか、死者のせいにも出来なかったのではないのでしょうか」

何ともやるせぬ話だった。アミナはリズの憶測が、おそらくは真実に近いと感じた。死屍累々の戦場という特殊な環境で滅祈歌を使ったことにより、シユイは武に優れたエスニールの死者たちの強大な力を手中にし、その代わりに自我のほとんどを呑み込まれた。そうと認めることで、少しだけ心の靄が晴れたのを感じた。

二、三日したらこっそり会いに行くか。まだ病み上がりだししばらくは王都に留まっているだろう。そう思案したアミナはリズに目配せして下がらせると、残った仕事を片付けるべく書類に視線を走らせた。

シルフィールのフォルストロームギルド支部。その屋根にあたる高台の上で、青白い光が明滅した。物見高い群衆たちからは息を呑む音が発せられ、直後、全ての音が轟音に塗り潰された。

臓腑にまでのしかかるその音に、そこかしこから呻き声上がる。天よりその身を擦らせながら地に落ちるのは青白く輝く光の帯。それが黒衣の男に引き寄せられ、命中し、石畳に静電気を拡散させる。

ニルファナが放つ雷魔法に打たれ続けているシュイを遠巻きに眺めていた軍人たちは、溜飲が下がるのを通り越し、気まずそうに互いの顔を見合わせていた。既に両手の指では足りない数の雷がシュイの身体に降り注いでいる。そうこうしているうちに、再び細長い稲光がぐったりと横たわるシュイに集約したのを見て、思い思いに目を瞑ったり、耳を塞いだりした。遅れて何度目かの、鼓膜を破らんだばかりの雷鳴が轟いた。地面の石板を砕くほどの雷に打たれて大きく仰け反ったシュイを見て、ついに甲高い悲鳴が上がった。

苦痛に呻く声が段々と掠れていき、確実に死に向かっているのを想起させた。もはや意識が失われているのか、雷が収まった後も一向に動こうとしない。

公開処刑の様相を呈してきたニルファナの容赦のなさに、処断を求めにきた軍人たちの顔には焦りや戸惑いの色ばかりが浮かんでいる。アミナに泥を浴びせかけたシュイを許せないとはいえ、何もここまで望んだわけではなかった。そろそろ止めに入らなくてはと思わないでもなかったが、ニルファナに向かって足を踏み出そうと、あるいは声をかけようとする度に、彼女の身から発されているげに

凄まじき圧力と、上空の黒雲がゴロゴロと放電を繰り返す音によって押し止められる。

熱が収まった頭でよく考えてみれば、王族扱いを嫌っている節のあるアミナが、自分たちが勝手にこのようなことを申し入れたと知れば不快に思うことだって考えられる。このままシユイが死に至るようなことがあれば、今度は彼女の雷が自分らに落ち、不信を買い叩くことになるだろう。それでは本末転倒だ。

集まった観衆たちの顔も悲壮感を帯びていた。当初はアミナに害を成した傭兵が、美しきランカーとして名高いニルファナに罰せられると聞いて興味が湧き、見世物を見物するような軽い気持ちで遠巻きにしていた。ところが蓋を開けてみれば、ニルファナがひたすらに無抵抗のシユイを打ちのめすその異様に度肝を抜かれ、シヨックで涙ぐむ者や気を失いかける者が続出するという有様だった。

ほんのりと薄化粧をしたニルファナは、アミナを慕う者たちですらも心奪われる美しさだった。細い曲線を描く眉に、深い知性を感じさせる大きな眼。桃色の唇は軽く引き締められている。ゆったりとしたドレスローブの下からでもわかる身体の曲線美は男の劣情を怪しく誘う。

だがそれも、普段であればの話だ。無造作に振るわれるその力は、男たちが彼女の魅力に取り込まれる寸前で現実へと引きずり戻す。滑らかに動く白い五指がシユイに手招きをするような動きをし、その都度発される光と音が視覚と聴覚を奪い、反して恐怖を増大させる。無詠唱の、手を向けられた瞬間に発動するほとんど不可避の落雷。それが自分らに向けられたとすれば、そんなことを否が応にも考えさせられた。そして、その結末は決まっている。逃げることから許されずに息絶えるだろう。

かなりの人数が円形の人垣を作っているにも関わらず、ほとんど声が発される事はなかった。そこにあるのは喉がひりつくような熱気とも、背筋を凍らせるような寒気ともつかない、暴力に対する畏

れの根源だった。

最早微動だにしないシユイに尚も天に手を掲げるニルファナを見て、ついにランベルトが動いた。

「やり過ぎだ、ハーベル！ このままでは本当に」

「口出しは不要、これは私とエルクンドとの問題だ。取り交わした約を違えた者に罰を与えるは自明の理。そんなに心配せずともこれくらいで死ぬほど軟弱に鍛えたつもりは、ない」

語尾を結ぶとともに、ニルファナが掲げていた手を振り下ろす。先ほどよりはずつと細い雷が、しかし黒衣を纏うシユイの背に寸分違わず落ち、シユイが再び身体を痙攣させた。

それが気つけになったのか、ランベルトの耳に微かな吐息が聞こえ始めた。わずかに安堵したランベルトを無視し、ニルファナがシユイに声を投げ掛ける。

「ギルドでの立ち振る舞いには気を遣うよう再三注意したはず。それがどうしてこのような騒ぎを招いたのか、おまえにその理由が説明出来るか」

シユイが未だ痺れの残る身体を両の肘で支え、何とか起こした。緩慢な動きで視線をニルファナに向けた。そのあまりの痛々しさに、観衆たちの中にはシユイに同情的な者もいるようだった。

「正直に言って、見損なった。あらぬ疑いをかけられるような真似をしてギルドの評判を貶めるとはね。もう少し賢い男だと思っていたが、所詮はこの程度の人間だったか」

「ニ、ニルファナ……さん」

自身の名を呼ぶシユイに対し、ニルファナは小さく肩を竦めるのみだった。

「慙愧に堪えないな。タルツフィ殿」

急に名を呼ばれ、ランベルトはやや面食らった様子でニルファナを見た。

「今回のシュイの処罰に関して、ランカーの権限にて口添えをさせていただく。今後、フォルストロームの支部ではシュイが依頼を受諾することを一切禁止して欲しい」

ランベルトが目大きく見開いた。

「な、何と！ それはつまり、実質的な活動禁止ではないか！」

「だからそう言っている。いや、それでも生温いくらいか。しばらくは入国禁止にした方が確実だな。少なくとも一年くらいは」

小さくともはつきり通るその声に、軍人や民たちがざわざわと騒ぎ出した。

「い、いくらなんでもそれは厳し過ぎるのでは。これしきのことです。国外追放になるなど過去にも例がないぞ。大体、シュイはあなたの教え子なのだろう」

「なればこそ、だ。周知させるためにケジメははつきりと示す。これで今後、私に師事したいなどのたまう者も出てくることはあるまい。一石二鳥だ」

シュイは唇の端を吊り上げるニルファナを見上げ、喉を微かに震わせる。

「……………どうして……………こんな」

シュイの被っているフードの隙間から、透明な雫が数滴石畳に零れ落ちた。誰が見ても涙だとわかるものだった。ニルファナはそんなシュイに声をかけることなく、今度は人垣の最前列にいた軍人たちに向き直った。

「さて、フォルストロームの勇敢なる兵たちよ。私は貴公らの言いつ分、思いに従い、忌憚きたんなく彼への処罰を施した。その一部始終、しかとその目で見届けたな」

勇敢と言われた軍人たちは、しかしおっかなびっくりといった様子でうなずいた。

「ならば、シルフィールへの噂は責任をもって回収してくれるのだろうか？」

「……も、もちろんだ。何とかする」

軍人はねめつけるニルフアナに半ば操られたかのように、首を上下にかくかくと振った。他の軍人たちからも異論は上がらなかつた。完全に彼女の威に呑み込まれていた。

「それを聞けて安心した。これで、他の傭兵たちに迷惑がかかることは避けられそうだな」

渋い顔をしてやり取りを見守っていたランベルトもこの意見には同意せざるを得なかつた。シュイの冤罪を証明するためにスキーラの罪を暴き立てようとしても相当な時間を要すだろうし、その間にも不信感が募っていくだろう。そうなつた場合の依頼減少による損害は計り知れない。

アミナに泥をかけた罰は今の雷による折檻で十二分に過ぎる、とこの場にいる誰もが思ったはずだ。また、セーニアの小村で起きたという事件関与の疑いが事実であろうとなかろうと、襲撃騒動による民の不安が収まるまで国外追放ということであれば軍人たちの面目も保たれる。噂回収の約も取り付けられたとあれば、シルフィールにとつても悪い話ではない。ただ一人、汚名を背負わされたシュイを除いて。

「話は聞いていたな、シュイ・エルクンド。おまえには今後一年間、フォルストロームへの入国を禁ずる。これは私からの最後の温情だと思つておけ。本来なら除名処分に処してしかるべきだが、キャノ工での勲功に免じてそれだけは見逃してやる」

「どう……して……」

「返事など求めるな。本当なら、今のおまえには私が声をかけてやるほどの価値もない。わかつたら、とつとこの場から去<sup>い</sup>ね」

シュイは黙つたままがつくりと頂垂れていたが、ややあつて腰が悪い老人の様によく立ち上がるうとした。周りの軍人や民たちからは罵声も、憐みの声もかけられなかつた。この場に集まつて



いる人数が数百を悠に越えていることを考えれば、水を打ったような静けさは場にそぐわぬものだった。

強い酒で酩酊したように左右にふらつきながらも、シユイは両足を踏ん張った。ニルファナの顔を見ようとしたりしたのか、微かに首を振り向きかけたが、思い直したのだらう。頂垂れたまま消え入るような声で、ありがとうございました、と呟いた。そして背を向けたまま、ゆらりと一歩目を踏み出した。円の人垣がひび割れてこの字になった。

シユイは目の前に出現した出口から、たどたどしい足取りながらも立ち止まることなく、その場を後にした。

結果だけ見ればシルフィール、フォルストローム双方にとって悪くない落とし所だったはずだが、その場に居合わせた者にしてみれば、何とも後味悪く感じられた。そんな雰囲気もどこ吹く風、ニルファナは颯爽と傍らにいるランベルトに向き直った。その表情にはどこか清々しさすら感じられた。

「ではタルツファイ殿、私はこれで失礼する。軍人たちよ、しつこいようだが約がきちんと守られることを期待する」

「う、うむ」

「わ、わかっている」

念押ししたニルファナは口元に薄ら笑いを浮かべ、シユイが消えた方角とは真逆へと歩き出した。シユイが立ち去るときよりも迅速に円が割れ、ぽっかりと大きな穴が開いた。ニルファナはそうなるのが当たり前といった感じで飄々と歩み続ける。赤い髪を靡かせながら去っていく彼女の後ろ姿を、ランベルトと軍人、そしてフォルストロームの民たちは茫然と見送るのだった。

1567年9月8日。シュイ・エルクンド、鉄工場の破壊及びセーニアの村にて野盗たちに凶刃を振るった疑いにより、フォルストロームからの国外退去を言い渡される。この知らせがアミナの耳に入るのは、彼女が支部を訪れた二日後のことだった。

## エピソード(改)

絶好の行楽日和だった。久方振りに顔を出した太陽は時折吹く海風にも温もりを与えている。

フォルストロームの南区にある船着き場では、多くの旅行者が可動橋を渡って船に乗り込んでいた。富裕層と思しき家族連れ。大きなバッグを担いだ中年の女商人。学者のような風貌をした少年。そして、黒衣を身に纏った男。

数分後、シユイはエレグス領行の定期船の上にあった。ホーヴィにあるシルフィールのギルド支部を目指していたときと同じように。違う点といえば、隣にニルファナがいないことくらいだろうか。

下の方では荷揚げが急ピッチで進められている。長距離の旅客船には相応の水や食料、燃料が必要になるし、交易品を運ぶ場合もある。正方形の木箱に詰められたそれらを、筋肉鎧を纏った屈強な水夫たちが流れ作業で行っている。特に重量のある積荷は船の下層へと運ばれ、重石代わりになる。重心を低くすることで多少の風でもあまり傾かなくなるらしい。

船を慌しく行き来する汗だくの水夫たちを、シユイは手摺に体を預けたままぼうつと見下ろしていた。手の平にはもぎりの手で半分に割かれた特等船室の乗船券が握り締められている。昨日ニルファナと別れる間際、餞別せんべつとして託された物だった。

一陣の涼風が巻き起こり、高台をそつと撫でていった。急激に辺

りが暗くなつたのは雷雲が発生しているためだ。空には歪な灰色の円が出来ていた。周りにはギルドにきた軍人、物見高い傭兵や通行人たちが二人を囲むように人垣を作っている。そんな彼らを意に介した様子もなく、ニルファナは険しい顔をしながらシユイを見据えていた。

シユイは、ニルファナと目が合うだけでいたたまれない気持ちになつた。彼女に対して何も申し開きできないことが恐ろしかった。良かれと思つてやったこととはいえ、結果的にシルフィールの評判を貶めたのは確かだ。

「何故私がここに赴いたか、わかっているな？」

簡潔に訊ねたニルファナに、シユイは力無く項垂れた。傭兵になつて三月も経たぬうちに、しかもつい先日警告を受けた矢先でのこの騒ぎだ。自分の心中はさておき、推薦人である彼女の評判を損ねたのは間違いなく、ギルドにとつても見逃せない行為だということを実感せざるを得なかつた。

「ならば、報いを受けなさい」

言い終えるや否や、ニルファナは天に向かって手を掲げた。その所作がやたらと緩慢に見え、脳裏には死の予感が過ぎつた。彼女に殺されるならば仕方ないという思いがあつた。元々初対面の時に殺されていてもおかしくはなかつたのだ。大恩ある彼女の手に掛かるなら。そう思えば何とか割り切れるような気がした。

諦めが身体を支配した瞬間、強く息が吐き出された。視界からあらゆる色が失われ、全身がカツと熱くなつた。まるで血液が沸騰したかと錯覚するほどに体が熱い。彼女が雷を落としたのだということと、頬が地面にぶつかったのだということをほぼ同時に知覚した。石畳に打ち付けた右頬に擦過傷が生じ、ズキズキと痛み始めた。

「……………」

痛みと熱に支配された身体を、それでも地に手を突いて何とか起こそうとした。が、肘を曲げて顎を持ち上げた途端、二度目の雷が背中を直撃した。

手足の指が、背筋が反り返った。両肩が畳まれて脇腹を激しく圧迫する。全身の自由が奪われたが動かなくとも苦痛だけは正確に伝えてきた。腹の中身がぐるりと引っくり返ったようだ。猛烈な吐き気に襲われ、げっぷが出た。酸素の濃度が急激に薄まったかのようにやたらと息苦しかった。まるで高山を全力疾走したかのように。

遠ざかった意識の断片が「いいぞ」だの「もつとやれ」だのと囁し立てる声を捉えた。二人を取り囲むように陣取り、高みの見物を気取っている者たちからは歓声が上がっていた。

その屈辱感が意識を現実に取り戻しかけたが、それすらも許さぬと言わんばかりに三度目の雷が身体を蹂躪した。全てが真っ白になり、次いで暗転した。もはや目が開いているのかどうかも定かではなかった。

また、意識が薄らと戻ってきた。胸の筋肉が痙攣を起こし、自分の意志では呼吸が出来なかった。雷による衝撃によって辛うじて呼吸させられているという有様だ。気がつく、視界の中に収まっている手の甲の血管部分が、赤褐色に変色しているのがわかった。今まで見たこともなかったその現象を目の当たりにして、やはり自分はこのままでなのだと思った。

全身の痛みと熱さと言うに及ばず、それ以上に心が軋んでいた。シユイは頭のどこかで、ニルファナだけは事情を理解してくれるのでは、許してくれるのではないか、そう思っていた。己を貶めているのは自分の望むようにならなかったことに対する落胆であり、胸奥で彼女に甘えていたことに対する苛立ちだった。

シユイは、自分がある意味でニルファナを舐めていたのだと知ら

された。彼女の優しさに胡坐を搔き、好き放題やってきた結果がこれだった。見放されても仕方ないことをやってしまった己の愚鈍さを実感してしまった途端、嗚咽が込み上げてきた。情けなくて、悲しくて、立ち上がる気力すら出なかった。

もう何度目かわからなくなった雷が、再びシュイの思考を途切れさせた。先ほどまで聞こえていた観衆たちの声がほとんど聞こえなくなっていることに気付いた。その代わりに取りとめもない雑音が聞こえ、聴覚がいかれてしまったのかと思った。

だが違った。ぎこちない動きながら周りを見渡すと、先ほどまで野次を飛ばしていた観衆たちが気まずそうに顔を見合わせ、何やら囁き声を交わしていた。口を半開きにしたまま自分を見て、硬直してしまっている者もいた。

これで少しは懲りた？

頭に言葉が閃き、シュイの指先がぴくりと動いた。幻聴かと思いつつも、藁にも縋るような気持ちでニルファナの顔を見上げた。

「何だ、その目は。まさか今更許しを乞うつもりじゃないだろうな」

そこには先ほどと同じように温かみが一切感じられぬ言葉を投げかけ、地に伏せる自分を鼻で笑うニルファナがいた。だが

> 本当はこんな体罰じみたことしたくなかったけれど、口で言っても判らないんだから止むを得ないね。お姉さん、今回は本気で怒っているんだから<

言葉と並行して、念話が頭に響いていた。いつもの口調と同じであることに体が総毛立ち、胸が大きく震えた。

>……すみません。迷惑ばかりかけ……がつく

再び雷が身体を走り回り、シユイの念が遮られた。周りの群衆たちの声から、今度は息を呑む声が上がった。

>そんなことはどうだっていい！<

彼女らしからぬ強い感情が頭の中に反響した。雷が途切れた後で、シユイは痛みに悶えながらも顔を上げた。

>もう、まだわかんないかなあ？ きみ、滅祈歌使ったでしょ。魔力の波長が滅茶苦茶に乱れているから一目瞭然。あれだけ……、あれだけ念を押しなのに、一体どういつつもり！？<

「……す、すみません」

思わず念話ではなく声に出た。自分はただ怒られることを恐れていたのに、ニルファナはただ自分の身を案じてくれていたと知って、二重のショックだった。滅祈歌を用いたことに対する罪悪感。ニルファナの優しさに疑いを持った、心底情けない自分。

>謝って済む問題じゃないでしょ！<

先ほどよりずっと大きな雷が降り注いだ。が、シユイに当たると思われたそれが、刹那拡散して四方に散った。激しい稲光で遠目からでは直撃したように見えたはずだった。

地面に拡散した放電によって身体に電撃こそ走ったが、魔法に対して耐性を持つシユイの黒衣はそれを和らげていた。痛みはあるものの、派手な見た目と轟音ほどには効いていなかった。反して、観客たちのざわめきは悲壮感を帯びていく。

シユイが軽微なダメージから立ち直る最中、ニルファナが再度の念話を送りつける。

>ここから先は念話を使いなさい。こうなった以上は生半可な芝居

じやお客さんも納得してくれないからね<

>……芝居？<

おずおずとニルファナを見上げると、初めから変わらずに表情を消し去った彼女が再び手を掲げるのが目に映った。

>他の傭兵たちに迷惑をかけるわけにはいかないでしょ。誰が仕組んだんだか知らないけれど、このタイミングで騒ぎを起こされたのはちょっと不味い。早めに処理して置かないとセーニア騎士団に呼び出されかねないからね。兵隊長クラスには、君の顔はほぼ確実に知られているはずだから、さ<

再びニルファナの手がゆっくりと振り下ろされるのを見て、シユイは歯を食いしばった。一際強烈な雷が身体を襲ったが拳を握りしめて耐え抜いた。それでも苦痛に喘ぐ声が食いしばった口から漏れた。目の前の石畳に亀裂が生じ、破片が宙に飛び散った。当初は囁し立てていたはずの観客たちから、ついに甲高い悲鳴が生じた。

>いつけない！ ちよっぴり強かったかなく

当の本人も今のは流石にやり過ぎたと思ったのか、頬がびくびくとひくついている。きつと観衆の目には怒りに震えているように見えることだろう。

>へ……いきです<

普段なら全然ちよっぴりじゃないと反論するところだが、空の言葉を口にしながら念話と無詠唱魔法を並行してやっているのだから、いかな彼女でも細かい威力制御は相応に困難なのだろう。

ランベルトの非難めいた声が耳に入ってきたが、シユイは念話だけに意識を集中する。

『 口出しは不要、これは私とエルクンドとの 』

>まあタルツフィを騙せているなら一安心か。 それで、何で約



束を破つたの？ 生半可な理由じゃお姉さんも納得しないよ<

話の合間に再び雷が走つたが、今度は荒い息が漏れるだけで済んだ。雷にも大分打たれ慣れてきていた。それを由とするかどうかは別として。

『ギルドでの立ち振る舞いは再三』

シユイはチカチカする思考の中で、滅祈歌を使ったときのことを思い出していた。

> ……アミナ様から魔石での救援要請が届いたんですが、あの赤い霊体を見て焦ってしまつて<

> 待つて、この辺で一つ相槌を入れてくれるかな。一旦、声の方に集中して<

> あ、……はい<

『正直にいつて、見損なつた。あらぬ疑いをかけられるような真似をしてギルドの評判を貶めるとはね。もう少し賢い男だと思つていたが、所詮はこの程度の人間だつたか』

「ニ、ニルファナ……さん」

その舌鋒に心の脆い部分をこつそり抉り取られた。口では芝居というものの、多分に事実を含んでいるだけに堪えた。普段は快活なニルファナだけに、冷たい態度を取られた時のシヨックたるや筆舌に尽くしがたいものがあつた。

> よし、もういいよ。それで、まさかそれだけの理由で使つたの？<

『慙愧に堪えないな。』

タルツファイ殿

再び耳に聞こえる声から遠ざかる様に記憶を辿る。エグセイユの憎々しい顔が、赤い霊体の途切れた文字が、その記憶を連想させたのだと気づく。ゼノン・ディアードの悪魔の顔。脳裏に過った滅祈歌の文字。そして

> 思い出したんです。看取った大切な人の顔を。そうしたら、もうどうしようもなくて……どうして<  
「どうして……こんな……」

誰にも伝えられなかった、秘めた思いや葛藤が溢れ出した。雷によるものではなかったが、それでも視界が明滅した。手の中にいるミレイ・ロスベルクの温もりが喪われていく感覚がありありと蘇り、感情の全てが針の様に尖っていく。

ニルファナは涙を零すシユイからすつと目を逸らした。

『さて、フォルストロームの勇敢なる』

> ……それじゃあ駄目だよ、シユイ。憎しみは心の麻薬、現実から逃れるための甘い誘惑なの。それが一過性の物であればまだ良い。けれど、そこに常時浸っていたら一生出てこられなくなる。お姉さんはそうして不幸にも身を持ち崩した人を知っている。ランカー仲間だって例外じゃないんだ。 激情に身を焦がしてそのまま燃え尽きちゃったら、誰より必死に戦って君らを生かそうとしたエスニールの者たちが浮かばれない。……わかってくれるね？<

> ……ニルファナさん<

> お姉さんはね。シユイがエスニールで初めて滅祈歌を使ったとき、膨大な想念に呑み込まれた君の自我が奇跡的に回帰できたのは、エスニールの者たちが君を依り代に利用したのと同時に守ろうともしていたからじゃないか。そう考えてる<

> ……僕を、守る<

> もちろん、きみだけじゃなくて、生きていた家族や友人たちもだよ。あとは、セーニア兵たちに対する怒りや憎しみもあっただろうね。二度目はお姉さんが早くに止めたから大事には至らなかった。今回は、偶々止めてくれた人がいた。そうじゃなければ、きみはこうしてここにいられなかったはずだ<

何気ないニルファナの言葉に、シユイの心が揺らいだ。そうした意図がなかったとはいえ、暴走を止めたのはイヴァンであり、正気を取り戻せたのはあの場に駆け付けてくれたアミナとランベルトのおかげだった。

何のことはない。支えてくれている人がいなければとうの昔に命を落としていたのだ。それを曲解し、自分のことばかり考えていた自分が、どうしようもなく小さく思えて、恥ずかしかった。

『それを聞いて安心した。これで』

> いいかい、これが私からの最終忠告だよ。金輪際、滅祈歌に頼るのはやめなさい。万が一使うとしても逃走手段に限定しなさい。己の非力の結果、生じてしまったことを受け止める覚悟を持ちなさい。それが嫌ならどうすればいいのか、ちゃんと自分の頭で考え続けなさい。誰が編み出したんだか知らないけれど、あれは精神の自殺にも等しい行為だからね<

> ……はい、わかりました<

> ふう、ならばよし。君の泊まっていた宿にエレグス領行の乗船券を預けておいた。あの国はフリーの傭兵が多いし、学べることも多いはず。四大ギルドの影響が薄い分、共通クエストの数も多いしね。一先ずはあちらに向かいなさい<

> エレグスへ……？ 何でまた<

> 一つは、ほとぼりが冷めるのを待つため。もう一つは、これはまだ極秘の話だけど、セーニア教国が近々、ルクスプロンに戦争を仕掛ける。そうなれば数か月ないし一年ほどは、国境や領海を封鎖する国も出てくるだろう。身動きが取れなくなる前に動かないとね<

ニルファナのその言葉を聞き、シユイが拳を強く握り締めた。

>もしこの先、セーニアが人々を苦しめる方向へ動くなら自ずと君の進む道も定まるはず。今回の件で君も骨身に沁みたでしょ。逸脱した行動を取るには時流と大義名分が必要。来たるべき日が訪れるまでにしっかりと力を蓄えなさい<

>はい。ニルファナさん、ごめんなさい。僕は<

『話は聞いていたな、シユイ・エルクンド。お前には 』

>謝罪はもういいからそろそろ行きなさい。身体が痺れて思うように動けないだろうけれど我慢して。舞台の退場までが芝居だからね<  
>で、でも、でも、このままだとニルファナさんの評判が悪くなるんじゃない<

言いながらも、シユイは体に力が入るかどうかをそつと確かめた。

>何を一丁前のことを気にしているんだか。迷惑をかけるのが下の者の仕事、とは言わないけれど、下の者のしたことに對して責任を持つのは上の者の領分。まだひよっ子の君が気にすることじゃない<  
>どうして……<  
「どう……して……」

ニルファナはここまで心根がぶれないのだろうか。どうしてここまで優しくなれるのだろうか。湧き出でた疑問に、念話と共に自然と声が漏れた。その強さが眩しくて、羨ましかった。

同時に、自分が見捨てられていたのではないとわかり、どうしようもなく嬉しかった。胸の奥が雷の痺れで震えているのか、喜びで震えているのかわからなくなっていた。

『返事など求めるな。本当なら 』

>頼んでもいないのに声を出すんじゃないありません、アドリブも結構大変なんだから<

> あ、はい、ごめんなさい<

> いずれまた会いに行くよ。前にも言ったと思うけれど、お姉さん以外に殺されるのは許さないからね。負けちゃあ駄目だよ<

そう言い、ニルファナは間近でなければわからないほど微かに、目を細めた。

シユイはレームスの神殿での彼女の啖呵を思い出した。あれは自分に向けての言葉でもあったらしい。ぎこちないながらも何とか立ち上がり、痺れる両足を踏ん張ってみる。足の裏に痛みが走ったが、何とか我慢できた。

> はい、必ず<

> いい返事だ。どんな逆境だろうと撥ね退けられる、格好良い大人になりなさい。君にならそれが出来ると、信じてるから<

ニルファナの激励を噛み締め、ぐつと涙を堪えたシユイは背中を向けたまま小さくうなずき、万感の意を一言に込めた。ありがとうございました。その囁きが、そよ風に浚われていった。

『間もなくエレグス領行の船が出港致します。各町までの到着予定日時をお知らせ』

船内放送が脳裏に響き、顔を上げる。フォルストロームの街並みが陽光に照らされていた。先日の襲来の悲壮感はどこにも感じられない。

南東にはアミナがいるはずの王城が見えた。彼女に最後の挨拶が出来なかったのが心残りといえれば心残りだが、どちらにしても何を

話せば良いのかわからなかった。でも、きつと彼女なら自分のために怒ってくれるだろう。自分を信じてくれる人が少なくとも二人いる。それを実感するだけでも、不思議と力が漲ってきた。

省みれば、得た物は多かった。ニルファナは相変わらずいつものニルファナだったが、彼女のことが以前にも増して好きになった。ピエールやミルカからシルフィールの傭兵たちと知り合い、他ギルドの傭兵と共闘し、アミナやリズとも交流を持つことができた。

置きっぱなしにした鎌のことを思い出し、忌々しい青髪男の顔が過ぎつつが、即座に弾き飛ばした。不快な気分になるのは後でいい。今はこの温もりの余韻に浸っていたかった。

復讐心を忘れられるかはまだわからない。ニルファナに説教された後であつても、憎しみを忘れてしまうことに対する恐怖は消えていなかったからだ。

イヴァン・カストラのように暗躍し続けることも選択肢の一つではあった。が、シユイは彼の生き様を否定できないのと同様に肯定もできないのだとわかった。狡猾な者たちはこれからも、保身のために関わりのない者たちを延々と盾にし続けるだろう。真に罰されるべき者たちに刃が届くまで、果たしてどれだけの血が流れるのか。そして、真に罰されるべき者たちに刃を届かせるにはどうすればいいのか。選び取る分岐は、無数に考えることができた。

『己の非力の結果、生じてしまったことを受け止める覚悟を持ちなさい。それが嫌ならどうすればいいのか、自分の頭で考え続けなさい』

シユイはニルファナが掛けてくれた言葉を何度となく反芻する。漠然と願うだけでは望みが叶うことはない。具体的な目標を設定し、情勢を把握し、犠牲を極力少なくするための緻密な計画を練らねばならない。

ニルファナやアミナのように、己の心身を鍛え上げる必要がある。そうすることで初めて、自分が求めている明確な答えが見つけ出せる。彼女たちの思考に近づける気がした。

出航を知らせる汽笛が響き渡り、船が緩慢に動き出した。港から船が少しずつ離れていく。シユイはゆっくりと海の方に向き直った。緩やかに湾曲した水平線が、眩いほどの輝きを放っていた。

同時刻、ドレスローブを身に纏ったニルファナは、港に程近いホテルの屋上で、指輪に収まるくらいの船が出港するのを遠くから見届けていた。視界に収まっていた船がゆっくりと動き出したのを見て感極まったのか、胸ポケットから取り出したピンクの花柄のハンカチで目尻を拭った。

「こんなところからでは、良く見えないのではないですか？」

ぎよつとして後ろを振り返ると、そこには見知った顔があった。

「デイジー！ いつからいたの？」

デイジー・マクレガーは眼鏡の縁を持ち上げながら微笑んだ。普段のスーツ姿ではなく、ベージュのロングカーディガンにレッドブラウンのレギンスというラフな格好だった。高いヒールの靴を履いているせいで、ニルファナは目線を少し上に向けねばならなかった。「この場に、という意味なら数分前。王都に、という意味なら一昨日です。あなたにしては、随分と無防備でしたね。そうしんみりせずとも、別れの挨拶は済んだのでしょうか？」

そういうデイジーにニルファナは一瞬呆気に取られ、続いては顔をほんのりと紅潮させた。

「ひつどーい！ よりによって盗み聞きしてたわけ？」

「偶々、ですよ」

「偶々なもんかい。 >盗聴<sup>タックル</sup>の指定範囲は相当狭いつて言ったの、デイジーじゃないの」

ニルファナは腕を組み、ぷいとあさつての方角を向いた。

念話を盗聴するための魔法、>タッピング<は指向性があり、術者の意識が向く方向からの念話を傍受する。最上級魔法の一つであり、修練を積みれば覚えられるという類のものでもない。吸収<sup>アブソーブ</sup>の才に飛び抜けている者のみが使える秘儀であり、ニルファナですら扱うことが不可能なものだ。

「そついえば説明してましたっけ。それにしても、まさかあなたが涙する姿を見られるとは思いませんでした。余程あの子に入れ込んでいるようですね」

微笑むデイジーからニルファナは顔を背けたままに言葉を返す。

「茶化さないで。それで、支部長直々にここにきたってことは、悪い知らせ？」

名高き女傑の鼻のよさに、デイジーは軽く肩を竦めてから両の踵を揃えて佇まいを正した。

「よい知らせと悪い知らせ、二つあります。どちらから聞きたいですか？」

「どちらからでも結構」

未だ子供のように拗ねているニルファナに、デイジーは微かに頬を緩めた。

「ではまず悪い方から。 >ミステイミスト<がセーニアへ加勢する動きを見せています」



ニルファナの視線が一瞬だけデイジーに向けられる。

「ふん、想定内とはいえ、ギルドが大国間の戦争にしゃしゃり出ていくとはね。被害拡大は免れないか」

「致し方ありませんね。ルクスプテロンから領土を任されている>フラムハート<がルクスプテロン側に肩入れするのは間違いありませんし」

四大ギルドのフラムハートとミステイミストは何百年来の仇敵である。それがいつ頃からかもわからずにお互いを憎み合っている。

昨今、フラムハートのマスターは大病を患い、余命幾許もないと伝えられていた。長年の仇敵を追い落とすのにこの機会を逃す手はない。そう考えていても何ら不思議ではない。

「アークスもお気の毒に。やっとマスターに任じられると思ったらこんな難題に直面するんだから」

「アークス……。確かゼノワ家のご当主でしたね。正式に決まったのですか？」

「そのはずだよ。ところで、シルフィールウチのギルドはどうするんだろうね」

「当面は中立を保つことになるでしょうが、近年はフラムハートとの関係が良好ですから敵視される可能性も大いにありますね」

「風当たりが強くなるのは避けられない、か」

「でしょうね。いつまでもどつちつかずではいられません。大義名分がどちら側にあるか早期に見極める必要があります」

ニルファナはようやくデイジーの方を見た。

「マスターはどうしてるの？」

「相変わらずですよ。エスチュード家の関連企業に指示し、蓄財で物資や鉄材をせっせと買い漁っているそうです。物価の高騰を見越しているでしょう」

「うーん。彼女って何時でも冷静に時流を見られるから凄いいよね」

「今回は金策ばかりに勤しんでいるわけでもありませんよ。ちゃんと支部にも指令書が届いています」

ディジーは視線を下げ、脇に抱えていた黒い鞆から一枚の羊皮紙を取り出した。ニルファナはディジーから手渡されたそれを流し読みする。

#### 伝達事項

一つ。明確な指針が決まるまでの間、ギルドに所属する傭兵たちは軍事物資の輸送、戦地での要人護衛を自粛すること。また、敵対国間の国境の往来を自粛すること。

一つ。ギルド支部への定期報告を徹底すること。中立国で賞金首や犯罪者を見掛けた、あるいは何らかの異変を察知した場合には早急に魔石か口頭にて報告をすること。

一つ。軍が動けばその分犯罪者の取り締まりや雑務に手が回らなくなり、治安や生活環境が悪化することが予想される。治安や土木、医療関係の報酬を一定の割合で上乘せするのでランクが低くともそちらの任務を優先すること。

一つ。当面はなるべく単独行動を行わぬようにすること。戦地に近い地域での仮宿はギルド支部か警備兵、用心棒を擁する指定の宿に泊まるよう心がけること。

一つ。準ランカー以上で戦争に参加、もしくは関わらなければならぬ柵しがらみがある者は支部長に報告すること。一時ギルドを離れなければならぬと判断された場合には、円滑な業務を妨げぬために必ず支部に脱退届を提出すること。

一つ。他国、他ギルドとの交戦を極力慎むこと。ただし、細心の注意を払っていた上で不測の事態に巻き込まれた場合はこの限りではない。

附言。理不尽な実力行使を用いる者に対してはシルフィール一同結束し、子々孫々に至るまで逆らう気が起きぬよう骨髄、心髄に入るまで戦慄させるべし。その対象が組織、はたまた国であっても例外はなきものと心得よ。以上。

シルフィール・マスター　ラミエル・エスチュード

「うわ、意外と過激ー」

「煽るポイントを心得ていますよねえ」

檄文といっても差し支えぬそれを見て、ニルファナとデイジーは苦笑を交わし合った。

そうしている間にも、緩いカーブを描く水平線の彼方に、シユイを乗せた客船がゆっくりと消えていく。形が消えて点になり、それが白波に飲まれたのを確認すると、ニルファナは目を瞑りながらその場で伸びをした。そうすることで少しでも寂しさを紛らわせようとしているようだった。

「あーあ。傍にいないとなると、何だかこの辺りがもやもやするな  
ー」

そういい、ニルファナは手の平で円を描くように胸元を撫でた。  
「見守ることも愛情です。大丈夫、あなたの気持ちはしっかり届い

「ていますよ」

「そう、だね」

ニルファナは切なげに溜息を吐き出し、ぐつと背筋を伸ばした。

「それはそうといい方のニューースもありますが」

「ん、どうぞ」

「かねてからの依頼の件です。ユウヒ・タカナシの所在がわかりました」

「え、ほんとに？」

即刻肩を降ろしたニルファナにデイジーは小さく頷いた。

「ええ、商人ギルドにいる友人からの情報ですから確かです。半年ほど前に輸送業から手を引き、今はケセルテイガーノの小村で妻子と共に暮らしているとか。でも、何で彼を探していたのですか？」

「個人的事情、とだけ言っておくよ。良かったー、こんなに早く見つかるなんて。デイジーに頼んで正解だったよ」

「光栄です。では私はこれで」

下り階段に向かいかけ、何故かデイジーは足を止めた。

「やはり、最後に一つ訊ねておきたいことがあるのですが、宜しいですか？」

振り返ったデイジーに、ニルファナは軽く顎を下げた。

「何故彼を傭兵にしたのですか？ 年齢を謀ってまで」

やはりばれていたか、とニルファナはちろつと舌を出した。

「元々は彼が望んだことだよ。それに、当初はお姉さんもあまり乗り気じゃなかったんだ」

それを聞いて、デイジーが目を細めた。

「少年の時分で傭兵に……ですか。何やら込み入った事情がありそうですね」

「まあね。シュイはディアード卿を殺めた張本人なんだ」

「なんですって！ ナイトマスターを！」

デイジーが彼女らしからぬ素つ頓狂な声を上げた。イヴァン・カストラというもつともらしい容疑者が既にいたため、真犯人の存在などは疑ってもいなかったようだ。それはニルファナたちの思惑通りでもあり、そしてセーニア教国の思惑通りでもあった。

「こつちが良いって言うまでは秘密にしておいてね。彼は、エスニールの出身なんだけど、どうやらあの内乱には裏があつたみたいなんだ。今回のルクスプロン出兵とも、あながち無関係じゃないかも知れない。彼からディアード卿をその手に掛けたことを告白されて、善し悪しはどうあれ心が揺り動かされてね。あの子はもう十二分に苦しんだみたいだし、あのまま潰させるのもどうかと思つた」

「そういい、ニルファナは後ろ手を組んだ。」

傭兵は色々な場所に足を運ぶ必要があるし、様々な境遇の者と出会うことが多い。ニルファナはシュイに多くの傭兵と係わり合いを持つて欲しかった。彼らの強かな生き様を肌を感じることで良い影響を受けてくれればと、そう願っていた。

「あとは保護欲、それとも育成欲というべきかな。お姉さんから何とか逃れようと必死に頑張るあの子を見ていたら、情が湧いてきちゃつてさ。ここ数年は結構荒んだ生活を送つてたから、そういう感情が芽生えたことが自分でも意外だった」

口には出さなかつたものの、ニルファナはシュイとの遭遇時、彼が極力戦いを避けようと逃げに徹したことを評価していた。もし仮に、のっけから滅祈歌を使って無闇矢鱈に力を振るおうとしたならば、彼をその場で始末していたはずだった。シュイを追いまわしている最中に、ニルファナの胸の内では何かが変わりつつあった。

「彼が、日常への橋渡しになつたわけですね」

「そうだね。あの子と関わっているうちに、お姉さんにもまだこん

な心の機微が残っていたんだなあ、って気づかせてくれた。そういう意味で見返りはあったわけ。シュイのおかげで毎日新鮮な気持ちを味わえるからね」

「あなたの仰り様は、まるで恋する乙女のようにですが」

「ふふ、否定はしない。今は戦争なんかより、あの子をどうやって自分色に染めるかに没頭したいんだけどなあ。それは、お姉さんの力が誰かに向けられることよりも余程素敵で、有意義なことだと思うけれどね」

ニルファナは言葉を置き、再び海の方に視線を向ける。

少年の境遇を憂い、一つの楽曲を彼の人生に重ねる。華々しい前奏に始まり、荒々しくも機知と起伏に富んだ旋律。要所要所で奏でられる重厚な和音。それらは、浮き沈みの激しい傭兵たちの人生と重なり、ときに絡み合っていくだろう。

艶やかな笑顔を口元に湛えたニルファナは、シュイが後に完成させることになるだろう壮大な楽曲に思いを馳せ、今はもう船の姿が見えぬ水平線の彼方を、どこか名残惜しそうに見つめていた。

## エピローグ（改）（後書き）

後書きを書いたことがないので何を書けば良いのやら、ですが。書き始めたのは別の物ですが、完了した小説はこれが初めてなので大げさに言えば感無量といったところであります。拙い部分も多々あったことをご承知の上でお付き合いくださった読者の皆様に感謝を。

活動報告で少し触れていますが、これは第一部になります。第二部の舞台は三年ほど後のレグナール（この世界の名です）。第一部での様々な出来事を受け止めニルファナの想い、期待に応えようと懸命に頑張り著しい成長を遂げたシュイが活躍するエピソード。であるはずなのですが、まだ数万字しか出来ていません。推敲できている部分はプロローグのみ。企画倒れになったらどうすんだって話ですね（T-T）

2月18日追記：こちらの作品は完結にします。第二部は別作品として投稿しますが読んでいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2755o/>

---

マーシナリー・カプリッチオ ~第一部~

2011年11月7日03時25分発行